

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(63)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅳ)

榎崎 A 遺跡

1992年3月

鹿児島県教育委員会



Cブロック出土細石核



Cブロック出土水晶石器

序 文

この報告書は、国道220号鹿屋バイパス建設に先だって、昭和63年度に、鹿児島県教育委員会が実施した榎崎 A 遺跡の発掘調査の記録です。

この遺跡からは、旧石器・縄文・弥生・古墳・平安の各時代にわたる遺物・遺構が出土しました。

なかでも、旧石器時代の水晶製石器、縄文時代の集石遺構及び平安時代の周溝墓などは、本県における考古学研究の貴重な資料として注目されています。

本書は、南九州の古代文化を明らかにするうえで貴重な手掛かりを提供するものと考えており、地域の歴史研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった建設省九州建設局大隅工事事務所や地元の方々に心から感謝申し上げますとともに、本遺跡の発掘調査を担当した故旭慶男君のご冥福をお祈りいたします。

平成4年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 大 田 務

例 言

- 1 この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う郷之原・白水地区の「榎崎遺跡A」（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書）の発掘調査報告書である。
- 2 榎崎A遺跡は、鹿屋市郷ノ原榎崎に所在する。
- 3 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査は、昭和63年5月9日～平成元年3月14日の間に実施した。整理作業は平成3年度に実施した。
- 5 発掘調査においては、郷之原・白水町振興会の協力・援助を得た。
- 6 発掘調査の現地指導及び出土遺物の指導については、河口貞徳先生（県文化財保護審議会委員）、横田賢次郎先生（九州歴史資料館主査）上村俊雄先生（鹿児島大学法文学部教授）、本田道輝先生（鹿児島大学法文学部助手）の指導・助言を得た。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔高である。
- 8 現地調査での実測及び写真撮影は、調査担当者で行った。報告書作成の為の遺物実測・写真撮影は各執筆者が分担して行った。
- 9 本書の執筆は、青崎（第I章・第VI章・第X章）、中村和美（第II章・第VII～第IX章・第X章）、児玉（第V章・第X章）、大久保（第VI章－第2節(2)第3節(2)）、吉内（第III章）、梅北浩一（第IV章）が担当した。

目 次

序 文	
例 言	P
第I章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 確認調査	2
第II章 榎崎A遺跡の概要	16
第1節 調査に至るまでの経緯	16
第2節 発掘調査	16
第3節 日誌抄	16
第4節 報告書作成	20
第III章 位置と環境	21
第IV章 層 序	27
第V章 旧石器時代	33
第1節 調査の概要	33
1 遺 構	39
2 出土遺物	39
3 小 結	75
第VI章 縄文時代	88
第1節 調査の概要	88
第2節 V層の調査	88
1 遺 構	91
2 出土遺物	100
(1) 土 器	100
(2) 石 器	131
第3節 III b層の調査	161
1 遺 構	161
2 出土遺物	161
(1) 土 器	161
(2) 石 器	175
第4節 小 結	190
第VII章 弥生時代	192
第1節 調査の概要と出土遺物	192
第VIII章 古墳時代	193

第1節 調査の概要	193
1 遺構	193
2 出土遺物	194
第IX章 平安時代	196
第1節 調査の概要	196
1 遺構	196
2 出土遺物	232
第2節 II・III a層のまとめ	289
図版	297
土壌分析	365

挿 図 目 次

	P
第 1 図 郷之原・白水地区確認調査地点	2
第 2 図 第 1 地点トレンチ配置図	3
第 3 図 第 1 地点土層図	4
第 4 図 第 1 地点土層図・出土遺物	5
第 5 図 第 1 地点出土遺物	6
第 6 図 第 2 地点トレンチ配置図	6
第 7 図 第 2 地点土層図	7
第 8 図 第 2 地点出土遺物	8
第 9 図 第 2 地点出土遺物	9
第 10 図 第 3 地点トレンチ配置図・土層図	10
第 11 図 第 3 地点土層図	11
第 12 図 第 3 地点土層図・出土遺物	12
第 13 図 第 4 地点トレンチ配置図・土層図	13
第 14 図 第 5 地点トレンチ配置図・土層図	14
第 15 図 周辺遺跡	24
第 16 図 層序	27
第 17 図 土層断面図(1)	29~30
第 18 図 土層断面図(2)	31~32
第 19 図 VII層遺物出土状況1(黒曜石)	35~36
第 20 図 VII層遺物出土状況2(水晶・石英他)	37~38
第 21 図 礫群の位置及び検出状況	39

第 22 図	Aブロック遺物出土状況 1 (細石器他)	40
第 23 図	Aブロック遺物出土状況 2	41
第 24 図	Aブロック出土遺物 1 (細石刃)	42
第 25 図	Aブロック出土遺物 2 (削器・挟入石器)	43
第 26 図	Aブロック出土遺物 3 (剥片)	44
第 27 図	Aブロック出土遺物 4 (石英剥片-1)	45
第 28 図	Aブロック出土遺物 5 (石英剥片-2)	46
第 29 図	Aブロック出土遺物 6 (石英石核-1)	47
第 30 図	Aブロック出土遺物 7 (石英石核-2)	48
第 31 図	Aブロック出土遺物 8 (礫器)	49
第 32 図	Bブロック遺物出土状況 1 (細石器他)	50
第 33 図	Bブロック遺物出土状況 2	51
第 34 図	Bブロック出土遺物 1 (細石刃)	52
第 35 図	Bブロック出土遺物 2 (細石核)	53
第 36 図	Bブロック出土遺物 3 (剥片 1)	54
第 37 図	Bブロック出土遺物 4 (剥片 2)	55
第 38 図	Bブロック出土遺物 5 (石斧)	56
第 39 図	Cブロック遺物出土状況 1 (細石器)	59~60
第 40 図	Cブロック遺物出土状況 2	61~62
第 41 図	Cブロック出土遺物 1 (細石刃)	63
第 42 図	Cブロック出土遺物 2 (細石核 1)	64
第 43 図	Cブロック出土遺物 3 (細石核 2)	65
第 44 図	Cブロック出土遺物 4 (細石核 3)	67
第 45 図	Cブロック出土遺物 5 (剥片 1)	69
第 46 図	Cブロック出土遺物 6 (剥片 2)	70
第 47 図	Cブロック出土遺物 7 (削器、搔器、楔形石器)	71
第 48 図	Cブロック出土遺物 8 (石英石器)	73
第 49 図	Cブロック出土遺物 9 (石斧、ハンマーストーン)	74
第 50 図	ブロック外の出土遺物 (石斧)	75
第 51 図	細石刃形測値と個数の相関図	79
第 52 図	V層地形図・出土遺物分布図	89~90
第 53 図	集石遺構 1~6号実測図	95
第 54 図	集石遺構 7~10・12・13号実測図	96
第 55 図	集石遺構 11・14~17号実測図	97
第 56 図	集石遺構 18~21号実測図・出土土器	98

第 57 図	石皿・磨石集中遺構	99
第 58 図	I a 類 (1~8) I b 類 (9~21) 土器実測図	101
第 59 図	I b 類土器実測図	102
第 60 図	II a 類 (50~53) II b 類 (54~60) 土器実測図	105
第 61 図	II b 類土器実測図 (2)	106
第 62 図	II b 類土器実測図 (3)	107
第 63 図	II b 類土器実測図 (4)	108
第 64 図	II b 類土器実測図 (5)	109
第 65 図	II c 類土器実測図 (1)	110
第 66 図	II c 類・II d 類土器実測図 (1)	111
第 67 図	II d 類土器実測図 (2)	112
第 68 図	II e 類土器実測図 (1)	113
第 69 図	II e 類土器実測図 (2)	114
第 70 図	III 類土器実測図	115
第 71 図	IV a 類土器実測図	118
第 72 図	IV b 類・IV c 類土器実測図	119
第 73 図	IV b 類・V 類土器実測図	120
第 74 図	VI 類土器実測図	121
第 75 図	VII a 類・VII b 類土器実測図	122
第 76 図	VII c 類土器実測図	123
第 77 図	石器実測図 (1) 石鏃・剝片	134
第 78 図	石器実測図 (2) 剝片	135
第 79 図	石器実測図 (3) 石斧-1	136
第 80 図	石器実測図 (4) 石斧-2・礫器-1	137
第 81 図	石器実測図 (5) 礫器-2	138
第 82 図	石器実測図 (6) 礫器-3	139
第 83 図	磨石類重量分布	144
第 84 図	磨石類重さと長さの相関	144
第 85 図	石器実測図 (7) 磨石類-1	145
第 86 図	石器実測図 (8) 磨石類-2	146
第 87 図	石器実測図 (9) 磨石類-3	147
第 88 図	石器実測図 (10) 磨石類-4	148
第 89 図	石器実測図 (11) 磨石類-5	149
第 90 図	石器実測図 (12) 磨石類-6	150
第 91 図	石器実測図 (13) 磨石類-7	151

第 92 図	石器実測図 (14) 磨石類- 8	152
第 93 図	石器実測図 (15) 石皿- 1	157
第 94 図	石器実測図 (16) 石皿- 2	158
第 95 図	石器実測図 (17) 石皿・台石- 1	159
第 96 図	石器実測図 (18) 台石- 2	160
第 97 図	Ⅲ b 層遺物分布図	165~166
第 98 図	集石遺構 1 ~ 2 号実測図	167
第 99 図	Ⅷ類土器実測図	168
第 100 図	Ⅸ類土器実測図	169
第 101 図	X類土器実測図	170
第 102 図	X類土器実測図	171
第 103 図	X I 類土器実測図	172
第 104 図	石器実測図 (19) 石鎌・スクレーパー 他	176
第 105 図	石器実測図 (20) 刃部磨製石器 他	177
第 106 図	石器実測図 (21) 石斧	179
第 107 図	石器実測図 (22) 磨石類- 1	180
第 108 図	石器実測図 (23) 磨石類- 2・擦痕のある礫 他	181
第 109 図	石器実測図 (24) 石皿・台石	182
第 110 図	石器実測図 (25) 軽石製品	183
第 111 図	石器実測図 (26) 尖頭器・剝片	185
第 112 図	石器実測図 (27) 石核・石斧・礫器	186
第 113 図	石器実測図 (28) 磨石類	187
第 114 図	石器実測図 (29) 石皿・台石	188
第 115 図	弥生土器実測図	192
第 116 図	溝状遺構 1 実測図	193
第 117 図	溝状遺構 1 出土遺物実測図	194
第 118 図	古墳時代の土器実測図	194
第 119 図	平安時代遺構配置図	197~198
第 120 図	周溝墓 1 号遺物出土状況	199
第 121 図	周溝墓 1 号出土遺物実測図	199
第 122 図	周溝墓 1 号実測図	200
第 123 図	周溝墓 2 号出土遺物実測図	202
第 124 図	周溝墓 2 号実測図	202
第 125 図	周溝墓 2 号出土遺物実測図	203
第 126 図	周溝墓 3 号遺物実測図	204

第 127 図	周溝墓 3 号実測図	204
第 128 図	周溝墓 3 号出土遺物実測図	205
第 129 図	周溝墓 4 号遺物出土状況	206
第 130 図	周溝墓 4 号実測図	207~208
第 131 図	周溝墓 4 号出土遺物実測図	210
第 132 図	周溝墓 5 号遺物出土状況	211
第 133 図	周溝墓 5 号実測図	212
第 134 図	周溝墓 5 号主体部実測図	213
第 135 図	周溝墓 5 号出土遺物実測図	214
第 136 図	掘立柱建物 1 号実測図	215
第 137 図	掘立柱建物ピット内出土遺物実測図	216
第 138 図	掘立柱建物 1 号付近遺物出土状況	216
第 139 図	掘立柱建物 2 号実測図	217
第 140 図	溝状遺構 2 号実測図	218
第 141 図	溝状遺構 4 号実測図	219
第 142 図	半円形溝状遺構実測図	220
第 143 図	溝状遺構 3 号実測図	221~222
第 144 図	溝状遺構出土遺物実測図	220
第 145 図	長楕円形遺構実測図	223
第 146 図	楕円形遺構実測図	224
第 147 図	楕円形遺構出土遺物実測図	225
第 148 図	焼土を伴う円形遺構実測図	226
第 149 図	円形遺構 21 号実測図	227
第 150 図	円形遺構出土遺物実測図	227
第 151 図	ピット内出土遺物実測図	228
第 152 図	古道付近遺物出土状況	230
第 153 図	古道断面図	231
第 154 図	平安時代遺物出土状況 (Ⅲ a 層)	233~234
第 155 図	平安時代遺物出土状況 (Ⅱ 層)	235~236
第 156 図	土師器実測図	237
第 157 図	土師器実測図	238
第 158 図	土師器実測図	239
第 159 図	土師器実測図	241
第 160 図	土師器実測図	242
第 161 図	土師器実測図	243

第 162 図	土師器実測図	244
第 163 図	土師器実測図	246
第 164 図	土師器実測図	248
第 165 図	土師器実測図	251
第 166 図	土師器実測図	252
第 167 図	土師器実測図	253
第 168 図	土師器実測図	254
第 169 図	土師器実測図	255
第 170 図	特殊な土師器実測図	256
第 171 図	土師器実測図	258
第 172 図	土師器実測図	259
第 173 図	土師器実測図	261
第 174 図	土師器実測図	262
第 175 図	黒色土器 A 類実測図	264
第 176 図	黒色土器 A 類実測図	266
第 177 図	黒色土器 B 類実測図	267
第 178 図	須恵器実測図	269
第 179 図	須恵器実測図	270
第 180 図	須恵器実測図	271
第 181 図	焼塩壺実測図	272
第 182 図	紡垂車実測図	272
第 183 図	滑石製品実測図	272
第 184 図	砥石実測図	273

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名表 (1)	25
第 2 表	周辺遺跡地名表 (2)	26
第 3 表	細石刃の石材と部位別個数	76
第 4 表	石器組成表	82
第 5 表	細石刃一覧表 (1)	83
第 6 表	細石刃一覧表 (2)	84
第 7 表	細石核一覧表	84
第 8 表	石器一覧表 (1)	85

第9表	石器一覧表(2)	86
第10表	石器一覧表(3)	87
第11表	出土土器一覧表(1)	123
第12表	出土土器一覧表(2)	124
第13表	出土土器一覧表(3)	125
第14表	出土土器一覧表(4)	126
第15表	出土土器一覧表(5)	127
第16表	出土土器一覧表(6)	128
第17表	出土土器一覧表(7)	129
第18表	出土土器一覧表(8)	130
第19表	出土石器一覧表(1)	140
第20表	磨石類の類別点数と石材一覧表	142
第21表	出土石器一覧表(2)	153
第22表	出土石器一覧表(3)	154
第23表	石皿・台石の類別石材一覧表	156
第24表	出土石器一覧表(4)	156
第25表	出土土器一覧表(9)	173
第26表	出土土器一覧表(10)	174
第27表	出土石器一覧表(5)	184
第28表	出土層不明石器一覧表(6)	189
第29表	遺構内出土土師器観察表	275
第30表	包含層出土土師器観察表	278

図 版 目 次

図版1	榎崎A遺跡 調査前伐採作業 土層	297
図版2	調査風景 礫群 M・C水晶出土状況	298
図版3	出土石器-1	299
図版4	出土石器-2	300
図版5	出土石器-3	301
図版6	出土石器-4	302
図版7	出土石器-5	303
図版8	集石遺構1~4	304
図版9	集石遺構5~7	305

図版10	集石遺構 8～11	306	
図版11	集石遺構12～15	307	
図版12	集石遺構16～19	308	
図版13	集石遺構20～21	Ⅲ b 集石遺構 1～2	309
図版14	石皿・磨石遺構	土器出土状況	310
図版15	出土土器-1	311	
図版16	出土土器-2	312	
図版17	出土土器-3	313	
図版18	出土土器-4	314	
図版19	出土土器-5	315	
図版20	出土土器-6	316	
図版21	出土土器-7	317	
図版22	出土土器-8	318	
図版23	出土土器-9	319	
図版24	出土土器-10	320	
図版25	出土土器-11	321	
図版26	出土土器-12	322	
図版27	出土石器-1	323	
図版28	出土石器-2	324	
図版29	出土石器-3	325	
図版30	出土石器-4	326	
図版31	出土石器-5	327	
図版32	出土石器-6	328	
図版33	出土石器-7	329	
図版34	出土石器-8	330	
図版35	出土土器-13	331	
図版36	出土土器-14	332	
図版37	出土土器-15	333	
図版38	出土土器-16	334	
図版39	出土石器-9	335	
図版40	出土石器-10	336	
図版41	出土石器-11	337	
図版42	出土石器-12	338	
図版43	出土石器-13	339	
図版44	出土石器-14	340	

图版45	沟状遗构 1、周沟墓 1 号	341
图版46	周沟墓 1 ~ 3 号	342
图版47	周沟墓 3 · 4 号	343
图版48	周沟墓 4 号	344
图版49	周沟墓 4 · 5 号	345
图版50	周沟墓 5 号	346
图版51	掘立柱建物 1 · 2 号	347
图版52	沟状遗构 3、半圆形沟状遗构	348
图版53	长椭圆形遗构、椭圆形遗构	349
图版54	出土土师器— 1	350
图版55	出土土师器— 2	351
图版56	出土土师器— 3	352
图版57	出土土师器— 4	353
图版58	出土土师器— 5	354
图版59	出土土师器— 6	355
图版60	出土土师器— 7	356
图版61	出土土师器— 8	357
图版62	出土土师器— 9	358
图版63	出土土师器— 10	359
图版64	出土土师器— 11	360
图版65	出土土师器— 12	361

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

昭和53年、建設省九州地方局により一般国道220号鹿屋バイパス建設が計画された。工事区間の埋蔵文化財の取り扱いについて、建設省大隅工事事務所は、鹿児島県教育委員会との協議に基づき、鹿児島県知事と委託契約を結び、工事前に埋蔵文化財の確認調査及び緊急発掘調査を実施することとした。調査は受託事業として、鹿児島県教育委員会が行った。

笠之原・祓川地区については、昭和54年の遺跡分布調査を踏まえ、「王子遺跡」・「西祓川遺跡」・「薬師堂遺跡」を昭和56年から昭和59年にかけて発掘調査を実施し、報告書が刊行されている。

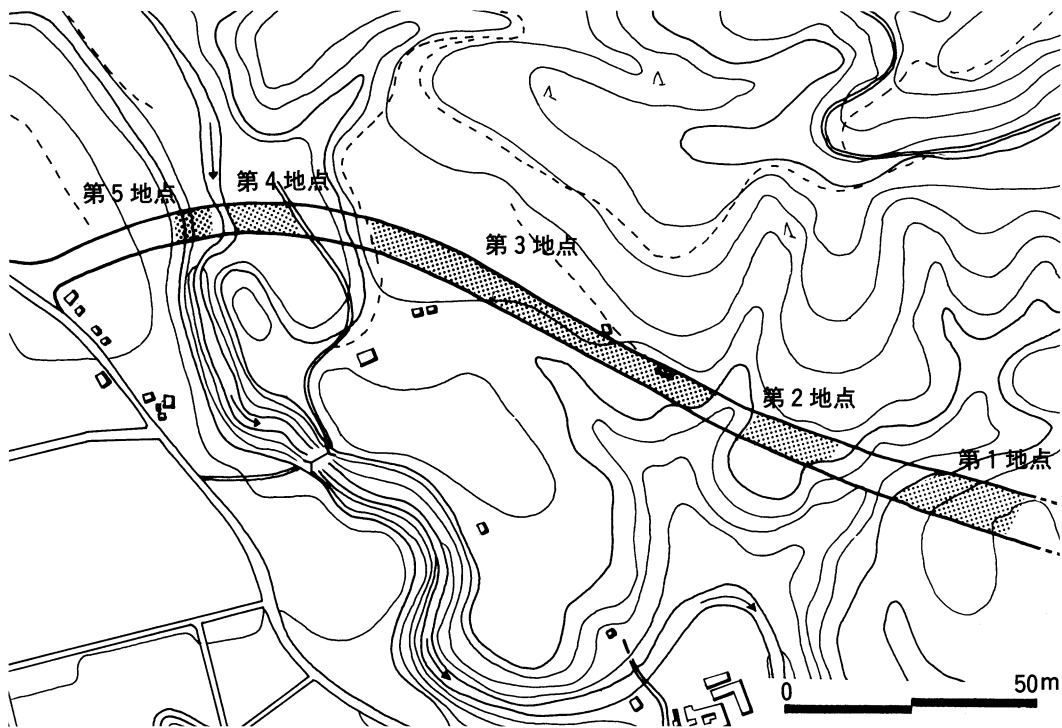
大浦・郷ノ原地区については、昭和59年4月の第2次遺跡分布調査の結果、7地点で遺物散布地を確認した。昭和60年4月から当地点の確認調査の結果に基づいて、「中ノ原遺跡」・「中ノ丸遺跡」・「川ノ上遺跡」・「榎田下遺跡」・「前畑遺跡」・「中原山野遺跡」（西原掩体壕跡——戦跡遺構）を昭和60年10月から平成2年までに発掘調査を実施し、既に報告書としてまとめ、多くの成果を得ている。

郷ノ原・白水地区については、昭和62年1月の遺跡分布調査により、5地点で遺物の散布が確認され、同年8月31日から10月30日にかけて当地点の確認調査を行った結果、「飯盛ヶ岡遺跡」・「榎崎A遺跡」・「榎崎B遺跡」・「西丸尾遺跡」で遺物や遺構等が発見された。

そこで、これらの確認調査の結果を踏まえ、飯盛ヶ岡遺跡を平成元年4月20日～平成2年3月23日、榎崎A遺跡を昭和63年5月9日～平成元年3月14日、榎崎B遺跡を平成2年4月23日～平成3年3月27日、西丸尾遺跡を平成2年5月16日～平成3年1月29日までの期間を要して、緊急発掘調査を実施した。

本報告書は、一般国道220号バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅳ）「榎崎A遺跡」をまとめたものである。

なお、「飯盛ヶ岡遺跡」ならびに「榎崎B遺跡」については、平成4年度に発掘調査報告書を刊行する予定である。



第1図 郷之原・白水地区確認調査地点

第2節 確認調査

調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所と鹿児島県知事が委託契約を締結し、これに基づき、鹿児島県教育委員会が、昭和発62年度8月31日～同年10月30日に実施した。

1 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	濱里 忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井 浩一
調査企画者	〃	課長補佐	川畑 栄造
	〃	主任文化財研究員	
	〃	兼埋蔵文化財係長	立園多賀生
調査事務担当者	〃	主幹兼係長	濱松 巖
	〃	主査	京田 秀允
	〃	主事	川畑由起子
調査担当者	〃	文化財研究員	旭 慶男(故人)
	〃	主査	牛ノ濱 修

2 調査の概要

分布調査の結果、5地点で確認調査を必要とした。第1地点8ヶ所、第2地点3ヶ所、第3地点10ヶ所、第4地点2ヶ所、第5地点4ヶ所の計27トレンチを設定して確認調査を行った。トレンチは2m×5mを基本とした。

(基本的な層位)

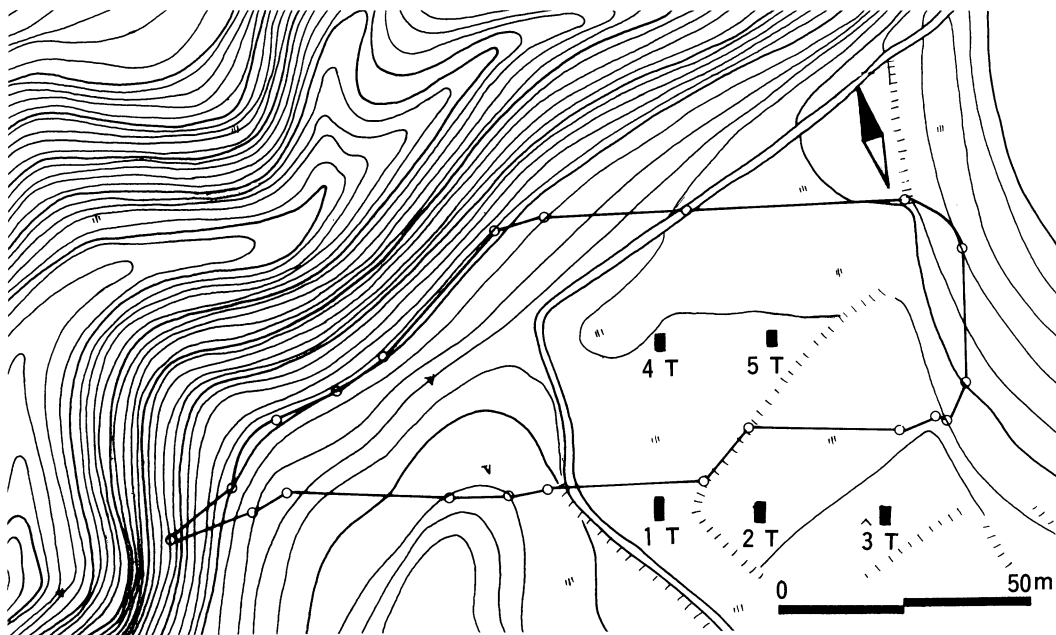
- I層 → 表層 (耕作土)
- II層 → 黒色有機質土層 (土師器等遺物包含層)
- III層 → 黄褐色粘質パミス混 (アカホヤ火山灰 Ah-上層は縄文時代晩期遺物包含層)
III層中程に池田カルデラ起源の軽石が含まれる。
- IV層 → 青灰色粘質土層 (縄文時代早期遺物包含層)
- V層 → 黒褐色パミス混粘質土層 (薩摩火山灰 Szp)
- VI層 → 茶褐色粘質土層 (旧石器遺物包含層)
- VII層 → 乳白色粘質土層 (ヌレシラス)

基本的には以上のような層位となるが、場所や地点によって、欠落あるいは新たな層の堆積が見られるところもある。

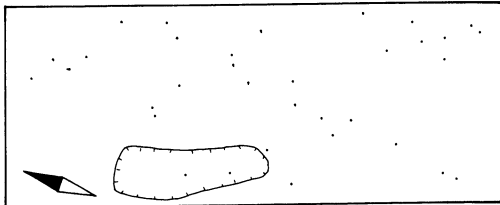
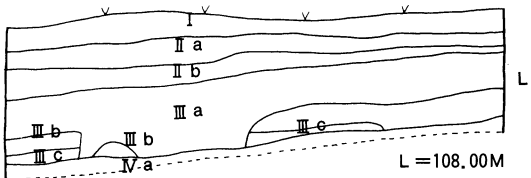
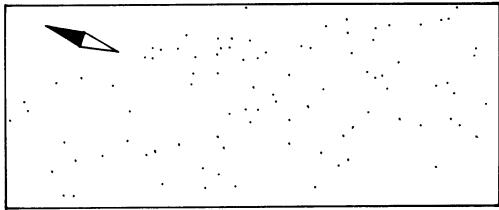
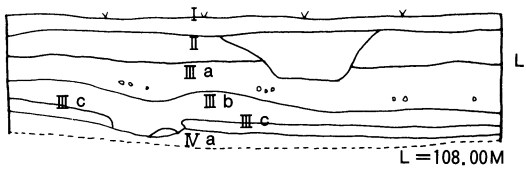
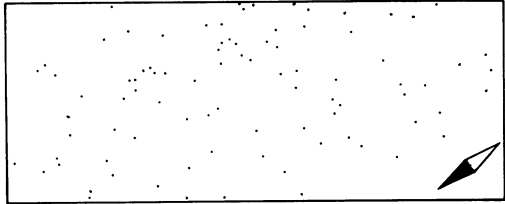
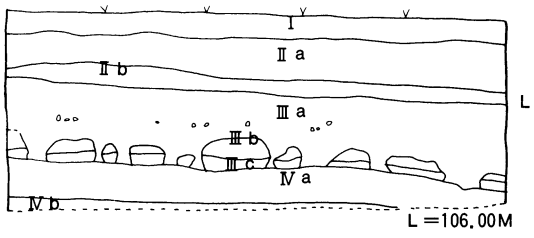
(1) 各地点の調査

① 第1地点 (飯盛ヶ岡遺跡)

西に開析された、標高108mのなだらかな台地先端部に位置する。調査前は檜林が整然と林立していた。



第2図 第1地点トレンチ配置図



調査は道路計画路線のセンターラインに沿って8ヶ所のトレンチを設定して実施した各トレンチの出土遺物と層の関係は以下のごとくである。

1 T (トレンチ) は、II層から土師器、III層から縄文晩期土器が出土した。

2 Tは、II層から土師器、III層から縄文晩期土器、IV層から縄文早期土器とともに集石遺構が検出された。

3 Tは、II層から土師器が出土し、IV層からは縄文早期土器の塞ノ神式土器や集石遺構が検出された。

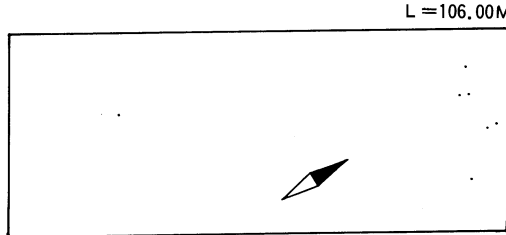
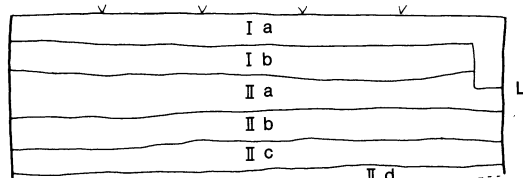
4 Tは、II層から土師器が出土したが、下層からは遺物の出土は見られなかった。

5 Tは、II層から土師器が多数出土し、III層からは縄文晩期土器が出土した。

6 Tは、II層から土師器、III層から縄文晩期土器が多数出土した。

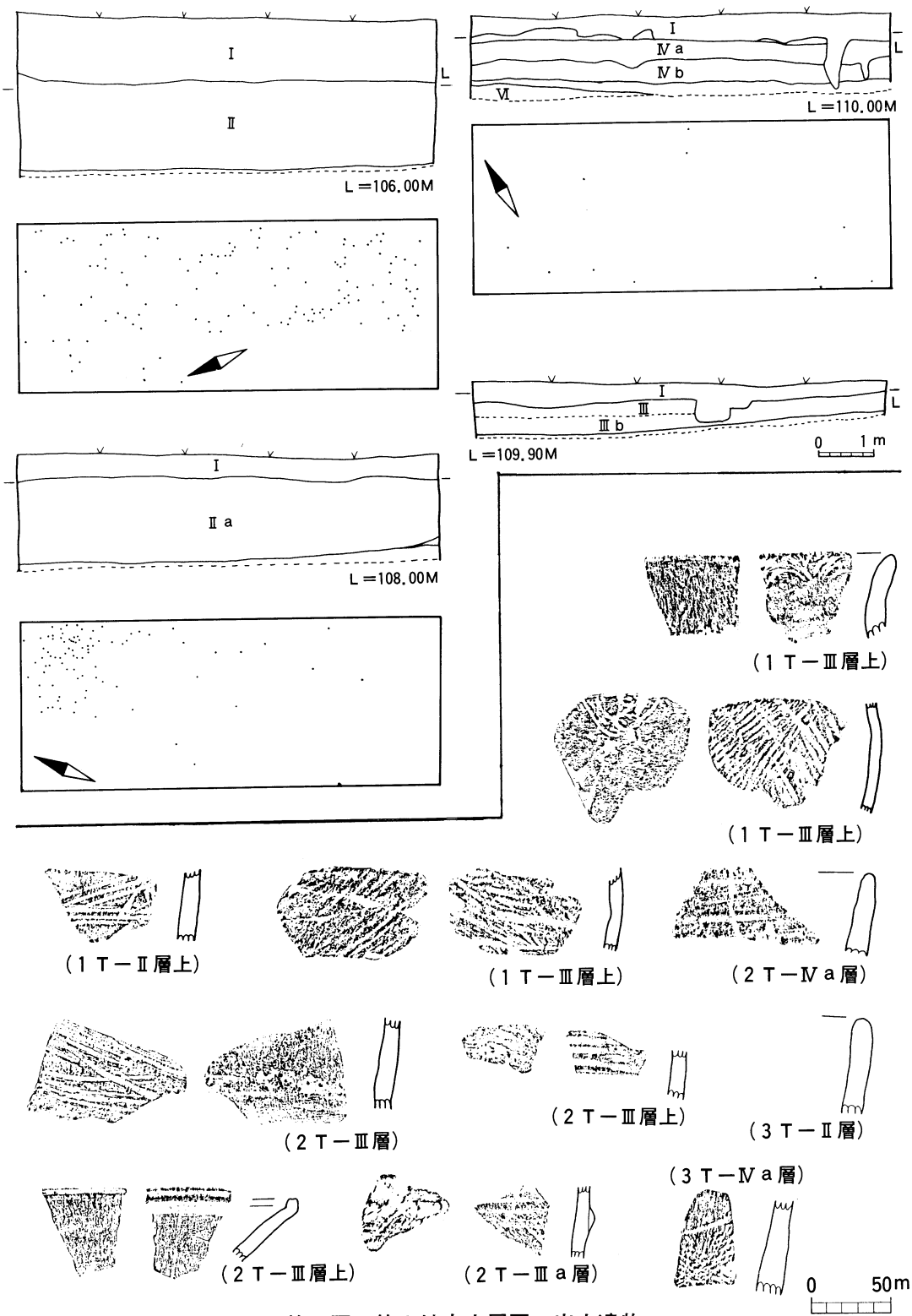
7 Tは、III層から縄文晩期土器、IV層から縄文早期土器が出土した。

8 Tは、IV層から縄文早期相当の集石遺構が検出された。

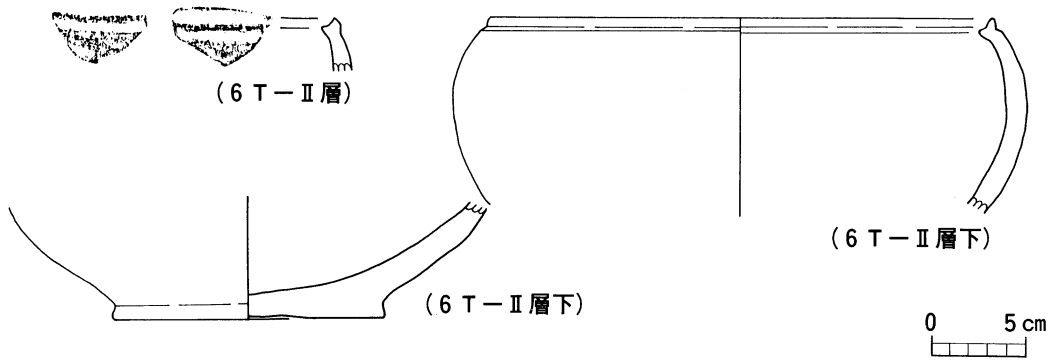


0 1 m

第3図 第1地点土層図



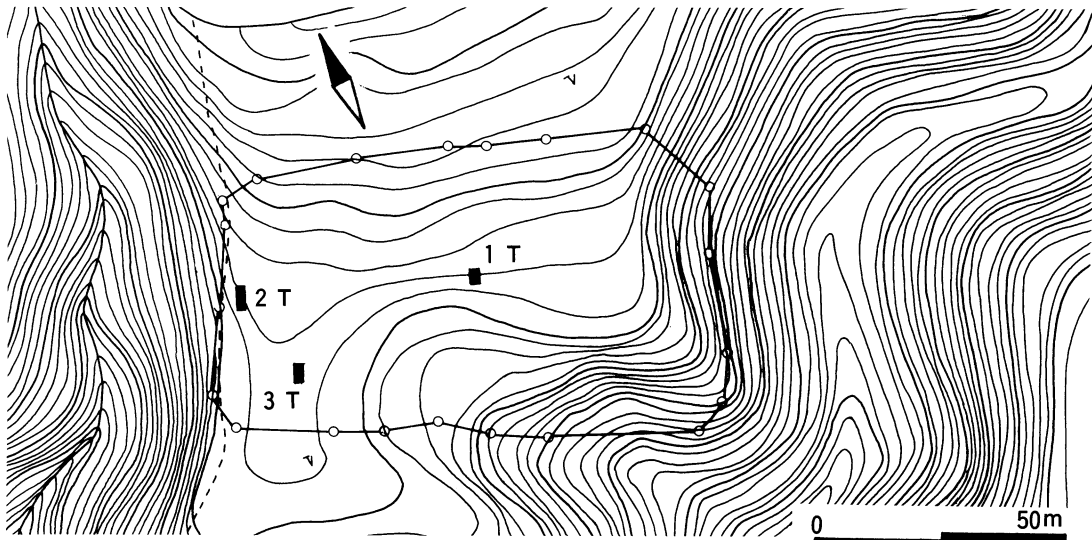
第4図 第1地点土層図・出土遺物



第5図 第1地点出土遺物

② 第2地点（榎崎A遺跡）

第1地点より西側に、谷を隔てた標高約106mの南へ舌状に延びた台地に位置する。調査は、計画路線のセンターラインに沿って3ヶ所のトレンチを設定して行った。結果は以下のごとくである。

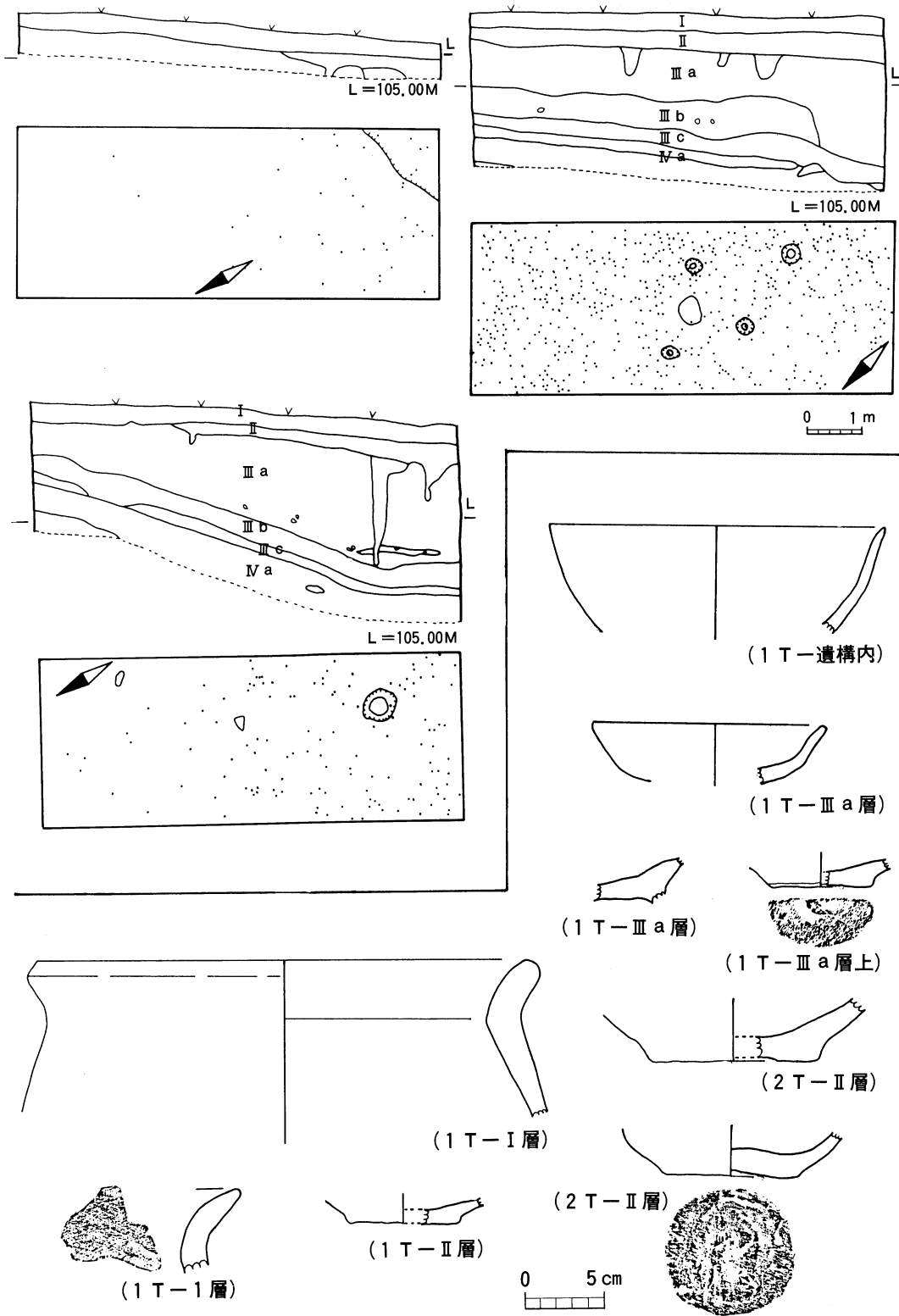


第6図 第2地点トレンチ配置図

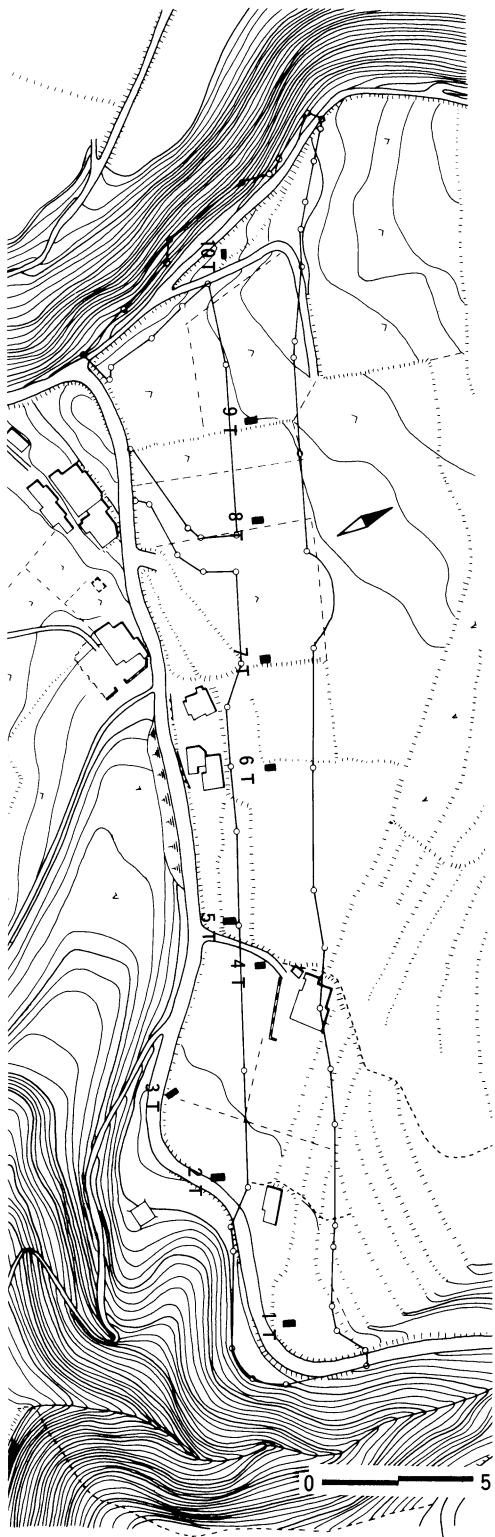
1 Tは、II層から土師器の甕や椀形土器が出土し、南側に住居跡らしき落ち込みが検出された。

2 Tは、II層から土師器、III層から縄文前期の轟式・曾畑式土器、IV層から縄文早期の前平式・石坂式土器および石器等の遺物やそれに伴う集石遺構が検出された。

3 Tは、II層から土師器の甕や椀形土器が多数出土し、III層からは縄文前期の曾畑式土器や南福寺式土器等の縄文後期の土器、IV層からは縄文早期の前平式・石坂式土器および石器等の遺物やそれに伴う集石遺構が検出された。



第7図 第2地点土層図



6 Tは、Ⅱ層から土師器の椀形土器、Ⅳ層からは縄文早期土器が出土した。Ⅳ層以下からの遺物の出土は見られなかった。

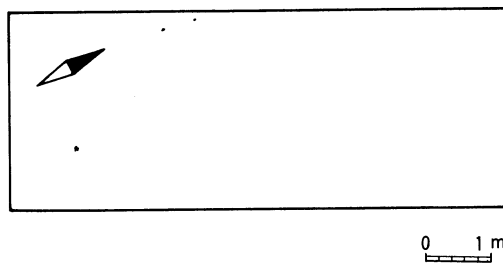
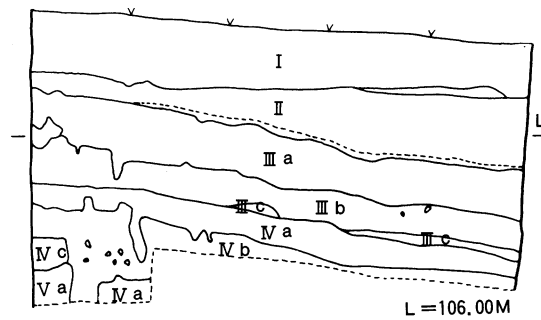
7 Tは、Ⅱ層から土師器の椀形土器等が多数出土し、Ⅲ層からは縄文晩期の黒川式土器やスリ石等が出土した。Ⅳ層からは縄文早期の土器が出土した。

8 Tは、7 Tと同様な遺物の出土状況であった。

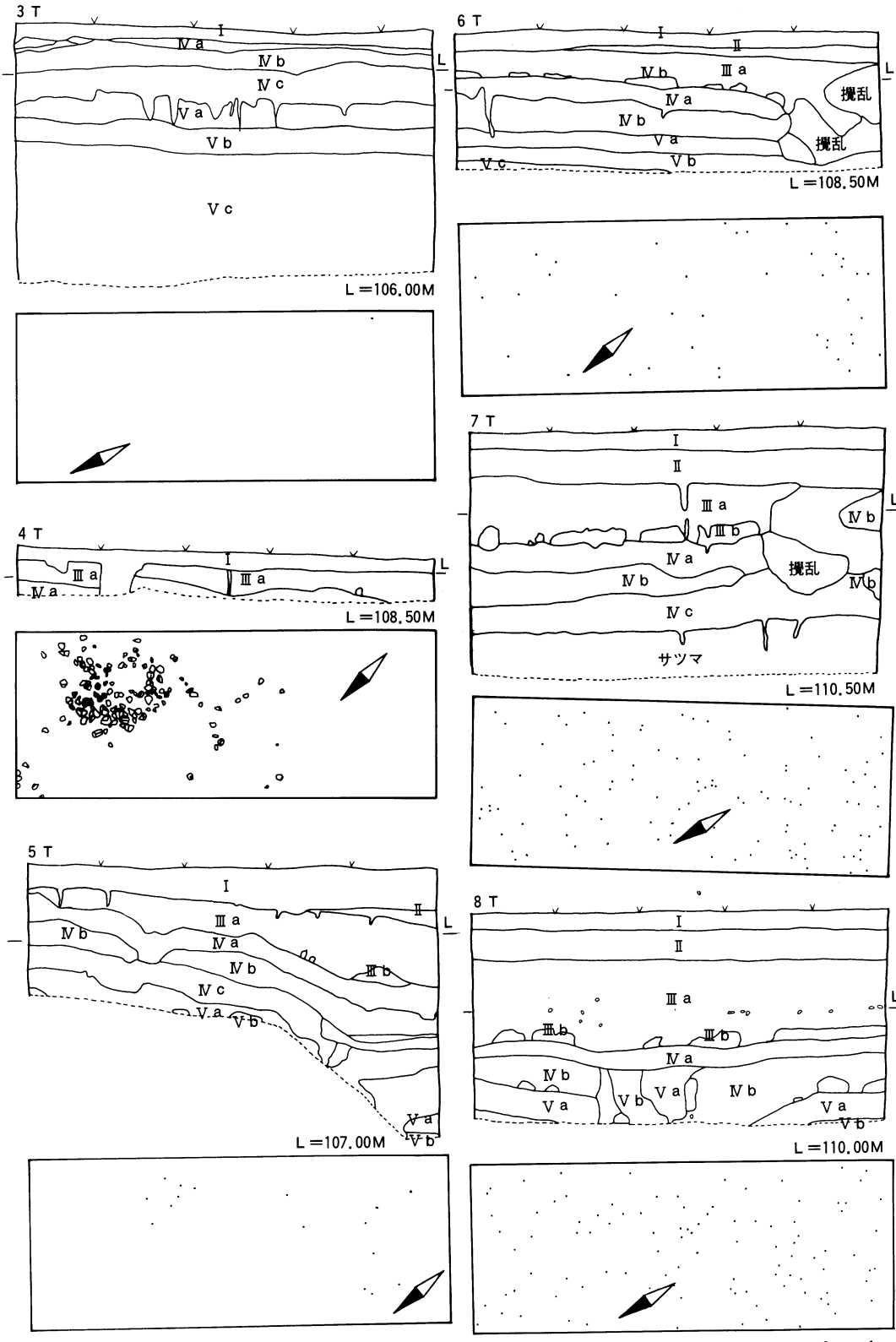
9 Tは、7 T・8 Tと同様な遺物の出土状況にあり、Ⅴ層からは、黒曜石製のフレイクが出土し、細石器文化の遺物包含の存在が明らかになった。

なお、7 T・8 T・9 TのⅡ～Ⅳ層からの出土遺物は他のトレンチに比べ、量的にも多い傾向にあった。

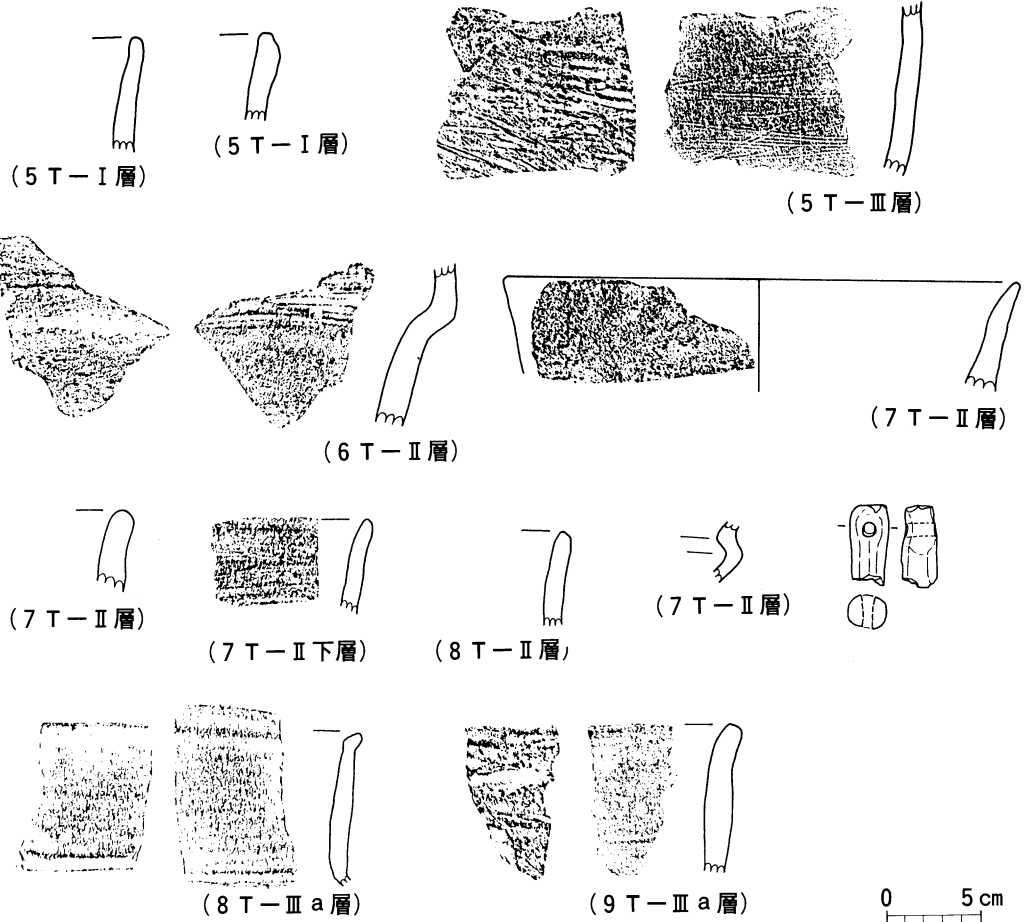
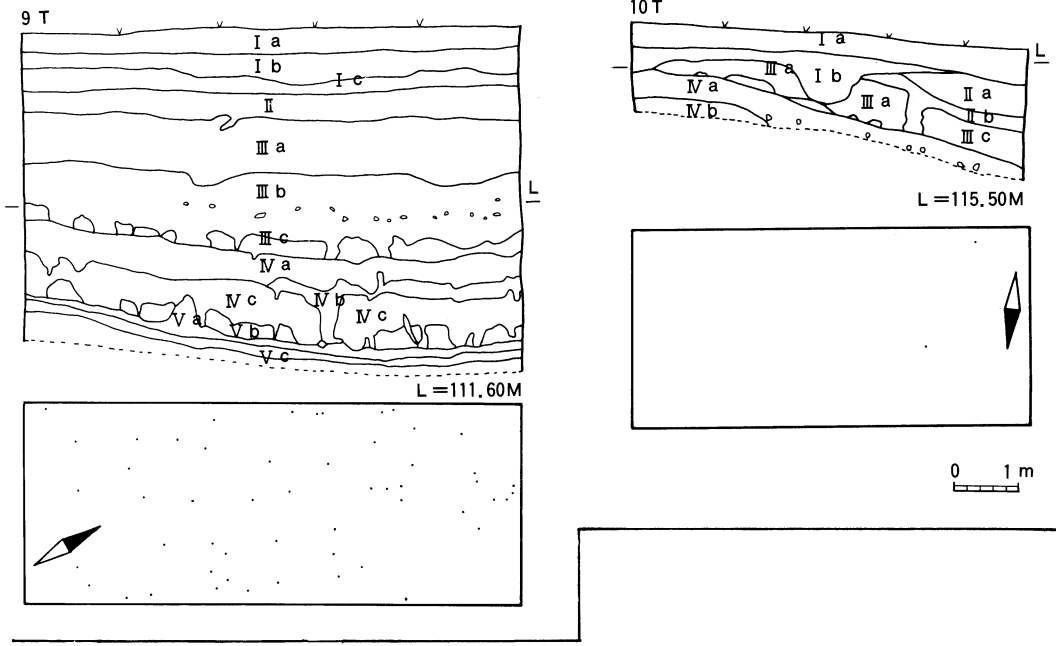
10 Tは、Ⅳ層から縄文早期相当の遺構は検出された。なお、それに伴う土器等は見られなかった。



第10図 第3地点トレンチ配置図・土層図



第11図 第3地点土層図

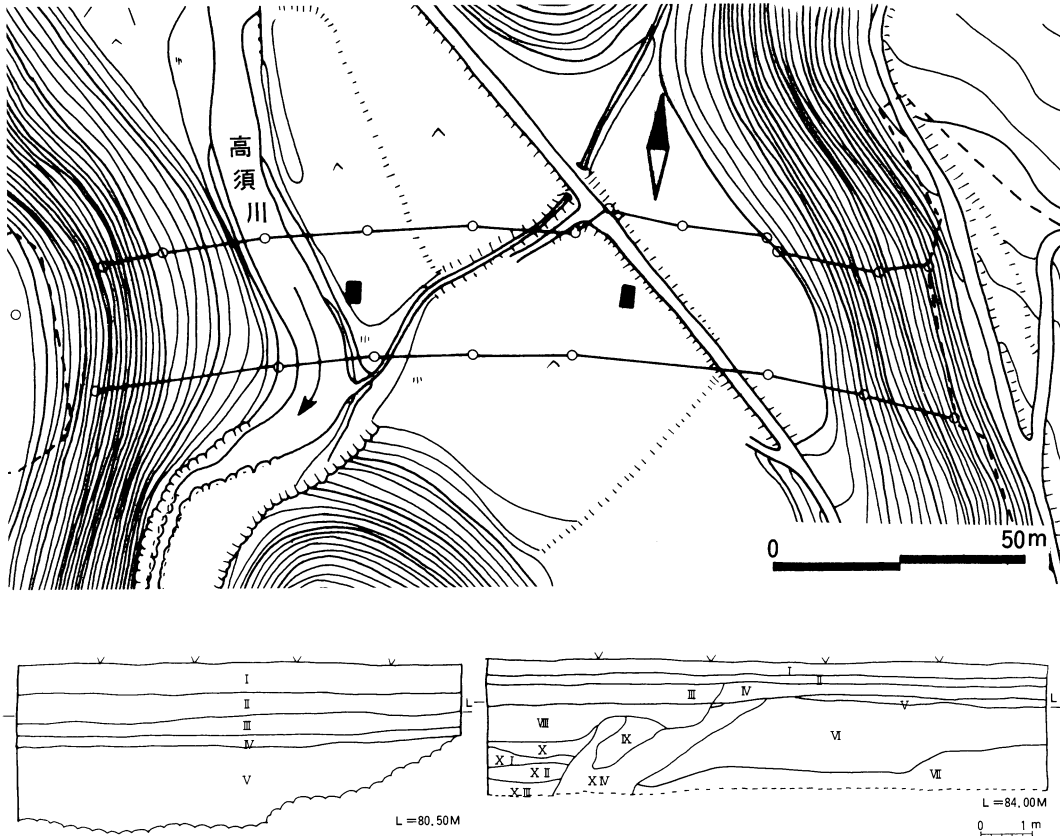


第12図 第3地点土層図・出土遺物

④ 第4地点

第3地点と第5地点に挟まれた谷間の高須川左岸に位置し、標高約81mの水田にあたる。調査は橋脚建設予定地に2ヶ所のトレンチを設定して行った。

その結果、表土は2次堆積層の耕作土で下層は砂礫層や礫層の互層が堆積しており遺物の出土は無く、高須川の氾濫および旧河川敷と推定される。従って、遺跡の存在は確認されなかった。



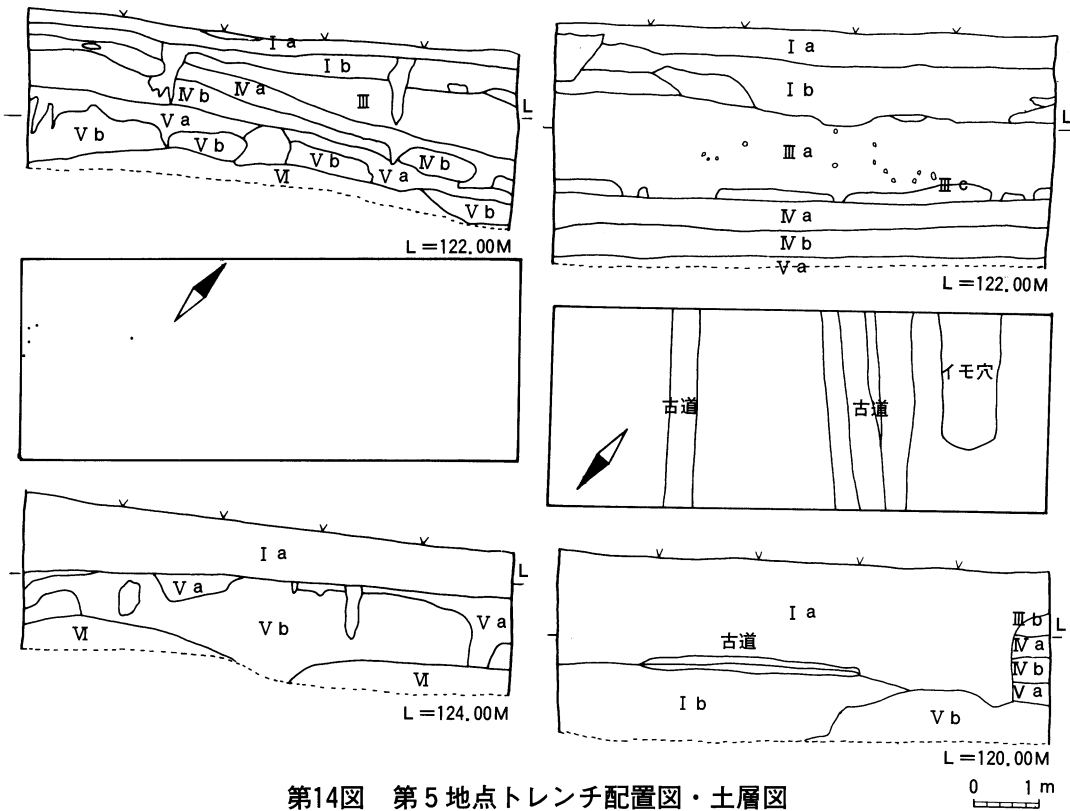
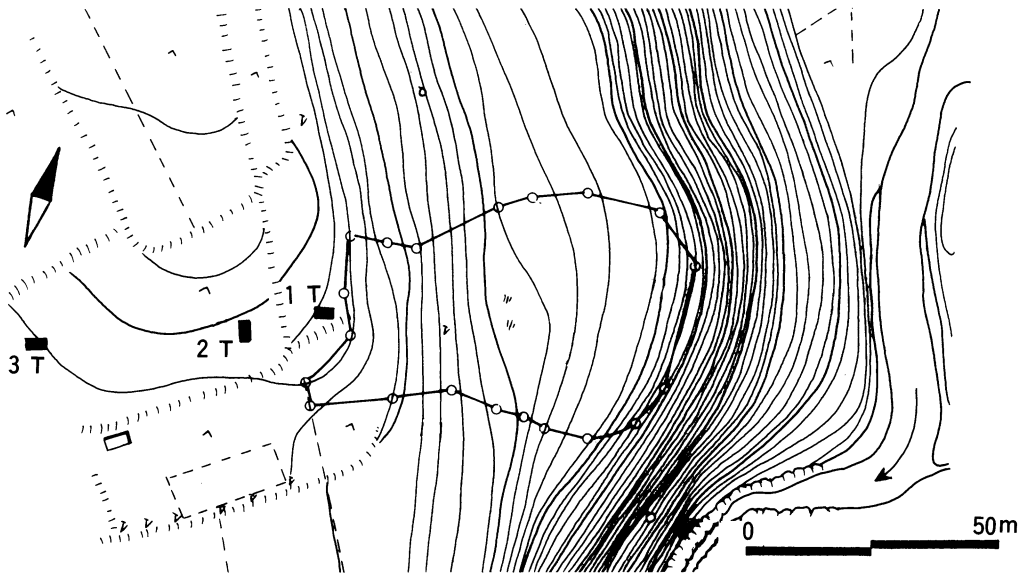
第13図 第4地点トレンチ配置図・土層図

⑤ 第5地点

高須川を挟んで第3地点（榎崎B遺跡）と対峙し、西側を220号線を背にした標高約123mの台地に位置する。東側は急傾斜で一段低い緩やかな舌状の狭い台地が形成され、台地縁辺部で急崖となり高須川へと続く。

調査区は、買収済み部分の計画路線のセンターラインに沿って4ヶ所のトレンチを設定して行った。

なお、台地先端部の山林部分は未買収地であり、買収後に確認調査が必要である。



第14図 第5地点トレンチ配置図・土層図

4ヶ所のトレンチを調査した結果、耕作土から土師器片が出土したが、II層以下には遺物の出土は無かった。

(未買収地の確認調査については、本文の西丸尾遺跡の項で報告する)

3 確認調査のまとめ

今回の調査は、確認調査であり遺跡の性格等については十分に把握することは出来なかったが、各トレンチの層状やそれに係わる出土遺物の関係、遺跡の広がり等、本調査に向けての基礎的資料を得ることが出来た。

今回の発掘調査をまとめてみると次の通りである。

第1地点（飯盛ヶ岡遺跡）は、Ⅱ層は奈良～平安時代、Ⅲ層は縄文前期～晩期、Ⅳ層は縄文早期に相当する遺物包含層がほぼ全面にわたって確認された。いずれも保存状態は良好であり特に2 T・3 T・8 TのⅣ層からは集石遺構が検出され、今後の調査によっては、縄文早期の生活址に関する遺構等の発見の可能性がある。

第2地点（榎崎A遺跡）は、Ⅱ層に奈良～平安時代の多量の土師器と共に、それに伴う柱穴が検出され掘立柱建物跡の可能性もある。Ⅲ層は縄文前期・後期・晩期土器、Ⅳ層は縄文早期の石坂式土器等がまとまって出土し、さらに2 T・3 Tからは集石遺構が検出され、いずれの文化層も保存状態は良好であった。

第3地点（榎崎B遺跡）は、Ⅱ層には奈良～平安時代の土師器、Ⅲ層には縄文晩期土器の黒川式土器を主体に、Ⅳ層には縄文早期土器や集石遺構を伴う遺物包含層がほぼ全域にわたって残存していることから、縄文時代晩期及び早期の大遺跡の存在が想定される。また、9 TのⅤ層からは旧石器時代の遺物が出土し、この地点を中心に旧石器文化層の存在が明らかになった。第4地点・第5地点については、確認調査の結果、遺物や遺構等の出土は無かった。

4 今後の処置

- ① 第1地点（飯盛ヶ岡遺跡）、第2地点（榎崎A遺跡）、第3地点（榎崎B遺跡）においては、工事計画区間全域に奈良・平安時代、縄文前期～晩期、縄文早期の遺物包含層が重複する複合遺跡としての存在が確認され、全面調査が必要である。

なお、第1地点（飯盛ヶ岡遺跡）、第2地点（榎崎A遺跡）においては旧石器時代の遺物包含層は未確認の為、あらためて確認する必要がある。また、第3地点（榎崎B遺跡）の旧石器時代については、旧石器文化層の存在が明らかになったが、今後、遺跡の範囲確認のための調査が必要となる。

- ② 第4地点・第5地点については、遺跡の存在する可能性は薄い。

しかし、第5地点の工事対象地の台地先端部（山林部分）については、未買収地で調査不能のため買収後に確認調査が必要である。

第Ⅱ章 榎崎A遺跡の概要

第1節 調査に至るまでの経緯

昭和53年、建設省九州地方局により一般国道220号鹿屋バイパス建設が計画された。工事区間の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省大隅工事事務所は鹿児島県教育委員会との協議の結果、鹿児島県知事と委託契約を結び、工事前に埋蔵文化財の遺跡分布調査ならびに確認調査を随時行い、その結果に基づいて遺跡の発掘調査を実施することとした。調査は受託事業として、鹿児島県教育委員会が行った。

榎崎A遺跡については、昭和62年1月の分布調査、同年8月の確認調査の結果に基づいて昭和63年5月9日～平成元年3月14日の期間に於いて発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査（昭和63年度）

〈調査の組織〉

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	濱里 忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井 浩一
調査企画者	〃	課長補佐	奥園 義則
	〃	文化財研究員	
	〃	兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査事務担当者	〃	企画助成	
	〃	係長	京田 秀允
	〃	主事	末永 郁代
調査担当者	〃	文化財研究員	旭 慶男（故人）
	〃	文化財調査員	八木澤一郎
	〃		（現甲南中）
	〃	〃	梅北 浩一
	〃		（現伊集院教委）
	〃	〃	中村 和美
発掘作業	野元為行 郷原秀行 山口益男 柳田寅光 郷原恒夫 森山幸男 森山安盛 川井田智恵子 新地美代子 豊崎キミエ 郷原ミチエ 奥原ハギエ 森山キヨ 森山マサエ 森山サチエ 奥村タエ子 吉元美代子 吉元タマ子 郷原照子 郷原ナル 郷原フミ子 郷原キヨ 郷原スギ 東キヌエ 山口タミエ 郷原キヨ子 郷原フミエ 郷原ハル 前之原キクエ 吉元キクエ 東トヨ子 野元ツルエ 野元フジ子 野元サナエ 長友ツル 芽場スミ 紺屋フジコ 小迫サヨ子 山元ノリ		

第3節 日誌抄

発掘調査の経過の概略を日誌抄によってほぼ1週間ごとに説明する。

(昭和63年 5月9日～13日)

前の週までに始良町の収蔵庫で準備しておいた発掘調査道具を運搬する。現地ではプレハブを設置。調査は前年度の確認調査時の2・3トレンチを開け層位を把握する。グリッドを道路のセンターラインを基準に北から南へA～F、西から東へ1～10と10mごとの設定した。現地地形図も測量。遺跡範囲の確認のためA-3～7、B-9区にトレンチを入れる。A-3・4・5区に土師器を伴う溝を検出。A・B-9区は耕作で削平を受けており、表土の直下はアカホヤ火山灰層である。調査前は杉林であったので杉の抜根に相当の時間を要した。

(昭和63年 5月16日～20日)

簡易トイレ設置。電気工事。仮の標高の基準設定。A・B・C・D-8・9区のトレンチ調査。2層から土師器が出土し平板測量。排土は東西の谷間に水路ができるまでは捨てることができず、調査範囲内で操作することになり東側から西に20mごとに掘り下げていくことにした。

(昭和63年 5月23日～27日)

重機を使っての表土剥ぎ。A-8・9区に溝状遺構を検出。

(昭和63年 5月30日～6月3日)

ベルトコンベアを使っての作業開始。作業の能率が上がる。

(昭和63年 6月6日～10日)

C・D-8区の遺構検出作業。

(昭和63年 6月13日～17日)

C・D-8・9区3層上面で地形図測量。A・B-8・9区でV層中から礫群2基を確認。

(昭和63年 6月20日～24日)

B-8・9区土層断面図作成。C・D-8・9区でⅢa層のピット検出。

(昭和63年 6月27日～7月1日)

排土の流出を防止するための杭打ちを行う。次の6・7区に移るため重機を使って表土剥ぎ、排土を移動した。C・D-8・9区Ⅱ・Ⅲa層で溝状・円形状遺構検出。また、Ⅲb層で縄文土器出土。A-8・9区V層を掘り下げ、縄文土器を検出。

(昭和63年 7月4日～8日)

A・C・D-8・9区V層の自然礫や集石遺構の実測・写真撮影。礫の取り上げ作業。断面図作成。次のグリッドに移るために重機を使って表土剥ぎ作業。Ⅱ層上面でイモ穴の検出。

(昭和63年 7月11日～15日)

A・B・C・D-6・7区調査開始。D-6・7区では表層から土師器の完成品が多く出土した。遺構検出作業も行う。B-6・7区土層断面図修了。

(昭和63年 7月18日～22日)

先週に引き続き掘り下げを進める。溝状遺構を検出、実測する。雨の多い時期であった。

(昭和63年 7月25日～8月12日)

A-6・7区Ⅲa層の遺構検出と掘り下げ。B-6・7区V層掘り下げ平板実測、更にⅥ層

掘り下げ。C・D-6・7区円形遺構などの遺構実測。

(昭和63年8月17日～19日)

週の前半は夏休みで作業中止。C・D-6・7区では周溝墓2号など遺構の実測。

(昭和63年8月22日～26日)

C-7区調査終了。調査範囲内の夏草の伐採。

(昭和63年8月29日～9月2日)

D-7区調査終了。次のグリッドを重機を使って表土剥ぎ。

(昭和63年9月5日～9日)

梅北調査員と作業員9名(男子1女子8名)が加わるA・B・C・D・E-4・5区調査開始。重機を使って排土作業。遺構検出や遺物の取り上げ。

(昭和63年9月12日～16日)

F-4・5区調査開始。周溝墓3号や楕円形遺構の調査を進める。

(昭和63年9月19日～23日)

C-4・5区ではV層上面で地形図の測量し、V層の調査。また、D・E-4・5区遺構検出作業。B-5区で楕円形遺構の調査。水曜日は雨のため作業中止、室内で図面・写真の整理ほか事務的作業を行う。

(昭和63年9月26日～30日)

A-4・5区ではV層の平板実測、さらに6層まで掘り下げ。確認の深掘りトレンチを入れる。B-4・5区はV層の掘り下げ。C・D・E-4・5区はⅢa層の平板実測、遺構検出作業。

(昭和63年10月3日～7日)

D・E-3区調査開始。重機を使用し表土剥ぎと排土の移動を行う。A・B-3区の西側土層断面図を作成。集石遺構の実測。

(昭和63年10月10日～14日)

A-4・5区調査終了。A・B-2・3区調査開始、掘り下げを行う。溝状遺構検出後、実測。D-3区に周溝墓4号を検出し調査を進める。C-4・5区V層上面で地形図を測量しV層の調査を開始する。

(昭和63年10月17日～21日)

A・B-2・3区、B-4区調査終了。

(昭和63年10月24日～28日)

B・C-5、C・D-6区の調査終了。B-2・3区V層およびVI層の調査。C・D・E区は地形図を測量しV層の調査。周溝墓4号の遺構内遺物の実測。A・B-2・3区では確認の深掘りトレンチを入れ、また集石遺構の実測を行う。D-3区ではⅢa層のピット検出。

(昭和63年10月31日～11月4日)

F-4・5区調査終了。

(昭和63年11月7日～12日)

D・E-5区調査終了。プレハブを配置替え。重機を使い表土剥ぎと排土の移動。土曜日も作業し、C区の表土剥ぎ（手作業）表層より遺物多量に出土。

（昭和63年11月14日～11月18日）

八木沢調査員に変わり中村調査員が参加。C・D・E-2、C-3区調査開始、II層上面でのイモ穴等の遺構検出。17・18日は旭研究員は農業基盤整備事業に係わる文化財保護行政担当者会議に出席。

（昭和63年11月21日～11月25日）

21日、河口貞徳氏（鹿児島県文化財審議会委員）発掘調査現地指導。C・D・E-2・3区の調査を進める。土器洗いも開始する。周溝墓4号の写真撮影。E-2区に周溝墓5号を検出。

（昭和63年11月28日～12月2日）

C-3、D-4区III層の平板実測、IV層の掘り下げ。D-4区のアカホヤ下層の地形は楕円形の深い掘り鉢状になる。2区の列ではピットの検出作業をし掘立柱建物跡を検出。建設省から3名来跡。

（昭和63年12月5日～9日）

C・D・E-4区調査終了。D・E-1区調査開始、III層まで掘り下げ。

（昭和63年12月12日～16日）

C-2・3、D-2、E-3区V・VI層掘り下げ。D-3区4号周溝墓調査終了。E-2区の周溝墓5号の調査を進める。

（昭和63年12月19日～23日）

D-3区の調査。集石12、13号の実測。男性の作業員は飯盛ヶ岡遺跡の伐採作業へ。C-2区西側土層断面図作成。水洗した遺物の中に塞ノ神式土器発見。来月から調査の本部が飯盛ヶ岡に移るので道具を運ぶ。別府大学生鎌田洋昭君参加。

（平成元年1月9日～13日）

B・C-1区調査開始、重機で表土剥ぎ。作業員は飯盛ヶ岡遺跡の発掘調査着手の為、20名に減少。細石器がVII層より出土。E-2区周溝墓5の調査、見通し断面図実測、写真撮影。E-1区土層断面図作成。

（平成元年1月17日～20日）

C-1、E-3調査終了。

（平成元年1月23日～27日）

E-2区III層掘り下げ。建設省より2名来跡。D-1区調査終了。

（平成元年1月30日～2月3日）

E-2区III層の掘り下げ、機械がなく人力のため能率低下。工事用の重機で土捨て場を確保してもらう。V層上面の地形図測量。V層とVI層上面の調査。集石遺構実測。

（平成元年2月6日～10日）

E-2区VI層の調査。雨が多い週であった。軽石に錆の付着したものが見付き一時は爆弾

かとも思え騒動した。

(平成元年2月13日～17日)

E-2区Ⅶ層細石器の調査のため地形図測量の後、1m方眼で区割りする。5cmずつ掘り下げる。集石実測。畦原型の細石核出土。

(平成元年2月20日～24日)

鹿児島県文化課吉井課長と立園主幹来跡。E-2区Ⅶ層の掘り下げ。平板実測。

(平成元年2月27日～3月3日)

残っていたE-1区の調査。Ⅶ層上面で集石検出。地形図測量。落ち込み遺構の実測。Ⅶ層の調査を進める。

(平成元年3月6日～14日)

引き続きⅦ層の調査。写真撮影。シラスまで確認深掘り。テントの解体。運搬。E-2区南側土層断面図作成。E-1・2区調査終了。調査すべて終了。

第4節 報告書作成(平成3年度)

〈組織〉

主 体 者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	大 田 務
責 任 者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	向 山 勝 貞
企 画 者	〃	課 長 補 佐	濱 松 巖
	〃	主任文化財研究員	
		兼埋蔵文化財係長	吉 元 正 幸
事 務 担 当 者	〃	主 幹 兼 企 画	
		助 成 係 長	濱 崎 琢 也
	〃	主 査	把 批 雄 二
	〃	主 事	新 屋 敷 由 美 子
執 筆 担 当 者	〃	主 査	青 崎 和 憲
	〃	文化財研究員	大 久 保 浩 二
	〃	〃	中 村 和 美
	〃	主 事	児 玉 健 一 郎
遺 物 指 導 助 言 者	鹿児島県文化財保護審議会委員(考古学)		河 口 貞 徳
	九州歴史資料館主査(考古学)		横 田 賢 治 郎
	鹿児島大学法文学部教授(考古学)		上 村 俊 雄
	〃 助手(考古学)		本 田 道 輝
整 理 作 業	脇田美津恵 野口久子 浜田幸江 宮岡雪子 徳永美喜子 臼井綾子 小山君子 川田美津子 前之園俊子 中原己美子 木田安枝 高倉晴美		

第Ⅲ章 位置と環境

第1節 地理的環境

榎崎A遺跡は、鹿屋市郷之原町榎崎に所在し高隈山系の南側丘陵端に立地する。

鹿屋市は、九州南東部の大隅半島中央部に位置し、大隅の政治、経済、文化上の中心としての機能を果たしている。鹿屋市は、『和名抄』によると、始羅郡の鹿屋郷の野裏郷に比定され、地名の由来はカヤが密生していたため「カヤ」と呼ばれ、後に「カノヤ」に転訛したものともいわれている。市の東北部には砂質岩、泥質岩、花崗岩よりなる1000m級の高隈山系が、西南部には安山岩、溶結凝灰岩よりなる700～800m級の肝属山系が連なるが、そのほか大部分において発達したシラス台地が形成されている。西側は鹿児島湾に接している。

シラス台地は、南九州に一般的にみられる地形で、約22,000年前に始良カルデラから噴出した火砕流堆積物によるもので、生産性の低い土壌にもかかわらずサツマイモや落花生を主とする畑作地帯となっている。本地区の台地は、高須川、肝属川、串良川による開析の結果、大小さまざまなシラス台地に分断されたが特に西から鹿屋原・笠野原・永吉の三台地は大規模であることで知られる。なお、これらシラスは数100mもの堆積があり滞水層に達するまで数10mを要するため、本格的に畑作地帯として利用されるようになったのは、畑地灌漑事業ダム建設による台地の灌漑が進められるようになった昭和期以降のことである。それ以前は水の供給は不便をきたし、鹿屋市の東隣りに位置する串良町の土持堀の深井戸（県指定）の例にみられるように数10mの井戸を掘り、牛を使って汲み上げるなど大変な労力が必要であったと思われる。

榎崎A遺跡が存在する郷之原地区は鹿屋市の西北部に位置し、北側は高隈山系が連なり高須川により深く浸食された丘陵地帯となる。南側は高須川低地、鹿屋原台地となる。榎崎A遺跡は、標高約106mの南側に舌状に伸びた丘陵の末端にある。丘陵の南側には高須川の支流が流れ、生活の場として適切な環境であったと思われる。小谷を挟んだ西側には榎崎B遺跡が存在している。榎崎B遺跡の西側には高隈山系を源とする高須川が流れている。西側300mの対岸、即ち花岡台地の東北側縁辺に西丸尾遺跡が立地する。

現在、遺跡周辺は、国立鹿屋体育大学が1981年に開校したことに伴い、市街地化が進行しつつあるが、この傾向は220号バイパスが開通するとより拍車がかかるものと思われる。

第2節 歴史的環境

鹿屋市内の遺跡は、昭和50年には18カ所を数えるのみであったが、昭和58年には83カ所と急増、現在200カ所を数える。これらの中には、発掘調査されたものも少なくない。鹿屋市内の主な遺跡を時代を追って概観する。

旧石器時代

鹿屋市内を含めて大隅半島ではこれまでこの時代の報告が少なかったが、最近発見されつつある。榎崎A遺跡では、細石器文化期の遺物が、榎崎B遺跡では、多くの礫群とピット群を伴

う細石器と局部磨製石斧が検出された。また西丸尾遺跡では、細石器とナイフ型石器文化の両文化層の遺構、遺物が検出されている。なお、榎崎 A 遺跡についての詳細は本報告書に記載されている。

縄文時代

草創期の遺跡としては南町の伊敷遺跡が著名である。薩摩火山灰の下部より、隆帯文土器や石斧が検出された。上楠原遺跡では貝殻による施文のある土器片及び無文土器が出土し、西丸尾遺跡でも、この時期の遺構、遺物が検出された。

早期になると、上楠原遺跡で前平式土器、手向山式に類似する押型文土器、塞ノ神式土器と集石が、岩之上遺跡で、石坂式・吉田式土器と集石 6 基が、打馬平原遺跡で、土壙 6 基、集石 27 基と、石坂式・吉田式・前平式・押型文式・塞ノ神式土器や各種の石器が出土した。谷平遺跡では、集石 2 基、土壙 1 基、各種の土器が出土している。前畑遺跡では、多くの集石遺構とともに平柄式土器（壺形を含む）の単純遺跡の調査がなされている。榎崎 A 遺跡でも集石遺構や遺物が出土した。

前期の遺物が出土した主な遺跡として、神野牧遺跡、榎田下遺跡、中ノ原遺跡、榎木原遺跡があげられる。それぞれ曾畑式土器、集石 6 基と轟式・曾畑式系統の土器、集石 3 基と轟式系統の土器、前平式土器が出土した。

中期に該当する遺物が出土した遺跡は今のところ発見例が少なく、県内他地域の傾向と同様であるが、榎木原遺跡、榎田下遺跡、前畑遺跡、飯盛ヶ岡遺跡等でわずかながら検出された。

後期になると榎田下遺跡で市来式土器が、中ノ原遺跡で指宿式・市来式・西平式土器が、榎木原遺跡では、岩崎上層式・市来式土器等が出土した。昭和54年の鎮守ヶ迫遺跡の調査では、主として指宿式土器が出土した。なお、柴立遺跡、小薄遺跡は、この時期の遺跡として知られている。

晩期の遺物が出土した遺跡としては、上祓川遺跡群の丸岡・水ノ谷遺跡、宮の脇遺跡、榎木原遺跡、中ノ原遺跡、中原山野遺跡等があげられる。水ノ谷遺跡では加世田式土器の時期に比定される 6 基の円形竪穴居住址や黒川式土器にともなう孔列土器他多くの石器、土器が、検出され、榎木原遺跡で入佐式・黒川式土器を、中ノ原遺跡で入佐式土器を中心として出土した。

上記のとおり、鹿屋市には縄文時代の遺跡が多数存在し、本県における重要な情報提供地域となっている。

弥生時代

水の谷遺跡、榎木原遺跡では前期から中期にかけての資料が検出されている。特に板付Ⅱ式に比定される壺や亀ノ甲式の甕、榎木原遺跡ではさらに西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯を持つ壺などは大隅半島における当時の状況を把握するために大切な資料である。王子遺跡は中期末から後期初頭の大集落として全国に広く知られている。中ノ丸遺跡では中期末から後期初頭にかけて竪穴住居址や円形周溝遺構が検出され、中ノ原遺跡、前畑遺跡でも本時期の遺構、遺物が検出されている。高付遺跡では中期から古墳時代にかけての河内・瀬戸内・東九州地方の影響を考えさせる資料が出土した。

古墳時代

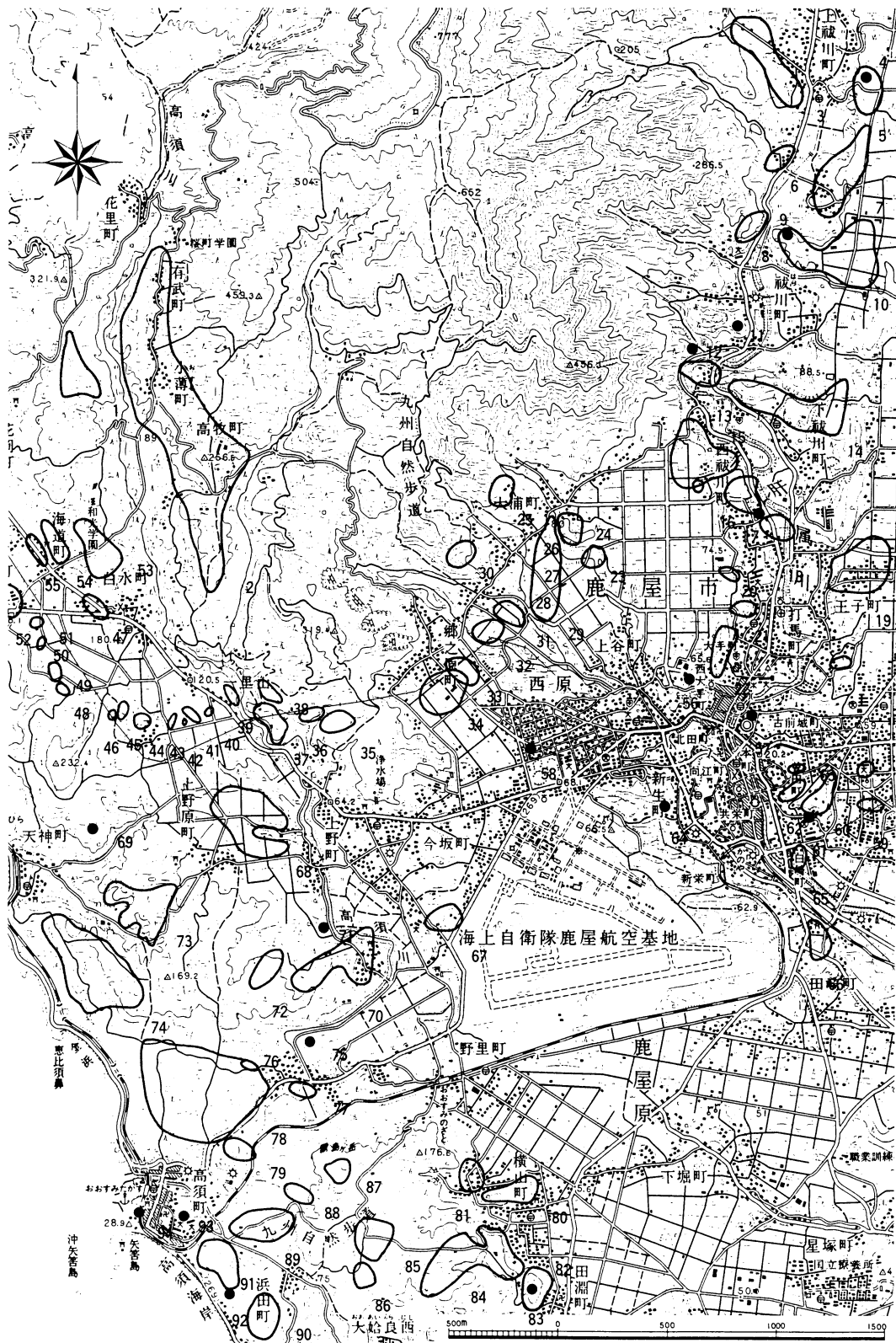
大隅半島の志布志湾沿岸や肝属川流域は、高塚古墳や地下式横穴の本県における分布の中心地となっている。鹿屋地方では、西祓川町の円墳3基と、短甲と衝角付冑が出土した地下式土壙、野里町の円墳3基、岡泉B遺跡の円墳3基、大浦町の地下式横穴が知られる。本時代の生活遺跡としては、成川式土器を主体とした早山・宮の脇遺跡、上原遺跡、俣刈遺跡、鶴羽遺跡等が知られる。

歴史時代

奈良時代から平安時代の遺物が出土した遺跡として、飯盛ヶ岡遺跡、榎崎A・B遺跡、宮の脇遺跡等があげられる。宮の脇遺跡では、青銅製の帯金具が出土し古代官位制を示す貴重な資料として注目されている。中ノ原遺跡では中世から近世にかけて、中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡では近世の遺構、遺物が検出されている。なお、南北朝から戦国時代にかけての山城が多数存在している。

参 考 文 献

1. 土地分類基本調査 志布志湾地域開発地域「鹿屋・志布志」国土調査 1971
2. 鹿屋市史
3. 「全国遺跡地図鹿児島県」文化庁 1975
4. 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(9) 「大隅区域埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県教育委員会 1978
5. 「 (13) 「 」 」 「 」 1980
6. 「 (23) 「 」 」 「 」 1982
7. 「 (25) 「 」 」 「 」 1983
8. 「 (29) 「 」 」 「 」 1984
9. 「 (34) 一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(1) 鹿屋市埋蔵文化財調査報告書(1) 」 鹿児島県教育委員会 1985
10. 「王子遺跡」
11. 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(44) 「榎木原遺跡」
12. 「 (48) 一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅱ) 」 鹿児島県教育委員会 1987
13. 「概要編、榎木原遺跡、中ノ丸遺跡、川ノ上遺跡、中ノ原遺跡(Ⅰ)」 鹿児島県教育委員会 1989
14. 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(51) 「榎木原遺跡Ⅱ」 鹿児島県教育委員会 1989
15. 「 (52) 一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅲ) 」 鹿児島県教育委員会 1990
16. 「中ノ原遺跡(Ⅱ)、中原、山野遺跡、西原掩体遺跡、前畑遺跡」
17. 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(53) 「榎木原遺跡Ⅲ」 鹿児島県教育委員会 1990
18. 鹿屋市埋蔵文化財調査報告書(1) 「上祓川遺跡群(上楠原・水ノ谷・丸岡遺跡)」 鹿屋市教育委員会 1984
19. 「 (2) 「高付遺跡」 」 1984
20. 「 (3) 「俣刈遺跡・鶴羽遺跡」 」 1985
21. 「 (4) 「早山遺跡・宮の脇遺跡」 」 1986
22. 「 (5) 「水の谷遺跡」 」 1986
23. 「 (6) 「岩之上遺跡」 」 1987
24. 「 (7) 「柿窪遺跡・城ヶ崎遺跡・大久保遺跡」 」 1987
25. 「 (8) 「打馬平原遺跡」 」 1988
26. 「 (11) 「大畑平遺跡」 」 1989
27. 「 (12) 「岡泉(Ⅰ)遺跡」 」 1989
28. 「 (14) 「神野牧遺跡」 」 1989
29. 「 (15) 「谷平遺跡」 」 1989
30. 「鹿屋郷土史」鹿屋町教育會編算 1928
31. 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(36) 「鹿児島県市町村別遺跡地名表」 鹿児島県教育委員会 1985
32. 「鹿児島県埋蔵文化財の知識」 1986
33. 「南九州縄文研究通信 No 1」 南九州縄文研究会 1987
34. 「 No 2」 1989
35. 「 No 3」 1990
36. 「 No 4」 1991
37. 日本の古代遺跡38「鹿児島」 河口貞徳著 保育社 1988
38. 秀刊考古学 第34号「相対する旧石器遺跡—鹿児島県榎崎B遺跡・西丸尾遺跡」 鹿児島県教育委員会雄山閣 1991
39. 県史シリーズ46「鹿児島の歴史」原口虎雄著 山川出版社 1973



第15図 周辺遺跡

第1表 周辺遺跡地名表(1)

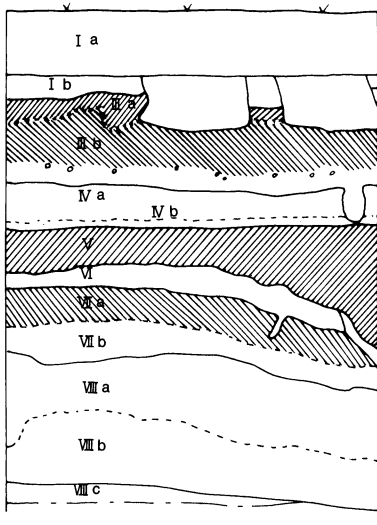
No	遺跡名	所在地	時代	遺物	備考
1	柴立	花岡町柴立	縄(後)	条痕文・メンコ・沈線文	
2	小薄町遺跡群	小薄町・有武町・高牧町	縄(早・前・後)・古		
3	上祇川遺跡群	上祇川・上楠原・丸岡・水の谷	縄(早・後・晩)・弥(前・中)・古・歴	土器片・石器	
4	日ヶ城跡	上祇川町芝原日ヶ城	南北朝・戦国		
5	楠原	上祇川町楠原	古	土器片	
6	芝原	祇川芝原	古	土器片・黒曜石・石斧	
7	大窪	上祇川大窪	縄(後)~古	土器片	
8	山外森	上祇川山外森	古・歴	土器片・石包丁	
9	瀬戸城跡	祇川町瀬戸口	鎌倉・南北朝		
10	石仏頭	中祇川石仏頭	弥・古	土器片	
11	長谷城	祇川長谷	鎌倉~戦国		
12	鹿屋一谷城跡	西祇川町一ノ谷	南北朝初期~戦国		
13	中野	祇川	弥(中)・古	土器片・石斧	
14	堀之牧遺跡群	中祇川町堀之牧	弥(中)・古	土器片	
15	神野牧	西祇川町神野牧	縄(前・後・晩)	土器片・石器・石匙	
16	葉師堂の古墳	西祇川町下中原前	弥(後)・古	成川	円墳3基
17	西祇川地下式土壇	西祇川町井之上	5世紀半ば以前(推定)	短甲・衝角付冑	出土品のみ県指定 昭41・3・31
18	西祇川	西祇川町	縄~古	土器片	
19	王子	王子町王子	縄・弥(中)・古	土器片	中期集落跡
20	打馬	打馬町	古	土器片	
21	平原古墓	打馬町平原		5基の墓石と五輪塔一基	
22	打馬平原	打馬町平原	縄(早)・弥・近	土器片・石器	近世墓2基
23	榎田下	大浦町榎田下	縄(前・後)		
24	大浦	大浦町	縄(早)・古	縄文土器	地下式横穴
25	耳取ヶ丘	大浦町耳取ヶ丘		土器片	
26	並松	大浦町並松	縄	石斧	
27	コラヶバツケ	大浦町コラヶバツケ	縄	土器片	
28	中ノ原	大浦町中ノ原	縄		大8・京帝大発掘
29	中ノ原	大浦町中ノ原	縄(前~晩)・弥(中)~近世	土器片・石器	
30	郷之原	郷ノ原	縄・古	土器片・石器	
31	中ノ丸	大浦町中ノ丸	弥(中)・近世		
32	川ノ上	大浦町松橋川ノ上	近世		供養塚2基
33	中原山野	郷ノ原町中原山野	弥(中)		
34	前畑	郷ノ原町前畑	縄・弥(中)		
35	飯盛ヶ岡	上野町飯盛ヶ岡	縄・弥・古・平		63・元年調査
36	榎崎A	郷ノ原町榎崎	旧・縄・平		本報告書
37	高橋	上野町	弥・古	土器片	
38	榎崎B	郷ノ原町榎崎	旧・縄・平		2・3年調査
39	西丸尾I	白水町西丸尾	旧・縄~平		本報告書
40	西丸尾II	白水町西丸尾	縄(早)	前平式・下剝峯タイプの土器・叢石など	3年確認調査
41	白水A	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
42	萩ヶ峯A	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
43	萩ヶ峯B	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
44	白水B	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
45	山ノ上A	小野原町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
46	山ノ上B	小野原町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
47	宇戸平	小野原町	縄(早)	塞ノ神式	古江バイパス分布
48	千場	白水町	縄(晩)	土器片	

第2表 周辺遺跡地名表(2)

No	遺跡名	所在地	時代	遺物	備考
49	石鉢谷 A	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
50	石鉢谷 B	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
51	古里 A	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
52	古里 B	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布
53	古里	古里町花岡中敷地	縄(後)・弥・古	土器片	
54	侯	海道町侯刈迫	縄(早・後・晩)古	成川式他	
55	本戸	海道町本本戸	縄(前)・古		
56	枯木ケ尾	古里町枯木ケ尾	弥・古	須恵器・成川式	
57	鹿屋城跡	北田町	鎌倉初期～南北朝		
58	古前城跡	古前城町	鎌倉中期～南北朝		
59	久恵城跡	西原町	南北朝初期～戦国		
60	寿六丁目	寿	古	土器片	
61	白崎	白崎町	古	土器片	
62	白崎城跡	白崎町	南北朝・戦国		
63	曾田	曾田町	古	土器片	
64	寿三丁目	寿	古	土器片	
65	鹿屋古城跡	新生町	南北朝初期	弥生土器	完消
66	高付	白崎町弥生団地	弥(中)～古	土器片・石包丁	
67	老神	田崎町老神部落	歴		
68	野里小西	野里町	縄(早・前)・古	土器片	
69	小野原	小野原町	古・歴	土器片	集落遺跡
70	荒平城跡	天神町	南北朝・戦国		
71	大津	野里町	弥・古	土器片	
72	野里城跡	野里町	戦国		
73	大畑平	野里町	縄～古	石坂式ほか	
74	丸岡	小野原町	古・歴	土器片・鉄滓	
75	天神	天神町	古	土器片	
76	小牧城跡	野里町岡泉	南北朝・戦国		
77	野里の古墳	野里町1,826の1	古		円墳3基
78	岡泉	野里町岡泉	縄～歴	土器片	
79	岡泉 B	野里町岡泉	弥・古	土器片	円墳3基 昭和63年度調査
80	岩之上	高須町岩之上	縄	石坂・吉田式	
81	横山 2	横山町	古	土器片	
82	横山 1	横山町	古	土器片	
83	岡元	横山町岡元	弥・古	土器片・石斧	
84	横山城跡	横山町横山	南北朝・戦国		
85	横山 3	横山町	古	土器片	
86	谷平	横山町	縄(早)・古	土器片	居住址
87	松の岡	横山町松の岡	古・歴	土器片	居住址 昭和24年調査
88	霧島ケ丘	霧島ケ岡公園	縄	吉田・塞ノ神A式	昭和59年以降調査
89	キタバイ	高須町キタバイ	弥(後)・古	土器片・石器	
90	立神	高須町立神	縄(後・晩)・古・歴	土器片・青磁・石斧	
91	下西原	浜田町下西原	弥・古・歴	成川式・青磁	
92	榎木原・掛平	高須町榎木原	縄・歴	土器片	居住址
93	浜田城跡	浜田町	南北朝・戦国		
94	高須古城跡	高須町高須	南北朝以降		
95	高須城跡	高須町高須	南北朝・戦国		

第IV章 層 序

榎崎A遺跡の層序は、最も安定した区域（C-8区）を指標に層位的特徴を説明する。



(C-8区)

I層——黒褐色砂質土の表土層である。

I a層 層中に微量の木炭やアカホヤを含む。下部には大正3年の桜島の噴火による火山灰が確認できた。

I b層 旧耕作土

II層——黒色砂質土。

III層——アカホヤの2次堆積層で、池田降下軽石を境に上下2層に分離した。

III a層 暗黄褐色火山灰土。部分的に開聞岳噴火による紫ゴラが確認され、平安時代の土師器を出土する遺物包含層である。

III b層 褐色火山灰土。下部には池田降下軽石がブロック状に堆積し前後した位置に縄文前期～晩期の遺物が出土した。

IV層——黄褐色火山灰土。喜界カルデラ起源のアカホヤ火山灰に相当する。

IV a層 明黄褐色火山灰層。

IV b層 粒の粗い明黄褐色火山灰層。

V層——青灰色火山灰土。権現山火山灰に相当し、縄文早期の遺物包含層である。

VI層——黒褐色有機質土。薩摩火山灰と呼ばれる層である。

IV a層 径1mm前後の安山岩粒を含む。

IV b層 オレンジ色のパミスを含む。

VII層——暗茶褐色ローム層。通称チョコレート層と呼ばれる。

VII a層 安山岩粒を含み、旧石器時代遺物包含層である。

VII b層 a層より若干色調は暗い。無遺物層である。

VIII層——始良カルデラ起源の火山灰層で3層に区分出来た。

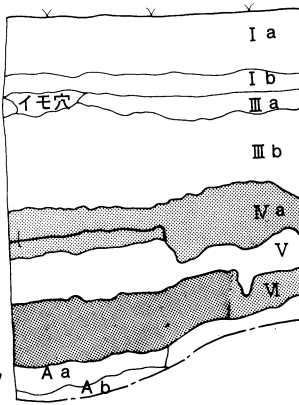
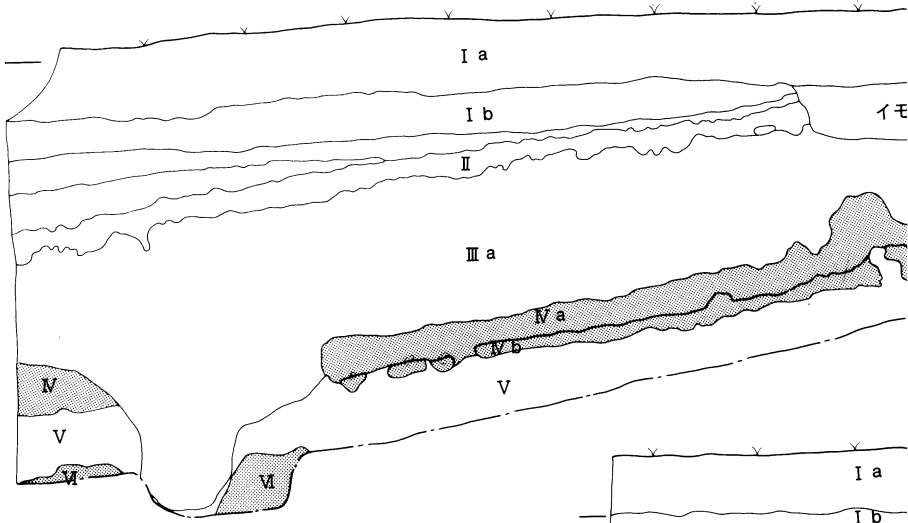
VIII a層 茶褐色粘質土。ヌレシラスで非常に硬い。C-6区では硬質の褐色粘質土がブロック状にみられた。また、径5mm前後の自然礫（溶岩状安山岩、花崗岩）や花崗岩風化様マサエ（石英粒）を多く含む。

VIII b層 a層よりも白っぽい茶褐色粘質土。

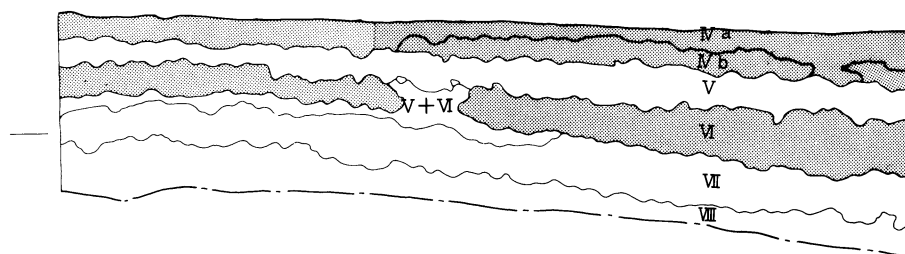
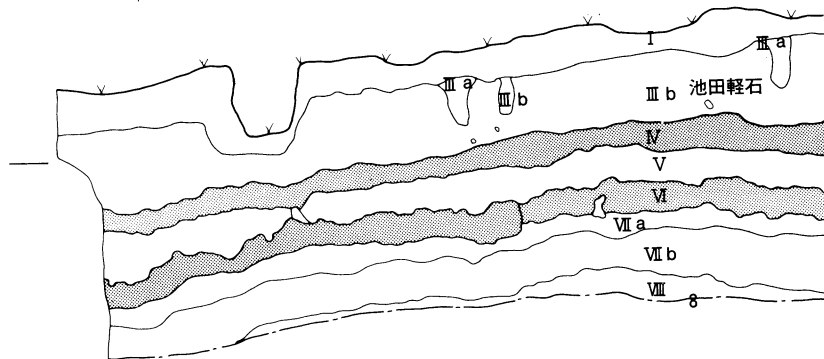
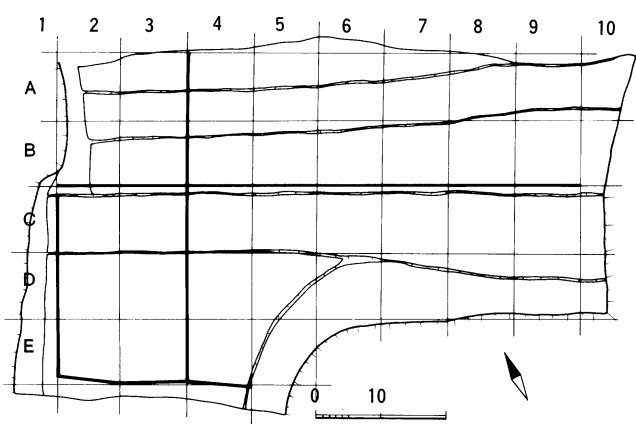
VIII c層 大隅降下軽石。

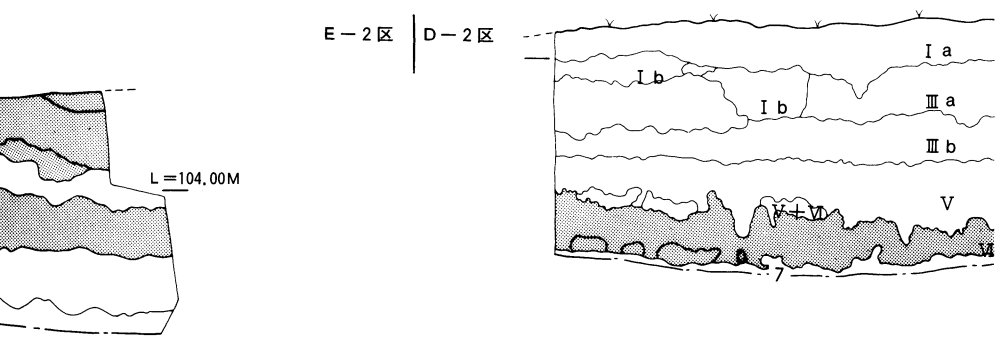
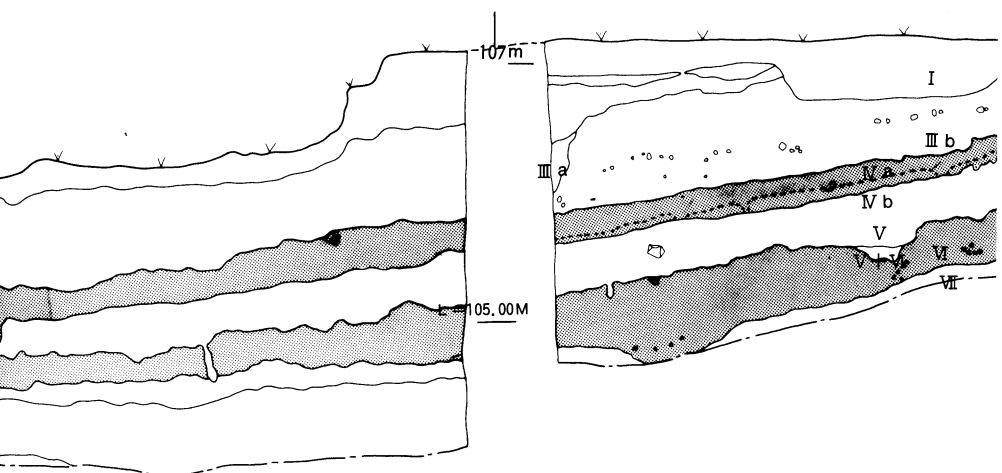
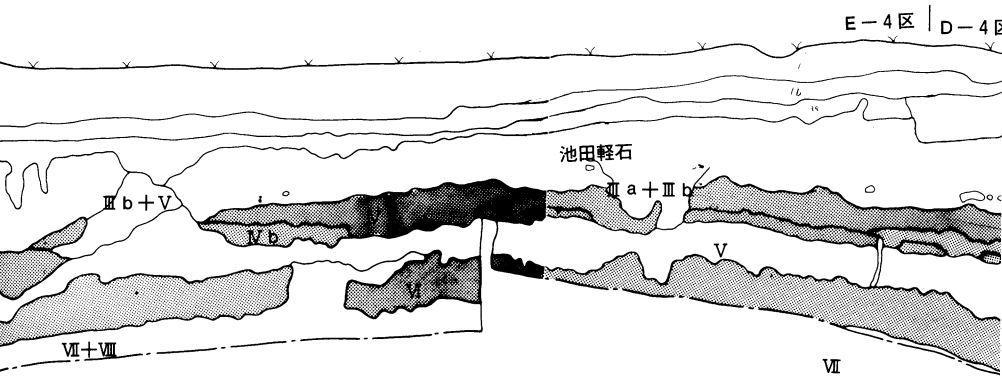
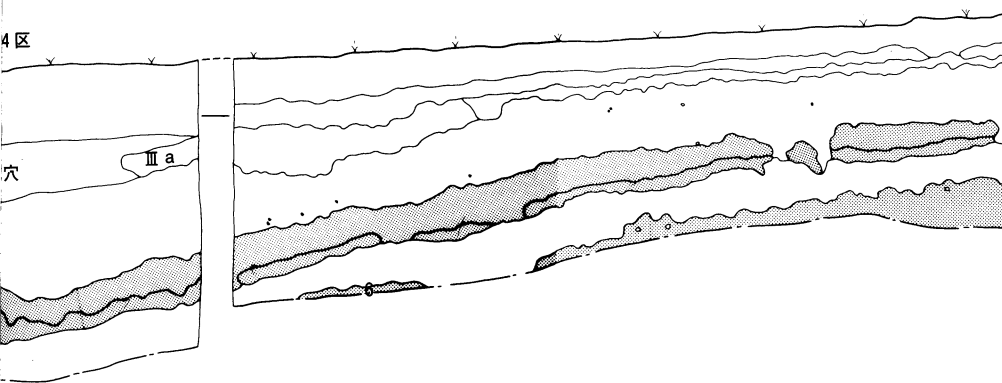
第16図 層 序

F-4区 | E-

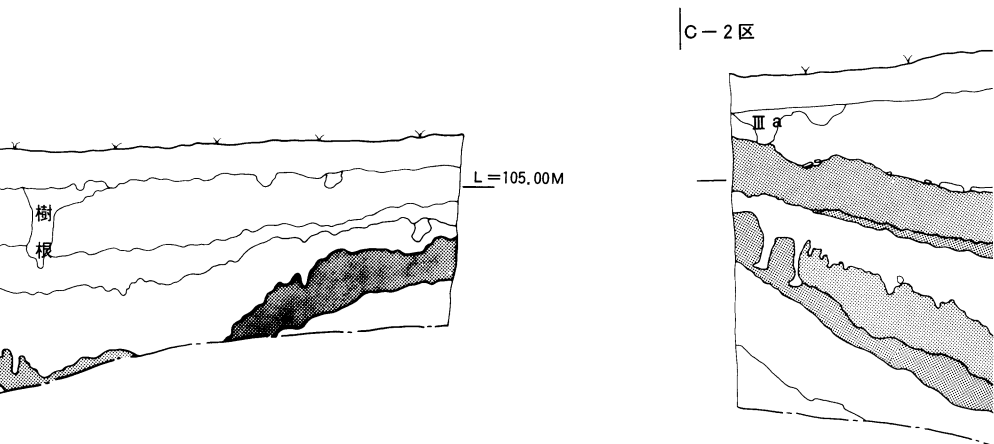
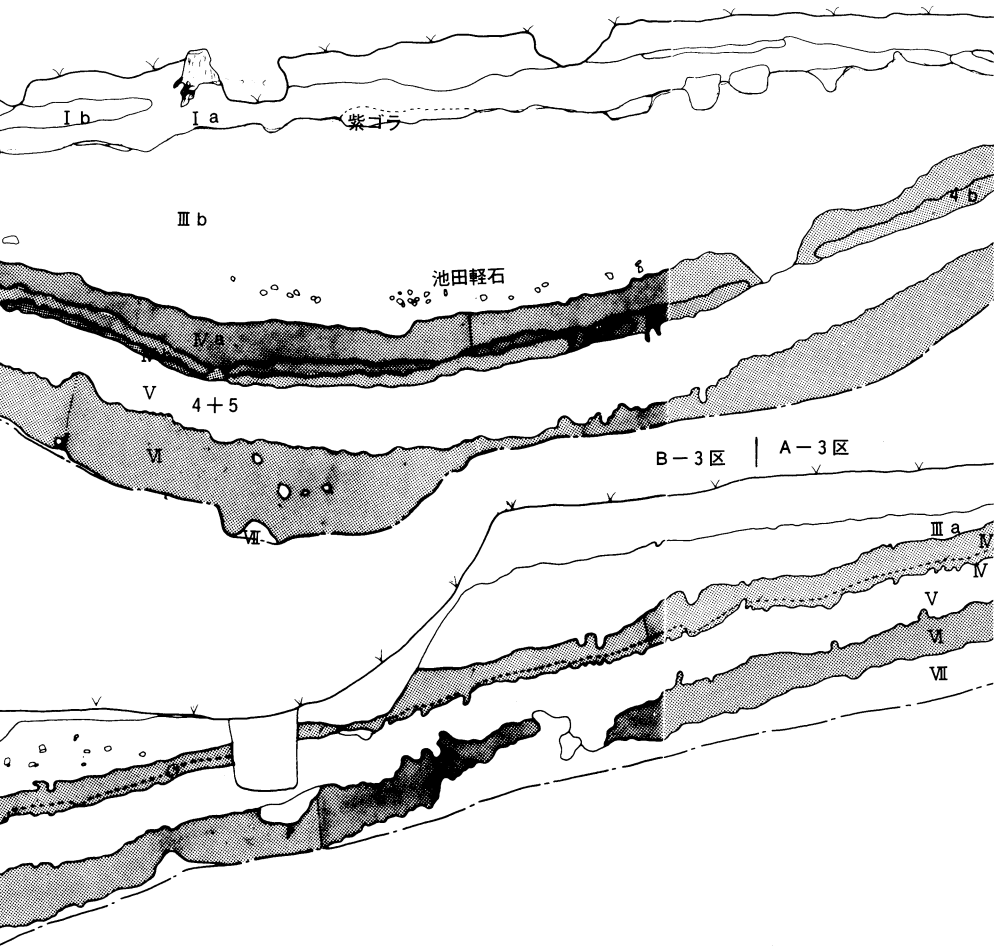
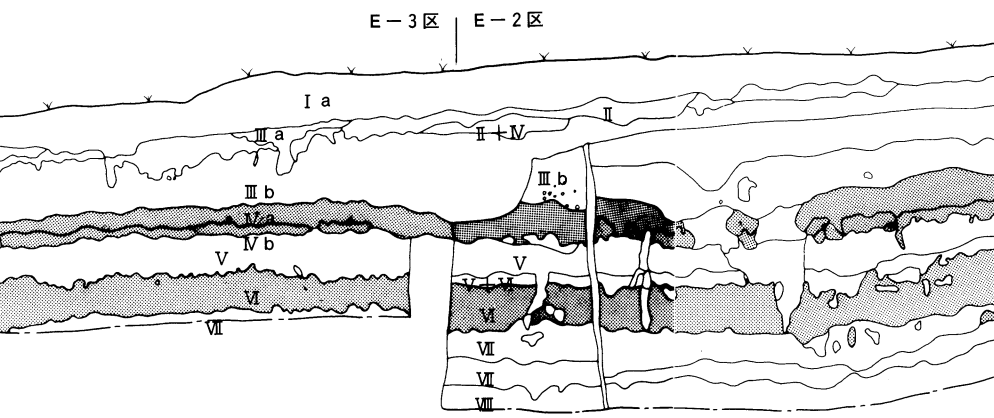


A a : 暗灰褐色土
 A b : A aの明るいもの

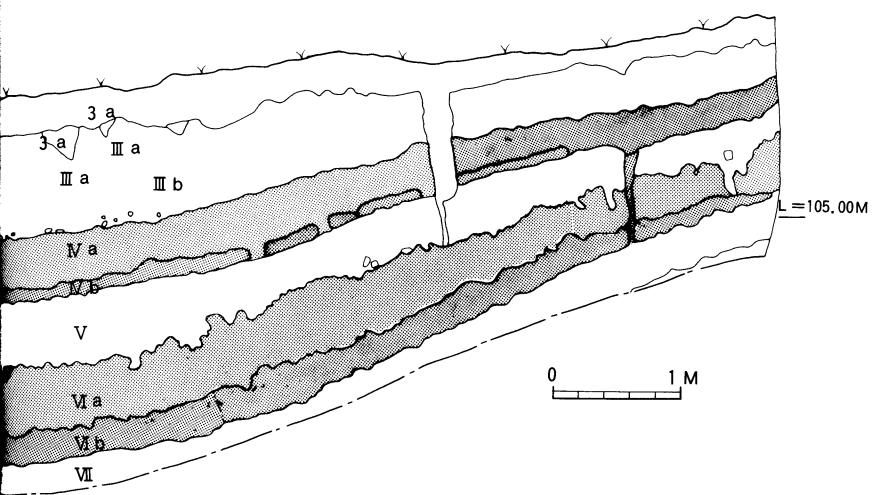
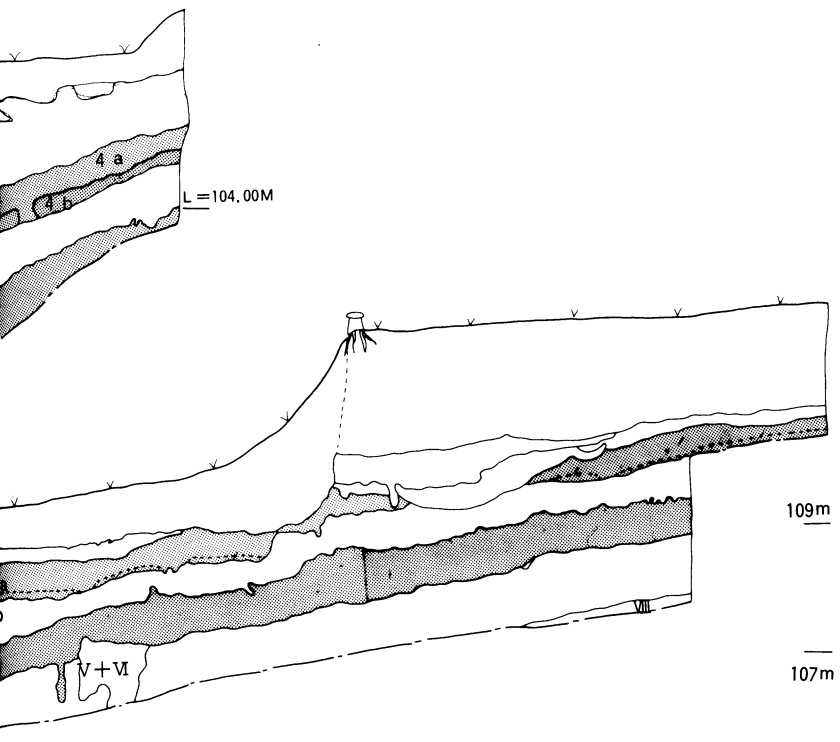
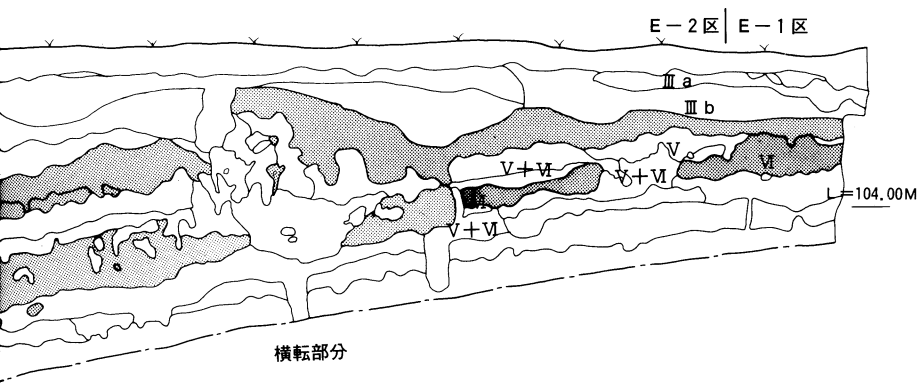


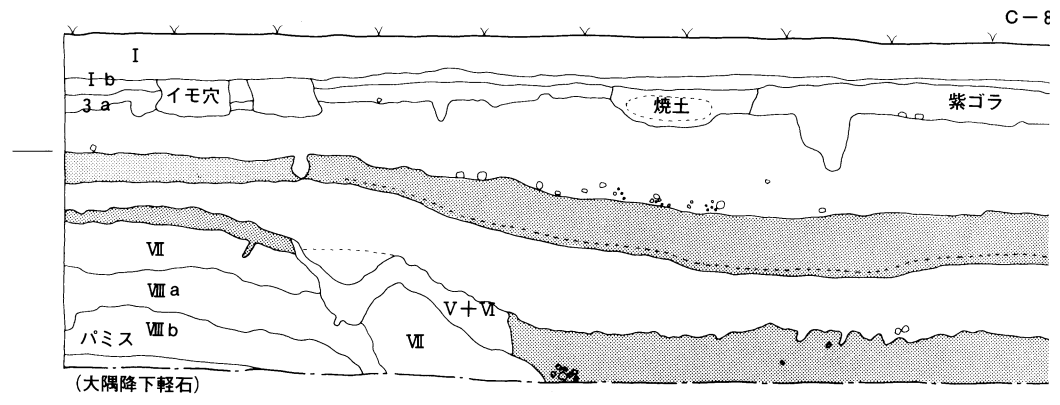
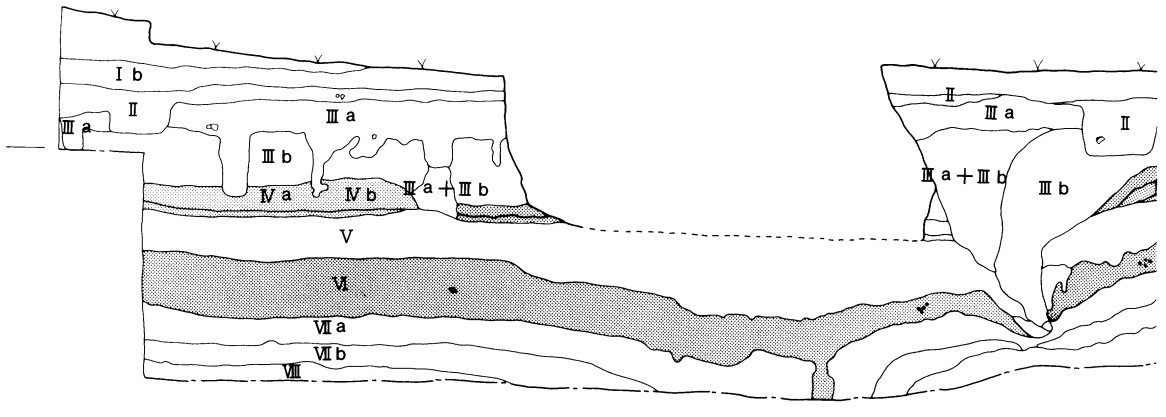
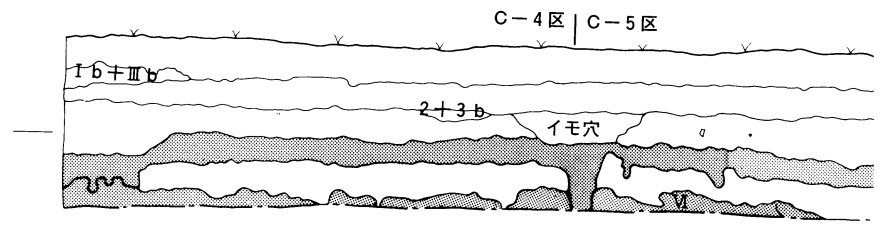
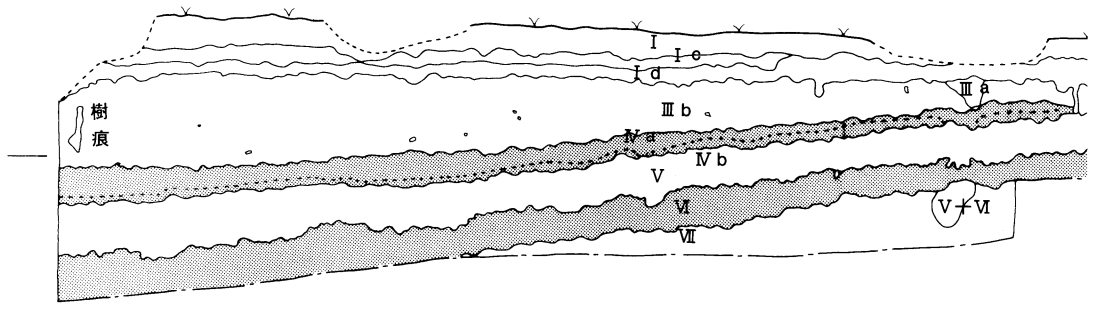


第17図 土層図

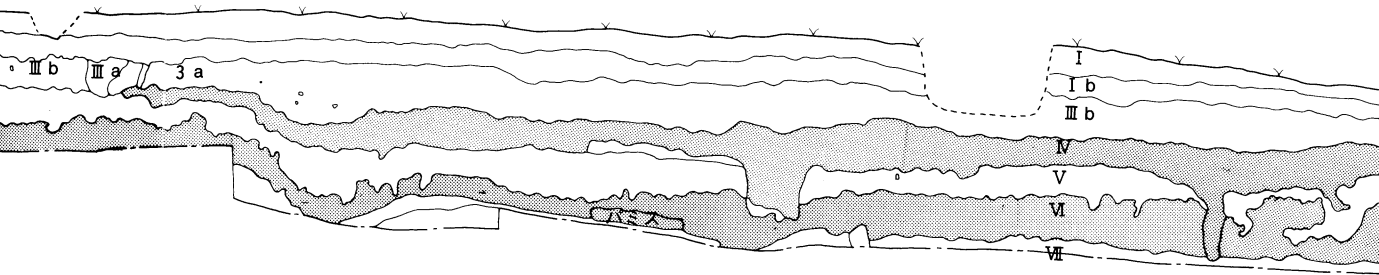


断面図 (1)

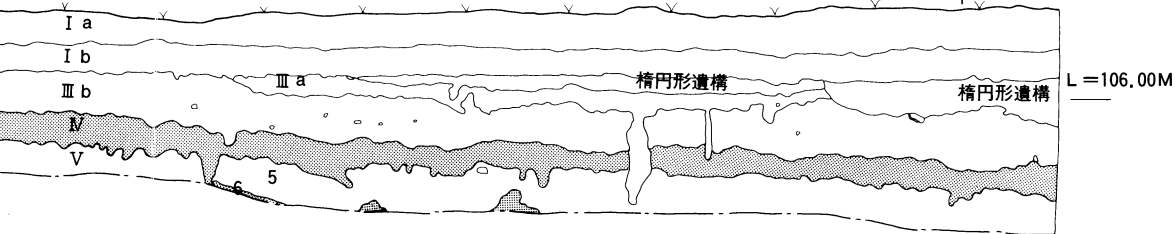




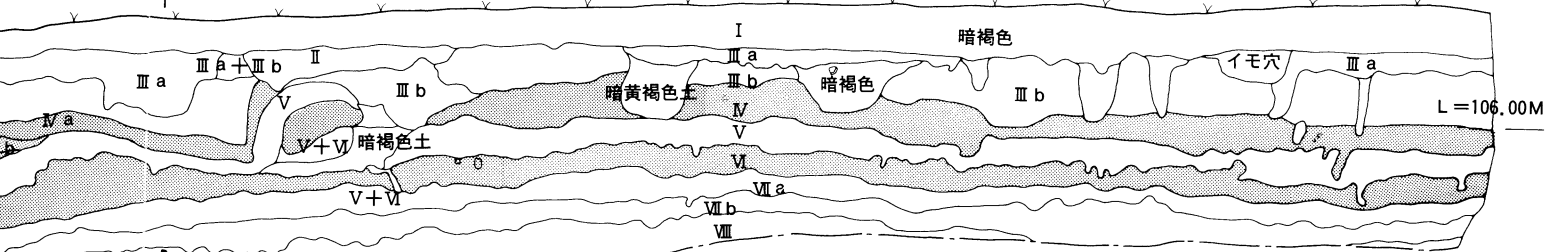
B-3区 | B-2区



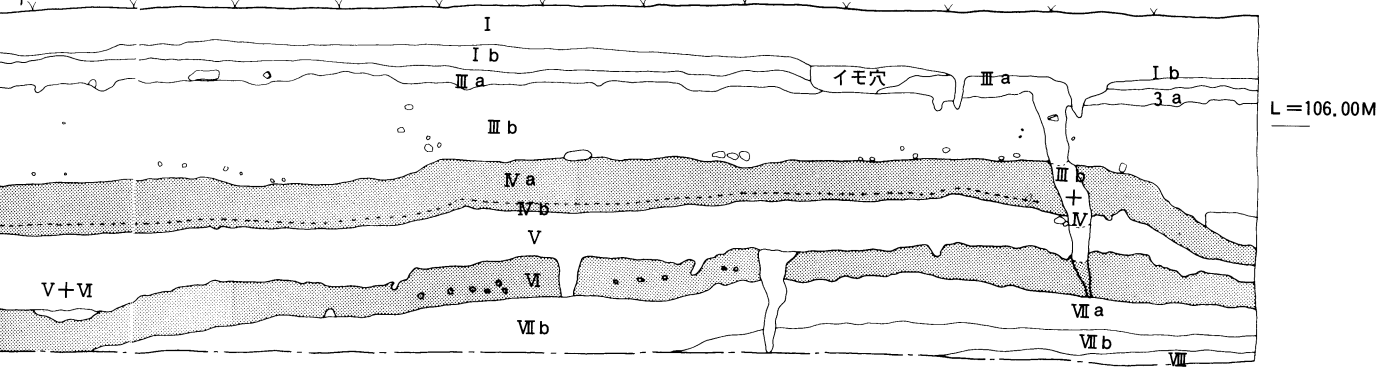
C-5区 | C-6区



C-6区 | C7区



区 | C-9区



第18図 土層断面図 (2)



第V章 旧石器時代

第1節 調査の概要

調査の概要と調査の方法

旧石器時代の調査は、上層の平安時代～古墳時代、縄文時代の調査終了後にC-1区、D-1区、E-1区～E-3区を対象に実施した。緊急発掘調査前に実施した確認調査は縄文時代早期の遺物包含層であるV層までを確認し、VI層以下の掘り下げを実施していなかった。そのため、今回の調査では旧石器時代の遺物包含層の存在は予測しておらず、旧石器時代の調査対象区を限定せざるを得なかった。調査対象区は周囲の区に比べて微高地になっており、C-2区は東方向に、D-2区は東北方向に、D-3区は北方向に傾斜して低くなり、谷状の地形が形成されている。これらの谷状の部分については、調査を実施していない。調査方法は部分的には1mごとの小グリッドを設定して、慎重に掘り下げたが、水簸等の方法を実施しなかったため、脱漏した遺物があることが予測される。

縄文時代早期の遺物包含層（V層）の下には無遺物層であるVI層（サツマ火山灰層）がほぼ全域にわたって検出される。旧石器時代の遺物はVI層の下にあるVII層（暗茶褐色粘質ローム層＝いわゆるチョコ層）に包含されている。VII層は調査対象区の微高地部分では、薄く堆積していた。

遺物は細石器文化に属するもので、479点出土した。遺物の種類は細石刃と細石核のほかに、石核、剥片、削器、搔器類、ハンマーストーン、石斧、礫器などである。これらの遺物の中にはナイフ形石器文化に属すると思われるような石器が数点出土しているが、VII層の堆積自体が薄いため、厳密な分層は困難であった。

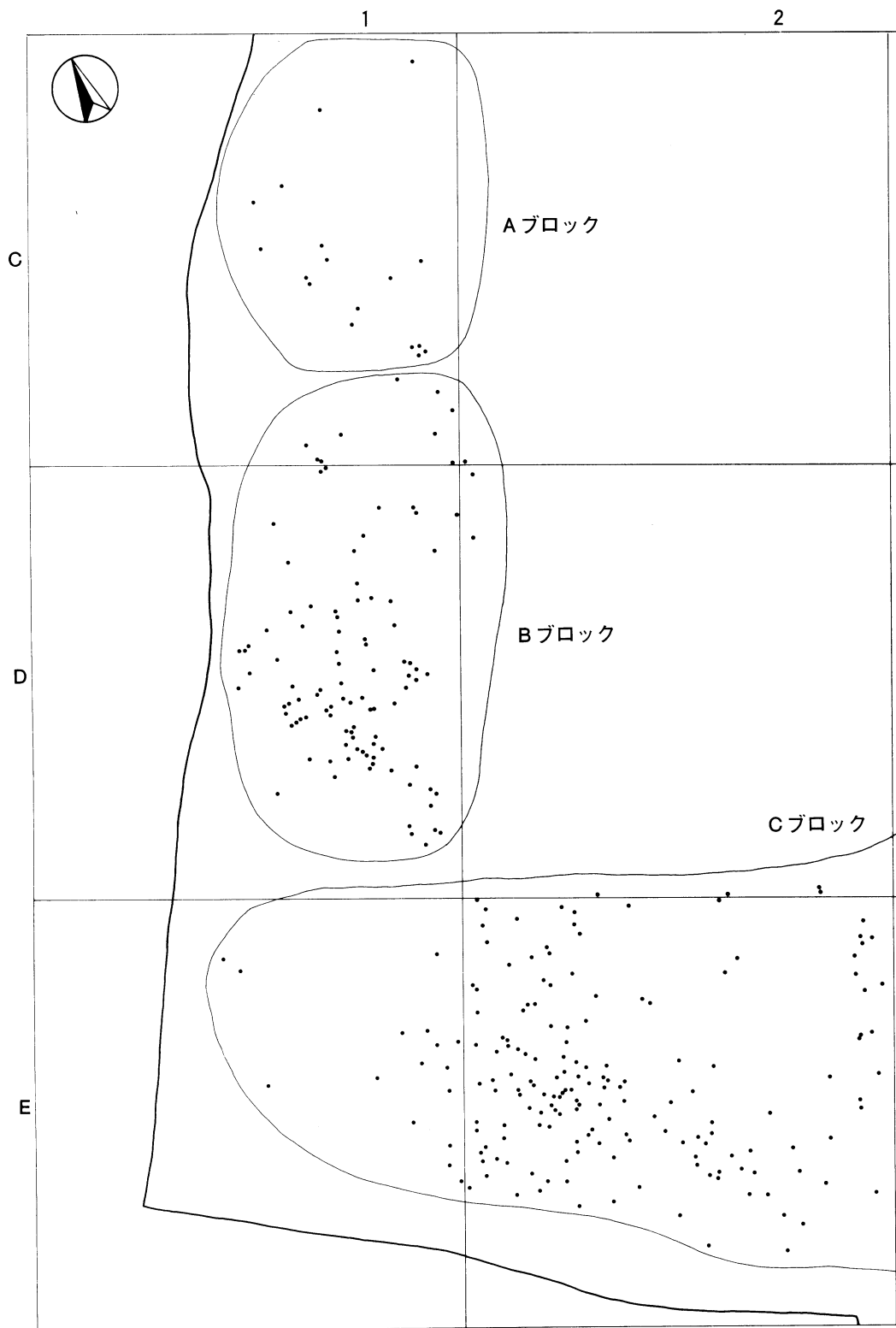
遺物の出土状況（第19図、第20図）をみるとC-1区、D-1区、E-2区に遺物が集中していることがわかる。C-1区を中心とする一群をAブロック、D-1区を中心とする一群をBブロック、E-2区を中心とする一群をCブロックとしてとらえた。

Aブロックでは細石刃が出土しているものの、細石核が1点も出土していない。また、黒曜石製の遺物に比べて、石英製の石核や剥片などの遺物が卓越する特徴がみられる。

Bブロックとしてとらえた遺物の一群はD-1区を中心とするが、一部はC-1区にも分布している。Bブロックの石英・水晶の遺物は7点と、きわめて少数で、黒曜石製の遺物が主体である。遺物は細石刃、細石核、剥片類などのほかに石斧が4点出土している。

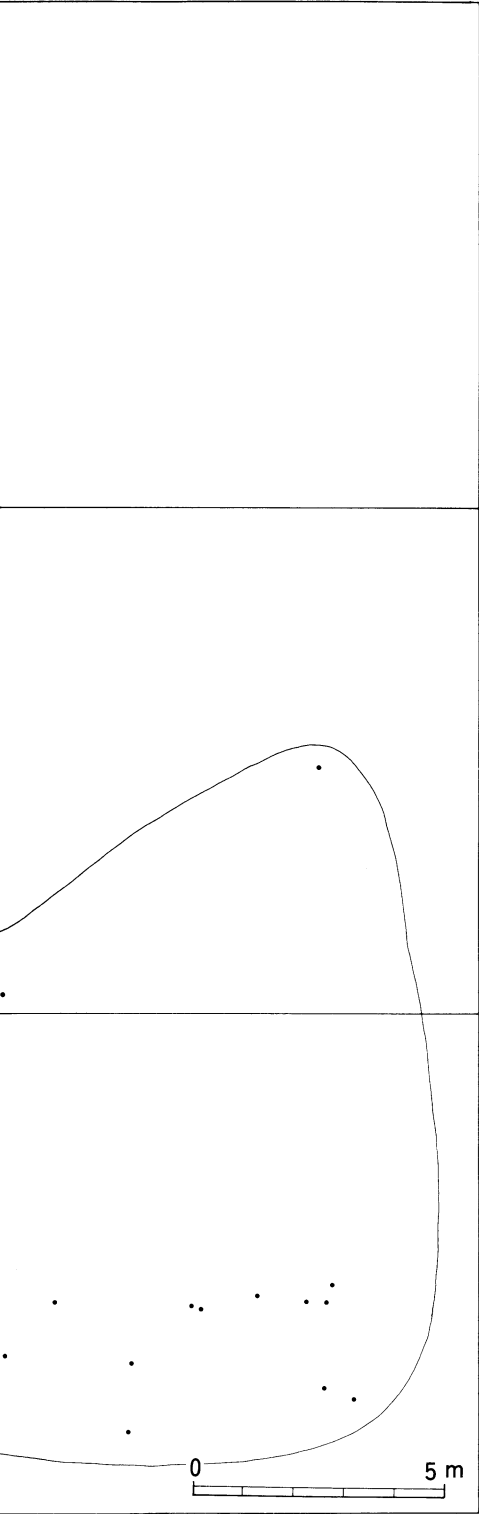
CブロックはD-3区、E-1区～E-3区という広い範囲にわたっているが、遺物はE-2区に集中している。細石刃、細石核、削器、搔器、剥片類のほかにハンマーストーンなどが出土している。これらのなかには、水晶製の細石核が1点含まれる。

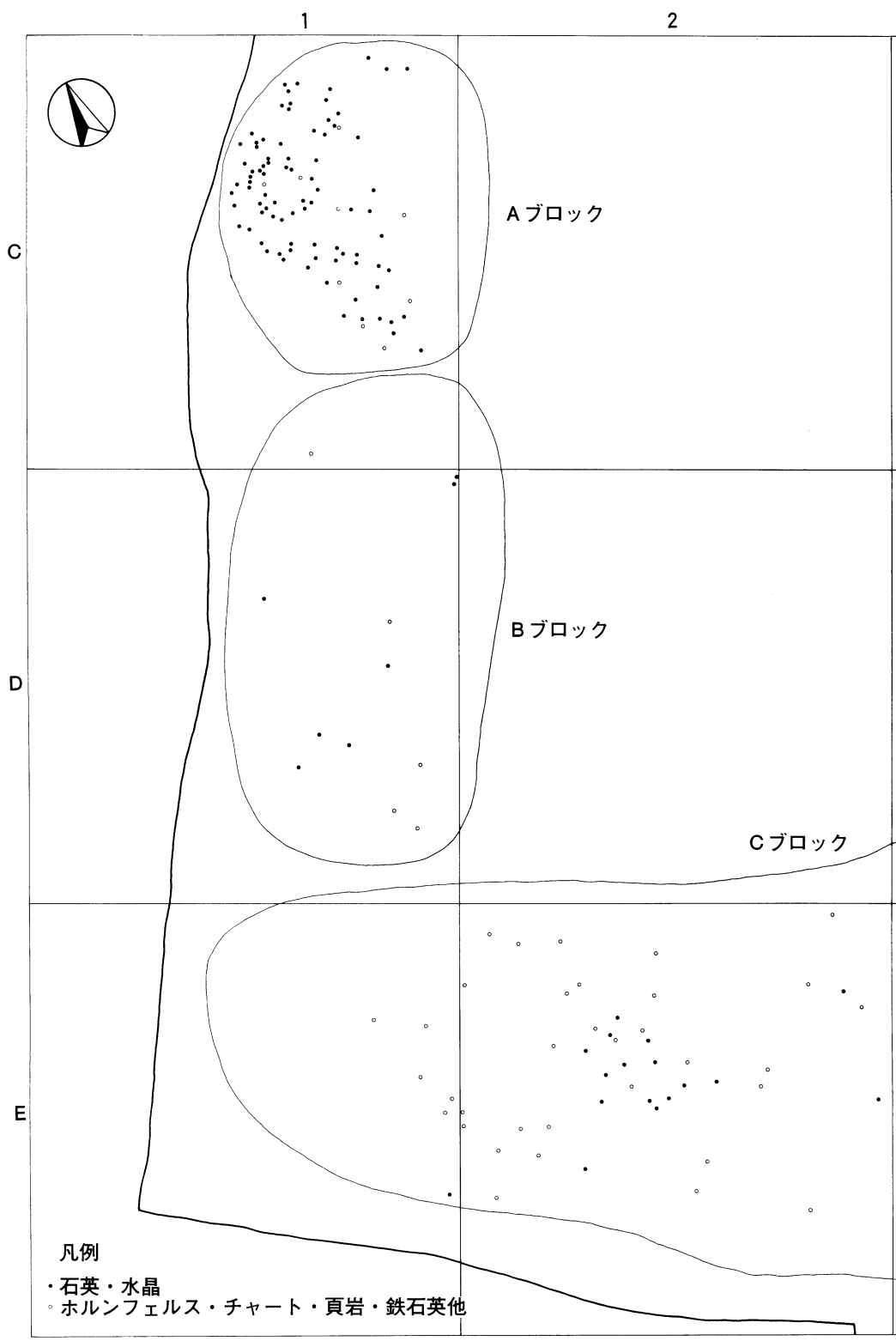
遺構としてはD-5区～E-5区にわたって所在する礫群が1基検出された。



第19図 VII層遺物出土状況1 (黒曜石)

3





第20図 VII層遺物出土状況2 (水晶・石英他)

3

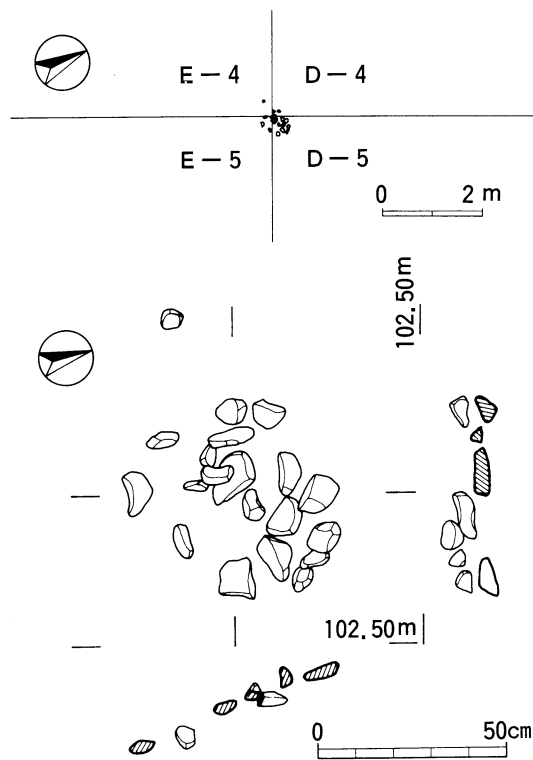


1 遺構

礫群 (第21図)

D-5区～E-5区に検出された。当初はV層の縄文時代早期の集石遺構であると思われた。礫は径55cm×60cmのほぼ円形のプランで検出され、1個だけがやや離れている。ほとんどが角礫で構成され、火を受けた様子はみられない。礫の総数は20個であり、15cm程度の石が主体であった。礫群の下部に堀込みは確認されなかった。礫群はⅦ層中で検出され、礫群の下にはⅧ層(シラス層)が検出された。

礫群の検出されたのは摺り鉢状になった窪地の一番低い部分であり、周囲には遺物の出土はみられず、礫群自体も火を受けた痕跡が観察されないなど、人工的な遺構であるということを積極的に判断する状況は乏しいものである。



第21図 礫群の位置及び検出状況

2 出土遺物

(1) Aブロック遺物出土状況 (第22図、第23図)

AブロックはC-1区を中心とする遺物の一群である。ブロックの中心部分が一番高くなり、北西方向と南東方向に行くに従い、傾斜している。遺物は、4m×6mの東南方向に長い楕円形に広がる分布状況を示す。

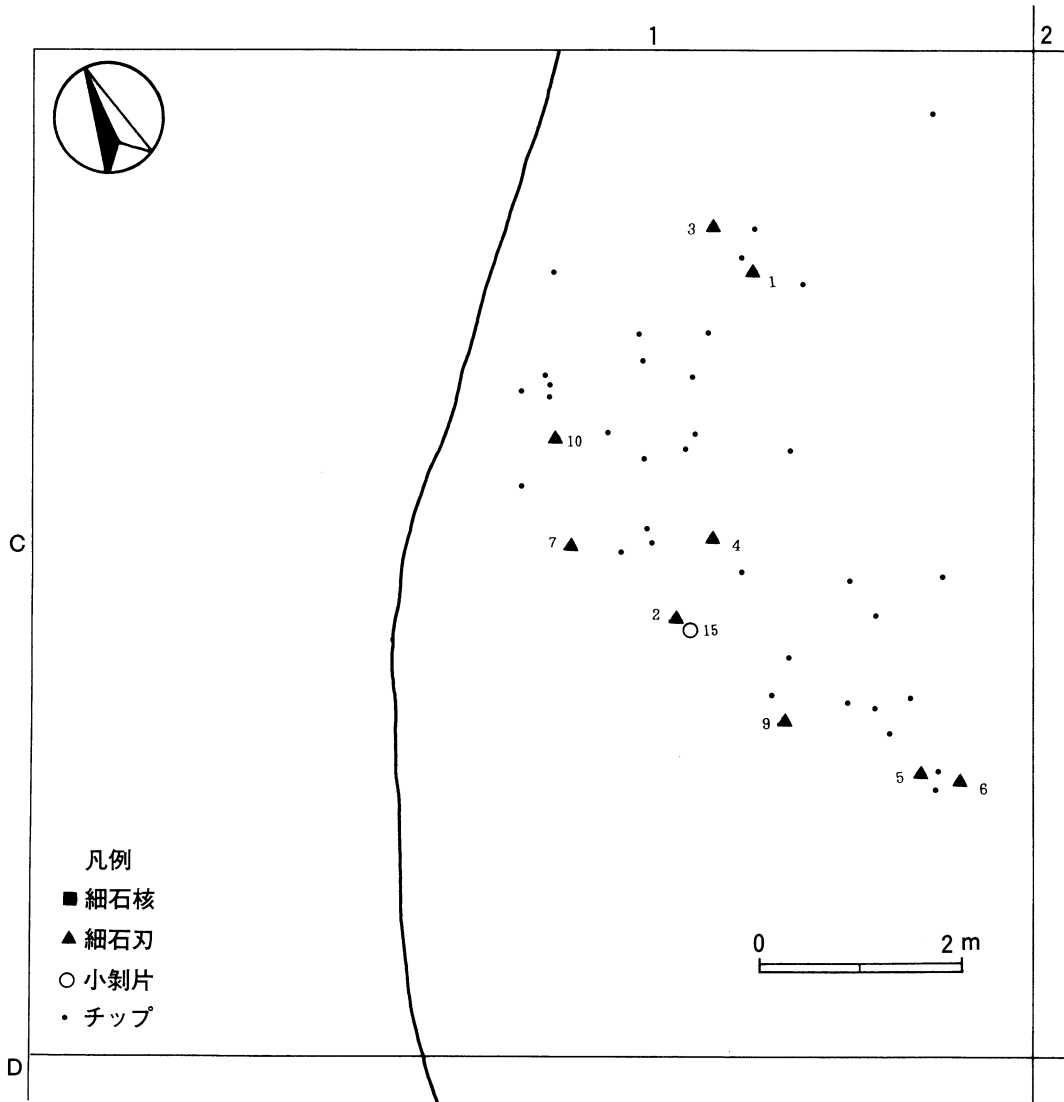
出土遺物の特徴は総数117点の出土遺物の内で、石英遺物が84点と総数の71.8%を占め、黒曜石の23点やその他の石材の10点より突出しているという点が指摘できる。石英遺物は石核、剥片がほとんどで、剥片を二次加工した遺物は3点認められただけであった。このブロックの中心をなす石英遺物が他の石材の遺物と時代差があるかどうか問題である。層位的には同一であり、遺物の出土するレベルにもばらつきが認められ、他の石材の遺物との前後関係を認めることは困難であった。

細石器文化の代表的な遺物である細石刃は10点出土しているが、細石刃を剥離した細石核は1点も出土していない。削器が3点、抉入石器が1点出土している。その他に礫器が1点出土した。礫器は隣接した西丸尾遺跡でも細石器文化の遺物とともに多数出土している。本遺跡全体で1点しか出土していないのは、普通の礫と判断されてしまった可能性が大きい。また、台石やハンマーストーン等の石器を製作する時に使用される石器類は出土していない。

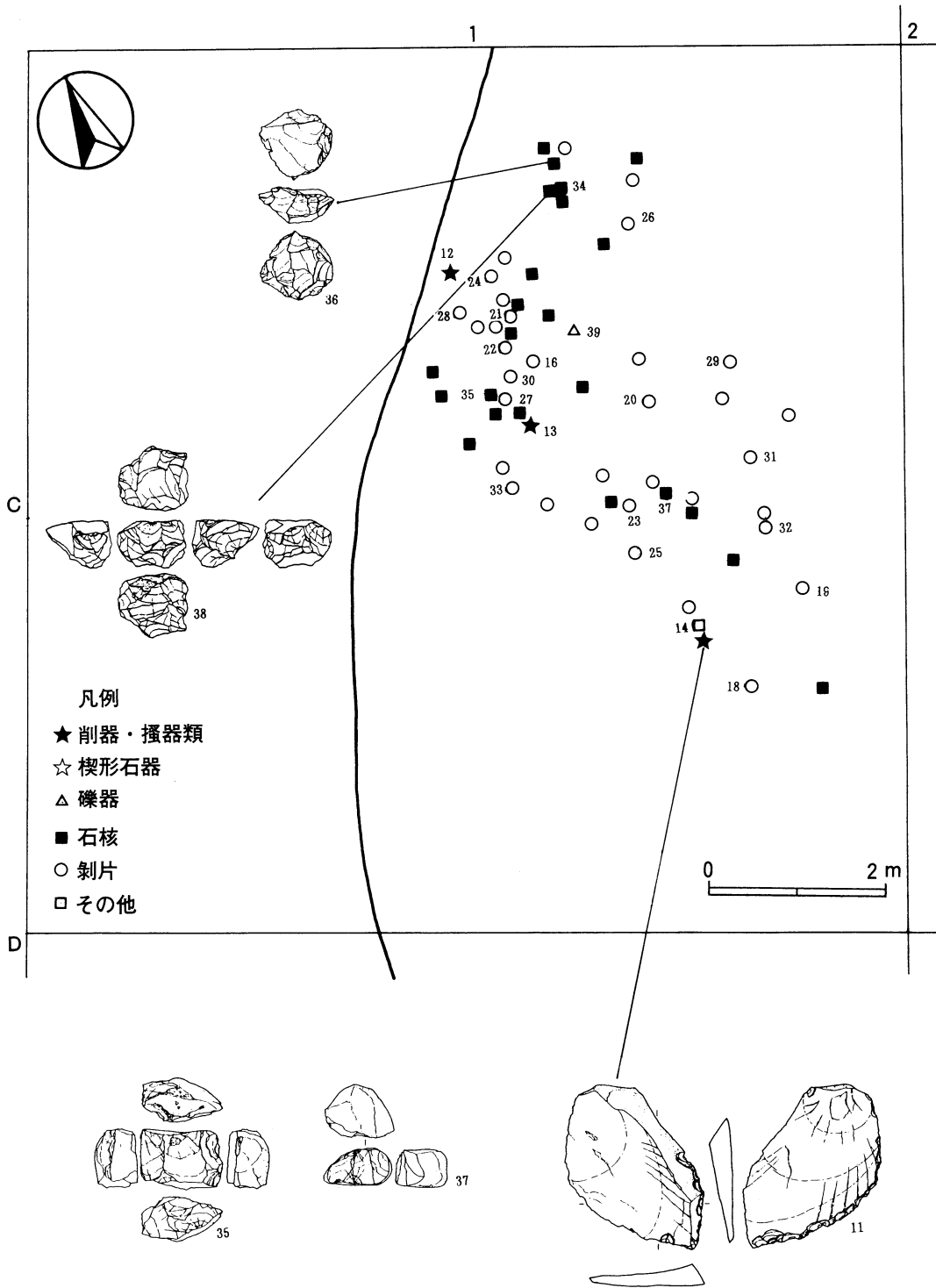
細石刃 (第24図-1~10)

細石刃は10点出土した。ブロック全体にまんべんなく出土する分布状況を示している。石材は1点(1)の他はすべて黒曜石を使用している。完形品は認められず、頭部~中部が6点、中間部が3点、中間部~尾部が1点という構成である。

1は青灰色の頁岩を素材とするものである。側縁部には使用痕が観察される。2は背面に作業面調整時の剥離面を残すものである。3は背面に2面の剥離面が認められるが、自然面が残っている。石刃剥離の早い段階のものか、細石核の右端の部分で剥出されたものである。4も同様に背面に自然面を残すものである。側縁部には顕著な使用痕が認められる。5は点状の打面を持つ、頭部の細い細石刃である。



第22図 Aブロック遺物出土状況1 (細石器他)



第23図 Aブロック遺物出土状況2

削器 (第25図-11~13)

3点が出土した。

11はブロックの最南端に近い部分から出土している。頁岩のやや楕円形に近い剥片の周縁部に細かい剥離を加え、刃部を作出している。打面は自然面であり、背面にも自然面を残している。12は石英の剥片を素材とするものである。腹面は石英の節理面である。背面から腹面方向への剥離によって刃部を作出する特異な作成方法である。13は石英のやや縦長の剥片を素材とする。右側縁部に腹面からの剥離を加えることによって刃部を作出している。

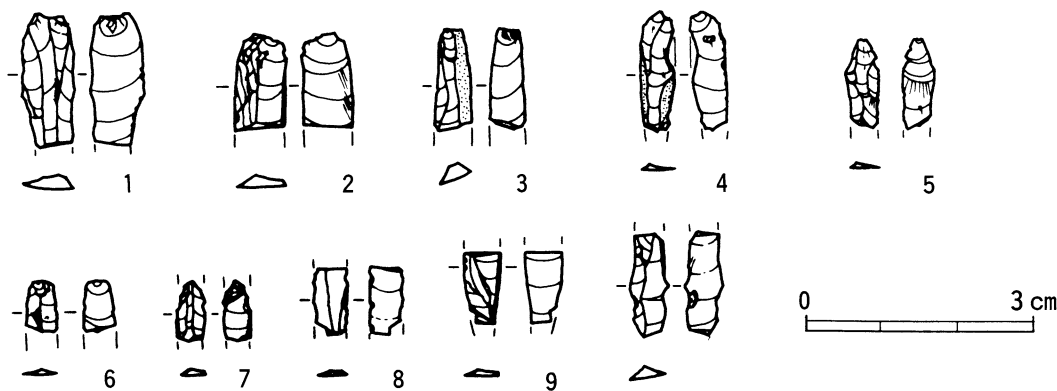
抉入石器 (第25図-14)

ブロックの最南端に近い部分から1点出土した。素材は石英の横長の剥片である。剥片の先端部に調整剥離を加えることにより、抉り入り部を作出し、刃部とするものである。

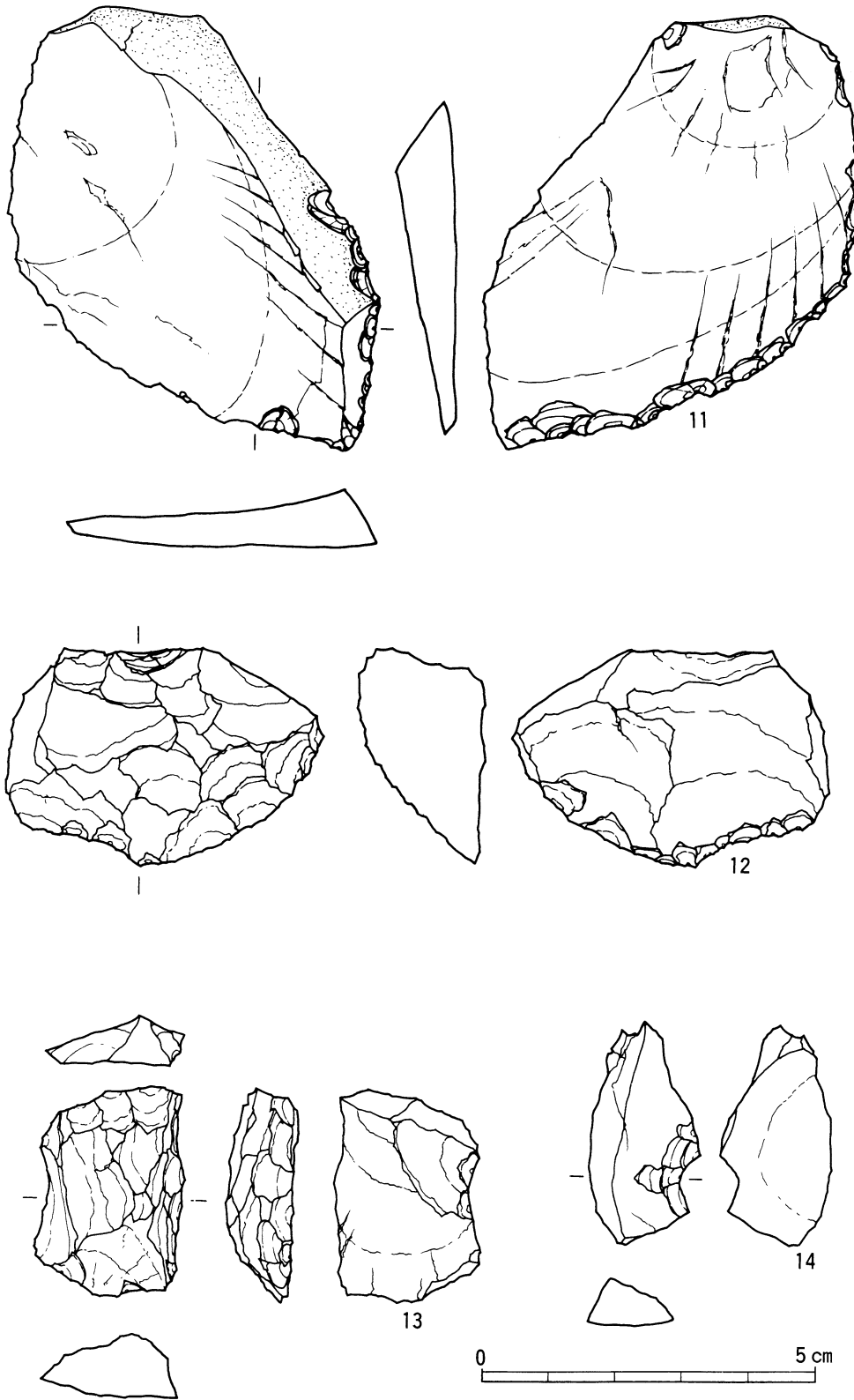
剥片 (第26図-15~23・第27図-24~32・第28図-33~34)

剥片は総数で39点出土した。石材は石英が27点、黒曜石が5点であり、石英が卓越していることを指摘できる。20点を図示した。

15は細石刃の作業面調整剥片である。背面には自然面が残っている。20、21、23は横長の剥片である。これらの横長の剥片が何を目的として剥離されたものであるかは、二次加工を施された製品が出土していないために明確でない。24~32は石英のやや小型の剥片である。これらの一群の目的としたものも先に述べた削器と抉入石器の3点以外に製品が認められないことから、明確に指摘できないが、剥片縁辺部をそのまま刃部として使用していたということが想定される。しかしながら、使用痕の観察はほとんど不可能であり、それは石英という石材の特性に起因している。石英は剥離に際して、節理面にそった割れや、砕けが生じやすいためである。33は大型の石英剥片である。剥離に際して、節理面で大きな割れを生じている。34も同じく、石英の大型剥片である。背面に複数の先立つ剥離面が認められるが、剥片縁辺部には二次的な剥離は観察されない。



第24図 Aブロック出土遺物1 (細石刃)

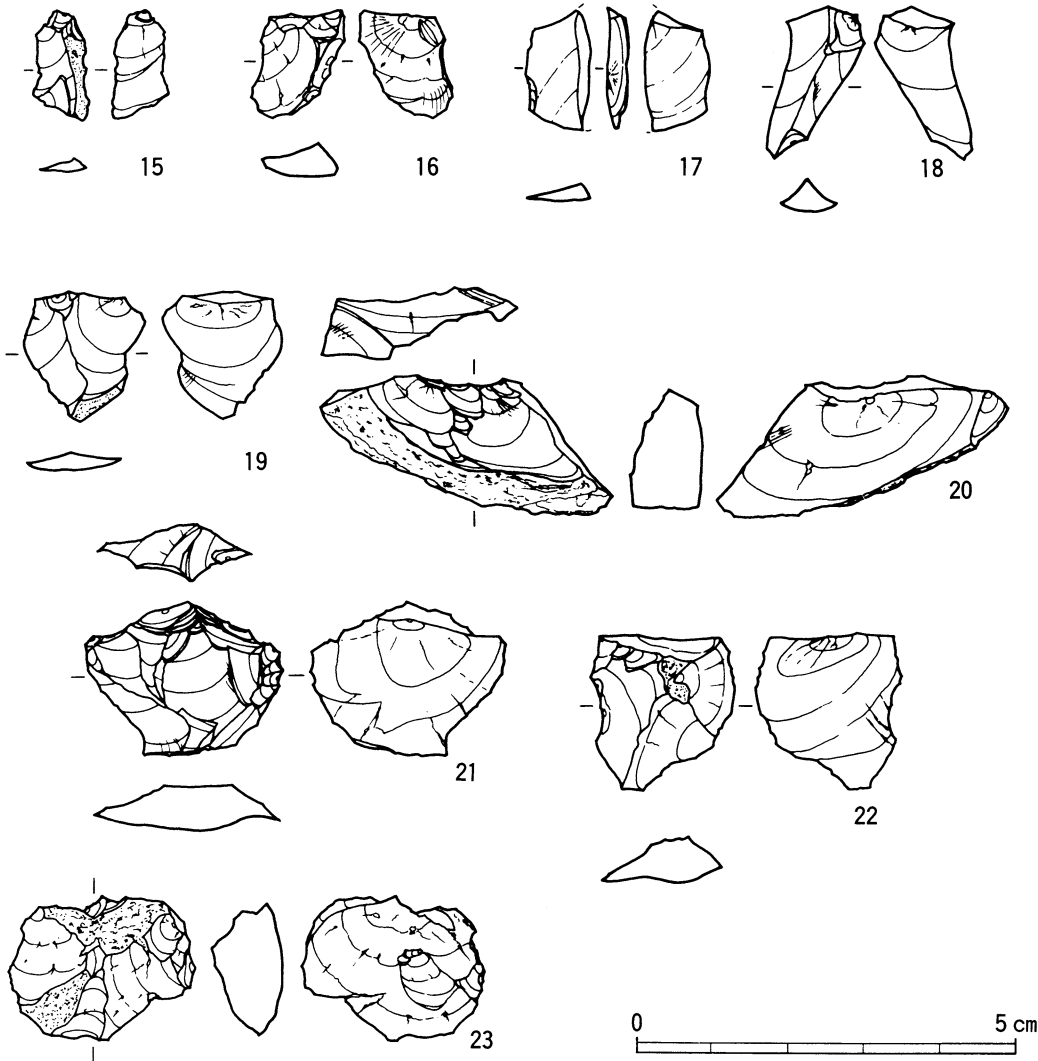


第25図 Aブロック出土遺物2 (削器・挟入石器)

石核 (第29図-35~37・第30図-38)

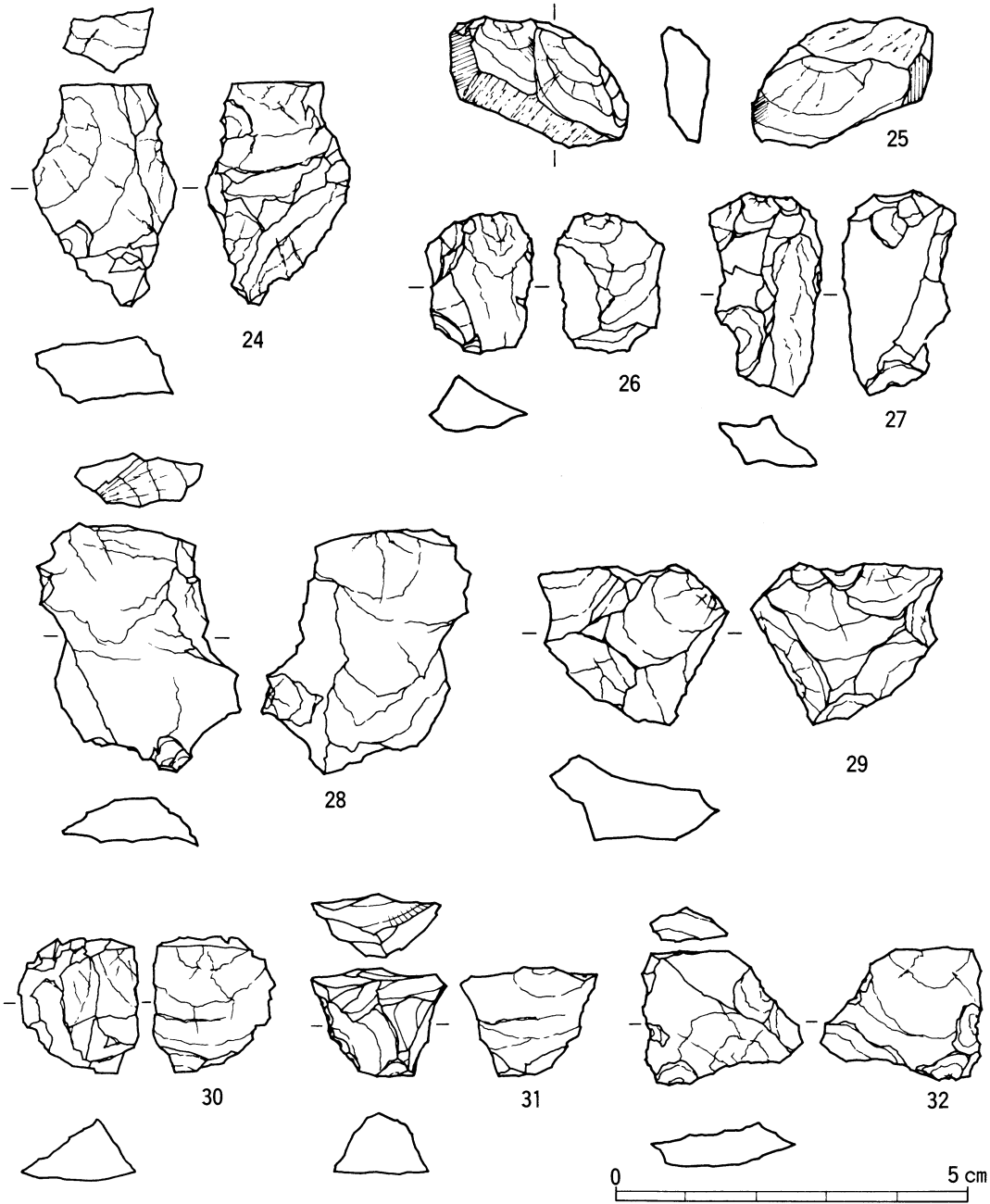
石核は23点出土した。すべてが石英製の石核であり、黒曜石剥片を剥出した石核の類は出土していない。ブロックの全域にわたる広い分布状況を示し、石英剥片の分布状況と重なる状況である。大部分が節理面に沿った割れや砕けを生じており、剥離面の観察の可能な4点について図示した。

35は角礫に近い石英を素材とするものである。正面に残る剥離面が最終的な剥離であるが、それに先立つものとして、底部にも3枚の剥離が観察される。平坦な自然面を打面としており剥離方向に統一制は認められない。打面として使用可能な平坦面を利用する傾向が看取される。36は剥片を素材とする石核である。剥片剥離作業は一次剥離面である腹面方向から背面方向に向かって求心的に行われる。剥離作業面に残された剥離面はやや小さ

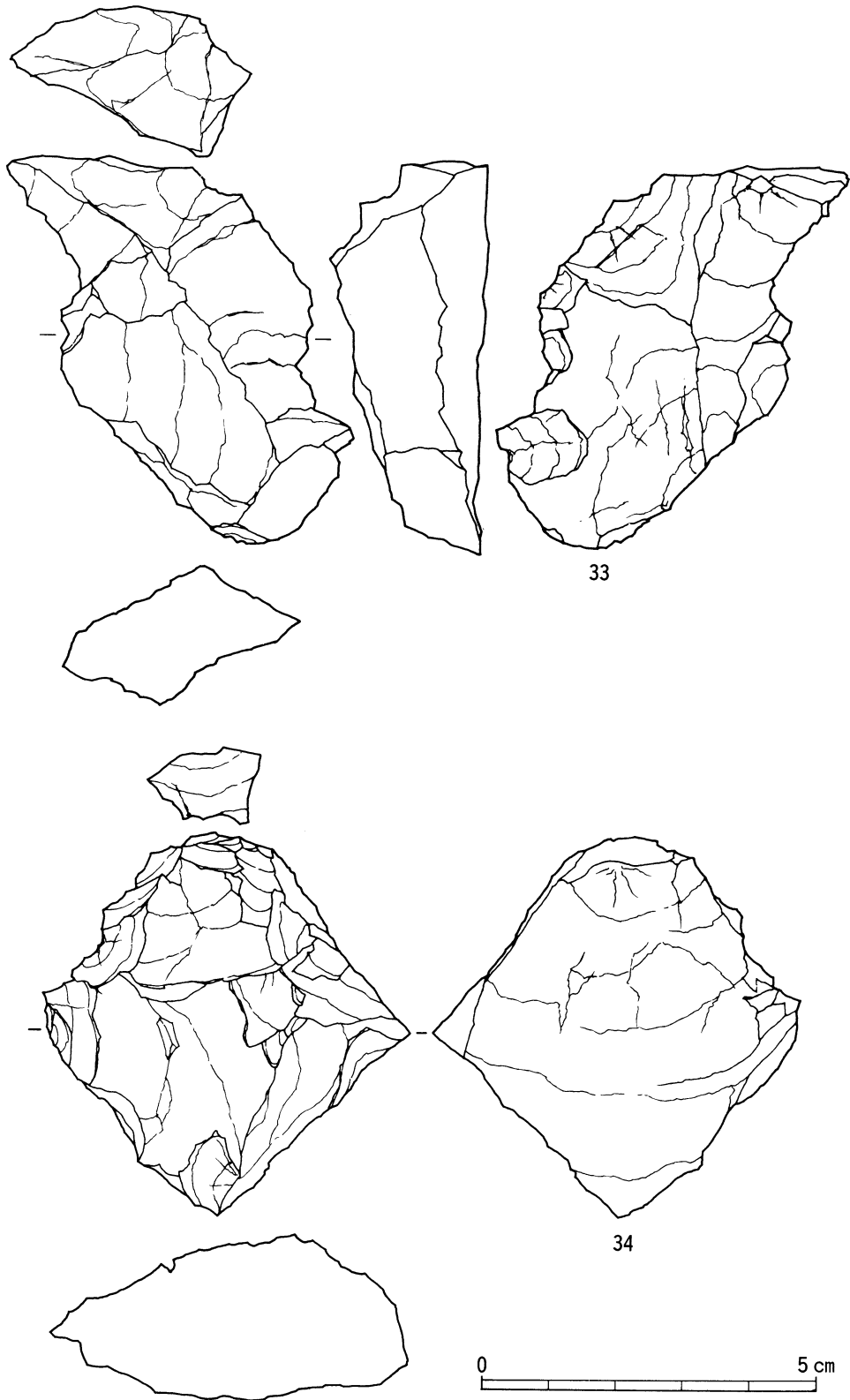


第26図 Aブロック出土遺物3 (剥片)

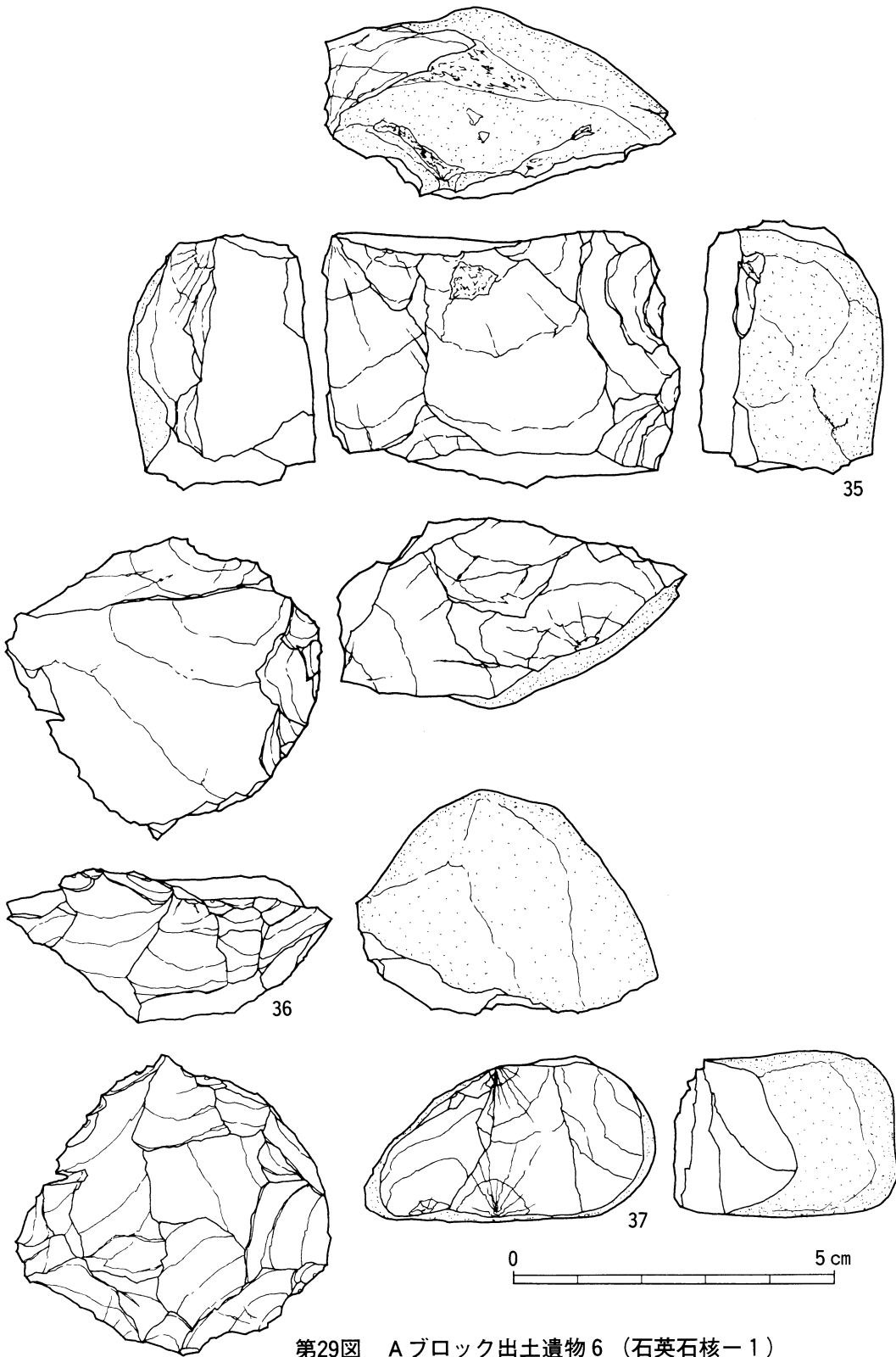
いため、スクレーパーとしての機能も想定される。37は石核整形時の初期的な段階を示す資料である。扁平な礫を2分割し、分割の際の打面がそのまま剥片剥離の作業面として使われる。分割に際しては両極技法が用いられており、対極する方向にのびるフィッシャーが観察される。作業面に残った剥離面は1枚である。38は角礫を素材とするものである。作業面は頻繁に転移する。



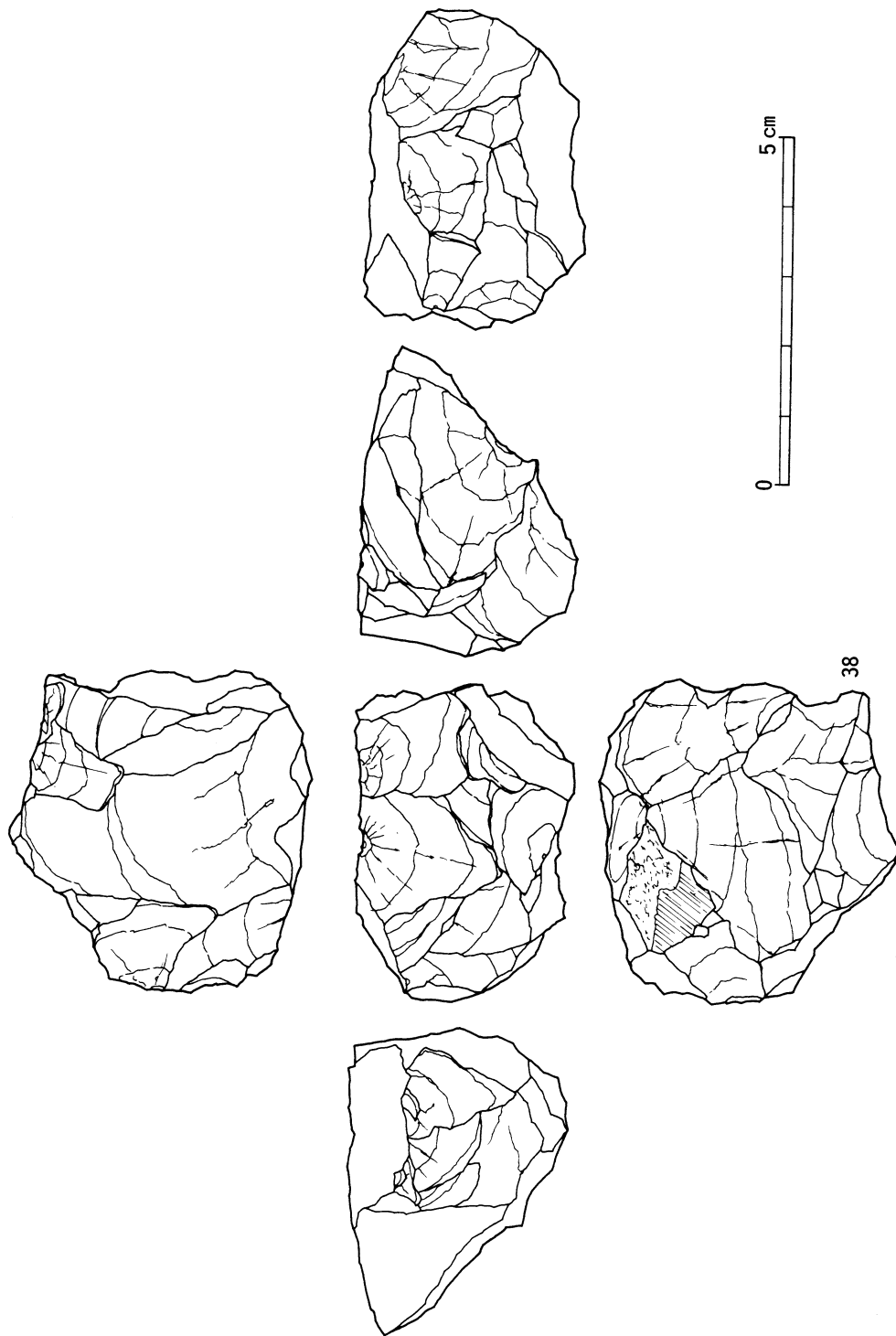
第27図 Aブロック出土遺物4 (石英剥片-1)



第28図 Aブロック出土遺物5（石英剥片-2）



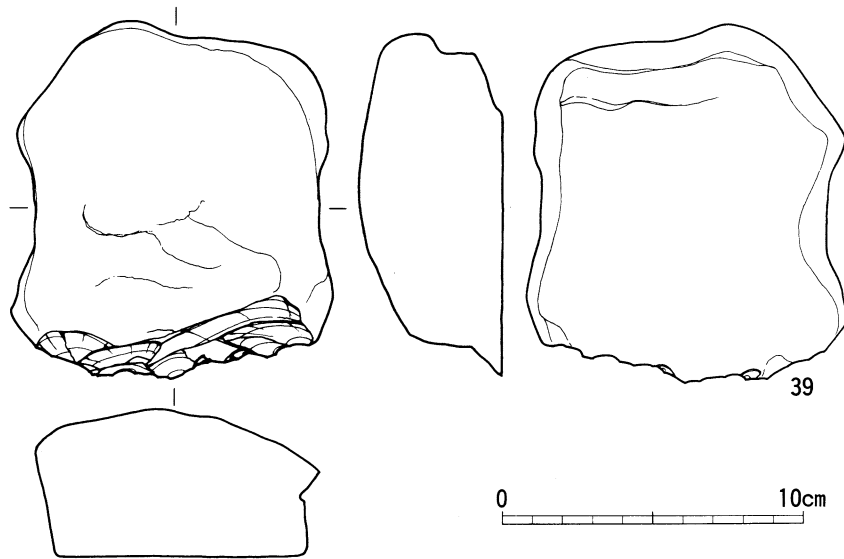
第29図 Aブロック出土遺物6（石英石核-1）



第30図 Aブロック出土遺物7 (石英石核-2)

礫器 (第31図-39)

礫器はブロックの中心部分よりやや北側で1点出土した。扁平なホルンフェルス素材とし、その一辺に7回程度の加撃によって刃部を作成する。刃部形態は片刃である。

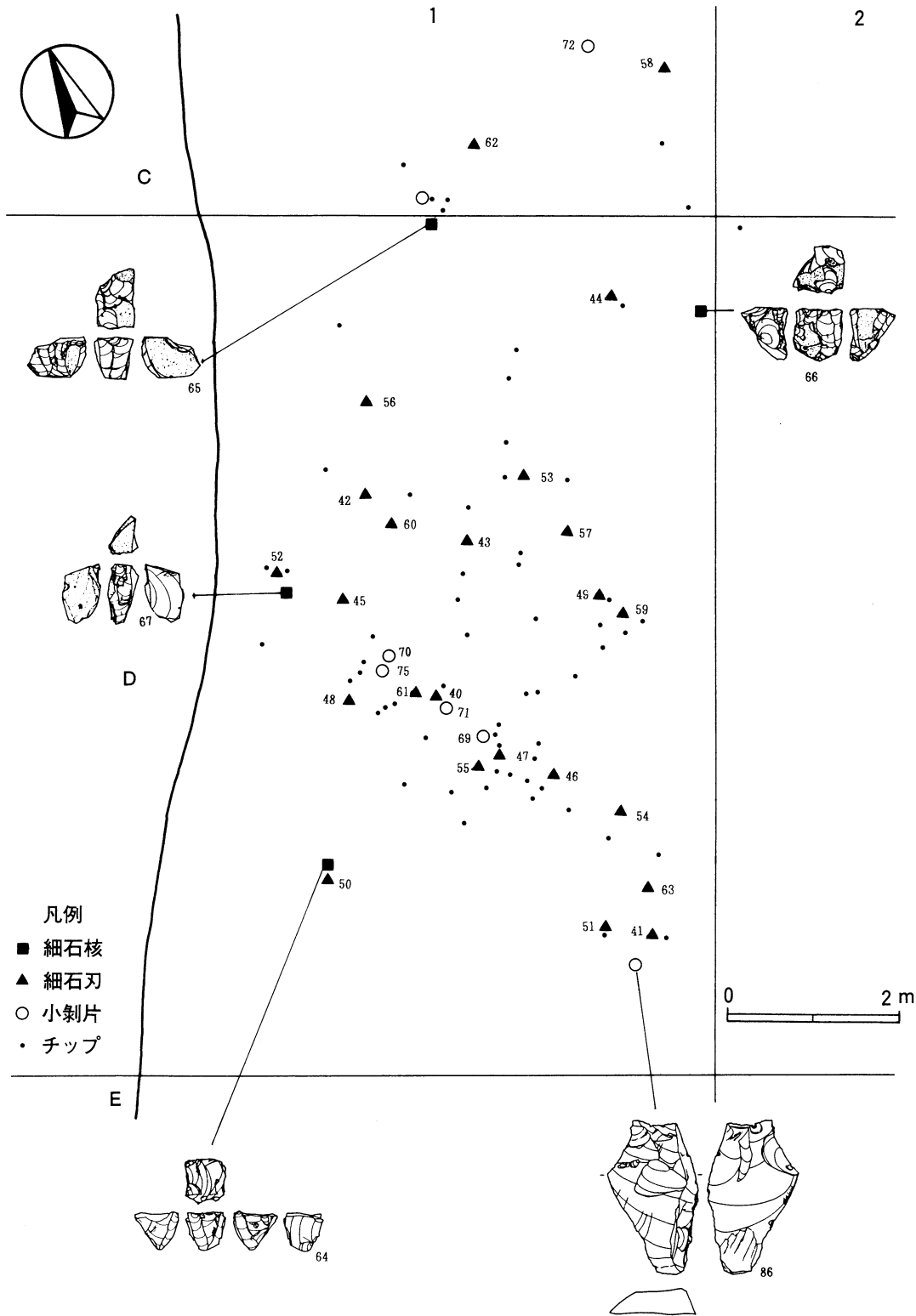


第31図 Aブロック出土遺物8 (礫器)

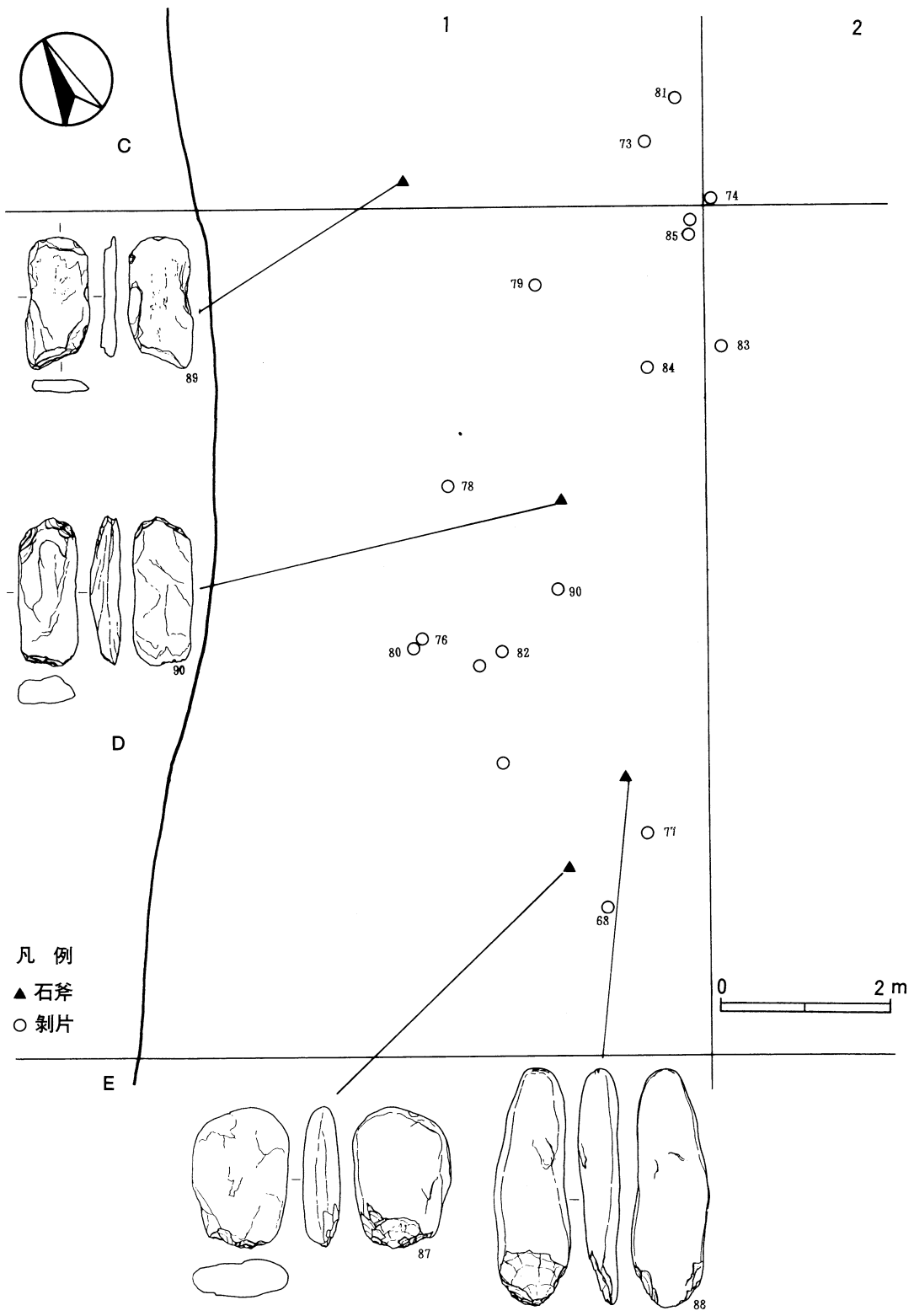
(2) Bブロック遺物出土状況 (第32図・第33図)

BブロックはD-1区を中心とする遺物の一群である。Aブロックと同様に東南方向に高くなった部分に遺物の集中が見られる。ブロックは6 m×10 mの東南方向に長い楕円形の広がりを示し、北端部分では遺物が疎らであり、Aブロックとの境界が明瞭でない。Cブロックとの境は明瞭で、明らかに遺物の出土がとぎれている。遺物包含層は、調査対象区域外の南西方向にまで延びている可能性がある。

出土遺物の総数は111点である。黒曜石製遺物の点数は101点で、総数の91%を占め、Aブロックとは異なる様相をみせる。細石刃はブロック全域にわたり出土している。これらの中に水晶製のものが1点ふくまれている。細石核はブロックの周縁部で4点出土しており、特定の部分に集中する傾向は認められない。細石核は4点とも黒曜石を用いており、水晶の細石刃と関連のあるものは出土していない。石斧は4点出土している。2点が1 m程度の隣接した部分で出土し、他の2点とは距離をおいている。剥片は21点出土した。ブロックの中心部分と北端に集中部分が見られる。黒曜石がほとんどであるが、チャートの大型剥片が1点含まれる。チャートの遺物は1点のみである。チップは57点出土している。水晶の1点を除き、他の56点はすべて黒曜石である。Bブロックにおいても石器製作に関連した台石、ハンマーストーン等の類の遺物は出土していない。



第32図 Bブロック遺物出土状況1 (細石器他)



第33図 Bブロック遺物出土状況 2

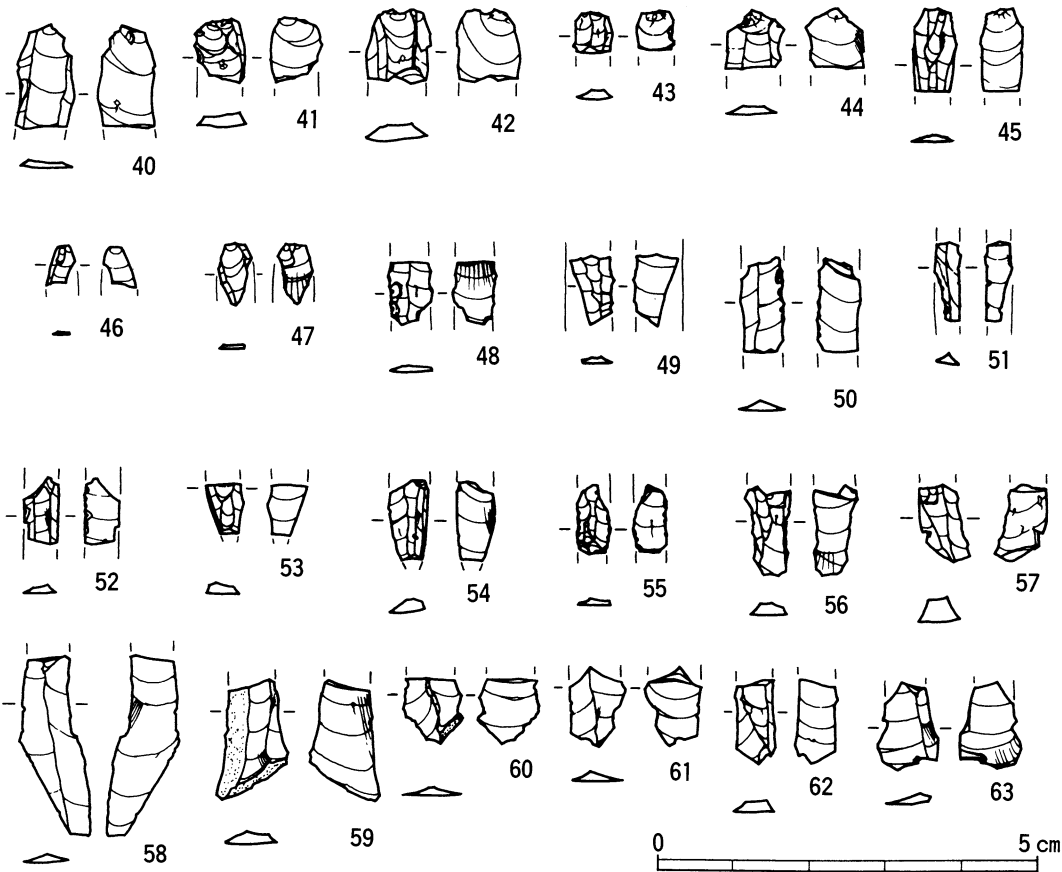
細石刃 (第34図-40~63)

細石刃は総数で、24点出土した。32の水晶を除き、他は黒曜石製である。頭部6点(41、42、43、44、46、47)、頭~中間部が2点(40、45)、中間部8点(48、49、50、51、52、53、54、55)、中間~尾部6点(56、57、58、59、62、63)、尾部2点(60、61)という構成である。これらのうちで、使用痕が認められるのが6点(43、50、51、52、55、58)である。58は頭部を欠損しているものの長さが24mmあり、他の細石刃より突出した大きさを持ち、石材の点でも他と異なり、青灰色の黒曜石を用いている。

細石核 (第35図-64~67)

総数で4点出土した。石材は黒曜石を使用している。平坦面を持つ礫を素材としたものが2点(65、66)、剥片を素材としたものが2点(64、67)である。

64は細石刃剥離作業が進み、ほぼ残核に近い状態の資料である。打面(上面)の形状は正方形で、側面観は角錐状である。背面に残る右方向からの大きな剥離面により、剥片を素材とする細石核であることを示している。最終の細石刃剥離作業面は正面であるが、その前に左側面において細石刃剥離作業を行っている。すなわち、作業面を左側面から正面



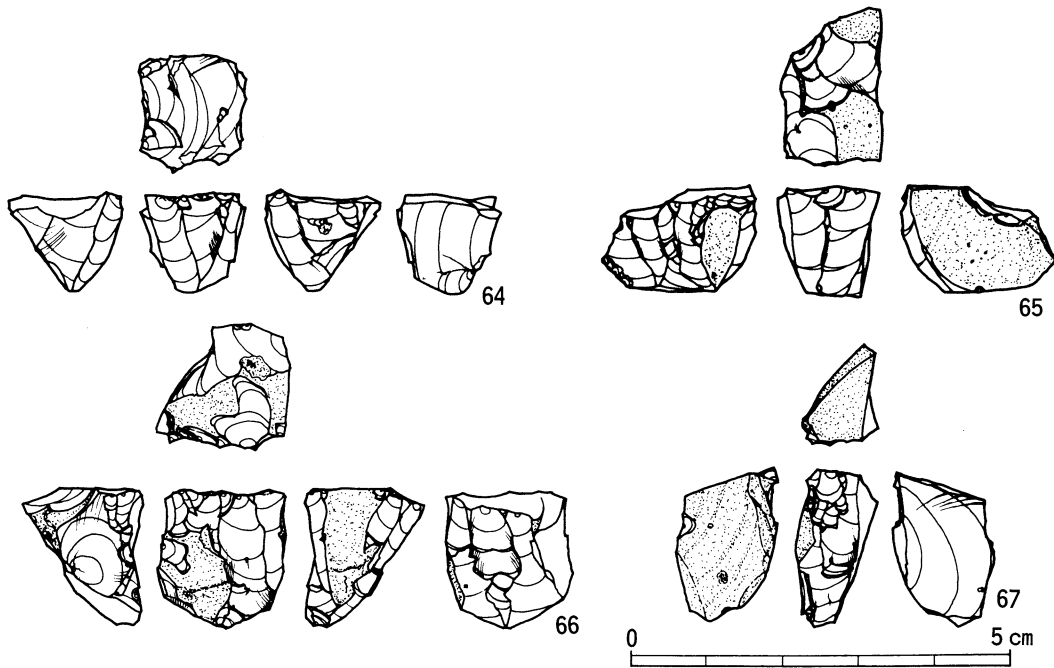
第34図 Bブロック出土遺物1 (細石刃)

へと90° 転移しているのである。ここに至るには、次のような過程が想定される。①左側面を作業面とする②左側面方向（左側面を作業面としていた時点では正面）からの加撃により打面を再生することを試みた③その加撃が予測していた部分より下位に加えられた結果、平坦な再生打面は得られず、逆に打点を中心にえぐれてしまった④打面再生剝離面の周縁部は平坦であったので、作業面を約90° 移転し、正面（左側面を作業面としていた時点では右側面）を作業面とした。

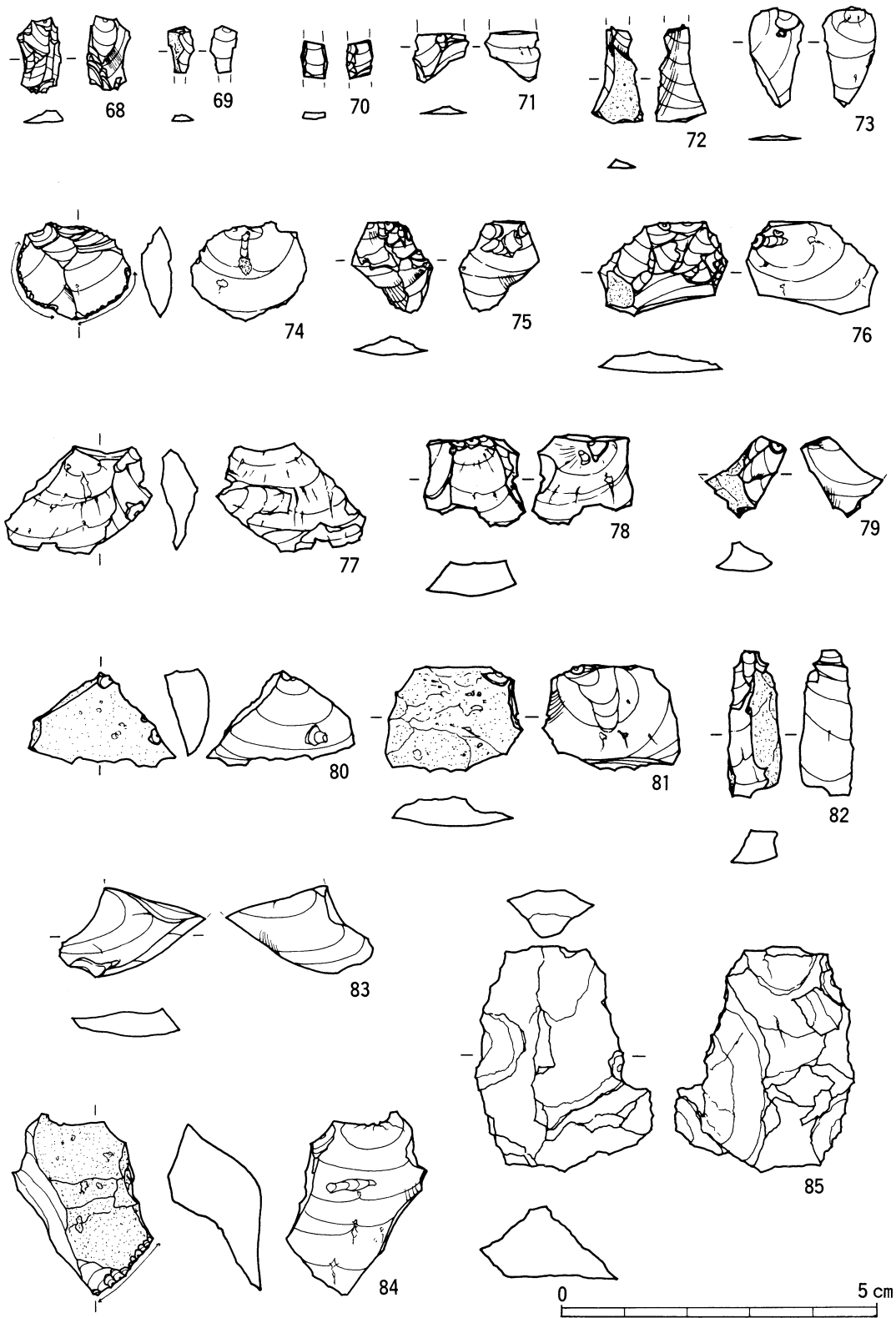
65は平坦面を持つ小礫を素材とする。右側面には調整は施されず、自然面のままであるが、左側面には打面方向からの調整剝離が施され、正面観が、上部が下部より広い台形状に整形される。打面調整は、左側面の調整後に正面方向と背面方向から対向する形で行われているが自然面が残されている。底部は平坦な自然面である。

66は小礫を素材とし、正面と背面の2面に細石刃剝離作業面を持つ。左側面は背面のやや下位の部分からの大きな加撃による剝離と打面（上面）からの丁寧な剝離によって調整される。右側面は自然面のまま残されている。打面は正面方向からと背面方向からの剝離によって調整されるが、自然面を多く残している。正面の細石刃剝離作業は右半分においてのみ行なわれ、左半分には短い作業面調整剝離面が残されたままになっている。背面には3枚の剝離面が残されているが、中央の細石刃剝離作業の途中でヒンジフラクチャーとなり、段がついたため剝離作業を中止している。

67は自然面を残した剝片を素材とする。右側面は細石核となる素材剝片を剝離したときの剝離面である。この面が満足すべき状態であったため、その後の側面調整は行っていない。

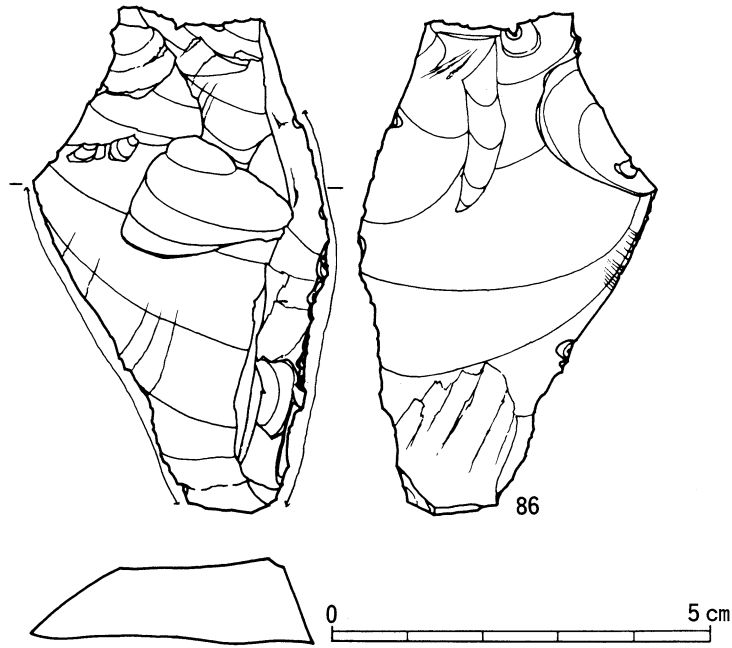


第35図 Bブロック出土遺物2（細石核）



第36図 Bブロック出土遺物3 (剥片1)

左側面も平坦であったため、自然面のまま残されている。打面（上面）は自然面のままであり、後方に行くに従い狭くなる三角形の形状を呈する。細石核素材剥片を得る剥離は、細石刃剥離の打面を予め想定し、左側面となる自然面を意識して行われたことが推察できる。正面、左側面、打面に自然面が残されていることから、この素材剥片が剥出された母岩は小礫



第37図 Bブロック出土遺物4（剥片2）

であったと考えられる。細石刃剥離作業面には、有効な細石刃を得たと思われる2枚の剥離が観察されるが、その後の剥離作業の途中でヒンジフラクチャーとなっている。その原因は、打面調整を行わないまま剥離作業を行ったことにより、打点に砕けが生じ、剥離作業に必要な力が損なわれたためと考えられる。

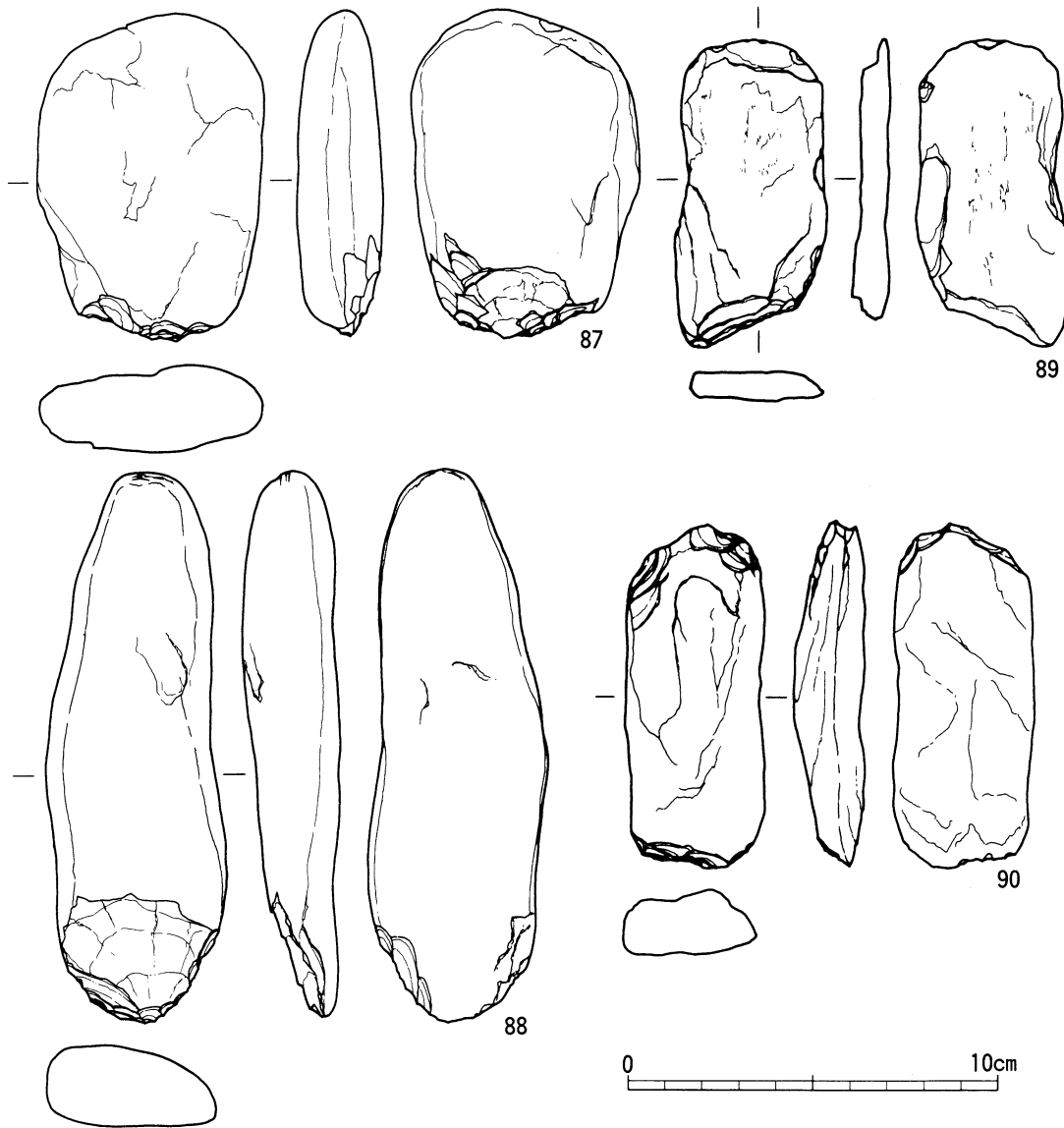
剥片（第36図-68～85・第37図-86）

総数21点の石材は黒曜石17点、石英3点、チャート1点であった。19点を図示した。85の石英、86のチャート以外はすべて黒曜石である。68、69、70、71、72、79、82は細石核の作業面調整剥片と思われるものである。74は楕円形の剥片の周縁部に使用痕と思われる細かい剥離面が無数に観察される。84の背面は自然面である。打点と反対側の下端部に主要剥離面からの二次的な剥離を施している。85は石英の比較的大きな剥片である。Bブロックの東北端部分で出土した。二次的な加工の痕跡を確認できないが、両側縁部は鋭角である。86は唯一のチャート剥片である。Bブロックの南端部分から出土した。やや縦長の剥片の両側縁に使用痕と二次的な加工による剥離面が観察される。

石斧（第38図-87～90）

4点が出土した。87、88はブロックの南端に近い部分で隣接して出土している。89はブロックの北端で、90はブロックの中央付近で出土した。4点とも石材にホルンフェルスを使用している。89と90の2点は表面の風化が著しい。87は扁平な楕円形の礫の一端に主に片側方向からの加撃により、刃部を作出する。刃部には潰れが目立つが、刃部形状としては片刃が想定される。刃部付近のみを研磨した局部磨製石斧であった可能性もある。88は比較的小平な細長い礫を素材とする。平坦な裏面から表面方向に大きな加撃で大まかな

刃部を形成したのち、同方向からの小さな剥離により刃部を調整する。刃部形状は片刃である。89は表裏面とも節理面である。風化が著しく、刃部もつぶれている。石斧とするには疑問もあるが、ここで報告することにした。90は表面は自然面、裏面は節理面を持つ。平坦な裏面からの加撃により刃部が作出される。刃部形状は片刃である。基端部分にも複数の剥離面が見られるが、刃部作出のための剥離であるかはっきりしない。



第38図 Bブロック出土遺物5 (石斧)

(3) Cブロック遺物出土状況 (第39図・第40図)

CブロックはE-2区を中心とする遺物群である。D-2区、D-3区には遺物の分布が少ない。これらの区は未発掘の部分であり、遺物包含層の広がりや範囲に及び、D-2区とD-3区を中心とする別な遺物群が存在していた可能性が大きい。D-3区で1点だけ出土している細石核は上層の平安時代の遺構の深掘り部分から出土したものであり、この周辺に別な遺物群が存在した可能性をうかがわせる。また、E-3区でも遺物の出土が疎らであり、中央よりやや西側の部分で、遺物の分布が途切れている。このことからE-3区東半分からE-4区にかけても別な遺物群が存在していた可能性がある。包含層の広がりや全容が判らないので、遺物の疎らな周辺の部分も含めて、ここでは便宜的にCブロックとして取り扱うことにした。

遺物の総数は249点で、遺跡全体の遺物数の半数が出土している。ブロックが広いことも一因であるが、E-2区では1m×1mの小グリッドを設定して、精査した結果である。

石材構成は黒曜石遺物が196点で、全体の8割近くを占めている。水晶・石英と頁岩遺物はそれぞれ21点ずつであわせて2割にも満たない。

細石刃はブロック全体にわたる分布状況で67点出土している。細石核は11点出土しているが、分布に集中の傾向はみられない。細石核では畦原型と呼ばれるものが2点、水晶製のものが1点出土している点が注目される。剥片は57点出土し、黒曜石製が34点と圧倒的に多い。チップの数量も同様に132点のうち黒曜石チップが120点にのぼっている。

このほかに削器が3点、搔器が1点出土し、他のブロックでは出土しなかったハンマーストーンが3点(実資料では2点)、楔形石器が2点、磨石が1点出土している。また、水晶を石材とする用途不明の石器が5点出土した。

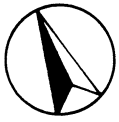
細石刃 (第41図-91~123)

67点出土した。石材は2点(97、103)が頁岩で残りの65点は黒曜石を使用している。完形品が1点(91)、頭部が7点(99、100、101、102、104、105、106)、頭~中間部が6点(92、93、94、95、96、98)、中間部が12点(97、107、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117)、中間~尾部が2点(121、123)、尾部が4点(118、119、120、122)、という構成である。これらのうちで使用痕が認められるのは9点(92、93、94、97、109、110、111、114、123)である。

91は完形品である。背面は細石核の作業面調整剥離面である。92は頭部から尾部に向かって広がっている。使用に際しては、広がりのある尾部を除いたものと考えられる。

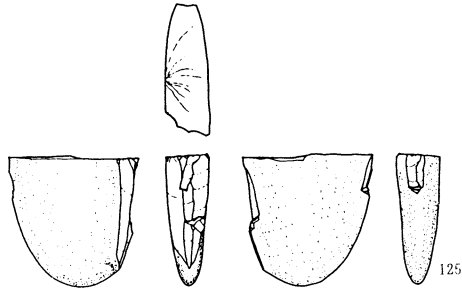
94は背面の右半分に自然面を残している。細石核の作業面の右端で剥出されたものであろう。95の背面には、主要剥離の方向と対向する方向の剥離面と自然面が見られる。細石刃剥離作業の初期の段階の資料である。尾部を折り取った時の剥離が中央付近まで延びてきている。このほかに細石刃剥作業の初期段階の資料としては96と98があげられる。105の背面の右方向からの剥離面は作業面調整に伴うものと考えられる。

③

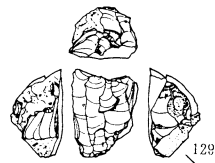


D

1



E



○ 146

▲ 110

○

○ 145

▲ 8

▲ 113

▲ 100

▲ 108

▲ 107

▲ 112

▲ 95

▲ 138

▲ 96

▲ 120



134

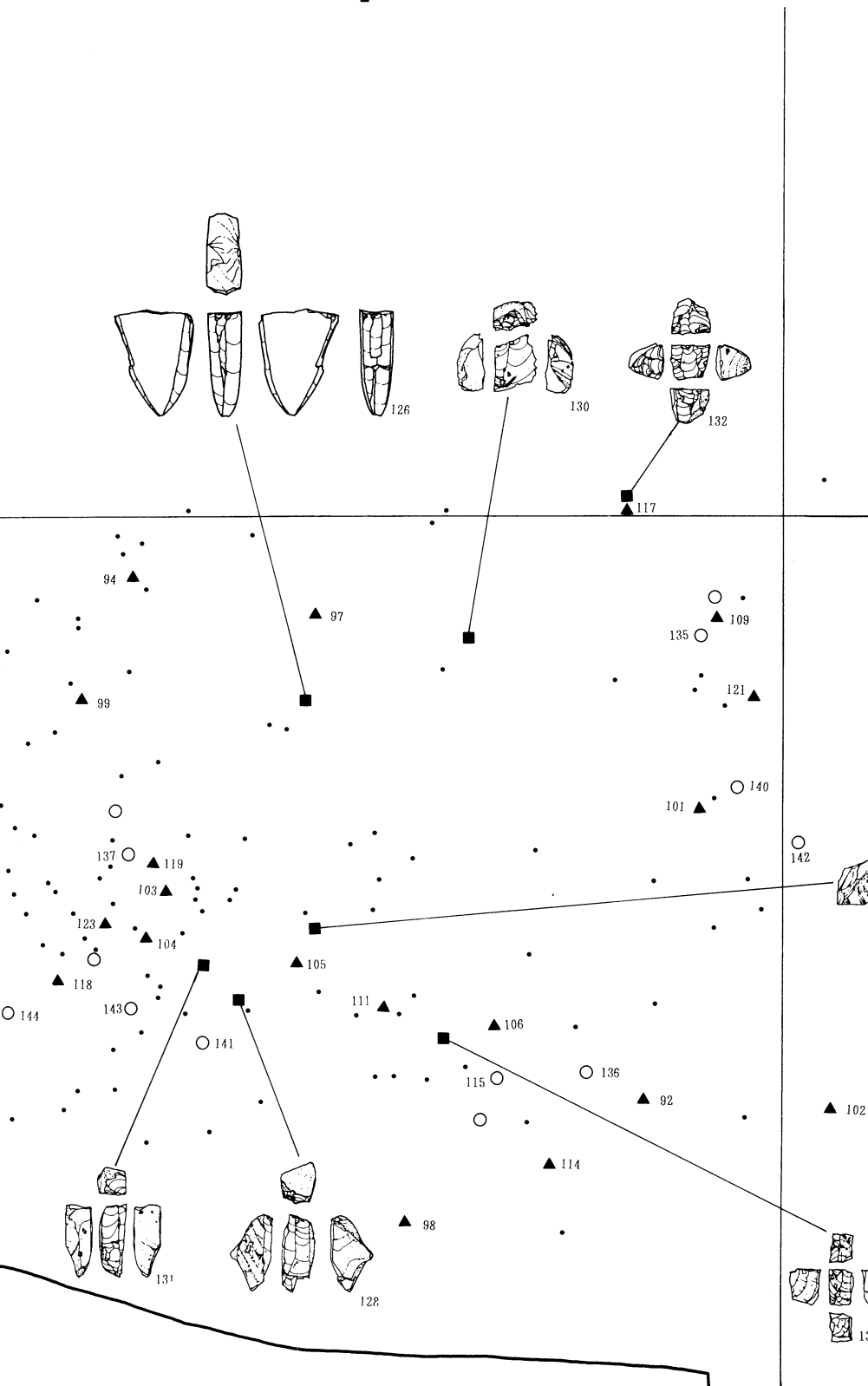
凡 例

■ 細石核

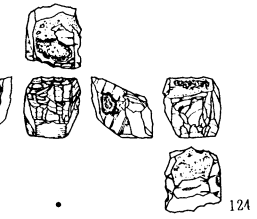
▲ 細石刃

○ 小剥片

・ チップ



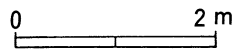
第39図 Cブロック遺物出土状況1 (細石器)



122 ▲

▲ 93

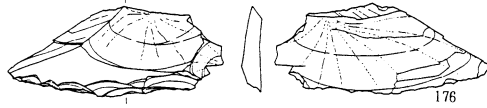
91 ▲



1



D



176



177



157

○ 154

★

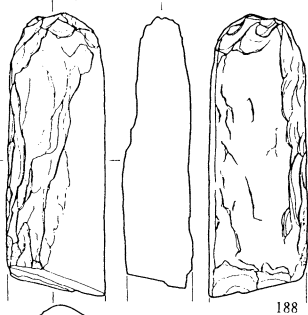
● 189

○ 153

★

○ 158

E



188

○ 161

○ 165

○ 172

○ 171

☆ 11

15

□ 186

○

凡 例

★ 削器・掻器

☆ 楔形石器

▲ 石斧

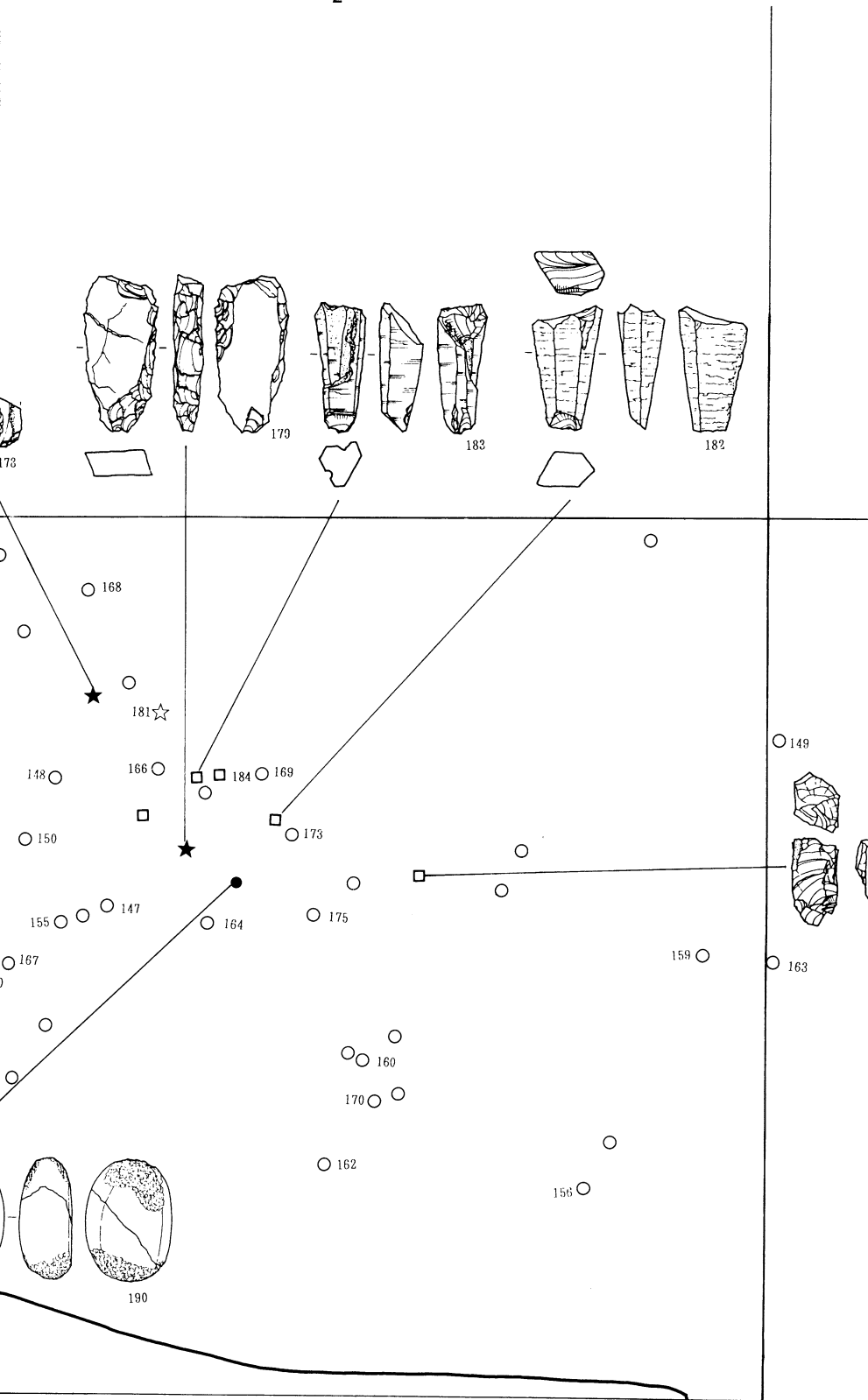
■ 石核

○ 剥片

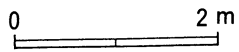
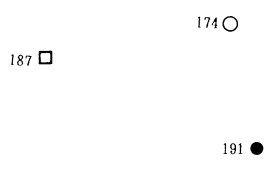
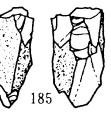
● ハンマーストーン・磨石

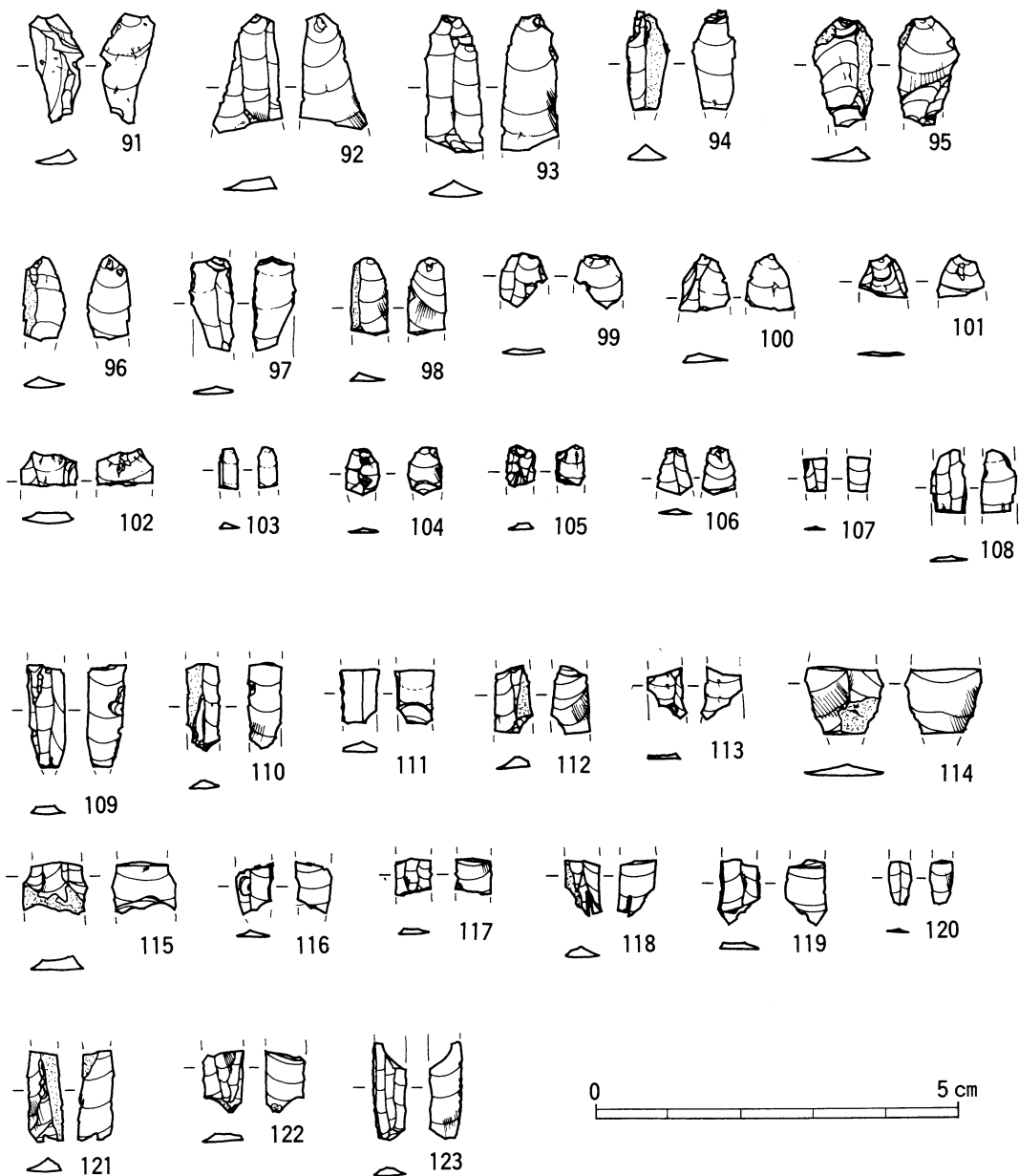
□ その他





第40図 Cブロック遺物出土状況 2





第41図 Cブロック出土遺物1 (細石刃)

細石核 (第42図-124、第43図-125・126、第44図-127~134)

細石核は11点出土した。

124は水晶を石材とするものである。使用された水晶の断面は正六角形でなく、やや扁平である。表面に近い部分に不純物が含まれている。細石刃剥離作業面としては正面と背面の2面を持つ。

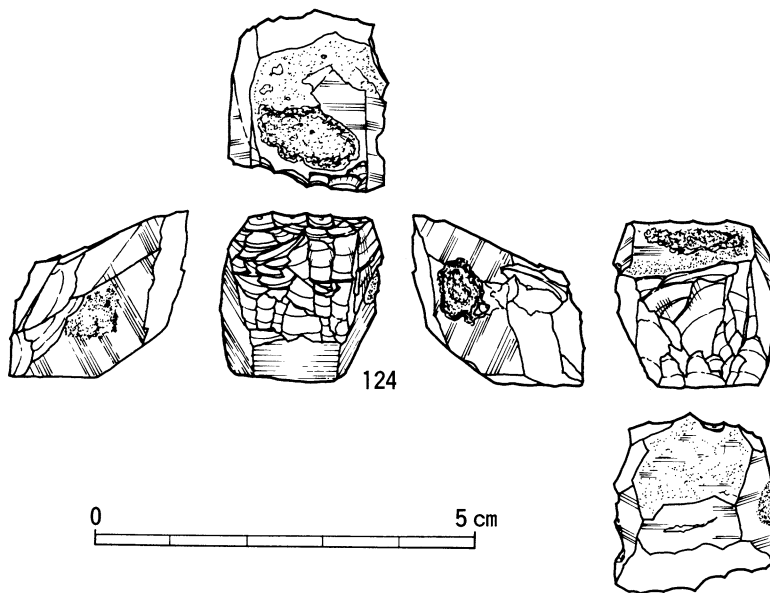
正面の作業面では作業面の最下位にまで達する剥離面が残されているが、最終的な4回

の剥離はことごとく途中で、ヒンジフラクチャーとなり、段がついている。この作業面における打面には結晶の平坦面が利用される。打面は正面方向からの細かい剥離により調整されている。結晶面の表面付近の不純物を除去するための打面調整であろう。

背面の作業面は正面とはほぼ平行な関係にあり、正面の作業面とは反対方向から剥離作業を実施している。残されている剥離面を観察すると、有効な細石刃が得られた様子が見られない。打面は正面作業面の打面と正反対の位置にある結晶の平坦面である。打面調整らしき剥離は1枚観察されるだけである。

この細石核の製作行程について検討してみよう。水晶は断面六角形で6枚の平坦面をもっている。この平坦面を細石刃剥離の打面として利用しようとする決定が、最初の段階であったと考えられる。次の段階の作業面の作出には、もっとも注意が必要とされる。六角柱状の水晶は横方向からの加撃により分割されるが、この分割作業は加撃の角度や力の度合いを十分考慮し、慎重に実施されたものである。水晶は黒曜石などの石材に比べ硬度が高いため、作業面の調整が難しく、分割の失敗はすぐに細石核の素材として不適当ということにつながる。背面における作業面の状態が水晶の扱いにくさを示している。分割にはその後の細石刃剥離の打面角度を想定し、両極技法を用いたと思われる。側面は自然結晶面のままで、調整を行っていない。両側面に結晶の稜があるために、作業面の側縁近くは細石刃剥離には不適であり、細石刃剥離には作業面の中央部分が使用されている。

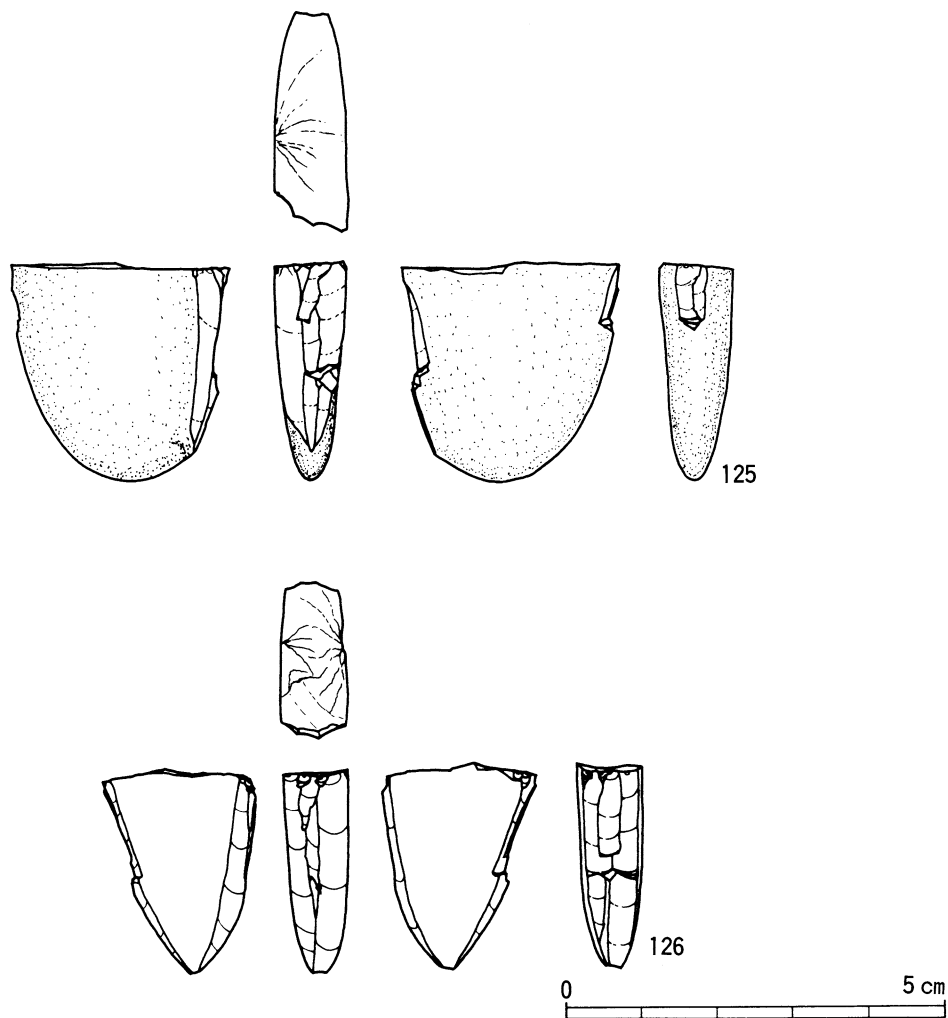
125と126はともに蛙原型の細石核である。125は扁平な砂岩礫を2分割して、分割面を細石刃剥離打面とするものである。分割は左側面方向から右側面方向への1回の加撃に



第42図 Cブロック出土遺物2（細石核1）

よって行なわれる。分割面には両極技法を用いた痕跡は観察されない。分割面は調整されることなく、そのまま細石刃剥離作業の打面として利用されている。側面調整と下縁部調整はなされていない。細石刃剥離作業面としては正面と背面の2面が使用されている。正面の作業面においては、少なくとも3枚の有効な細石刃を剥離した剥離面が観察されるが、その後の3回の剥離作業ではことごとく、ヒンジフラクチャーとなり、段がついている。背面の作業面には2枚の剥離面が残されている。いずれも、8mm程度の短いもので、剥離作業の途中でヒンジフラクチャーとなっている。剥離作業は初期の段階であり、剥離されたものは背面に自然面を持つ作業面調整剥片である。

126は頁岩の扁平な分割礫が素材となっている。分割面には対向して延びるフィッシャーが観察され、両極技法を用いた分割であったことがうかがわれる。分割面は調整されることなく細石刃剥離作業の打面となる。両側面は自然面のままである。



第43図 Cブロック出土遺物3 (細石核2)

細石刃剝離作業面として正面と背面の2面が使用されている。いずれの作業面でも細石核の下端にまで達する長い細石刃剝離面が見られる。背面の作業面では最終の3回の剝離作業でヒンジフラクチャーとなり、作業面を再生することなく、剝離作業を放棄している。

127は扁平な黒曜石の小礫を素材とする。左側面は打面（上面）方向からの大きな剝離と底面方向からの小さな剝離による調整が行なわれているが、自然面を残している。右側面は自然面のままである。打面は左側面からの加撃により作出され、二次的な小さな剝離で調整される。打面の角度は細石刃剝離作業面に対して鋭角で、斜行していくように作出されている。

128も127と同様に黒曜石の扁平な小礫を素材とするものである。両側面とも未調整で平坦な自然面のままである。打面調整は主に正面から実施され、左側面からの調整剝離面も1枚観察される。打面には自然面が残され、背面方向に斜行している。残されている自然面の位置関係から、素材になった小礫の平面形は四辺形であったと思われる、できるだけ長い細石刃剝離作業面を得るために、作業面は四辺形の対角線に近い角度で作出されたものであろう。

129も黒曜石の小礫を素材とする。左側面は正面からの加撃により調整される。側面調整剝離面は1枚だけで、自然面が残っている。この左側面の調整面の状態から、細石刃剝離作業はかなり進んだ状態であることがうかがわれる。右側面は打面（上面）方向からの大きな加撃により作出されており、その後の細かい調整は行なっていない。打面は正面方向から調整され、背面方向に斜行している。細石刃剝離作業面がほぼ平坦に近くなったため、最後の剝離作業ではヒンジフラクチャーとなっている。

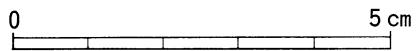
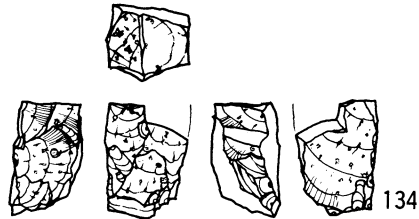
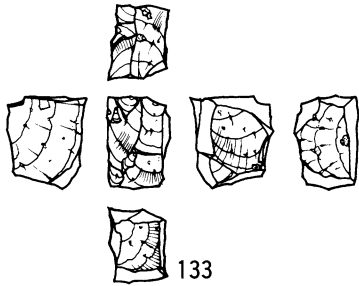
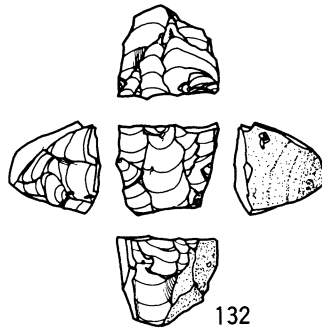
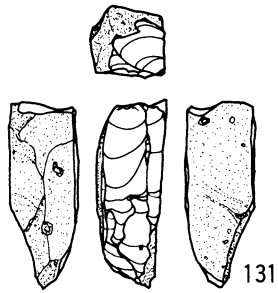
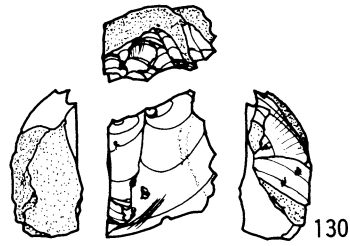
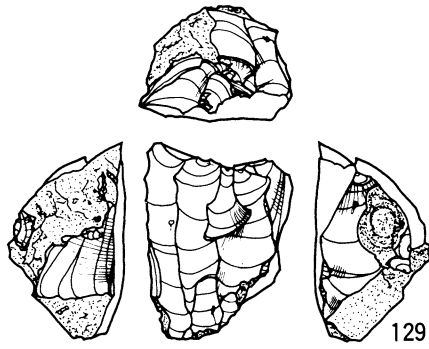
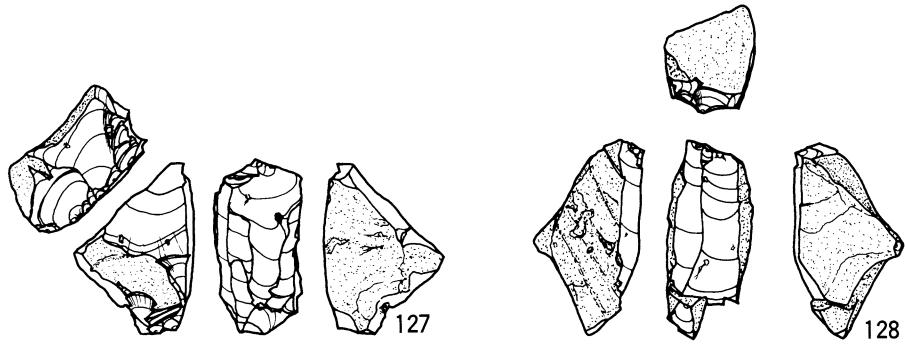
130も黒曜石の小礫を素材とする。左側面は自然面のままであり、右側面は正面方向からの加撃により調整される。打面（上面）は正面方向からの細かい剝離で調整されるが、背面に近い部分は自然面のままである。打面は背面方向に斜行している。

131も黒曜石の扁平な小礫を素材とする。両側面とも平坦な自然面のままである。打面も平坦な自然面であり、正面右隅方向からの剝離で調整される。

132も黒曜石の小礫を素材としたものと思われる。正面観は正方形に近く、角錐状の形態である。少なくとも3面の細石刃剝離作業面を持つ。作業面の使用された順番は左側面⇒底面⇒正面であったと思われる。上面（正面を作業面とした時の打面）にも長い剝離が残されている。この面が作業面として使われたかどうかは判然としないが、上面、左側面、底面ともに正面（最終の細石刃剝離作業面）を打面とする剝離であることから、当初は直交する3面の作業面を持った細石核であった可能性もある。

133は不純物の多い黒曜石を使用したもので、正面と打面（上面）に細石刃剝離作業面をもつ。両側面、背面、底面はともに1回の加撃で作出される。正面の最終的な剝離作業は途中でヒンジフラクチャーとなっている。

134も133と同じ石材を使用している。作業面の右上端は碎けている。細石核として疑わしい点もある。



第44図 Cブロック出土遺物4 (細石核3)

剥片（第45図－135～158、第46図－159～175）

剥片は57点出土した。57点の石材構成は、黒曜石34点、水晶・石英5点、頁岩14点、チャート1点、ホルンフェルス2点、鉄石英1点である。

42点を図示した。139、144、165～170が頁岩、171がチャート、172が鉄石英、173～175が水晶であり、上記以外が黒曜石である。

135～144は細石刃作業面の調整に伴う剥片類である。135～137、142は背面に自然面があり、作業面の自然面を除去するために剥離されたことを示している。140の背面にはヒンジフラクチャーとなった剥離面が観察される。

152、153は縦長の剥片であるが、背面の剥離には一定の方向性は認められない。164には背面に同一の打面から行なわれたと思われる剥離面が残されている。その他の黒曜石剥片は不定形で、背面に自然面を持つものが目に付く。

165は左側縁部に使用痕が観察される。形態的には細石刃に似ており、細石刃と同様の機能を持つものと考えられる。167の頁岩剥片は複合打面から剥離されたものである。168の左側縁部と剥片の下端に使用痕が観察される。

171は唯一のチャート剥片である。背面に2枚の対向する長い剥離が認められる。細石核に関連した資料の可能性はあるが、同石材の細石刃や細石核は出土していない。

172は鉄石英の横長剥片である。打面は自然面で、背面には腹面と反対方向の横に広い剥離が認められることから、剥片を剥出した石核も横に長い石核であったと思われる。剥片の下端部には、使用痕が認められる。

173は水晶の結晶の先端部から剥離されたものである。174は水晶の結晶面を打面とするもので、結晶の長軸と平行な剥離面である。175も水晶の結晶の長軸と平行な剥離面である。

削器（第47図－176・179）

176は粘板岩の扁平な横長剥片を素材とする。剥片の打面は平坦面である。背面にある剥離も同じ打面からなされたもので、薄く剥がれやすいという粘板岩の特性を生かし、同一打面から扁平な横長剥片を連続的に剥離したものであろう。刃部は剥片の下端部に腹面方向からの剥離により形成される。179は表裏ともに節理面の石英剥片が素材となる。刃部は右側縁部に形成される。横断面形態は平行四辺形である。

小型削器（第47図－178）

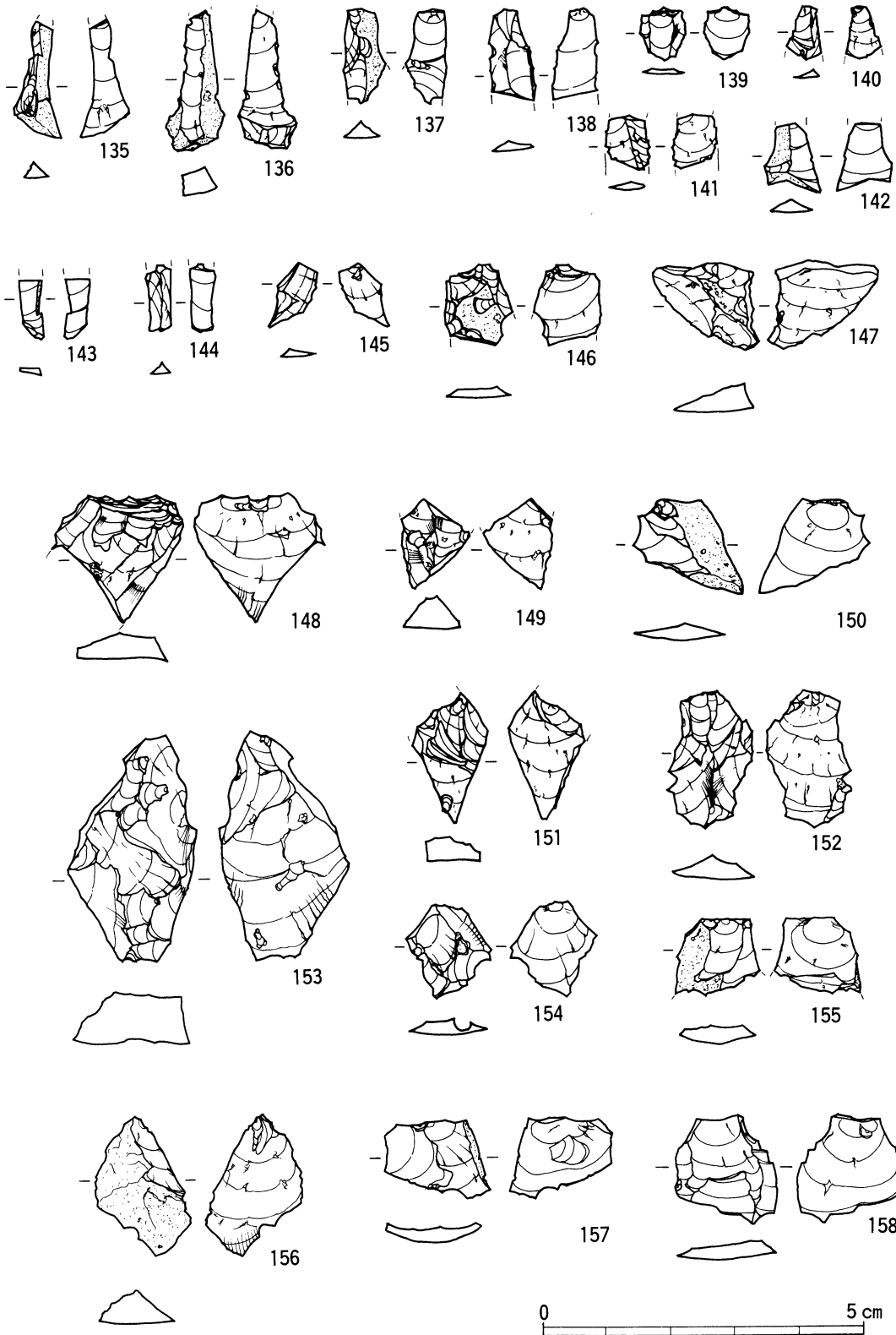
鉄石英の剥片を素材とし、刃部は片側側縁に連続的に施される押圧剥離により形成される。組み合わせ石器の一種と考えられるが、同種の石器は1点だけである。

搔器（第47図－177）

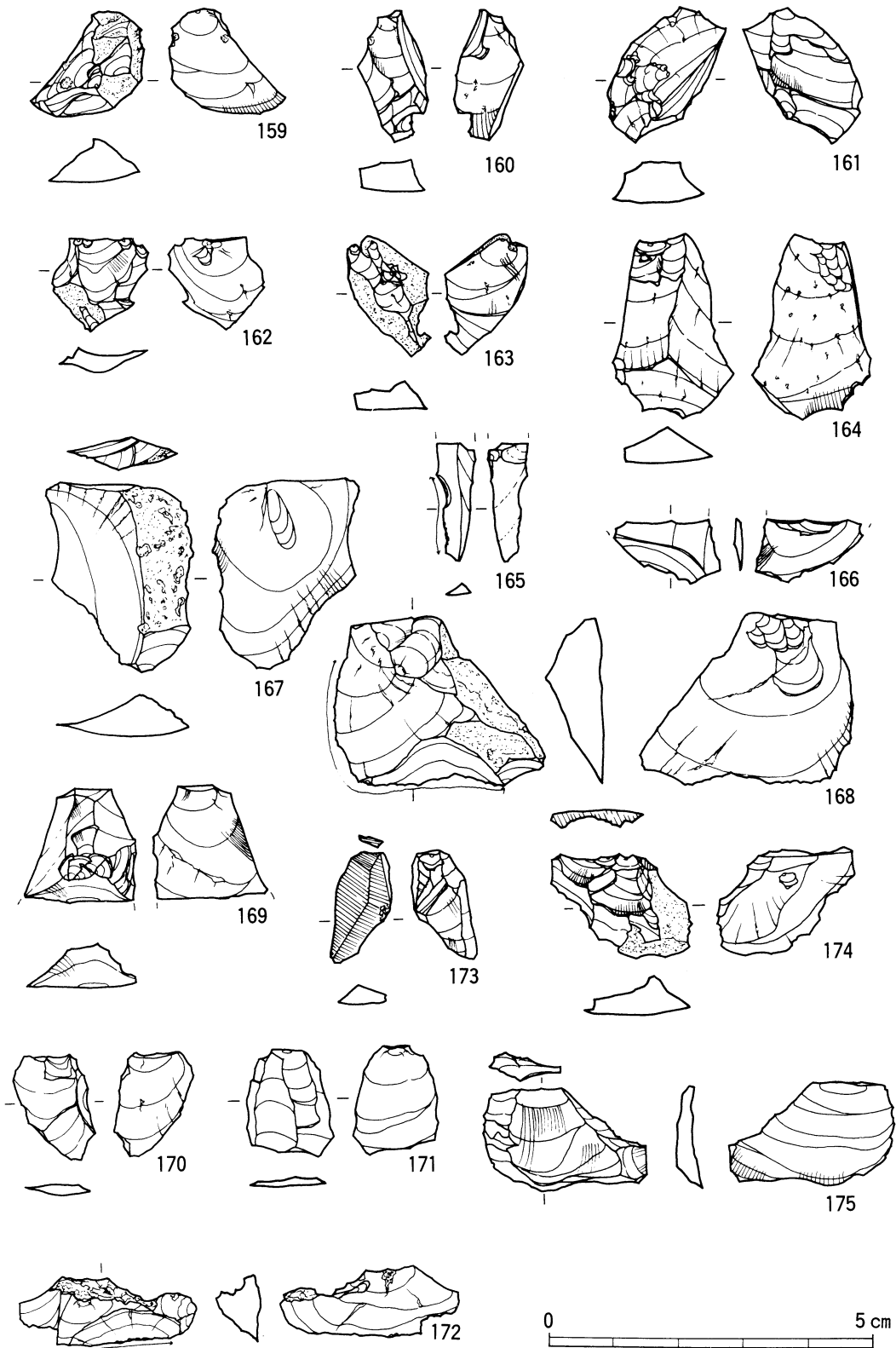
自然面を持つ厚めの黒曜石の剥片を素材に、下端部に腹面方向からの剥離による刃部が形成される。刃部は鈍角である。

楔形石器（第47図－180・181）

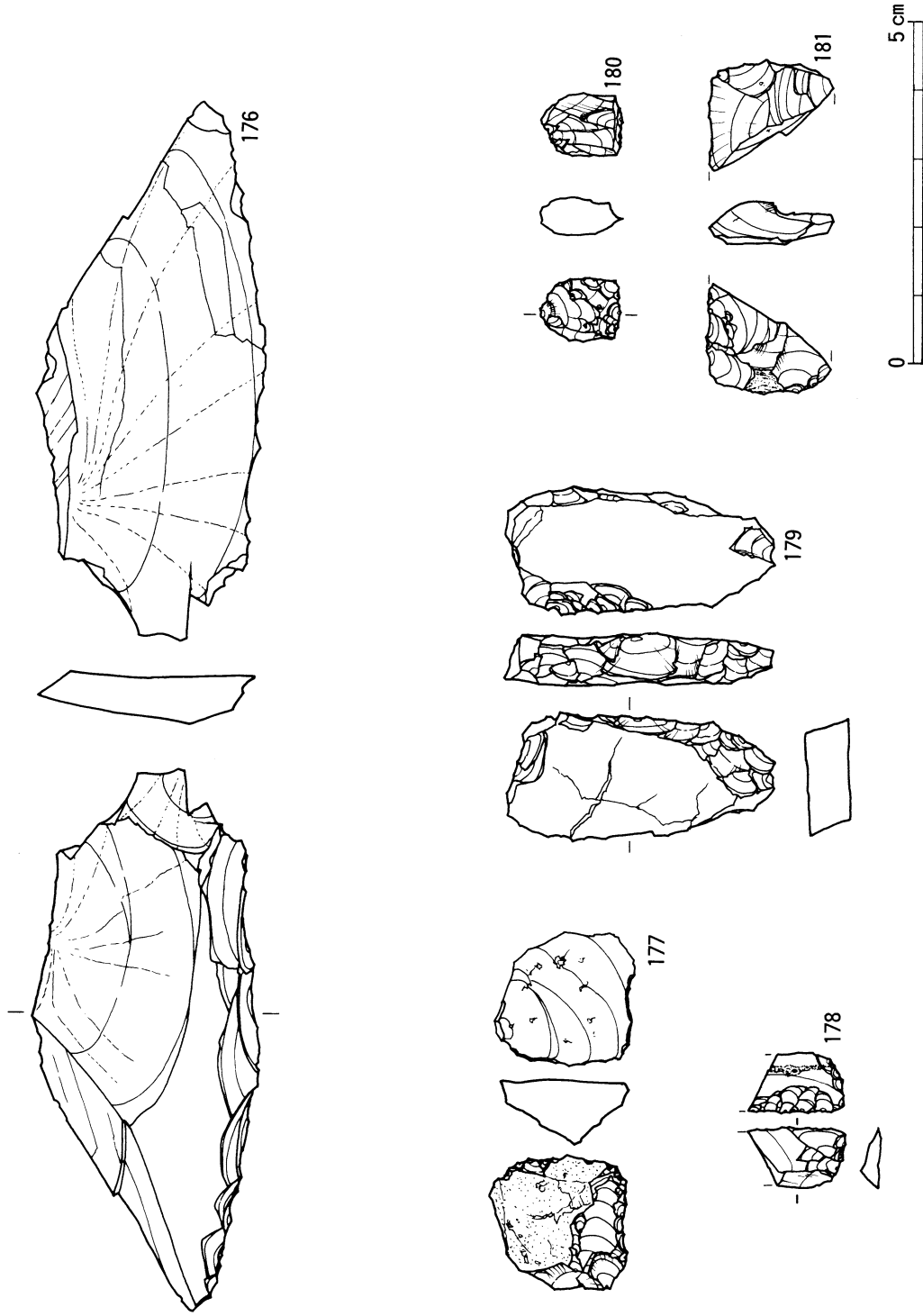
2点とも黒曜石剥片が素材となる。両極に対向する剥離が観察される。



第45図 Cブロック出土遺物5 (剥片1)



第46図 Cブロック出土遺物6 (剥片2)



第47図 Cブロック出土遺物7 (削器、搔器、楔形石器)

水晶石器 (第48図-182~187)

水晶を素材とする用途が不明の石器が6点出土した。182~185はブロックのほぼ中心部分に集中する分布状態である。186はE-1区とE-2区の境付近で出土した。

182と183は同様な形態を示す。上端部は水晶を横に打割した面である。打割された面は結晶の長軸に対して斜めになる。打割面の状態は後の184~186にも共通しているのだが、どの方向からの打撃によるものかよくわからない。おそらく両極技法によるものと思われる。下端部は結晶の先端にあたる部分である。この部分に裏側からの1~2回の加撃により彫器の刃部のようなものが形成されている。183は裏面にも下端部からの剥離が認められる。結晶の稜線部分にはそれとは別に横方向の剥離が2枚認められ、横方向の力が加えられたことを示している。この先端部分には、彫器、楔形石器、ドリル等の機能が考えられる。

184も結晶の軸に対して鋭角に打割された面をもつ。下端部には結晶面側からの剥離が7枚認められる。また、結晶面には下端部から上方へ延びる剥離が2枚認められる。これらの剥離がどのような目的で行われたか不明である。

185は上端面は水晶の分割面である。正面には下端方向からの大きな剥離面が複数観察される。

186は上端面は水晶の分割面である。やや尖った下端部には同一方向からの複数の細かい剥離面が観察される。

187は剥片剥離の打面と同一の打面で剥離された3枚の細い剥離面が認められる。これらの剥離面は細石核の作業面に残されるものに似ている。しかし、作業面の調整がされていない、作業面とする部分に有効な細石刃剥離の痕跡がないなど、細石核として認めることは難しい。

石斧 (第49図-188)

ブロックの西南隅の部分で出土している。ホルンフェルスの棒状の礫を素材とする打製石斧の破片である。基端部及び側面部は丁寧な剥離により整形されている。折断面付近の側面部には敲打調整が観察される。

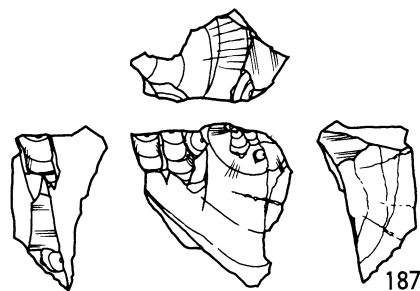
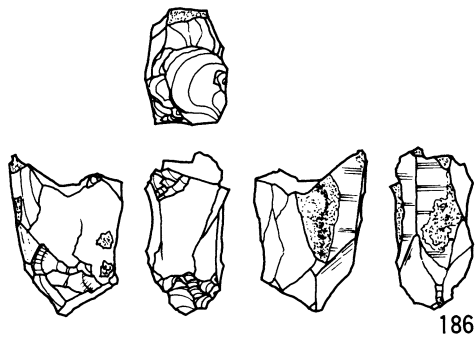
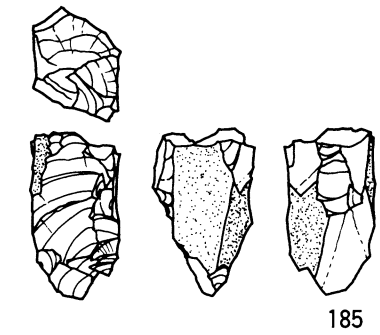
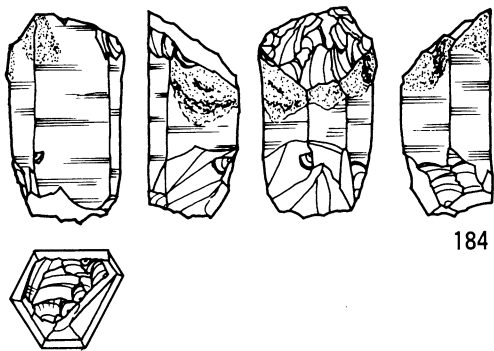
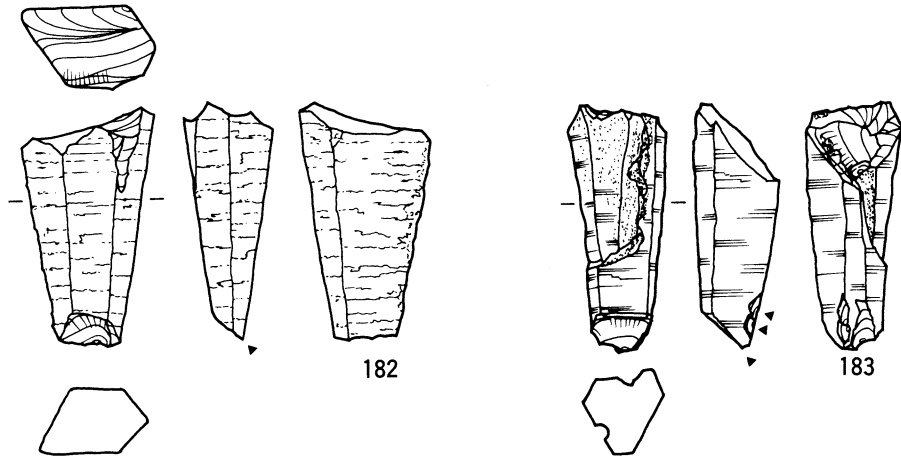
磨石 (第49図-189)

ブロックの西隅のE-1区で出土した。楕円形の砂岩礫を素材とする。表面は使用の結果、平滑になっているが、裏面は風化のため剥落が著しい。

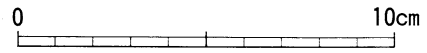
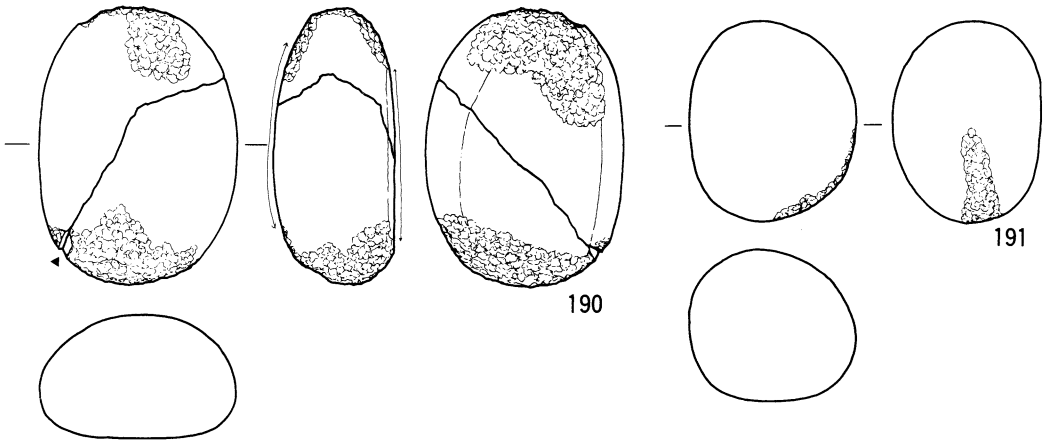
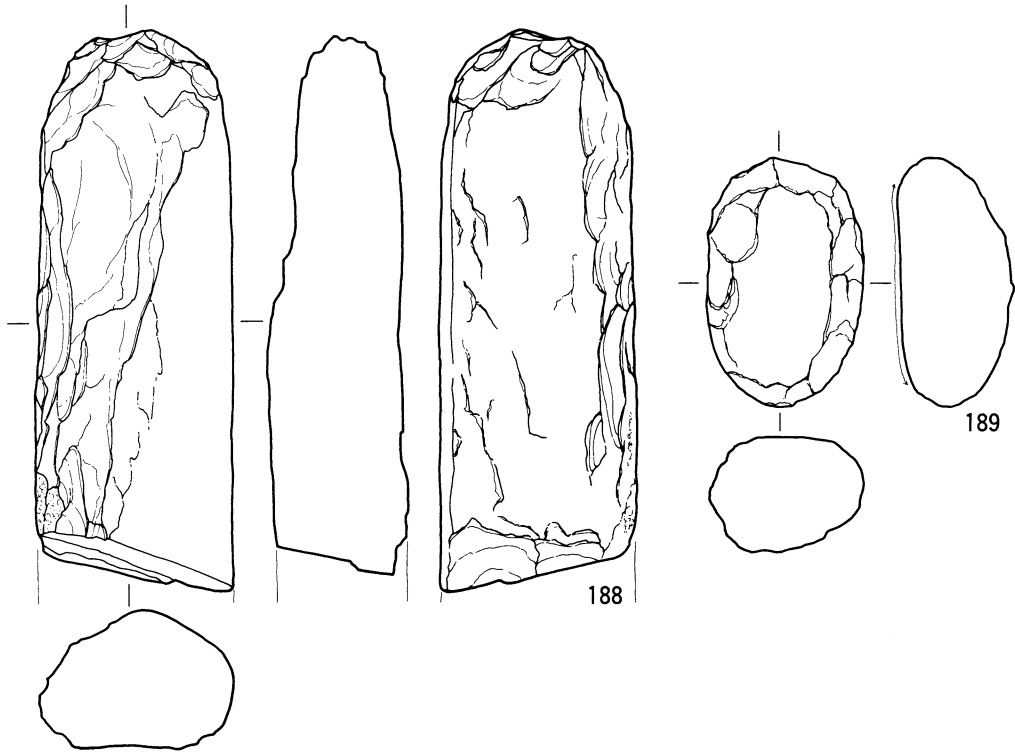
ハンマーストーン (第49図-190・191)

3点出土したが、2点が接合したため、実資料は2点である。

190はブロックの中央付近とそれより約5m西に離れた部分で出土した資料が接合した。砂礫岩を素材とし、表面は平滑で、上端と下端に敲打痕が観察される。正面下端左側からの加撃により2つに割れている。191はブロック東南端で出土し、別な遺物群に属していたと思われる資料である。花崗岩の卵大の礫が素材となる。敲打痕は下端から右側縁部の下半分に観察される。



第48図 Cブロック出土遺物8 (石英石器)



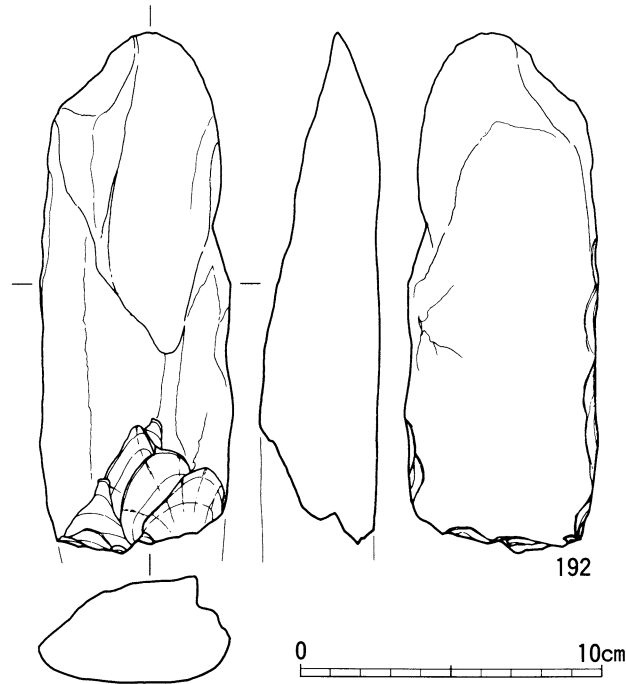
第49図 Cブロック出土遺物9 (石斧、ハンマーストーン)

(4) ブロック外の出土遺物

これまで述べてきたブロック以外の部分から出土した遺物がある。D-9区で土層確認のためにトレンチを深掘りした際に出土したものである。

石斧 (第50図192)

ホルンフェルスの棒状礫を素材とする。基端部分の断面は鋭角であるが、自然面である。下端部分には、4枚の大きな剝離面が観察される。この部分には潰れが見られる。



第50図 ブロック外の出土遺物 (石斧)

3 小 結

石材

石器に使用された石材は黒曜石、水晶、石英、頁岩、チャート、ホルンフェルス、鉄石英、砂岩、花崗岩等である。水晶と石英は本遺跡に近い高隈山系で産出するものである。黒曜石の占める割合が高く、全出土遺物の479点のうちで320点が黒曜石遺物で全体の66.8%にもものぼる。黒曜石は表面観察により、さらに次のように分けられる。

黒曜石 A やや茶色がかかり、部分的に不純物や気泡があるが、きめが細かく良質である。大口市桑ノ木津留産と推定される。

黒曜石 B 濃い黒色で、部分的に不純物があるが、きめが細かく良質である。

黒曜石 C 黒色で、少量の不純物が含まれる。ややきめが荒いが、良質である。

黒曜石 D 透明部分と黒色部分の縞模様が見られる。不純物は含まず、良質である。

黒曜石 E 青灰色で、良質である。長崎産の黒曜石に近い。

黒曜石 F 気泡と不純物が多く、質が悪い。大口市日東産と推定される。

黒曜石 G 淡い灰色で、良質である。

黒曜石 H 表面は風化が著しいが、新しい割れ口は、漆黒色。樋脇町上牛鼻産と推定される。

出土した細石刃の石材には、黒曜石 A、黒曜石 C、黒曜石 D が多用され、総数の74%を占める。細石核では、黒曜石 C と黒曜石 D が半数を占め、黒曜石 A、黒曜石 E、黒曜石 G のものは

見られない。黒曜石の剥片類でも同様な傾向があり、黒曜石Eや黒曜石Gのように良質な黒曜石剥片類は少ないようである。

細石刃（第3表）

細石刃の出土点数は全部で67点、完形品は1点だけで、他の66点は折断あるいは、折れたものである。出土した細石刃の部位は中間部の22点が最も多い。細石核の作業面の長さから判断すると、本遺跡の細石刃の切断は3分割が最も多い分割数と思われ、そのパターンと割合は次のように考えられる。頭部、中間部、尾部に3分割した場合の割合は、頭部：中間部：尾部＝1：1：1、頭中間部と尾部に2分割した場合の割合は、頭中間部：尾部＝1：1、頭部と中尾部に2分割した場合の割合は、頭部：中尾部＝1：1となる。この比率をもとに、分割された部位がすべて揃っている時の数量を頭中部、中間部、中尾部の数量から算出すると、頭部が30点、頭中部が14点、中間部が22点、中尾部が8点、尾部が36点となるはずである。ここで、実際に出土した頭部と尾部の点数をみると、それぞれ14点と8点で計算した数よりはるかに少ない。使用痕のある部位は、頭中部、中間部、中尾部で、出土した以外に使用により折損、消耗したと思われる数量を考えあわせると、実際の頭部と尾部の数量はもっと多くなるはずである。本遺跡以外の場所でも細石刃が製作され、製品が持ち込まれた結果なのか、発掘時の脱漏を示すのか判断に迷う数字である。

次に出土した細石刃の幅と長さについて検討する。幅の計測値では、4～6mmの部分にピークがあり、39点に昇る。長さの計測値では、4～8mmが最も多く、長くなるにつれて漸減していく。長さの計測値はあくまでも折断されたものあるいは、折れたものの測定値であり、接合により完形品に復元できないかぎり正確な数字ではないが、14mmを越すような長い細石刃は極端に少なくなるという傾向を指摘できる。

最後に使用痕のある細石刃についてみてみよう。使用痕が認められたのは、23点で頭中部が6点、中間部が13点、中尾部が4点となっている。これらの計測値を基にして、使用された細石刃の分割前の長さの復元を試みてみたい。

2分割されて使用されたと思われる細石刃の頭中部の平均値は13.31mmで尾部の平均値9.04mmとを合計すると、22.35mmである。同様に頭部の平均値6.98

第3表 細石刃の石材と部位別個数

	頭部	頭中部	中間部	中尾部	尾部	完形	合計
黒曜石A	3	2	9	2	1	—	19
黒曜石B	1	3	2	—	—	—	6
黒曜石C	5	3	4	1	5	—	18
黒曜石D	1	4	2	4	2	—	13
黒曜石E	—	—	2	1	—	—	3
黒曜石F	1	—	—	—	—	1	2
黒曜石G	—	—	2	—	—	—	2
頁岩	—	2	1	—	—	—	3
水晶	1	—	—	—	—	—	1
合計	14	14	22	8	8	1	67
百分率%	20.9	20.9	32.8	11.9	11.9	1.5	100
使用痕の有る点数	—	6	13	4	—	—	23
長さの平均値mm	6.98	13.31	8.66	13.2	9.04	1.45	66サンプル

mmと中尾部の平均値13.2mm（58の数値は特異なので除外する）を合計すると20.18mmである。さらに頭部と尾部と中間部の平均値をあわせると24.68mmという数値になる。24.68mmは出土した細石刃核の作業面長の計測値のうちでも、最長値に近い数字であるが、細石刃剥離が進行するにつれて、打面再生などにより細石刃核の作業面長が短くなるということを考慮すると、妥当な数値といえよう。したがって、実使用に向けた細石刃の長さは20mm以上であったと推定される。ただし、作業面長が15mmに満たない細石刃核も出土しており、7.5mmでも使用痕がある細石刃が認められ、20mm未満のものがすべて使用に向かないということにはならないようである。

細石核

出土した細石核は素材と形態により、次の3つに大別できる。

I類 (125・126)

扁平な礫を素材とし、側面からの1回の加撃より礫を分割し、分割して得られた面をそのまま細石刃剥離作業の打面とする。打面調整、側面調整を行わず、短辺の両端に作業面を持つ。

II類 (124)

水晶を素材とするもので、結晶面を打面とし、打面の調整はごくわずかである。分割面が作業面として使われる。

III類 (64～67・127～134)

黒曜石の小礫、あるいは小剥片を素材とするもので、上記I・II類以外のもの。III類はさらに次のように小分類ができる。

III a類 (65・67・127～131)

細石刃剥離作業面以外の部分（打面、側面、背面）に自然面を残し、素材となった礫の形状が石核の形状に反映している。打面には、自然面の平坦面をそのまま利用するので、打面形成は省略される。打面調整は主に作業面側から行なわれるが、打面全体に及ぶものは少ない。例外的に127のように左側面から、ほぼ全面に及ぶ調整を行なうものもある。側面にも自然面を残すので、側面形成は省略される。側面調整もほとんど行なわないものが多く、128・131は両側面とも自然面のままである。67・127～130のように打面が背面方向に斜行するものが多い。

III b類 (66)

打面と側面の形成及び調整の点ではIII a類と同じであるが、正面と背面の2面に作業面を持ち、2面の作業面は打面を共有する。

III c類 (64・132)

四角錐の形状で、複数の作業面を持ち、作業面が隣接している。64には打面再生が認められ、132では打面転移が認められる。

Ⅲ d (133・134)

上記細分類のⅢ a、Ⅲ b、Ⅲ cに含まれないもの、側面調整、打面調整をおこなわない。Ⅰ類は畦原型細石核である。Ⅱ類やⅢ類と同じブロック内に出土し、分布状況にも偏りはみられない。Ⅱ類は水晶という特殊な石材を使用しているが、広い意味で、西日本全域に分布する野岳型細石核として理解できる資料である。Ⅲ類も細分すれば、前述のように多少の形態的な相違があるものの、野岳型細石核に包括されると考える。

ここで、畦原型細石核について少しふれてみると、畦原型が出土した遺跡としては、宮崎県の寺迫遺跡、通山遺跡、白髪遺跡、東畦原遺跡、西畦原遺跡、松本遺跡、六野原遺跡、二反野遺跡（以上8遺跡は表面採集資料）、船野遺跡、井野遺跡（以上2遺跡は発掘資料）などの宮崎県中部地方を中心とする密集した分布と鹿児島県加治屋園遺跡、加栗山遺跡、（以上2遺跡は発掘資料）が知られていたが、宮崎県中部と鹿児島県の間には分布の空白地帯が存在していた。本遺跡の資料は、この空白地帯を埋める貴重なもので、大隅半島では、志布志町中原遺跡について、2例目の資料である。

石英石核・石英剥片 (24～38)

Aブロックに集中して出土した石英石核・剥片群をどのように解釈するか非常に難しい問題である。第一に石英剥片を素材とした石器が少ないこと、第二に石英剥片を素材とする石器と共通する形態を持つ、他の石材剥片素材の石器がないこと、第三に石英石核・剥片のブロック内における分布域が斜面であり、包含層上面と完掘面の地形図がないため、出土レベルにおける単純な比較ができないことなどが、問題の解決を困難にしている。

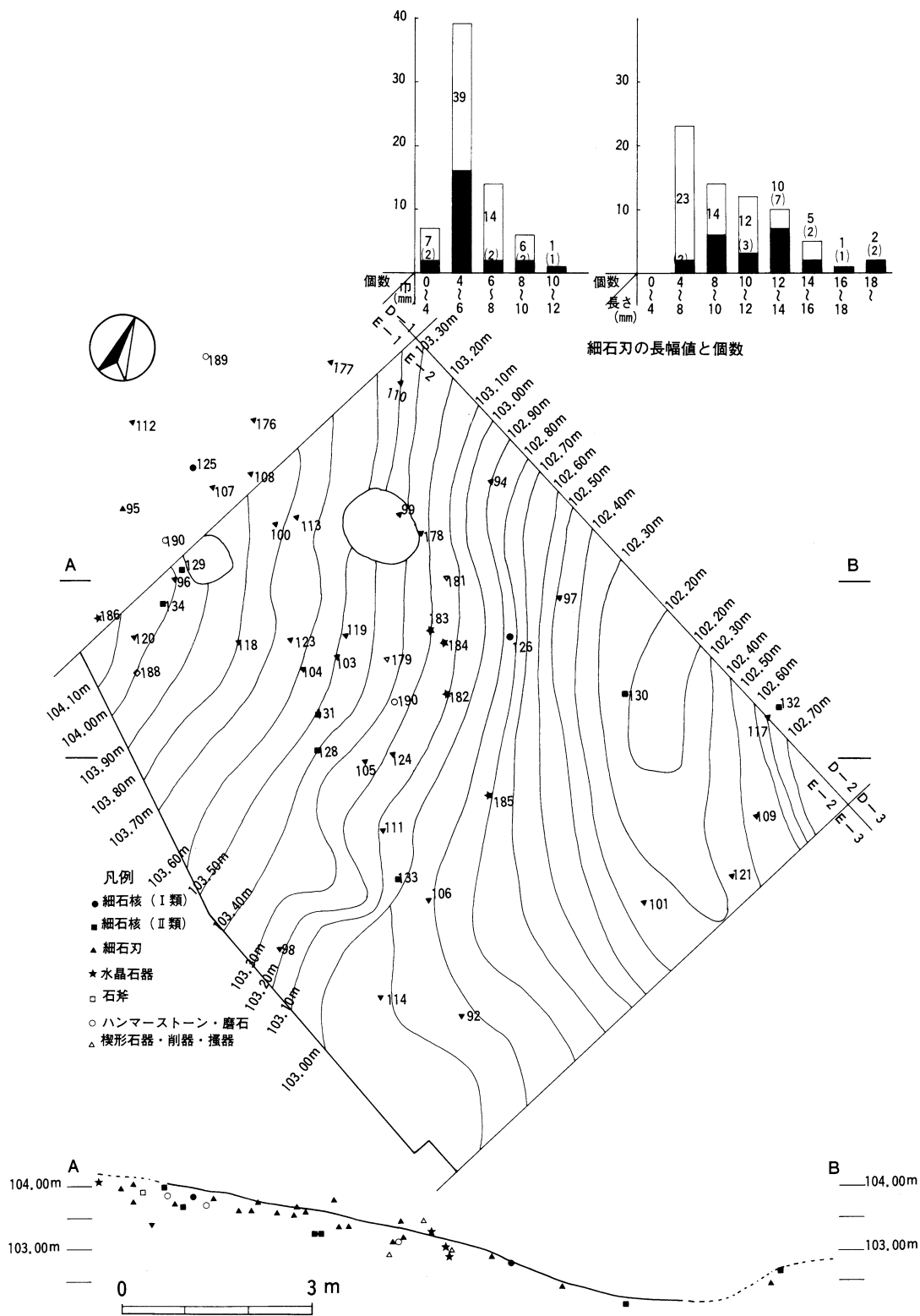
石器組成と石材組成の点から検討すると、スクレーパー類が少なく、黒曜石・頁岩などの良質な石材の剥片は小さなものが多いということが認められる。このことから、良質な（細石核の礫素材の大きさに比して）大型の石材確保が困難な何らかの事情があり、代替品として石英を使用せざるを得なかったのではないかとも思われる。Aブロックでは、石英石核・剥片の分布域が細石器の分布域とほぼ重なっていることから、細石器時代の遺物群としてとらえることが可能ではある。ただし、出土レベル面や層位面から検証することは、現時点不可能である。今後の類例の発見により、検証されることを待ちたい。

水晶石器 (182～186)

水晶を石材とする細石核(124)が出土したのは先述したとおりである。細石核以外に用途不明とした5点の水晶石器群がある。前節では、182と183の結晶先端部の剝離に着目し、楔形石器、彫器、あるいはドリルとしての機能を有する可能性を述べた。これとは別に、結晶の長軸に対する斜めの打割面に着目し、その形状に水晶製細石核との共通点があることから、水晶製細石核の素材と見ることもできる。^{註(1)}

細石器との^{註(2)} 共伴遺物について (第51図)

頁岩製削器(11)と粘板岩製削器(186)の2点は他に同素材の剥片や石器が見当らず、特異な存在である。



第51図 E-2区遺物出土状況・細石刃の長幅値と個数

礫器(39)は1点のみの出土であるが、細石器時代から縄文時代早期までの、長期にわたり使用された石器である。

Bブロックの石斧群(87~90)は局部磨製石斧の可能性を指摘したが、共伴遺物としてとらえることができそうである。

CブロックもE-2区については、コンタ図を資料として提示できる。出土遺物を断面に投影してみた。一部の石器(117・132)は別なグループに属すると思われる。石斧(188)はBブロックの石斧群と異なり、形状が整い、部分的に敲打調整が見られるなどの特徴がある。また、この他に、磨石(189)や明らかに自然面とは異なる平滑な面を持ったハンマーストーン(190)も出土している。

ブロックの同時性について

3ブロックともに細石器石材に共通性は認められるものの、ブロック間の同時性や先後関係については、遺物同志の接合例もなく、不明であると言わざるをえない。

榎崎A遺跡の編年的位置について

九州の細石器文化は先学によって、細石核の形態・型式について研究がなされ、細石核の編年が試みられてきた。ここでは、最近の細石核の編年案を紹介し、本遺跡のCブロックに限定した編年的位置について検討したい。なお、型式については、細石刃剥離までの工程のとりえ方で、研究者間に認定の違いがあるが、煩雑さを避けるために橋昌信氏の分類(橋1979、橋1983)に従い、福井型、野岳型、船野型、畦原型の4つに大別し、各論を紹介をすること。

橋昌信氏は、南九州における細石核の編年を、野岳型+ナイフ形石器・台形石器⇒野岳型⇒野岳型・畦原型+土器(橋1979)とし、畦原型の出現を細石器文化の終末に位置付けている。

木崎康弘氏は、石核行程群による細分類した型式設定を試み、九州における編年を、船野型⇒畦原型・野岳型⇒野岳型主流(主流=筆者加筆以下同じ)+船野型註(3)⇒福井型主流(土器出現)(木崎1981)とし、畦原型の出現をかなり古い段階に位置付けている。

小畑弘己氏は、九州細石刃文化の再編成を行い、製作技法の違いから九州の細石核を細別7大別4に分類し、東九州地方の編年を、船野型のみ⇒船野型・野岳型⇒船野型・野岳型・畦原型註(4)としている。

本遺跡で出土した細石核には野岳型と畦原型がある。野岳型が九州地方において、長期にわたり使用されていたということは、各論の認めるところである。畦原型については、橋氏と小畑氏は、細石器文化の終末期に位置付けている。木崎氏の論の中では畦原型の継続期間が明確に読み取れないが、野岳型主流、福井型主流の時期に傍流として畦原型が存在したともとれる

これまで野岳型と畦原型註(5)が出土した鹿児島県内の遺跡としては、加栗山遺跡と加治屋園遺跡の2遺跡である。加栗山遺跡では、石鏃や石皿といった縄文的遺物が出土し、加治屋園遺跡では、粘土紐貼り付け文土器が出土し、両遺跡は南九州における細石器文化を考える上で重要な位置を占めている。土器を伴わない野岳型+畦原型の存在する可能性は早くから示唆されていた(橋1979)。加栗山遺跡が、これにあたるかどうか検討を要するが、加栗山遺跡の細石器

文化は土器出現直前に位置付けられる（小畑1983）とされている。一方、加治屋園遺跡は、土器の共伴から、最も新しい土器出現後の時期に位置付けられている（橋1979、小畑1983）。

2 遺跡とも貴重な遺物が出土し、南九州の独特な細石器文化を理解するために、ユニットの捉え方や畦原型細石核と加治屋園型細石核の関連など検討を要する課題が多いとされている。これらの検討により、本遺跡Cブロックの位置付けも明確になるであろう。現時点では、共伴遺物との関連から加栗山遺跡よりやや古い段階に位置付けることが妥当であろうと思われる。

（児玉）

註

註1 松沢亜生氏に御教示いただいた。

註2 「共伴」という言葉は層位的な検討、地形や石材等の検討を必要とする。これらによりブロックをさらに小さなグループに分けられるかどうか等を慎重に検討した後に、使用すべきであると考え。しかし、発掘資料が少ない、地形図は一部しか提示できない等の理由により、ここでは発掘時の分層に従い、第Ⅶ層から出土した遺物を共伴関係にあるとして捉えることにする。

註3 ここでいう野岳型は木崎氏の矢出川型と休場型、福井型は泉福寺型にそれぞれあたり、畦原型は桑鶴土橋型をふくむものとする。

註4 ここでいう福井型は小畑氏のAⅠ型とAⅡ型、野岳型はBⅠ型とBⅡ型、船野型はC型、畦原型はDⅠ型とDⅡ型にそれぞれあたる。

註5 ここでは加治屋園型とされたものを畦原型に含まれるものとして捉えた。

引用参考文献

- 茂山 護、大野寅夫 「児湯郡下の旧石器」 宮崎考古 3 1977
茂山 護 「畦原型細石核」 宮崎考古 6 1980
宮崎県教育委員会 「井野遺跡」 宮崎県文化財調査報告書第34集 1991
鹿児島県教育委員会 「加治屋園遺跡・木ノ山遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (14) 鹿児島県教育委員会 1981
鹿児島県教育委員会 「加栗山遺跡・神ノ木山遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (16) 鹿児島県教育委員会 1981
鹿児島県志布志町教育委員会「中原遺跡」 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 1985
橋 昌信 「九州地方の細石器文化」 駁台史学 47 1979
橋 昌信 「細石器（九州地方）」 季刊考古学 4 1983
橋 昌信 「九州における細石器文化の共伴遺物」 肥後考古 5 1985
木崎康弘 「九州地方の細石核」 熊大史学 55・56 1981
小畑弘己 「九州の細石刃文化」 物質文化 41 1983

第4表 石器組成表

Aブロック

	黒曜石	水晶・石英	頁岩	チャート	ホルンフェルス	鉄石英	その他	合計
細石刃	9	-	1	-	-	-	-	10
細石核	-	-	-	-	-	-	-	-
楔形石器	-	-	-	-	-	-	-	-
削器・類	-	2	1	-	-	-	-	3
剥片	5	27	5	-	1	-	1	39
石核	-	23	-	-	-	-	-	23
チップ	9	31	-	-	-	-	-	40
石斧	-	-	-	-	-	-	-	-
礫器	-	-	1	-	-	-	-	1
ハンマーストーン	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	1 挟入石器	-	-	-	-	-	1
合計	23	84	8	-	1	-	1	117
百分率%	19.7	71.8	6.8	-	0.8	-	0.8	100

Bブロック

	黒曜石	水晶・石英	頁岩	チャート	ホルンフェルス	鉄石英	その他	合計
細石刃	23	1	-	-	-	-	-	24
細石核	4	-	-	-	-	-	-	4
楔形石器	-	-	-	-	-	-	-	-
削器・類	-	-	-	-	-	-	-	-
剥片	17	3	-	1	-	-	-	21
石核	-	-	-	-	-	-	-	-
チップ	57	1	-	-	-	-	-	58
石斧	-	-	-	-	4	-	-	4
礫器	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンマーストーン	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	101	5	-	1	4	-	-	111
百分率%	91.0	4.5	-	0.9	3.6	-	-	100

Cブロック

	黒曜石	水晶・石英	頁岩	チャート	ホルンフェルス	鉄石英	その他	合計
細石刃	31	-	2	-	-	-	-	33
細石核	8	1	1	-	-	-	1	11
楔形石器	2	-	-	-	-	-	-	2
削器・類	1	1	-	-	-	1	1	4
剥片	34	5	14	1	2	1	-	57
石核	-	1	-	-	-	-	-	1
チップ	120	7	4	1	-	-	-	132
石斧	-	-	-	-	1	-	-	1
礫器	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンマーストーン	-	-	-	-	-	-	2	2
その他	-	6	-	-	-	-	1	7
合計	196	21	21	2	3	2	5	249
百分率%	78.7	8.4	8.4	0.8	1.2	0.8	2.0	100

全体

	黒曜石	水晶・石英	頁岩	チャート	ホルンフェルス	鉄石英	その他	合計
細石刃	63	1	3	-	-	-	-	67
細石核	12	1	1	-	-	-	1	15
楔形石器	2	-	-	-	-	-	-	2
削器・類	1	3	1	-	-	1	1	7
剥片	56	35	19	2	3	1	1	117
石核	-	24	-	-	-	-	-	24
チップ	186	39	4	1	-	-	-	230
石斧	-	-	-	-	6	-	-	6
礫器	-	-	-	-	1	-	-	1
ハンマーストーン	-	-	-	-	-	-	2	2
その他	-	7	-	-	-	-	1	8
合計	320	10	28	3	10	2	6	479
百分率%	66.8	23.0	6.0	0.6	2.0	0.4	1.3	100

第5表 細石刃一覧表(1)

番号	ブロック	登録番号	出土区	標高m	石 材	部位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	背面の稜	観察所見
1	A	10740	C-1	104.115	頁 岩	頭中	1.75	0.75	0.20	0.32	3	使用痕有
2	A	10762	C-1	103.785	黒曜石D	頭中	1.30	0.70	0.20	0.19	1	
3	A	10817	C-1	104.105	黒曜石C	頭中	1.30	0.60	0.25	0.18	2	使用痕有
4	A	10860	C-1	103.420	黒曜石B	頭中	1.55	0.50	0.12	0.08	2	使用痕有
5	A	10794	C-1	103.945	黒曜石A	頭中	1.20	0.45	0.14	0.07	2	
6	A	10797	C-1	103.960	黒曜石A	頭	0.68	0.45	0.10	0.03	1	
7	A	10728	C-1	103.965	黒曜石A	中	0.75	0.35	0.15	0.05	2	使用痕有
8	A	12192	C-1	102.475	黒曜石E	中	0.90	0.50	0.10	0.05	2	使用痕有
9	A	10753	C-1	103.975	黒曜石A	中	0.95	0.50	0.10	0.06	2	
10	A	10843	C-1	103.720	黒曜石C	中尾	1.35	0.52	0.20	0.13	1	使用痕有
40	B	10941	D-1	103.230	黒曜石C	頭中	1.35	0.75	0.18	0.16	2	
41	B	10896	D-1	103.375	黒曜石C	頭	0.85	0.65	0.18	0.12	2	
42	B	10973	D-1	103.405	黒曜石C	頭	0.90	0.85	0.20	0.19	3	
43	B	10871	D-1	103.630	黒曜石C	頭	0.50	0.50	0.15	0.05	2	
44	B	10689	D-1	104.285	黒曜石C	頭	0.75	0.80	0.14	0.09	2	
45	B	11145	D-1	103.050	黒曜石C	頭中	1.10	0.55	0.18	0.12	4	
46	B	10898	D-1	103.335	黒曜石A	頭	0.55	0.40	0.06	0.01	1	
47	B	10929	D-1	103.295	水 晶	頭	0.80	0.50	0.08	0.03	2	
48	B	10935	D-1	103.330	黒曜石D	中	0.84	0.60	0.12	0.07	1	使用痕有
49	B	10876	D-1	103.530	黒曜石A	中	0.95	0.55	0.08	0.04	2	
50	B	10658	D-1	103.820	黒曜石C	中	1.25	0.60	0.18	0.13	1	使用痕有
51	B	10893	D-1	103.415	黒曜石C	中	1.04	0.32	0.13	0.06	1	使用痕有
52	B	11148	D-1	102.935	黒曜石G	中	0.88	0.47	0.15	0.08	2	使用痕有
53	B	10866	D-1	103.705	黒曜石C	中	0.65	0.50	0.19	0.07	3	
54	B	10889	D-1	103.305	黒曜石A	中	1.05	0.55	0.25	0.13	3	使用痕有
55	B	10926	D-1	103.295	黒曜石A	中	0.85	0.50	0.20	0.08	2	使用痕有
56	B	11152	D-1	103.335	黒曜石D	中尾	1.20	0.60	0.20	0.12	3	
57	B	10875	D-1	103.635	黒曜石C	尾	1.05	0.70	0.37	0.20	2	
58	B	10626	C-1	102.475	黒曜石E	中尾	2.40	0.90	0.15	0.29	1	使用痕有
59	B	10878	D-1	103.510	黒曜石D	中尾	1.55	0.95	0.25	0.34	2	
60	B	10870	D-1	103.590	黒曜石C	尾	0.85	0.80	0.14	0.08	1	
61	B	10937	D-1	103.320	黒曜石C	尾	1.08	0.72	0.15	0.07	1	
62	B	10699	D-1	103.950	黒曜石C	尾	1.12	0.54	0.17	0.10	2	
63	B	10928	D-1	103.195	黒曜石A	中尾	1.20	0.80	0.15	0.12	1	
91	C	10968	E-3	102.160	黒曜石F	完形	1.45	0.70	0.24	0.22	1	
92	C	12118	E-2	102.770	黒曜石D	頭中	1.60	1.00	0.15	0.23	2	使用痕有
93	C	10960	E-3	102.260	黒曜石D	頭中	1.90	0.80	0.30	0.36	1	使用痕有
94	C	12026	E-2	102.860	黒曜石D	頭中	1.32	0.60	0.28	0.17	1	使用痕有
95	C	10590	E-1	103.985	黒曜石H	頭中	1.50	0.85	0.20	0.25	1	
96	C	12272	E-2	103.735	黒曜石A	頭中	1.16	0.60	0.18	0.11	1	
97	C	12090	E-2	102.405	頁 岩	中	1.30	0.60	0.15	0.12	1	使用痕有
98	C	12002	E-2	103.190	黒曜石B	頭中	1.05	0.55	0.15	0.09	1	

第6表 細石刃一覧表(2)

番号	ブロック	登録番号	出土区	標高m	石 材	部位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	背面の稜	観察所見
99	C	11977	E-2	103.438	黒曜石C	頭	0.76	0.62	0.11	0.05	1	
100	C	12248	E-2	103.580	黒曜石H	頭	0.80	0.65	0.15	0.08	2	
101	C	11999	E-2	102.310	黒曜石A	頭	0.58	0.70	0.08	0.04	2	
102	C	10950	E-3	102.790	黒曜石F	頭	0.80	0.50	0.20	0.10	2	
103	C	12075	E-2	103.395	頁 岩	頭中	0.55	0.25	0.08	0.02	1	
104	C	12010	E-2	103.560	黒曜石A	頭	0.65	0.47	0.07	0.02	1	
105	C	12103	E-2	103.120	黒曜石A	頭	0.55	0.40	0.10	0.03	2	
106	C	12124	E-2	102.780	黒曜石H	頭	0.60	0.50	0.08	0.02	1	
107	C	12236	E-1	103.800	黒曜石C	中	0.50	0.32	0.10	0.02	1	
108	C	12265	E-2	103.625	黒曜石E	中	0.85	0.50	0.10	0.05	2	使用痕有
109	C	12113	E-2	102.295	黒曜石D	中尾	1.40	0.60	0.12	0.13	2	使用痕有
110	C	12193	E-2	103.165	黒曜石A	中	1.20	0.50	0.20	0.10	1	使用痕有
111	C	12058	E-2	102.010	黒曜石G	中	0.75	0.58	0.15	0.06	1	使用痕有
112	C	10592	E-1	103.785	黒曜石B	中	0.92	0.55	0.24	0.11	2	
113	C	12223	E-2	103.675	黒曜石A	中	0.75	0.60	0.12	0.03	2	
114	C	12207	E-2	102.535	黒曜石D	中	0.90	1.10	0.20	0.16	1	使用痕有
115	C	12161	E-2	102.745	黒曜石B	中	0.68	0.90	0.30	0.21	1	
116	C				黒曜石A	中	0.65	0.50	0.10	0.04	1	
117	C	12110	E-2	102.455	黒曜石A	中	0.45	0.50	0.10	0.03	2	
118	C	12259	E-2	103.630	黒曜石D	尾	0.80	0.55	0.18	0.06	2	
119	C	12143	E-2	103.330	黒曜石C	尾	0.90	0.56	0.10	0.07	2	
120	C	12221	E-2	104.030	黒曜石A	尾	0.58	0.30	0.08	0.02	1	
121	C	12181	E-2	102.130	黒曜石D	中尾	1.22	0.50	0.22	0.13	2	
122	C	10957	E-3	102.510	黒曜石D	尾	0.85	0.60	0.18	0.08	3	
123	C	12073	E-2	103.545	黒曜石A	中尾	1.32	0.50	0.15	0.10	3	使用痕有

第7表 細石核一覧表

番号	ブ ッ ク	登 録 番 号	出 土 区	標 高 m	類 別	石 材	長 さ cm	幅 cm	厚 さ cm	作 業 面 長 cm	作 業 面 幅 cm	重 量 g	観 察 所 見
64	B	10658	D-1	103.820	Ⅲ	黒曜石C	1.35	1.50	1.35	(1.40) 1.40	(1.25) 1.30	2.27	作業面2面を持つ 打面再生有
65	B	10693	D-1	103.915	Ⅲ	黒曜石C	1.40	2.05	1.35	1.30	1.25	3.95	
66	B	10624	D-2	102.405	Ⅲ	黒曜石B	1.80	1.55	1.73	1.75 2.05	1.45 1.05	4.47	作業面2面を持つ
67	B	11146	D-1	102.895	Ⅲ	黒曜石C	2.02	1.32	1.00	1.95	0.90	1.96	剥片素材
124	C	12057	E-2	103.110	Ⅱ	水 晶	2.20	2.30	2.20	1.85 1.50	1.55 1.40	12.43	作業面2面を持つ
125	C	10591	E-1	103.840	I	砂 岩	2.88	2.90	0.95	2.45 0.85	1.05 0.45	10.10	作業面2面を持つ
126	C	12018	E-2	102.835	I	頁 岩	2.68	2.06	0.85	2.65 2.75	0.85 0.70	5.86	作業面2面を持つ 両極技法による分割
127	C	10543	D-3	102.461	Ⅲ	黒曜石C	2.25	1.60	1.17	2.20	1.10	3.80	斜行打面
128	C	12062	E-2	103.325	Ⅲ	黒曜石D	2.55	1.45	1.05	2.05	0.85	3.63	斜行打面
129	C	12271	E-2	103.745	Ⅲ	黒曜石B	2.60	1.52	1.95	2.60	1.80	6.66	斜行打面
130	C	12094	E-2	102.150	Ⅲ	黒曜石D	1.95	0.85	1.45	1.95	1.15	2.45	斜行打面
131	C	12166	E-2	103.250	Ⅲ	黒曜石D	2.50	0.90	0.98	2.30	0.80	2.95	作業面3面を持つ 打面転移
132	C	11994	E-2	102.668	Ⅲ	黒曜石C	1.20	1.20	1.20	(1.05) 1.15	(1.15) 1.30	1.98	
133	C	11984	E-2	103.128	Ⅲ	黒曜石F	1.24	1.12	1.05	(1.05) 1.25	0.80 0.80	1.31	
134	C	12235	E-2	103.930	Ⅲ	黒曜石F	1.53	1.10	0.95	1.50	(1.05)	1.69	

第8表 石器一覧表(1)

番号	ブロック	登録番号	出土区	標高m	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	観察所見
11	A	10752	C-1	103.875	削器	頁岩	6.60	5.60	0.90	32.00	
12	A	10824	C-1	103.965	削器	石英	3.25	4.80	1.90	28.70	
13	A	10784	C-1	103.745	削器	石英	3.15	2.25	0.95	8.16	
14	A	10859	C-1	103.575	抉入石器	石英	2.85	1.70	0.70	3.89	
15	A	10761	C-1	103.750	剥片	黒曜石C	1.50	0.74	0.28	0.22	
16	A	10832	C-1	103.675	剥片	黒曜石A	1.44	1.26	0.47	0.85	
17	A	10756	C-1	103.710	剥片	頁岩	1.60	0.85	0.24	0.38	
18	A	10700	D-1	104.265	剥片	頁岩	2.00	1.30	0.51	0.79	
19	A	10749	C-1	103.415	剥片	頁岩	1.71	1.68	0.35	0.80	
20	A	10842	C-1	103.495	剥片	頁岩	1.80	3.50	0.84	6.18	複合打面
21	A	10827	C-1	103.830	剥片	玉ずい	2.00	2.60	0.60	3.17	
22	A	10828	C-1	103.705	剥片	頁岩	2.05	1.92	0.72	1.88	
23	A	10839	C-1	103.455	剥片	黒曜石A	1.90	2.48	0.94	3.80	
24	A	16773	C-1	103.395	剥片	石英	3.15	2.08	0.95	5.92	
25	A	10911	C-1	103.370	剥片	水晶	1.90	2.65	0.70	3.61	
26	A	10815	C-1	103.990	剥片	石英	2.00	1.60	0.80	2.00	
27	A	10830	C-1	103.710	剥片	石英	2.85	1.60	0.70	3.54	
28	A	10772	C-1	103.850	剥片	石英	3.50	3.00	0.75	6.82	
29	A	10745	C-1	104.383	剥片	石英	2.80	2.30	1.50	5.93	
30	A	10799	C-1	103.745	剥片	石英	1.90	1.70	0.85	3.20	
31	A	10791	C-1	103.380	剥片	石英	1.50	1.95	0.90	2.50	
32	A	10747	C-1	103.345	剥片	石英	1.90	2.30	0.65	2.46	
33	A	10765	C-1	103.875	剥片	石英	5.73	5.30	2.40	39.72	
34	A	10735	C-1	104.260	剥片	石英	5.70	5.52	2.45	63.73	
35	A	10800	C-1	103.770	石核	石英	5.50	2.95	4.05	72.26	
36	A	10737	C-1	104.295	石核	石英	4.70	4.92	2.40	43.59	搔器の可能性有
37	A	10841	C-1	103.385	石核	石英	2.58	3.50	4.37	51.86	両極技法による分割
38	A	10734	C-1	104.285	石核	石英	3.20	4.42	4.60	70.78	
39	A	10834	C-1	103.760	礫器	ホルス	11.82	10.75	4.85	880.00	片刃
68	B	10701	D-1	103.440	剥片	黒曜石A	1.18	0.70	0.30	0.19	
69	B	10908	D-1	103.335	剥片	黒曜石C	0.74	0.40	0.17	0.03	
70	B	10938	D-1	103.255	剥片	黒曜石C	0.70	0.44	0.12	0.04	
71	B	10942	D-1	103.285	剥片	黒曜石B	0.74	0.90	0.16	0.09	
72	B	10630	C-1	102.390	剥片	黒曜石C	1.52	0.82	0.20	0.17	
73	B	10613	D-2	102.565	剥片	黒曜石C	1.58	0.83	0.23	0.18	
74	B	10614	D-2	102.620	剥片	黒曜石C	1.50	1.80	0.50	1.05	使用痕有
75	B	10974	D-1	103.280	剥片	黒曜石A	1.41	1.28	0.30	0.37	
76	B	10940	D-1	103.235	剥片	黒曜石C	1.49	2.05	0.32	0.97	
77	B	10888	D-1	103.300	剥片	黒曜石A	1.70	2.35	0.58	1.64	
78	B	10868	D-1	103.685	剥片	黒曜石A	1.45	1.60	0.58	1.62	
79	B	10690	D-1	104.060	剥片	黒曜石B	1.30	1.30	0.50	0.48	
80	B	10939	D-1	103.255	剥片	黒曜石C	1.50	2.35	0.61	1.30	

第9表 石器一覧表(2)

番号	ブロック	登録番号	出土区	標高m	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	観察所見
81	B	10625	C-1	102.490	剥片	黒曜石B	1.66	2.20	0.51	1.55	
82	B	10920	D-1	103.340	剥片	黒曜石C	2.30	0.87	0.57	1.15	
83	B	10683	D-2	104.335	剥片	黒曜石C	1.43	2.35	0.43	1.10	
84	B	10684	D-1	104.255	剥片	黒曜石C	2.75	2.00	1.70	5.76	二次加工痕, 使用痕有
85	B	10619	D-2	102.535	剥片	石英	3.50	2.85	1.15	11.16	
86	B	10895	D-1	103.425	剥片	チャート	3.85	6.65	1.15	28.00	二次加工痕, 使用痕有
87	B	10892	D-1	103.415	石斧	ホルン フェルス	8.90	6.20	2.32	180.00	局部磨製?
88	B	10886	D-1	103.340	石斧	ホルン フェルス	14.90	4.90	2.70	245.00	局部磨製?
89	B	10698	D-1	103.925	石斧	ホルン フェルス	8.30	4.15	1.10	43.00	局部磨製?
90	B	10709	D-1	103.795	石斧	ホルン フェルス	9.30	3.85	1.95	78.00	局部磨製?
135	C	12114	E-2	102.240	剥片	黒曜石A	1.82	0.76	0.32	0.23	
136	C	12177	E-2	102.710	剥片	黒曜石A	2.20	0.94	0.62	0.93	
137	C	12076	E-2	103.420	剥片	黒曜石H	1.50	0.70	0.35	0.30	
138	C	12214	E-1	104.065	剥片	黒曜石G	1.42	0.70	0.42	0.24	
139	C	12274	E-2	103.500	剥片	頁岩	0.82	0.70	0.16	0.06	
140	C	12206	E-2	102.040	剥片	黒曜石F	0.85	0.55	0.24	0.07	
141	C	12165	E-2	103.360	剥片	黒曜石F	0.88	0.70	0.21	0.10	
142	C	10946	E-3	102.250	剥片	黒曜石A	1.10	0.90	0.21	0.13	
143	C	12129	E-2	103.555	剥片	黒曜石C	0.93	0.37	0.15	0.08	
144	C	12253	E-2	103.995	剥片	頁岩	1.05	0.40	0.30	0.10	
145	C	12022	E-2	103.600	剥片	黒曜石H	1.00	0.80	0.15	0.09	
146	C	11975	E-2	103.348	剥片	黒曜石H	1.24	1.10	0.22	0.29	
147	C	12195	E-2	103.285	剥片	黒曜石A	1.40	1.67	0.57	1.03	
148	C	12030	E-2	103.625	剥片	黒曜石A	2.00	2.07	0.57	1.48	
149	C	12267	E-3	102.199	剥片	黒曜石A	1.40	1.08	0.54	0.58	
150	C	12247	E-2	103.675	剥片	黒曜石B	1.48	1.70	0.33	0.63	
151	C	12242	E-2	103.805	剥片	黒曜石A	2.00	1.18	0.44	0.89	
152	C	11988	E-2	102.993	剥片	黒曜石D	2.14	1.35	0.38	0.86	
153	C	10596	E-1	103.695	剥片	黒曜石A	3.54	2.04	1.07	6.38	
154	C	10634	D-1	103.595	剥片	黒曜石C	1.45	1.30	0.36	0.47	
155	C	12012	E-2	103.615	剥片	黒曜石B	1.20	1.34	0.29	0.54	
156	C	12120	E-2	102.830	剥片	黒曜石B	2.20	1.52	0.53	1.07	
157	C	12202	E-2	102.900	剥片	黒曜石H	1.65	2.25	0.35	0.57	
158	C	12270	E-2	103.465	剥片	黒曜石C	1.70	1.60	0.26	0.64	
159	C	12208	E-2	102.340	剥片	黒曜石C	1.65	1.80	0.60	1.09	
160	C	12164	E-2	102.985	剥片	黒曜石C	2.04	1.07	0.48	0.96	
161	C	12219	E-1	103.905	剥片	黒曜石C	2.15	1.90	0.61	1.58	
162	C	12125	E-2	102.150	剥片	黒曜石C	1.44	1.50	0.24	0.45	
163	C	10947	E-3	102.610	剥片	黒曜石C	1.86	1.30	0.60	1.09	
164	C	12137	E-2	103.205	剥片	黒曜石C	2.87	1.88	0.60	2.68	
165	C	12251	E-1	103.990	剥片	頁岩	1.80	0.60	0.22	0.21	
166	C	12146	E-2	103.105	剥片	頁岩	1.00	1.62	0.15	0.20	

第10表 石器一覧表(3)

番号	ブロック	登録番号	出土区	標高m	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	観察所見
167	C	12276	E-2	103.510	剥片	頁岩	2.94	2.25	0.70	3.52	複合打面
168	C	12025	E-2	102.990	剥片	頁岩	2.60	3.30	0.90	5.77	使用痕有
169	C	12147	E-2	102.915	剥片	頁岩	1.80	1.75	0.60	1.81	
170	C	12032	E-2	103.275	剥片	頁岩	1.65	1.22	0.22	0.41	
171	C	12218	E-2	103.965	剥片	チャート	1.70	1.30	0.20	0.50	
172	C	12216	E-1	104.015	剥片	鉄石英	1.08	2.75	0.70	1.46	使用痕有
173	C	12101	E-2	102.960	剥片	水晶	1.70	1.00	0.30	0.57	結晶先端部
174	C	10966	E-3	102.350	剥片	水晶	1.65	2.15	0.60	1.75	
175	C	12056	E-2	102.035	剥片	水晶	1.55	2.50	0.40	2.11	
176	C	10595	E-1	103.765	削器	粘板岩	3.30	7.90	0.80	20.00	
177	C	10598	E-6	103.575	搔器	黒曜石C	2.05	1.95	0.95	3.45	
178	C	11978	E-2	103.438	小型削器	鉄石英	1.40	0.90	0.30	0.37	組み合せ石器 の一種か?
179	C	12015	E-2	102.910	削器	石英	3.90	1.85	0.78	7.09	
180	C	12243	E-2	103.780	楔形石器	黒曜石A	1.20	0.95	0.65	0.77	
181	C	12190	E-2	102.935	楔形石器	黒曜石H	1.80	1.60	0.62	1.28	
182	C	12186	E-2	102.845	彫器?	水晶	3.10	1.75	1.20	6.31	細石核ブラン クの可能性
183	C	12017	E-2	103.245	彫器?	水晶	3.20	1.33	1.18	4.29	細石核ブラン クの可能性
184	C	12081	E-2	103.090	細石核ブ ランク?	水晶	2.80	1.55	1.25	6.51	
185	C	12005	E-2	103.805	細石核ブ ランク?	水晶	2.20	1.15	1.35	3.94	
186	C	12232	E-1	104.090	細石核ブ ランク?	水晶	2.10	1.50	1.10	3.87	
187	C	10962	E-3	102.175	細石核?	水晶	2.10	1.30	2.10	4.28	
188	C	12241	E-2	103.920	石斧	ホルン フェルス	14.95	5.30	3.80	460.00	
189	C	10591	E-1	103.700	磨石	砂岩	6.60	4.20	3.10	110.00	
190	C	12171 12238	E-2 E-1	103.120 103.875	ハンマー ストーン	砂礫岩	7.43	5.32	3.25	200.00	平滑な磨面有
191	C	10967	E-3	102.175	ハンマー ストーン	花崗岩	5.35	4.45	3.98	140.00	
192	-	1504	D-9	104.958	石斧	ホルン フェルス	17.25	6.48	3.98	530.00	

第Ⅵ章 縄文時代

第1節 調査の概要

1 調査の概要と調査の方法

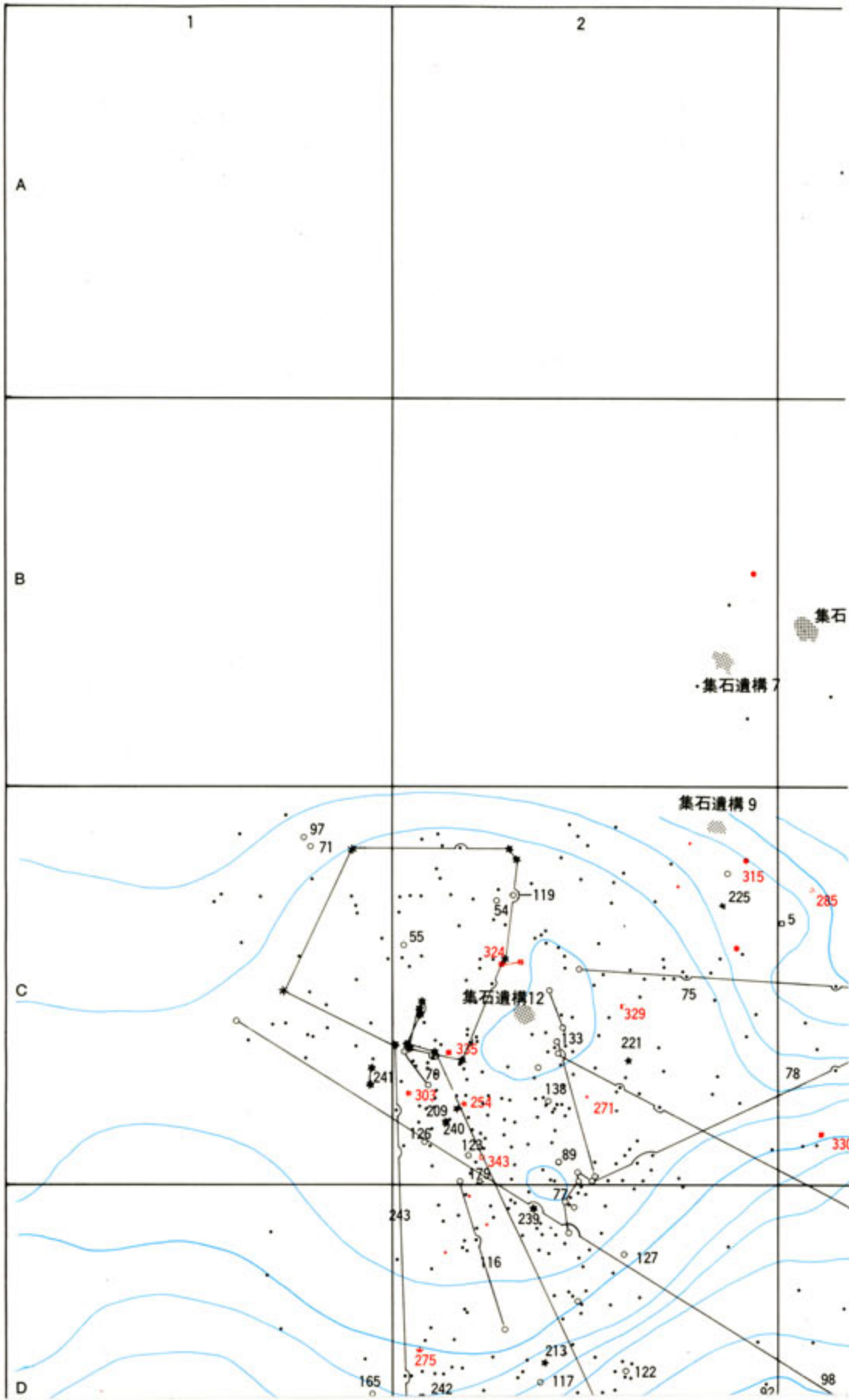
縄文時代の調査は、確認調査の結果を基に上層の平安～古墳時代・弥生時代の調査終了後、行なった。

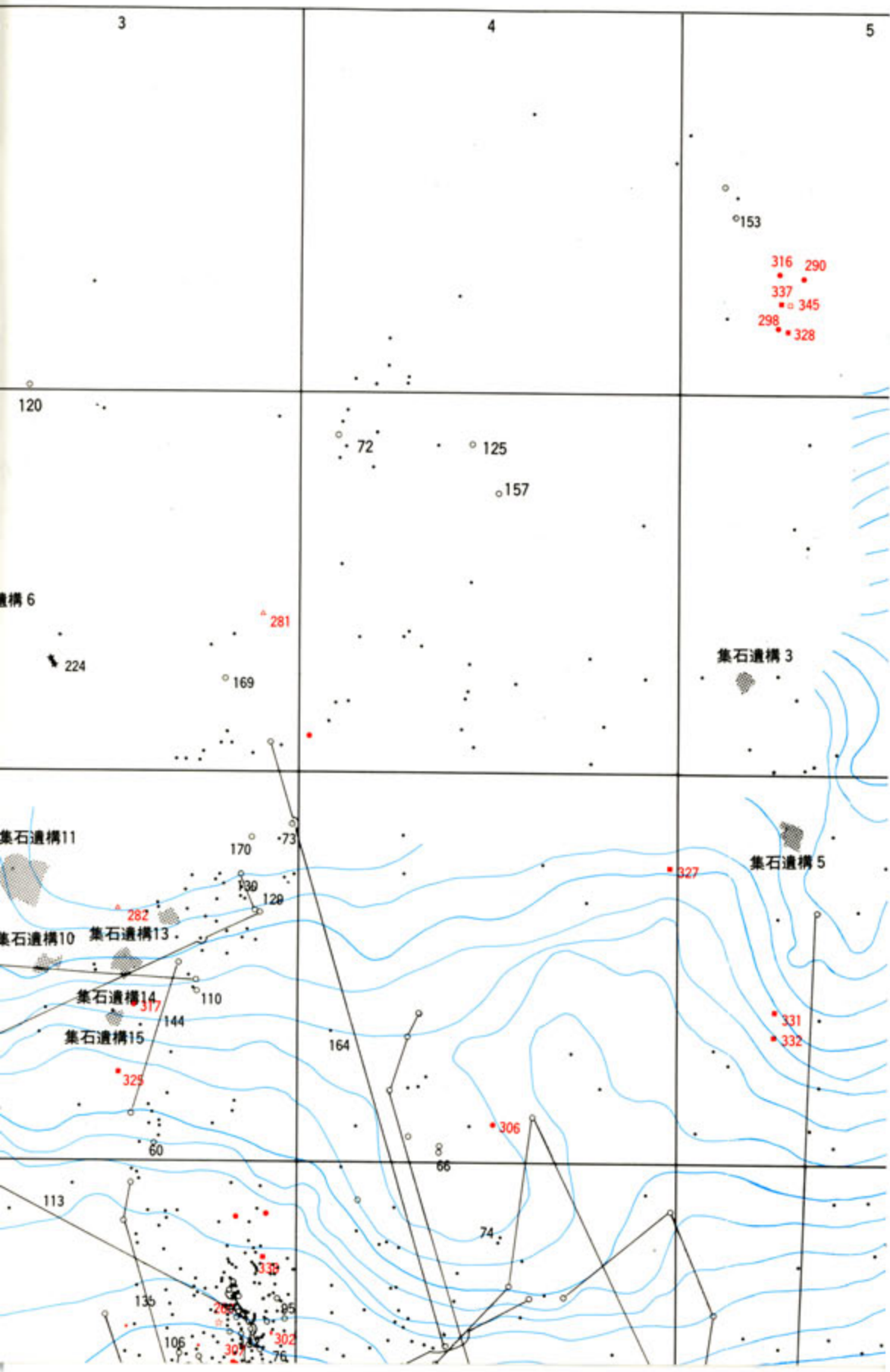
榎崎A遺跡の縄文時代は、調査区のほぼ全域にわたってV層（アカホヤ火山灰層下）の早期に該当する時期とⅢb層の前期及び後期・晩期に該当する土器を包含する遺物包含層が検出された。調査は、該当層の掘り下げを順次行い、遺物・遺構の検出、写真撮影、実測、遺物取り上げと作業を進めた。なお、調査前の地表面は北から南へ緩やかに延びた舌状台地に段々畑が連なり比較的安定した地状を呈していた。しかし、土層図（第17・18図）やV層面の等高線（第52図）を参考にみるとV層以下の縄文早期遺物包含層（生活面）や旧石器時代の遺物包含層（生活面）の状態は安定した地表面とは様子が異なり、部分的に起伏がみられ、小谷がいくつも形成された地形を呈していたことが理解出来よう。従ってⅣ層つまり、降下軽石を含む多量のアカホヤ火山灰の堆積以後、安定した現在の地形となった経緯が推察される。

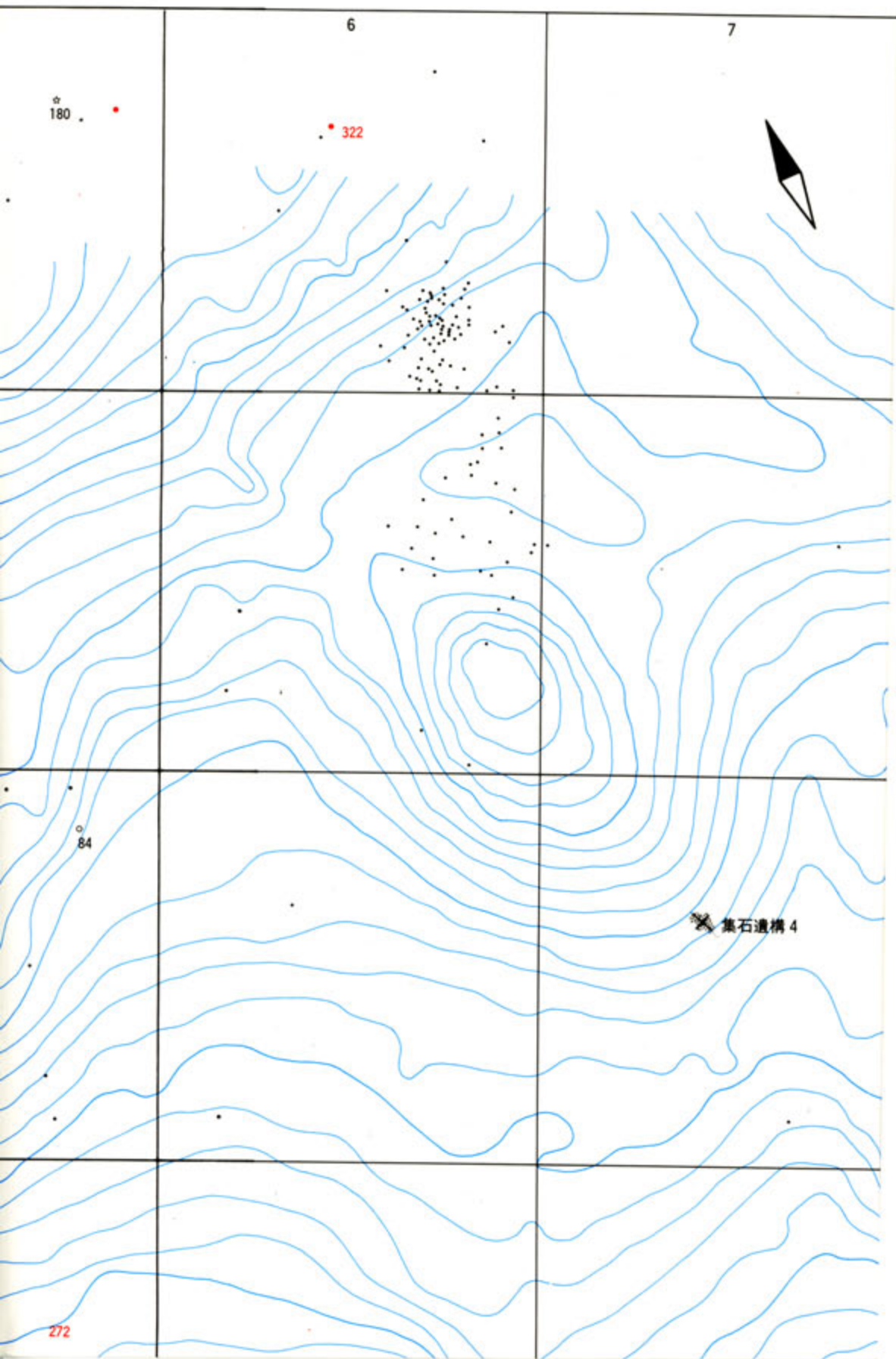
V層を遺物包含層とする縄文早期の出土遺物の分布状況は、A-6区、B～E-1～5区を中心に調査区全域で遺物の散布が見られた。遺構には集石遺構21基をはじめ石皿と磨石等が一ヶ所にまとまって検出された。また、Ⅲb層を遺物包含層とする前期から晩期についての遺物の分布状況は、調査区のほぼ全域にわたって主にC-2区、D-2～4、C-5～7区に集中して分布するが、時期別の層位的分離は困難であった。遺構としては集石遺構2基が検出された。なお、晩期の遺物は極めて少ない。

第2節 V層の調査

V層は縄文早期に相当する土器や集石遺構が検出される遺物包含層である。出土土器には前平式土器や石坂式土器・押型文土器・塞ノ神式土器等が出土したが、主体は石坂式土器が大半を占め、石器には石皿・磨石・石鏃等が出土した。これら遺物の分布状況はA-6区、B～E-1～5区を中心に調査区全域で遺物の散布が見られ、中でもB～E-1～5区（この付近は起伏のある地状を呈し、北から南に傾斜する傾斜地あるいは小谷の頂や谷部にあたる）に遺物分布の頻度が著しい。遺物の分布状況や出土状況、土器接合資料（出土地点を隔てた土器の接合資料一約20m離れた地点の土器が接合）等により、これら土器の中には原位置を留めず2次的に動いたものもあることが窺い知れる。







8

9

△ 278
△ 287

△ 286
* 276

△ 279

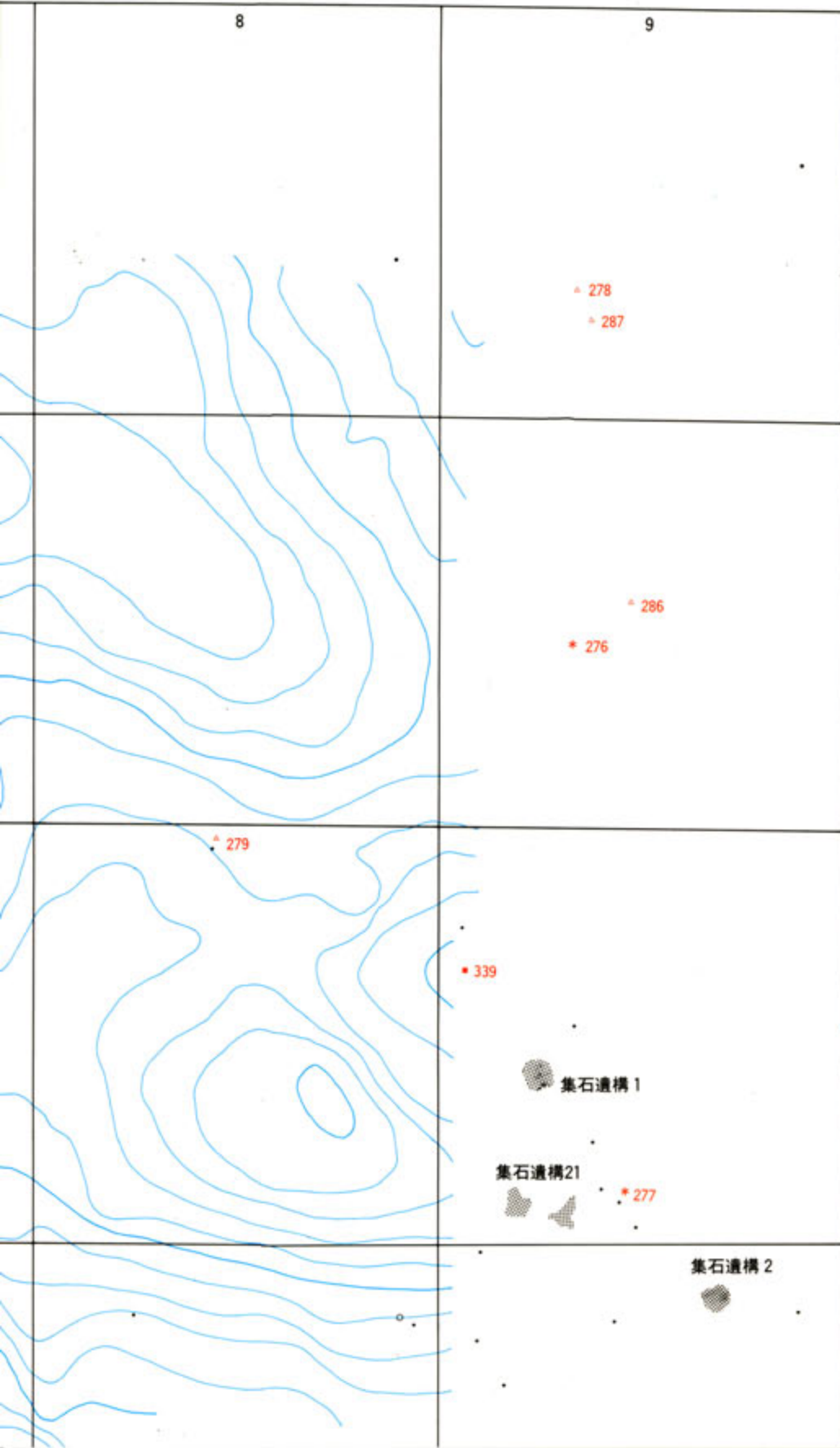
* 339

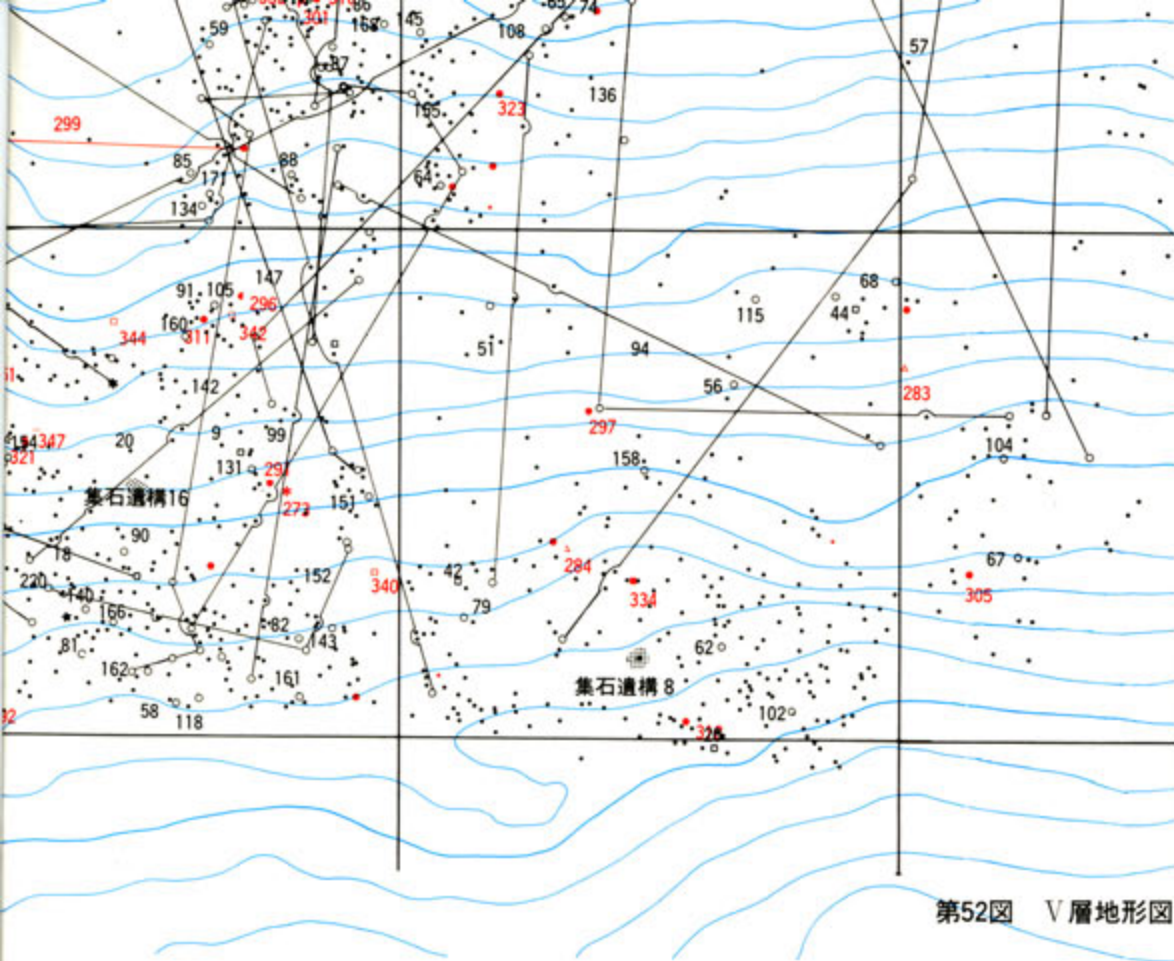
集石遺構 1

集石遺構 21

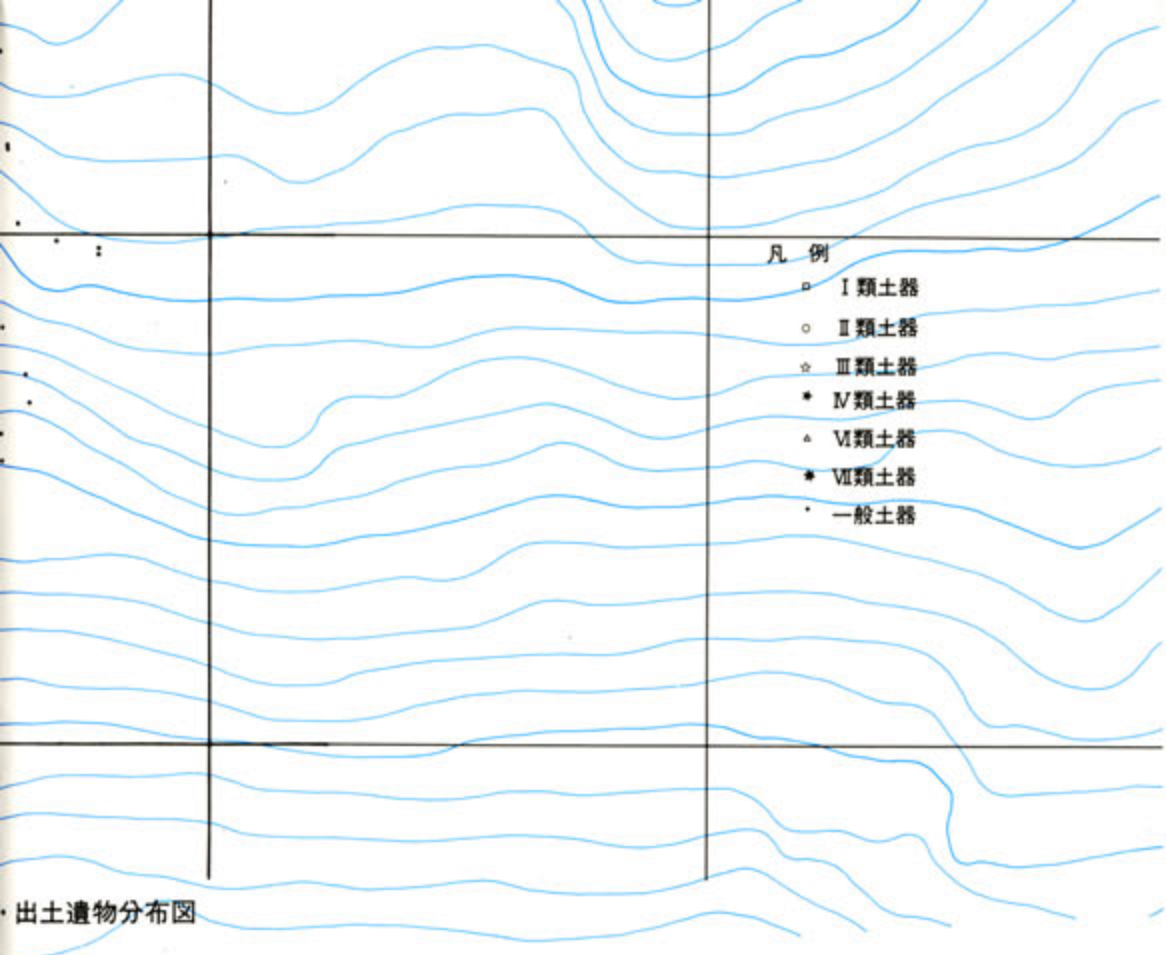
* 277

集石遺構 2





第52図 V層地形図



凡例

- I類土器
- II類土器
- ◇ III類土器
- * IV類土器
- △ VI類土器
- * VII類土器
- 一般土器

出土遺物分布圖

凡例

- 大型スクレイパー・礫器
- 打製石斧・局部磨製石斧
- 台石
- 石皿
- 打製石鏃
- スクレイパー
- 加工のある剥片・使用痕のある剥片
- 磨石、敲石凹石
- 剥片



1 遺構

V層からは、集石遺構21基と石皿や磨石が一ヶ所に集中する遺構が検出された。

(1) 集石遺構

21基の集石遺構の分布は調査区全域に点在しているが、特にC-9区、C-3区、E-2区に3～5基が隣接して検出された。C区は比較的なだらかな傾斜面、E区は遺物が集中する小谷の谷部にあたる。個々の集石は握り拳大から幼児頭大の円礫・角礫等の安山岩をはじめ・砂岩・頁岩等を10数個から200個余りを用い、小範囲あるいは広範囲に平面的にまとまったもの、散在するもの、掘り込みを伴うもの等、様々な形態の状況を呈していた。

なお、集石遺構の周辺には早期の諸型式土器がみられたが、個々の集石遺構の時期を特定できるには資料に乏しく土器型式別の関連付けは困難であった。

集石遺構 1 (第53図)

集石遺構 1 は、C-2区に集石遺構21と隣接した径約90cm範囲にほぼ水平で円形状にまとまって検出された。99個の握り拳大から幼児頭大の角礫を多く用いていた。これら礫は火を受けたような痕跡は観察されず、また周辺からも炭化物等も検出出来なかった。

集石遺構 2 (第53図)

集石遺構 2 は、D-2区の北側に検出された。直径約80cmの範囲で中央に空白を設けて検出された。握り拳大から比較的大きな亜角礫を用い、外側の礫は小礫が2～3段に重なっていた。なお、掘り込みや焼礫・焼土等は確認出来なかった。

集石遺構 1、集石遺構 2 に伴う遺物は発見されないが、周辺からは石坂式土器片が出土した。

集石遺構 3 (第53図)

集石遺構 3 は、B-5区から検出された。安山岩や頁岩の握り拳大から幼児頭大の円礫・亜角礫の22個を用いていた。全体としてまとまりがなく横1m縦80cmの範囲で検出され小規模な集石遺構である。礫には焼かれた痕跡や炭化物等は検出されなかった。

集石遺構 4 (第53図)

集石遺構 4 は、C-7区のほぼ中央から検出された。長径約85cm、短径約50cmの南北に長軸をなす楕円形の平面プランを呈し、深さ約20cmの掘り込みを伴う集石遺構である。握り拳大から幼児頭大の亜角礫を36個用いていた。これら礫の大半は掘り込み上位に位置するが、数個は掘り込み外から検出されるものもあり、2～3段に重なって掘り込み内に入り込んでいるものもあった。なお、礫は掘り込み底面から浮いた状態で検出された。

周辺からは土器等の出土遺物は発見されなかった。

集石遺構 5 (第53図)

集石遺構 5 は、北から南へ緩やかに傾斜したC-5区の傾斜面から検出された。これら礫は握り拳大から幼児頭大の円礫・亜角礫33個を用いて、80～60cmの範囲に集中していた。

礫は二重に重なり比較的大きな礫が下部に置かれ、わずかな窪みが見られた。窪みは人工的な掘り込みとしての認知は不可能な状況であった。なお、礫の一部にはひび割れが生じて脆いものもあった。炭化物等は観察されなかった。

集石遺構 6 (第53図)

集石遺構 6 は、平坦地である B-3 区の V 層下面から検出された。握り拳大の大きさに均一化した礫からなる輝緑岩・頁岩の角礫を 65 個用い、径約 70~80cm の規模で円形状を呈し比較的まとまりのある状態に配置されていた。これら礫は 2~3 段に重なった状態で検出された。人工的な掘り込みや炭化物等は見れなかった。

集石遺構 7 (第54図)

集石遺構 7 は、B-2 区の北から南にわずかに傾斜した V 層と VI 層の境目の傾斜面から検出された。集石は握り拳大の安山岩・頁岩等の円礫・亜角礫の 60 個を用いて約 120~80cm の範囲の一面に広がって配置され、西側と南側ではバラツキが見られた。遺構内からは土器等の出土遺物はなかった。

集石遺構 8 (第54図)

集石遺構 8 は、北から南に傾斜する傾斜地の E-4 区から検出された。握り拳大より比較的大きめの角が磨滅した扁平な礫を 27 個用いていた。径 40cm の範囲で円形にまとまった形状を呈した小規模な集石遺構であった。これら礫は 2~3 段に重なっていたが、掘り込みは検出されなかった。この周辺からは早期の石坂式土器に相当する土器片が多数出土していた。

集石遺構 9 (第54図)

集石遺構 9 は、C-2 区の北側の V 層中位から検出された。握り拳大の頁岩・安山岩の円礫亜角礫の 42 個を用いていた。集石の形状は集石遺構 7 に類似しており、約 80cm 四方の小範囲にバラツキが見られ、小規模な集石遺構であった。焼石や炭化物等の痕跡は観察されなかった。

集石遺構 10 (第54~57図)

集石遺構 10 は、集石遺構が 4 基集中する C-3 区から検出された。礫は握り拳大から若干大きめの円礫・亜角礫の 27 個からなる小規模な集石遺構で約 80~90cm の範囲に散在していた。集石遺構の下面に浅い窪みが見られたが人工的な掘り込みではなかった。遺構付近に貝殻条痕文の土器片 (第56図) が出土した。

集石遺構 11 (第55図)

集石遺構 11 は、北から南に傾斜した傾斜面の C-3 区で検出された。掘り込みを伴う大型の集石遺構である。掘り込みの平面プランは亜楕円形を呈し、長径約 120cm、短径約 83cm で傾斜面に沿って細長い。掘り込みは VI 層と VII 層を掘り込み、検出面での深さは約 28cm で船底状を呈していた礫は握り拳大から幼児頭大の総数 228 個におよぶ多量の礫を用いていた。全体として大型の角礫が多い。上面での集石はほぼ水平に置かれており、径約 140

cm前後の範囲で検出され掘り込み内にも掘り方の形状に添って礫が検出されたが、掘り込み内の礫は掘り込み底面から浮いた状態であった。なお掘り込み底面付近に微量の炭化物が検出された。

集石遺構12 (第54図)

集石遺構12は、C-2区の傾斜面から検出された。掘り込みを伴う小型の集石遺構である。長径約60cm、短径約46cmを測る亜楕円形の平面プランを呈している。掘り込みはV層・VI層までに達し、深さ約10cmで船底状となる。礫は握り拳大のものをを用い、3個の礫を除いて集石全体が掘り込み内にすっぽり隙間なく挿入されていた。

集石遺構13 (第54図)

集石遺構13は、C-3区で検出された。集石遺構14が隣接する。幼児頭大の礫6個と握り拳大の礫9個の計15個からなる小規模な集石遺構であった。中央に径約20cm前後の偏平な礫が置かれ、他の礫がそれを取り囲むように径約50cmの範囲に置かれていた。

集石遺構14 (第55図)

集石遺構14は、C-3区で検出され、集石遺構13が北側に集石遺構15が南側に集石遺構10が西側に隣接していた。握り拳大の円礫、亜角礫を総計59個用いて、約70cm四方にまばらで平面的に置かれていた。遺構内から石坂式土器の底部と胴部片(第56図)が出土した。炭化物等は検出されなかった。

集石遺構15 (第55図)

集石遺構15は、C-3区の集石遺構14の南側で検出された。幼児頭大から握り拳より大きめの礫10個を用い約50cm前後の範囲での配置となり小規模な集石遺構であった。

集石遺構16 (第55図)

集石遺構16は、E-3区のほぼ中央部で検出され、北及び西・南側から緩やかに傾斜した谷部の最下面にあたる。円礫が多数を占めた総数28個の礫を用いて、中央部に空白を設けて径約60cm前後の範囲に配置されていた。礫の重なりは部分的に見られるが、全体的として平面的であった。炭化物等は観察されなかった。

集石遺構17 (第55図)

集石遺構17は、E-2区の北側傾斜面で検出された。亜角礫を主体に総数63個の握り拳大の礫を用いて縦約80cm、横約40cmの範囲で縦長を呈し、また礫の重なりが部分的に見られ平面的な配置であった。なお中央部と南東部に礫の空白部があった。

集石遺構18 (第55図)

集石遺構18は、E-2区の西斜面で検出された。握り拳大の半分程度の大きさの亜円礫・角礫を用い総数112個を数えた。約50~60cmの範囲に2~3段に重なり比較的まとまった状態を呈していた。下段の礫は上段の礫より比較的大きめのものが多い傾向にあった。

集石遺構19 (第56図)

集石遺構19は、E-2区の西斜面で検出された。集石遺構20が南側に隣接していた。掘

り込みを伴う大型の集石遺構である。人頭大で比較的大きめの亜角礫・亜円礫から握り拳大の小さな礫を用い、総数230個が幾重にも重なりあっていた。なお上段の礫は小さなものが多く、下段には人頭大の礫を用いていた。また、これら集石の上面では約80～90cmの円形状を呈し下位には長径約110cm、短径約70cmで楕円形、深さ約28cmの掘り込みを伴っていた。焼石は確認できなかったが、掘り込み下部に微量の炭化物が検出された。

集石遺構本体の北西に隣接して人頭大の礫がT字形に配置されていたが、本体の集石との関係は定かでない。遺構内から土器片（第56図）が出土した。

集石遺構20（第56図）

集石遺構20は、集石遺構19が北側に隣接してE-2区の西斜面で検出された。掘り込みを伴う集石遺構である。握り拳大の礫を主体に人頭大の礫40個を使用している。掘り込みの規模は長径約90cm、短径約70cmを測り楕円形を呈し、検出面での深さは約27cmであった。掘り込み内の礫は、上段には握り拳大の礫が、下段の掘り込み底面には人頭大の礫4個を立てた状態で検出された。集石内部から少量の炭化物が検出された。

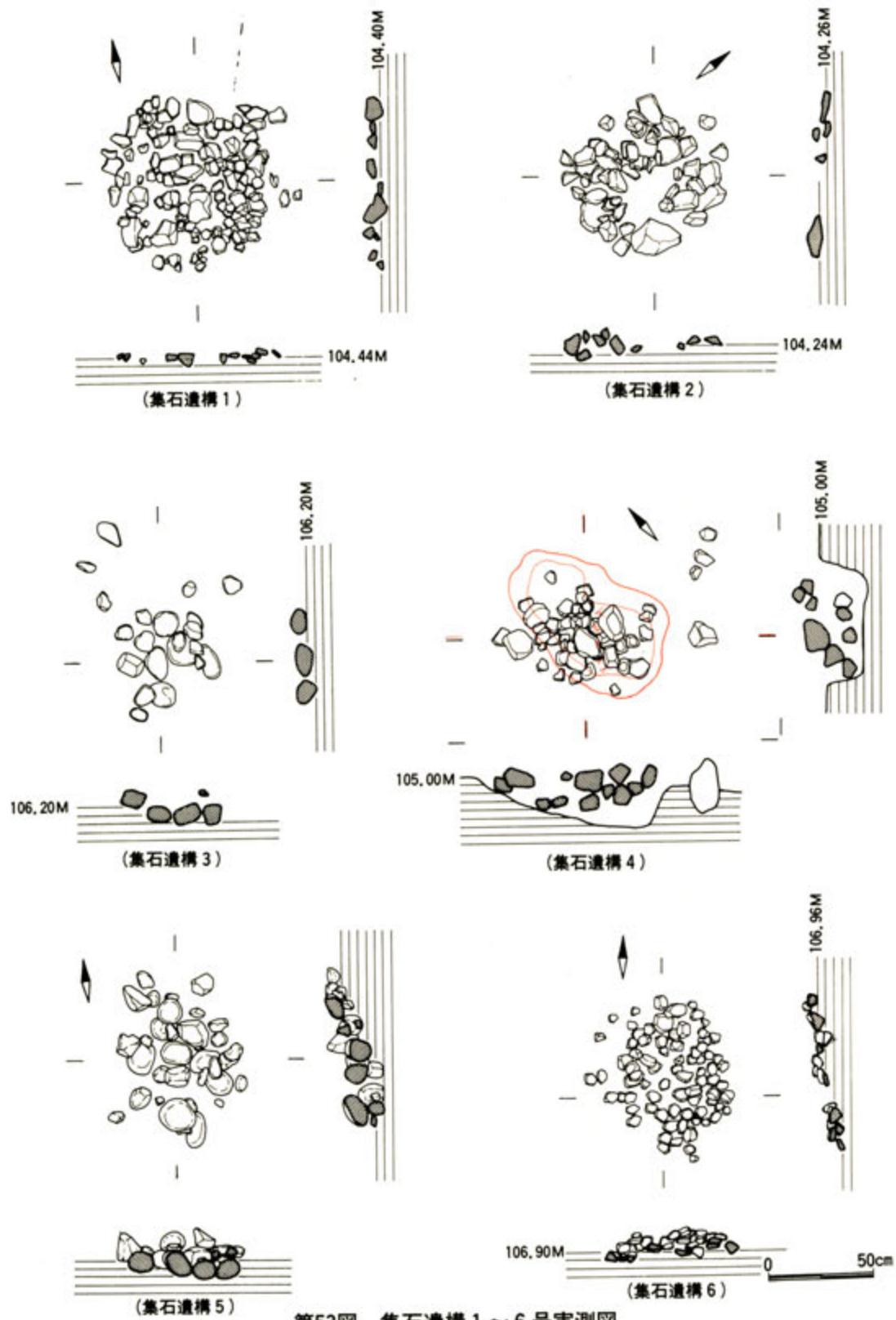
集石遺構21（第56図）

集石遺構21は、C-9区で検出された。集石遺構1が北側に隣接する。縦約200cm、横約130cmの範囲に総計94個の握り拳大の亜角礫を用いて、平面的に散在して配置されていた。なお、集石が2ヶ所に集中して検出されたが、2基分の可能性もある。焼石や炭化物は検出されなかった。

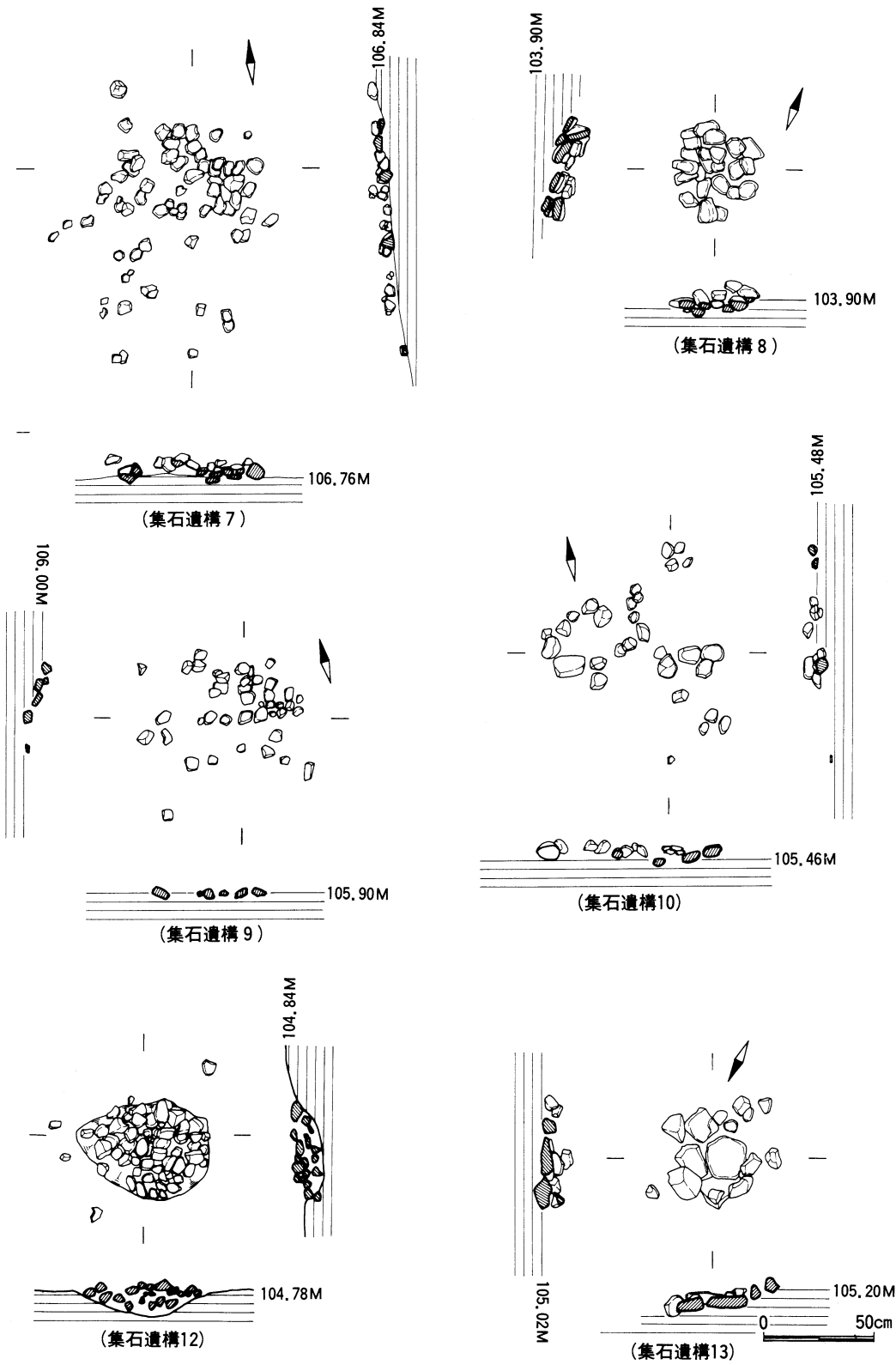
(2) 石皿・磨石等の集中遺構（第56図）

A-5区のⅥ層上面から検出された。径約2mの範囲に石皿2個と磨石3個・台石1個・石坂式土器一固体分が、まとまって出土した。

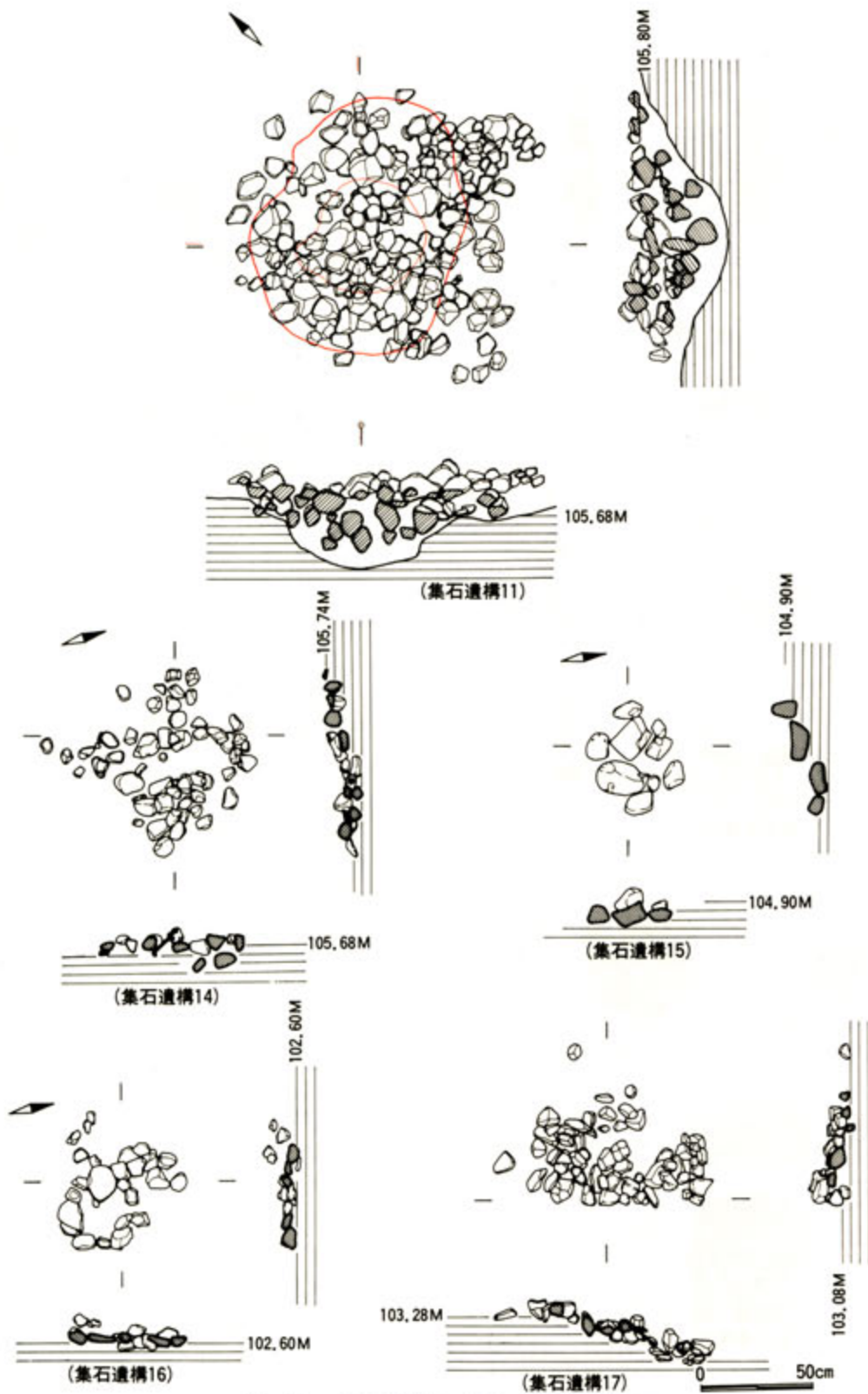
縄文早期の石坂式土器が出土していることから、この時期に伴うものであろう。



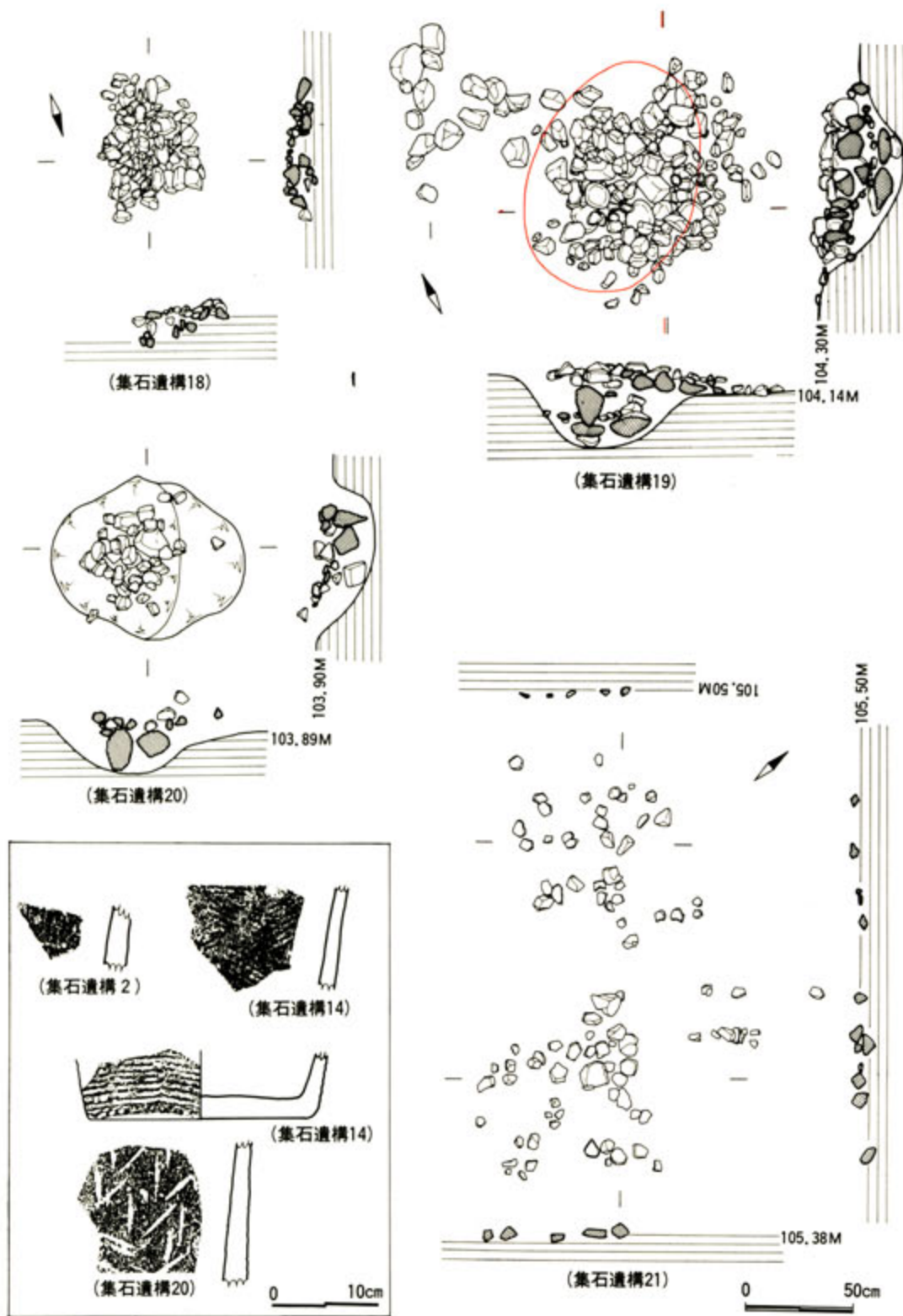
第53図 集石遺構 1 ~ 6 号実測図



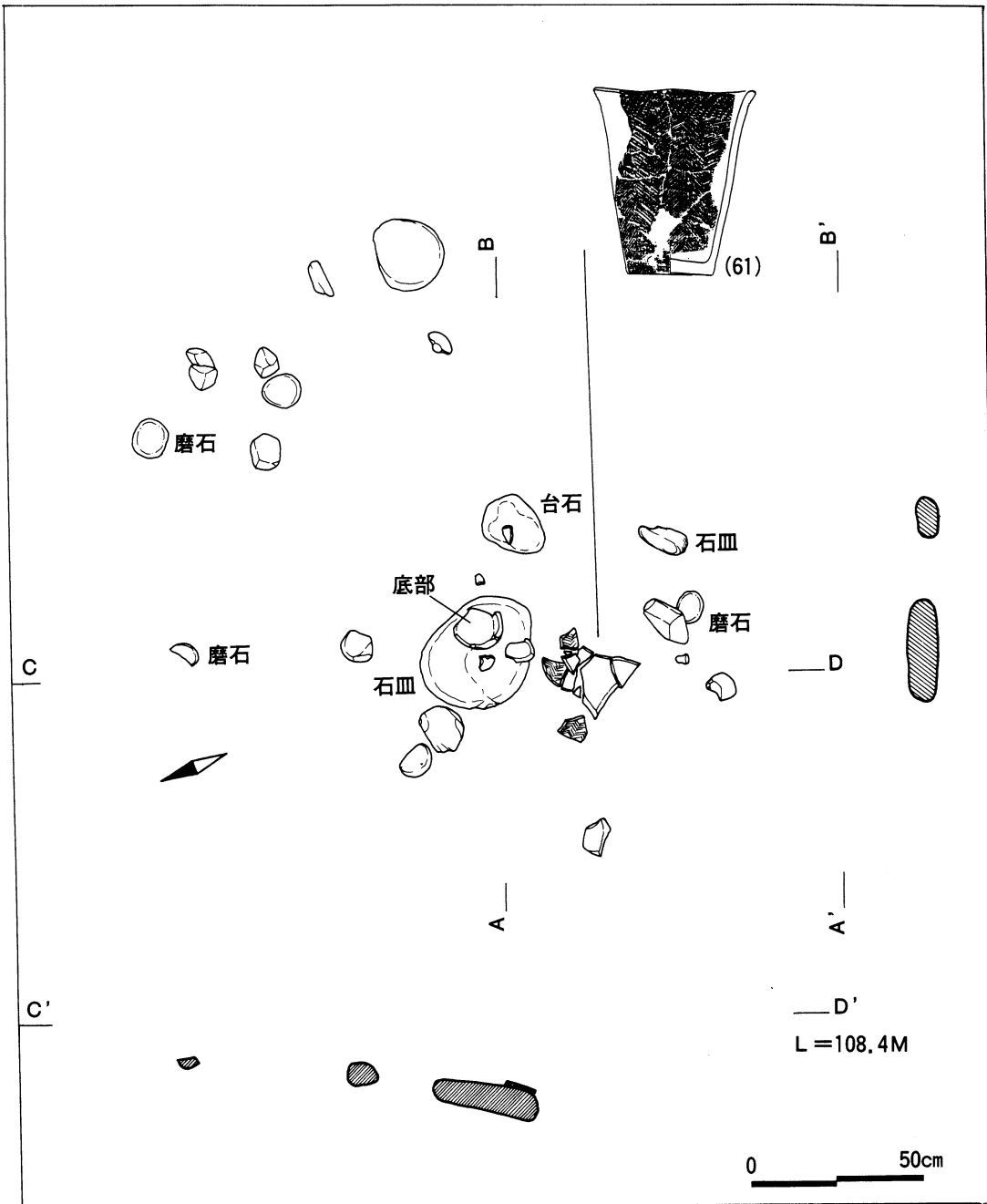
第54図 集石遺構 7 ~ 10 · 12 · 13号実測図



第55図 集石遺構11・14~17号実測図



第56図 集石遺構18~21号実測図・出土土器



第57図 石皿・磨石集中遺構

2 出土遺物

(1) 土器

V層出土の土器は、形式別に大きくⅠ類～Ⅶ類の7類に分類した。

Ⅰ類土器 (第58図)

Ⅰ類土器は、円筒土器をⅠ類a土器、角筒土器をⅠ類b土器とした。

Ⅰa類土器 (第58図1～8)

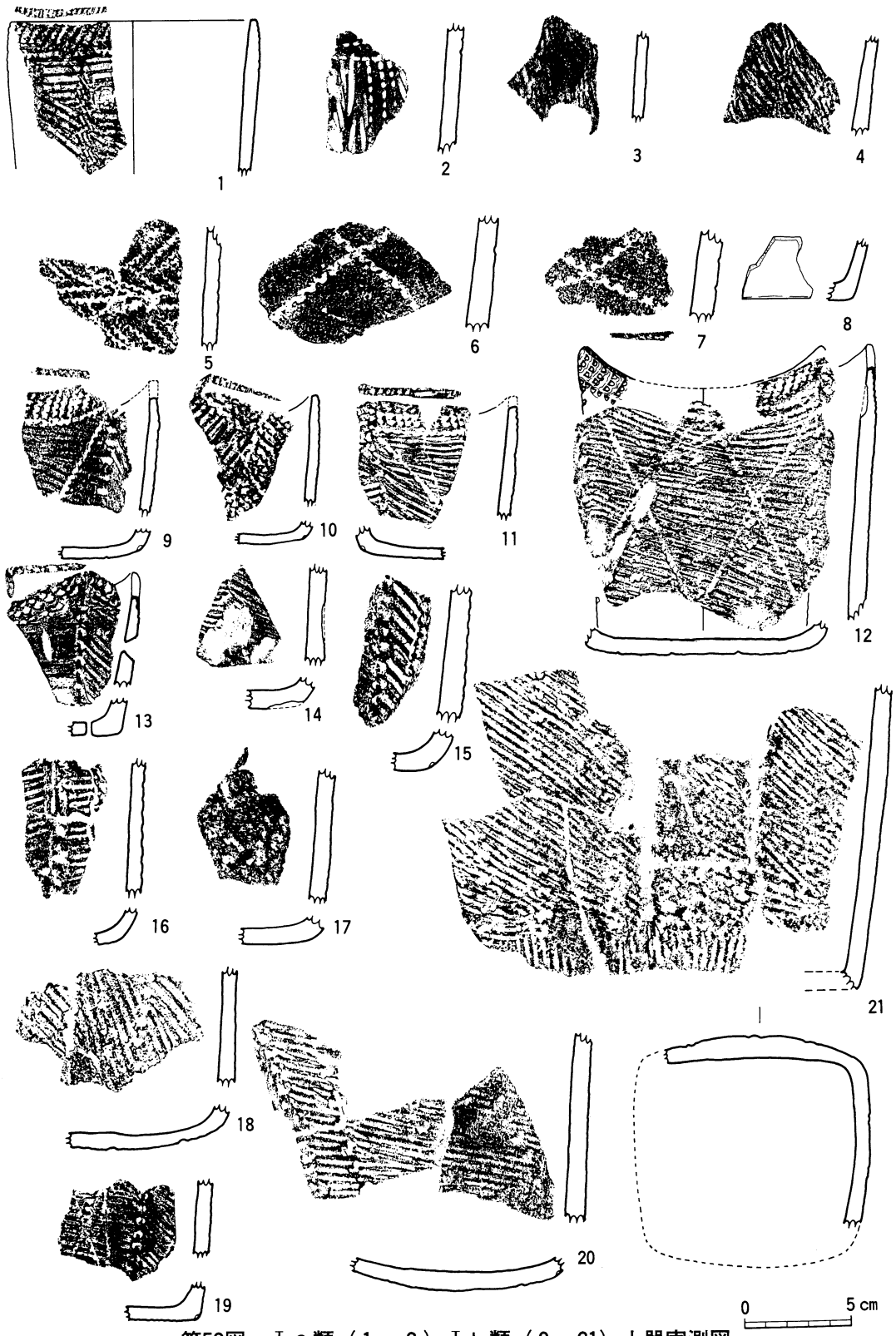
1は、復元口径11.7cmを測る。口縁部は直行する円筒土器である。器壁は5mmと薄い。口唇部は平坦に仕上げ刻目を細かく施す。胴部には横位・斜位に貝殻条痕文と2条の平行波状文を縦位に施す。口縁直下に斜位に貝殻腹縁による刺突文と1条の押圧線文を巡らす。内面は横位・斜位に篋による調整痕が見られる。2～4は胴部片である。2は貝殻腹縁により押圧文を横位・縦位に施し内面は研磨が施されている。3・4は右下がりの貝殻条痕文と1～2条の平行波状文を縦位に施す。内面は風化を受け調整は不明。5は横位に2列の貝殻腹縁刺突文を挟んで貝殻腹縁による羽状文を施す。6・7は器壁が9mmと厚く比較的大型の円筒土器と思われる。いずれも貝殻腹縁による刺突線文を交差させて施文する。外面はナデ、内面は研磨が施されている。6の胎土に金雲母が含まれている。8は円筒土器の底部片である。風化が著しく文様は不明。

Ⅰb類土器 (第58・59図9～49)

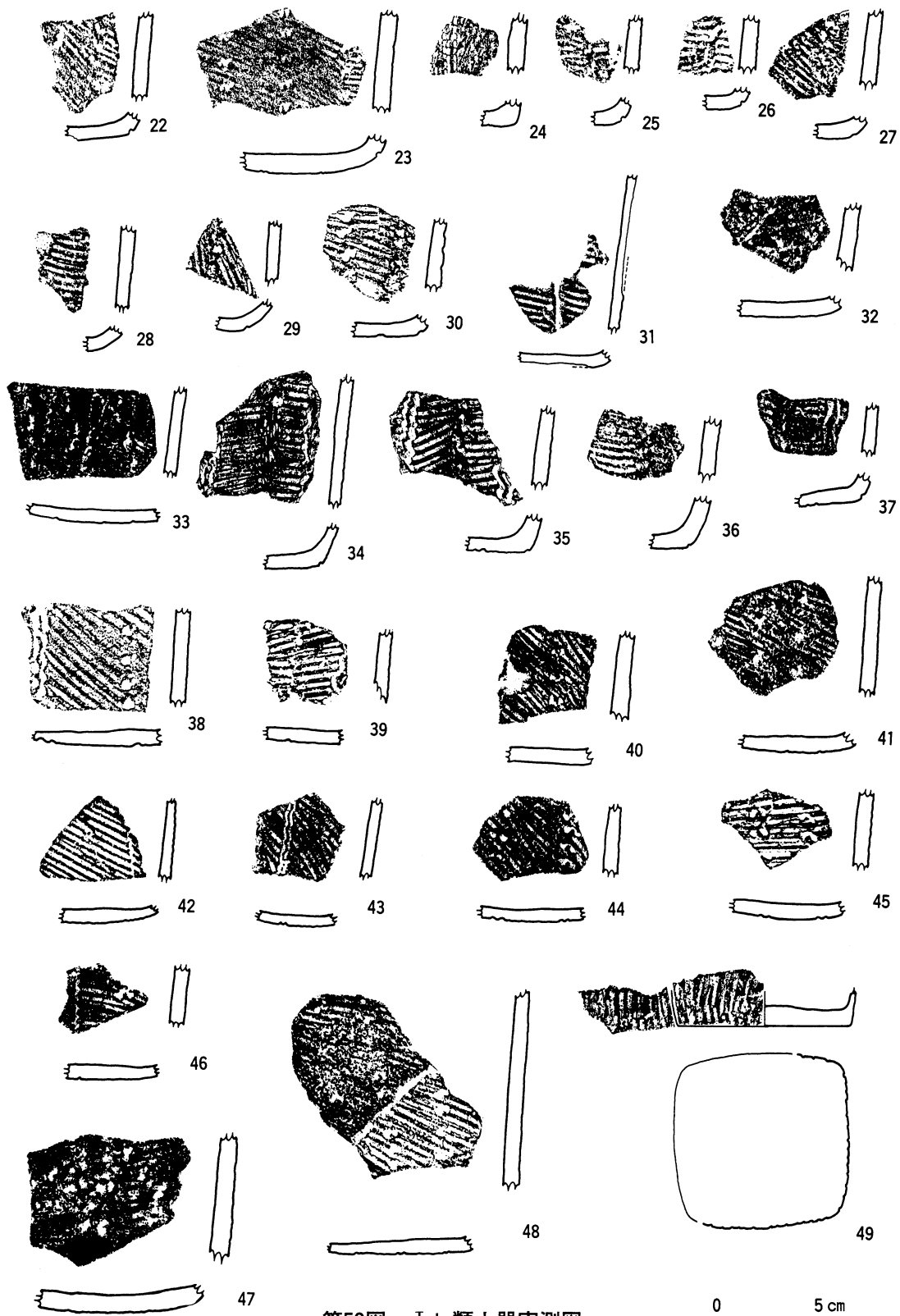
9～13は口縁部が直行し、4角が山形を呈する角筒土器である。文様はⅠa類土器と同様な構成である。9～13は口縁部片である。いずれも胴部には貝殻条痕文を施し、口縁部には縦列に貝殻刺突文や貝殻刺突線文を横位に施す。12は復元口径11.5cmを測り、胴部の厚さは8mmで均一で口縁部は薄く治める。口唇部は平坦で刻目が施され、口縁部には縦列に貝殻腹縁による連続刺突文、その直下に2条の刺突線文を施す。胴部は斜位に貝殻条痕文と菱形に刺突線文を縦位に2対と縦3列に刺突文、4角の体部にも同様の刺突文を施す。いずれも貝殻腹縁を施文具とする。内面は胴部で縦に掻き目調整、口縁部は弱い研磨痕が見られる。13には縦長の補修孔が施されている。14～48は胴部片である。いずれも貝殻腹縁による横位又は縦位に2状の波状文を施す16・34～39・43・46や菱形の刺突文を有す19・33がある。21は復元胴部径11cmを測る。器面全体に右下がりの強い貝殻条痕文が施され、縦3列に貝殻刺突文を有す。4角の体部にも同様な貝殻刺突文を施す。底部側面には長さ1.5cmの貝殻腹縁による刻目文を丁寧に縦に施している。内面は縦に掻き目を行なっている。49は一辺が約7.4cmの角筒土器の底部である。底部側面には篋による縦列に2.3cmの刻目文を丁寧に施す。内底部には土器製作過程で付された指圧痕の凹凸が見られる。

なお、これら土器の胎土には石英・長石を含むが、14、24の胎土には金雲母が含まれていることが特出される。

Ⅰ類土器は、縄文早期の前平式に相当する土器である。



第58図 I a類 (1~8) I b類 (9~21) 土器実測図



第59图 I b類土器実測図

Ⅱ 類土器 (第60～69図)

Ⅱ 類土器は大別して、Ⅱ a 類 (口縁部が外反するもの)、Ⅱ b 類 (Ⅱ a 類に比べ口縁部の外反の度合いが弱いもの)、Ⅱ c 類 (口縁部が直行し円筒状を呈すもの)、Ⅱ d 類 (口縁部が直行し円筒状を呈し口唇部が平坦となる)、Ⅱ e 類 (底部) の 5 類に分類した。Ⅱ 類土器は出土量が多く、本遺跡の主体をなすものである。

Ⅱ a 類土器 (第60図50～53)

50は口径27.9cmを測る。器形は胴部でわずかに膨らみを帯び、頸部が若干しまり口縁部が大きく外反する。口唇部は丸く治める。器壁の厚さは1.2～1.4cmを測る。文様は胴部に貝殻腹縁による縦・斜めに略綾杉文状に施し、口縁部には横位に4～5状の貝殻刺突線文、口唇部には篋状施文具による刻目文を施す。内面の口縁部には弱い研磨痕が見られる。51～53も同様に外反する口縁部で、口唇部は丸く治める。口縁部には貝殻腹縁による綾杉文を施す。口唇部に刻目文を施す。

Ⅱ b 類土器 (第60～64図54～100)

Ⅱ b 類土器は、Ⅱ a 類土器に比べ口縁部の外反の度合いが弱く若干外反を呈するものである。61は口径25.4cm、器高29cm、底部径13.4cmを測る完形土器である。底部からわずかに膨らむ胴部となり外反気味の口縁部となる。口縁部は4つの稜からなる波状口縁である。口唇部は丸味を呈す。底部は厚さ2cmと比較的厚くわずかに上げ底気味となる。基本的には平底である。胴部には貝殻腹縁による丁寧な綾杉文を、口縁部には貝殻腹縁で斜位に刺突文を施す。底部側面は横位に貝殻条痕による調整後、浅く弱い刻目文が施されている。内面は弱い研磨痕が見られる。97は口径16cm、器高16.3cm、底部径8cmの小型の完形土器である。口縁部が若干外反し4つの稜からなる波状口縁となる。口縁部でわずかに肥厚し口唇部は先細りに治めて刻目文を施す。全体的に器壁は薄く整った土器である。胴部には比較的大型の貝殻腹縁による綾杉文、口縁部には刺突による綾杉文を施す。なお、この部位の綾杉文の文様帯の上位と下位は文様に強弱が見られ、上位の方には貝殻腹縁の肋の痕跡が明瞭に残されている。胴部下位から底部側面にかけて横位の貝殻条跡文を施し、底部側面には篋による刻目文を縦位に施す。その他、口縁部直下の文様には貝殻腹縁による綾杉文55～57・67・68～73・90、縦位の刺突文58～60・77・79～83・95、斜位の刺突文74・88・89・92～94・96・99、横線文状の62・64～66・84～98・100がある。口唇部の文様には刻目文を施すものが大半を占めるが、62・76・79・82・83は貝殻腹縁による刺突線文を有し、57～59には綾杉状に刻目文を施している。98の口唇部は断面が三角形を呈し刻目は無い。90には円形の補修孔を穿っている。

Ⅱ c 類土器 (第65・66図101～110)

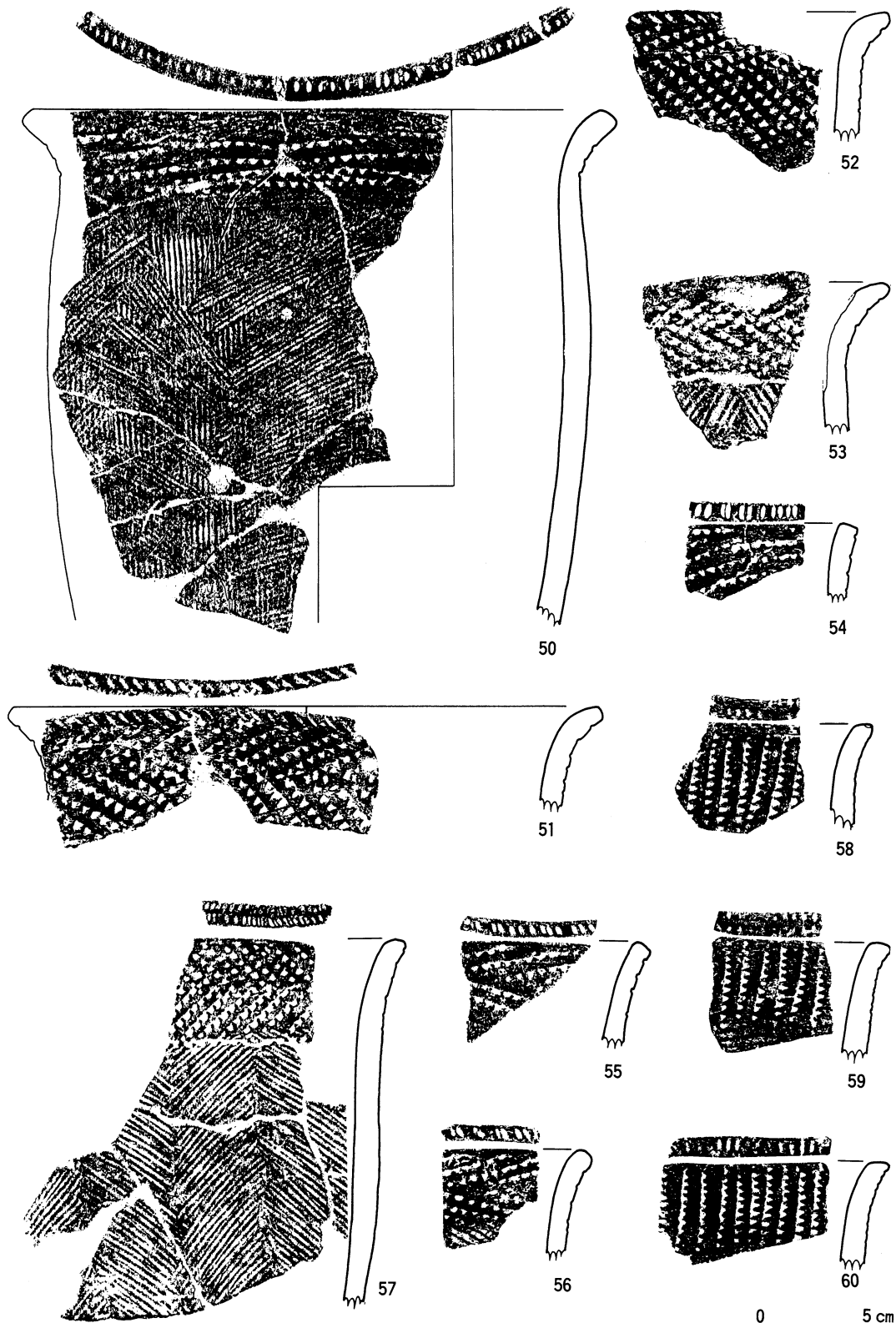
Ⅱ c 類土器は口縁部が直行して円筒形の器形を呈す土器である。

101は復元口径25.8cmを測り、口縁部は直行あるいは若干外反しているがほぼ円筒状を呈す。全体的に土器の表面は磨耗を受けているが、胴部には浅い斜位の貝殻条痕文、口縁

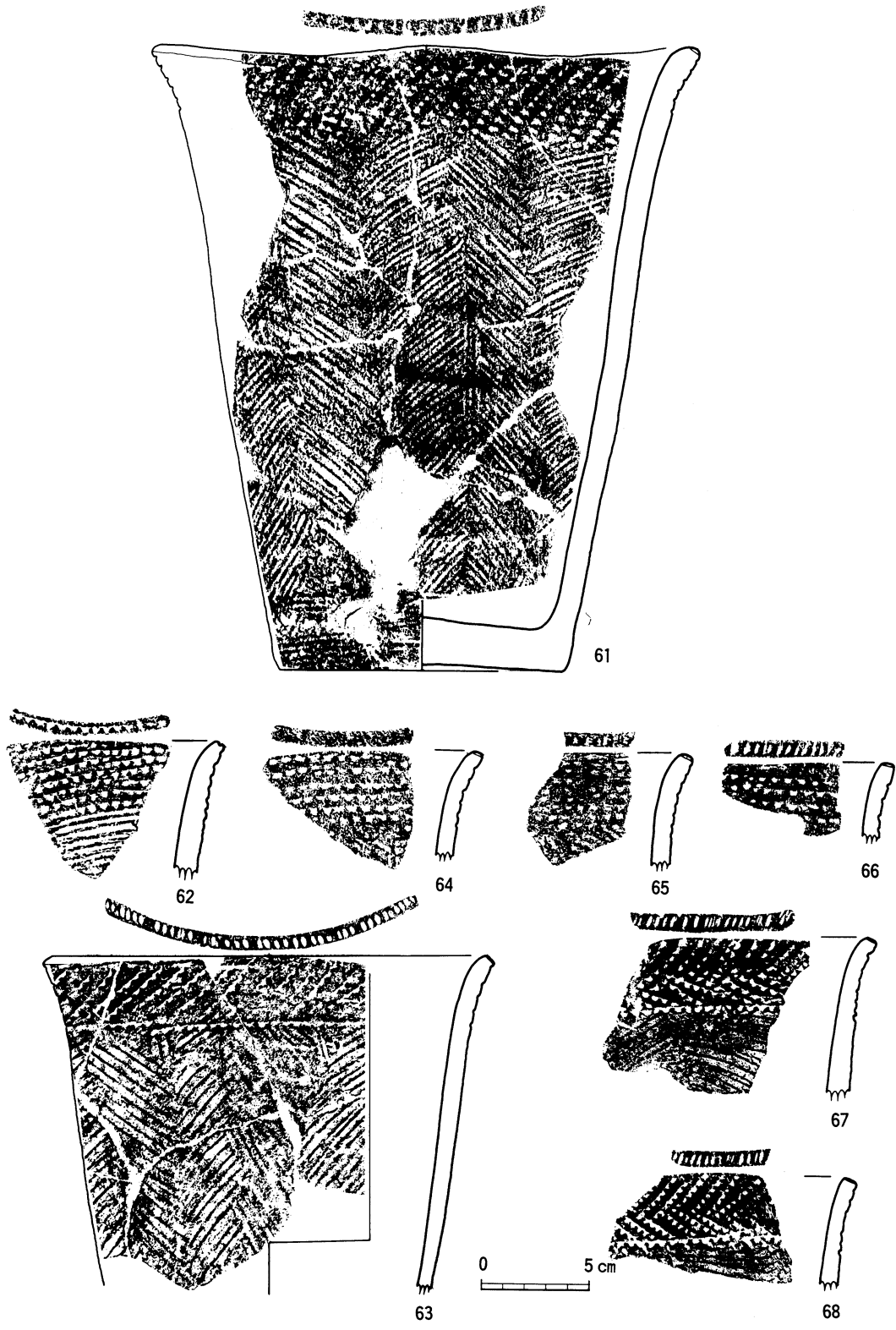
部には貝殻刺突文を斜めに施す。口唇部には浅い刻目文を施す。また口縁部直下には1対の円形の補修孔を穿っている。105は口径17cm、器高20.2cm、底部径11.5cmを測るほぼ円筒形の完形土器である。平底の底部から直線的に伸びた胴部となり、直行する口縁部で口唇部は丸く治める。口縁部はわずかに細く仕上げる。器壁の厚さは10mmで均整のとれた土器である。口縁部には斜位に貝殻刺突文を施し、胴部には強いタッチで縦位の貝殻条痕文、底部側面には横位での篋削り調整を施している。内面はナデ整形を施す。106は口径12cm、器高12.1cm、底部径8.4cmの平底で、口縁部は直行する円筒土器の小型の完形土器である。口縁部には貝殻腹縁による綾杉文を施す。底部側面には篋先で雑な刻目文を縦列に施す。内外面とも器面調整はナデ整形である。102～108は直行する口縁部片である。いずれも口唇部には刻目文が施され、102・104は貝殻刺突文を縦列に、103は横3条の貝殻刺突線文を巡らす。107は風化を受け器面は脆く剥落している。108は胴部には貝殻条痕文、口縁部には横位の貝殻刺突文、口唇部には刻目文が施されているが、いずれも雑な仕上がりである。109・110は同一個体と思われ、口唇部は先細に仕上げる。口縁部には貝殻条痕文が縦列に施されている。なお、口縁部が若干外反する傾向にあるが、文様施文時に施文具を強く押圧した為であろうと思われる。

Ⅱ d 類土器 (第66・67図111～128)

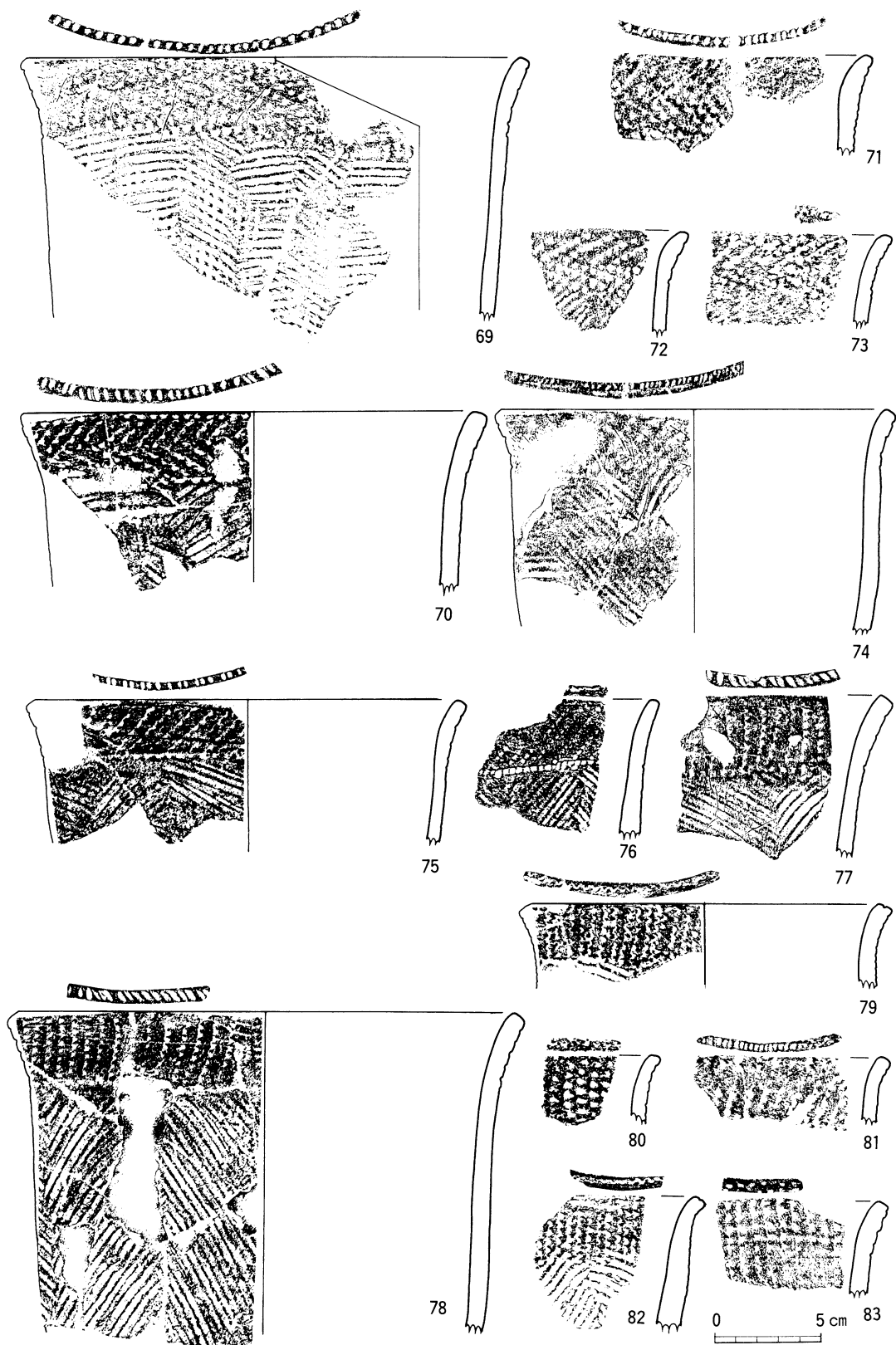
Ⅱ d 類土器の特徴は、直行する口縁部で口唇部を平坦に仕上げ、内面は篋研磨調整が行われ精製された円筒土器である。116は復元口径約18.5cmを測り山形口縁を有する土器である。口縁部は直行して、口唇部は平坦に治める。器壁の厚さは8～10mmを測り比較的整ったものである。平坦な口唇部には1条の貝殻刺突文を巡らす。山形口縁部には厚さ2cmの丸味を呈した突起を施す。胴部器面には貝殻条痕文を斜位に、口縁部には横位に5～6条の貝殻刺突線文を施している。内面の口縁部は浅い篋研磨が施されている。口縁部の文様には数状の貝殻刺突線文を有す112・118・120～124・126、縦列に貝殻刺突文を施す119・125があり、また、112・118・122～124の口唇部には1条、125には2条の貝殻刺突線文を施し、その他は刻目文を施すものがある。127は口径14cmを測り、口縁部は若干内湾気味を呈するが円筒土器の範疇であろう。口唇部は平坦に仕上げる。器面は横位の貝殻条痕文が雑に施されている。128は小片の為、定かではないが口縁部が内傾するか。口縁部に右下がりの貝殻刺突文とその下位に貝殻刺突線文を巡らし、口唇部に浅い刻目文を施す。



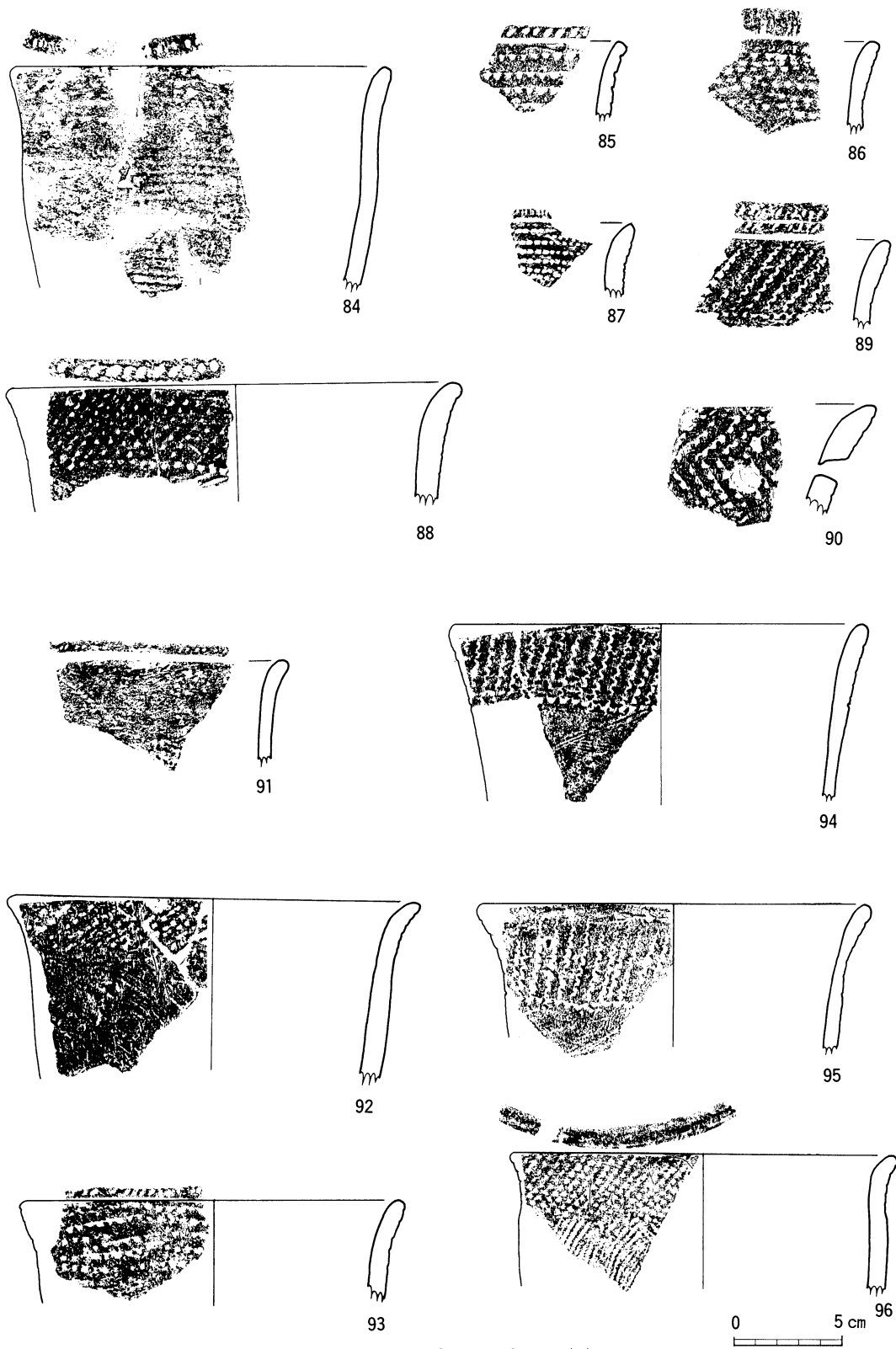
第60图 II a類 (50~53) II b類 (54~60) 土器実測図



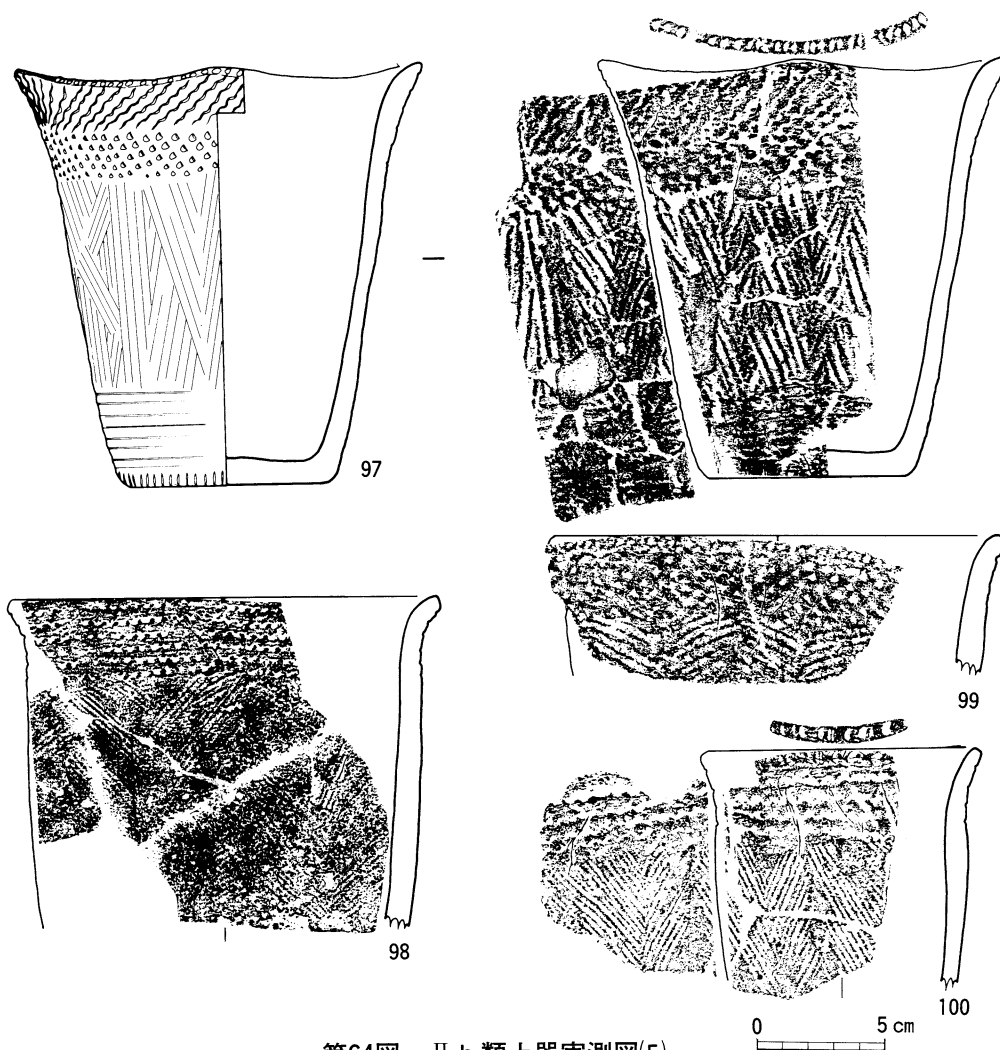
第61图 II b類土器実測図(2)



第62図 II b類土器実測図(3)



第63图 II b類土器実測図(4)



第64図 II b類土器実測図(5)

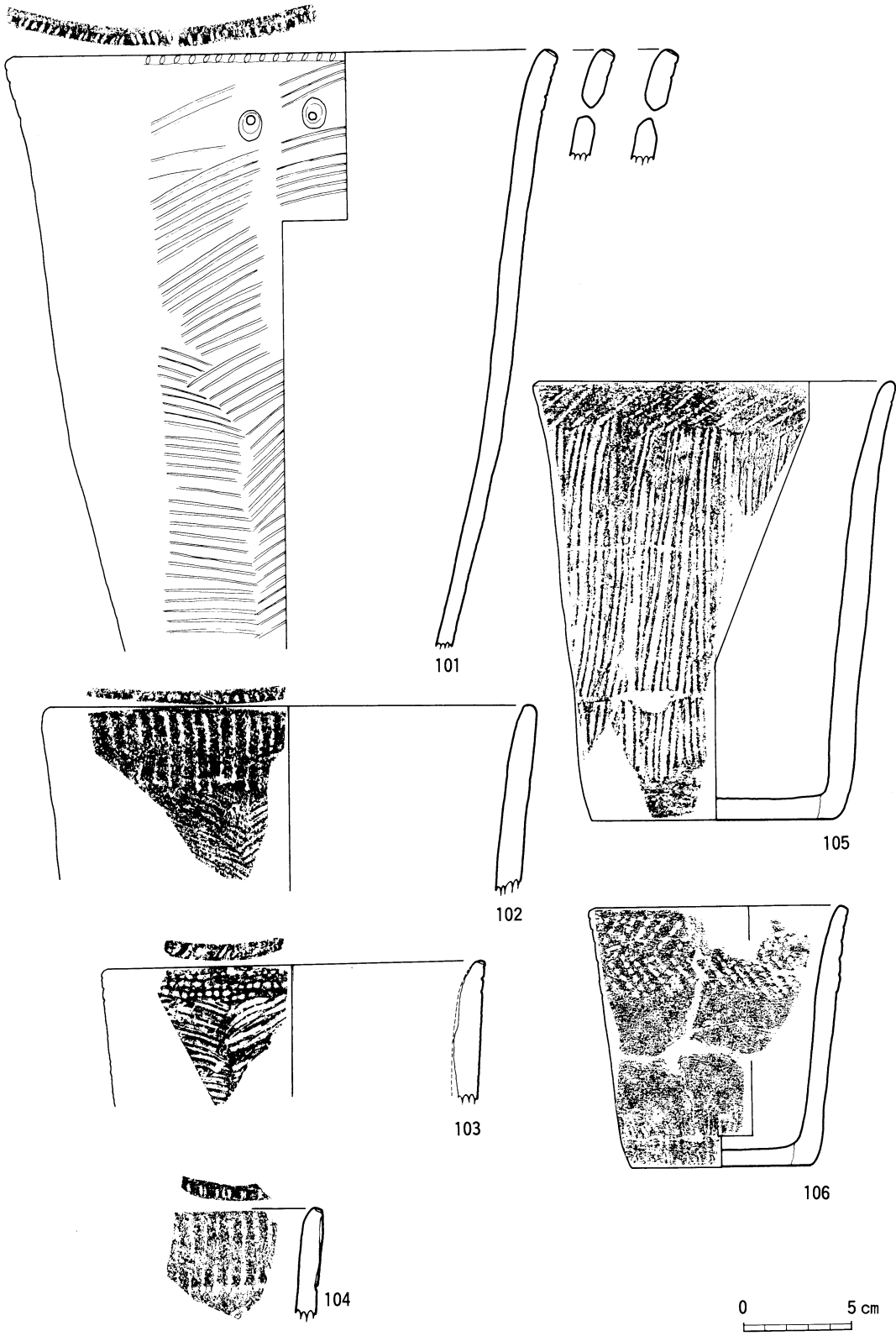
II e類土器 (第68・69図129～171)

II e類土器は、径20.7cmのから8.7cm、底部の厚さ5～15mmを測る平底の底部である。わずかに上げ底気味も見られるが基本的には平底である。底部側面まで横位または斜めに綾杉文状の貝殻条痕文を施すものが大半である。152・165・134・136・140には底部側面を篋削り調整するものもある。底部側面には縦列に篋先で細かく丁寧に、あるいは棒状施文具で太く短く、刻目文が施されている。なお、139・158・163・161等から胴部内側側面を円盤の底部に挿入させ接合させた痕跡が残り、土器製作過程がうかがいしれる。

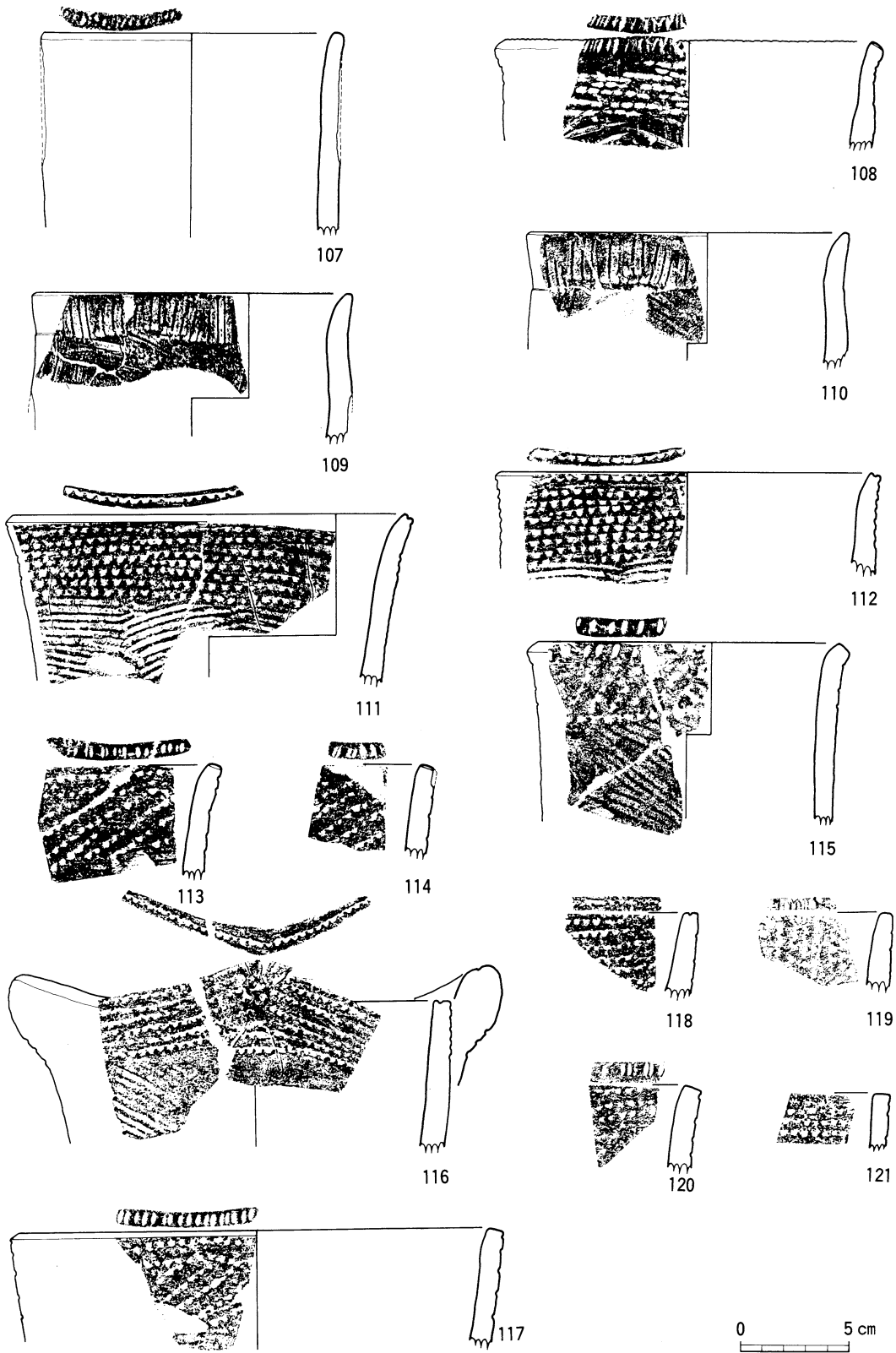
II類土器は、器形や文様構成等から石坂式土器に比定される。

III類土器 (第70図172～181)

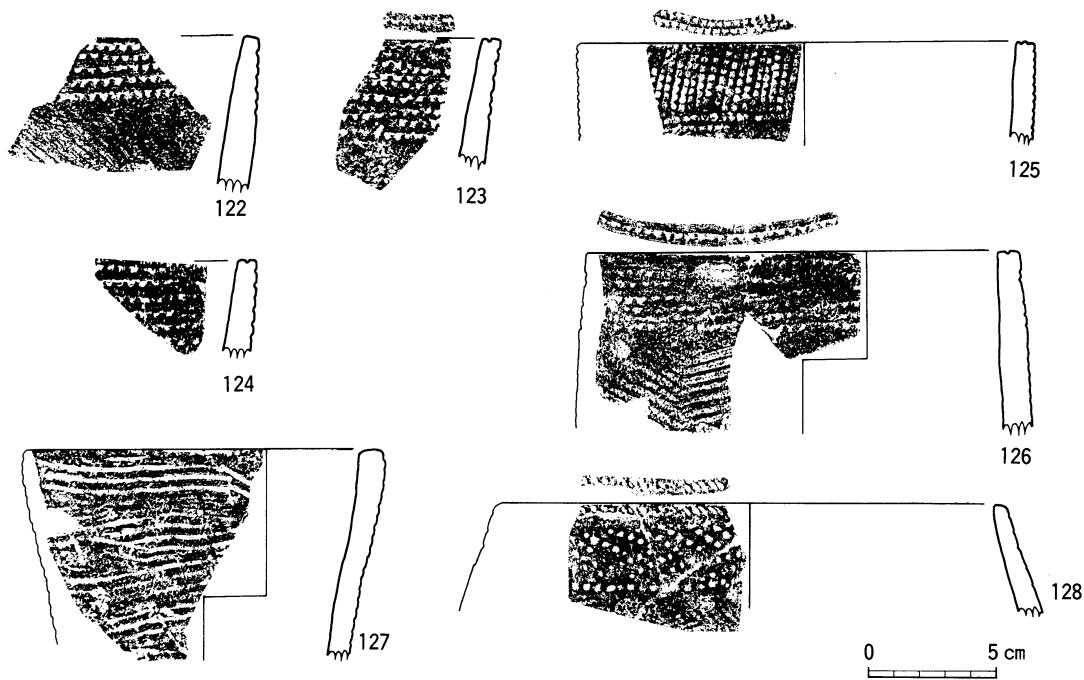
III類土器は直行する口縁部で、口唇部は平坦に仕上げて内傾し、口唇部内側に明瞭な稜を有し断面が三角形を呈す円筒形の土器である。文様は貝殻腹縁や篋状施文具で短線の引



第65図 II c類土器実測図(1)



第66图 II c類・II d類土器実測図(1)



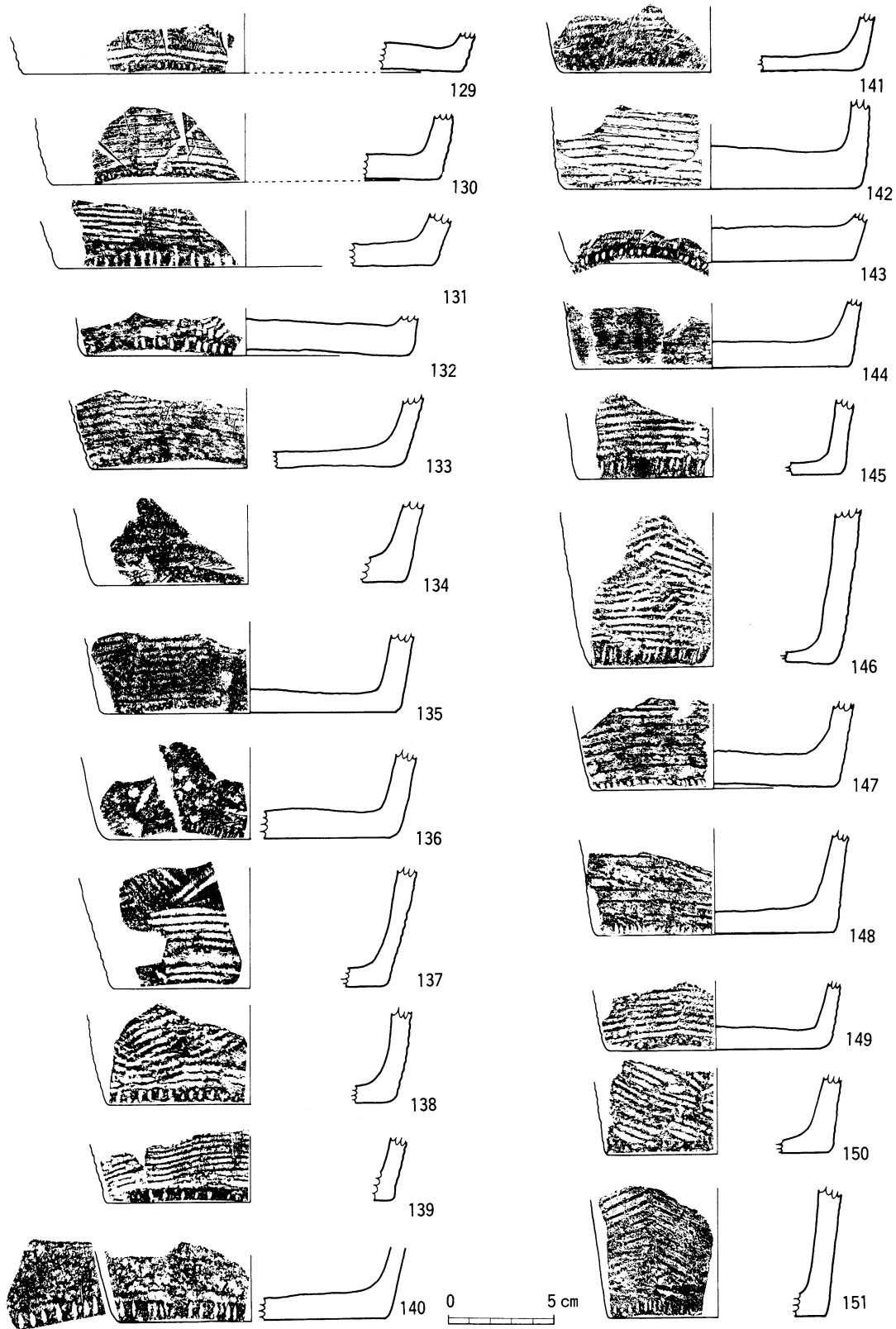
第67図 II d類土器実測図(2)

搔きで綾杉文を施し、平坦な口唇部には文様は施されず、器壁の厚さも均一で比較的整っている。また内側器面には弱い篋研磨調整を行うものである。172は口縁部、173は胴部であるが同一個体と思われる。172は外開きで直行する口縁部で、口唇部は平坦で内傾し内側に稜を有す。5～6状の丁寧な綾杉文を器面全体に施す。口縁部直下には円形の補修孔を穿っている。器壁の厚さは1.1cm～1.2cmを測り均一で整った土器である。173に見られるように胴部下位の文様は比較的雑で孤状の貝殻腹線文となる。底部側面は篋削り調整を施す。内面調整はいずれも丁寧に口縁部や口唇部には弱い篋研磨が見られる。174は復元口径22cm、175は復元口径23cmを測り平坦で内傾する口唇部となる。176～178は口縁部片である。178は口縁部が若干内湾気味で、口唇部がわずかに肥厚する。綾杉文も整然と丁寧に施されている。179は口唇部がわずかに肥厚し丸味を帯び、綾杉文は弱くて雑である。180は復元口径15cmを測り器壁は5mmで薄く口縁端部でわずかに肥厚し、口唇部は平坦仕上げる。

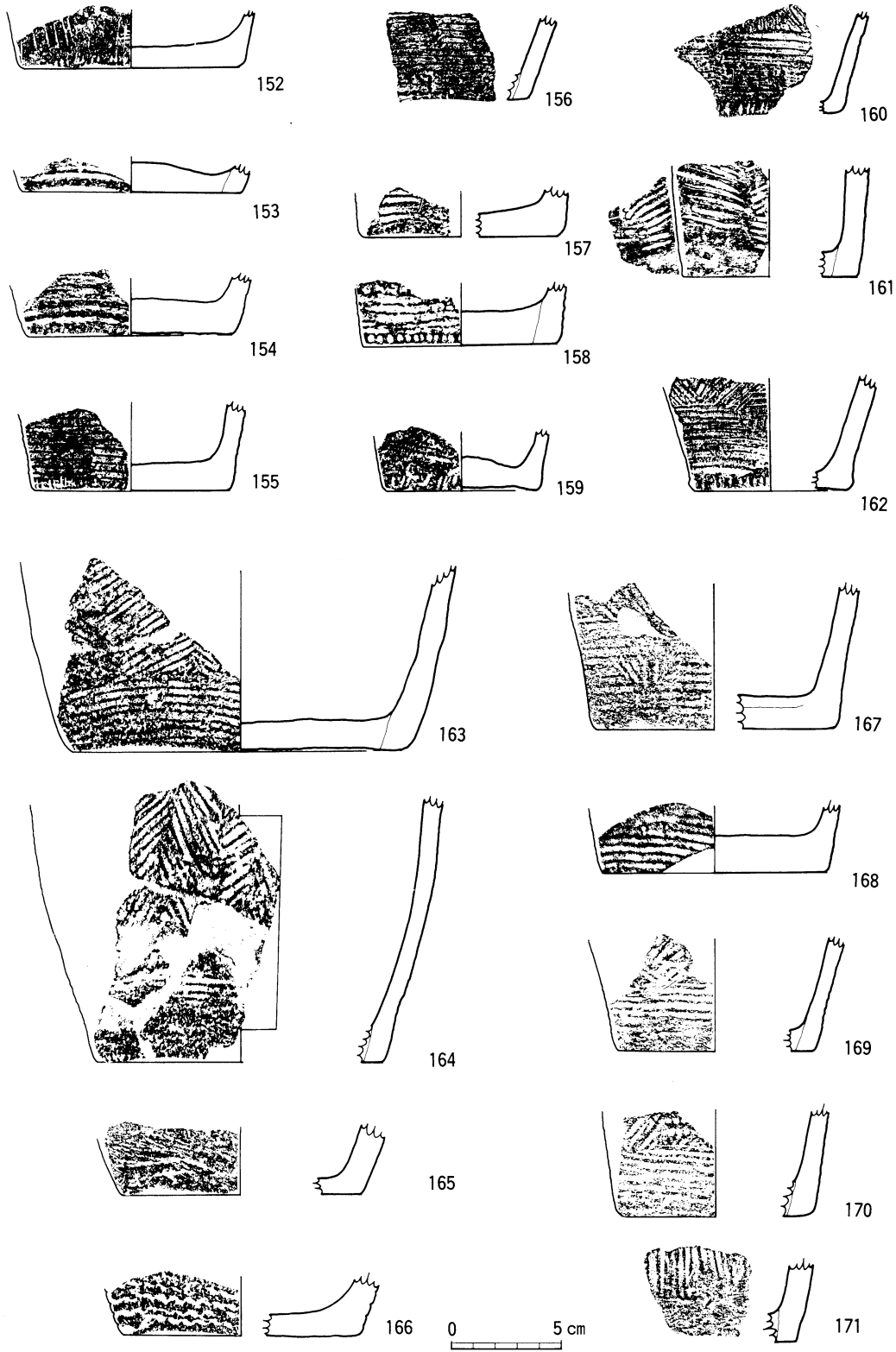
Ⅲ類土器は、桑ノ丸タイプ相当の土器である。

Ⅳ類土器 (第71・73図)

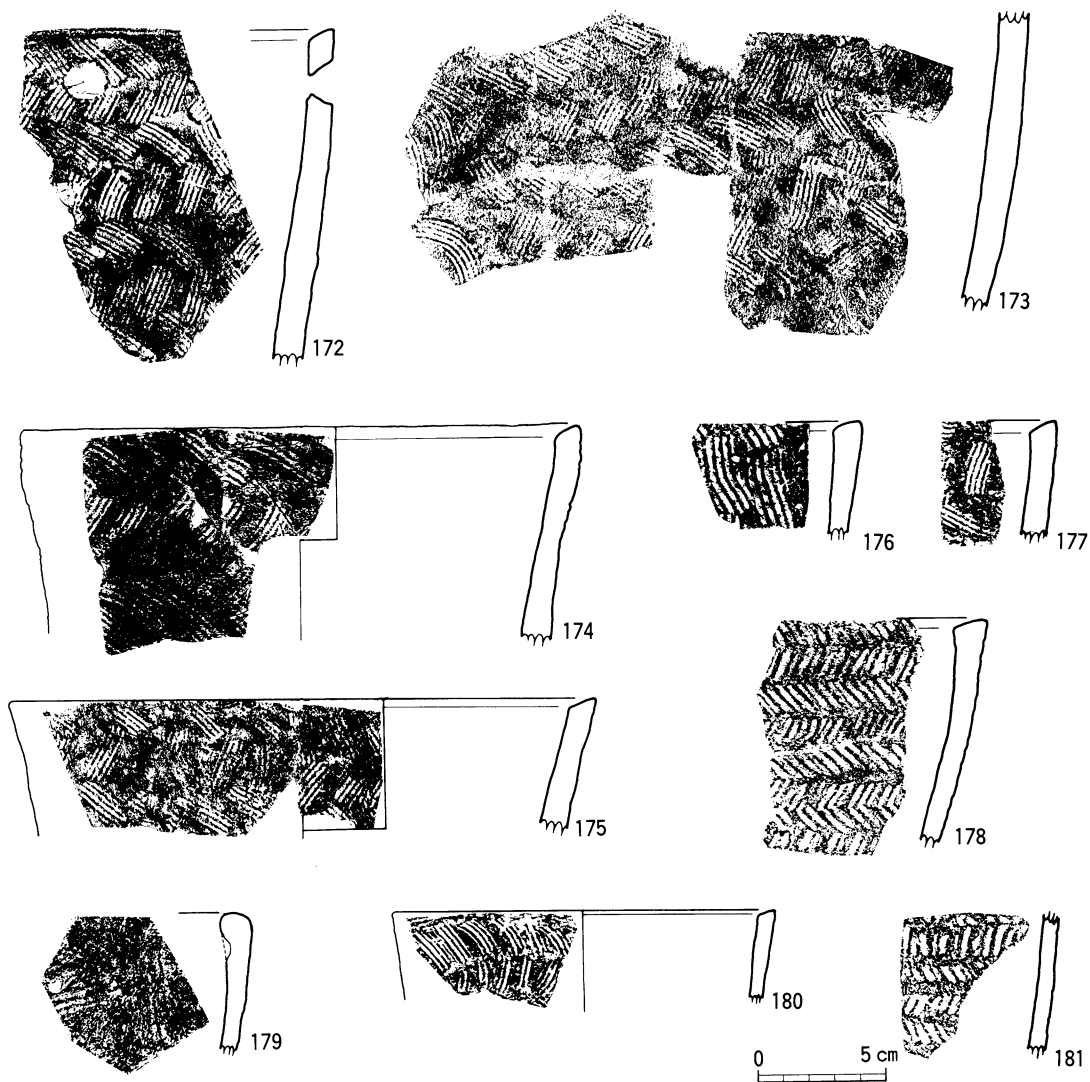
Ⅳ類土器は直行又は若干内傾する口縁部で、口唇部は平坦で内傾して内側口唇部に稜を有し器形は円筒形を呈する土器である。内面は篋調整を施し、胎土に金雲母を含むこと等



第68图 II e類土器実測図(1)



第69图 II e類土器実測図(2)



第70図 III類土器実測図

を特徴的とする。器形や器面調整はIII類土器と類似している。IV類土器は文様施文具の違いから、櫛状施文具による綾杉文を施文する一群をIV a類土器、篋状施文具による短線の綾杉文を施文する一群をIV b類土器、無文土器をIV c類土器とした。

IV a類土器 (第71図182~199)

182は口縁部がわずかに肥厚しながら、わずかに内湾する。口唇部は平坦に治める。器面には櫛状施文具で刺突した綾杉文を横位に数段施す。内面は篋研磨調整を施す。胎土に金雲母を含む。焼成はやや軟弱である。183は平坦に仕上げた口唇部は内側に内傾して稜を有す。口縁部直下に3状の刺突線文や胴部に櫛状施文具による綾杉文を横位に数段施す。

口縁部上位に円形の補修孔を穿っている。184～186・192は口縁部片、その他は胴部片である。文様は櫛状施文具の刺突により綾杉文や直線文（略綾杉文）が施されている。なお182・183・185～188・191～195・199の胎土には金雲母を含む。

IV b 類土器（第72図200～212）

IV b 類土器は篋状施文具による短線の組合せで綾杉文を施文する。200～209は胴部片である。200～206の胎土には金雲母を多く含み全体的に焼成は軟弱である。色調は赤褐色を呈す。210・211は直行する口縁部で口唇部は平坦に仕上げる。器面には篋先による斜めの短線を細かく施す。213は肋の小さな貝殻腹縁で刺突文を施し施文具に違いがあるが同部類として扱った。212は復元口径15.8cm、器高13.4cm、底部径8cmを測る完形土器である。胴部から口縁部にかけて直行し、口唇部は平坦に仕上げて、口唇部内側に稜を有す。器面には平行な2本の細い篋書きによる略格子状の文様を施す。底部側面は篋削りを施す。胎土に石英や小礫粒を含み、焼成はやや軟弱である。色調は褐色を呈す。その他207・209の胎土に金雲母を含む。

IV c 類土器（第72図213～219）

IV c 類土器は無文土器である。口縁部は直行又は若干内湾し、口唇部は平坦で内傾して内側口唇部に稜を持つ。口縁部内外に弱い研磨が施される。全体的に肌理の細かい土器である。胎土には石英・長石を含み、焼成は良好、色調は明褐色を呈する。

IV類土器は、下剝峰式土器に比定される土器と思われる。

V 類土器（第73図212・220～225）

V 類土器は小型の土器で、器面には指頭痕が見られ全体的に雑な仕上がりで、一見手捏土器を思わせ器面調整は雑な仕上りで無文土器である。口唇部は細く治め、土器の大きさに比べ器壁は比較的小さい。内面は篋研磨調整を施す。220は復元口径15.6cm、221は12.5cm、222は13.7cmを測る。224は復元口径8cm、器高7.3cm、底部径5.6cmを測る小型の鉢形土器である。底部側面から直行する口縁部で口唇部は先細りとなる。器面内外に指頭痕が見られる。口縁部にススが付着する。

VI 類土器（第74図226～237）

VI 類土器は山形押型土器である。

226の口縁部は直行し、口唇部は平坦に治める。山形押型文を施す。229は胴部が膨らみ、頸部で締め外反する口縁部へと移行する。器壁は頸部で薄く口縁部で肥厚する。大型の回転山形押型文を器面全体に施す。施文具原体の大きさは不明である。胎土に石英・小礫を多く含む。焼成はやや軟弱で全体的に脆く、内面は部分的に剝落を受けている。色調は褐色を呈す。229～231は同一個体と思われる。232～237は比較的しっかりとした焼成である。VI類の山形押型文は山形の山頂部は上を向き、234・235は斜めに回転させて施文する。内面は弱い研磨痕が施される。

Ⅶ類土器（第75図）

Ⅶ類土器は、塞ノ神式土器に相当し、タイプによりⅦa類～Ⅶd類の4つに分類した。

Ⅶa類土器（第75図238～242）

238は胴部が若干膨らみ、頸部で「く」の字状に屈曲して、外開きの口縁部となる。復元頸部径は15.3cmを測る。頸部内側に稜を有す。文様としては頸部に4条、胴部に3条とその下位に平行沈線文を施す。また胴部には燃糸文を縦列に間隔を設けて施文する。器壁は全体的に薄く。塞ノ神式A a式土器である。

239・240の胴部には沈線に囲まれて縄文が施されている。内面に横ナデ調整が施されている。塞ノ神A b式土器である。241・242は沈線文を施す土器である。

Ⅶb類土器（第75図243～246）

243は復元口径38cmを測る。胴部はわずかに膨らみ、外反する口縁部を呈し、口唇部は先細りとなる。口縁内外と外側器面には横位の貝殻条痕文を浅く施した後、口縁直下から胴部にかけて横6列に貝殻腹縁による連続刺突文を施している。胴部以下は文様は無く、横ナデ整形を行っている。全体的に焼成は弱く、特に内面は雨垂れ状に器面が剥落を受けている。245は貝殻腹縁による連続刺突文、口唇部に刻目文を施す口縁部片である。

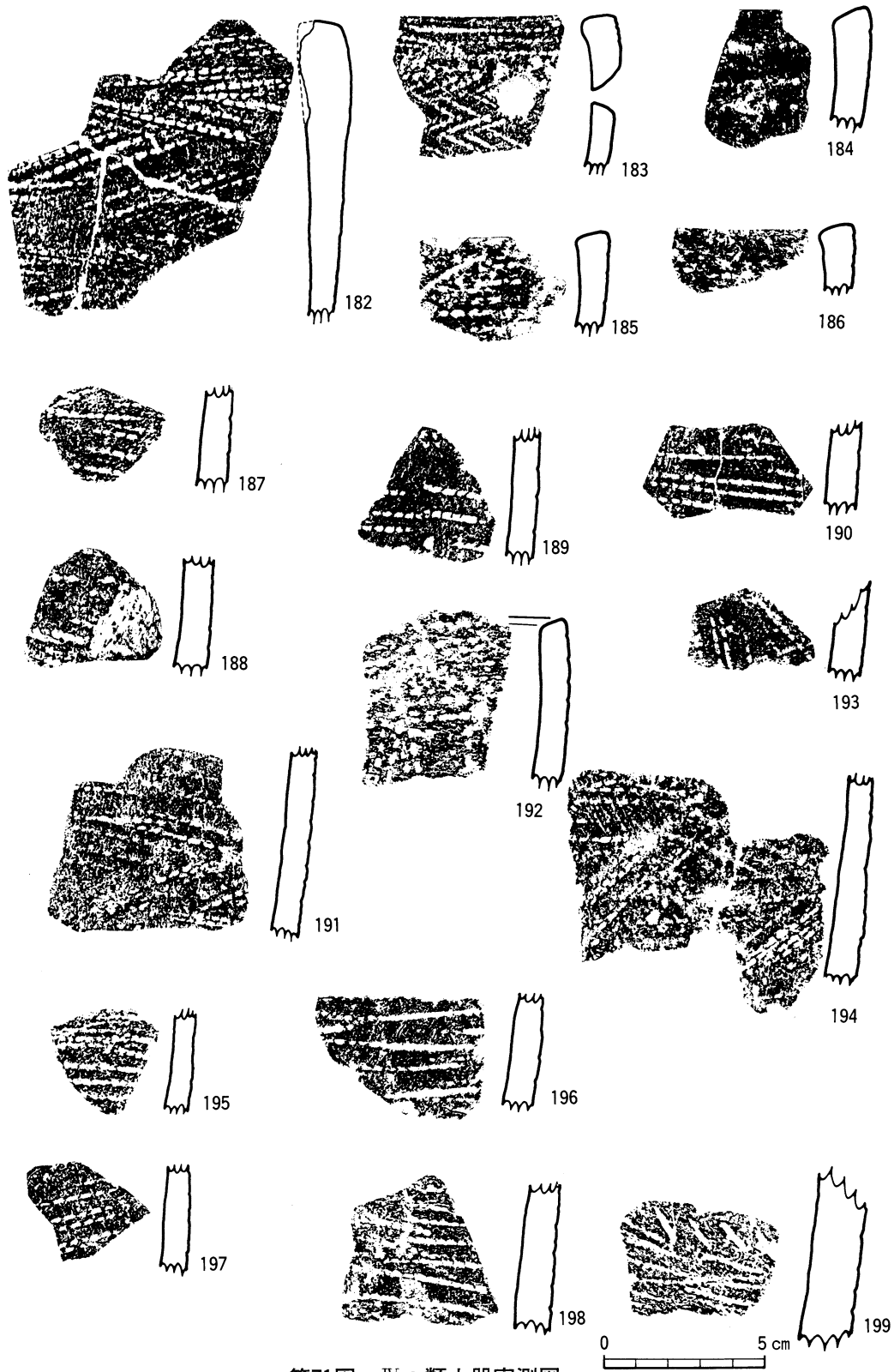
Ⅶb類土器は塞ノ神B式土器である。

Ⅶc類土器（第75図247）

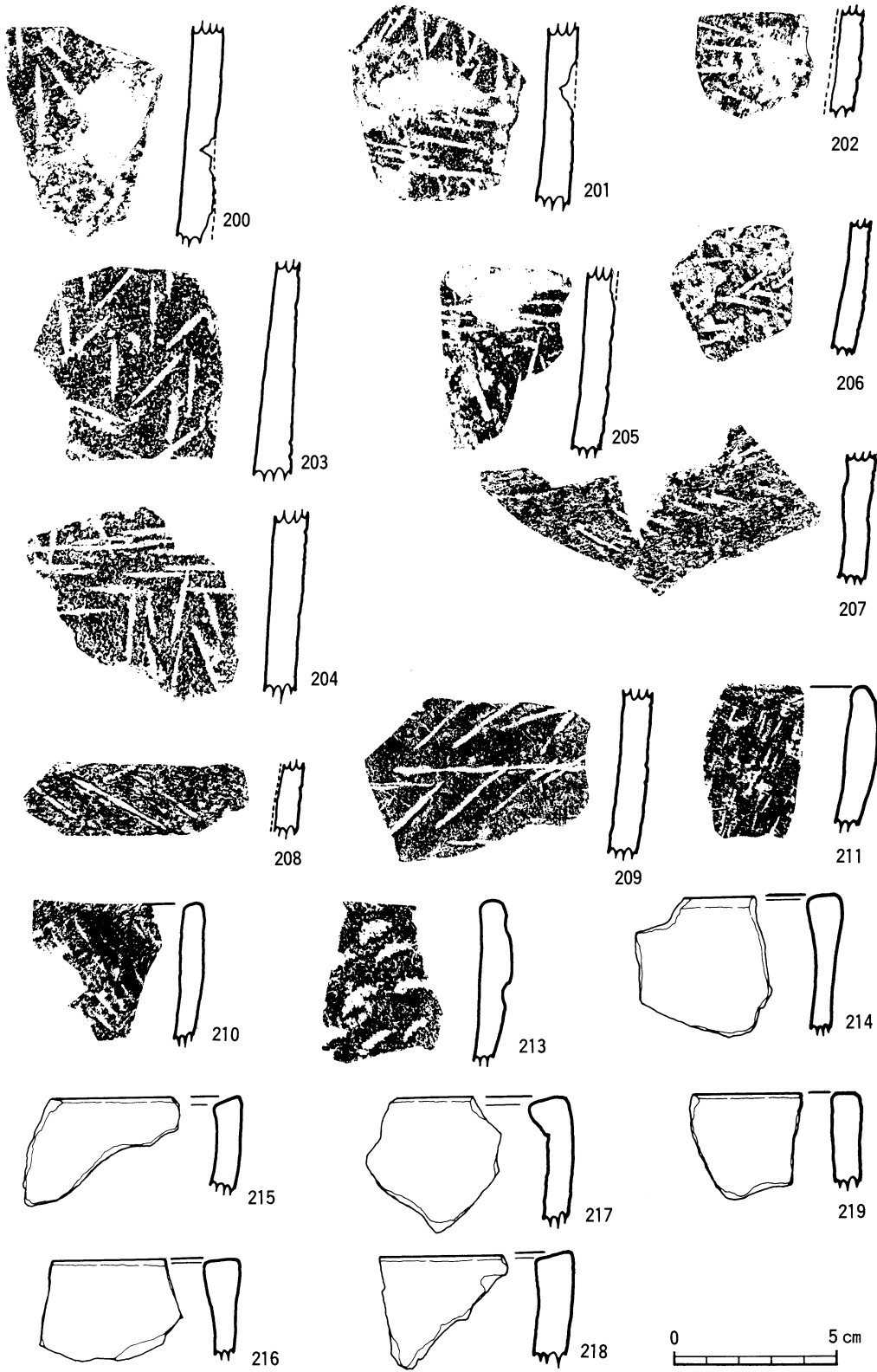
Ⅶc類土器は「く」の字状に屈曲した口縁部を呈する無文土器である。器面はナデ整形を施す。全体的に作りは雑で器面に凹凸が見られる。器形等から塞ノ神B式土器に比定されよう。

Ⅶd類土器（第76図248～250）

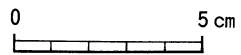
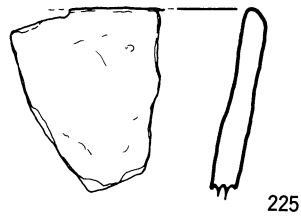
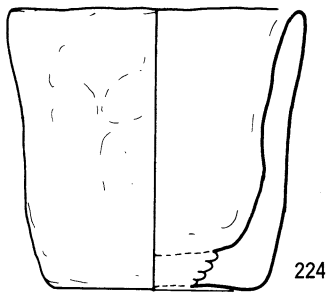
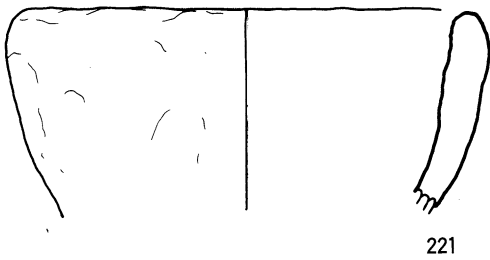
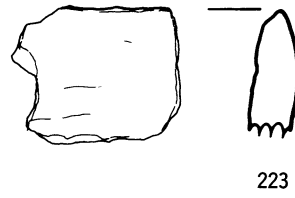
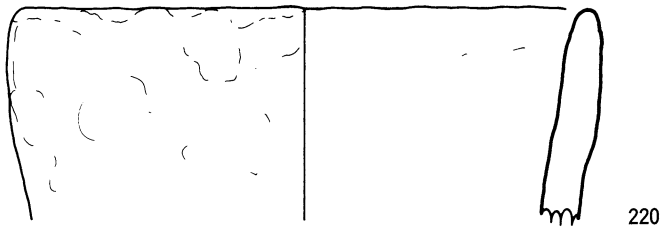
Ⅶ類土器の底部である。248は底部径11.2cmの平底である。土器製作過程の円盤状貼り付けの痕跡が明瞭に残る。胴部下位に篋削りや弱い研磨痕が見られる。



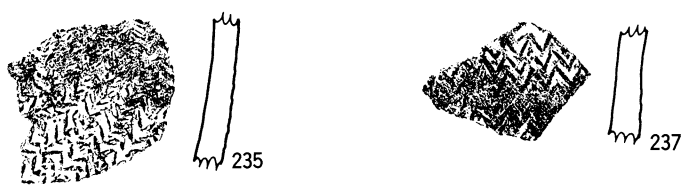
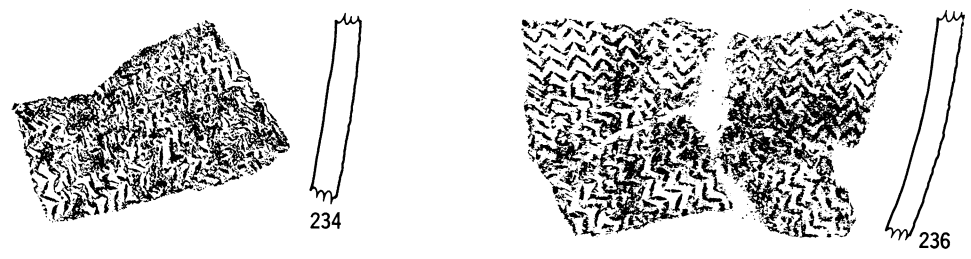
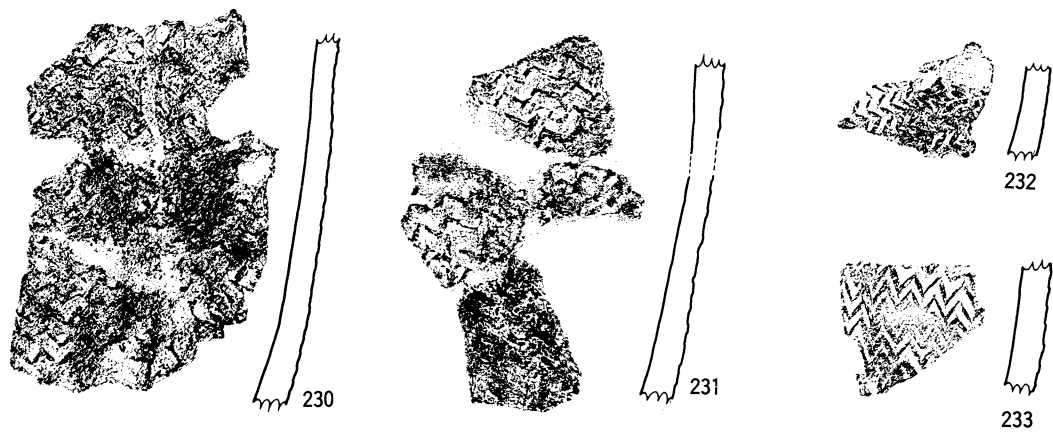
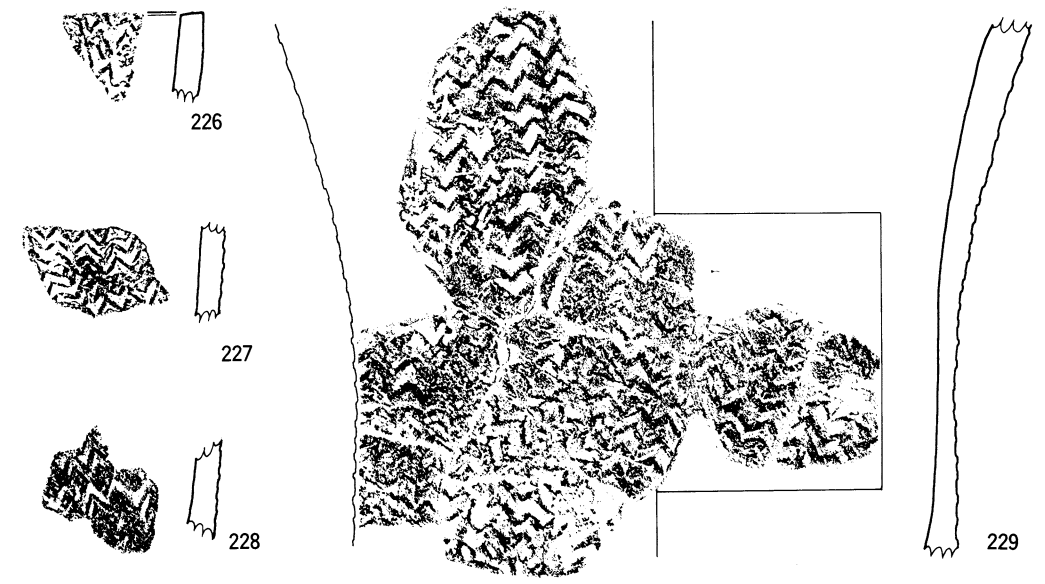
第71図 IV a類土器実測図



第72図 IV b類・IV c類土器実測図

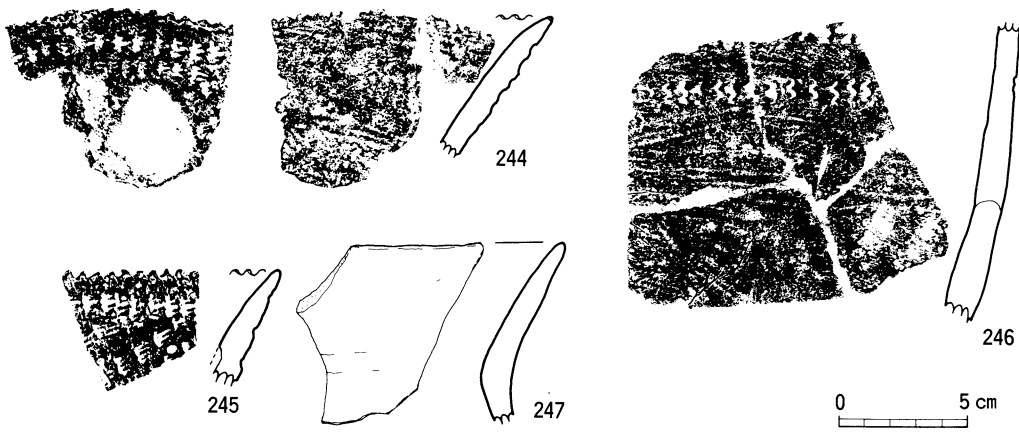
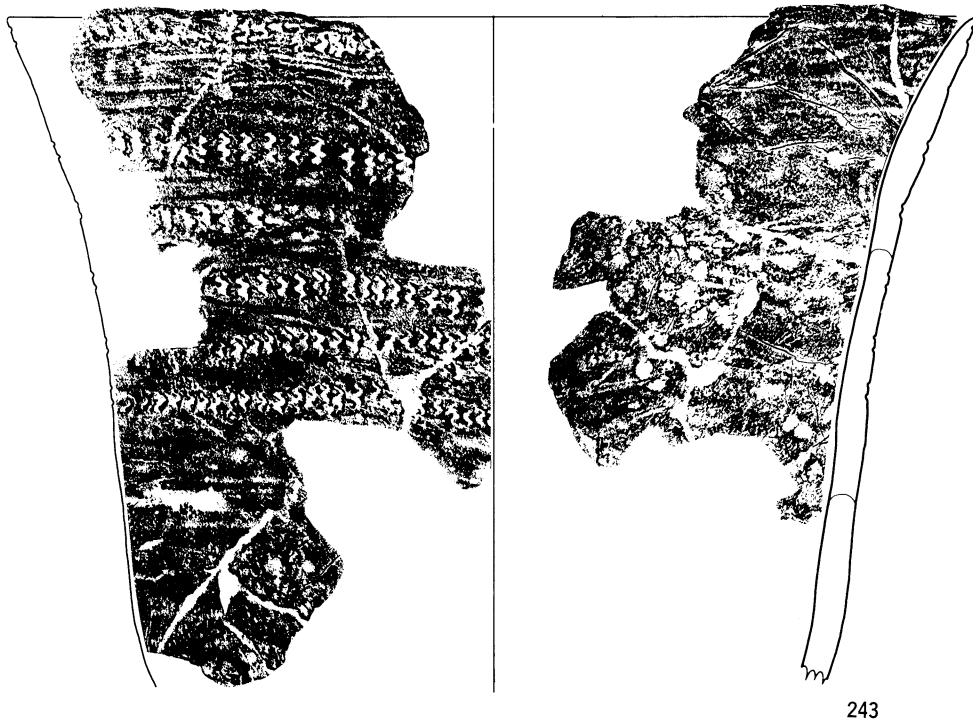
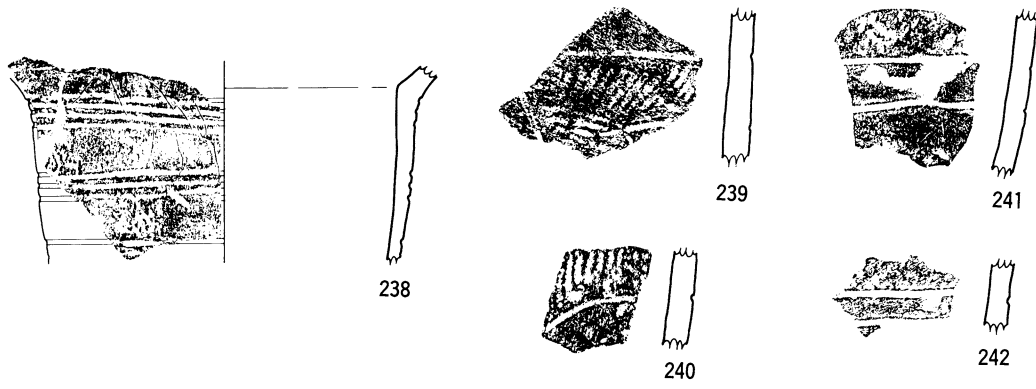


第73図 IV b類・V類土器実測図

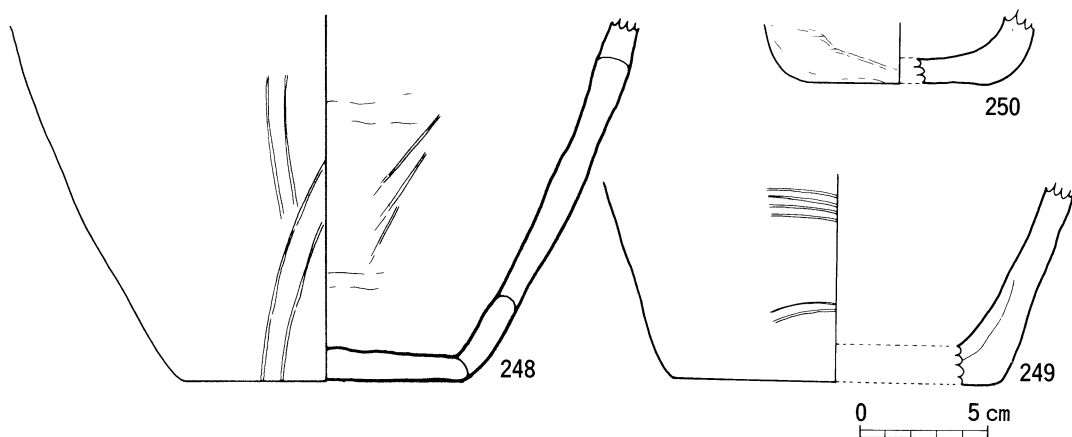


第74图 VI類土器実測图





第75図 VII a類・VII b類土器実測図



第76図 VII c 類土器実測図

第11表 出土土器一覽表(1)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)mm	胎土	調整	焼成	色調
1	I a	103.713	E-2・V下	円筒	完形品	11.7cm・5cm・	石英 小礫粒	内腔研磨	良	内外 褐色
2	I a	104.135	E-2・V	〃	胴部	・	金雲母 小礫粒	〃	〃	内外 明褐色
3	I a	-	E-2・V	〃	〃	・	5 石英	ナ デ	〃	内外 明褐色
4	I a	103.738	E-2・V	〃	〃	・	7 小礫粒	〃	〃	内外 明褐色
5	I a	105.400	C-3・V下	〃	〃	・	8 石英	内 ナ デ	〃	内外 黒褐色 明褐色
6	I a	97.03	E-2・V	〃	〃	・	9 金雲母 石英	ナ デ	〃	内外 暗褐色 赤褐色
7	I a	105.075	E-2・V下	〃	〃	・	9 金雲母 石英	〃	〃	内外 暗褐色 赤褐色
8	I a	-	A-5・V下	〃	底部	・	6 石英	〃	〃	内外 黒褐色 褐色
9	I b	103.38	E-3・V下	角筒	口縁部	・	石英 長石	ナ デ	〃	内外 灰褐色
10	I b	103.490	E-2・V下	〃	〃	・	4 石英 長石	〃	〃	内外 灰褐色
11	I b	104.880	E-2・V下	〃	〃	・	6 石英 長石	〃	〃	内外 明褐色
12	I b	104.730 103.086	E-2・V下 D-2・V下	〃	〃	・	8 石英, 小礫粒 長石	〃	〃	内外 明褐色
13	I b	103.973	E-2・V	〃	〃	・	8 石英	〃	〃	内外 明褐色 灰褐色
14	I b	102.541	E-3・V	〃	胴部	・	8 石英, 小礫粒 長石	〃	〃	内外 褐色
15	I b	103.135	E-2・V下	〃	〃	・	6 金雲母	〃	〃	内外 黒褐色 赤褐色
16	I b	95.743 103.415	E-2・V	〃	〃	・	7 石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色 赤褐色
17	I b	103.975	E-2・V	〃	〃	・	8 石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色 赤褐色

第12表 出土土器一覽表(2)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) mm	胎土	調整	焼成	色調
18	I b	102.696 102.935	E-3・V	角筒	胴部	・ ・ 7	石英 小礫粒	ナ デ	良	内外 暗褐色 明褐色
19	I b	103.558	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 6	石英	〃	〃	内外 褐色
20	I b	102.646	E-3・V下	〃	〃	・ ・ 8	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
21	I b	103.268 103.895	E-2・V	〃	〃	7.4cm ・ ・ 8	石英, 長石 小礫粒	〃	〃	内外 赤褐色
22	I b	103.693	E-3・V	〃	〃	・ ・ 5~6	石英	〃	〃	内外 暗褐色 褐色
23	I b	-	E-4・V下	〃	〃	・ ・ 9	石英 長石	〃	〃	内外 灰褐色 明褐色
24	I b	104.185	E-1・V	〃	〃	・ ・	金雲母 石英	〃	〃	内外 褐色
25	I b	103.730	E-2・V	〃	〃	・ ・ 5	石英	〃	〃	内外 灰褐色
26	I b	104.150	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 7	〃	ナ デ	〃	内外 灰褐色 褐色
27	I b	104.093	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 灰褐色 褐色
28	I b	103.323	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 6	石英	〃	〃	内外 灰褐色 褐色
29	I b	104.055	E-2・V	〃	〃	・ ・ 5	〃	〃	〃	内外 灰褐色 褐色
30	I b	103.578	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
31	I b	103.133	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	やや難弱	内外 黒褐色 褐色
32	I b	-	E-2	〃	〃	・ ・ 8	石英 小礫粒	〃	良	内外 黒褐色 明褐色
33	I b	103.130	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 7	石英 角セシ石	〃	やや難弱	内外 明褐色 灰褐色
34	I b	104.250	E-2・V	〃	〃	・ ・ 5	小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色 褐色
35	I b	103.963	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7~9	石英 小礫粒	〃	良	内外 灰褐色 褐色
36	I b	103.478	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 6	石英	〃	〃	内外 明褐色
37	I b	103.740	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 5	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色 褐色
38	I b	103.02	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 7	小礫粒 石英	〃	〃	内外 灰褐色 褐色
39	I b	103.064	D-2・V下	〃	〃	・ ・ 7	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色 褐色
40	I b	103.915	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 8	石英	〃	〃	内外 灰褐色 褐色
41	I b	103.638	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 灰褐色 褐色
42	I b	102.670	E-4・V下	〃	〃	・ ・ 7	〃	〃	〃	内外 暗褐色 明褐色
43	I b	103.830	E-2・V	〃	〃	・ ・ 5	石英 角セシ石	〃	〃	内外 褐色
44	I b	102.468	E-4・V下	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 褐色
45	I b	103.413	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
46	I b	-	E-4・V下	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 明褐色
47	I b	103.840	E-2	〃	〃	・ ・ 9	小礫粒	〃	〃	内外 褐色
48	I b	103.06 103.08	E-2・V下 E-2・V下	〃	〃	・ ・ 5~9	石英	〃	やや難弱	内外 褐色
49	I b	103.595	C-1・V下	〃	底部	7.4cm ・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色 褐色
50	II a	101.693 196.5	D-4・V D-3・V下	深鉢	口縁部	27.9cm ・ ・ 1.2~1.4	石英, 小礫粒 長石	篋研磨	良	内外 暗褐色 褐色

第13表 出土土器一覽表(3)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) mm	胎土	調整	焼成	色調
51	Ⅱ a	102.803 101.803	E-4・V D-4・V	深鉢	口縁部	. . 12	石英	篋研磨	良	内外 褐色
52	Ⅱ a	103.246	E-3・V下	〃	〃	. . 13	〃	〃	〃	内外 褐色
53	Ⅱ a	103.15	E-3・V下	〃	〃	. . 12	石英 小礫粒		やや難弱	内外 明褐色
54	Ⅱ b	104.470	C-2・V下	〃	〃	. . 10	石英	篋研磨	良	内外 褐色
55	Ⅱ b	104.135	C-1・V下	〃	〃	. . 8	石英	〃	〃	内外 灰褐色
56	Ⅱ b	102.628	E-4・V下	〃	〃	. . 8	〃	〃	〃	内外 灰褐色
57	Ⅱ b	103.873 104.138	D-4・V D-5・V他	〃	〃	. . 11	石英, 角セン 石, 小礫粒	〃	やや難弱	内外 灰褐色
58	Ⅱ b	103.290	E-3・V下	〃	〃	. . 10~12	石英 長石	〃	良	内外 暗褐色
59	Ⅱ b	103.275	D-3・V下	〃	〃	. . 10	石英 長石	〃	〃	内外 褐色
60	Ⅱ b	103.985	D-3・V下	〃	〃	. . 10	石英 長石	〃	〃	内外 暗褐色
61	Ⅱ b	-	A-5・V	〃	完形品	25.4cm・29 cm・	石英 長石	〃	〃	内外 暗褐色
62	Ⅱ b	101.458	E-4・V	〃	〃	. . 7	石英	〃	〃	内外 明褐色
63	Ⅱ b	103.985 103.020	E-1・V下 D-3・V下他	〃	〃	21 cm・	石英, 小礫粒 黒曜石	〃	〃	内外 褐色
64	Ⅱ b	102.173	D-4・V下	〃	〃	. . 6	石英 小礫粒		やや難弱	内外 褐色
65	Ⅱ b	102.089	D-4・V下	〃	〃	. . 8	石英 小礫粒		〃	内外 灰褐色
66	Ⅱ b	104.430	C-4・V下	〃	〃	. . 8	石英 小礫粒		〃	内外 明褐色
67	Ⅱ b	100.658	E-5・V下	〃	〃	. . 7~11	石英, 小礫粒 角セン石	篋研磨	良	内外 褐色
68	Ⅱ b	102.528	E-5・V下	〃	〃	. . 9	石英, 小礫粒 角セン石	〃	〃	内外 暗褐色
69	Ⅱ b	103.316 103.325	E-3・V下	〃	〃	24 cm・	石英 角セン石	〃	〃	内外 褐色
70	Ⅱ b	103.374 103.585	C-2・V下	〃	〃	22 cm・	石英	〃	〃	内外 灰褐色
71	Ⅱ b	104.885	C-1・V下	〃	〃	. . 7	〃	〃	〃	内外 暗褐色
72	Ⅱ b	107.277	B-4・V下	〃	〃	. . 6	石英 金雲母	〃	〃	内外 灰褐色
73	Ⅱ b	105.180	C-3・V下	〃	〃	. . 5	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
74	Ⅱ b	102.431 100.723	E-3・V E-5・V下	〃	〃	19 cm・	石英 長石	〃	〃	内外 暗褐色
75	Ⅱ b	104.190 103.975	C-2・V下	〃	〃	21 cm・	石英	〃	〃	内外 褐色
76	Ⅱ b	102.006	D-3・V下	〃	〃	. . 7~10	石英		やや難弱	内外 灰褐色
77	Ⅱ b	104.070	D-2・V下	〃	〃	. . 6	石英 長石	篋研磨	良	内外 褐色
78	Ⅱ b	104.070 104.829	D-2・V下	〃	〃	24.5cm・	石英 角セン石	〃	〃	内外 褐色
79	Ⅱ b	102.493	E-4・V下	〃	〃	. . 10	石英 角セン石	〃	〃	内外 灰褐色
80	Ⅱ b	103.515	E-2・V下	〃	〃	. . 7	石英		〃	内外 明褐色
81	Ⅱ b	103.370	E-3・V下	〃	〃	. . 7	〃		〃	内外 明褐色
82	Ⅱ b	102.521	E-3・V下	〃	〃	. . 8~11	石英 小礫粒	篋研磨	〃	内外 暗褐色
83	Ⅱ b	101.936	D-3・V下	〃	〃	. . 7	石英 角セン石		〃	内外 灰褐色

第14表 出土土器一覽表(4)

番号	種別	標高 m	区・層	器種	部位	法量 (径・高・厚) mm	胎土	調整	焼成	色調
84	II b	105.548	C-5・V	深鉢	完形品	17.8cm・ 7~8	石英 小礫粒	篋研磨	やや難弱	内外 灰褐色
85	II b	102.905	D-3・V下	〃	口縁部	・ 7	石英	〃	良	内外 灰褐色
86	II b	102.115	D-3・V	〃	〃	・ 7	石英 長石	〃	やや難弱	内外 明褐色
87	II b	101.195	D-3・V下	〃	〃	・ 8	石英	篋研磨	良	内外 灰褐色
88	II b	107.895	D-3・V下	〃	〃	21.2cm・ 11	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
89	II b	103.389	E-3・V	〃	〃	・ 8	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 明褐色
90	II b	102.251 102.955	D-3・V下 E-3・V	〃	〃	・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 黒褐色
91	II b	102.916	E-3・V	〃	〃	・ 6	石英 長石	〃	良	内外 褐色
92	II b	103.070	D-2・V下	〃	〃	19.2cm・ 10	石英 長石	〃	〃	内外 灰褐色
93	II b	102.760	D-3・V下	〃	〃	・ 9	石英	〃	やや難弱	内外 暗褐色
94	II b	102.725 101.773	D-3・V下 E-4・V下	〃	〃	19.6cm・ 6~9	石英 小礫粒	〃	良	内外 灰褐色
95	II b	101.886	D-3・V下	〃	〃	18.4cm・ 6	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 灰褐色
96	II b	103.301 103.144	D-2・V下	〃	〃	18 cm・ 9	石英 長石	〃	良	内外 灰褐色
97	II b	104.720	C-1・V	〃	完形品	16 cm・16.3cm・ 6~9	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色
98	II b	102.395 103.900	C-1・V	〃	〃	17 cm・ 7~10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
99	II b	102.545 102.845	D-3・V E-3・V	〃	〃	18 cm・ 7~11	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 灰褐色
100	II b	103.515 103.388	E-2・V D-4・V下 E-3・V下	〃	〃	11 cm・ 4~8	石英、長石 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
101	II c	103.510	C-1・VII	〃	〃	28.5cm・ 6~11	石英 小礫粒	〃	〃	内外 赤褐色
102	II c	100.908	E-4・V下	〃	〃	23 cm・ 11	石英、小礫粒 角セシ石	〃	〃	内外 褐色
103	II c	103.840	E-2・V	〃	〃	17.9cm・ 11	石英 小礫粒	〃	良	内外 暗褐色
104	II c	101.163	E-5・V下	〃	〃	・ 11	石英、小礫粒 長石	〃	〃	内外 褐色
105	II c	103.230 103.125	E-3・V下 D-3・V下	〃	〃	17 cm・20.2cm・ 8~13	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
106	II c	101.355 101.280	D-3・V下	〃	〃	12 cm・12.1cm・ 9	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 黒褐色
107	II c	104.920	C-3・V下	〃	口縁部	14.1cm・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
108	II c	102.008	D-4・V下	〃	〃	18 cm・ 5~10	石英 長石	篋研磨	〃	内外 暗褐色
109	II c	104.795 104.340	C-3・V下 C-2・V下	〃	〃	・ 9	石英 長石	〃	〃	内外 灰褐色
110	II c	104.788	C-3・V	〃	〃	・ 9	石英 長石	〃	〃	内外 明褐色
111	II d	103.061 103.016	D-2・V下	〃	〃	19 cm・ 10	石英 長石	〃	良	内外 暗褐色
112	II d	102.735	D-3・V下	〃	〃	17.8cm・ 8~12	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色
113	II d	102.146 103.566	D-3・V下 C-2・V下	〃	〃	・ 10	石英 長石	〃	〃	内外 明褐色
114	II d	103.955	C-2・V下	〃	〃	・ 10	石英 長石	〃	〃	内外 明褐色
115	II d	102.638	E-4・V下	〃	〃	15 cm・ 10	石英 長石	〃	〃	内外 暗褐色
116	II d	102.720 104.09	D-2・V D-2・V下	〃	〃	18.5cm・ 8~12	石英 小礫粒	〃	〃	内外 赤褐色

第15表 出土土器一覽表(5)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)mm	胎土	調整	焼成	色調
117	II d	103.945	D-2・V	深鉢	口縁部	・ ・ 11	石英、小礫粒 黒曜石	鈍研磨	良	内外 明褐色
118	II d	103.635		〃	〃	・ ・ 8~12	石英 長石	〃	〃	内外 灰褐色
119	II d	104.715	C-2・V下	〃	〃	・ ・ 12	石英 長石	〃	〃	内外 明褐色
120	II d	107.460	A-3・V下	〃	〃	・ ・ 11	石英 長石	〃	〃	内外 褐色
121	II d	103.175	E-2・V	〃	〃	・ ・ 8	石英		やや難弱	内外 灰褐色
122	II d	104.080	D-2・V	〃	〃	・ ・ 9~15	石英 長石	鈍研磨	〃	内外 明褐色
123	II d	102.300	D-2・V	〃	〃	・ ・ 11	石英 長石	〃	〃	内外 暗褐色
124	II d			〃	〃	・ ・ 12	石英 長石	〃	〃	内外 暗褐色
125	II d	107.467	B-4・V	〃	〃	・ ・ 8	石英 小礫粒	〃	良	内外 明褐色
126	II d	104.190	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 8~13	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色
127	II d	104.335	D-2・V	〃	〃	14.2cm・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
128	II d	104.645	D-8・V	〃	〃	20 cm・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 褐色
129	II e	104.930	C-3・V下	〃	底部	20.8cm・ ・ 12	石英	ナ デ	〃	内外 灰褐色
130	II e	105.005 104.855	C-3・V下	〃	〃	18.5cm・ ・ 11	〃	〃	〃	内外 灰褐色
131	II e	103.193	F-3・V下	〃	〃	17.8cm・ ・ 11	石英 小礫粒	〃	良	内外 褐色
132	II e	101.896 102.416	D-3・V下 D-3・V下	〃	〃	15.5cm・ ・ 14	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
133	II e	103.601	C-2・V下	〃	〃	15 cm・ ・ 9	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 褐色
134	II e	102.930	E-3・V下	〃	〃	14.6cm・ ・ 12	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明褐色
135	II e	102.373 103.790	D-4・V下 D-3・V下	〃	〃	14 cm・ ・ 11	石英 小礫粒	〃	良	内外 褐色
136	II e	101.378 101.453	E-5・V下	〃	〃	14 cm・ ・ 13	石英	〃	やや難弱	内外 灰褐色
137	II e	104.903 101.148	C-5・V下 E-5・V下	〃	〃	13 cm・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	良	内外 褐色
138	II e	103.396	C-2・V下	〃	〃	13.5cm・ ・ 9	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
139	II e	103.370	D-2・V	〃	〃	13.5cm・ ・	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
140	II e	103.075	E-3・V	〃	〃	13.6cm・ ・ 11	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 明褐色
141	II e	103.970 103.450	C-2・V下 C-2・V下	〃	〃	14.3cm・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 褐色
142	II e	102.741 102.956	E-3・V下	〃	〃	14 cm・ ・ 20	石英、長石 小礫粒	〃	良	内外 暗褐色
143	II e	102.476	E-3・V下	〃	〃	17.2cm・ ・ 16	石英 黒曜石	〃	〃	内外 褐色
144	II e	104.900 95.640	C-3・V下 C-3・V下	〃	〃	13 cm・ ・ 12	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
145	II e	101.748	D-4・V下	〃	〃	12.5cm・ ・ 6	石英	〃	〃	内外 灰褐色
146	II e	102.978	F-4・V	〃	〃	11.5cm・ ・ 5	石英 黒曜石	〃	〃	内外 灰褐色
147	II e	107.955 103.320	E-3・V下	〃	〃	11.6cm・ ・ 16	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色
148	II e	101.946 102.921	D-3・V D-3・V下	〃	〃	11.4cm・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 褐色
149	II e	-	C-3・集石 15内-2	〃	〃	10.7cm・ ・ 11	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色

第16表 出土土器一覽表(6)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) mm	胎土	調整	焼成	色調
150	Ⅱ e	103.455	E-8・V下	深鉢	底部	10.6cm・・6	石英 小礫粒	ナ デ	やや難弱	内外 灰褐色
151	Ⅱ e	102.686	E-3・V下	〃	〃	10.4cm・・11	石英 小礫粒	〃	良	内外 暗褐色
152	Ⅱ e	102.810 102.873	E-3・V	〃	〃	10 cm・・10	石英	〃	やや難弱	内外 明褐色
153	Ⅱ e	102.508 108.437	F-4・Ⅲ b A-5・V下	〃	〃	10 cm・・9~13	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色
154	Ⅱ e	103.470	E-3・V下	〃	〃	9.8cm・・17	石英 長石	〃	良	内外 褐色
155	Ⅱ e	101.578	D-4・V下	〃	〃	9 cm・・12	石英 長石	〃	やや難弱	内外 明褐色
156	Ⅱ e	102.885	E-3・V下	〃	〃	・・	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
157	Ⅱ e	107.142	B-5・V下	〃	〃	9 cm・・10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明褐色
158	Ⅱ e	102.518	F-4・V下	〃	〃	9 cm・・16	石英	〃	〃	内外 灰褐色
159	Ⅱ e	103.635	F-2・V下	〃	〃	7 cm・・9~13	石英	〃	良	内外 灰褐色
160	Ⅱ e	102.745	E-3・V下	〃	〃	・・5	石英 長石	〃	〃	内外 黒色 暗褐色
161	Ⅱ e	102.675	E-3・V下	〃	〃	8 cm・・11	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 灰褐色
162	Ⅱ e	103.195	F-3・Ⅲ下	〃	〃	7 cm・・7	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
163	Ⅱ e	102.306	D-3・V下	〃	〃	15.3cm・・12	石英 小礫粒	〃	難弱	内外 灰褐色
164	Ⅱ e	103.058	D-4・V下 B-3・V下	〃	〃	13 cm・・	石英 小礫粒	〃	やや難弱	内外 灰褐色
165	Ⅱ e	104.100	D-2・V	〃	〃	11 cm・・8	石英	〃	良	内外 灰褐色 明褐色
166	Ⅱ e	103.170	E-3・V下	〃	〃	11 cm・・10	石英 長石	〃	やや難弱	内外 暗褐色 褐色
167	Ⅱ e	98.443	E-2・V	〃	〃	11 cm・・15	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色
168	Ⅱ e	102.211	D-3・V下	〃	〃	10.2cm・・16	石英, 小礫粒 黒曜石	〃	良	内外 明褐色
169	Ⅱ e	108.475	B-3・V下	〃	〃	9 cm・・10	石英 黒曜石	〃	やや難弱	内外 明赤褐色 明灰褐色
170	Ⅱ e	105.190	C-3・V下	〃	〃	8.7cm・・	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明赤褐色
171	Ⅱ e	103.000	D-3・V下	〃	〃	・・14	石英 小礫粒	〃	良	内外 褐色 明赤褐色
172	Ⅲ	104.575 104.540	E-2・V下	〃	口縁部	・・10~12	石英 小礫粒	篋研磨	やや難弱	内外 褐色
173	Ⅲ	104.535 104.470	E-2・V E-2・Ⅲ b	〃	胴部	・・10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色 明灰褐色
174	Ⅲ	103.874	E-2・V下	〃	口縁部	22 cm・・9~13	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明赤褐色 明灰褐色
175	Ⅲ	104.071 102.906	E-2・V下 E-3・V	〃	〃	23 cm・・12	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐色
176	Ⅲ	103.585	E-2・V下	〃	〃	・・7~10	石英	〃	〃	内外 明灰褐色 褐色
177	Ⅲ	103.485	E-2・V	〃	〃	・・10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明灰褐色 明赤褐色
178	Ⅲ	104.630	E-2・V下	〃	〃	・・7~14	石英 黒曜石	〃	〃	内外 褐色 明褐色
179	Ⅲ	104.450	C-2・V	〃	〃	・・5~13	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明灰褐色 暗褐色
180	Ⅲ	109.527	A-5・V	〃	〃	15 cm・・6	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
181	Ⅲ	104.905	E-2・V下	〃	胴部	・・7	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色 明赤褐色
182	Ⅳ a	104.185	E-2・V	〃	口縁部	・・7~15	石英, 小礫粒 金雲母	〃	〃	内外 明灰褐色 褐色

第17表 出土土器一覽表(7)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) mm	胎土	調整	焼成	色調
183	IV a	103.985	E-2・V	深鉢	口縁部	・ ・ 7~10	石英 金雲母	窳 研磨	やや難弱	内外 褐 色 明 褐 色
184	IV a	96.943	C-2・V	〃	〃	・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明 褐 色 灰 褐 色
185	IV a	-	E-1・V下	〃	〃	・ ・ 8~11	石英 金雲母	〃	〃	内外 灰 褐 色 暗 褐 色
186	IV a	102.403	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 9	石英 金雲母	〃	〃	内外 明 褐 色 暗 褐 色
187	IV a	104.155	E-2・V下	〃	胴部	・ ・ 9	石英 金雲母	〃	〃	内外 褐 色 灰 褐 色
188	IV a	103.840	E-2・V	〃	〃	・ ・ 9	石英 金雲母	〃	〃	内外 灰 褐 色 明 赤 褐 色
189	IV a	103.788	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗 褐 色 灰 褐 色
190	IV a	104.435	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 11	石英 小礫粒	〃	〃	内外 明 褐 色 明 赤 褐 色
191	IV a	104.175	E-2・V	〃	〃	・ ・ 8	石英 金雲母	〃	〃	内外 灰 褐 色
192	IV a	103.535	D-2・V	〃	〃	・ ・ 9	石英 金雲母	〃	〃	内外 褐 色 暗 褐 色
193	IV a	104.510	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗 褐 色 灰 褐 色
194	IV a	103.853	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 10	石英 金雲母	〃	〃	内外 褐 色 灰 褐 色
195	IV a	103.745	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 6	小礫粒 金雲母	〃	〃	内外 灰 褐 色
196	IV a	103.315	E-2・V	〃	〃	・ ・ 9	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐 色 明 赤 褐 色
197	IV a	103.795	E-2・V	〃	〃	・ ・ 9	石英 小礫粒	〃	〃	内外 灰 褐 色
198	IV a	103.243	E-2・V	〃	〃	・ ・ 10	石英 小礫粒	〃	〃	内外 褐 色 明 赤 褐 色
199	IV a	104.000	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 17	石英, 小礫粒 金雲母	〃	〃	内外 褐 色 灰 褐 色
200	IV b	103.785	E-2・V	〃	〃	・ ・ 10	石英 金雲母	〃	〃	内外 暗 褐 色 赤 褐 色
201	IV b	98.943	E-2・V	〃	〃	・ ・ 10	石英, 小礫粒 金雲母	〃	〃	内外 明 褐 色 赤 褐 色
202	IV b	-	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 8	石英 金雲母	〃	〃	内外 暗 褐 色
203	IV b	-	E-2・ 集石 20	〃	〃	・ ・ 10	石英 金雲母	〃	〃	内外 暗 褐 色 明 赤 褐 色
204	IV b	98.243	E-2・V	〃	〃	・ ・ 10	石英 金雲母	〃	〃	内外 暗 褐 色 明 赤 褐 色
205	IV b	104.283	E-2・V	〃	〃	・ ・ 10	小礫粒 金雲母	〃	〃	内外 暗 褐 色 明 赤 褐 色
206	IV b	105.239	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英 金雲母	〃	〃	内外 褐 色 明 赤 褐 色
207	IV b	104.410	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英 金雲母	〃	〃	内外 褐 色 明 褐 色
208	IV b	103.640	E-2・V上	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 褐 色 明 褐 色
209	IV b	103.938	C-2・V	〃	〃	・ ・ 8	石英, 小礫粒 金雲母	〃	〃	内外 褐 色 赤 褐 色
210	IV b	104.340	E-2・V下	〃	口縁部	・ ・ 9	石英, 黒曜石 小礫粒	〃	〃	内外 暗 褐 色 褐 色
211	IV b	104.510	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 8	小礫粒 石英	〃	〃	内外 明 褐 色
212	IV b	103.360 103.400	E-2・V	〃	完形品	15.8cm・13.4cm・ 7	石英 小礫粒	〃	〃	内外 暗 褐 色 明 赤 褐 色
213	IV c	103.855	D-1・V	〃	口縁部	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 明 褐 色 赤 褐 色
214	IV c	104.070	D-2・V	〃	〃	・ ・ 6	石英	〃	〃	内外 褐 色 明 褐 色
215	IV c	103.835	E-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 褐 色 明 褐 色
216	IV c	103.775	D-2・V	〃	〃	・ ・ 7	石英	〃	〃	内外 褐 色 明 褐 色

第18表 出土土器一覽表(8)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)mm	胎土	調整	焼成	色調
217	Ⅳc	103.963	F-4・Ⅲa	深鉢	口縁部	・ ・ 7	石英	窺研磨	やや難弱	内外 灰褐色
218	Ⅳc	103.150	F-2・V	〃	〃	・ ・ 10	〃	〃	〃	内外 灰褐色
219	Ⅳc	103.605	E-2・V	〃	〃	・ ・ 9	〃	〃	〃	内外 褐褐色
220	V	103.325	E-3・V下	小鉢	〃	15.6cm・ ・ 11	石英小礫粒	指窺頭磨	〃	内外 暗褐色
221	V	103.909	C-2・V	〃	〃	12.5cm・ ・ 7~11	石英	指頭	〃	内外 褐褐色
222	V	104.150	D-2・V	〃	〃	13.7cm・ ・ 14	石英小礫粒	指窺頭磨	〃	内外 褐褐色
223	V	103.790	E-2・V	〃	〃	・ ・ 12	石英小礫粒	指窺頭磨	〃	内外 灰褐色
224	V	108.915 108.975	B-3・V下	〃	完形品	8cm・ 7.3cm・ 5~7	石英	指頭	〃	内外 褐褐色
225	V	105.499	C-2・V	〃	口縁部	・ ・ 7	石英小礫粒	〃	〃	内外 褐褐色
226	Ⅵ	103.995	D-2・V	鉢	〃	・ ・ 11	石英		良	内外 褐褐色
227	Ⅵ	104.105	D-1・V	〃	胴部	・ ・ 9	石英小礫粒	窺研磨	〃	内外 褐褐色
228	Ⅵ	103.915	D-1・V	〃	〃	・ ・ 10	石英	〃	〃	内外 暗褐色
229	Ⅵ	104.100 104.220	E-2・V E-2・V下	〃	〃	・ ・ 7~15	石英小礫粒	〃	やや難弱	内外 暗褐色
230	Ⅵ	104.230	E-2・V	〃	〃	・ ・ 9~14	石英小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
231	Ⅵ	104.050 104.200	E-2・V	〃	〃	・ ・ 10	石英小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
232	Ⅵ	104.400	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 10~13	石英小礫粒	〃	良	内外 灰褐色
233	Ⅵ	104.045	D-1・V	〃	〃	・ ・ 11	石英小礫粒	〃	〃	内外 赤褐色
234	Ⅵ	104.470	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 8~12	石英小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
235	Ⅵ	103.345	E-2・V	〃	〃	・ ・ 9~12	石英小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
236	Ⅵ	104.490 104.305	E-2・V上 E-2・V	〃	〃	・ ・ 8	石英小礫粒	〃	〃	内外 褐褐色
237	Ⅵ	103.635	D-2・V下	〃	〃	・ ・ 12	石英小礫粒	〃	〃	内外 赤褐色
238	Ⅶa	103.023	E-2・V	〃	〃	・ ・ 5~7	石英小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
239	Ⅶa	104.330	C-2・V	〃	〃	・ ・ 10	石英小礫粒	ナデ	〃	内外 暗褐色
240	Ⅶa	104.219	C-2・V	〃	〃	・ ・ 8	石英小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
241	Ⅶa	102.455 102.430	D-2・V C-1・V	〃	〃	・ ・ 8	石英小礫粒	〃	〃	内外 明赤褐色
242	Ⅶa	104.295	D-2・V	〃	〃	・ ・ 8	石英小礫粒	〃	〃	内外 明褐色
243	Ⅶb	104.639 103.948	C-2・V C-1・V C-1・V	〃	口縁部	・ ・ 9~13	石英小礫粒	窺研磨	やや難弱	内外 灰褐色
244	Ⅶb	-	C-2・V	〃	〃	・ ・ 11	石英小礫粒	〃	〃	内外 褐褐色
245	Ⅶb	104.080	D-2・V	〃	〃	・ ・ 11	石英小礫粒	〃	〃	内外 暗褐色
246	Ⅶb	103.855	D-2・V	〃	胴部	・ ・ 9~11	石英小礫粒	〃	〃	内外 灰褐色
247	Ⅶc	104.120	D-2・V	〃	口縁部	・ ・ 9	石英小礫粒	〃	良	内外 明褐色
248	Ⅶd	104.010 104.180	C-2・V E-2・V E-2・V下	〃	底部	・ ・ 8~12	石英小礫粒	窺研磨	やや難弱	内外 明褐色
249	Ⅶd	104.475	E-2・V下	〃	〃	・ ・ 11~15	石英小礫粒	〃	〃	内外 褐褐色
250	Ⅶd	102.591 102.360	E-3・V下	〃	〃	・ ・ 8~12	石英小礫粒	〃	良	内外 明褐色

(2) 石器

第V層出土の石器を取り扱っている。石器の分布については第52図に示す。

出土している石器の種類は、石鏃・スクレイパー・加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・石斧・礫器・磨石類（磨石、敲石、凹石）・石皿・台石である。

利用された石材については、石鏃等の剥片石器（ふつうの剥片も含む）総数88点についてまとめると以下ようになる。（特に黒曜石についてはa～eの特徴が観察されるものがあった。）

・黒曜石	26点(29.5%)
a うすい黒色（アメ色に近い）で、ガラス光沢や透明感がある。……	17点
大きい不純物や気泡が多い。日東系 <small>（注1）</small> の黒曜石に類似する。	
b 黒みが強く、光を透さない。不純物は少ない。……	4点
上牛鼻や平木場など矢岳山系 <small>（注2）</small> の黒曜石と思われる。	
c うすい黒色で、ガラス光沢や透明感がない。……	3点
自然面は平坦で、細かい目のザラザラがある。	
d アメ色で透明感があり、不純物がほとんどない。……	1点
桑ノ木津留産 <small>（注3）</small> の黒曜石と思われる。	
e 全体的に白っぽく黒はうすい。ガラス光沢はある。……	1点
不純物が多い。	
・チャート	24点(27.3%)
・頁岩	23点(26.1%)
・石英	9点(10.2%)
・鉄石英	3点(3.4%)
・メノウ	2点(2.3%)
・珪質岩	1点(1.2%)

〈注1〉黒曜石原産地の一つである鹿児島県大口市「日東」と、近接する原産地の「五女木」、「狸々」で産する黒曜石を含めて「日東系」とした。

〈注2〉矢岳周辺に位置する鹿児島県薩摩郡穂脇町「上牛鼻」と同県日置郡市来町「平木場」で産する黒曜石を含めて「矢岳山系」とした。

〈注3〉「桑ノ木津留」は熊本（人吉市）・宮崎（えびの市）・鹿児島（大口市）の三県の境に位置する黒曜石原産地である。

A 石鏃 （第77図 251～259）

石鏃は9点出土している。その石器組成に占める割合は、8.5%である。すべて打製の石鏃であり、使用した石材別の内訳は、チャート7点（77.8%）、頁岩2点（22.2%）である。

251はチャート製で、先端は鋭く側辺はやや外湾する。基部には抉りが入るが脚は欠損し

ている。252は右半分が欠損している。抉りはなく基部の左側には打面を残しており、製作途中で欠損し破棄されたことも考えられる。253も中央から欠損しているが、チャートの薄い剥片を用いて、主要剥離面からのみ剥離を施し、逆ハート形に仕上げている。254は頁岩製の完形品である。U字の抉りを持ち、側辺がやや外湾する二等辺三角形状をしている。255も頁岩製である。U字の抉りを持つが、全体の形状は正三角形に近い。先端部がわずかに欠けている。256は長身で逆刺が円く抉りが極めて深い。両側から細かい剥離を施し、側辺は鋸歯状を呈する部分もある。片脚が欠損している。257は先端と両脚が折れているが、細身で側辺は直線的であり、鋭い形状が想定される。258は一部しか残っていない。259はやや大型の二等辺三角形状を呈し、両側辺及び基部の調整剥離は比較的粗いが、形状等によりここでは石鏃に分類しておいた。先端は尖り厚みがあり、長さは4cm・基部は2.5cm・厚さは1.22cmを計る。

B スクレイパー (第77図 260)

260はスクレイパーに分類したが、1点のみの出土である。厚みのある剥片の側縁に、主要剥離面から粗い剥離を施して刃部を作り出している。黒曜石a製である。

C 加工のある剥片 (第77・78図 261～264)

261は黒曜石aの剥片の一部に二次加工が施されている。262は頁岩の剥片であるが、一方の側縁が両面から連続して剥離されている。石鏃の製作途中のものとも考えられる。263は側辺に抉り状の二次加工が施されている。黒曜石aである。264は黒曜石bの剥片である。二次加工が施され、三角形状に整形されている。抉りとみられる部分もあり石鏃製作途中のものと考えられる。

D 使用痕のある剥片 (第78図 265)

265は頁岩の横長剥片であり、打面は平坦な自然面である。側縁の一部に使用痕が観察される。

E 剥片 (第78図 266～272)

V層からは73点の剥片が出土している。石材は黒曜石・チャート・頁岩・石英・鉄石英・メノウ・珪質岩が使われている。266～272は石材ごとに特徴あるものを取り上げて図化した。266は赤色の鉄石英、267は黒曜石b、268・269はチャート、270は灰色の頁岩である。271は黒曜石dで平坦な自然面が残っている。272は褐色で上質の頁岩であり、270のような灰色の頁岩は多いが、272だけ異質である。

F 石斧 (第79・80図 273～277)

石斧は5点出土している。その石器組成に占める割合は4.7%である。

273～276はホルンフェルス製の打製石斧である。いずれも表面が非常に風化しており、剥離の状態が判別しにくい。使用による破損も多い。275は胴部中央に抉りを入れている。276は大型で厚みもある。刃部は刃潰れが著しい。277は横長の大型剥片を利用した局部磨製石斧である。整形剥離の後、研磨により鋭い刃部を作り出している。同じくホルンフェルス製

である。

G 礫器 (第80・81・82図 278～285)

礫器は8点出土しており、石器組成に占める割合は7.5%である。形態から4類に分類できる。

I類は278・279で、偏平な円礫素材の片刃礫器である。278は石器縁辺の約半分を粗い数回の加撃により剝離し、鋭利な刃部を作り出している。剝離は主に表面に施されているが、右側下の剝離の無い部分には裏面が剝離されており、全体として尖頭状に近い刃部を作出している。刃部の断面形態は両刃をとらず、片刃である。279は278よりひとまわり小さいが、縁辺の半分近くにわたって刃部が作出されている。278は粗い剝離で縁辺が鋸歯状を呈するのに対し、279は最後に細かい剝離を施して仕上げている。刃部作出のための剝離は片面に集中するが、裏面にも数ヶ所の剝離がみられる。これらは使用時の刃こぼれとも考えられる。

II類は280・281であり、縦長の礫を利用している。280は長軸の片側に刃部を作り出すものである。片側から剝離された片刃であるところや、尖頭状の刃部を意識するところはI類と共通している。281も長軸の片側に刃部を作出しているが、かなり刃潰れしている。また反対側の端部に近い縁辺部にも、整形のためと思われる粗い剝離がみられる。

III類は282である。石の目に沿って割れた側縁に細かい剝離を施して、刃部を作り出している。やはり剝離は一方向からのみである。

IV類は283・284・285で、礫の一辺を残し、他の辺に急角度で刃部を作り出している。3点とも、横長の礫の長辺に刃部を作出した形状が想定されるが、調査時の新しい割れにより全体の形状がつかめない。

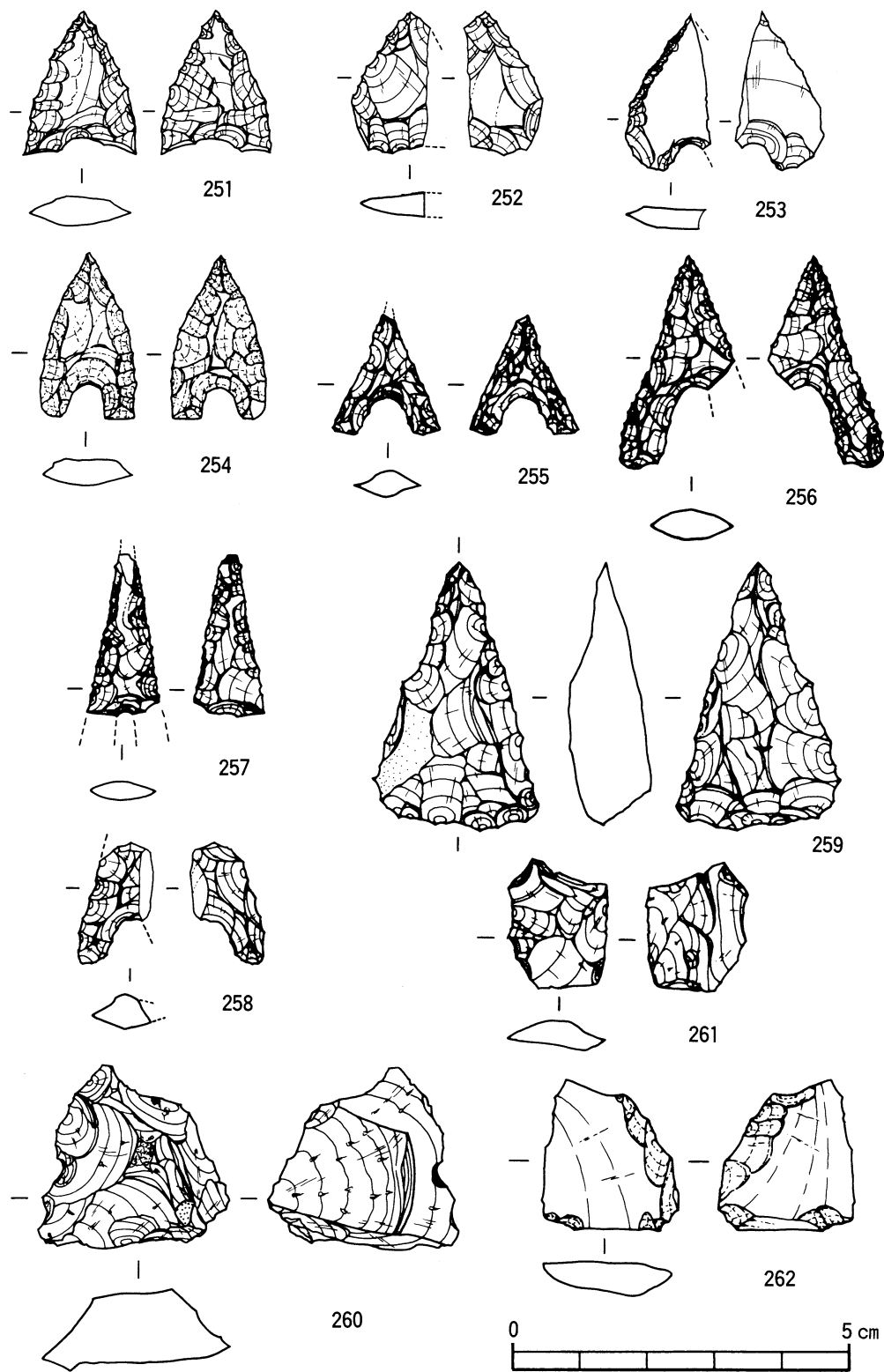
以上いずれの礫器も、刃部形成が片側からの剝離による片刃であるということが共通している。またI・II類で観察される、尖頭状を意識して作出された刃部形態も特徴的である。石材は8点ともホルンフェルスである。

これら縄文早期の礫器の類例としては、本遺跡周辺の西丸尾遺跡から類似した形態のものが出土している。また熊本県球磨郡山江村狸谷遺跡でも4点出土している。

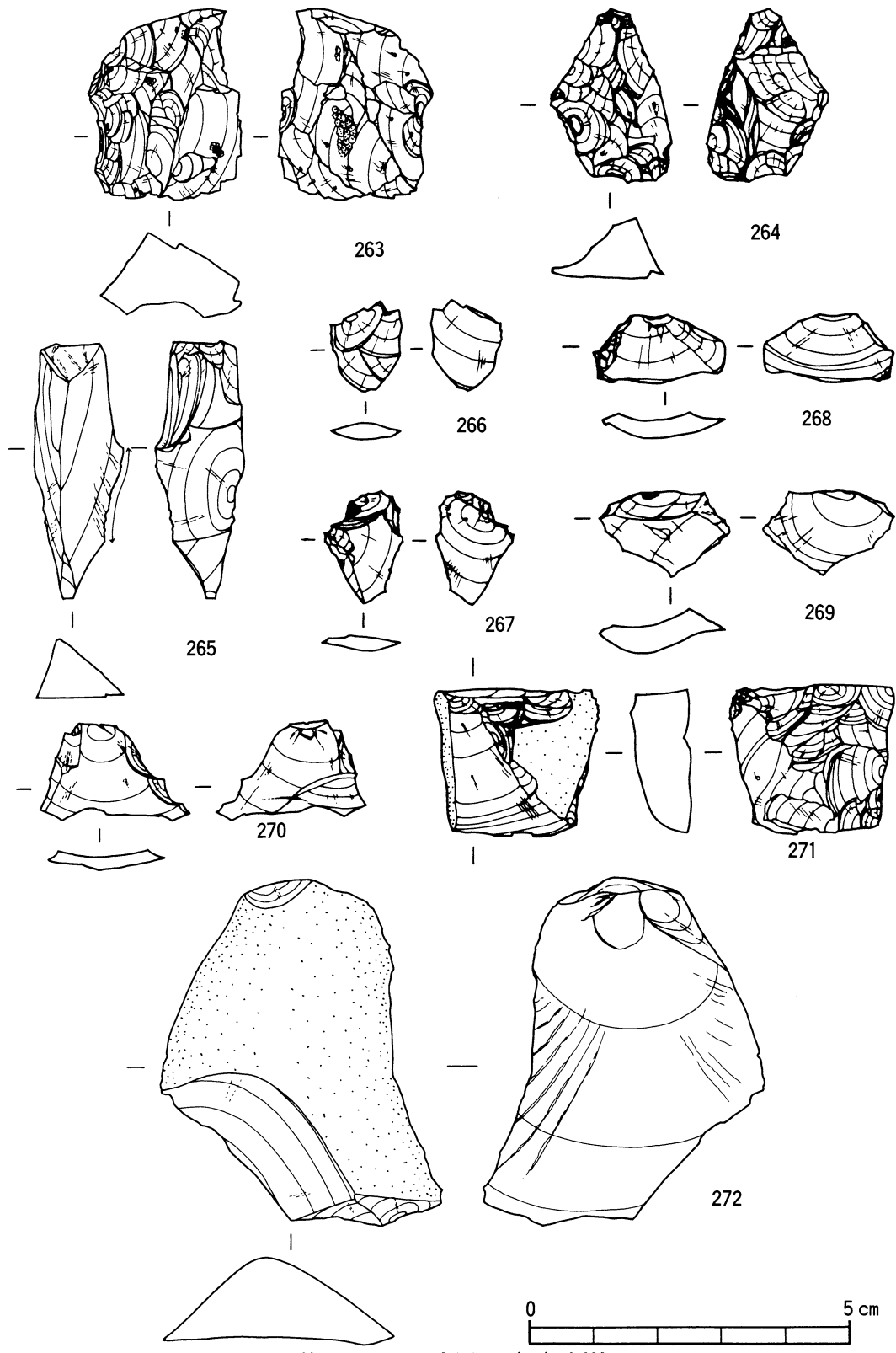
E 大型スクレイパー (第80図 286・287)

2点出土しており、その石器組成に占める割合は1.9%である。

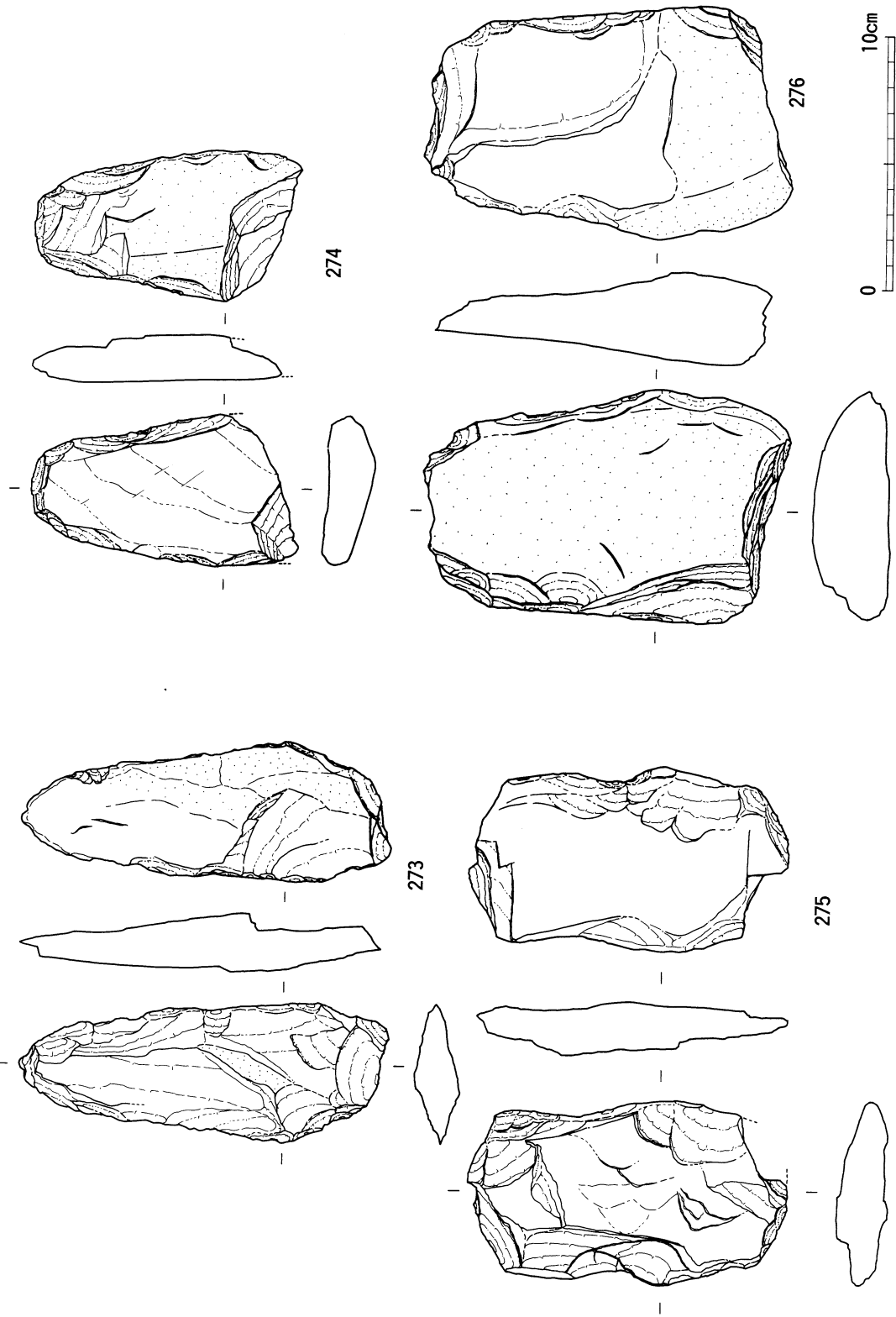
286は調整した打面から剝ぎ取られた大型の剝片を利用したスクレイパーである。剝片の辺縁部に背面側から剝離を施し、刃部を作り出している。287は片側に自然面を残す第一次剝片を利用したものである。286と同様に背面（ここでは自然面）側から調整剝離を行っている。大型で重量もあり、礫器的な機能（打ち割る）が想定される。しかし剝片を利用していることから、ここでは一応スクレイパーに分類した。2点ともホルンフェルスである。



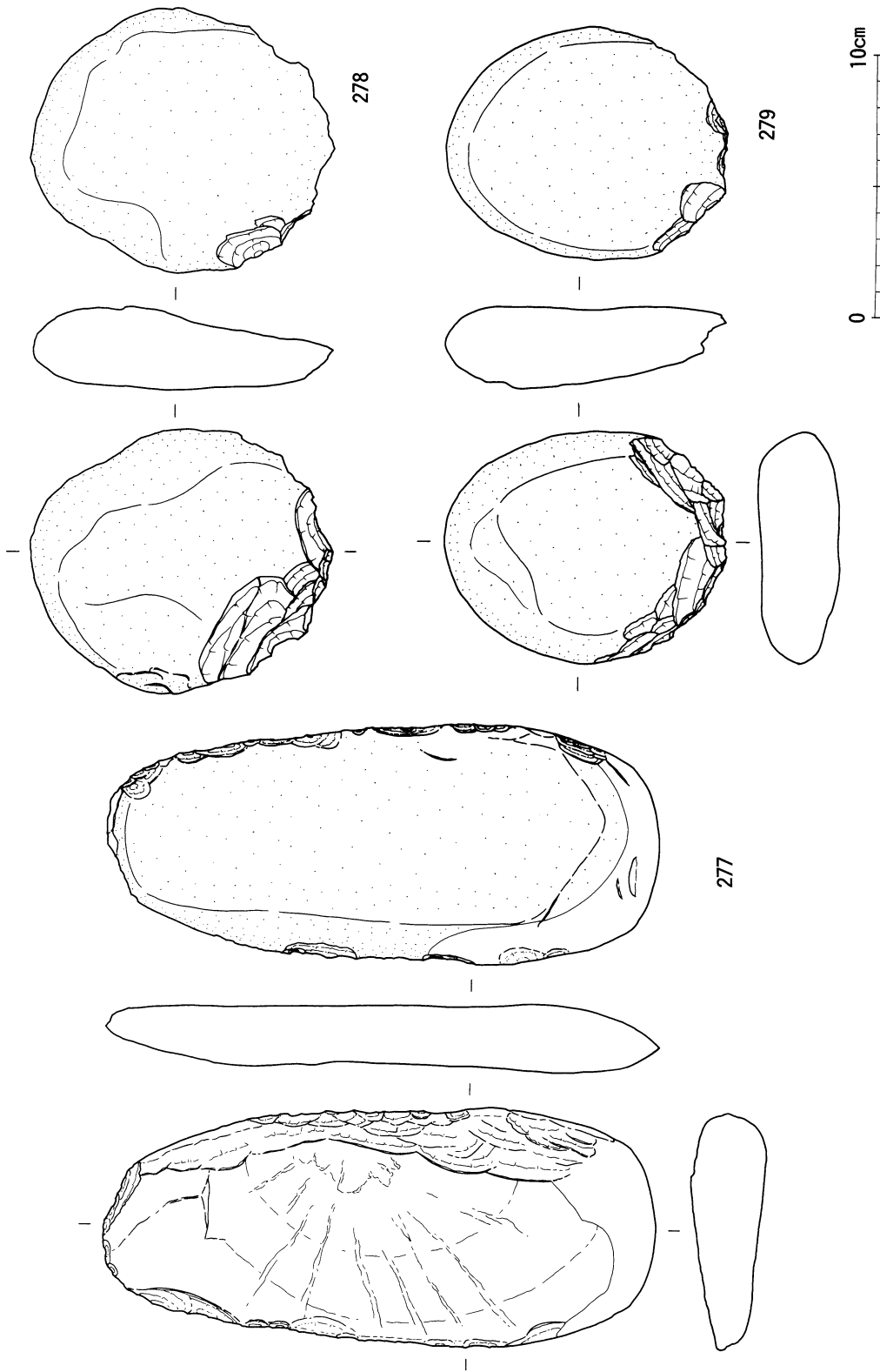
第77图 石器实测图 (1) 石鏃・剝片



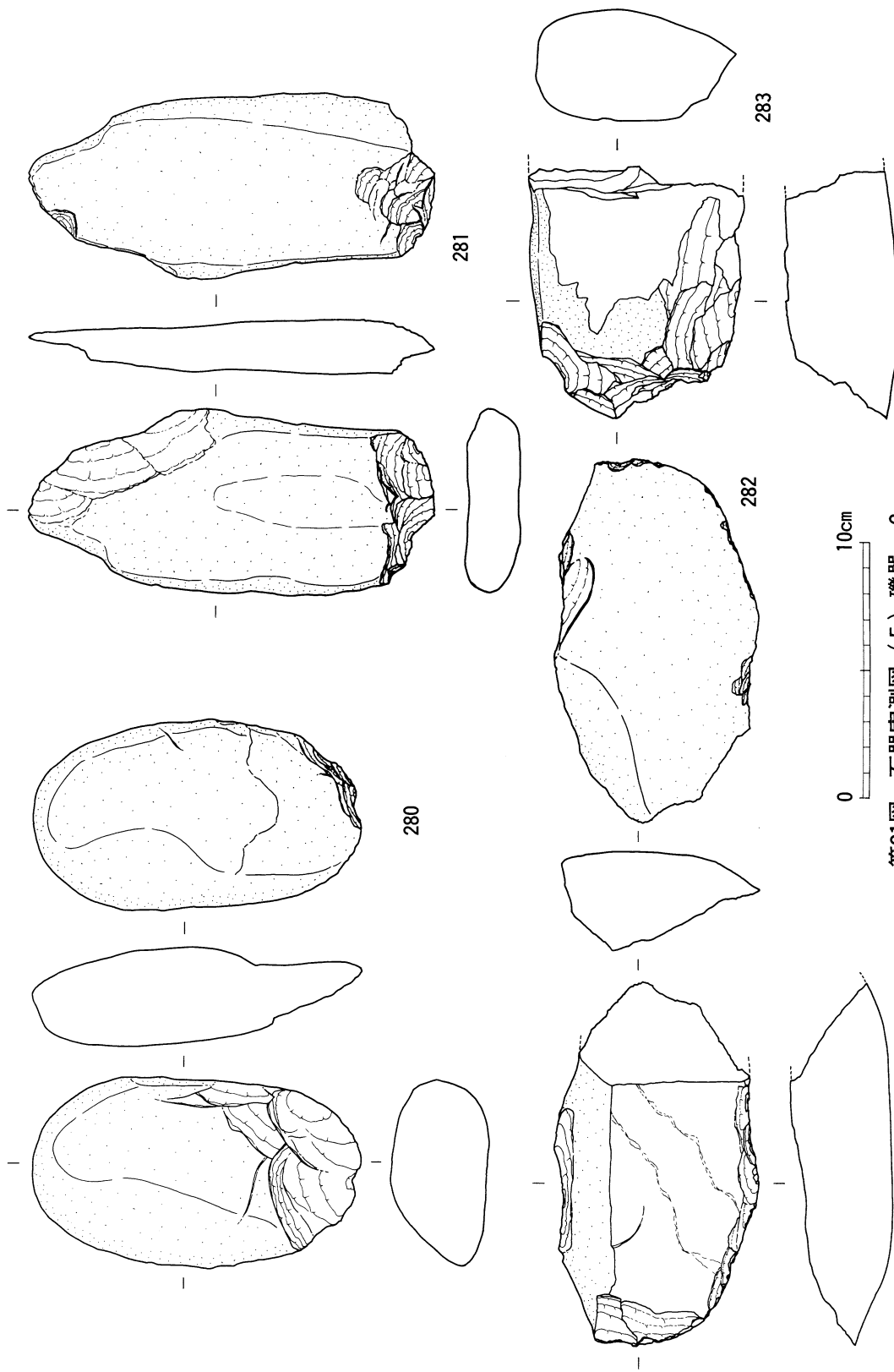
第78图 石器实测图 (2) 剥片



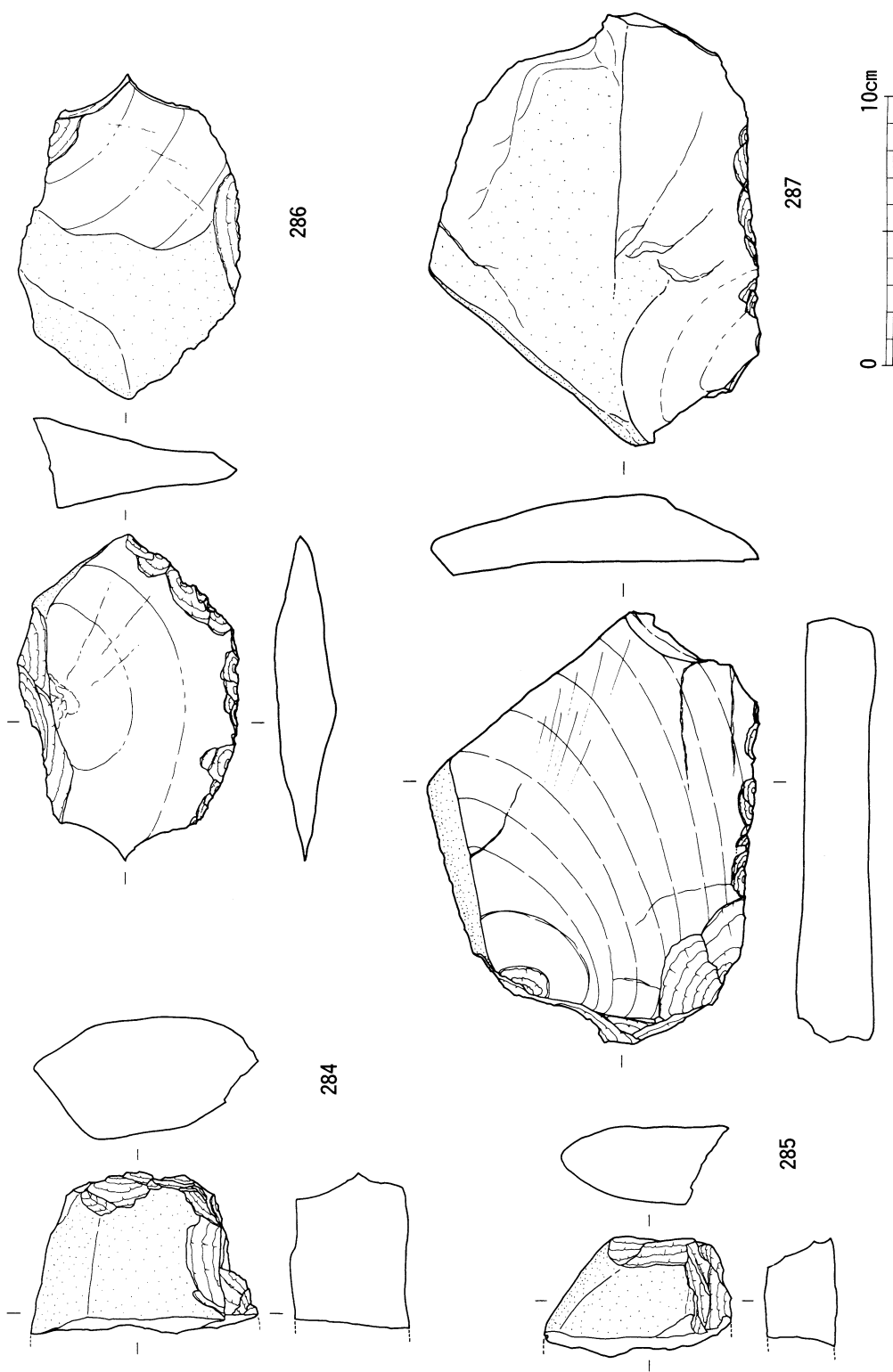
第79图 石器美测图 (3) 石斧—1



第80图 石器实测图 (4) 石斧—2 · 礮器—1



第81图 石器实测图(5) 石器—2



第82図 石器実測図(6) 礫器-3

第19表 出土石器 一覧表(1)

* () 内は欠損品の最大値

遺物番号	器種	出土区	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	注記番号	備考
251	打製石鏃	E-3	V	チャート	2.10	1.70	0.46	1.35	9095	
252	打製石鏃	E-2	V	チャート	2.11	(1.20)	0.39	(1.36)	11638	
253	打製石鏃	E-1	V	チャート	2.35	(1.30)	0.32	(0.73)	10582	
254	打製石鏃	C-2	V	頁岩	2.48	1.50	0.42	1.32	9506	
255	打製石鏃	E-2	V	頁岩	1.76	1.62	3.00	0.51	11874	
256	打製石鏃	E-2	V上	チャート	3.18	(1.72)	0.46	(1.33)	11693	
257	打製石鏃	E-2	V上	チャート	(2.30)	(1.10)	0.30	(0.69)	11335	
258	打製石鏃	E-2	V	チャート	(1.81)	(1.12)	0.51	(0.71)	12034	
259	打製石鏃	E-2	V	チャート	4.00	2.51	1.22	8.88	11655	
260	スクレイパー	D-3	V上	黒曜石	2.73	2.92	1.25	7.73	3982	
261	加工のある剥片	E-2	V	黒曜石	1.92	1.52	0.45	1.56	11618	
262	加工のある剥片	E-2	V	頁岩	2.21	2.08	0.51	2.74	11333	
263	加工のある剥片	E-2	V	黒曜石	3.00	2.42	1.30	9.43	11656	
264	加工のある剥片	E-2	V	黒曜石	2.70	1.90	0.97	3.56	11577	
265	使用痕のある剥片	E-2	V	頁岩	4.00	1.40	0.93	4.07	11635	
266	剥片	E-2	V	鉄石英	1.41	1.15	0.28	0.36	11780	
267	剥片	E-2	V	黒曜石	1.78	1.22	0.25	0.45	11553	
268	剥片	E-2	V	チャート	1.09	2.07	0.40	0.85	11636	
269	剥片	E-2	V	チャート	1.38	2.05	0.70	0.92	11616	
270	剥片	E-2	V	頁岩	1.56	2.35	0.32	0.80	11672	
271	剥片	C-2	V	黒曜石	2.33	2.58	0.98	7.54	9912	
272	剥片	D-5	V	頁岩	5.38	4.41	1.35	26.95	1551	
273	打製石斧	E-3	V	ホルンフェルス	14.7	5.6	2.3	175	2598	
274	打製石斧	D-1	V	ホルンフェルス	(10.6)	6.0	1.8	(150)	10577	
275	打製石斧	D-2	V	ホルンフェルス	12.7	7.3	1.9	255	2492	
276	打製石斧	B-9	V	ホルンフェルス	14.6	9.3	3.5	600	55	
277	局部磨製石斧	C-9	V	ホルンフェルス	21.2	9.2	2.6	790	1493	
278	礫器	A-9	V	ホルンフェルス	11.6	10.1	3.1	460	210	
279	礫器	C-8	V	ホルンフェルス	10.8	8.9	3.1	410	1503	
280	礫器	C-5	V	ホルンフェルス	13.0	7.3	3.8	475	1502	
281	礫器	B-3	V	ホルンフェルス	16.0	7.2	2.2	380	6429	
282	礫器	C-3	V	ホルンフェルス	8.0	(14.0)	3.9	(510)	2398	
283	礫器	E-4	V	ホルンフェルス	8.5	(10.0)	4.4	(510)	1769	
284	礫器	E-4	V	ホルンフェルス	8.5	(6.1)	4.5	(295)	1730	
285	礫器	C-3	V	ホルンフェルス	7.0	(4.5)	2.9	(100)	2389	
286	大型スクレイパー	B-9	V	ホルンフェルス	8.3	12.2	3.4	255	54	
287	大型スクレイパー	A-9	VI	ホルンフェルス	16.1	12.3	2.5	685	8	

J 磨石類 (第85～92図 288～323)

本来個別の器種名である磨石、敲石、凹石は、昨今の調査例によると同一個体内に三者の複合した機能を併せ持つものが多く報告されており、本遺跡でも同様の石器が総数で52点出土している。ここではそれらを磨石類として一括して取り上げる。52点中細かく破損したものを除く36点を図化した。

分類は機能の複合状態により、以下の5類に分けた。

- ・Ⅰ類 磨石+敲石+凹石の機能を持つもの 8点(22.2%)
- ・Ⅱ類 磨石+敲石の機能を持つもの 22点(61.1%)
- ・Ⅲ類 磨石+凹石の機能を持つもの 1点(2.8%)
- ・Ⅳ類 磨石だけの機能を持つもの 4点(11.1%)
- ・Ⅴ類 凹石だけの機能を持つもの 1点(2.8%)

本遺跡ではⅡ類の磨石・敲石が22点(61.1%)と最も多い。また複合した機能の中でも36点中35点(97.2%)が磨石としての機能を持っており、敲石の機能を持つものも30点(83.3%)と多い。磨石だけや凹石だけの単独の機能を持つものは少ない。

さらにⅠ類とⅡ類については形態による分類として、石器の原材の形を残さないものをA、原材の形を残すものをBと細分した。Aは主面の使用の他に側面の使用が全周に渡り、原材の形を残さないほどすりや敲打で使用され、面が形成されているもの、Bは一部側面に敲打痕が観察されるものの全周には渡らず、原材の形を残しているものである。

第20表に類別の点数と石材の一覧をしめすが、AタイプがⅠ・Ⅱ類合わせて14点、Bタイプが16点とほぼ同数出土していることがわかる。石材は安山岩・花崗岩(半花崗岩も含む)・溶結凝灰岩・砂岩・ホルンフェルスと多岐にわたっている。なかでも安山岩が最も良く使用されており(51.9%)、類別でもⅠ類は安山岩がほとんど(87.5%)である。Ⅱ類はやはり安山岩が多いものの、さまざまな石材が使われている。Aタイプもほとんどが安山岩である。花崗岩には石質がもろいものが多く、欠損品(未図化資料)が多い。

なお、実測図における使用痕の表現は以下のようにしたが、石材によっては表面が風化していたり石質が粗いことなどにより、使用痕の判別が困難なものがあった。また文中では実測図の正面図を表面とした。



次に、各類について詳述する。

- (a) Ⅰ類 磨石・敲石・凹石 (第85・86図 288～295)

第20表 V層 磨石類 類別点数と石材一覧

分類	石材	安山岩	花崗岩	溶結凝灰岩	砂岩	ホルンフェルス	合計
I類	A	5 (100)					5
	B	2 (66.7)	1 (33.3)				3
	小計	7 (87.5)	1 (12.5)				8
II類	A	8 (88.9)		1 (11.1)			9
	B	5 (38.5)	4 (30.8)	1 (7.7)	2 (15.3)	1 (7.7)	13
	小計	13 (59.1)	4 (18.2)	2 (9.1)	2 (9.1)	1 (4.5)	22
III類			1 (100)				1
IV類		3 (75)	1 (25)				4
V類				1 (100)			1
未図化資料		4 (25)	9 (56.3)		3 (18.7)		16
総計		27 (51.9)	16 (30.8)	3 (5.8)	5 (9.6)	1 (1.9)	52

() 内は合計に対する割合%

I-A類

288・289は表裏両面ともよく擦られており、ほぼ平坦になっている。側面も敲打やすりによって面が形成され、平坦面との角度は直角に近い。断面も長方形を呈する。かなり幾何学的なスタイルであるが、使い込まれた結果なのか整形によるものなのかは判別しがたい。それぞれ平坦面に浅い凹みを有している。290はA-5区で石皿や台石・磨石等が近接して出土したもののひとつである。やや大型で側面は全周に渡って使用されているが、まだ少し丸みを帯びている。凹みは2面にある。291は長方形に近く表面に凹みと平坦な磨面を持っている。292は欠損しているが、291に近い形態と思われる。

I-B類

293は格別小型ながら3つの機能を併せ持っている。側面の使用もほぼ全周に渡るが全体として原材の形を残しているためBタイプに分類した。294は裏面のみを使用し、よく使い込まれた磨面を形成している。295はI類で唯一の花崗岩製である。風化のため磨面は表面の一部にしか観察できない。

(b) II類 磨石・敲打石 (第86～91図 296～317)

II-A類

296は両面ともよく擦られているが、表面は周辺部が特によく擦られており、スリの程度の違いが観察される。側面は全周に渡って使用されているが、特に一部分に敲打痕のみが集中している箇所がある。297・298はよく擦られた平坦面と形作られた(使い込まれた?)側面を持ち、断面は長方形を呈する。I-A類の288・289とほとんど同じ形態をしており、違いは凹みがないという点のみである。これまで正面形が円形に近いものが多かったのに対し、299は長楕円形に近い。側面も擦られた状態であるが敲打の力も加わっていると考えられる。D-2区とD-3区から離れて出土したものが接合した

ものであるが、下半分は破損後に割れた端部を敲石として再利用している。磨石としては使用されなかったらしく磨面は少し荒れている。上半分は直ちに放棄されたと思われ、割れ口もローリングを受けておらず、磨面も滑らかである。300も299とほぼ同じ形態をしているが、表裏の磨面のカーブの方向が一定で、この面が一方の反復運動で形成されたことがわかる。その方向は主軸と45度ほどずれているが、これは人が自然にこの石を手にしたときにできる角度であり、使用状況を考える上で興味深い。299の磨面にもその傾向が伺える。303は溶結凝灰岩製であり、風化が激しく一部しか磨面が残っていないが、円形に近い形状で側面も使用されていたと考えられる。304も平坦に近い側面が形成されている。

II - B類

305は小型であるが、側面を敲打で激しく使用し一部破損している。306・307・308は磨面のほか側面を一部敲打で使用している。309はホルンフェルス製である。310は火熱を受けており煤が付着し表面もぼろぼろになっている。311は半欠後もそのまま磨石・敲石として使用を続けている。312・313は風化のため使用痕が判別しにくい。314は先端部に敲打痕が集中している。315・316は側面だけでなく磨面にも敲打痕が観察される。317は風化が激しく使用痕が判別しにくい、形状から本類に分類した。

(c) III類 磨石・凹石 (第91図318)

本類は318の一点のみの出土である。長方形に近い花崗岩を利用し、磨面と凹みは表面にある。凹みは浅い。

(d) IV類 磨石 (第91・92図 319～322)

本類は使用痕として磨面のみが観察されるものである。319・322は表裏両面を磨面としている。315・316は球形に近い礫を使用している。

(e) V類 凹石 (第92図 323)

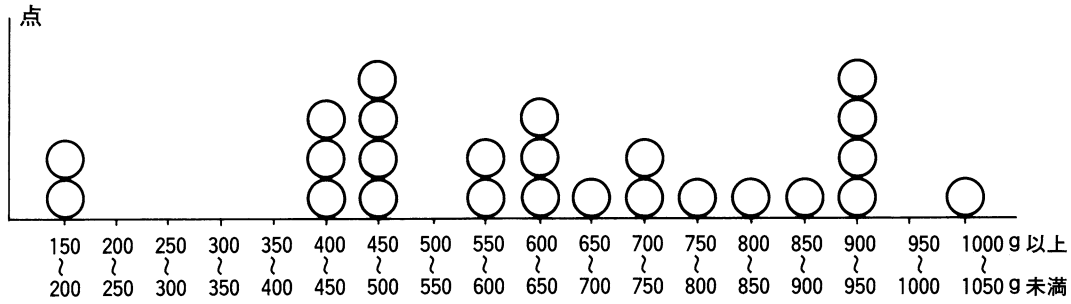
323一点のみの出土である。表裏両面に敲打の集中した凹みを持つ。溶結凝灰岩のため風化が激しく、その他の使用痕は判別できない。

以上の磨石類を統計的に処理すると次のようになる。

第83図は完形品25点の重量分布である。150～200gに2点、400～500gに7点、550～650gに5点、900～950gに4点の集中箇所がみられる。

第84図は重さと長さの相関を示したものである。この分布図から本遺跡の磨石類は図中の直線で挟まれた範囲に分布していることがわかる。また大きく3つのグループに分けることができる。

- ・第1グループ：長さ7cm前後で重さが200g前後のもの
- ・第2グループ：長さ10cm前後で重さが400～600gのもの
- ・第3グループ：長さ11～13cmで重さが700～900gのもの



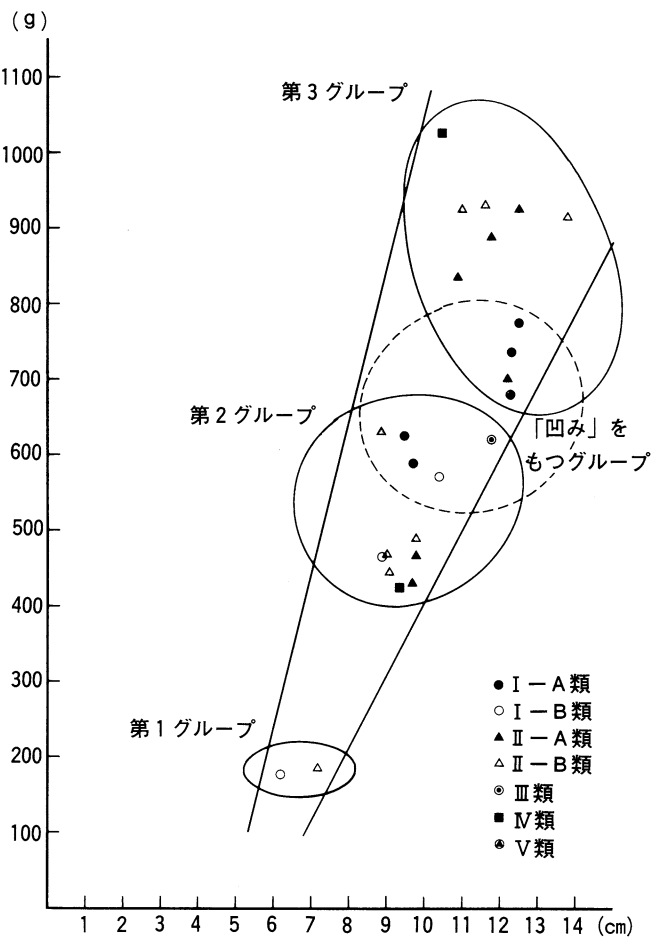
第83図 磨石類 重量分布

各グループを検討すると、第1グループは特に小型のものであり、特殊性がうかがえる。

またスリ・敲打に側面を全周に渡って使用しているAタイプのもは第3グループに、側面利用の少ないBタイプは第2グループにやや多いことがわかる。

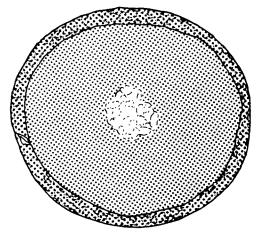
そして第2グループと第3グループの間には、凹石の機能を持つものが集まっている傾向にある。図中に「凹み」のグループとして示したが、長さ9~12cm、重さ600~800gの範囲である。

磨石類の用途は堅果類の製粉や土器混和材の加工などが考えられているが、作業の種類によって適当な重さと大きさの石を選別して使用していたことは十分に考えられ、第84図に示された各グループとの関係を検討する必要がある。

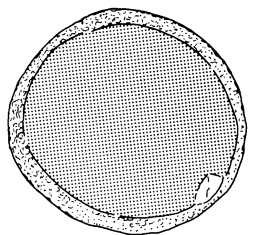
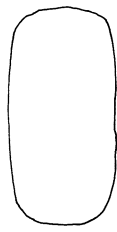
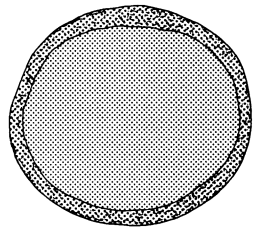
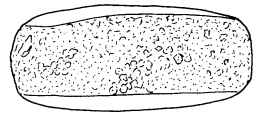


第84図 磨石類 重さと長さの相関

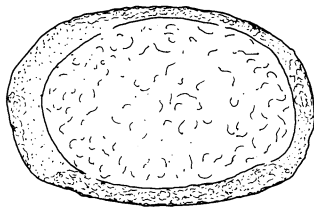
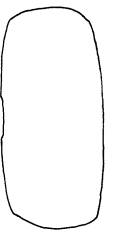
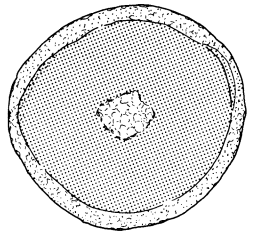
※完形品25点を対象にした。



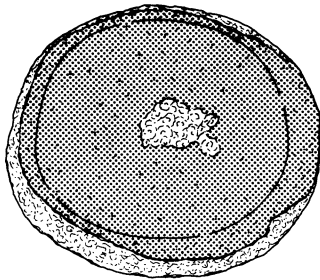
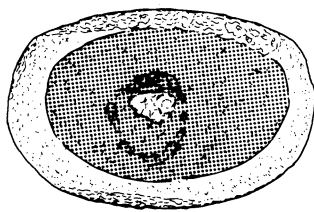
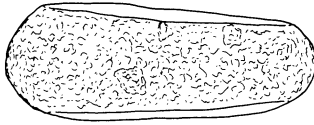
289



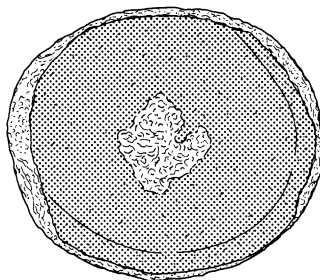
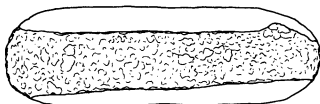
288



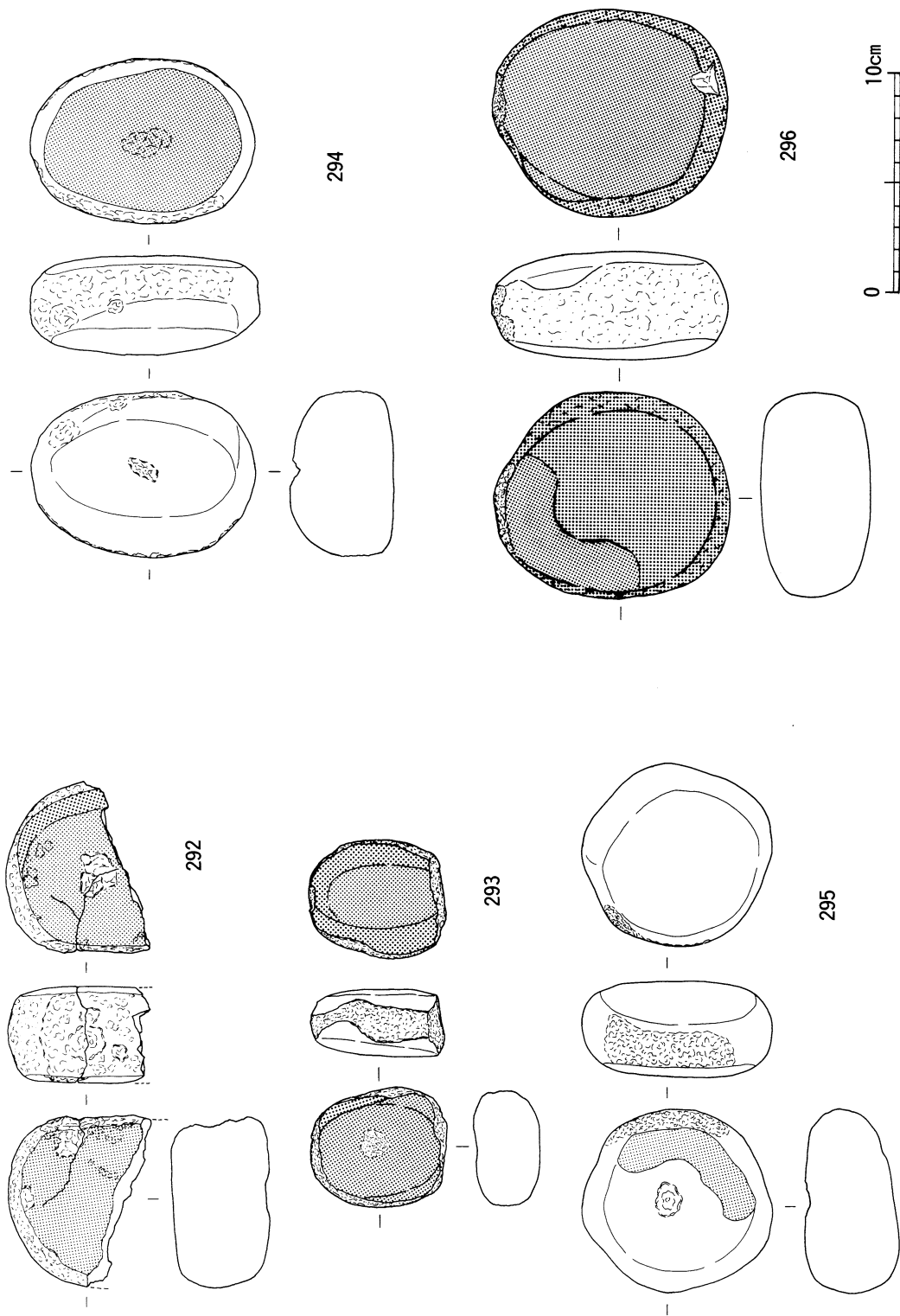
291



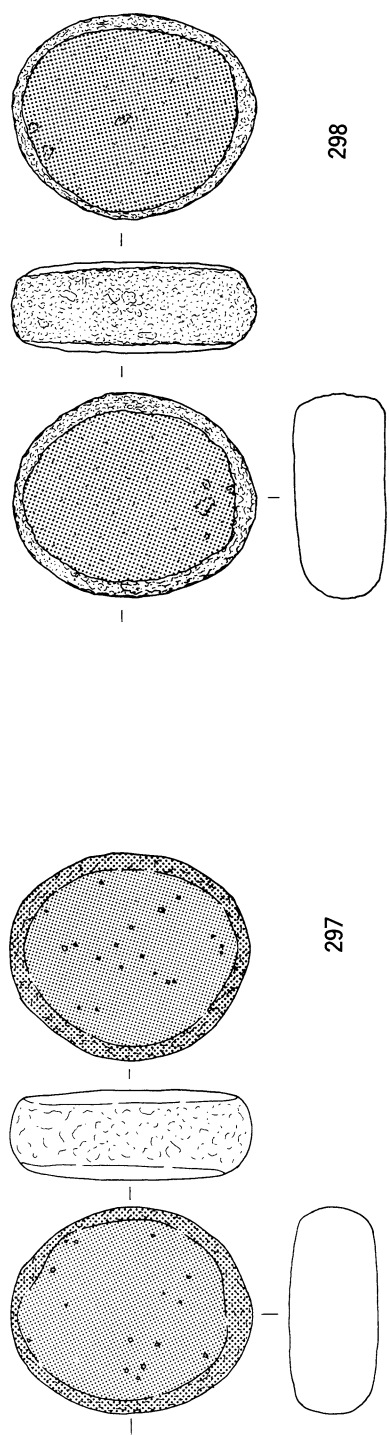
290



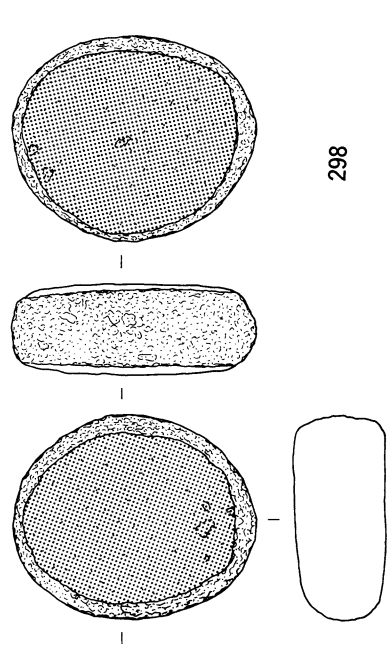
第85図 石器実測図(7) 磨石類—1



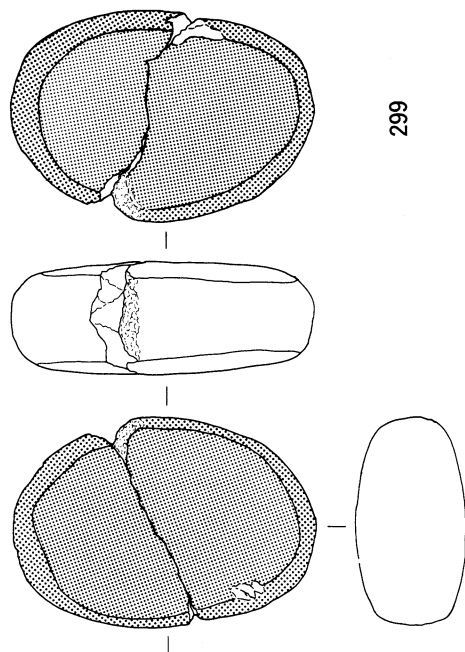
第86图 石器实测图(8) 磨石类-2



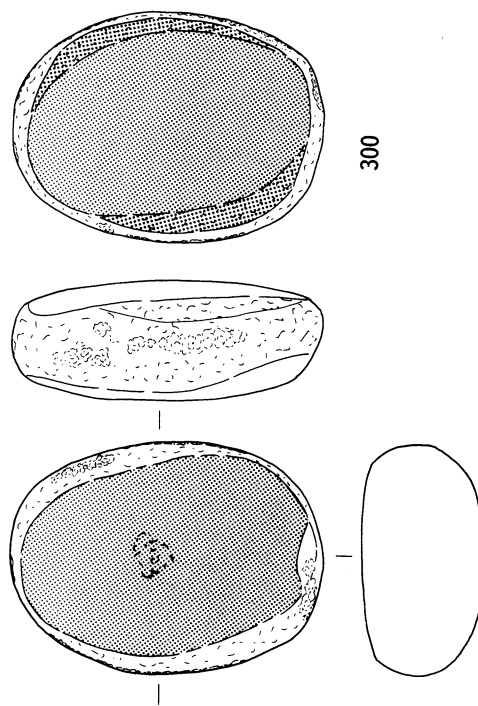
297



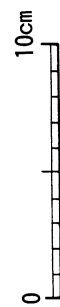
298



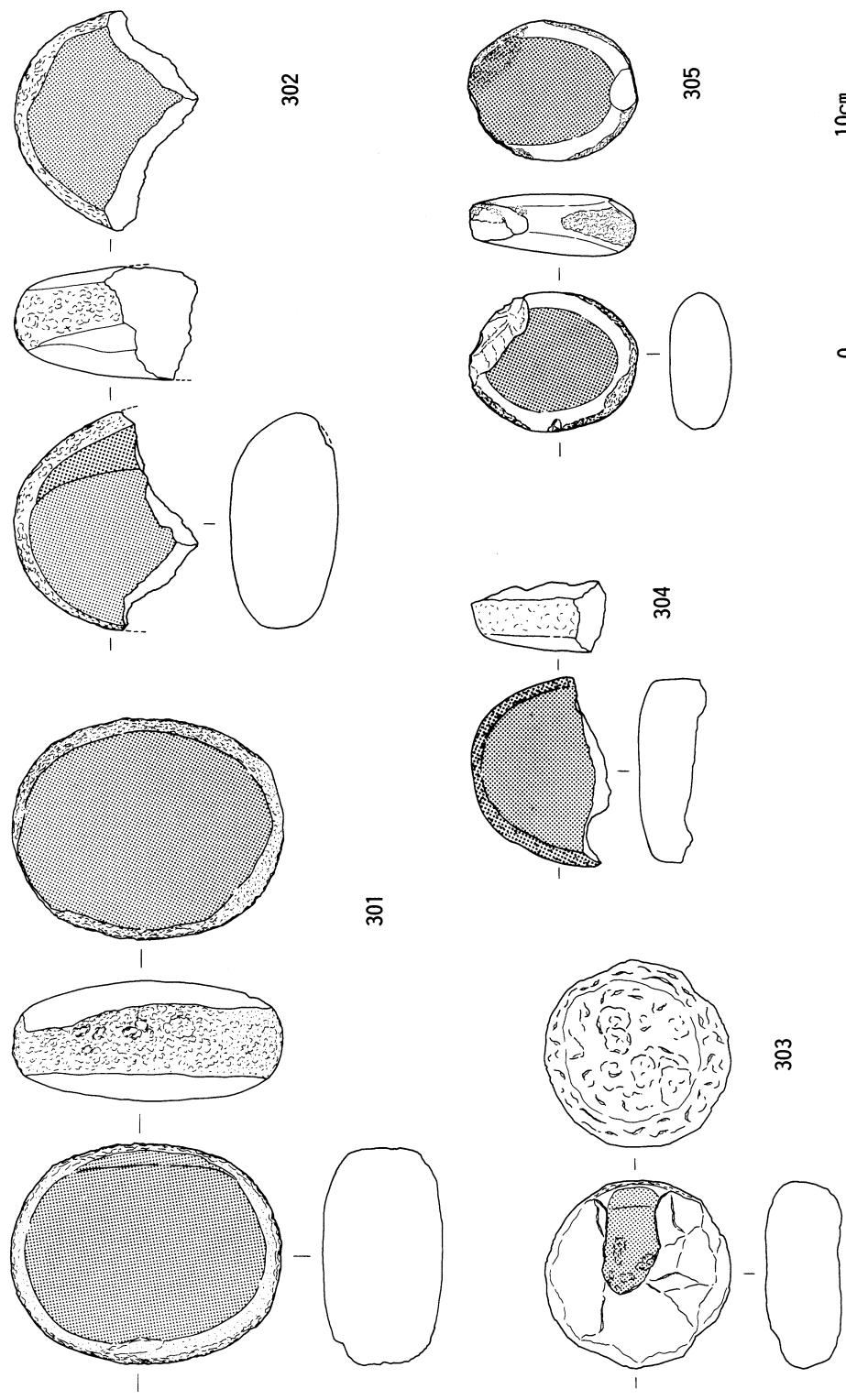
299



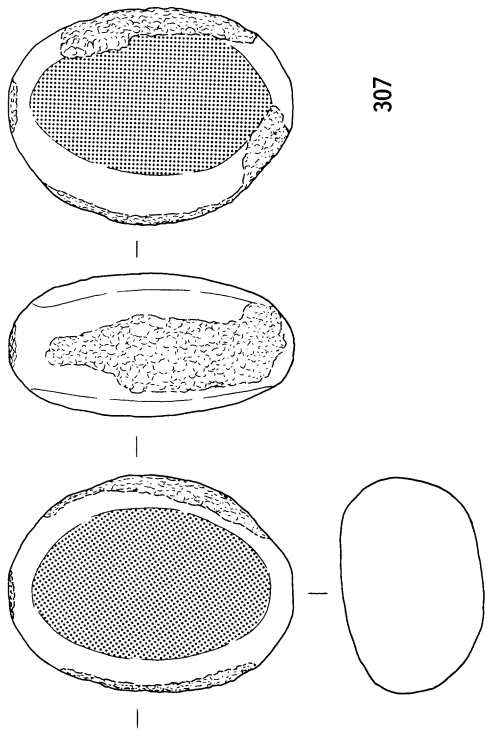
300



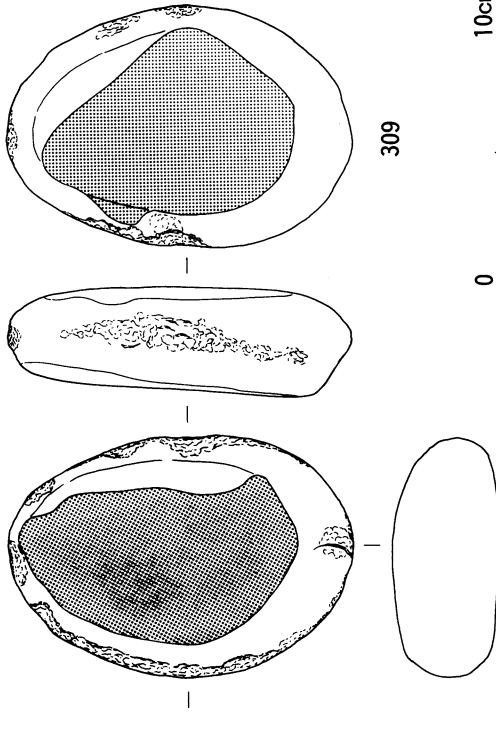
第87图 石器实测图(9) 磨石类—3



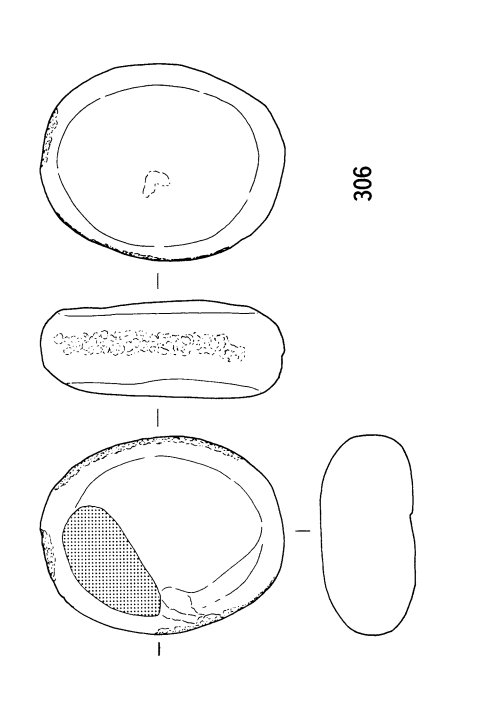
第88図 石器実測図 (10) 磨石類—4



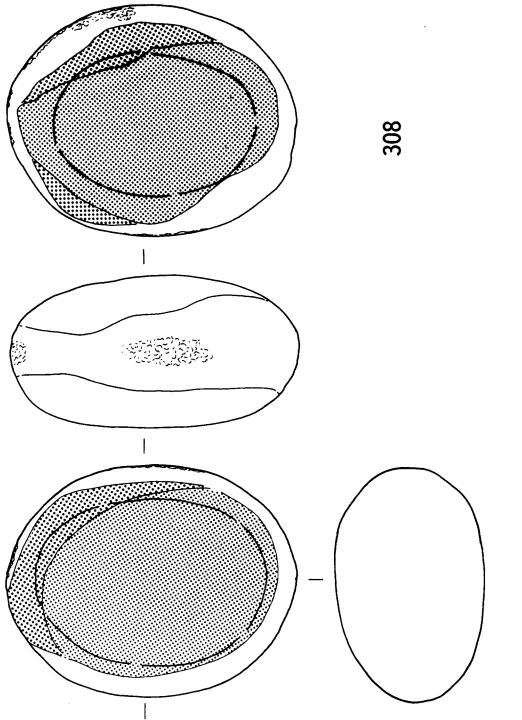
307



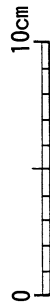
309



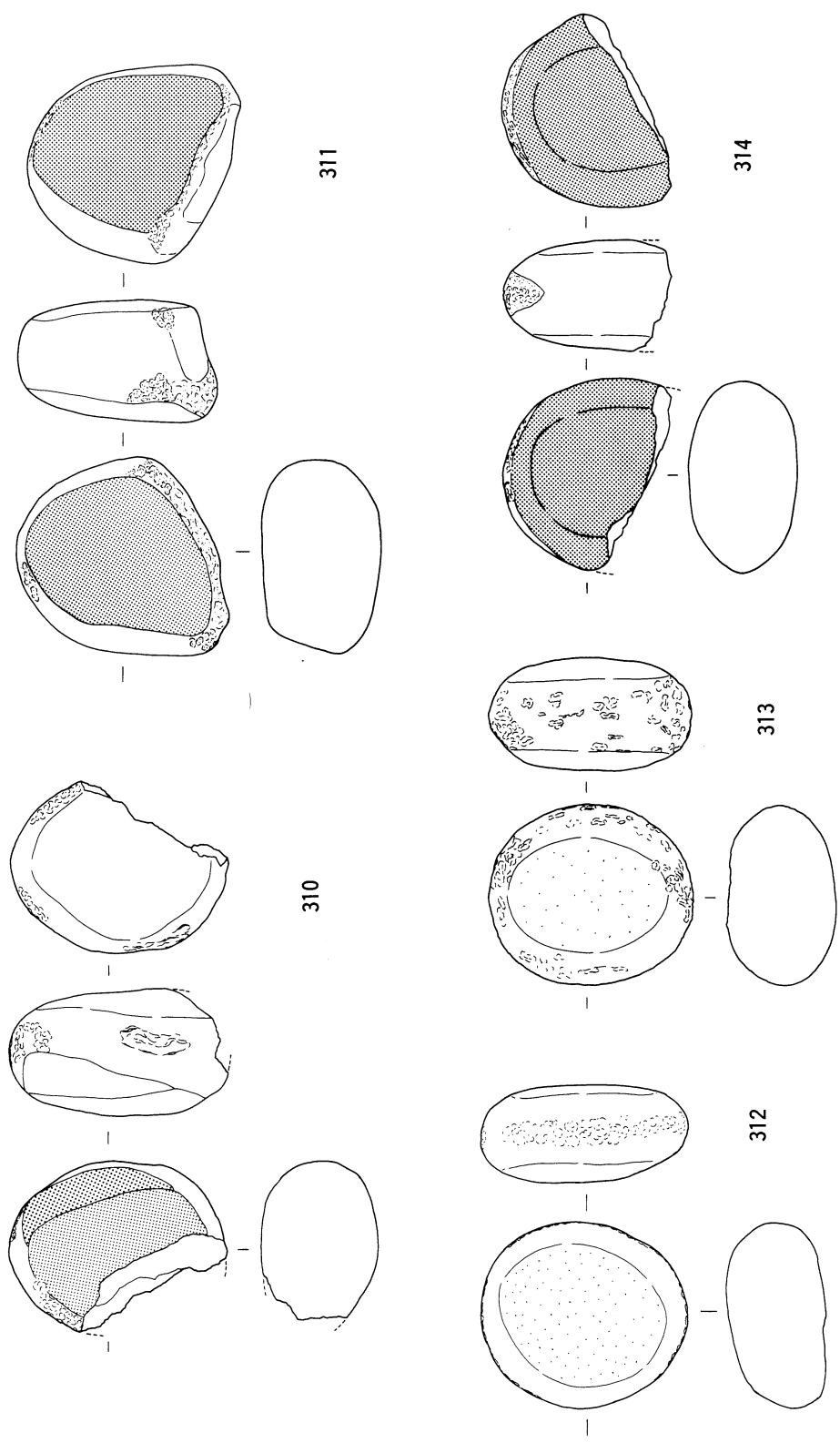
306



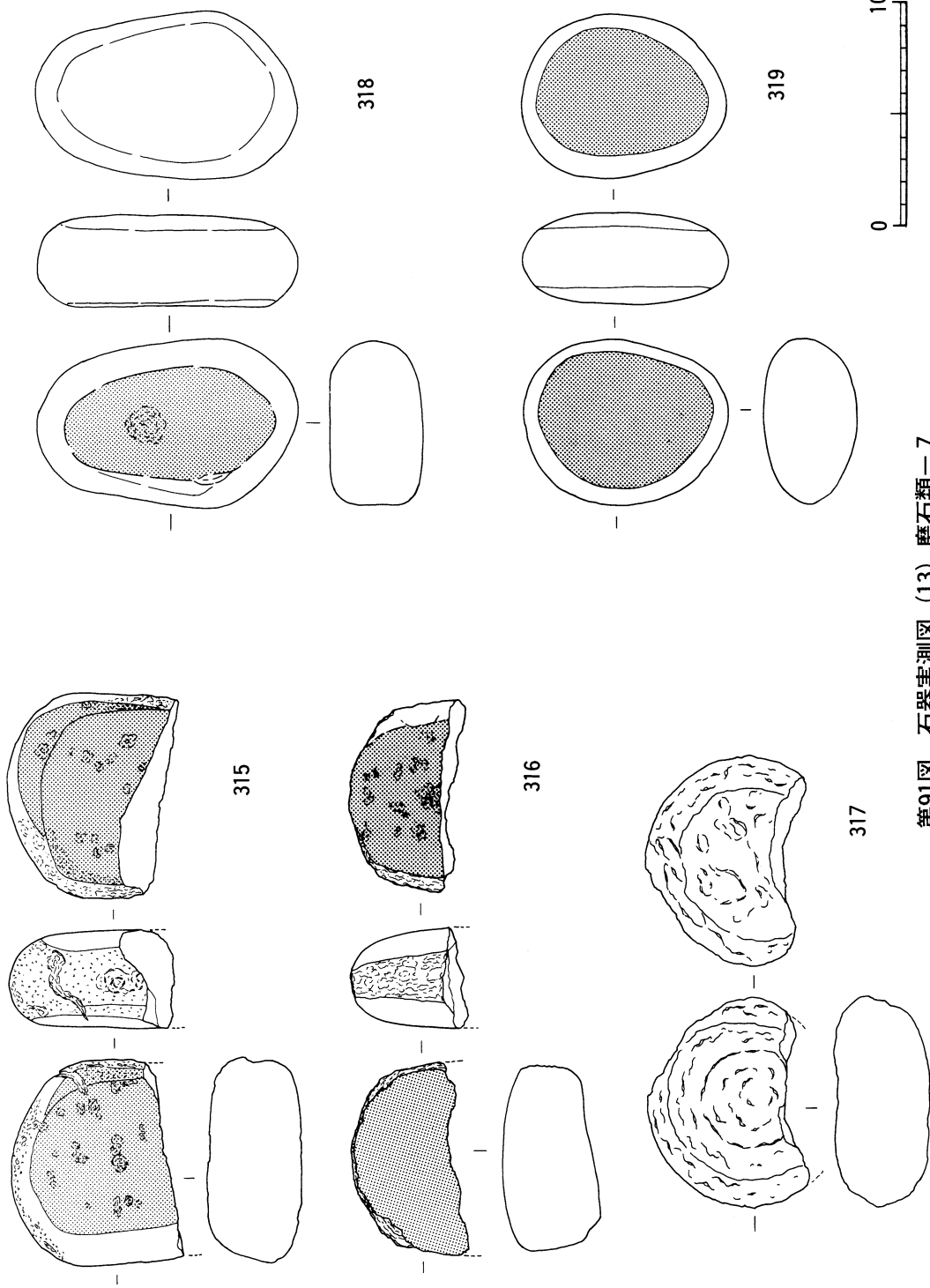
308



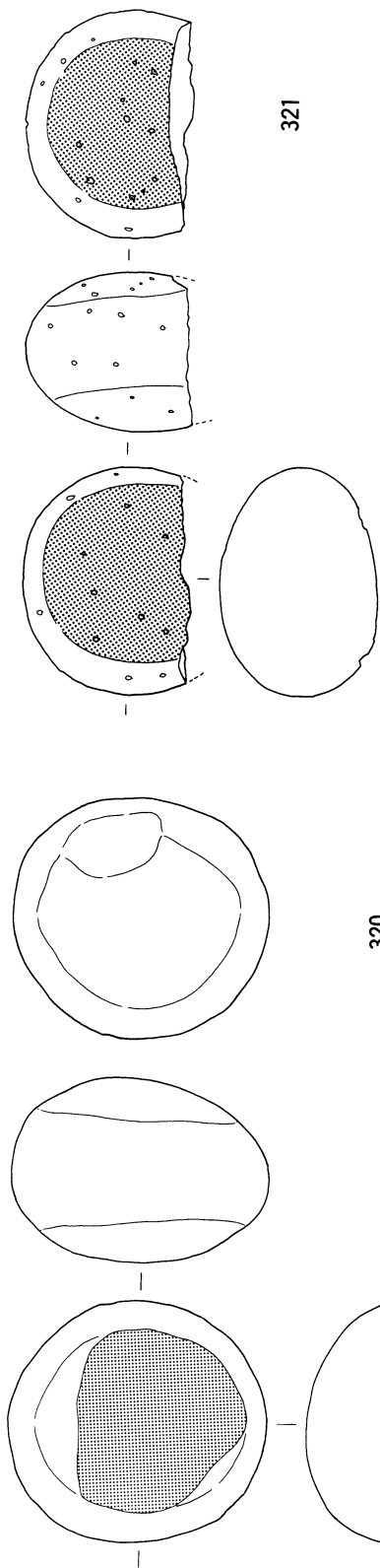
第89図 石器実測図 (11) 磨石類—5



第90图 石器实测图 (12) 磨石類—6

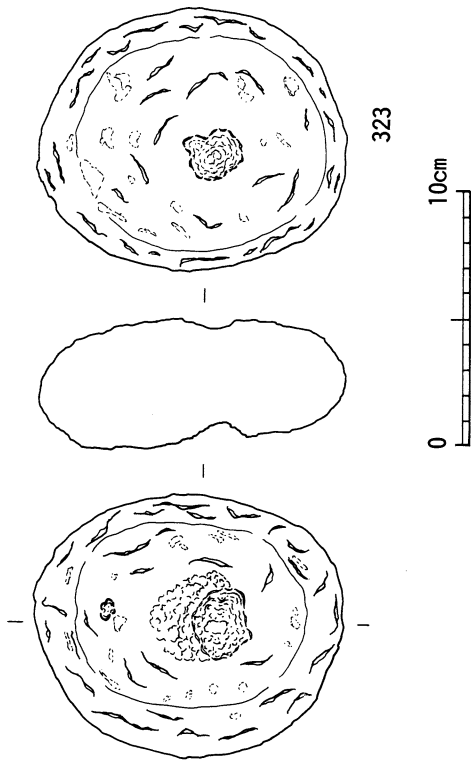


第91图 石器实测图 (13) 磨石類-7



321

320



323

322



第92図 石器実測図 (14) 磨石類 - 8

第21表 出土石器 一覧表(2) 磨石類

* () 内は欠損品の最大値

遺物番号	器 種	分類	出土区	層位	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	注記番号	備考
288	磨石・敲石・凹石	I A	D-2	V下	安山岩	9.5	9.0	4.0	625	10561	
289	磨石・敲石・凹石	I A	D-2	V下	安山岩	9.7	8.7	4.3	590	石4027	
290	磨石・敲石・凹石	I A	A-5	VI	安山岩	12.5	10.8	4.0	775	石皿群下1	
291	磨石・敲石・凹石	I A	E-3	V	安山岩	12.3	8.0	4.7	735	9065	
292	磨石・敲石・凹石	I A	E-3	V	安山岩	(6.7)	(7.9)	4.5	(330)	9736	
293	磨石・敲石・凹石	I B	D-2	V	安山岩	6.2	5.4	2.9	175	石2526	
294	磨石・敲石・凹石	I B	E-2	V	安山岩	10.4	7.6	4.3	570	11602	
295	磨石・敲石・凹石	I B	E-2	V下	花崗岩	8.9	8.5	4.5	464	11920	
296	磨石・敲石	II A	E-3	V下	安山岩	10.9	9.6	5.1	835	10485	
297	磨石・敲石	II A	E-4	V下	安山岩	9.8	8.3	3.6	468	1792	
298	磨石・敲石	II A	A-5	VI	安山岩	9.7	8.1	3.6	430	石皿群6	
299	磨石・敲石	II A	$\frac{D-3}{D-2}$	V下	安山岩	12.2	8.5	4.4	700	3576・3591	2点接合
300	磨石・敲石	II A	E-1	V	安山岩	12.5	9.2	4.3	925	10585	
301	磨石・敲石	II A	D-2	V下	安山岩	11.8	9.6	5.2	890	石4064	
302	磨石・敲石	II A	D-3	VI	安山岩	(8.1)	(9.7)	(5.0)	(375)	10448	
303	磨石・敲石	II A	C-2	V	溶凝灰結岩	8.2	8.2	3.3	(200)	石2336	
304	磨石・敲石	II A	C-2	V下	安山岩	(5.9)	8.1	(2.7)	(180)	番号なし	
305	磨石・敲石	II B	E-5	V下	砂岩	7.2	6.0	2.6	185	石1767	
306	磨石・敲石	II B	C-4	V	安山岩	9.8	7.9	3.7	490	5889	
307	磨石・敲石	II B	B-4	V	安山岩	11.0	8.5	5.7	925	4065	
308	磨石・敲石	II B	D-2	V下	砂岩	11.6	9.3	6.0	930	10562	
309	磨石・敲石	II B	D-3	V下	ホルンフェルス	13.8	9.6	4.2	915	石3584	
310	磨石・敲石	II B	D-3	VI	花崗岩	9.7	(7.6)	5.6	(445)	石4150	
311	磨石・敲石	II B	E-3	V下	半花崗岩	8.9	8.6	5.2	630	10487	再利用
312	磨石・敲石	II B	E-2	VI上	安山岩	9.1	8.2	4.2	445	石4769	
313	磨石・敲石	II B	E-2	V下	安山岩	9.0	8.0	5.0	468	11931	
314	磨石・敲石	II B	D-2	V下	安山岩	(7.5)	(8.5)	4.9	(358)	石3714	
315	磨石・敲石	II B	C-2	V	花崗岩	(8.0)	9.4	4.5	(460)	9554	
316	磨石・敲石	II B	A-5	VI	半花崗岩	(5.3)	(8.7)	(4.4)	(225)	石皿群14	
317	磨石・敲石	II B	C-2	V下	溶凝灰結岩	(7.4)	9.6	4.3	(285)	9904	
318	磨石・凹石	III	E-4	V下	半花崗岩	11.8	7.4	4.2	620	6766	
319	磨石	IV	E-2	V下	安山岩	9.4	7.5	4.3	425	11924	
320	磨石	IV	E-3	V下	安山岩	10.5	9.8	7.4	1025	9734	
321	磨石	IV	E-3	V下	安山岩	(6.8)	9.3	6.5	(530)	石2658	
322	磨石	IV	A-6	V	花崗岩	(6.3)	(8.5)	5.4	(400)	2652	
323	凹石	V	D-4	IV	溶凝灰結岩	12.3	10.4	5.1	680	石2185	

第22表 出土石器 一覧表(3) 磨石類(未図化資料)

遺物番号	注記番号	器種	分類	出土区	層位	石材
	石1440	磨石類		B-2	V下	安山岩
	石1598	磨石類		B-3	VI	半花崗岩
	石1692	磨石類		E-4	V下	半花崗岩
	石2081	磨石類		D-4	V	半花崗岩
	石2234	磨石類		D-4	VI	粗粒砂岩
	石3906	磨石類		D-3	V下	半花崗岩
	4049	磨石類		A-5	V	花崗岩
	6590	磨石類		E-4	V下	砂岩
	8936	磨石類		D-4	VI	砂岩
	9180	磨石類		E-3	V	半花崗岩
	9439	磨石類		E-3	V下	安山岩
	9903	磨石類		C-3	V下	安山岩
	10448	磨石類		D-3	VI	安山岩
	石4722	磨石類		E-2	V下	花崗岩
	東壁面	磨石類		C-9	V	花崗岩
	東壁面	磨石類		C-9	V	花崗岩

*すべて欠損品のため計測はしていない。

K 石皿・台石類 (第93～96図 324～347)

大型の礫を利用し、磨滅による滑らかで光沢のある面(磨滅面)や皿状の凹みを持つものを石皿、敲打痕などを伴うものを台石として取り上げた。遺跡の立地する地域の地質的特徴から、利用される石材には第23表にあるように花崗岩(半花崗岩を含む)が多く含まれている。花崗岩の表面は、自然の状態でも滑らかなものや風化のため敲打されたように荒れているものがあり、使用痕が判別しにくい。そこで明らかに磨滅面や凹みが確認できるもののみを石皿とし、他は台石に分類した。

V層からは石皿が16点(完形品9点、破損品7点)、台石が8点(完形品6点、破損品2点)出土している。それぞれ石器組成に占める割合は、石皿が15.1%、台石が7.5%である。

(a) 石皿 (第93～95図 324～339)

分類はまず、素材の礫を整形して利用しているものをⅠ類、整形がなく自然礫をそのまま利用しているものをⅡ類と大別し、そのなかで素材の礫の形状や皿状の凹みの有無によって以下の細分を行った。(整形されているものについては、素材の礫の形状では細分していない。)

Ⅰ 整形されているもの

- a 凹みがある
- b 凹みがない

Ⅱ 整形されていないもの

A 偏平な自然礫を利用している

- a 凹みがある
- b 凹みがない

B 厚みのある自然礫を利用している

- a 凹みがある
- b 凹みがない

次に、各類について詳述する。(実測図のスクリーントーンは磨滅面・凹みを表す。)

I - a 類 (第93図 324~329)

324は3点に割れて出土したものが接合した。全体を敲打で粗く整形し、中央が弧状に深く凹んでおり、手前には注ぎ口を持つ。裏面も使用されている。325・326・328も同様であるが凹みは浅い。327は扁平に整形され、両面とも使用されている。329は小型であるが、小判形に丁寧に整形されている。表面に浅い凹みと注ぎ口を持つ。

なお、I - b 類に該当する石皿は出土していない。

II - A - a 類 (第93図 330)

330は扁平な自然礫をそのまま利用している。表面の中央に浅い凹みを持ち、裏面にも一部に使用された面が観察される。

II - A - b 類 (第94図 331・332)

331と332は接合はしないが、割れ口の様子から同一個体と思われる。平坦な表面を全面使用しており、凹みはないが滑らかで光沢のある面を持つ。

II - B - a 類 (第94図 333~337)

B類は厚みのある自然礫をそのまま利用したものである。333と334は石材は花崗岩(半花崗岩)であるが、明らかに磨滅して浅い凹みを有している。335はホルンフェルスの自然の凹みを利用して石皿としている。336は溶結凝灰岩製であり風化のため使用痕がはっきりしないが、右側辺に注ぎ口となるような磨滅面が残っている。337は大型の花崗岩で両面とも使用されている。表面には縦横に浅い凹みが残っている。A - 5区の花崗岩や磨石が近接して出土した遺構の、中央付近に位置していたものである。

II - B - b 類 (第95図 338・339)

本類は厚みのある自然礫の平坦面に、滑らかで光沢のある面が観察されるものである。凹みが無いことで一見台石とみられるが、他の自然面と違う滑らかさや光沢を持ち、それらはする(すられる)作業に使用された結果と考えられる。338は両面使用されている。338・339共に花崗岩であり、滑らかな面がなければ次に分類した台石(すべて花崗岩)とほとんど同じ形状をしている。両者になんらかの関係があることも考えられる。

(b) 台石 (第95・96図 340~347)

8点出土しているがすべて花崗岩製である。小型の345を除いて厚みのある大型の礫を利用している。風化しやすい花崗岩のため表面が荒れており、使用痕(敲打痕あるいは磨滅面)の検出が困難であった。しかし、遺跡周辺に自然に散布している礫ではないことから人為的なものと認め、台石に分類した。345は337と同じ遺構内のものである。

以上の分類ごとに、素材となった石材をまとめたのが第23表である。安山岩・花崗岩(半花崗岩を含む)・流紋岩・溶結凝灰岩・ホルンフェルス等を利用している。石皿では安山岩・花崗岩・流紋岩の利用が多い。安山岩は整形されたI類や凹みを持つa類に多い。流紋岩は整形されて凹みを持つI - a類のみである。花崗岩には整形されたものはなく、凹みの無

いものや、a類でも凹みは浅いものが多い。台石としての利用が多いことがわかる。

石皿・台石を合わせると花崗岩が特別多いが、このような花崗岩の大型礫を利用したものは、隣接する飯盛ヶ岡遺跡・榎崎B遺跡・西丸尾遺跡でも数例出土している。飯盛ヶ岡遺跡・榎崎B遺跡は未整理のため詳細は不明であるが、西丸尾遺跡からは早期の包含層から出土しており、石皿に分類されている。

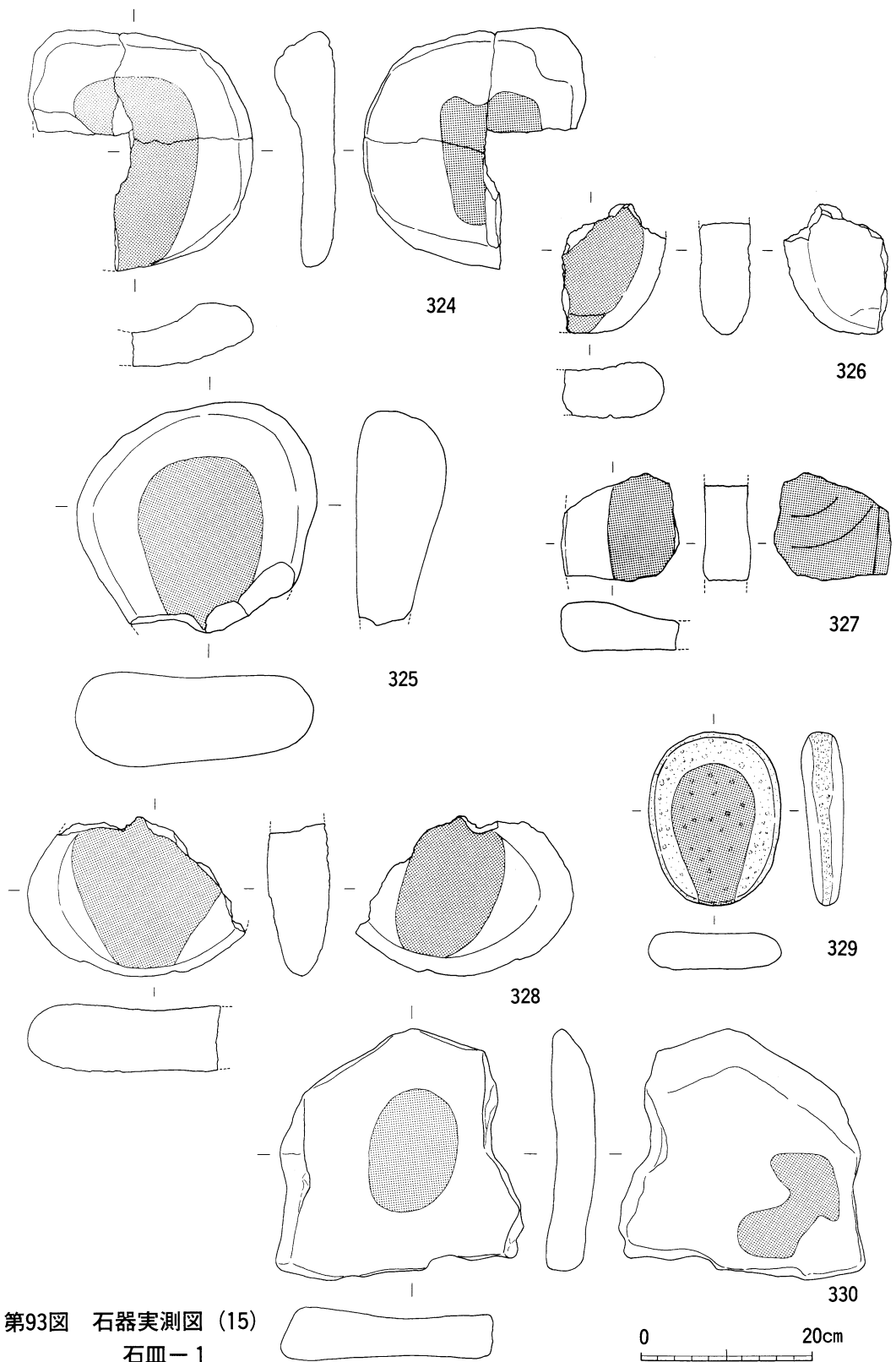
第23表 V層 石皿・台石の類別石材一覧

器種・分類		石材		安山岩	花崗岩	流紋岩	溶結凝灰岩	ホルンフェルス	総数
石皿	I類	a		3		3			6
				1				1	
	II類	A	a	1					1
			b	2				2	
		B	a		3		1	1	5
			b		2				2
石皿 計 (%)				6 (37.4)	5 (31.2)	3 (18.8)	1 (6.3)	1 (6.3)	16
台石 (%)					8 (100)				8

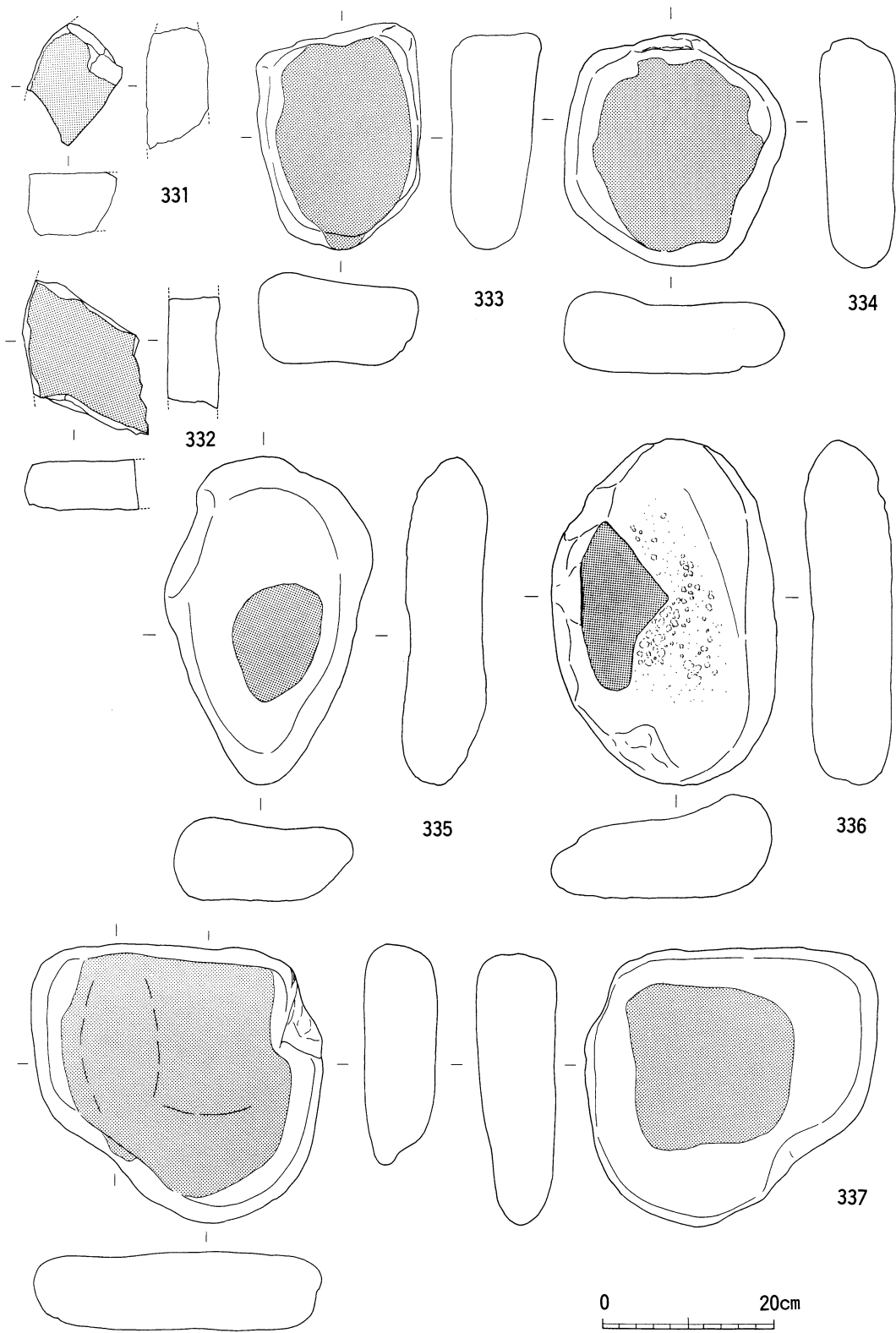
第24表 出土石器 一覧表(4) 石皿・台石

* () 内は欠損品の最大値

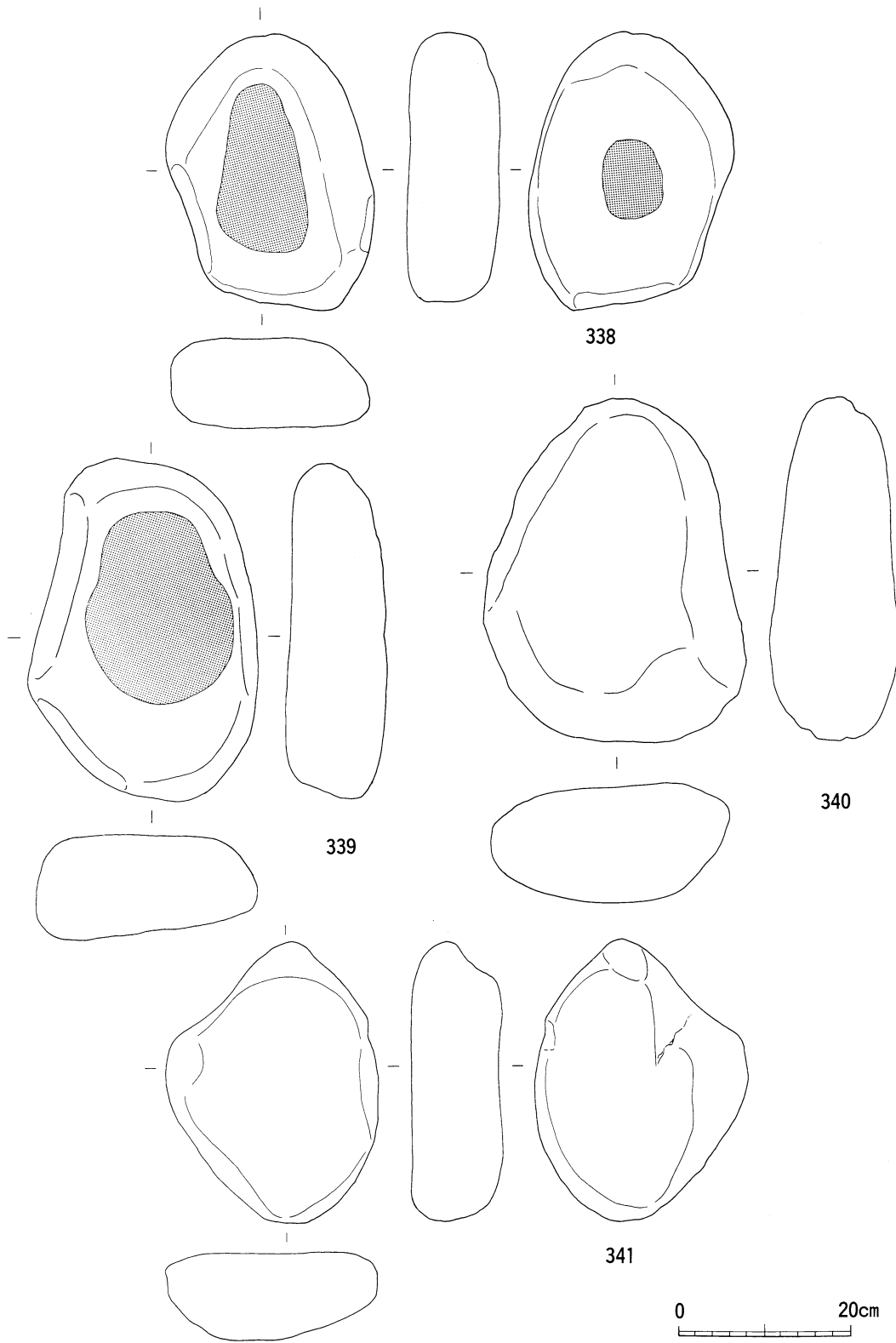
遺物番号	器種	分類	出土区	層位	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	注記番号	備考
324	石皿	I a	C-2	VI	流紋岩	27.2	25.1	6.1	(4.55)	石3007 他2点	3 T113・石 3008 接合
325	石皿	I a	C-3	V下	安山岩	(26.4)	27.9	10.9	(11.78)	石3973	
326	石皿	I a	D-1	V	流紋岩	(14.7)	(12.0)	6.5	(1.30)	石2489	
327	石皿	I a	C-4	V	安山岩	(12.1)	(13.7)	5.6	(1.26)	石1076	
328	石皿	I a	A-5	VI	流紋岩	(18.7)	(23.6)	7.6	(3.80)	石皿群5	
329	石皿	I a	C-2	V下	安山岩	20.1	15.4	4.2	2.02	9583	
330	石皿	II A a	C-3	V	安山岩	28.0	27.9	6.2	7.62	9841	
331	石皿	II A b	C-5	V	安山岩	(14.1)	(10.2)	7.2	(1.30)	石1158	
332	石皿	II A b	C-5	V	安山岩	(14.0)	(13.4)	5.7	(2.16)	石1160	
333	石皿	II B a	D-3	V下	半花崗岩	25.3	18.8	10.5	8.95	3987	
334	石皿	II B a	E-4	V	半花崗岩	26.9	25.4	9.2	9.72	6718	
335	石皿	II B a	c-2	V	ホルンフェルス	38.2	23.1	9.6	12.75	石2404	
336	石皿	II B a	D-2	V	溶結凝灰岩	39.9	25.8	11.3	12.75	10565	
337	石皿	II B a	A-5	VI	半花崗岩	32.0	33.6	9.1	16.25	石皿群10	
338	石皿	II B b	D-3	VI	花崗岩	31.3	22.9	10.4	12.50	石4222	
339	石皿	II B b	C-9	V	花崗岩	38.8	26.7	11.8	19.08	石433	
340	台石		E-3	V	花崗岩	39.6	29.6	13.3	21.92	4156	
341	台石		D-1	V	半花崗岩	32.5	24.6	10.1	11.42	10654	
342	台石		C-2	V	花崗岩	35.1	26.1	12.6	16.74	3356	
343	台石		D-2	V	半花崗岩	25.3	22.4	9.1	8.55	10607	
344	台石		E-2	V	半花崗岩	27.8	17.4	7.5	5.69	11694	
345	台石		E-2	V	半花崗岩	21.2	18.8	5.8	3.50	石皿群下10	
346	台石		E-3	V	半花崗岩	(16.3)	(13.7)	9.8	(2.74)	9735	
347	台石		E-3	V	半花崗岩	(13.2)	(12.3)	10.3	(2.50)	2656	



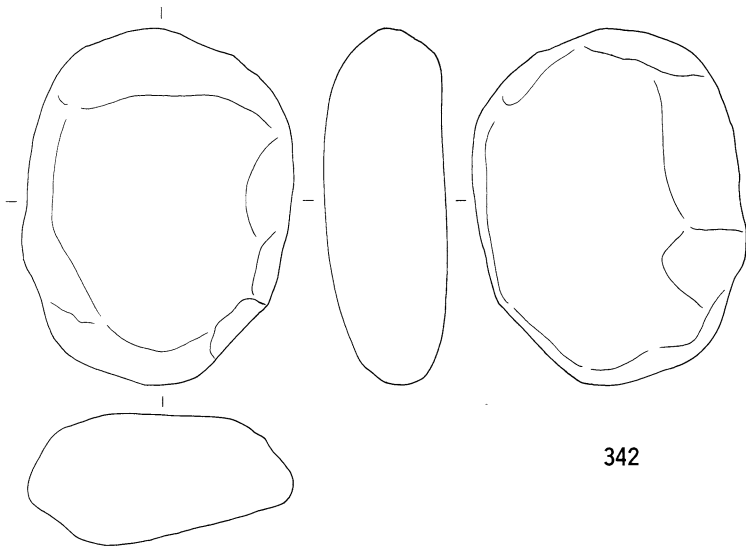
第93图 石器实测图 (15)
石皿-1



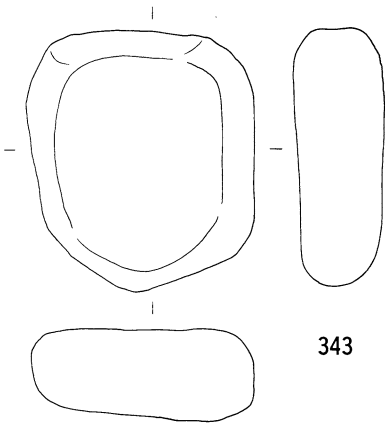
第94図 石器実測図 (16) 石皿—2



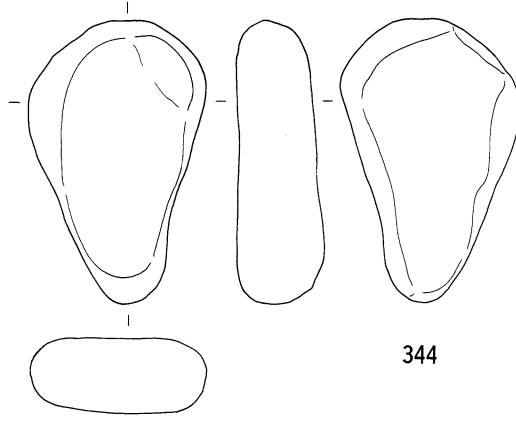
第95図 石器実測図 (17) 石皿・台石-1



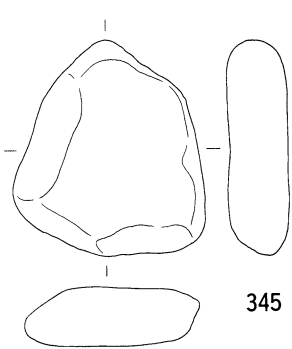
342



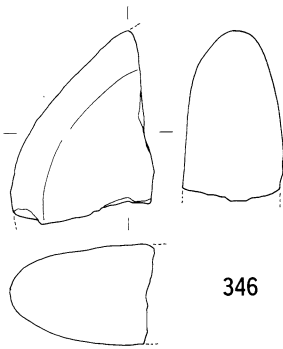
343



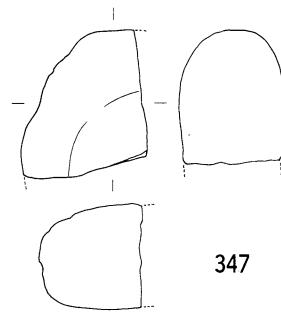
344



345

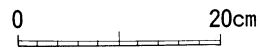


346



347

第96图 石器实测图 (18) 台石-2



第3節 III b層の調査 (第97図)

III b層は縄文前期～晩期に相当する土器が複合して出土した遺物包含層である。調査区はほぼ全域にわたって遺物が出土するが、主に調査区南側のC-2区、D-2～4、C-5～7区に集中して分布していた。これらの出土土器は前期～晩期にかけての多岐にわたる時代の諸型式土器がみられるものの、同一遺物包含層中の出土であり、土器型式別の層位的分離は困難であった。なお、晩期の遺物は極めて少ない。遺構としては集石遺構2基が検出した。

1 遺構

(1) 集石遺構

集石遺構1 (第98図)

集石遺構1は、A-9区の傾斜面から検出された。集石遺構は総計152個の握り拳大の礫を主体に人頭大の角礫・亜角礫を用いていた。一部礫の重なりが見られるが全体的に平面的な配置で、縦約170cm、横約160cmでL字形の平面プランを呈し南東部に空白が見られた。検出時の傾斜面に添って南に傾斜した状況であった。

集石遺構2 (第98図)

集石遺構2は、E-4区から検出された。長径約80cm、短径約60cmの範囲でほぼ円形にまとめた小規模な集石遺構であった。これら礫は握り拳大の亜角礫・偏平礫の安山岩や砂岩で総計48個からなる。なお、これら礫中の2個に焼石と思われる赤色に変色したものが見られた。なお炭化物等は観察出来なかった。

2 出土遺物

(1) 土器

III b層は縄文前期～晩期にかけての多岐にわたるもので、Ⅶ類～Ⅸ類の4つに分類した。

Ⅶ類土器 (第99図 348～361)

Ⅶ類土器は縄文前期の轟式土器に相当するものである。

348は直行する口縁部片で口唇部は先細りとなる。内外面に横位の貝殻条痕文を有す。口縁部に縦位に微隆起線文を施し、微隆起線文は口縁部内側まで達している。349～359は内外とも貝殻条痕文を施し、縦列に微隆起線文を施文する。350は微隆起線文の端部に半載竹管の刺突文を施す。354も同様である。345は微隆起線文の端部には横位の刻目凸帯文を巡らす。353は微隆起線文を斜めに、347は刻目凸帯文を施す。360・361は篋状施文具による押引文を施す。

Ⅸ類土器 (第100図 275～305)

Ⅸ類土器は縄文前期の曾畑式土器で、短線の沈線文や幾何学文を施文する。なお胎土に滑

石は含まない。362～364は口縁部片である。362は口縁部が外反する。内外に短線の幅3mmの沈線文を、口唇部には2列に斜めに突き刺した連続刺突文を施す。366は篋先で綾杉文を施す。374～382は丸底である。文様には短線文、蜘蛛の巣状文の376・378や方格文の380等が見られる。

X類土器（第101・102図）

X類土器は、太型から中型の沈線文を施すタイプの土器である。X a類土器（口縁部・胴部）とX b類土器（底部）の2類に分けた。

X a類土器（第93・94図 393～426）

393は復元口径約29.5cmを測る比較的大きな口縁部片である。胴部はわずかに膨らみ直行する口縁部で口唇部は平坦に仕上げる。器壁の厚さは8～9mmを測る。口縁直下約7cmの範囲に8mm～1cmの幅で数本の太型沈線文やS字文・弧文の文様を施し口唇部には押圧文を施す。器面はナデ整形、内面は細かく剥落を受け指頭痕も残す。胎土に石英粒や長石を多く含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。394は直行する口縁部である。口唇部は平坦に治めるがこの部位に肥厚する高さ1.5cmで平坦な突起を有す。突起頂部に棒状施文具で深い沈線文を施す。外側器面には貝殻条痕文が浅く残り、3本の平行沈線文を斜位・横位に施す。沈線端部は弧状に治めるケ所も見られる。沈線の幅は5～6mmを測る。内面はナデ調整で仕上げる。また外器面にススが付着している。胎土には長石・石英を含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。394・395は同一個体と思われる。396は口縁部片で平坦で肥厚する口唇部となる。器壁は6～7mmで薄い。口縁部に太型の沈線文と口唇部にも縦横に太型の沈線文を施す。ススが付着している。400は口唇部に突起を持つ口縁部片である。口縁部や突起頂部に沈線文を施す。398は復元口径30cmを測り、直行する口縁部片である。口唇部は肥厚して平坦に仕上げ突起を有す。内外器面に弱い貝殻条痕文が見られる。口縁部下5cmに補修孔を穿っている。文様には沈線文が斜位に施されている。399と同一個体と思われる。胎土に石英・長石を含む。焼成は良好。色調は褐色を呈す。401～406は貝殻条痕文を有し沈線文を施す胴部片である。407・408は沈線文、408は方格状の沈線文を施す。409・412は同一個体と思われ、器壁は比較的厚く口唇部でさらに肥厚する。口縁部と口唇部に直線あるいは弧状に浅い沈線文を施す。全体的に作りが雑な仕上がりである。器面はナデ調整を行っている。胎土に小礫粒を含む。焼成はやや軟弱。色調は褐色を呈す。410は直行する口縁部片である。口唇部は平坦に仕上げ、棒状施文具による押圧刻目文を施す。口縁下には縦列に約2.7cm前後の沈線文を施し、その下位に沈線文と短沈線文の組合せで文様を施す。内面に貝殻条痕文が浅く見られる。外器面にススが付着している。414・415は胴部片である。414はS字状の平行沈線文、415は押引きによる平行沈線文で弧状となる。416・417は器形文様等から同一個体である。胴部は膨らみを直行する口縁部で、口唇部は平坦気味に仕上げ高さ8mmの突起を施す。器壁の厚さは3～4mm、口唇部の厚さ9mmと肥厚する。全体的に繊細な土

器である。内外面は貝殻調整後胴部と口縁内側はナデ整形を行う。口縁下4.6cmの範囲に幅2～2.5mmの平行沈線文を数状施し、曲線および直角に曲がっている。沈線文間に細かな貝殻刺突文を施す。胎土に石英・長石を含む。焼成は良好。色調は褐色～黒褐色を呈す。418は幾何学文の沈線文を有し、沈線文間に刺突文を施す。器面はナデ整形を施す。419は幅約1.5cmの刻目凸帯を口縁下に施し、刻目は指で押圧したもので太型である。器壁は9mmの厚さを測る口唇部にも斜めに太型の刻目を施し波状口縁となる。内外面には貝殻条痕文が顕著に見られる。胎土は肌理が細かく、焼成は良好。色調は明褐色を呈す。420・421も同様な指押圧線で刻目を施す口縁部片である。422・426は内外ともに貝殻条痕文を施す胴部片である。いずれも横一列の半載状刺突文を施す。

X b 類土器 (第102図 427～434)

427～434は底部で径7.7～14.4cmを測る平底である底部側面で内側に窄み円盤貼り付け状の形状を呈す。427は底部側面に指圧痕が見られ、429はナデ整形。その他は貝殻腹縁による器面調整が施されているが、底部と胴部の接合面はナデ整形を施している。434は外面はナデ整形を行っている。外底部に木の葉圧痕文が付され葉脈を鮮明に残す。

X類土器は、太型沈線文や若干細目の沈線文を施す土器で文様等から中期末から後期にかけてのものであろう。

XI 類土器 (第103図)

XI類土器は縄文晩期の土器である。深鉢形土器をXI a類、浅鉢形土器をXI b類とした出土量は極めて少ない。

XI a 類土器 (第103図 435～438)

348は復元口径24cmを測る粗製の深鉢形土器である。頸部から口縁にかけて「く」の字に屈曲し頸部に稜が付される。口縁部は無文である。内外面は横ナデ整形を施す。胎土は石英・長石を含む。焼成は良好。色調は褐色を呈す。436は頸部で「く」の字に屈曲して外反する口縁部である。頸部に2×1cmのリボン状の凸起を設けている。内外ともに丁寧なナデ整形を施す。437はわずかに外反する口縁部で、口唇部に小さなリボン状の凸起を設ける。内外器面に貝殻条痕文が顕著に見られる。内側口縁部は貝殻調整後、丁寧なナデで器面調整を施している。胎土は石英・長石を含み粒子が細かい。焼成は良好で堅緻である。色調は灰褐色を呈す。外面にスガが付着している。438は深鉢形土器の肩部で弱い稜を持ち、わずかに外反する口縁部となる。器壁の厚さは7～10mmを測る。内外面に太くて浅いタッチの貝殻条痕文を施す。

IX b 類土器 (第103図 439～442)

IX b類土器は研磨土器で精製の浅鉢形土器である。

439の胴部は丸味を帯び、頸部で締まり大きく外反する口縁部である。口縁端部は細かく治める。内外面は丁寧な篋研磨が横位に施される。440は復元口径23cmを測る、無頸の浅鉢形土器である。口縁部に幅5mmの凹線文、口唇部に細かく浅い凹線文を巡らす。器壁の厚さは4～5mmで均一に仕上げる。内外面は丁寧な篋研磨が施される。441は復元口径27.5cmを測る。肩部で「く」の字に屈曲し、さらに頸部で「く」の字に屈曲して短い口縁部となる。口唇部は丸く治める。肩部や頸部の屈曲部に明瞭な綾線が付く。内側口唇部直下に浅い段を有す。内外面とも篋研磨が施されている。胎土に石英・長石を含み堅緻で固い。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。442は大型の浅鉢形土器型の胴部で破片は大きい。器壁の厚さは6～8mmを測る。内面は丁寧な篋研磨が施され、外面は強いタッチで横位・斜位に棒状施文具による研磨が見られる。器面全体にススが付着している。胎土に細かな石英を含む。焼成は良好で堅緻である。色調は外側で暗褐色、内側で暗褐色から黒褐色を呈している。

1

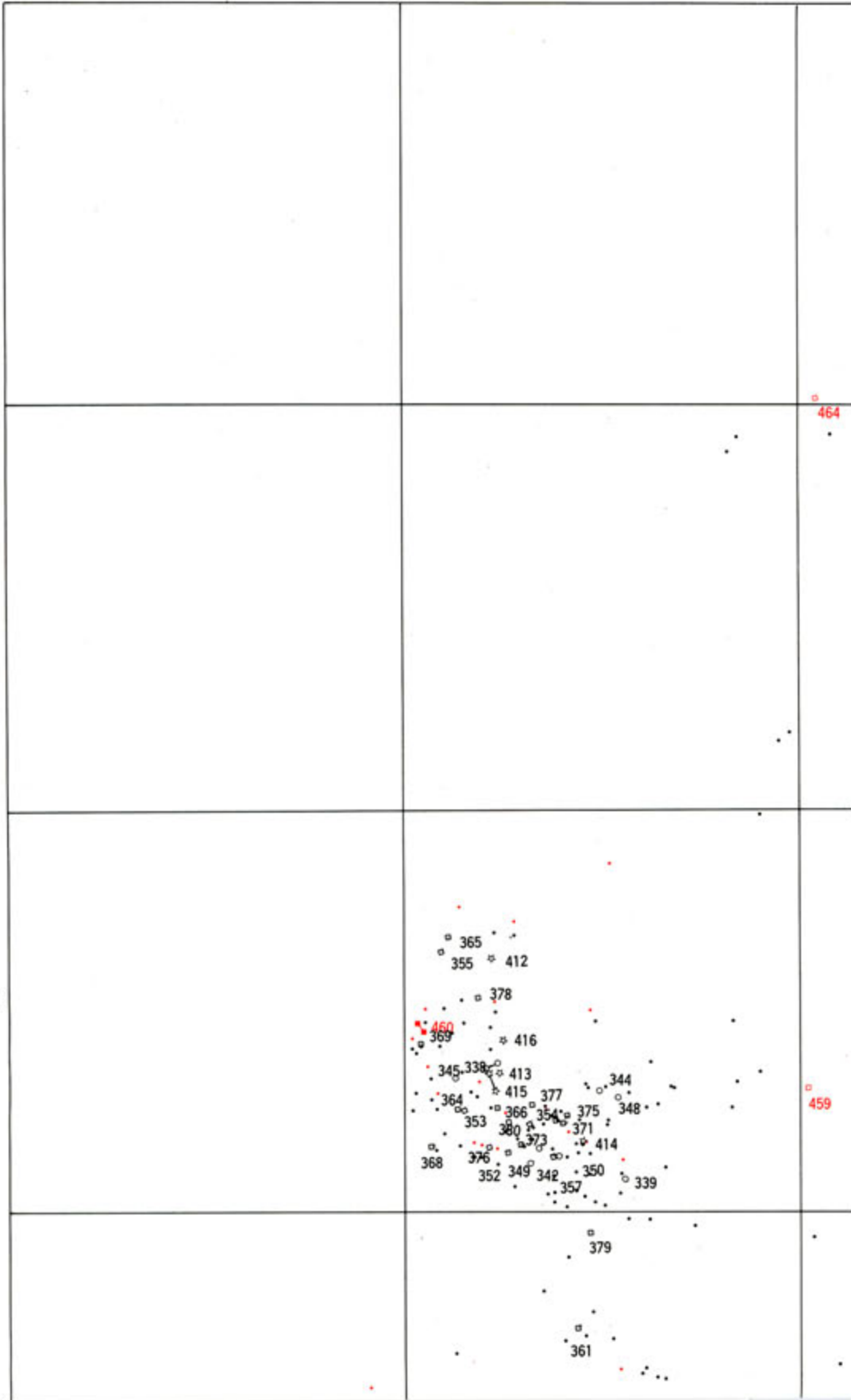
2

A

B

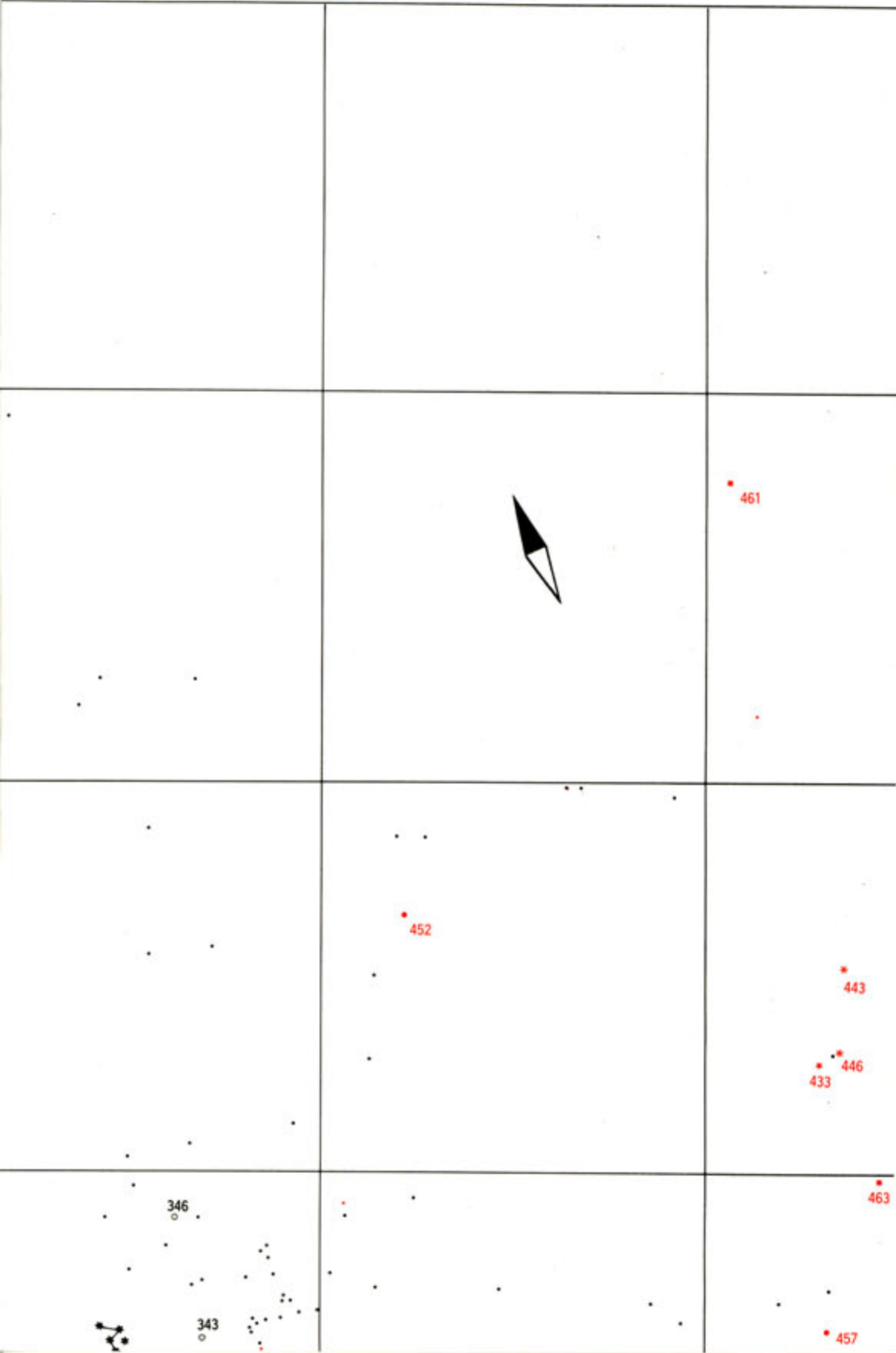
C

D



3

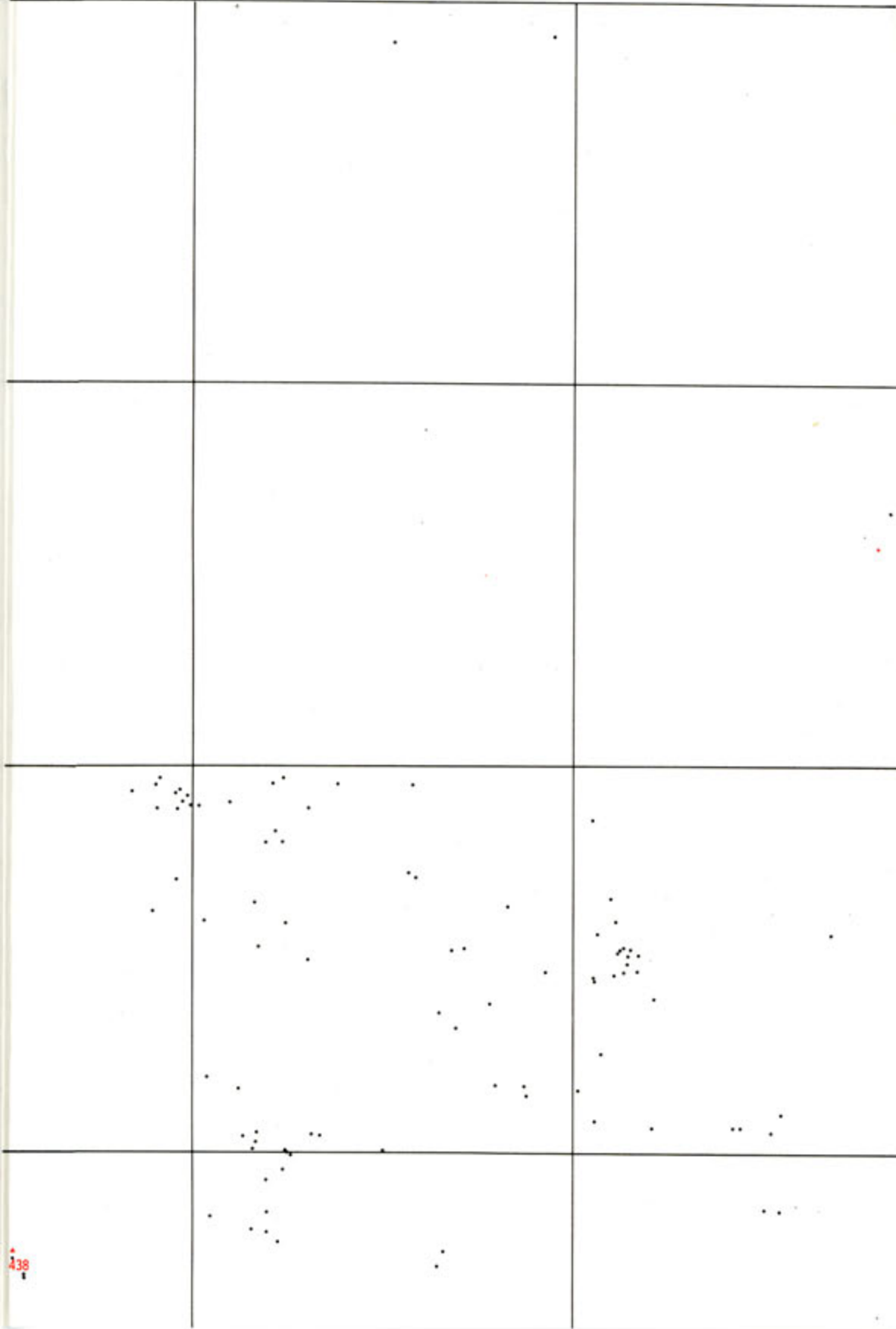
4



5

6

7

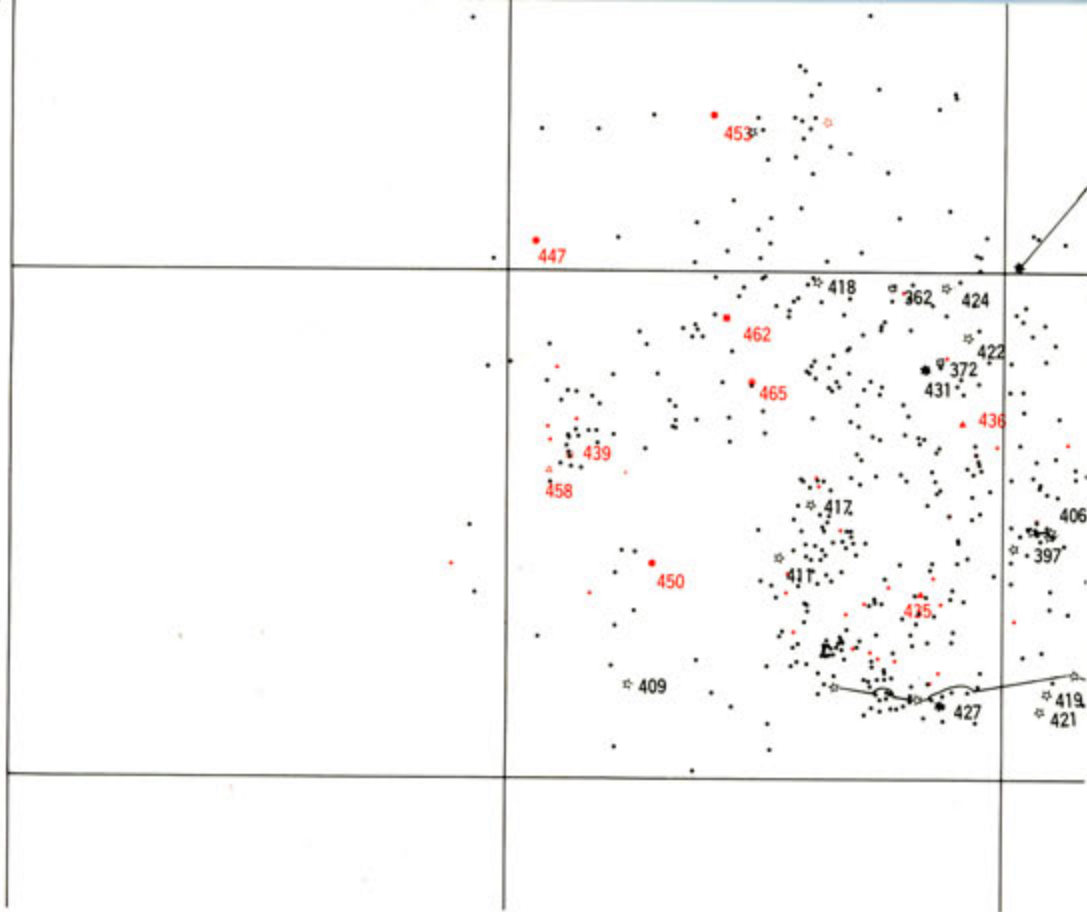


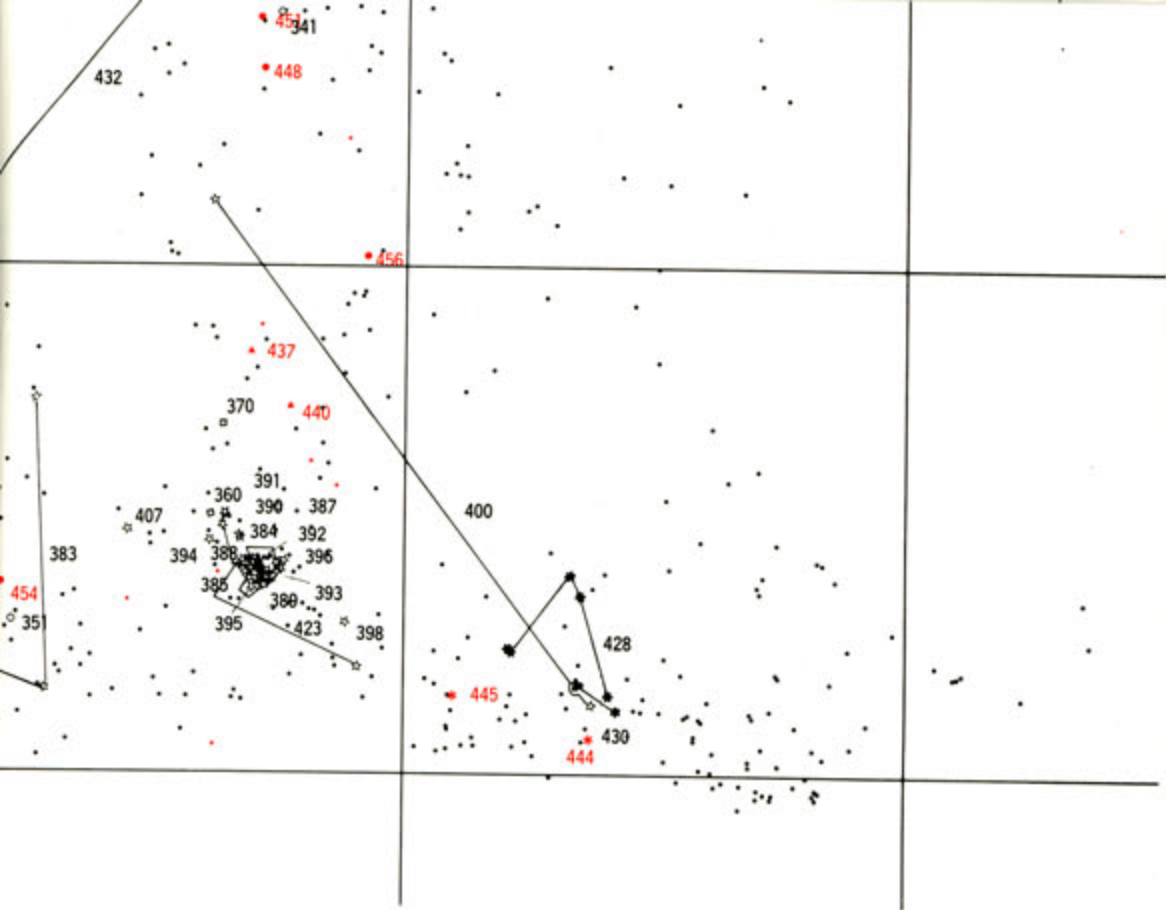
338

8

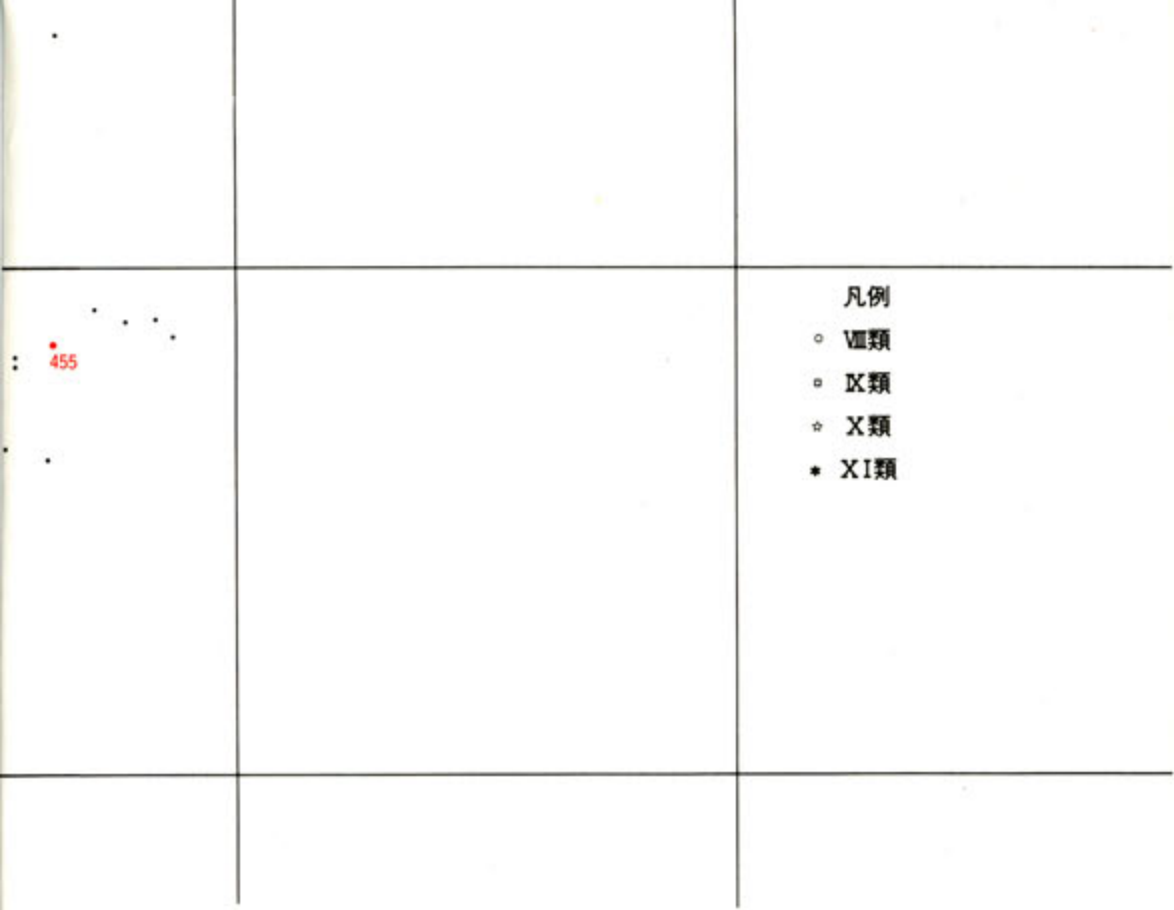
9

E





第97図 Ⅲ b層)

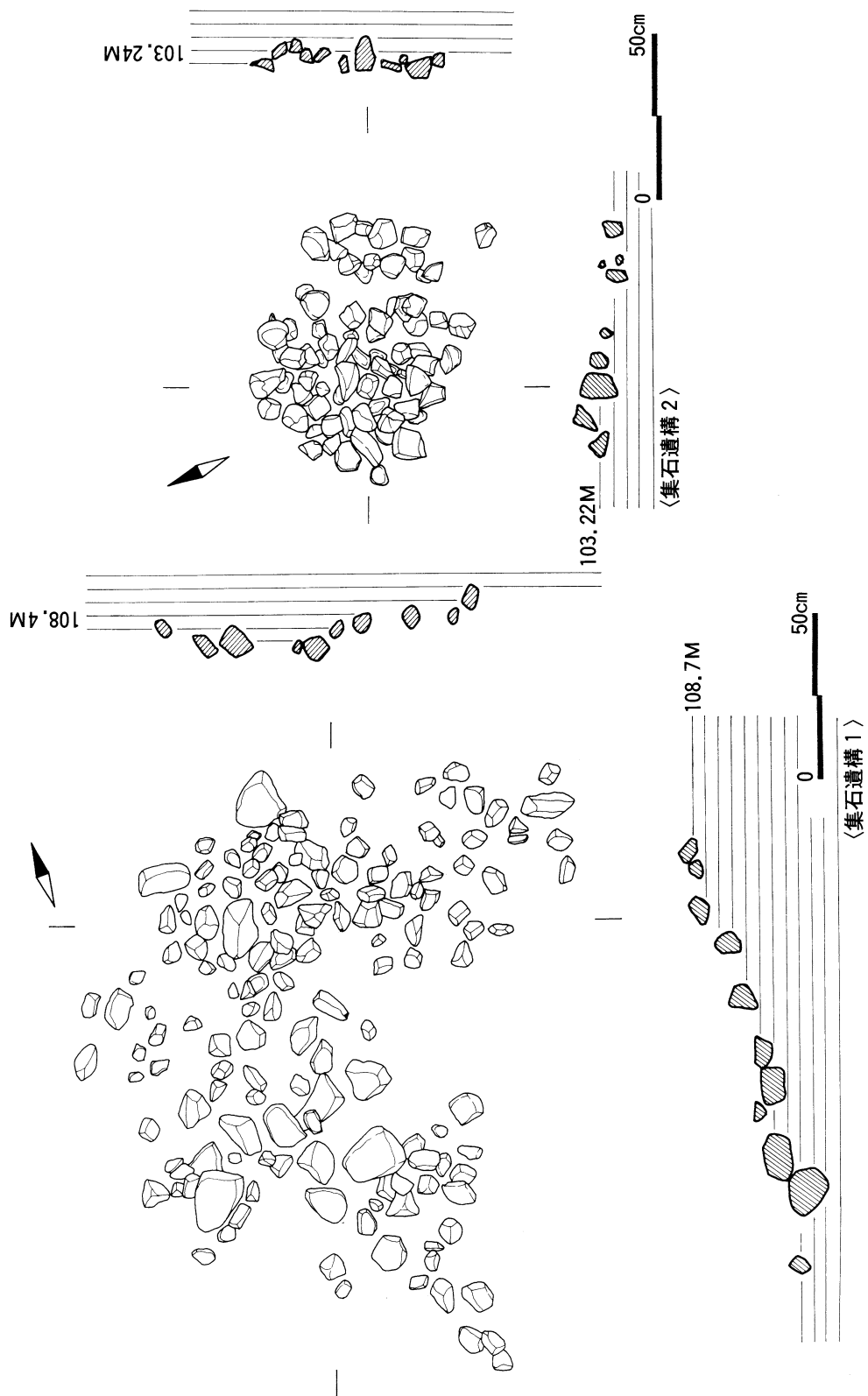


遺物分布図

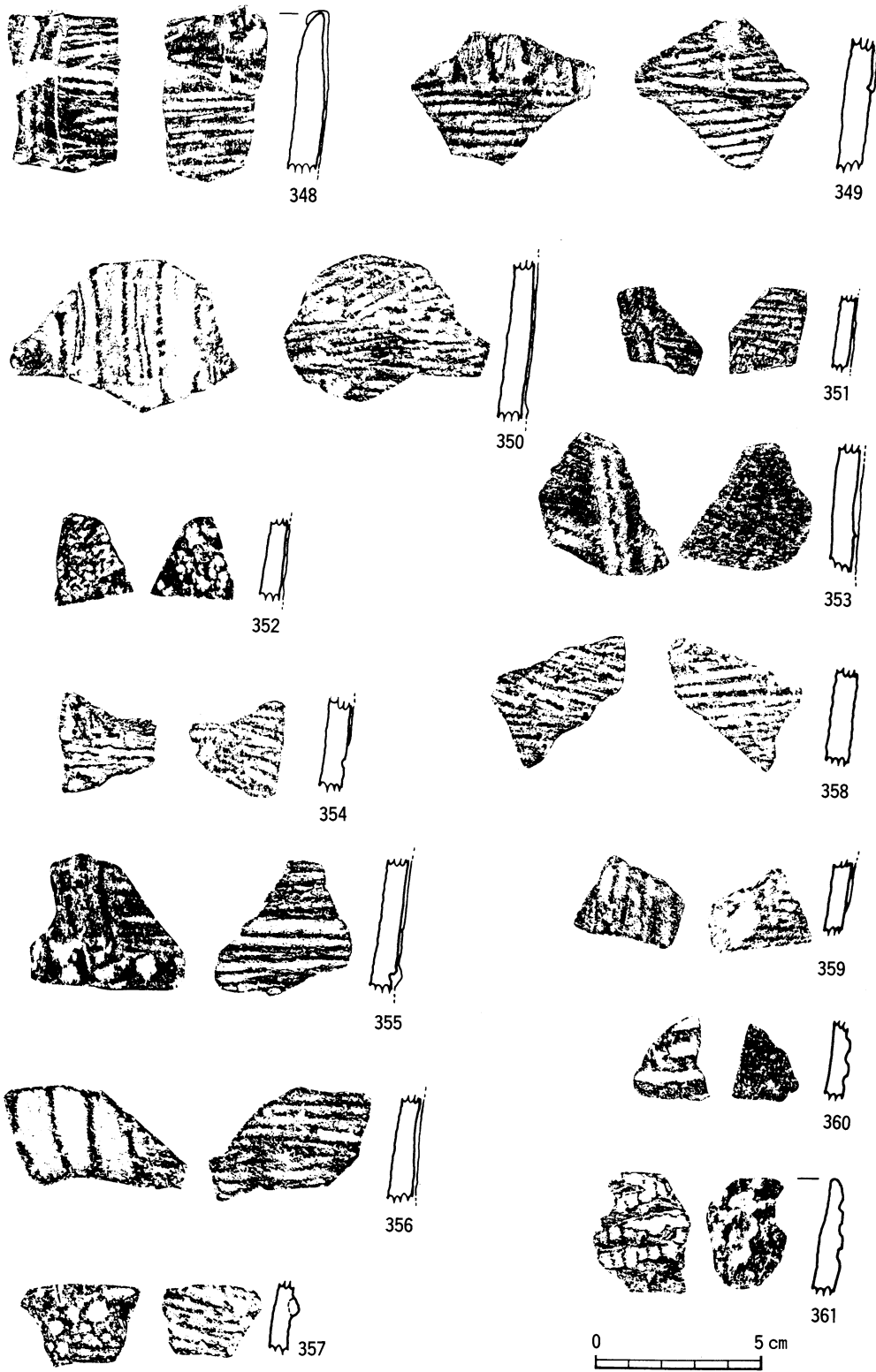
凡例

- △ 擦痕のある礫
- * 磨製石斧・打製石斧
- 台石
- 石皿
- ◆ 打製石鏃
- ◇ スクレイパー
- 加工のある割片・使用痕のある割片・中製割片
- 磨石
- 軽石製品
- 石核

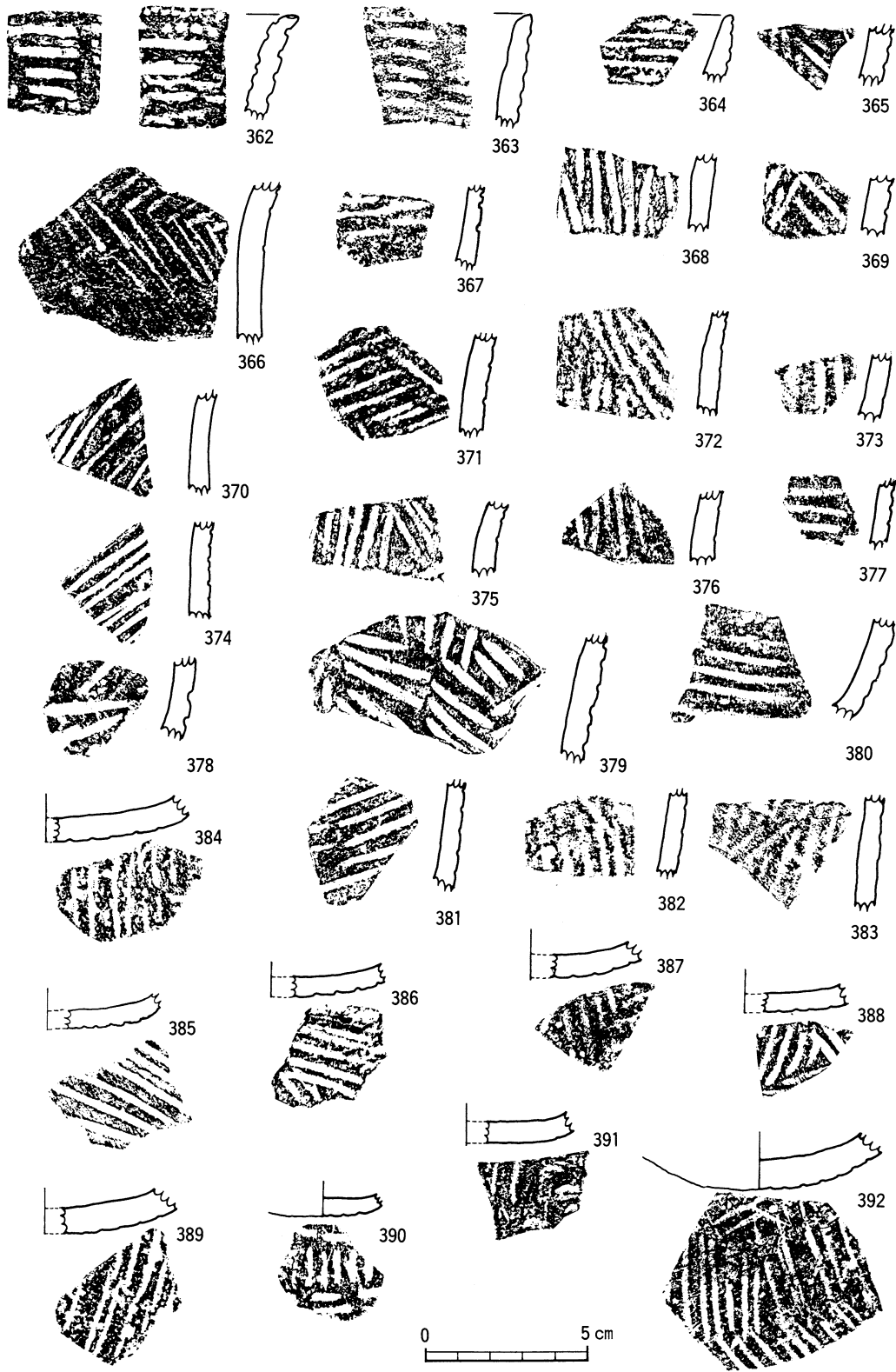




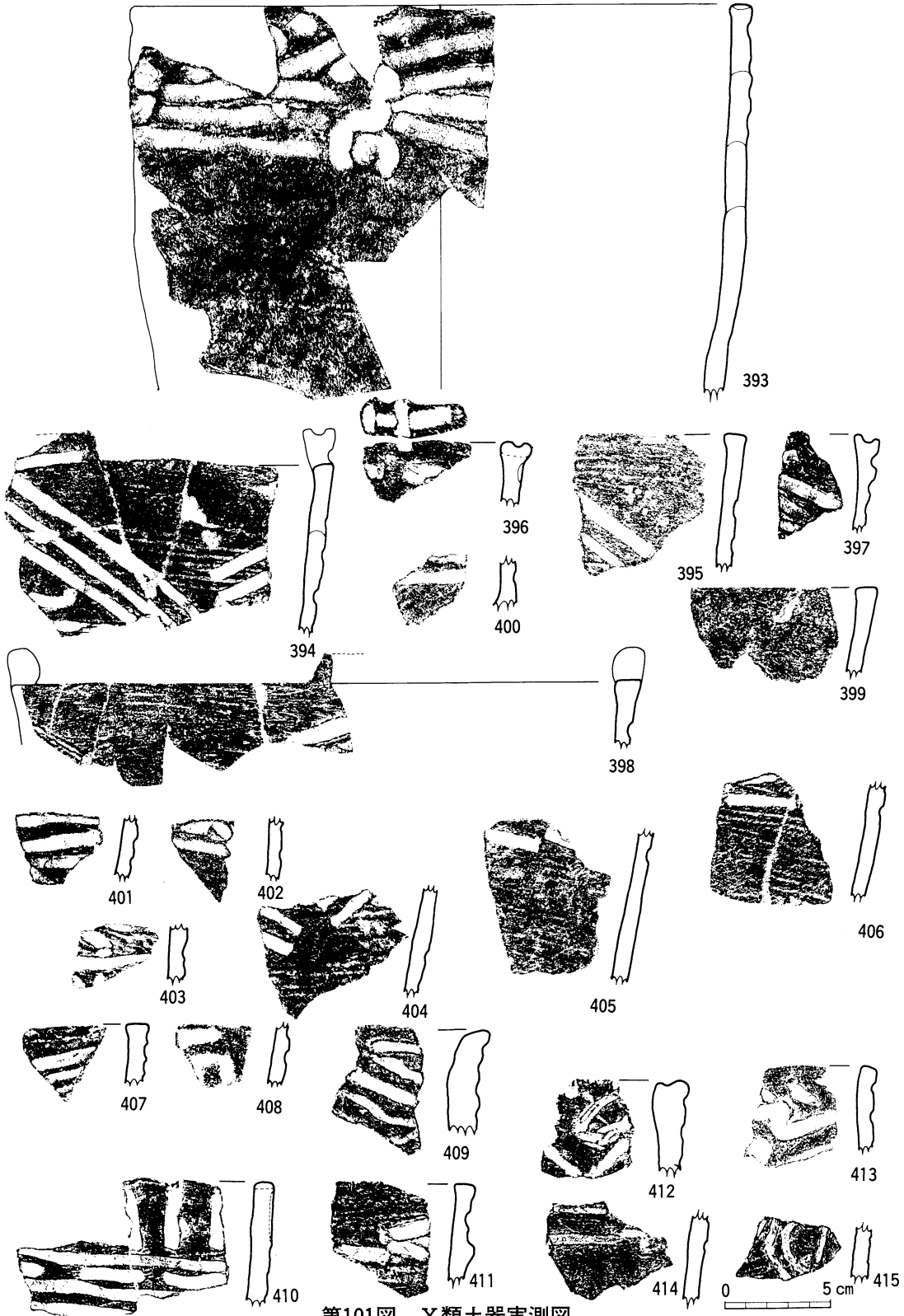
第98図 集石遺構 1～2号実測図



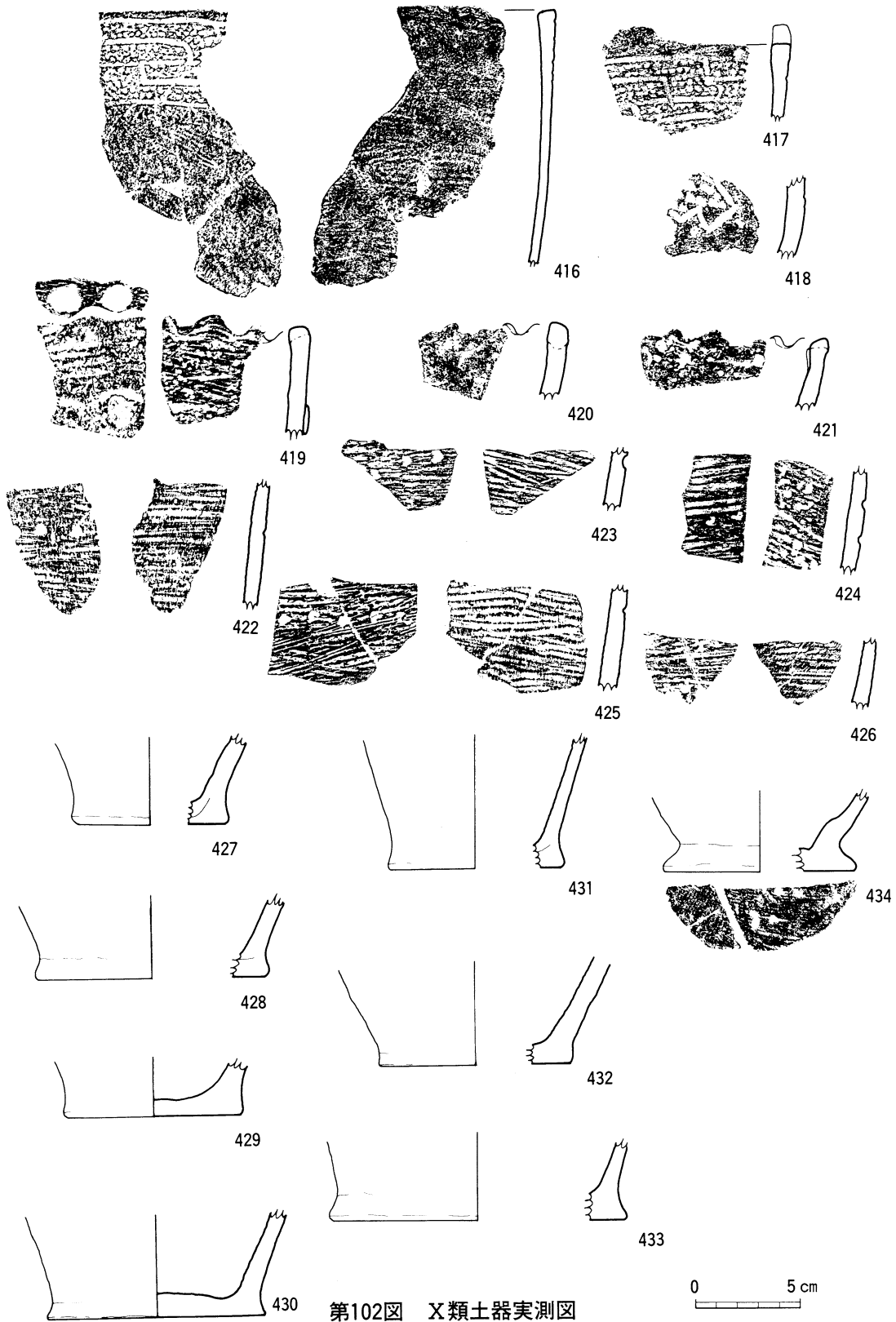
第99图 Ⅷ類土器実測図



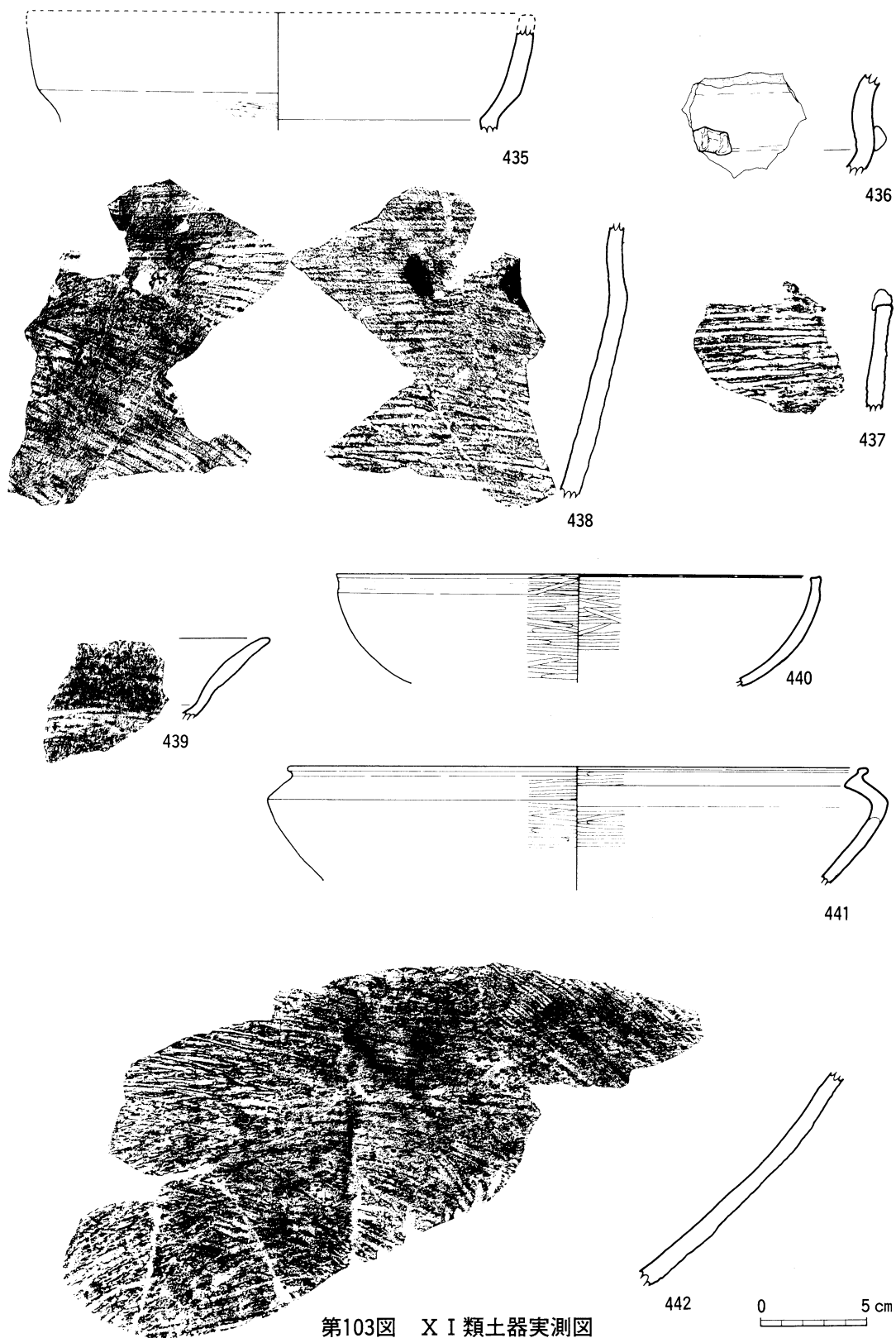
第100图 区類土器実測図



第101图 X類土器実測図



第102図 X類土器実測図



第103图 XI类土器实测图

第25表 出土土器一覽表 (9)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)mm	胎土	調整	焼成	色調
348	VII	104,859 104,834	C-2, III b	ク	口縁部	8	石小 礫 英粒	貝がら条痕	ク	内外 明 褐 色 明 褐 色
349	VII	104,779	C-2, III b	ク	胴部	8	ク	ク	ク	内外 明 褐 色 明 褐 色
350	VII	105,905	C-3, III a	鉢	胴部	7	石小 礫 英粒	貝がら条痕	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
351	VII	98,180	D-3, III b	ク	ク	5	ク	ク	ク	内外 明 褐 色 明 褐 色
352	VII	104,739	C-2, III b	ク	ク	5	ク	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
353	VII	103,720	D-3, III b	ク	ク	7	金小 雲 母 礫	ク	ク	内外 明 褐 色 明 褐 色
354	VII	104,939	C-2, III b	ク	ク	8	石小 礫 英粒	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
355	VII	104,783	C-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
356	VII	104,413	D-3, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
357	VII	105,840	C-3, III a	ク	ク	5	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
358	VII	104,659	C-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
359	VII	104,919	C-2, III b	ク	ク	6	ク	ナ デ	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
360	VII	104,979	C-2, III b	ク	ク	5	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
361	VII	104,148	E-3, III b	ク	口縁部	7	石小 礫 英粒	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
362	IX	104,959	C-2, III b	ク	ク	7	石 英	ク	良	内外 灰 褐 色 灰 褐 色
363	IX	105,014	C-2, III b	ク	ク	6	石小 礫 英粒	ク	ク	内外 灰 褐 色 灰 褐 色
364	IX	104,899	C-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 灰 褐 色 灰 褐 色
365	IX	105,389	C-2, III b	ク	胴部	7	ク	ク	ク	内外 暗 褐 色 明 褐 色
366	IX	105,512	3 T-IV a	ク	ク	8	小 礫 粒	ク	ク	内外 灰 褐 色 灰 褐 色
367	IX	104,839	C-2, III b	ク	ク	6	石 英	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
368	IX		D-4, ミゾIb	ク	ク	7	石 英	ク	ク	内外 灰 褐 色 灰 褐 色
369	IX	105,338	D-2, III a	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
370	IX	103,673	E-3, III b	ク	ク	6	ク	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
371	IX	105,065	D-2, III b	ク	ク	7	小 礫 粒	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
372	IX	104,270	E-2, III b	ク	ク	5	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
373	IX	104,940	E-2, III a	ク	ク	8	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
374	IX	105,129	C-2, III b	ク	ク	6	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
375	IX	105,509	C-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
376	IX	104,859	C-2, III b	ク	ク	8	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
377	IX	105,300	C-2, III a	ク	ク	6	石 英	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
378	IX	105,189	C-2, III b	ク	ク	7	石小 礫 英粒	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
379	IX	105,039	C-2, III b	ク	ク	7	石 英	ク	ク	内外 褐 色 褐 色
380	IX	103,613	E-3, III b	ク	ク	6	石 英	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
381	IX	104,558	C-2, II b	ク	ク	6	石小 礫 英粒	ク	ク	内外 灰 褐 色 暗 灰 褐 色
382	IX	104,115	E-2, III b	ク	ク	5	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
383	IX	105,009	C-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
384	IX	100,673	C-2, III b	ク	底部	9	ク	ク	ク	内外 灰 褐 色 明 赤 褐 色
385	IX	104,713	D-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
386	IX	104,909	C-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
387	IX			ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
388	IX	105,164	C-2, III b	ク	ク	7	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
389	IX	105,085	C-2, III b	ク	ク	10	ク	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
390	IX	104,879	C-2, III b	ク	ク	6	ク	ク	ク	内外 暗 灰 褐 色 暗 灰 褐 色
391	IX	104,625	C-2, III b	ク	ク	6	ク	ク	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
392	IX	104,635	C-2, III b	鉢	ク	10	石小 礫 英粒	ナ デ	良	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色
393	Y a	104,163 104,210	E-3, III b	ク	口縁部	29.5cm	石小 礫 英粒	ク	ク	内外 明 赤 褐 色 明 赤 褐 色
394	Y a	103,843 103,538	E-3, III b	ク	ク	7	石小 礫 英粒 石	貝がら条痕	ク	内外 明 灰 褐 色 明 灰 褐 色

第26表 出土土器一覽表 (10)

番号	種別	標高m	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)mm	胎土	調整	焼成	色調
395	Xa	104,028	E-3, III a	〃	口縁部	7	〃	貝がら条痕	良	内外 明褐 褐色
396	Xa	104,123	E-3, III b	〃	〃	8	〃	ナデ	〃	内外 灰褐 褐色
397	Xa	103,823	E-3, III b	〃	〃	6~9	〃	〃	〃	内外 灰褐 褐色
398	Xa	103,973 103,948	E-3, III b	〃	〃	30 cm 7	〃	〃	〃	内外 明暗 褐色
399	Xa	103,513 103,493	E-3, III b	〃	〃	7	〃	〃	〃	内外 明暗 褐色
400	Xa	103,958	E-3, III b	〃	胴部	6	〃	〃	〃	内外 灰褐 褐色
401	Xa	103,958	E-3, III b	〃	〃	7	〃	〃	〃	内外 灰褐 褐色
402	Xa	101,983	E-3, III b	〃	〃	6	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
403	Xa	103,523	E-3, III b	〃	〃	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
404	Xa	103,703	E-3, III b	〃	〃	8	〃	貝がら条痕	〃	内外 明赤褐 褐色
405	Xa	103,503	E-3, III b	〃	〃	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
406	Xa	103,548	E-3, III b	〃	〃	7	〃	〃	〃	内外 灰褐 褐色
407	Xa	103,673	E-3, III b	〃	口縁部	8	〃	ナデ	〃	内外 明赤褐 褐色
408	Xa	103,870	E-3, III b	〃	胴部	7	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
409	Xa	103,523	A-5, III a	〃	口縁部	15	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
410	Xa	104,923 104,058	E-4, III b D-3, III b	〃	〃	10	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
411	Xa	103,845	D-3, 5	〃	〃	9	〃	〃	〃	内外 明暗 褐色
412	Xa	103,523	A-5, III a	〃	〃	11~17	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
413	Xa		イモ-33, 5	〃	〃	8	〃	〃	〃	内外 暗暗 褐色
414	Xa	104,108	D-4, III a	〃	胴部	8	〃	〃	〃	内外 暗暗 褐色
415	Xa	104,290	E-2, III b	〃	〃	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
416	Xa	104,113 104,073	E-3, III b	〃	口縁部	3~8	石小礫 英粒	貝がら条痕	〃	内外 暗暗 褐色
417	Xa	104,023	E-3, III b	〃	〃	4~8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
418	Xa		E-2, 2	〃	胴部	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
419	Xa	104,945	E-2, III b	〃	口縁部	9	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
420	Xa	104,175	D-2, III b	〃	〃	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
421	Xa	104,480	E-2, III b	〃	〃	9	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
422	Xa	105,884	C-2, III b	〃	胴部	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
423	Xa	104,829	C-2, III b	〃	〃	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
424	Xa	104,658	C-2, III b	〃	〃	7	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
425	Xa	104,690 104,788	C-2, III b	〃	〃	8	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
426	Xa	104,849	C-2, III b	〃	〃	6	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
427	Xb	104,400	E-2, III b	〃	底部	7.7cm 10	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
428	Xb	104,155	E-2, III b	〃	〃	11.6 〃 10	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
429	Xb	104,378	E-3, III b	〃	〃	8.6 〃 6	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
430	Xb		C-7-17	〃	〃	10.5 〃 11	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
431	Xb	104,408	E-3, III b	〃	〃	8.5 〃 11	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
432	Xb	104,110	E-2, III b	〃	〃	9.2 〃 11	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
433	Xb	103,713 103,923	E-3, III b	〃	〃	14.3 〃 13	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
434	Xb	103,940	E-2, III b	鉢	底部	9.3 〃 11	石小礫 英粒	貝がら条痕	良	内外 明赤褐 褐色
435	Ma		D-5, III下	深鉢	口縁部	24 〃 11	〃	ナデ	やや軟弱	内外 明赤褐 褐色
436	Ma		イモ穴 58-1	〃	頸部	9	〃	ナベがら条痕	良	内外 明赤褐 褐色
437	Ma	104,470	E-1, III b	〃	口縁部	6	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
438	Ma	103,453 103,143	F-4, III b	〃	頸部	9	〃	貝がら条痕	やや軟弱	内外 明暗 褐色
439	Mb		Dミゾ6	浅鉢	口縁部	7	〃	ヘラ研磨	良	内外 明赤褐 褐色
440	Mb	103,083 103,188	E-4, III b	〃	〃	23 cm 4	〃	〃	〃	内外 黒褐 褐色
441	Mb	104,390	E-2, III b	〃	〃	27.5 〃 5	〃	〃	〃	内外 明赤褐 褐色
442	Mb	104,753 104,733	D-3, III b	〃	胴部	8	〃	貝がら条痕 ヘラ研磨	〃	内外 明赤褐 褐色

(2) 石器

第Ⅲ b層出土の石器を取り扱っている。石器の分布については第97図に示す。

出土している石器の種類は、石鏃・スクレイパー・加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・石核・刃部磨製石器・磨製石器片・石斧・磨石・敲石・凹石・擦痕のある礫・石皿・台石・軽石製品である。

A 石鏃 (第102図 433)

Ⅲ b層出土の石鏃は433一点のみである。頁岩製の打製石鏃で、抉りのない平基の三角鏃である。

B スクレイパー (第102図 434)

434は主要剥離面から連続した剥離で刃部を作出したスクレイパーである。黒曜石 a (V層の分類に従う。) 製である。

C 加工のある剥片 (第102図 435~436)

435は土坑9内より出土した加工のある剥片である。黒曜石 b 製であるが、先端部に数回の剥離を施している。土坑9内からは他に黒曜石の小粒が数点出土している。436はチャート製であるが、三角形の頂部に二次加工を施すところは、435に類似している。

D 使用痕のある剥片 (第102図 437・438)

437・438は黒曜石 a の剥片である。側縁部に微細な刃潰れが認められ、使用痕と考えられる。

E 石核 (第102図 439)

439は黒曜石 a の円礫を素材とした石核である。作業面以外はすべて礫皮面(自然面)が残されている。上面の平坦部を打面とし、はじめに左側部から作業を行い、次に前面から剥離を行っている。

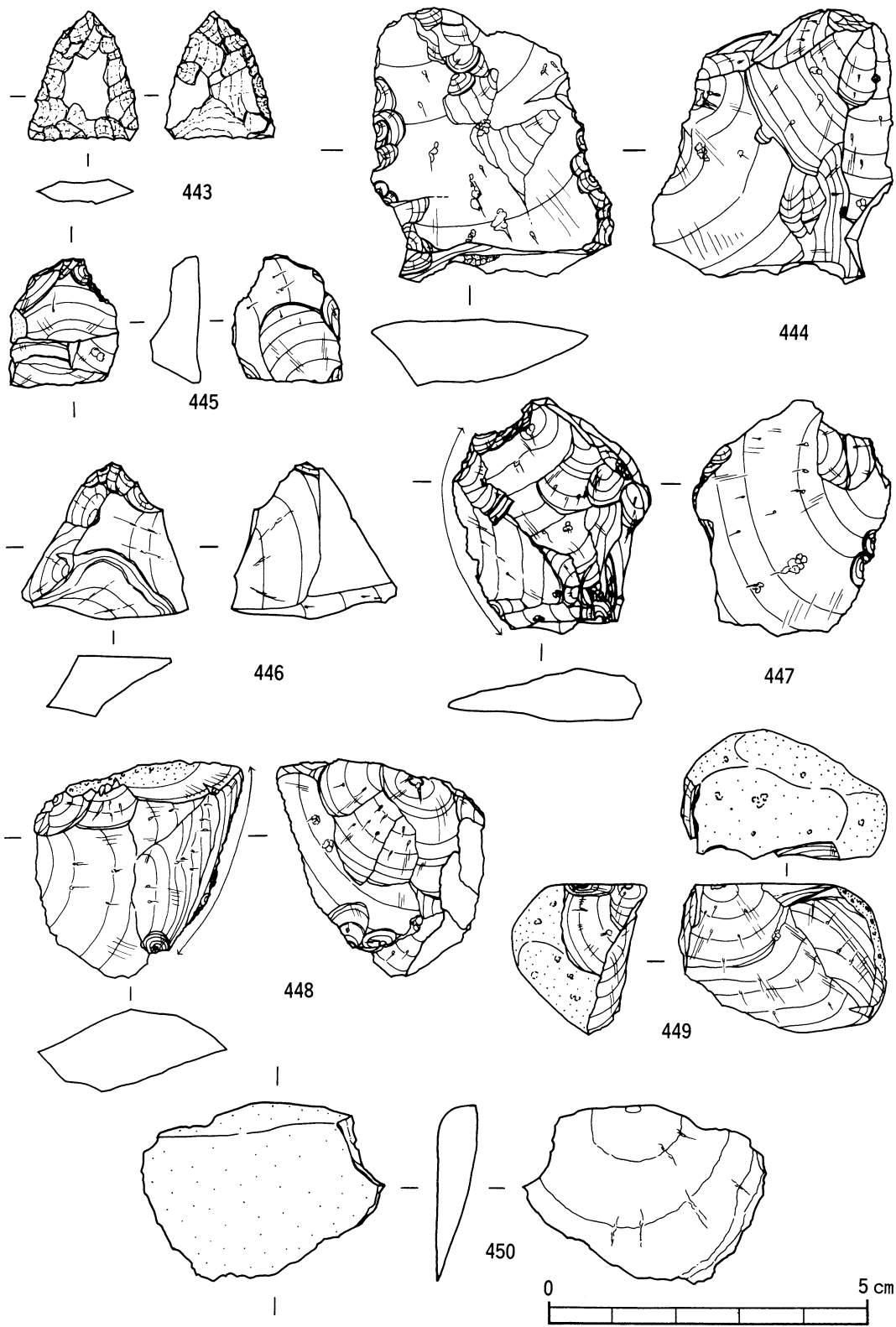
F 剥片 (第102図 440)

440はホルンフェルスの剥片である。使用痕は認められない。

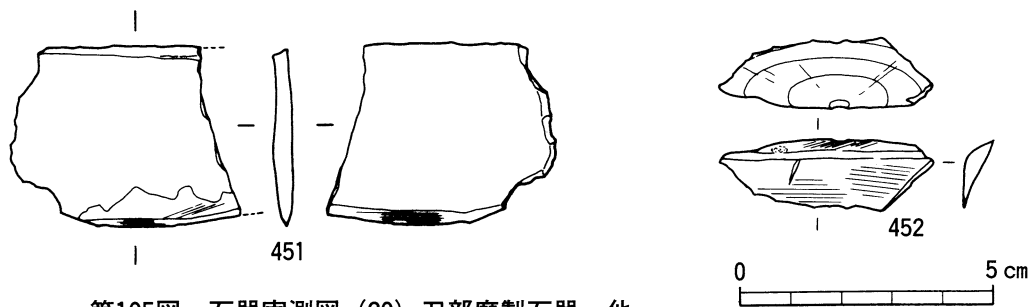
その他、Ⅲ層からは60点の剥片が出土している。ここで上記の利器8点を含めた68点について、利用された石材をまとめると以下のようなになる。(黒曜石の分類についてはV層で示した通りである。)

黒曜石	_____	56点(82.3%)
a	38点
b	18点
チャート	_____	2点(2.9%)
頁岩	_____	5点(7.4%)
石英	_____	5点(7.4%)

V層に比べて、石材の種類が減り、またチャートの量が極端に少なくなっている。逆に黒曜石については増加している。



第104図 石器実測図 (19) 石鏃・スクレーパー 他



第105図 石器実測図 (20) 刃部磨製石器 他

G 刃部磨製石器 (第103図 441)

441は厚さ約3mmのうすい剥片の縁辺を研磨し、刃部を作り出したものである。片面は刃部より少し上から一度研磨して表面の凹凸を整えた後、角度をつけてさらに刃を研ぎ出している。裏面は刃部のみを研磨である。擦痕が観察でき、研磨の方向は刃部と平行である。左側部は整形剥離されているが、左下は新しい欠けである。研ぎ出された刃は磨耗して丸くなっており、使用されたことがうかがえる。右半分は折れており、全体の形状は不明である。

類例はあまり知られていないが、形態が似ているものとしては、末吉町宮之迫遺跡で「石包丁状石器」として報告されているものがある。中期から後期の包含層から7点出土しており、剥片を利用し、研磨によって刃部を作出しているところは共通しているが、宮之迫遺跡のものは正面・裏面も全面研磨によって作りあげられている。また鹿児島市草野貝塚からは、「板状磨製石器」として報告されているものがある。時期は後期市来式時期およびその前後型式時期とされている。研磨により砂岩を偏平な板状に仕上げ、側縁が刃状をなしている。しかし刃器とするには側縁が鈍く、報告書では、「一応、砥石としての位置づけを図りたい。」とされている。

H 磨製石器片 (第103図 442)

442は全面を丁寧に研磨された石器の破片である。磨製石斧の破片であろうか。

I 石斧 (第104図 443～446)

443は撥型を呈する大型の偏平打製石斧である。長さは24.4cm、刃部近くの最大幅が12.1cmである。柄を装着すると考えられる基部付近は、特に丁寧に剥離を行い、若干の抉りを付けている。石材は粘板岩で、全体に酸化鉄がさび状に付着している。444は有肩の偏平打製石斧である。基部にくびれを整形加工し、刃部は比較的細かい剥離によって、直線的に仕上げている。使用による歯こぼれも観察される。基部及び両側縁の一部を欠損しており、原形はもう少し幅が広がったと想定される。445は打製石斧で、先端が折れており全体の形状は明らかでない。横剥ぎの剥片に、両面から整形剥離を行っている。446は偏平な磨製石斧である。刃部しか残っていないが、整形剥離の後、研磨により鋭い刃部を作り出している。研磨は全周に渡り、剥離痕が薄くなっている。444から446は石材にホルンフェルスを使用している。

J 磨石類 (第105図 447～457)

磨石、敲石、凹石の類を一括して取り上げる。12点出土している。

(a) 磨石・敲石 (第105図 447～450)

447は両面を磨面として使用し、側面も全周に渡って敲打や磨滅で面が形成されている。V層で分類したⅡ-A類に相当する。448は半欠しているが、長楕円の形状が想定され、主軸と磨面のカーブの方向がずれるタイプのものである。平坦面も側面もすられているが、側面は敲打にも使用されている。これもⅡ-A類に相当する。449は花崗岩であるが磨面として一面使用され、非常に滑らかで光沢のある面が形成されている。側面は敲打痕が著しく、表面とは対照的な面が作られている。Ⅱ-B類に相当する。450は径5 cm足らずの小型磨石・敲石である。溶結凝灰岩製である。両面が磨面、そして側面は全周敲打で使用され、ほぼ垂直に面が形成されている。V層からも同じ石材で小型のものが出土しており、特殊性がうかがえる。Ⅱ-A類に相当する。

(b) 磨石 (第105・106図 451～453)

451は球形に近い花崗岩を利用したもので、風化で一部剝落しているが一面に磨面が認められる。452はやや湾曲した礫の片面を磨面としている。453は風化のため磨滅の痕跡がはっきりと認められないが、礫の形状から磨石として使用されたと考える。

(c) 敲石 (第106図 454)

454は小型の円礫を利用した敲石である。平坦面には両面とも中央部に細かな敲打痕が観察される。側面も使用されているが、面が形成されるまでには至らず、一部集中する箇所がある。

(d) 凹石 (第106図 455～457)

455は表裏面とも中央に敲打痕が集中した凹石である。特に表面は平坦な面が広いいためよく使われ、深い凹みを生じている。また裏面には敲打痕に重なって直線的な溝状の凹みが2～3条観察される。何かの端部を研磨あるいは刃潰しするのに使用されたとも考えられる。456はやや小型であるが、一面のみ凹みを生じている。457は独特の形状をしており、素材は球形の円礫を利用したと考えられるが、上面は敲打により広く平坦な面が作られ、その中央に敲打痕が集中し凹みを生じている。またその反対側も敲打されており、素材の形状(球形)を残しているが、浅い凹みを生じている。

K 擦痕のある礫 (第106図 458)

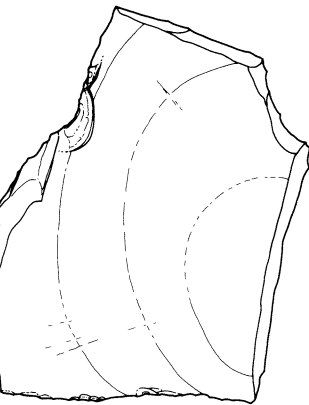
458はホルンフェルスの円礫の前面に、擦痕が残るものである。40度ほど傾斜した前面の長さ4 cm・幅2 cmの範囲に、細かく浅い刷毛目状の擦痕が縦方向に無数に観察される。その他の部位には擦痕はみられない。底面は平坦で表面も滑らかであり磨面とも考えられるが、自然のものと判別がつかない。石器の用途についても全く見当がついていない。

L 石皿 (第107図 460～463)

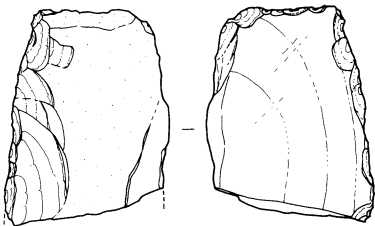
石皿は4点出土している。分類はV層に従う。



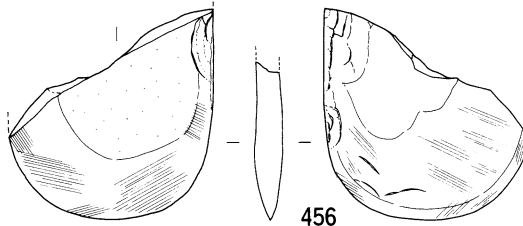
453



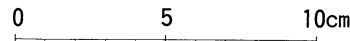
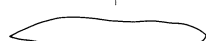
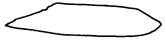
454



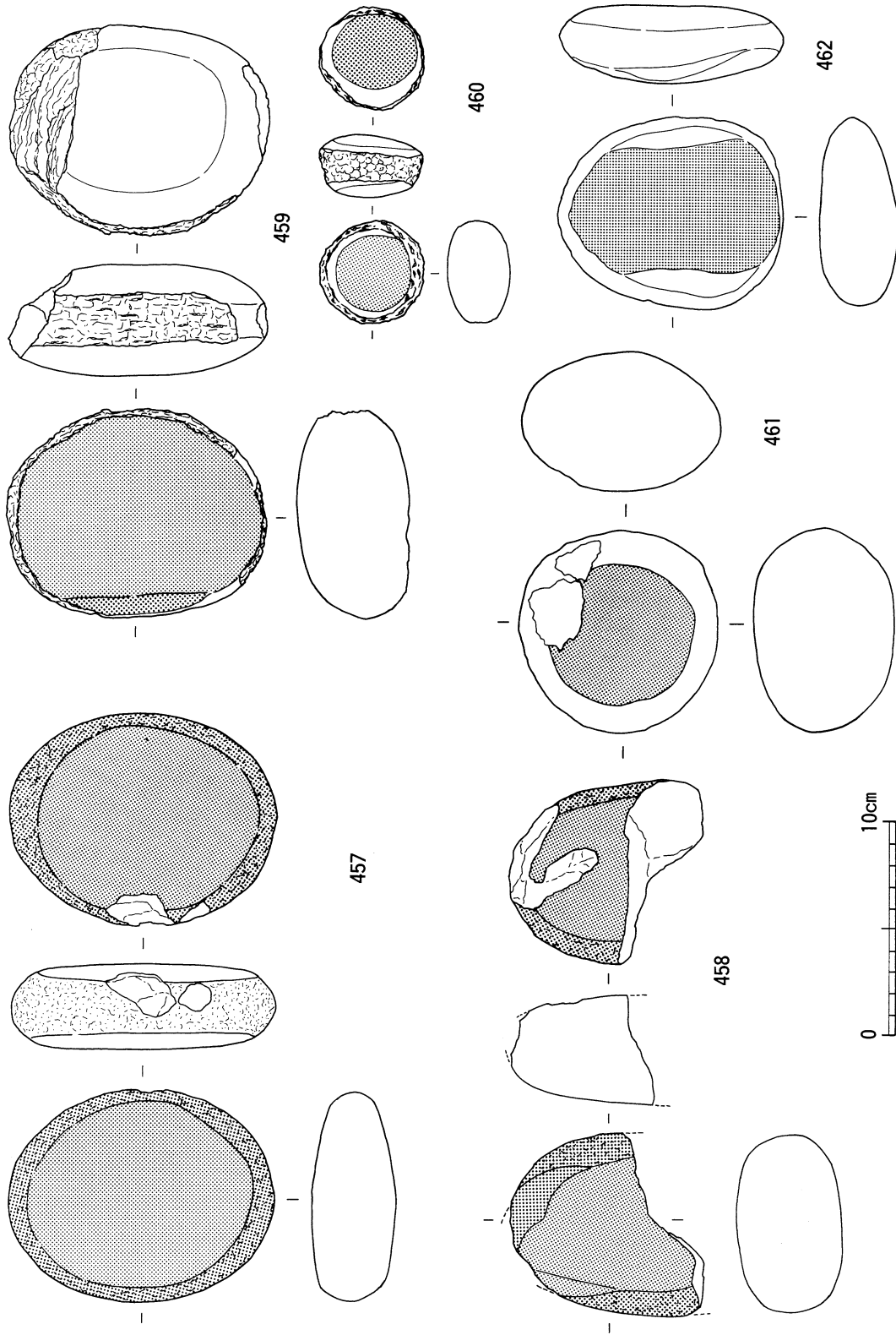
455



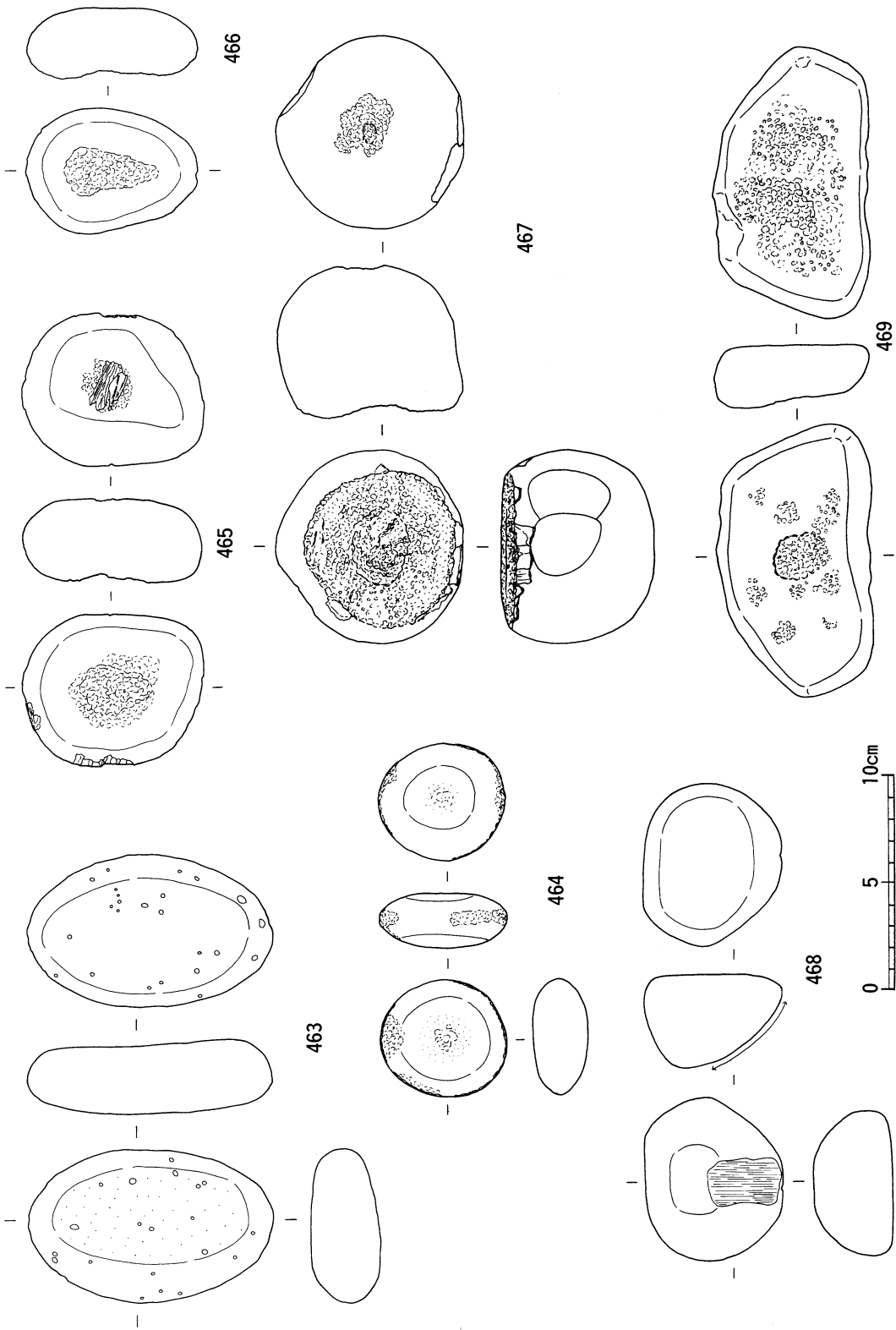
456



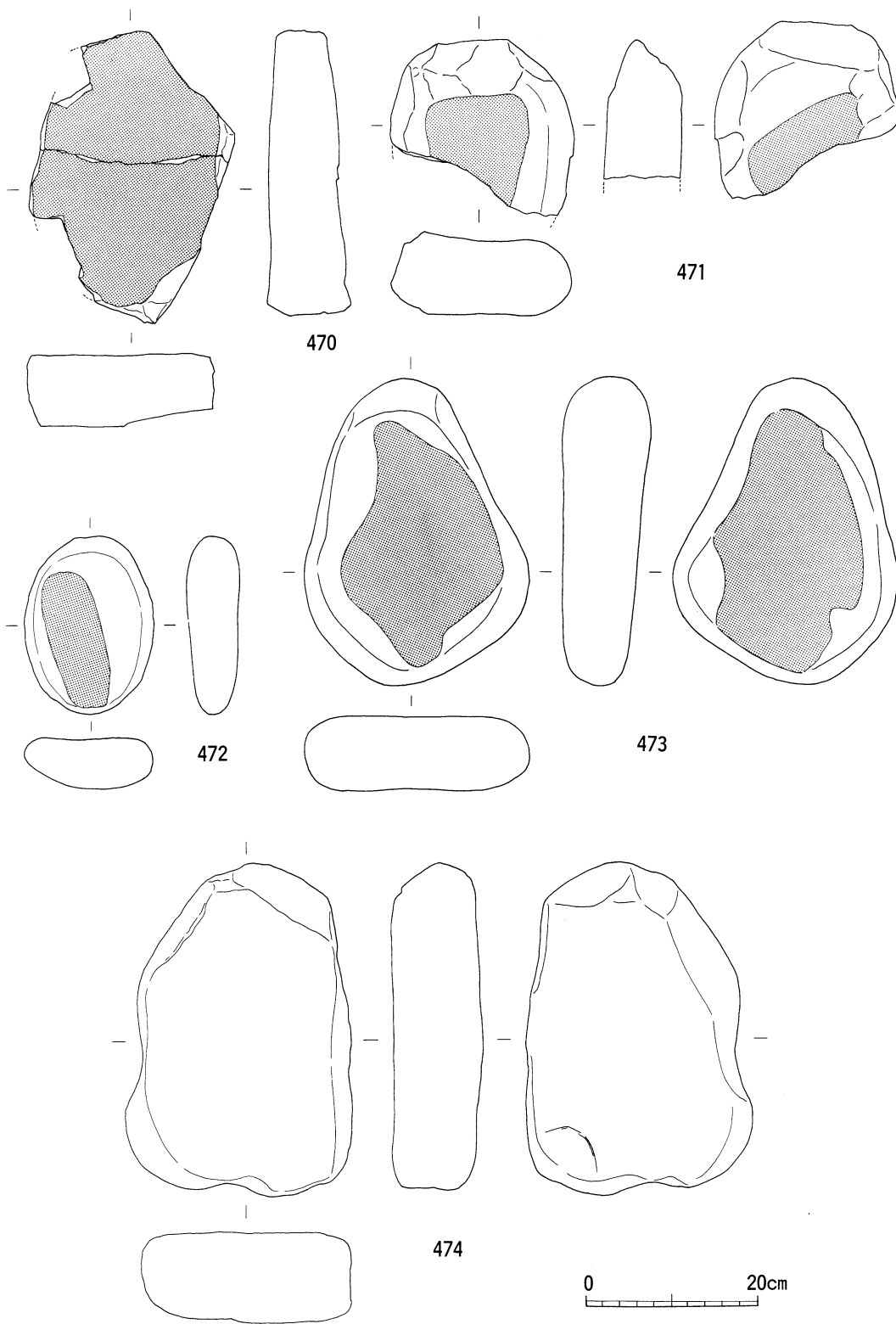
第106图 石器实测图 (21) 石斧



第107图 石器实测图 (22) 磨石類一



第108図 石器実測図 (23) 磨石類—2・擦痕のある礫 他



第109図 石器実測図 (24) 石皿・台石

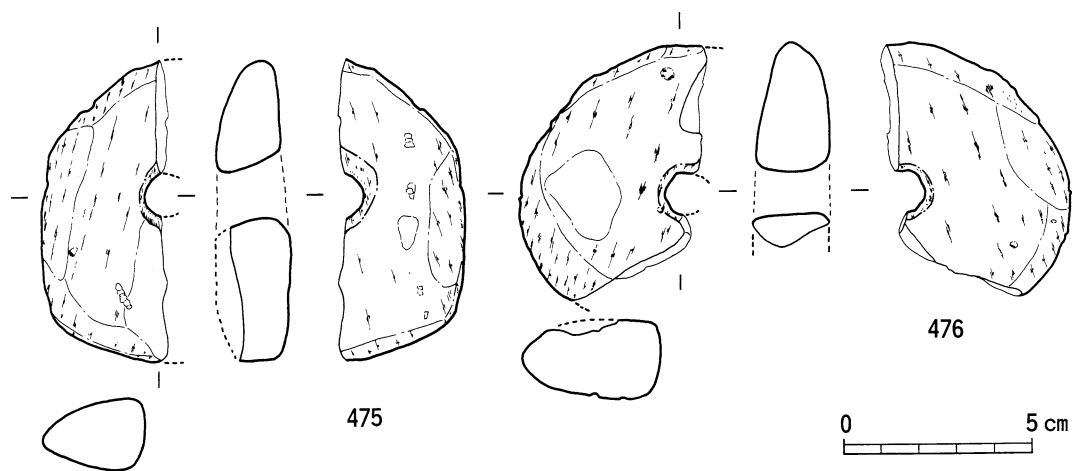
460は安山岩の偏平な角礫を利用した石皿である。二つに割れた状態で出土したが、接合部のあたりがやや盛り上がり、上半部と下半部にそれぞれ浅い皿状の凹みを持つ。Ⅱ-A-a類に相当する。461は厚みのある花崗岩の自然礫を利用している。表裏面とも使用され、浅い凹みを生じている。半欠しており風化による剥落もある。Ⅱ-B-a類に相当する。462はホルンフェルスの大型の自然礫を利用している。自然の凹みを生かして、作業をしている。Ⅱ-A-a類に相当する。463は厚みのある花崗岩を利用し、表裏面とも使用されているが、どちらも凹みは生じていない。Ⅱ-B-b類に相当する。

M 台石 (第106図 459、第107図 464)

459は小型で偏平な自然礫に、著しい敲打痕が残されているものである。表裏とも使用されているが、一部には敲打が集中し浅い凹みを生じているところもある。形状から台石に分類した。464はV層でも多く出土しているタイプの台石である。花崗岩の大型の自然礫を利用しており、風化のため使用痕は明らかではない。重量は17.9kgである。

N 軽石製品 (第108図 465・466)

465・466は軽石を研磨することによって偏平に整え、周縁部をほぼ円形に調整し、中心部に孔を穿ったものである。周縁部の調整は小さな面取りをしながら行われている。孔は両面から穿たれている。どちらも直径が約8cm、厚さも2cm前後とほぼ同じ大きさであり、孔の径も約1cmと共通している。紐ずれ等は観察されてない。465はⅢ層出土であり466は表層出土であるが、同じくⅢ層からの攪乱と考えられる。



第110図 石器実測図 (25) 軽石製品

第27表 出土石器 一覧表(5)

* () 内は欠損品の最大値

遺物番号	器 種	出土区	層位	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	注記番号	備 考
433	打製石鏃	C-5	Ⅱ	頁 岩	2.00	1.75	0.40	1.16	1391	耕作土に近い土
434	スクレイパー	D-2	Ⅲ b	黒 曜 石	4.30	3.8	0.10	17.26	9238	
435	加工のある剥片	E-2	Ⅲ b	黒 曜 石	2.00	1.7	0.75	3.0	土坑9-1	
436	加工のある剥片	E-2	Ⅲ b	チャート	2.50	2.6	9.50	5.27	11245	
437	使用痕のある剥片	E-3	Ⅲ b	黒 曜 石	3.70	3.15	0.85	11.57	9060	
438	使用痕のある剥片	D-5	Ⅲ b	黒 曜 石	3.40	3.3	1.30	11.31	5042	
439	石核	E-2	Ⅲ b	黒 曜 石	2.40	3.25	2.15	15.39	7462	
440	中型剥片	E-3	Ⅲ b	ホルンフェルス	4.00	5.7	0.90	25.0	8904	
441	刃部磨製石器	E-3	Ⅲ b	ホルンフェルス	3.60	(4.6)	0.40	9.16	8818	半欠
442	磨製石器片	A-7	Ⅲ a	頁 岩	1.40	4.2	0.60	2.32	—	磨製石斧の破片か
443	打製石斧	C-5	Ⅲ a	粘 板 岩	24.4	12.1	2.0	495.0	3654	
444	打製石斧	E-4	Ⅲ b	ホルンフェルス	12.5	9.9	1.4	235.0	4157	
445	打製石斧	E-4	Ⅲ b	ホルンフェルス	7.6	5.6	1.1	63.0	石742	
446	磨製石斧	C-5	Ⅲ b	ホルンフェルス	5.2	6.6	0.9	60.0	3969	
447	磨石・敲石	D-2	Ⅲ a	安 山 岩	12.7	10.1	4.0	803.0	3661	
448	磨石・敲石	D-5	Ⅲ b	安 山 岩	(9.1)	(8.5)	(5.0)	(435)	3989	
449	磨石・敲石	3 T	Ⅳ a	花 崗 岩	12.4	9.8	5.3	955	541	
450	磨石・敲石	E-2	Ⅳ	溶結凝灰岩	5.0	4.9	2.9	93	11508	
451	磨石	D	Ⅲ b	半花崗岩	9.5	9.6	6.7	775	9969	
452	磨石	C-4	Ⅲ b	安 山 岩	10.7	9.0	3.7	520	石932	
453	磨石	D-2	Ⅲ b	安 山 岩	11.6	7.3	3.2	315.0	石2306	
454	敲石	E-3	Ⅲ b	砂 岩	6.0	5.5	2.6	133	8903	
455	凹石	E-5	Ⅲ a	ホルンフェルス	8.6	7.2	3.8	380	石5606	
456	凹石	E-3	Ⅲ a	礫 岩	8.2	5.9	3.2	230	石4605	
457	凹石	D-5	Ⅲ a	ホルンフェルス	9.0	9.2	7.3	915	石3869	
458	擦痕のある礫	E-2	Ⅲ a	ホルンフェルス	6.5	7.7	4.5	305	8432	
459	小型台石	C-2	Ⅲ a	ホルンフェルス	7.5	12.9	3.0	445	石1930	
460	石皿	C-2	Ⅲ b	安 山 岩	33.7	22.6	8.2	9.37 kg	石2301 石2302	2点接合
461	石皿	B-5	Ⅱ	半花崗岩	18.7	20.9	9.4	5.25 kg	3165	
462	石皿	E-2	Ⅲ b	ホルンフェルス	20.5	14.9	5.9	2.82 kg	石4302	
463	石皿	D-5	Ⅲ b	花 崗 岩	35.3	25.9	8.7	12.65kg	石843	
464	台石	A-3	Ⅲ b	花 崗 岩	38.3	26.3	10.4	17.90kg	石877	
465	軽石製品	E-2	Ⅲ b	軽 石	8.0	(3.3)	2.0	(11.44)	11220	
466	軽石製品	D-3	I	軽 石	(6.7)	(4.8)	2.0	(14.11)	—	

(3) 層不明の石器

ここでは表層（I層）出土の石器と遺跡周辺で表採されたもの、また諸事情により、所属する層が不明な石器を取り扱う。石槍・剝片・石核・礫器・磨製石斧・磨石類・石皿・台石が出土している。

A 石槍（第111図 467）

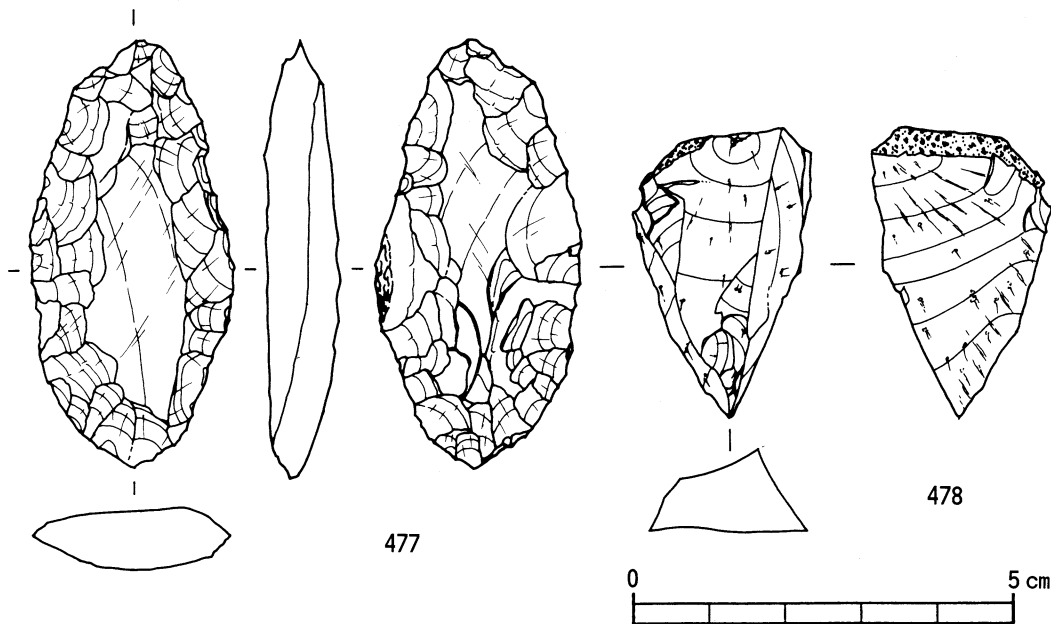
467は小型であるが、両面加工により木葉形に調整された石槍である。長さ5.6cm、幅2.7cm、厚さ1.0cmを計る。頁岩製である。中央部には素材剝片面が残っており、横長剝片を利用していることがわかる。石槍あるいは尖頭器としては、南九州では縄文早期にいくつかの類例が報告されている。指宿市岩本遺跡、鹿屋市上楠原遺跡、加世田市村原（柁ノ原）遺跡などで早期の土器とともに出土している。また鹿児島市横井竹ノ山遺跡は表土層から出土しているが、縄文早期・草創期あるいは旧石器時代に所属するものと報告されている。本例も表土層出土であるが、同様な時期に所属するものと考えられる。

B 剝片（第111図 468）

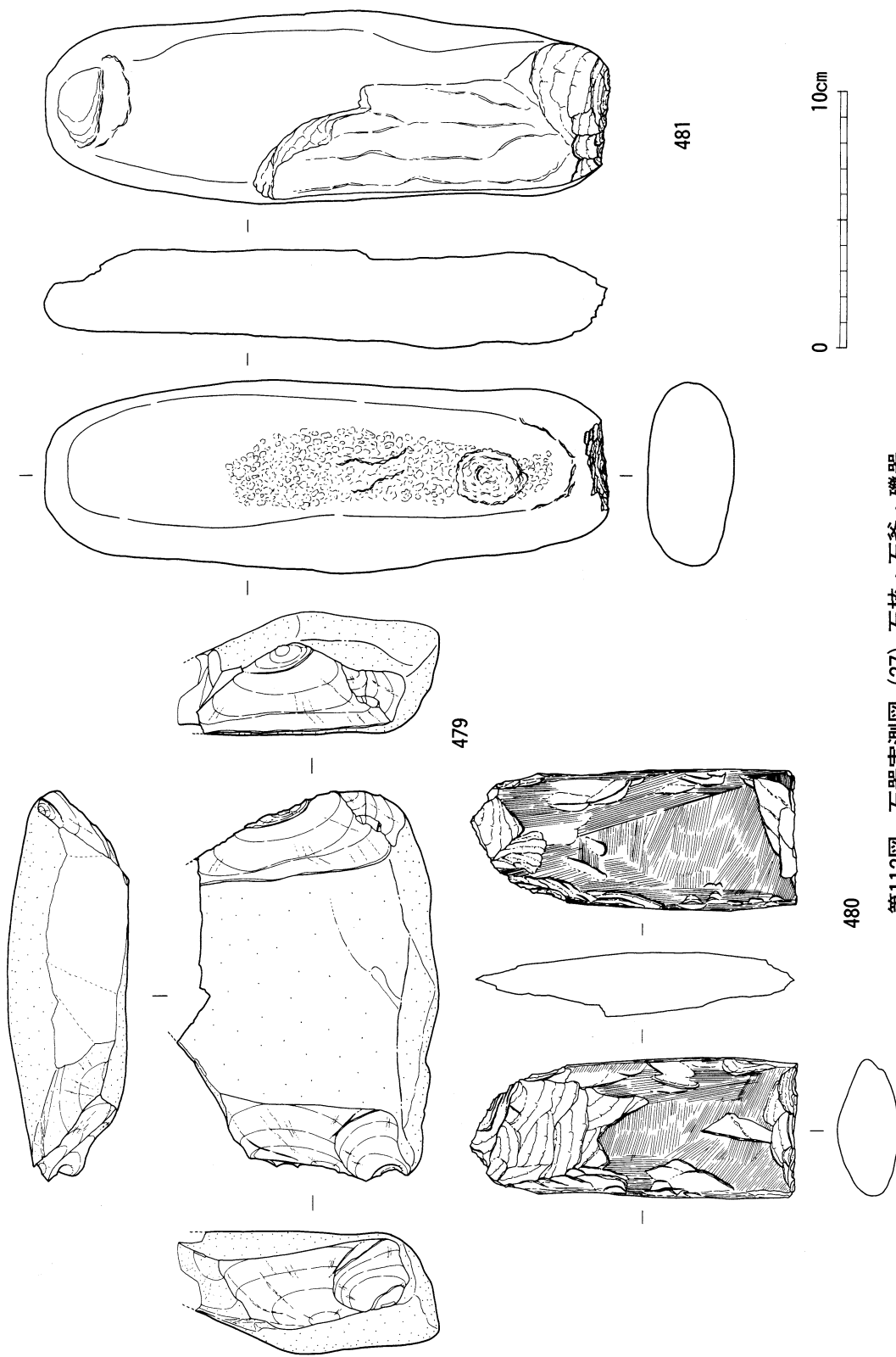
468は上面に自然面を残す黒曜石の剝片である。この剝片が剝離されるまでに、3回の剝片剝離が行われている。二次加工や使用痕などは観察されない。

C 石核（第112図 469）

469は扁平なホルンフェルスを利用した石核である。一部の古い剝離面を除いて、すべて上面を打面とし、60度ほどの角度をつけて作業を行っている。両端から剝離作業を行っているため、逆台形状を呈している。平安時代の溝状遺構の埋土から出土しており、縄文時代の包含層からの攪乱と考えられる。



第111図 石器実測図 (26) 尖頭器・剝片



第112图 石器实测图 (27) 石核·石斧·石器

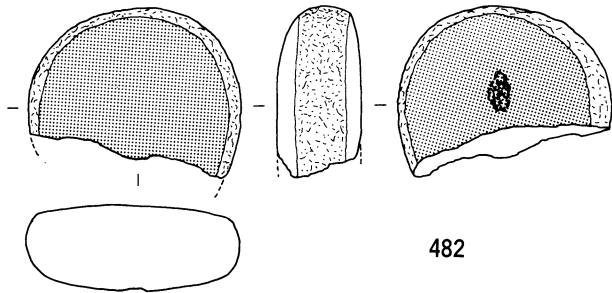
D 石斧 (第112図 470)

470は頁岩を素材とした磨製石斧である。欠損品で刃部は失われているが、整形剥離の後、研磨を施し仕上げを行っている。全面に擦痕がよく残っている。

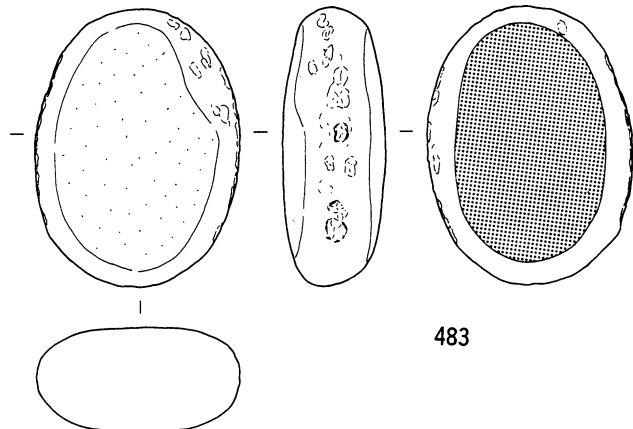
E 礫器 (第112図 471)

471はやや幅ひろで棒状の自然礫の端部を両面から粗い剥離を行い、刃部を作出している。この礫器としての機能のほか、片側の平坦面には広く敲打痕が残り、一部には径2cmほどの

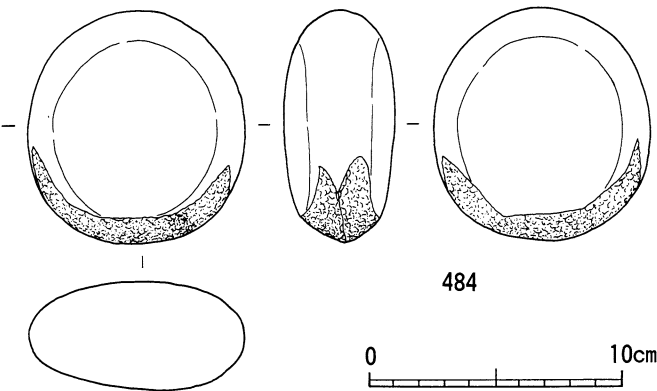
凹みも生じている。この敲打痕や凹みは、この石を台石として使用した結果なのか、あるいは手に持って敲石として使用した結果なのか、二通りの使用法が考えられる。なお裏面の大きな割れは、原材を薄くしようとして意図的に横から剥離されたものではなく、礫器として使用中に石の目に沿って割れたことが考えられる。



482



483



484

F 磨石類 (第113図 472~474)

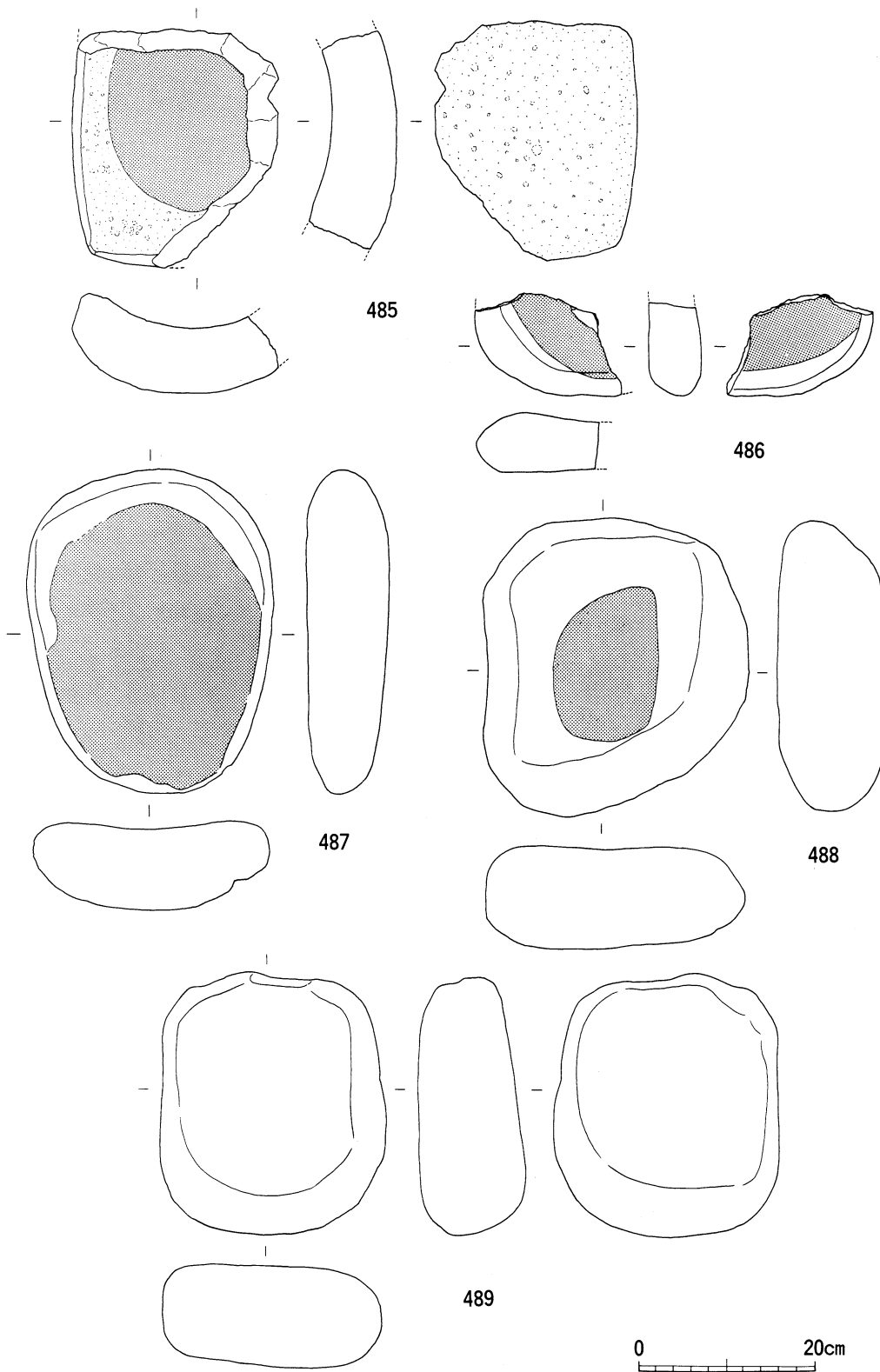
(a) 磨石・敲石・凹石

472は磨面として表裏両面とも使用し、片面には浅い凹みを持つ。側面も敲打やスリで全周に渡って使用され、面を形成している。欠損しているが、ほぼ円形を呈するものと想定される。V層の磨石類の分類に当てはめれば、I-A類に相当する。安山岩製である。

(b) 磨石・敲石

473は裏面には擦り痕が残り使用されていたことが確認できるが、表面は風化が激しく使用痕が確認できない。しかし、面の形状からおそらく使用されていたと考えられる。側面にはまばらに敲打痕が残る。II-B類に相当する。これも安山岩製である。

第113図 石器実測図 (28) 磨石類



第114図 石器実測図 (29) 石皿・台石

(c) 敲石

474は砂岩の円礫を利用し、側面の一部を敲石として使用している。両面から角度を付けて敲打していることから、その部分は平坦な面が二面合わさり、あたかもそろばん玉の側縁のような形状を呈している。

G 石皿 (第114図 475~478)

475は欠損しているが、丁寧に整形され深い皿状の凹みを持つ石皿である。整形は全面におよび、側面は直線的に面取りされ、裏面もきれいなボール状に整形されている。上面には縁が作られ、磨面は円形で深く凹んでいる。注ぎ口ははっきりしない。V層の石皿の分類に従うと、I-a類に相当する。安山岩製である。476も安山岩製で、両面使用され、表面には浅い凹みと注ぎ口を持っている。側辺は敲打整形されており、I-a類に相当する。477は大型の溶結凝灰岩を利用した石皿で、上面を広く磨面として使用し、手前に注ぎ口を持つ。縁は形成されていないが浅い凹みを持つ。手前がやや細くなる楕円形に敲打整形されている。I-a類に相当する。I-a類が3点続くが、整形され凹みを持つものには、やはり安山岩や溶結凝灰岩などの目が粗く比較的柔らかい石が適しているようである。478は花崗岩を利用したものである。平坦面の中央部に磨面があり、浅く凹んでいる。素材の花崗岩は厚みのある自然礫であり、II-B-a類に相当する。

H 台石 (第114図 479)

479は花崗岩製の台石である。風化のため使用痕ははっきりしないが、V層・III層で出土しているものと同じ形態である。

第28表 出土層不明石器 一覧表(6)

* () 内は欠損品の最大値

遺物番号	器種	出土区	層位	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量	注記番号	備 考
467	尖頭器	B-9	I	頁 岩	5.6	2.7	1.0	15.0g	—	
468	剥片	—	I	黒 曜 石	3.7	2.4	1.1	9.0g	イモ22-1	
469	石核	A-3	溝3	ホルンフェルス	15.2	10.3	4.8	(1.02)kg	石43	一部欠損
470	磨製石斧	—	—	頁 岩	12.6	5.3	2.3	200g	—	
471	礫器	A-6	I b	ホルンフェルス	22.0	7.3	3.5	968g	2243	
472	磨石・敲石・凹石	—	—	安 山 岩	(6.0)	8.5	3.3	(288)g	—	磨石分類I類Aに相当
473	磨石・敲石	E-1	I	安 山 岩	11.1	8.2	4.1	562g	—	磨石分類II類Bに相当
474	敲石	—	—	砂 岩	9.3	8.8	4.3	545g	—	
475	石皿	—	—	安 山 岩	26.9	23.2	7.5	(8.23)kg	—	石皿分類I類aに相当
476	石皿	—	—	安 山 岩	10.9	13.7	6.6	(1.79)kg	—	石皿分類I類aに相当
477	石皿	—	—	溶 結 凝 灰 岩	36.5	27.9	9.2	12.64kg	—	石皿分類I類aに相当
478	石皿	—	—	花 崗 岩	33.0	29.7	11.4	19.66kg	—	石皿分類II類B aに相当
479	台石	—	—	花 崗 岩	29.6	25.5	11.2	15.70kg	—	

第4節 小 結

縄文時代は、Ⅲ b層とⅤ層の2層に文化層が存在した。Ⅲ b層には縄文前期～晩期にかけての多岐にわたる時期の遺物包含層であった。遺物はC-2、D-2～4、C-5～7区に集中して分布していた。遺構には集石遺構2基が検出された。Ⅴ層は縄文早期の遺物包含層ではほぼ全域に土器や21基の集石遺構・石皿と磨石等集中する遺構が検出された。これら遺構・遺物の分布は、B～E-1～5区に集中していた。なお、この地区は小谷が形成された起伏のある地状を呈し、遺物の分布状況や出土状況、土器接合資料等により、元位置を留めず2次的に動いたものもあり、早期土器の型式別の層位的分離は困難であった。

集石遺構は、Ⅲ b層とⅤ層にそれぞれ2基、21基の計23基を検出したが基本的には同様な形態となる。Ⅴ層からの集石遺構を中心に述べることにする。個々の集石は握り拳大から幼児頭大の円礫・角礫等の安山岩、砂岩、頁岩等を10数個（集石遺構15等）から200個余り（集石遺構11等）を用いていた。形態をおおまかに分類すると、小範囲あるいは広範囲に平面的にまとまったもの（集石遺構1・2・5・6・8・13・15・18）、散在するもの（集石遺構3・7・9・10・14・16・17・21）、掘り込みを伴うもの（集石遺構4・12・19・20）等、3形態に分類された。なお、これら礫は熱を受け赤褐色化し脆くなっているものもあった。また周辺からは焼土や灰は見られないが、集石遺構11・20からは微量の木炭が観察された。形態による用途の違いについては、資料や根拠に乏しく今後の課題であるが、総合的に判断して調理用遺構としての性質のものであろう。

Ⅲ b層とⅤ層に出土する遺物には、土器と石器がある。

土器は、Ⅰ類～Ⅺ類に大きく11つに分類した。そのうちⅡ類土器が本遺跡の主体を占める土器群である。

Ⅰ類土器は、Ⅰ a類の円筒土器・Ⅰ b類の角筒土器の前平式土器である。

Ⅱ類土器は、石坂式土器である。口縁部が大きく外反する典型的なタイプはほとんどみられず、器面調整や文様は石坂式の文様そのものと言えるが、特にⅡ d類は口縁部が直行気味で、口唇部を平坦に仕上げて円筒形に近い形状を呈し、文様も簡素化する特徴的な一群の土器である。

Ⅲ類土器は、口縁部が直行し口唇部は平坦に仕上げ、櫛状施文具による引っかきによる綾杉文を施文する桑ノ丸タイプの土器に相当するものである。

Ⅳ類土器は、Ⅲ類と同様に口縁部が直行し口唇部は平坦に仕上げ、櫛状施文具で刺突や窠書きによる綾杉文を施文する下剝峰式タイプの土器群である。細かく a・b類と無文の3類に分類した。その中で、Ⅲ類・Ⅳ a類・Ⅵ b類土器については「桑ノ丸遺跡」、「下剝峰遺跡」をはじめ、近年大隅半島の「横尾遺跡」、「谷平遺跡」、「打馬平場遺跡」等の遺跡から同類の土器が増えつつあり、器形・文様等から石坂式土器や前平式土器との関連性を指摘したい。

Ⅴ類土器は無文土器の一群で縄文早期の土器である。

Ⅵ類土器は、太型・小型の山形押形文土器である。数量は少ない。

Ⅶ類土器は、Ⅶ a 類が塞ノ神式 A a 式土器、Ⅶ b が塞ノ神式 A b 式土器である。Ⅷ類土器は縄文前期の轟 B 式土器で荘貝塚出土土器に比定されよう。Ⅸ類土器は、縄文前期の曾畑式土器である。Ⅹ類土器は、縄文中期の阿高式土器系統に比定されるものから、後期の出水式・南福寺式・綾式土器類似の土器群である。Ⅺ類土器は、縄文晩期Ⅱ式相当の土器である。

石器には、石鏃をはじめスクレーパー、石斧、磨石、敲石、凹石、石皿、台石、軽石製品、石槍や石核等が出土した。

参 考 文 献

- 河口貞徳 「鹿児島県における貝殻腹縁条痕文土器について」鹿児島県考古学会紀要 4 号
西之表市埋蔵文化財報告書「下剝峰遺跡」西之表市教育委員会 1978年
鹿児島県埋蔵文化財報告書(7)「桑ノ丸遺跡」鹿児島県教育委員会 1977年
鹿屋市埋蔵文化財報告書(3)「横尾遺跡」鹿屋市教育委員会 1989年
鹿屋市埋蔵文化財報告書(8)「打馬平場遺跡」鹿屋市教育委員会 1988年
鹿屋市埋蔵文化財報告書(17)「谷平遺跡」鹿屋市教育委員会 1990年

第Ⅶ章 弥生時代

第1節 調査の概要

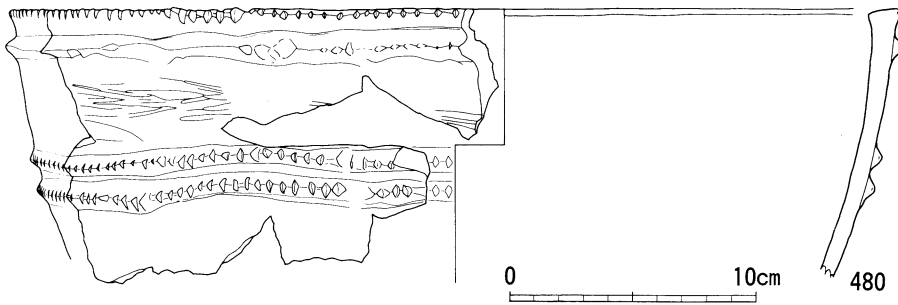
D-2区、Ⅲb層から弥生土器片が数点出土した。これらのうち1点はピットから出土しているが、接合でき、すべて同一個体と思われる。

1 出土遺物

弥生土器 (第115図 480)

480は甕形土器で、口縁部～胴部上半しか存在しない。胴部は開き、上半から口縁にかけてはわずかに内湾しながら立つものと思われる。口縁端と胴部上半にそれぞれ二条の断面三角形の刻目突帯をもち、突帯の刻みは二条同時に施される。突帯の付け根はナデであり、棒状の工具で横方向になでる場合もある。突帯の間は横方向のヘラミガキを施す。口唇部は平坦でやや内傾する。胎土には石英や砂粒を含み赤褐色を呈している。復元口径は36cmを測る。

この様な甕形土器は、鹿屋市内では榎木原遺跡の例がある。榎崎A遺跡では唯一、一箇体の出土であり、不明な点も多いが下城式土器系統のものである。持ち込み品と思われる。



第115図 弥生土器実測図

第Ⅷ章 古墳時代

第1節 調査の概要

Ⅲ a層において古墳時代相当の土器が数点出土した。うち1点は溝状遺構に伴うものである。なお遺構の番号はⅢ a層の通し番号である。

1 検出遺構

① 溝状遺構1 (第116図)

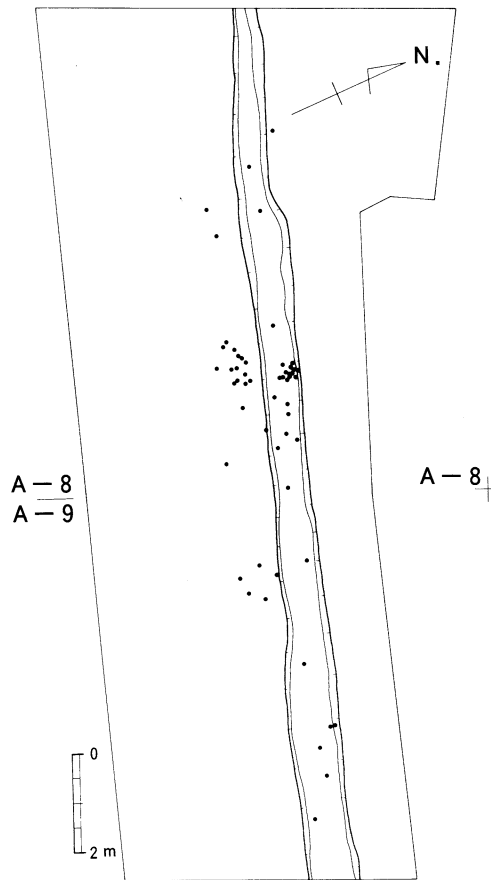
A-8・9区にはほぼ東～西方向の溝状遺構を検出した。長さ約17.6m、幅は広いところで約1.1m、狭いところでも50cmを測る。残りの深さが約20cmである。埋土は2層の黒色土と表土が混合した黒褐色土である。溝内から成川式土器の甕形土器、土師器、弥生土器の壺形土器の底部と思われるもののほか約50点の遺物が出土したが、主体は成川式土器が占めている。

出土遺物 (第117図 481、482)

成川式土器

(甕形土器)

481は胴部上半以上を欠損した甕形土器である。やや内湾しながら開く胴部を持ち、中空の脚台を張り付けている。上端に断面が半円形の貼り付け突帯をわずかにつける。胴部外面は縦方向のナデを脚台外面は横方向のナデを施す。胴部内面は上位に縦方向のナデを施し、底部付近は縦方向のケズリを施している。脚台内面は、脚台を貼り付ける際のへら先の痕跡が残り横方向のナデを施している。内外面とも黄褐色、明赤褐色を呈し、胎土には長石、角閃石、小石粒が含まれる。

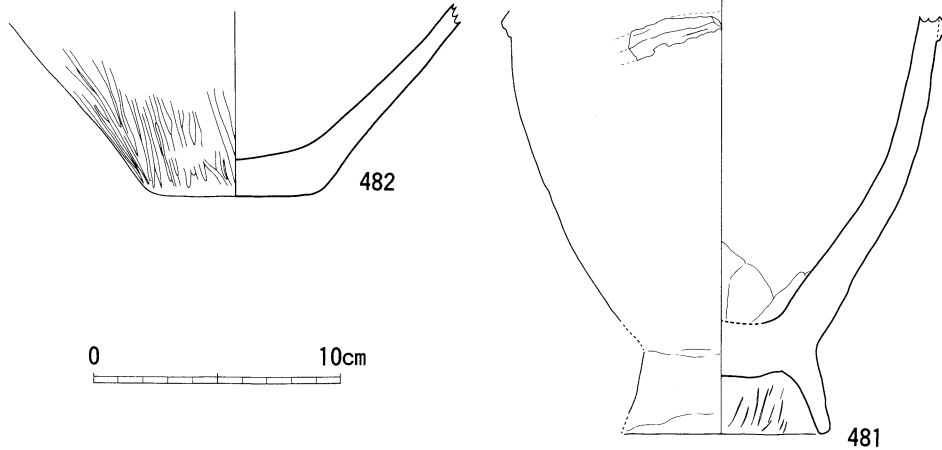


第116図 溝状遺構1 実測図

弥生土器

(壺形土器)

482は、壺形土器の底部と思われる。外面に縦方向のヘラミガキを施しているが、底面の調整は不明である。内面は底部付近にへら状の工具による不定方向のナデが、口縁部に向かって縦方向のヘラミガキが施されている。外面は暗赤褐色、内面は灰黄褐色を呈している。胎土には長石のほか5mm程度の小石粒や、細砂粒が含まれている。



第117図 溝状遺構1 出土遺物実測図

2 出土遺物 (第118図 483~485)

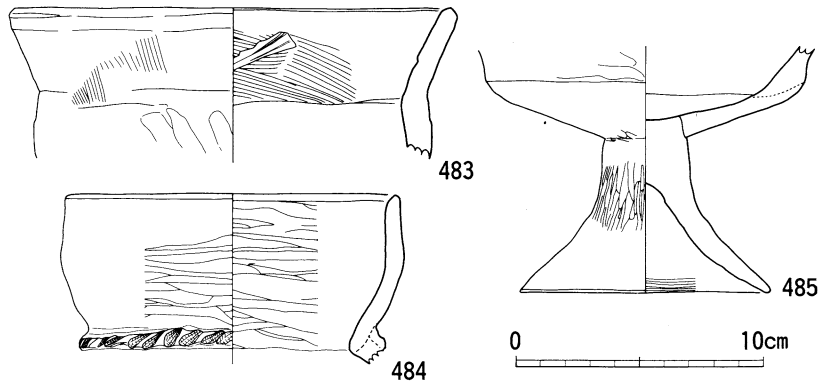
成川式土器

(甕形土器)

483はA-7区で出土した甕形土器の口縁部で、口縁部がくの字状に外反している。口縁外部は最初斜位の刷毛目調整を施し、その後横方向のナデを施している。内部も同様に、端部をつまむようなナデである。口唇部はわずかにくぼんでいる。胴部はほとんど残っていないが外面には左上りのケズリ痕が見られる。内面はナデである。外面は赤褐色を呈し、屈曲部分と口縁端部に黒色の煤が付着している。内面は灰黄褐色を呈している。胎土には、石英、長石ほか砂粒が含まれる。

(壺形土器)

484はC-2



第118図 古墳時代の土器実測図

区で出土した、壺形土器の口頸部である。口縁に向かって開きつつ、途中で直に立つ。頸部に刻目突帯をもち刻目には布状圧痕が見られる。内外面ともヘラミガキによって丁寧に調整されている。胎土には長石、石英ほか砂粒が少々含まれ、外面は明赤褐色、内面は黄褐色を呈する。復元口径は13.1cmを計る。

(高坏形土器)

485はA-8区で出土した高坏で、脚部が裾に向かって緩やかに開くものである。坏部は口縁が不明であるが、屈曲し、わずかに開きながら直線的に伸びるものと思われる。坏部外面には横方向のヘラミガキが、内面にはナデ調整が施されまた、脚部外面には縦方向のヘラミガキが成され、その端部を包むように横方向のナデ調整が施されている。脚部内面には工具を使用したナデ調整が成されている。胎土には長石、角閃石ほか細砂粒が含まれるが、脚部よりも坏部のほうに大きな粒子が含まれているようである。外面は明赤褐色を、坏部内面は黄褐色を、また脚部内面は暗黄褐色を呈している。

第Ⅸ章 平安時代

第1節 調査の概要

Ⅱ層およびⅢa層から調査区域全域において土師器（黒色土器を含む）・須恵器・滑石製品・焼塩壺・砥石など1万点を越す遺物が出土した。土師器は一部ではあるが紫ゴラ（貞観・仁和年間の開聞岳の噴出物）の上位から出土した。

これらの遺物の伴う遺構は後世の耕作等による削平でA～Cの各区はⅡ・Ⅲa層が部分的に存在せず、かなり破壊されていたが、周溝墓と思われる遺構5基、掘立柱建物2軒、平面形が円形状や楕円形状の遺構のほか多数のピットなどが検出された。

土師器の形態・調整法・底部の切り離し方、黒色土器の存在、紫ゴラ上位からの出土といったことから平安時代の中におさまるものと考えられる。

1 検出遺構（第119図）

遺構の検出作業は表土を剥取ったあと、Ⅱ層上面と、Ⅲa層上面、Ⅲb層上面で計3回行なった。イモ穴が多く、それによって切られている遺構も多かった。調査中、遺構名は検出面の平面形によったので、例えば「円形遺構」「楕円形遺構」というように抽象的になってしまった。「円形遺構」は全部で21基あり、このうち「円形11」「円形17」「円形20」はそれぞれ周溝墓1号・3号・4号である。

① 周溝墓

長径約2m、短径約1mの長楕円形もしくは略方形の土壌をもち、その周りに幅約50cmの溝を巡らす遺構が5基検出された。人骨の出土はなかったが福岡県や熊本県のこの時代の例からして土壌を主体部とする周溝墓であると考えられる。これに伴って土師器の坏・碗・小皿・甕などが出土した。

なお主体部および周溝の埋土は土壌リン分析を実施した。しかしながら、この分析では埋葬施設であるという結果は得られなかった。

周溝墓1号（第120、121図）

C-7区から検出され、「円形11」として調査したものである。C-8区にかかる部分ははっきりしなかった。

周溝は長径426cm、短径は270cmを残すが本来は400cm程はあったものと考えられ、ほぼ円形である。幅が広く120～190cmで、断面はなだらかにくぼんでいる。主体部は不定形で、長径140cm、短径が35～94cmを測る。主軸方向は北東-南西である。これも断面はなだらかにくぼんでいる。

約170点程の遺物が出土し、主体部からは土師器高台付碗が出土した。

1

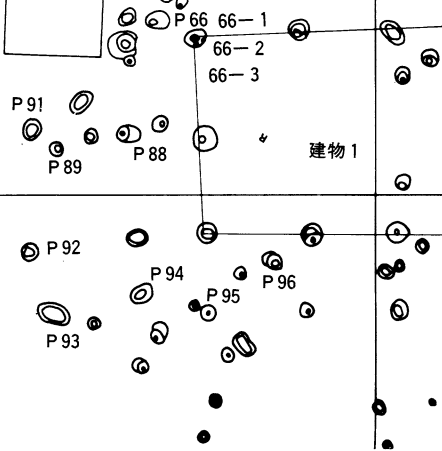
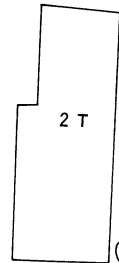
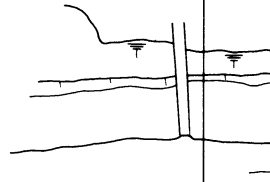
2

A

B

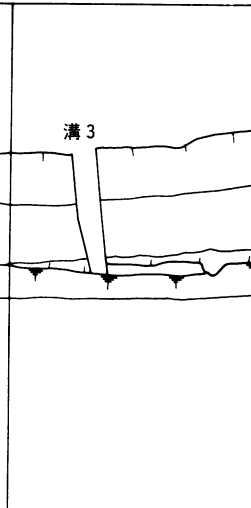
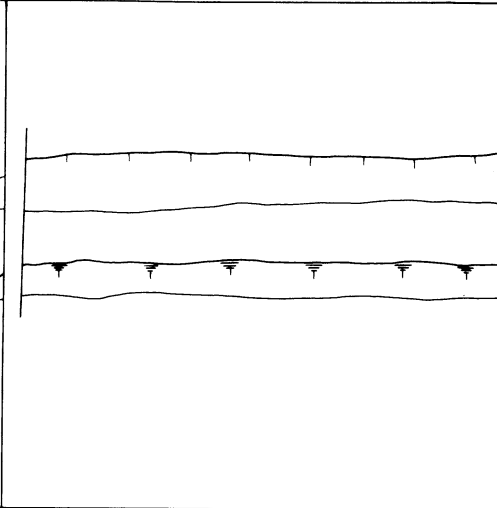
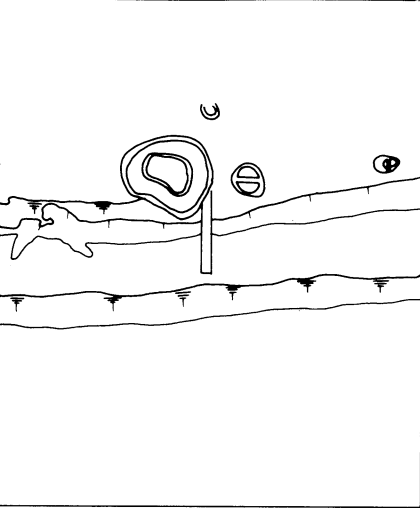
C

D

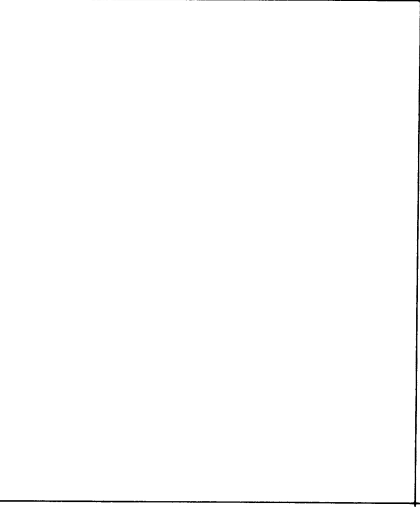


3

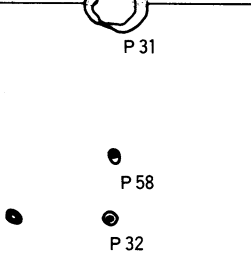
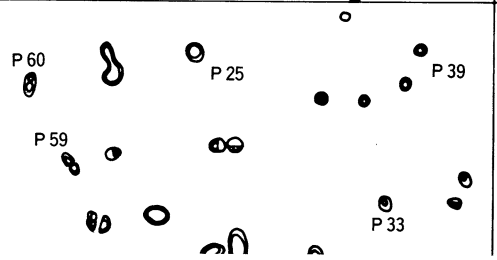
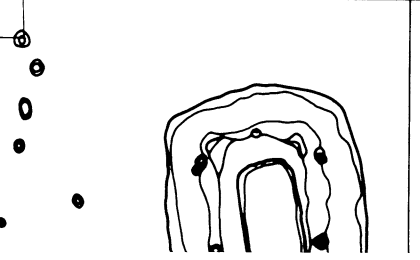
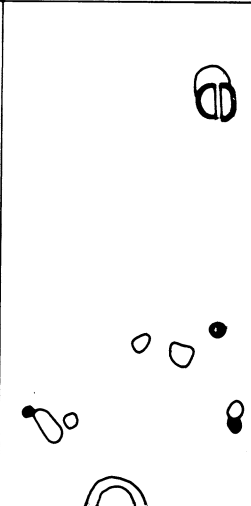
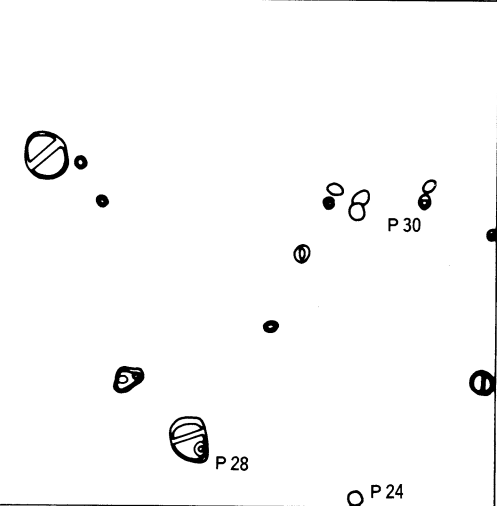
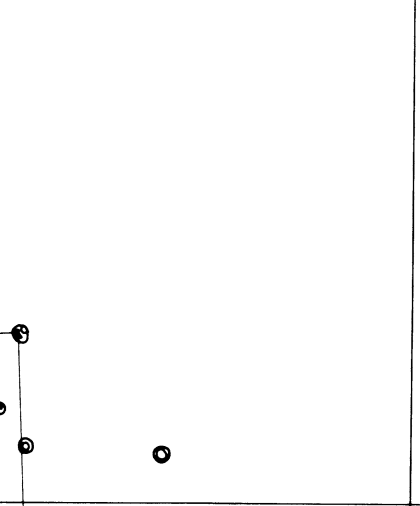
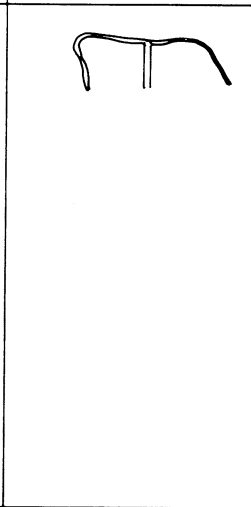
4

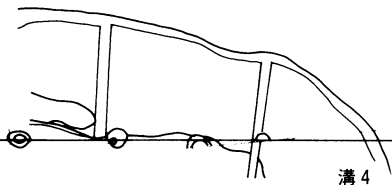
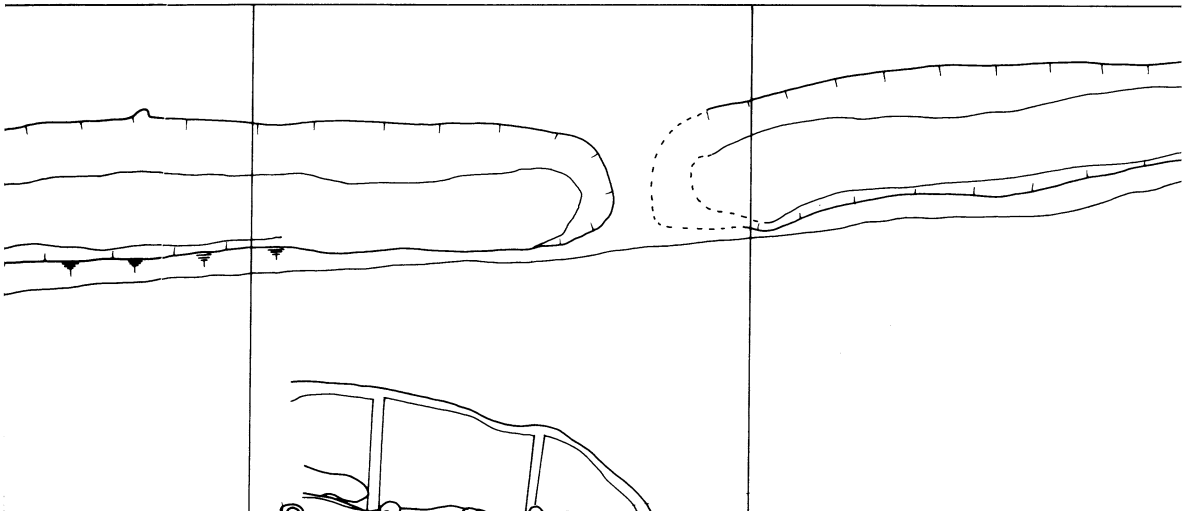


溝 3

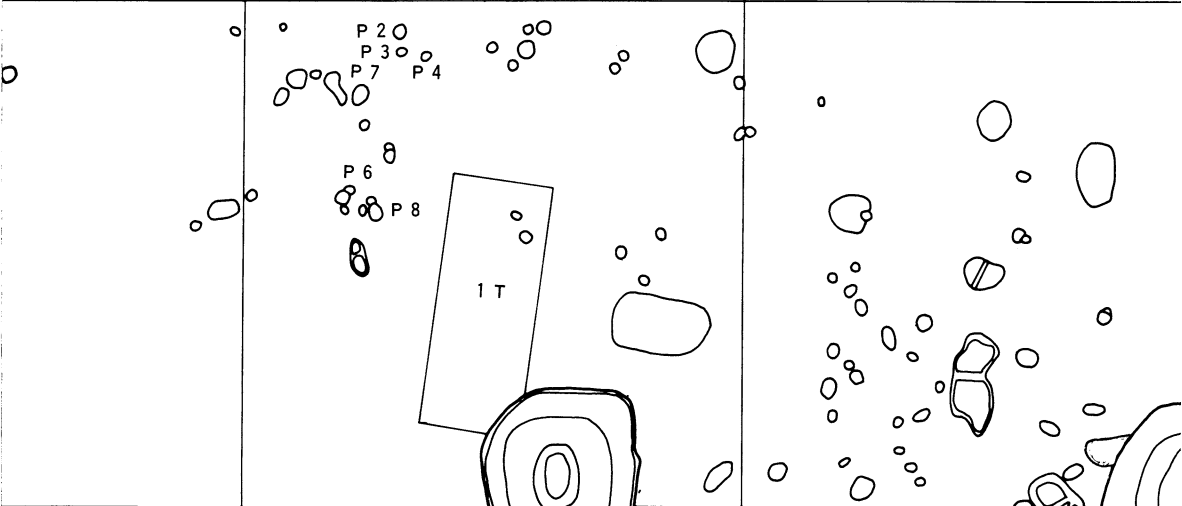


円形周溝墓 3号





溝4



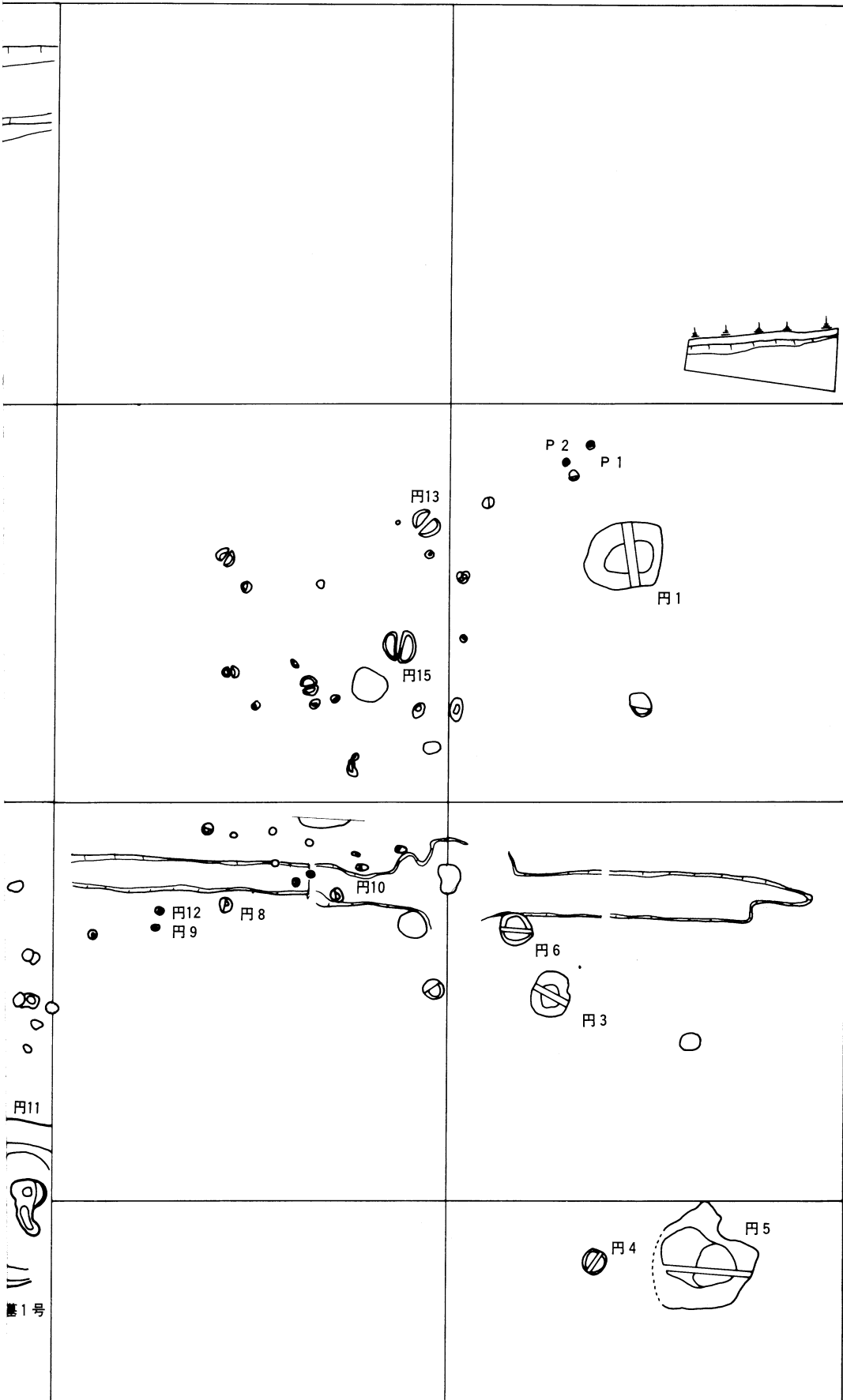
P20
P30
P7
P4

P6
P8

1T

円形周溝墓2号

円形周溝



P 2 P 1

円13

円1

円15

円10

円12

円9

円8

円6

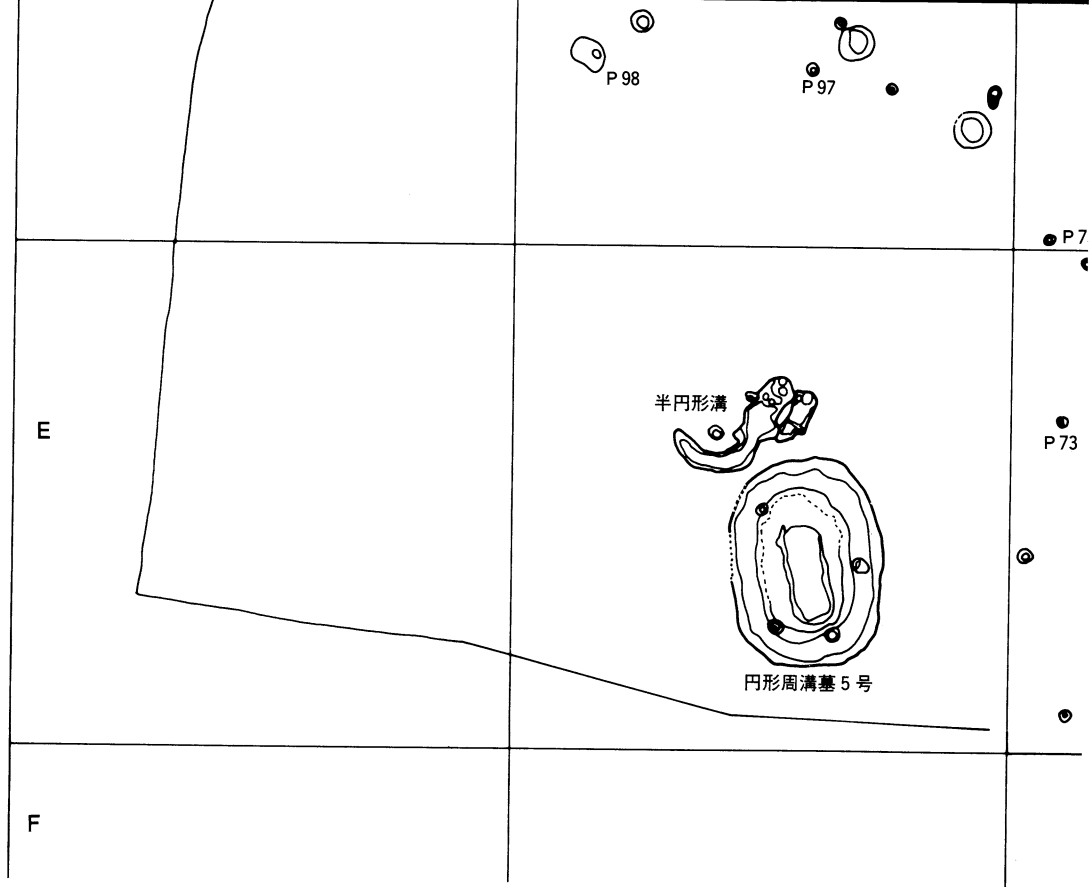
円3

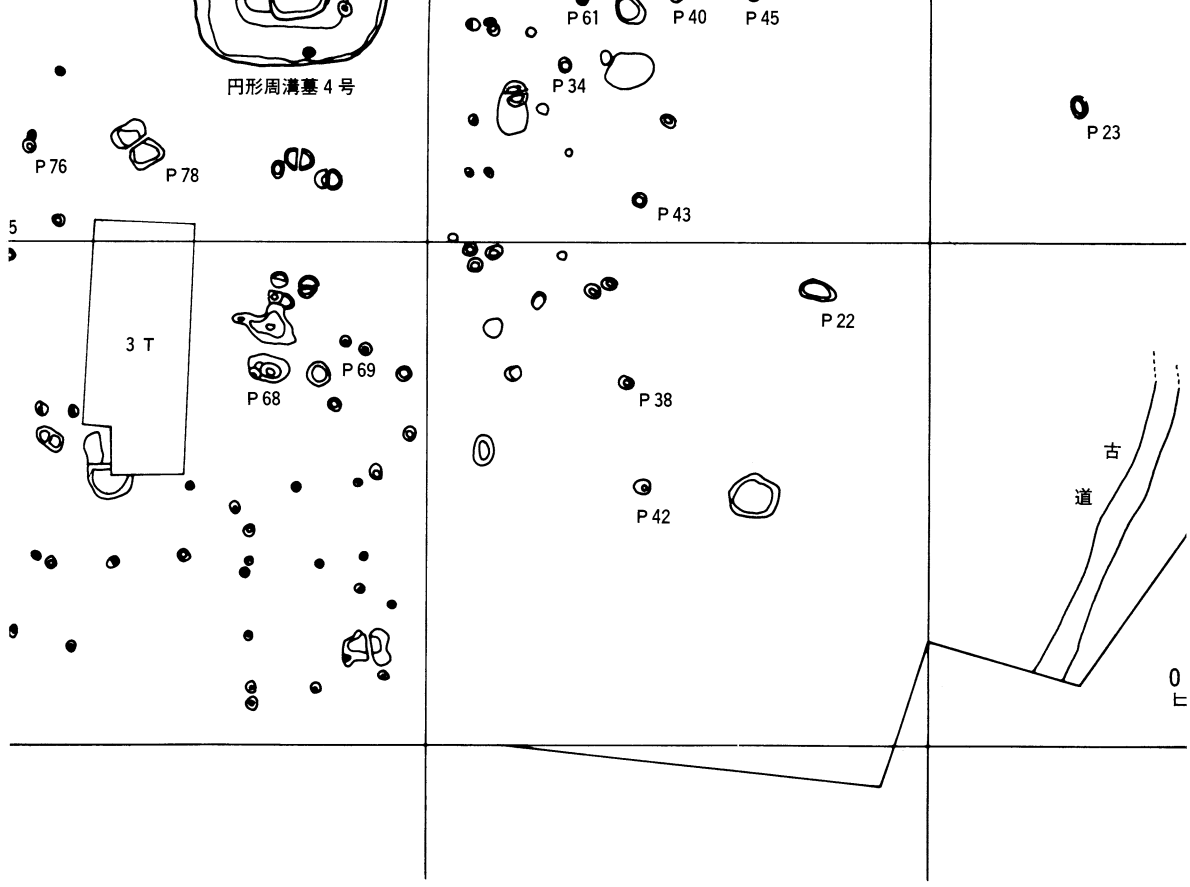
円11

円4

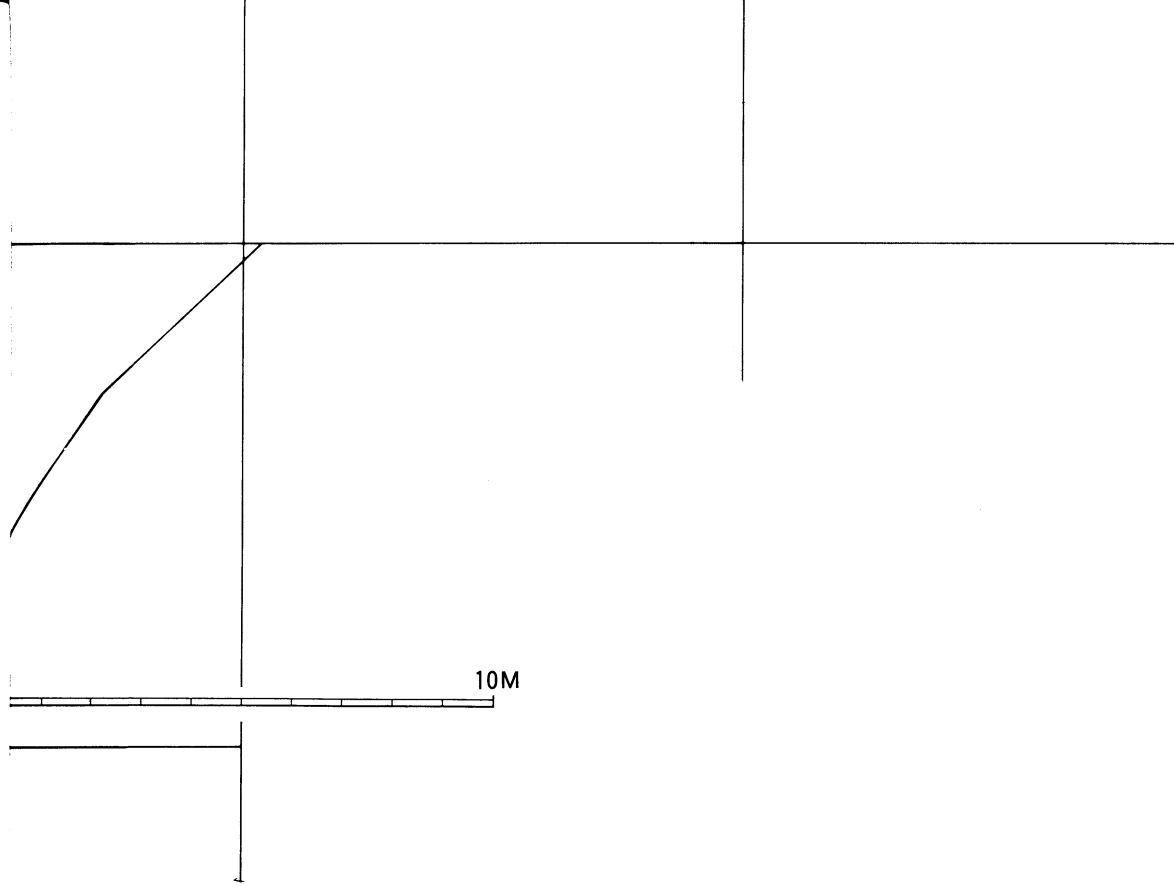
円5

1号





第119図 平安時



代遺構配置図

出土遺物

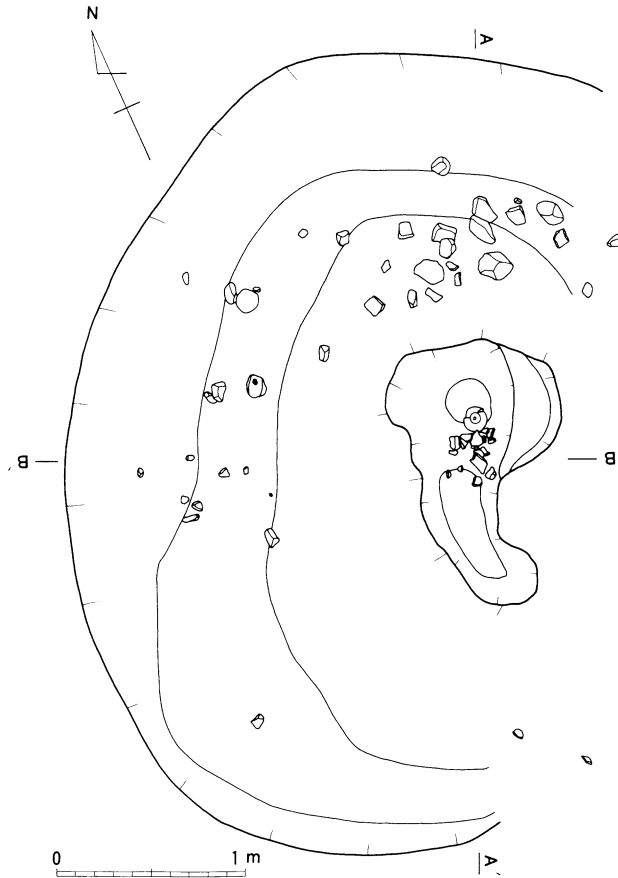
(第122図

486~491)

○土師器

(486~491)

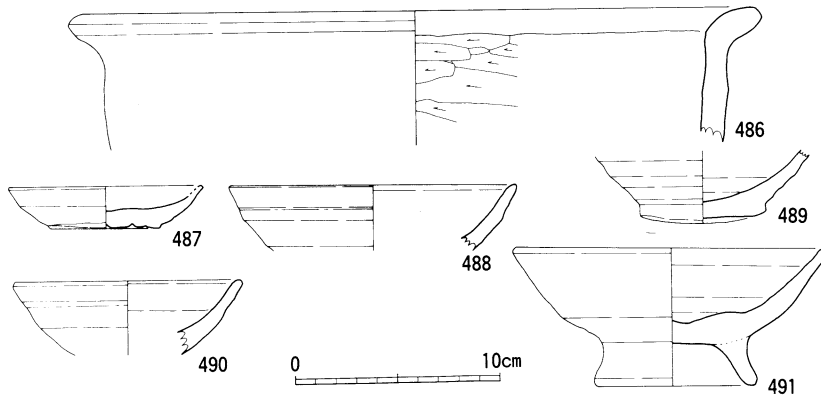
486~489は遺構検出面出土のものである。486は甕の胴部~口縁部で、口縁部は外反し、内面に残線が残り、内外面とも横方向のナデが施される。また、胴部外面はナデ調整内面は横方向のヘラケズリが施される。胎土には石英、角閃



第120図 周溝墓1号遺物出土状況

石ほか砂粒が多く含まれており、暗茶褐色・茶褐色を呈している。復元口径は33.8cmである。487は小皿で底部にわずかに高さがあり回転ヘラ切りの後、軽くナデ調整を施している。488は椀の体部~口縁部で、内湾気味の体部でやや厚めである。489は底部で高さがある。回転ヘラ切りで棒状の圧痕が残る。

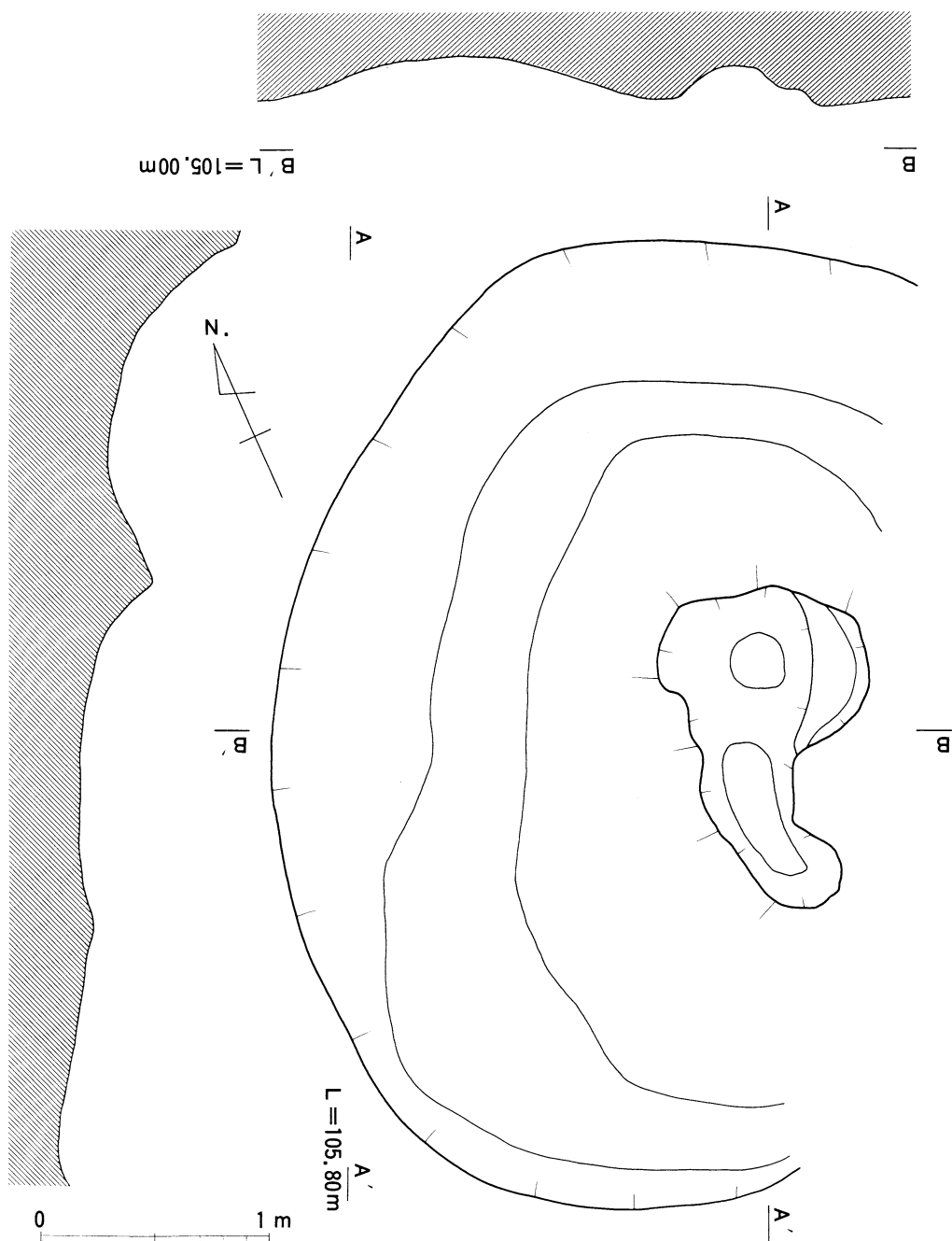
490は周溝出土のもので488と同様に内湾気味の体部をもち、やや厚めである。不十分なヨ



第121図 周溝墓1号出土遺物実測図

コナデである。

491は主体部出土の高台付椀である。やや厚めで開きながらまっすぐのびる体部をもち、厚めでがっちりしたやや高めの高台をつける。椀部は浅い。金雲母を多く含み、淡茶褐色を呈する。



第122図 周溝墓1号実測図

周溝墓 2号 (第123、124図)

確認調査時に1トレンチで検出された遺構で、本調査時は当初住居址かと思われたが、調査を進めるうちに周溝墓であることが判明した。C-6区に位置し、D-6区にかかる南側部分は畑地造成によって削平されている。

周溝は短径325cmで、長径は250cmを残すが360cm程はあったものと推定でき、平面形はわずかながら楕円形である。主軸方向は北東-南西である。幅50~60cm、深さ28cmを残し、断面は開き気味のU字状を成す。この周溝を径2mm程度の軽石を含む黒色土が埋めていた。主体部は長径135cm、短径94cmの楕円形で深さ15cm程を残す。埋土には炭化物が多く混じっていた。約240点の遺物が出土しており、主体部からは土師器坏2点が出土した。

出土遺物 (第125図 492~518)

○黒色土器A類 (494~496)

494、495は高台付椀である。494は内面がほとんど剝離しているが、内外面とも横方向のヘラミガキを施す。口縁端部がわずかに外反し、高台は丸みがあり短い。495も同様に外面は高台付近まで横方向のヘラミガキを施す。高台は494より径が広い。496は椀で緩やかに内湾する体部をもち、内外面とも細かい横方向のヘラミガキを施す。外面の口縁以下2.5cmの範囲までいぶしている。

○土師器 (492、493、497~518)

492は緩やかに内湾する体部をもつ高台付椀である。高台はハの字状に開き、やや高さがある。493も椀で、緩やかに内湾する体部をもつ。502、503も椀である。502には内面と口縁端部に、503には内外面ともヨコナデ調整が施されている。

500は高台付皿で、高台が脚台と言えるほど高さがある。皿部は緩やかに内湾しながら立ち上がる体部をもつ。内外面ともヨコナデを施す。この皿部の体部に類似したものが501である。

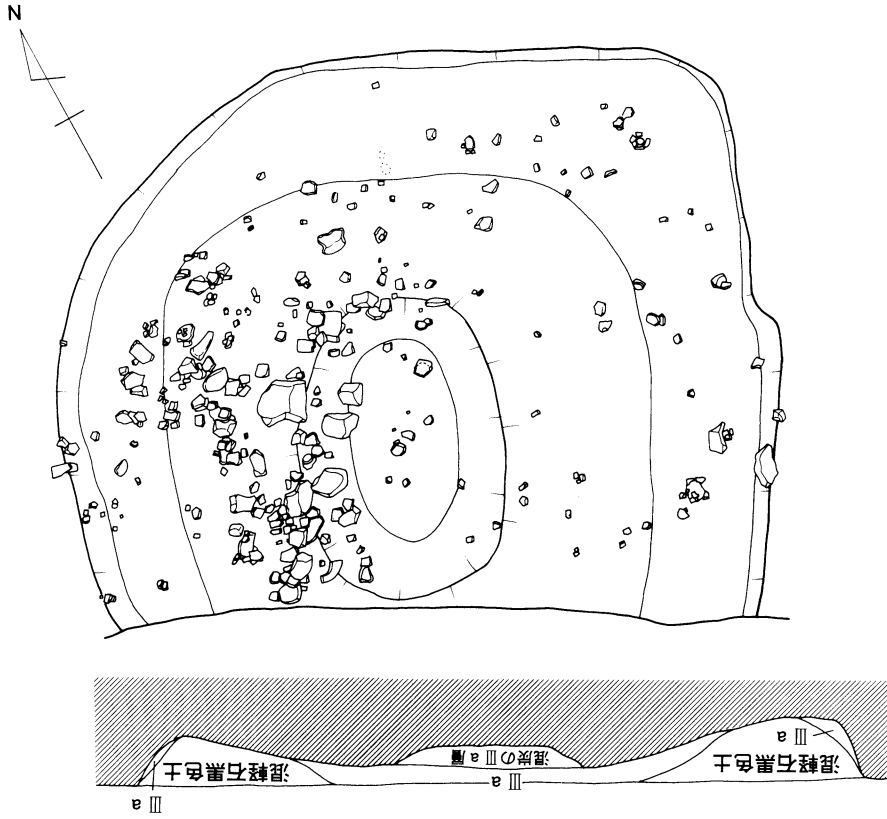
508、509は小皿と思われる。体部外面にケズリを施す。

510~512は坏である。510は底部をヘラ切り後ナデている。511、512はいわゆる回転ヘラ切り未調整である。口径8.6~10.8cm、底径5.7~6.1cm、器高2.6~3.1cmである。

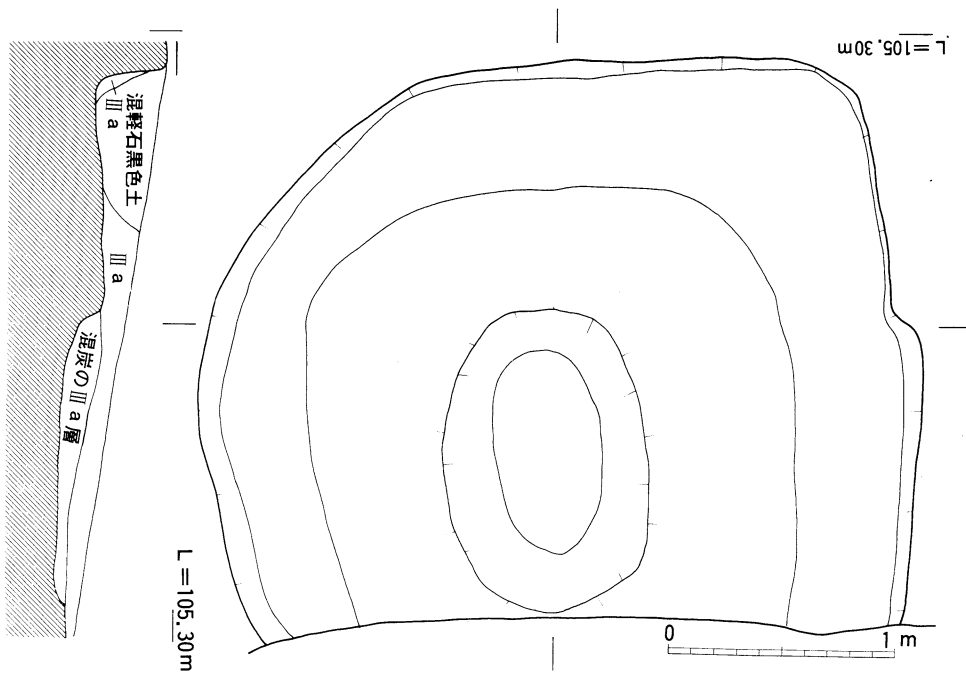
497は高台で表面が赤褐色に焼けている。断面を観察すると、底部に体部を張りつけ、更に高台を張りつけたという成形法が窺われる。高台は高さがあり、しっかりしている。内外面ともにヨコナデ調整である。

498、499、504~507、513は底部である。(復元)底径5.5~7.2cmであるが、505~507は椀であると思われる。底部はヘラ切りで、体部は内外面ともヨコナデである。

516、517は甕である。516は口縁部が大きく外反し、胴部との境に段が残る。胴部内面には横方向のヘラケズリを施しているが、それ以外はすべてヨコナデである。石英、金雲母他砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。517は小形の甕で外反する口縁をもつ。復元口径15.9cm。胴部には指によるとと思われる圧痕が残る。胴部内面は左上りのヘラケズリが施されるが、粘



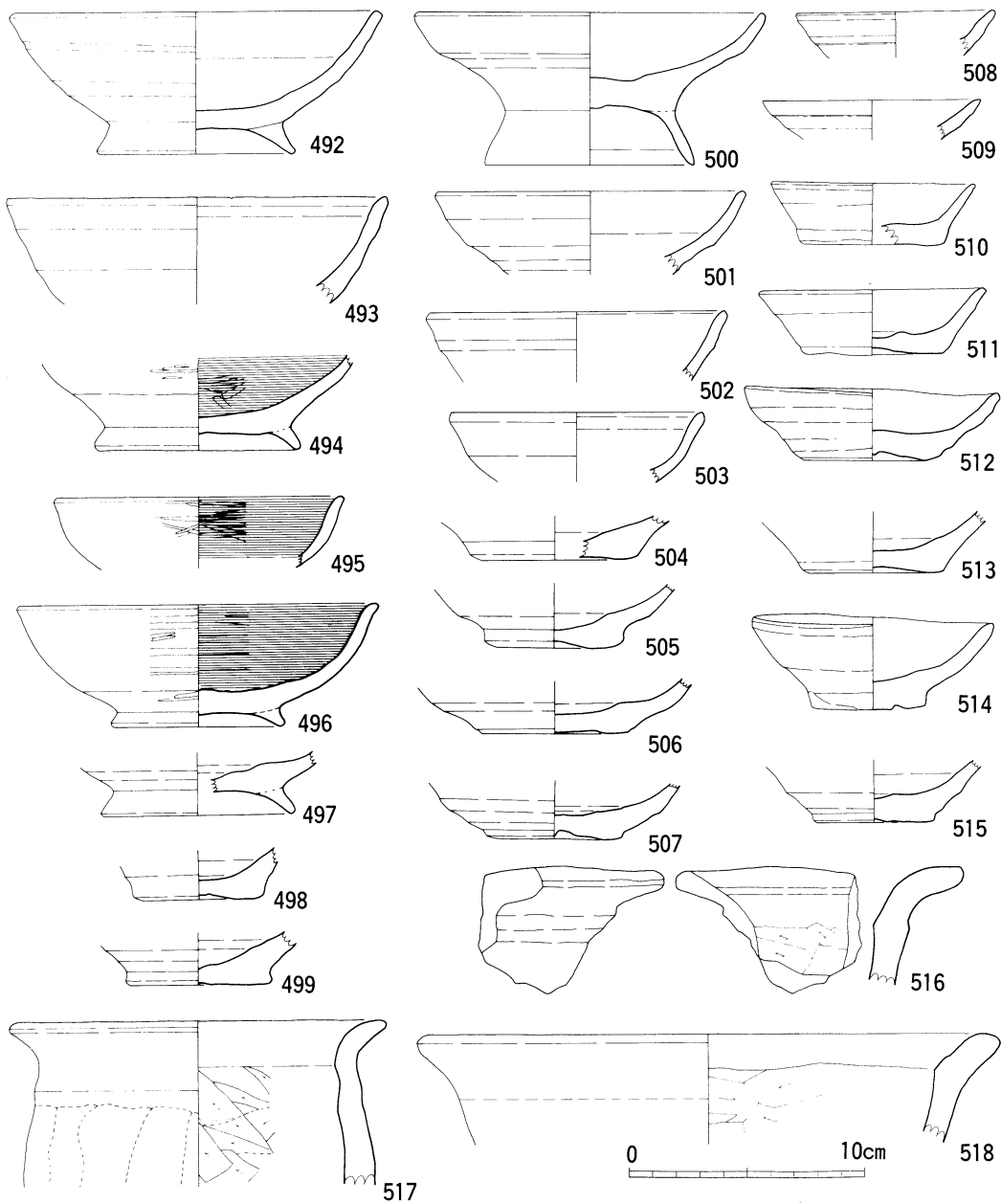
第123図 周溝墓2号出土遺物実測図



第124図 周溝墓2号実測図

土が半乾きの状態で成されたものと思われる。胴部上端から口縁部にかけてはヨコナデが施される。胎土には石英、角閃石他砂粒を多く含み、暗黄茶褐色～茶褐色を呈する。

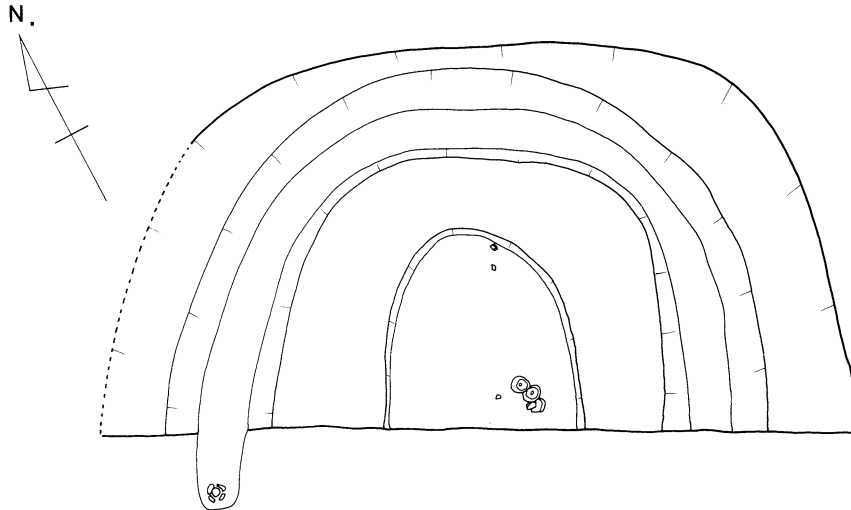
518は周溝と主体部の間から出土した甕で、復元口径は24.7cmである。緩やかに外反する口縁部で、胴部外面にかけてナデが施される。また、胴部内面はヘラケズリが成される。外面が黒褐色、内面が薄い暗茶褐色で、胎土には石英、角閃石他砂粒が含まれる。



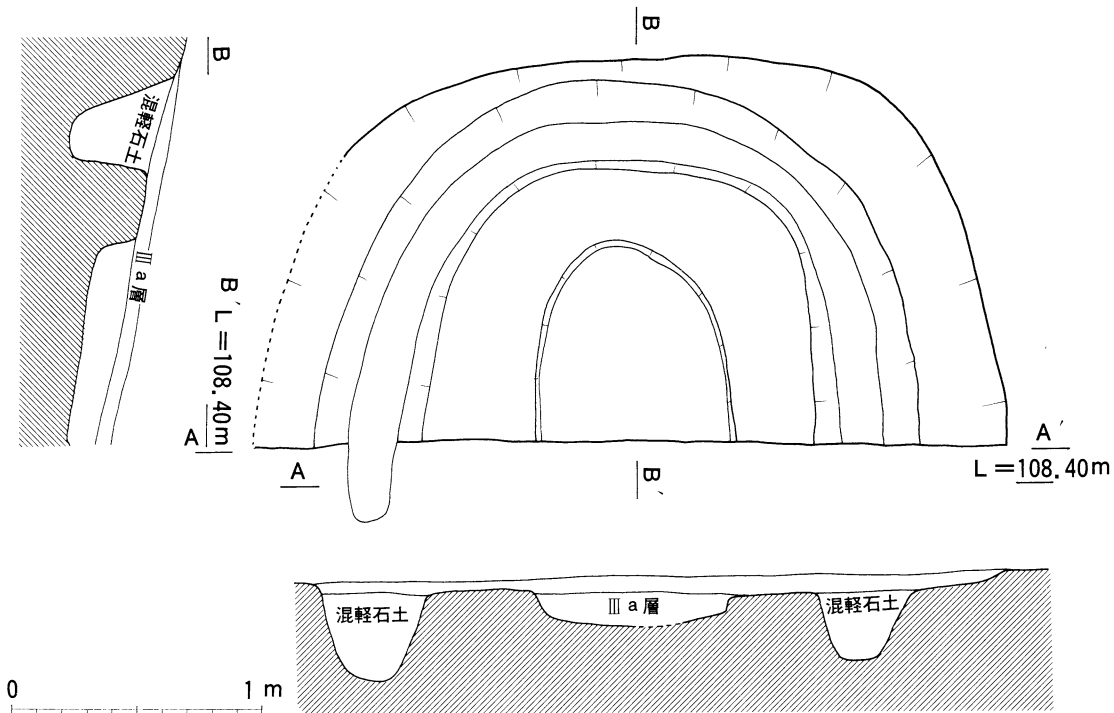
第125図 周溝墓 2号出土遺物実測図

514は主体部から出土した坏である。口径10.2cm、底径4.9cm、器高4.0cm。円盤状の底部に内湾気味に立ち上がる体部を付ける。底部はヘラ切り後軽くナデる。他の調整はすべてヨコナデである。内面に煤が付着し、灯明用に使われたものと思われる。

515は主体部出土の坏の底部である。底径5.1cmで、ヘラ切り未調整である。他はヨコナデである。



第126図 周溝墓 3号遺物実測図



第127図 周溝墓 3号実測図

周溝墓 3号 (第126、127図)

B-4区で検出され、「円形17」として調査したものである。南側は畑地造成によって削平されていた。

周溝は短径が303cm、長径は約150cmを残すが、推定でおよそ300cmはあったものと考えられ、平面形はほぼ円形である。主軸方向は北東-南西である。幅は45~79cm、深さ35~40cmを残す。断面はU字状であるが外側は約35cmの幅のテラス状を成している。埋土中にはシラスの中に見られるような0.5~1cmの軽石が多く含まれていた。

主体部は短径82cm、長径は80cmを残すが、150cmはあったものと推定でき、平面形は長楕円形をなす。深さは15cmを残し非常に浅い。埋土中にはパミスはなくⅢb層がブロック状に含まれている。

遺物の出土は12点と少ないが、主体部から小皿2枚が出土した。

出土遺物 (第128図 519~522)

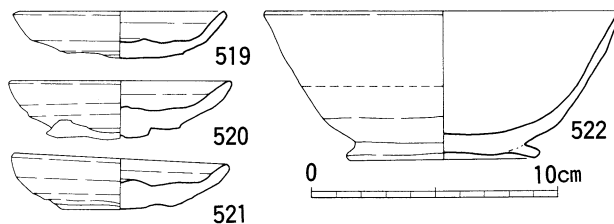
○土師器 (519~522)

519は周溝から出土した小皿である。口径8.7cm、底径4.7cm、器高1.9cmで底部はヘラ切り未調整である。その他の調整はヨコナデである。

520、521は主体部から出土した小皿で口径が9.1と8.9cm、底径が5.2と5.7cm、器高が2.5と2.3cmで周溝の小皿よりわずかながら大きい技法上は変わらない。

522は確実な出土地点は分からないが、周溝墓3号に関連する高台付椀である。復元口径が14.5cm、高台径7.8cm、器高6.0cmである。

高台は開くが、端部は丸味をもち、高さが無い。体部は内外面ともに剝離が著しいが内面にヘラミガキ、外面は大旨ヨコナデで部分的にヘラミガキを施す。黒色土器の未製品ではなかろうか。



第128図 周溝墓 3号出土遺物実測図

周溝墓 4号 (第129、130図)

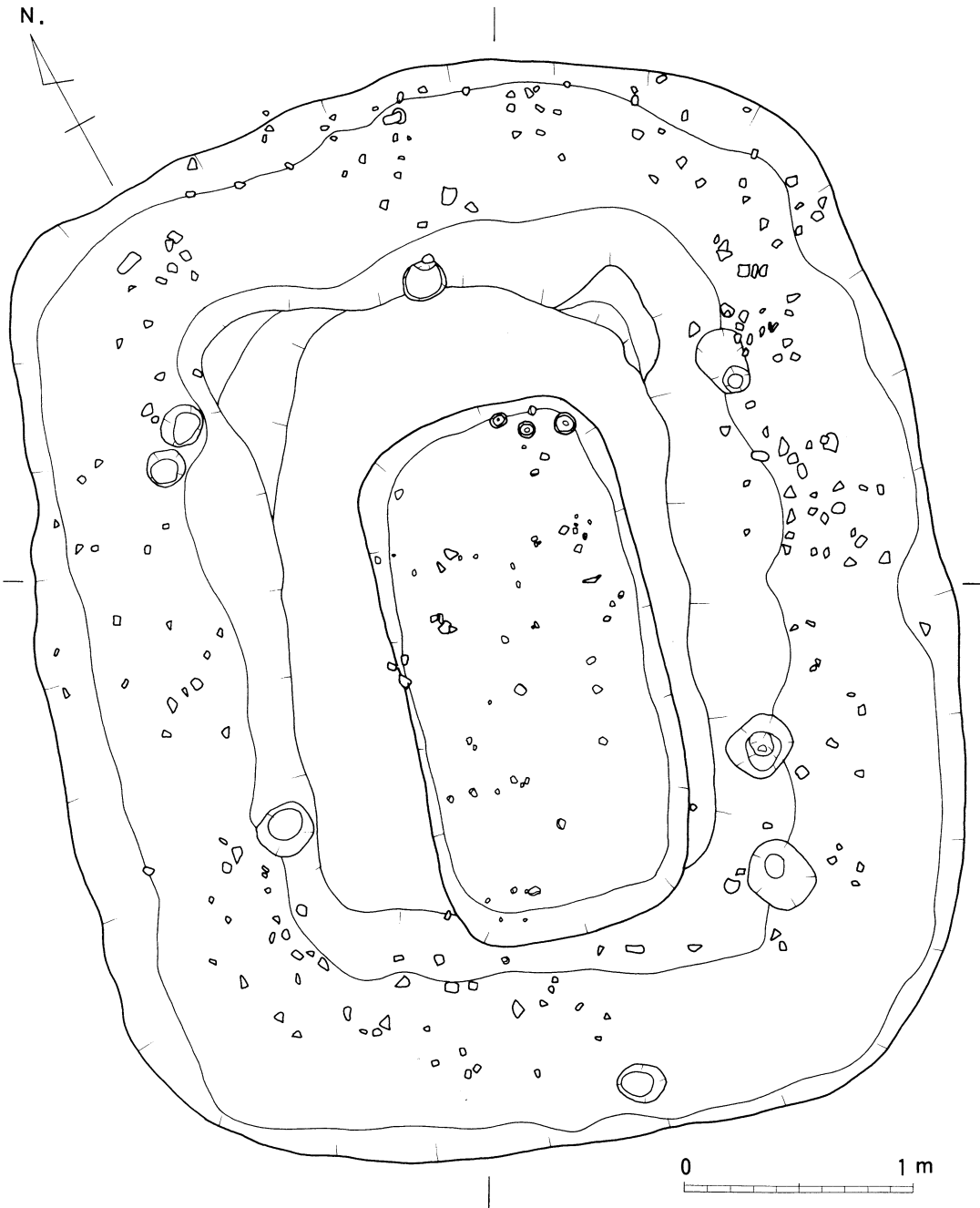
D-4区で検出され、「円形20」として調査したものである。

周溝は長径484cm、短径407cmの略方形で、主軸方向は北東-南西である。幅は100~120cm、深さ40cmを残し、断面は幅広のU字状をなす。これも2号、3号と同様に埋土中に軽石を含む。

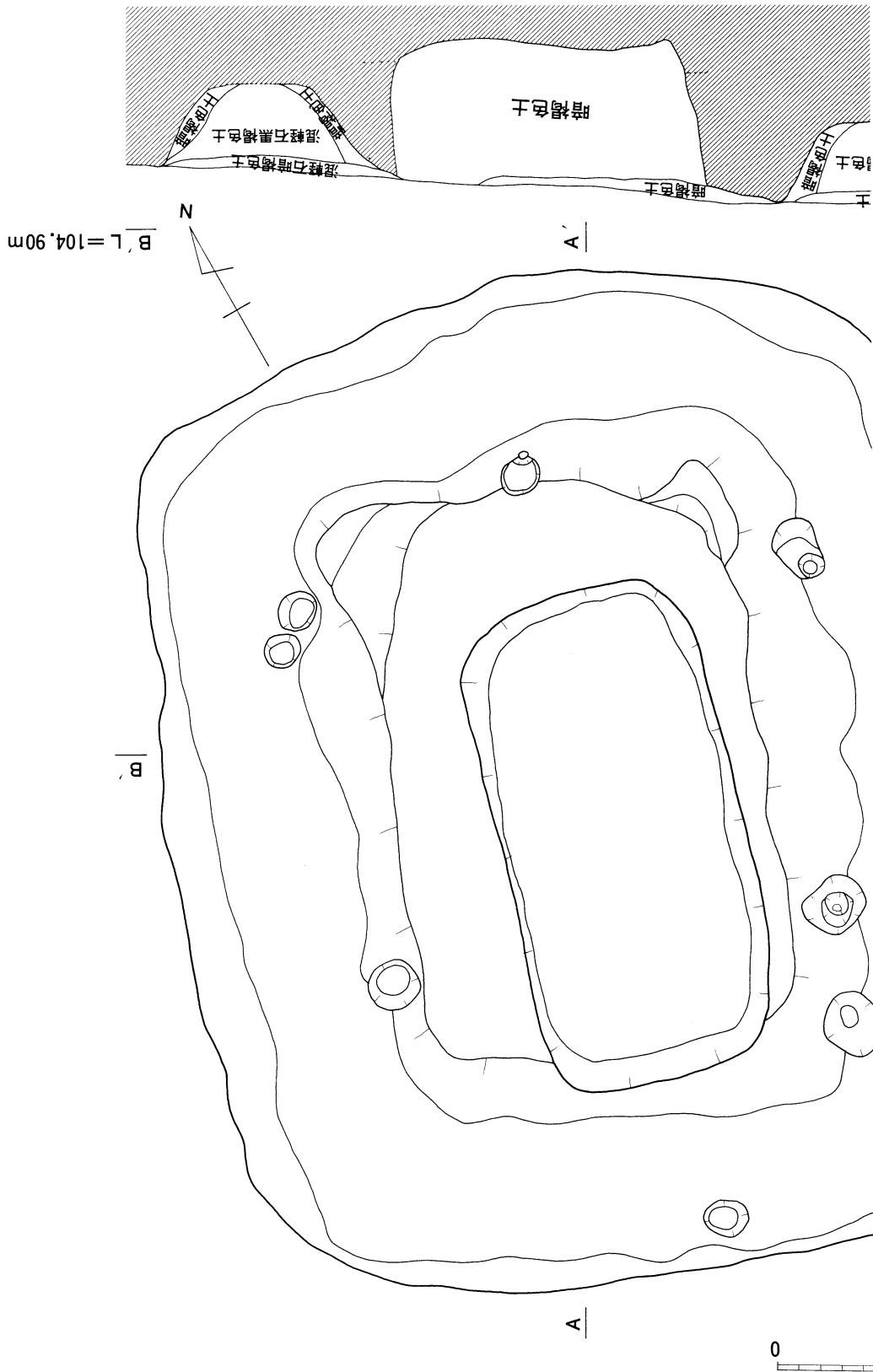
主体部は当初径100cm程の円形かと思われたが、調査を進めていくうちに長径235cm、短径115cmの方形のものをもつことが分かった。主軸は周溝よりもわずかに東-西に傾いている。深さ70cmを残し、比較的深い。

周溝内にピットが8か所、検出された。また、この4号周辺で釘も出土しており、地上施設が存在が考えられる。

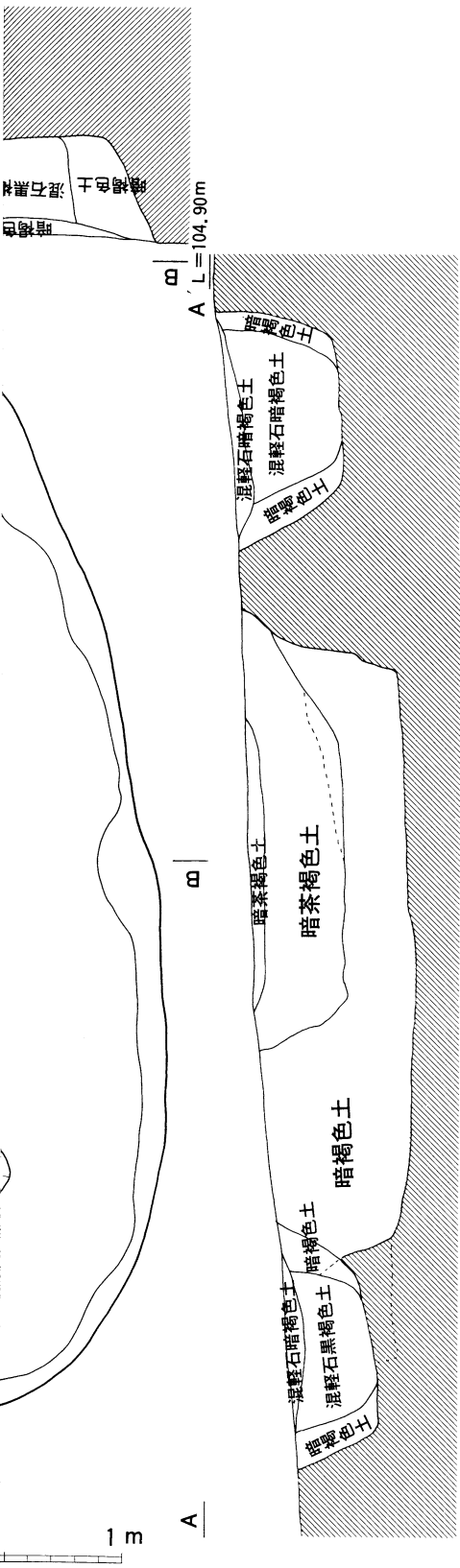
遺物は土師器を含め約260点が出土し、主体部からは小皿が3枚出土した。



第129図 周溝墓 4号遺物出土状況



第130图 周溝墓4号实测图



出土遺物 (第131図)

○黒色土器 A 類 (523、524)

523は高台付椀と思われる。高台は短く、丸みを帯びている。復元高台径6.6cm。内面は掻き上げるようなヘラミガキを施す。524はやや厚さがあるが、ほぼ、まっすぐのびる体部である。復元口径13.8cm。内外面とも横方向のヘラミガキを施す。周溝出土である

○紡錘車 (537)

537は周溝出土で、土師器底部の再利用品である。体部を落とした程度で、割れ口はシャープである。

○須恵器 (538)

538は主体部の上で出土した須恵器の胴部である。外面に平行叩きが成され、内面に格子状のあて板痕跡が残る。外面は青灰色、内面は赤茶褐色を呈し、長石、石英を含む。表面が磨かれており、転用碗の可能性はある。

○土師器 (525～536、539～542)

525、526は高台部で丸みもち、低い。復元高台径はそれぞれ6.7、7.9cmである。内面にヘラミガキを施し、他はヨコナデ調整である。

527は底部でやや高さがある。復元底径7.5cmでヘラ切りである。

528は椀の体部～口縁部でほぼまっすぐのびる。内外面ともヨコナデである。

529は坏で復元口径10.6cm。調整は内外面ともにヨコナデである。

530、531は甕で口縁部は外反する。胴部内面は横方向のヘラケズリを施す。他は大旨横方向のナデ調整である。外面は黒褐色、内面は茶褐色を呈し、胎土には石英、金雲母他砂粒を多く含む。

532～536は小皿である。底部は534が円盤状で高さがあるのに対し、他はヘラケズリである。534は口径9.3cm、底径6.0cm、器高1.5cmである。532は幾分小振りで口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.5cmである。533は口径9.2cm、底径7.0cm、器高1.0cmと低い。底部に板状圧痕が見られる。他の2点はほぼ同一規格である。以上は周溝内出土遺物である。以下、主体部出土の土師器について述べる。

542は甕で、口縁がわずかながら外反する。内外面ともナデ調整である。赤褐色を呈し、胎土に石英、金雲母ほか砂粒を含む。

539～541は小皿である。底部は539、540がヘラ切り未調整、541がヘラケズリである。ほかは内外面ともにヨコナデ調整である。法量はややばらつきがあり、口径8.1～8.7cm、底径5.2～5.8cm、器高1.6～2.5cmである。

以上が周溝墓4号出土遺物であるが、周溝墓4号付近に鉄器が数点出土しているのでここで取りあげる。

○鉄製品 (543～546)

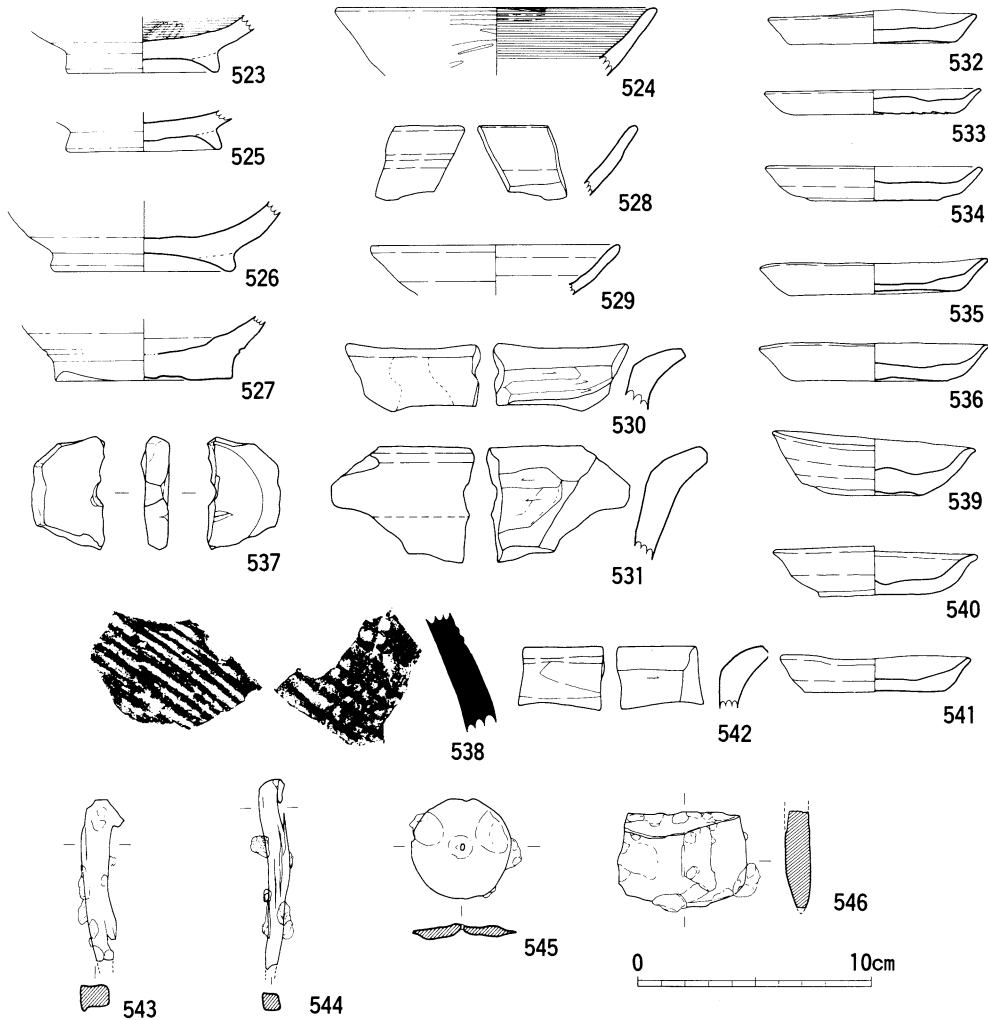
543、544は釘である。断面形はほぼ正方形であり、頭は片側のみ屈曲する。共に先端部は

欠損している。

545は仮に有孔円盤としておく。径4.2cmで、中央に3mmの中央孔を穿つ。中央はやや盛り上がっている。紡錘車である可能性もある。

546は鉄斧の尖端部であると思われる。刃部の幅が約5.5cmである。

これらの鉄製品は周溝墓の地上施設にかかわるものではないかとも考えられる。



第131図 周溝墓4号出土遺物実測図

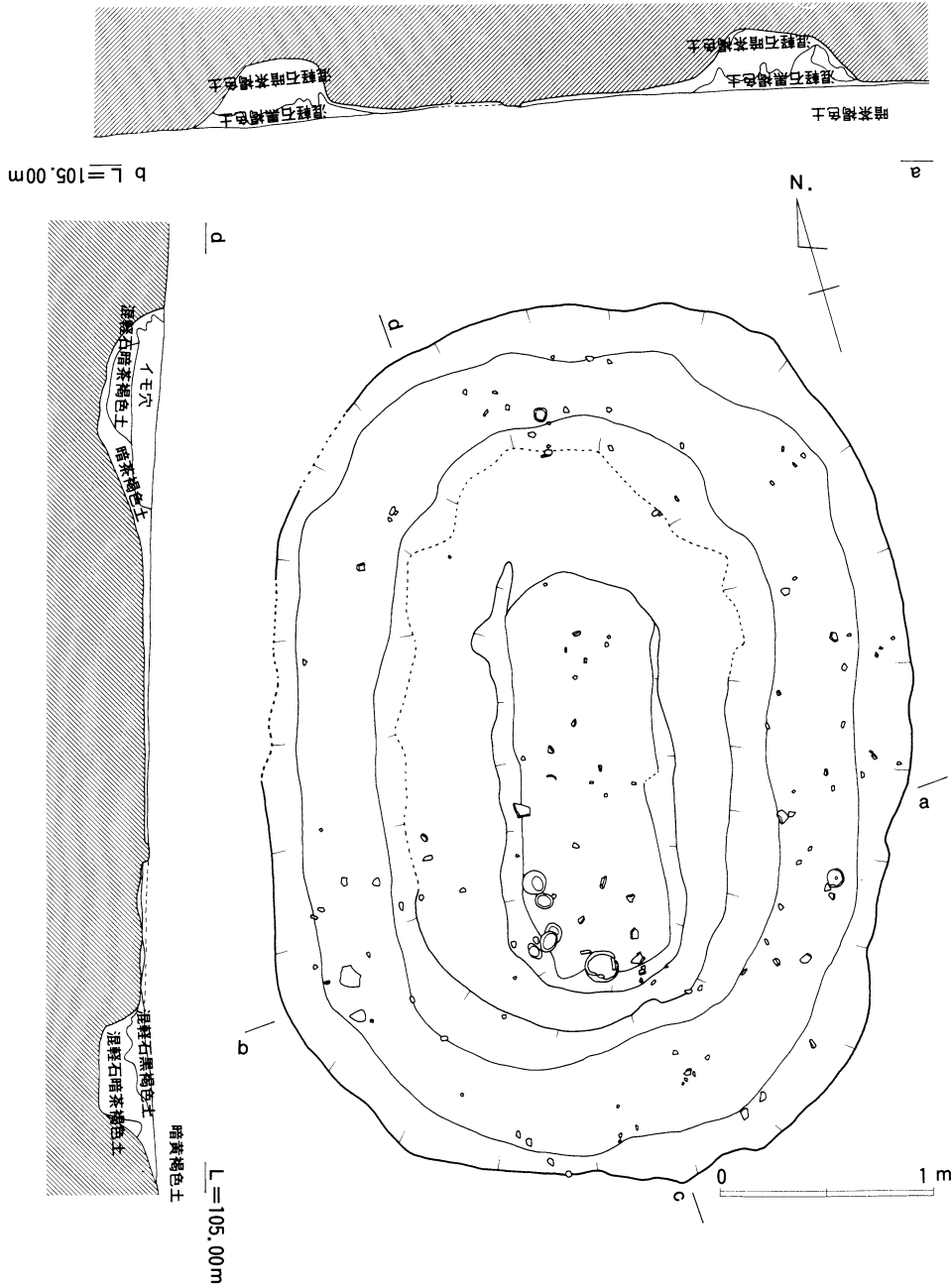
周溝墓5号（第132～134図）

E-2区から検出されたもので、イモ穴などによって削平を受けている。

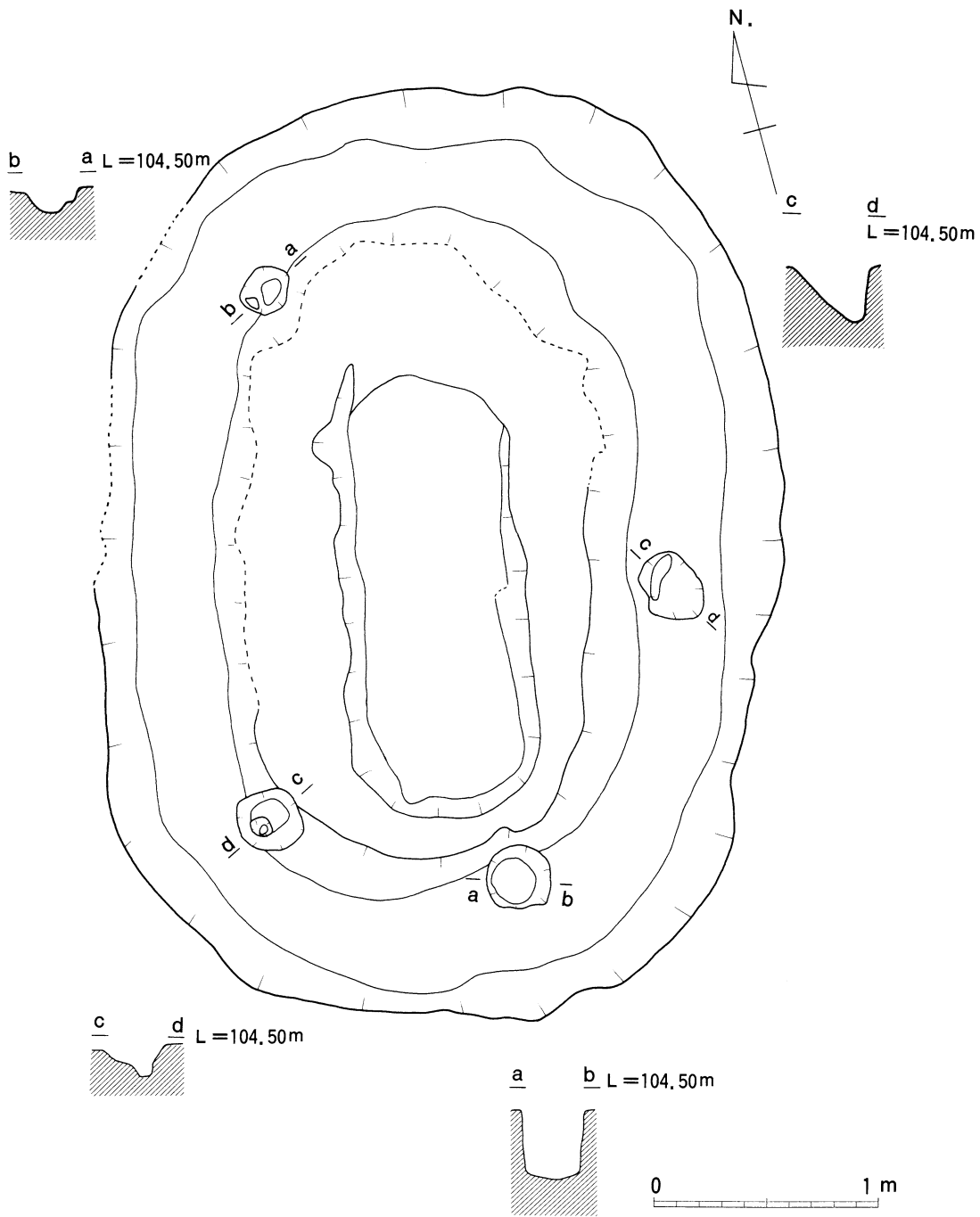
周溝は長径460cm、短径312cmを測り、平面形は楕円形である。主軸方向は北北東-南南西である。幅66～90cmで、深さ22～30cmを残し、断面形はU字形である。埋土には軽石を含む。4号と同様に周溝内にピットが検出されたが、4か所であった。

主体部は短径85cm、長径は北側がイモ穴によって削平を受けているが、200cm程はあったものと推定でき、平面形は長楕円形を成す。深さ20cm程を残すのみであったが、小皿4枚、坏1点、鉢1点、甕の口縁部1点が出土した。また、小さな釘も出土しており、遺構としては確認できなかったが、木棺墓の可能性も考えられる。

遺物は全体で145点出土した。



第132図 周溝墓5号遺物出土状況



第133图 周高墓5号实测图

出土遺物 (第135図 547~561)

○黒色土器A類 (554)

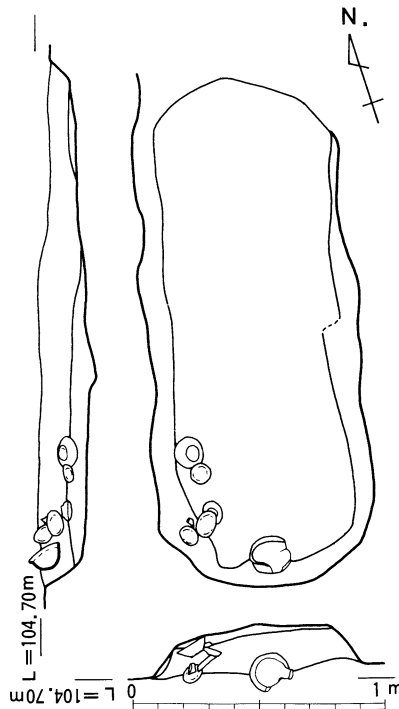
554は高台付椀である。復元口径15.6cm、復元高台径6.1cm、器高5.5cmである。高台はわずかに開き、体部は内湾気味で、口縁部は外反する。内外面ともに横方向のヘラミガキが施されるがやや雑な感がある。口縁の外部までいぶしがかかっている。周溝出土である。

○紡錘車 (550)

黒色土器A類高台付椀の底部を再利用したものである。高台は残るが、体部の取り付け部分は丁寧に磨かれ、丸みをもっている。径約7.0cmで1.2×0.9cmの孔がうかたれている。これも周溝出土である。

○土師器 (547~549、551~553、555~561)

547、548は甕である。547は検出面出土のもので、復元口径25.8cmである。口縁はくの字状に外反する。胴部内面に横方向のヘラケズリを施すが、幾度か使用したも



第134図 周溝墓5号主体部実測図

のと思われ、剝離し、ヘラの単位がはっきりしない。他はおおむねナデ調整である。暗茶褐色~茶褐色を呈し、石英、角閃石ほか砂粒を含む。548は周溝出土のもので口縁がくの字状に外反するが、いびつである。胴部内面はヘラケズリし、その後をナデている。口縁部と胴部外面は横方向のナデを施す。外面は黒褐色、内面は淡茶褐色を呈し、石英他砂粒を含む。

553は検出面出土の椀である。体部が緩やかに内湾し、調整はヨコナデである。551、552は周溝出土のものである。551は坏もしくは椀と思われる。開きながらまっすぐのびる体部である。調整はヨコナデである。552は椀で、口縁部がわずかに外反する。ヨコナデである。

以下、主体部出土のものについて述べる。

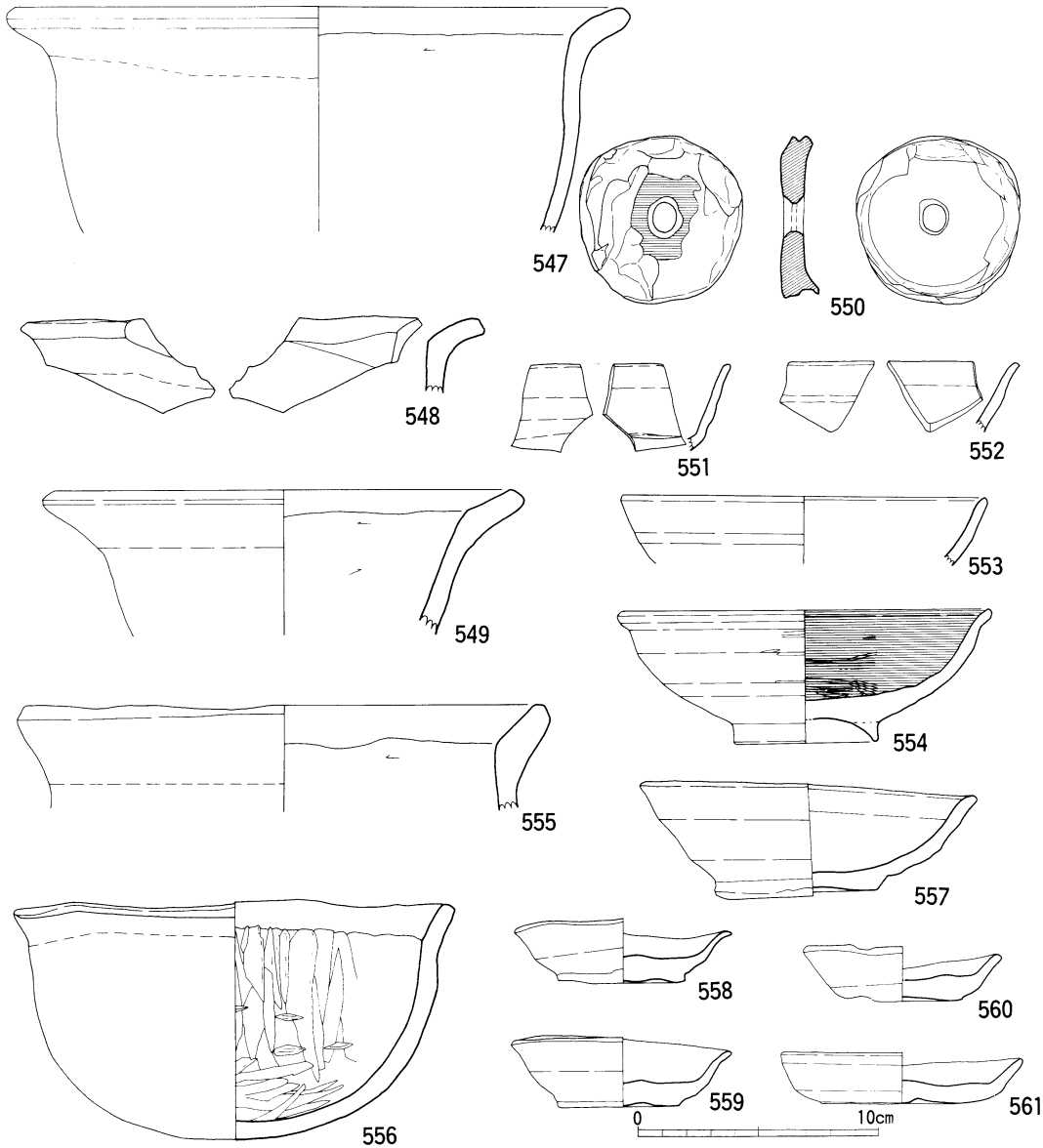
549は主体部の上で出土した甕である。復元口径はおよそ20cm。口縁部はくの字状に外反する。胴部内面には横方向のヘラケズリが施され、他は横方向のナデ調整である。外面は黒褐色で内面は茶褐色を呈し、石英、角閃石、砂粒を含む。

555は主体部出土の甕であるが、包含層出土のものとは接合する。復元口径は22.1cmで、口縁部がくの字状に外反する。胴部内面には横方向のヘラケズリが施され、また、口唇部は丁寧なナデで、磨かれている。他は横方向のナデである。外面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈し、石英、角閃石、金雲母や砂粒を含む。

556は鉢である。口径18.3cm、器高9.8cmで、口縁がくの字状に外反しているがいびつで、胴部は内湾し、丸底である。胴部内面は、上半に縦方向、底部付近に横方向のヘラケズリを施す。ほかはナデであるが、丁寧に、磨きがかかっている。外面は黒褐色、茶褐色、内面は黒褐色、灰褐色、淡茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石、砂粒を含む。

557は坏である。口径14.0cm、底径6.9cm、器高5.0cmである。底部はヘラ切りで体部はわずかに内湾する。底部を除きヨコナデである。明茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石、金雲母を含む。

558～561は小皿である。すべてヘラ切り底で、体部にはヨコナデが施される。558～560は底部に少し高さがある。558、559はほぼ同一規格で口径9.0、9.1cm、底径が5.3、5.0cm、器高が2.7、3.0cmである。560はやや小振りで口径8.2cm、底径4.8cm、器高2.3cmである。底部には板状圧痕が残る。561は底部はヘラケズリ調整で、口径10cm、底径6.3cm、器高2.1cmでわずかに大きい。



第135図 周溝墓5号出土遺物実測図

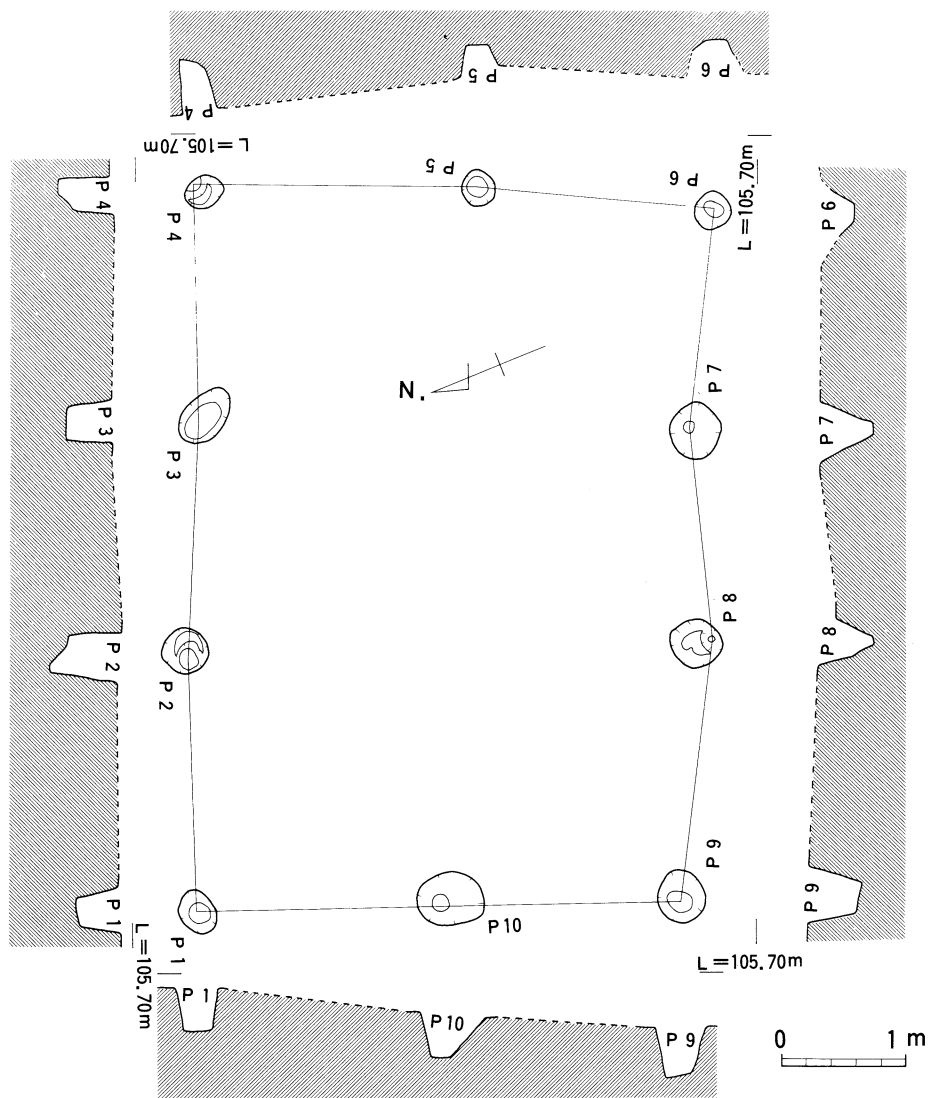
② 掘立柱建物

調査地内で百数か所のピットを確認し、建物跡として認識できるものは2軒であった。

掘立柱建物1号 (第136図)

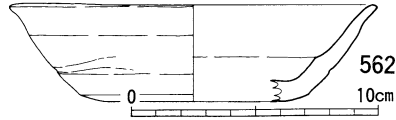
C・D-2・3区で確認された。A・B-2・3区は北側が高い斜面であるのに対して、C・D区になると比較的なだらかであり、1号はそこに配置していた。

3間×2間で、主軸は北西～南東方向である。桁行は北側が約5.8mで、その柱間はP₁-P₂約2m、P₂-P₃約1.9m、P₃-P₄が約1.9mである。一方南側の桁行は約5.55mで、柱



第136図 掘立柱建物1号実測図

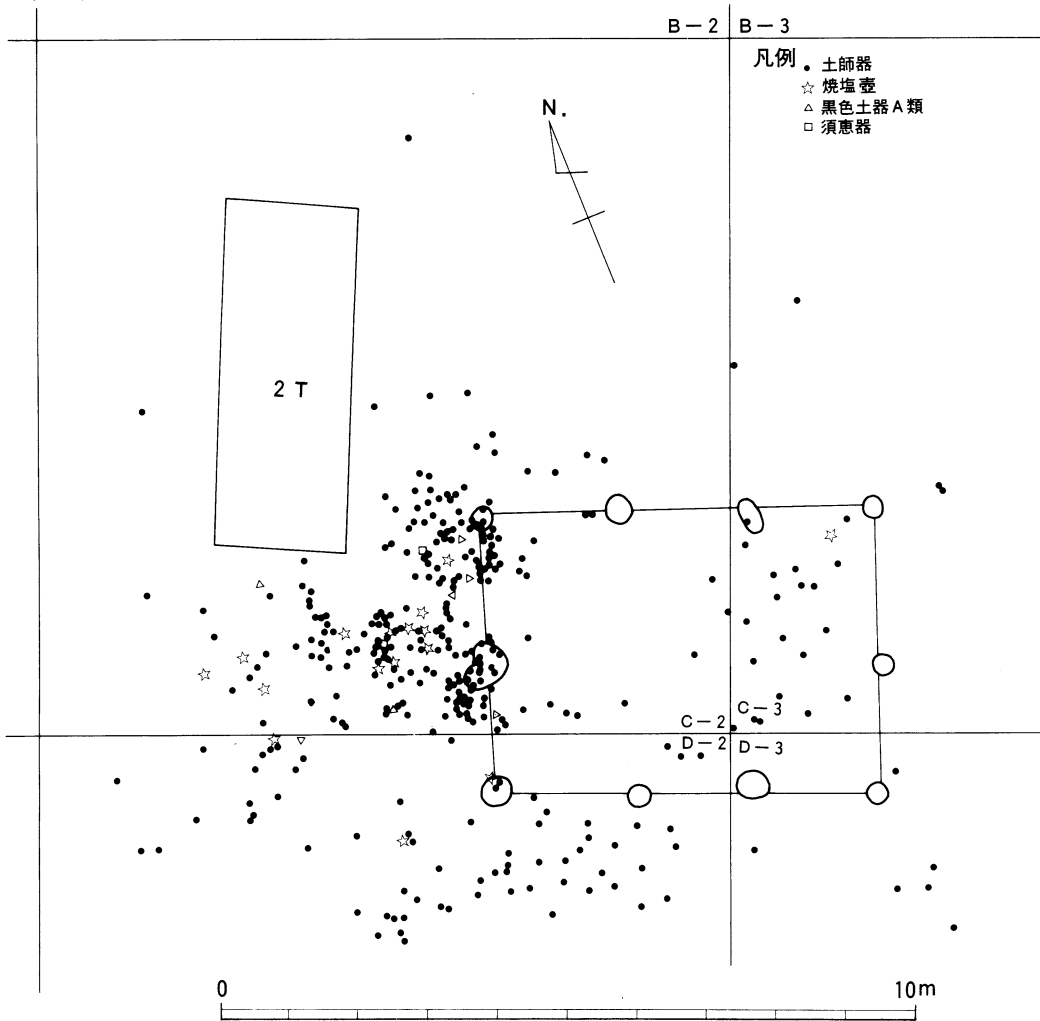
間はP₉—P₈約2.1m、P₈—P₇約1.7m、P₇—P₆約1.75mであり、P₆が少し南側にずれている。北側が0.25mほど広い。この南北の差を修正するようにP₄が建物の方に向かって傾いている。



第137図 掘立柱建物ピット内出土遺物実測図

梁行は西側が約3.85mで、柱間はP₁—P₁₀約1.95m、P₁₀—P₉約1.9mである。また、東側の梁行は4.2mで、柱間はP₄—P₅約2.3m、P₅—P₆約1.9mである。

ピットの平面形はP₃が楕円形であること以外は径30～45cmのほぼ円形を呈している。またピット断面はP₄が建物に向かって傾いている他はほぼ垂直に立っている。柱痕跡、根紋等は確認できなかった。



第138図 掘立柱建物1号付近遺物出土状況

P₃、P₇、P₈、P₁₀の各ピットから土師器などの遺物が出土したが、埋土状況を確認していないため、建物建設時に入れ込んだものか建物廃棄後の流れ込みによるものなのかははっきりしない。

第138図は掘立柱建物1号付近の遺物出土状況を示している。この中には掘立柱建物に伴っていたものもある可能性がある。焼塩壺の出土が多いのが特徴的である。

出土遺物 (第137図 562)

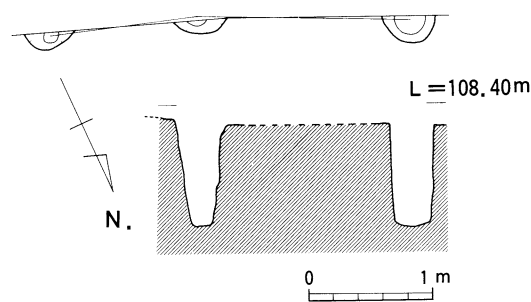
P₃内から出土した、土師器である。復元口径14.8cm、復元底径9.3cm、器高4cm。口縁部が若干外反するが、ほぼまっすぐな体部をもち、内外面ともヨコナデを施している。底部外縁はヨコナデを施すが、ヘラ切りであったと思われる。底部と体部の境にははっきりとした稜がある。胎土には石英粒が確認できるが精良土を使用している。

前述したように建物との関連についてははっきりしない。

掘立柱建物2号 (第139図)

A・B-6区で溝状遺構4の下に柱列として確認され、他は削平を受けている。主軸方向も分からない。

一列が3間で約4.9mを測り、柱間は西から約1.9m、約1.8m、約1.3mである。ピットの平面形は径40cmのほぼ円形でありほぼ垂直に掘り込まれ深さも検出面から80cmもあり深い印象を受ける。



第139図 掘立柱建物2号実測図

③ 溝状遺構

Ⅲ a層までに検出された溝状遺構のうちで、土師器を主体に伴うものをここでは取りあげた。それぞれ形態、規模、埋土等も異なっている。半円形溝状遺構を除いては調査地内の北側に偏って配置しているのが特徴的である。

溝状遺構2 (第140図)

C-8・9区のⅢ a層上面で検出された。西北西-東南東方向に走り、C-7区にのびると思われる西側ははっきりしない。幅が70~120cmで、長さ18.5mを残す。8・9区の境で溝が広がっており、この付近では焼土が見られた。大旨Ⅰ層が埋土であり、検出面からの深さは最大で約18cmである。土師器51点ほどが出土した。

出土遺物 (第144図 567~569、574)

○土師器 (567~569)

567は坏である。復元口径10.7cm。内外面ともヨコナデで、口縁端部は丸い。568は高台付椀と思われる。断面で体部と高台の貼り付けが観察できる。569は底部で、ヘラ切りである。底径5.5cm。調整はヨコナデで、内面に部分的に煤が付着する。

○黒色土器A類 (574)

574は高台付椀と思われる。復元高台径8.3cm。高台は断面形が三角形で短い。内面には横方向のヘラミガキが施される。

溝状遺構3 (第143図)

A-2~7区Ⅲ層b層上面で検出された。A-6区で一旦切れている。溝状遺構2と同様、西北西-東北東方向に走っている。南側は削平を受けているが、幅が約1.8~2.8m残る。長さは調査範囲内をほぼ横断し、約54mである。おそらく東西それぞれにのびていたと思われる。断面形はU字状をなし、深さ60cmを残す。埋土は安定しており、Ⅲ層にⅡ層が乗りさらにⅠ層もしくは耕作土が乗っているが、これは溝の東西からの流れによるのではなく、北側(山側)からの堆積である。遺物は砥石や土師器片など50点弱が出土した。

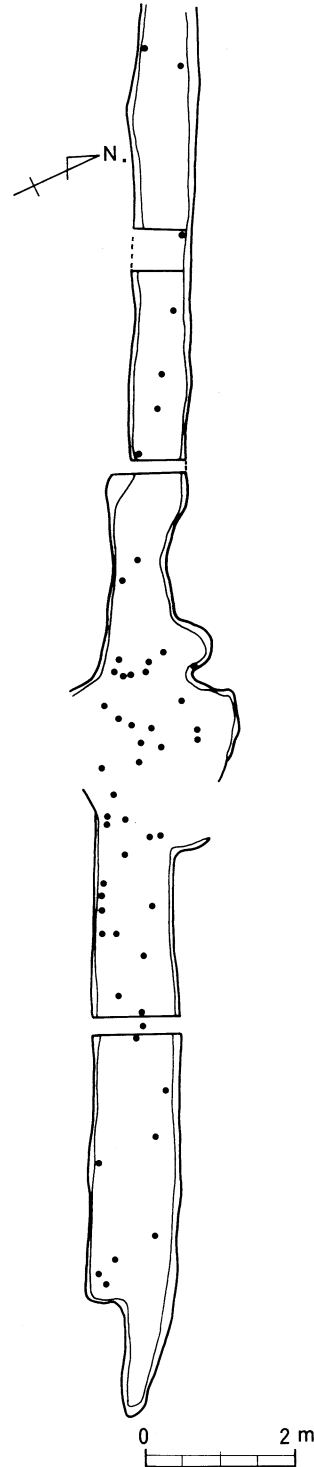
出土遺物 (第144図 563、564、570、576)

○砥石 (563、564)

563は砥石片である。自然石を加工しないで使用している。断面形はほぼ四角形である。上面と下面を使用し、共に敲打痕も残る。砂岩製。564も自然石を加工しないで使用している。断面形はほぼ三角形で、上面のみを使用し、擦痕が見られる。シルトに近い砂岩製。

○土師器 (570)

570は底部でヘラ切りであると思われる。やや高さがある。復元底径6.6cm。



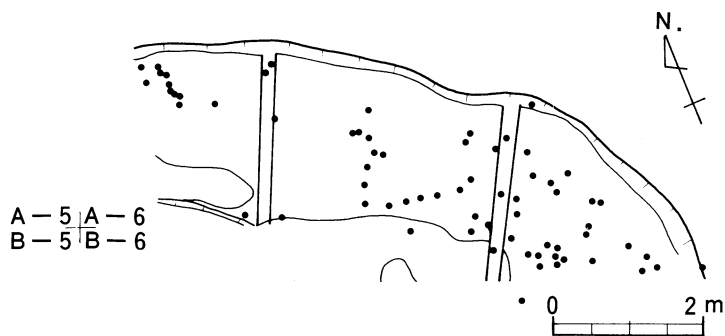
第140図 溝状遺構2号実測図

○黒色土器A類 (576)

高台付椀である。体部は内湾気味である。高台はハの字状に開き、短く、端部が丸くなる。内面は残りが悪いが部分的にヘラミガキが残っている。黒色のいぶしも底部近くしか残っていない。外面はヨコナデである。石英の細粒が顕著に見られる。復元高台径7.6cmである。

溝状遺構 4 (第141図)

A・B-6区で検出され、さらにのびるものと思われたがはっきりしなかった。A-6区西側から東に向けて5mほどのび南の方に蛇行する。幅2.3m、長さ約7m、検出面からの深さ7~30cmを残す。遺物は土師器・須恵器片など70点弱が出土した。



第141図 溝状遺構 4号実測図

出土遺物 (第144図 565、571~573、575)

○須恵器 (565)

565は壺の体部上半の一破片であると思われる。外面には細かい格子状の叩き成し、内面には同心円状のあて板痕跡を残す。灰褐色を呈し、胎土には石英、砂粒を多量に含む。

○黒色土器A類 (575)

高台付椀と思われる。高台はハの字状に開き、比較的短い。内湾気味の体部をもつ。内面は丁寧にヘラミガキが成される。

○土師器 (571~573)

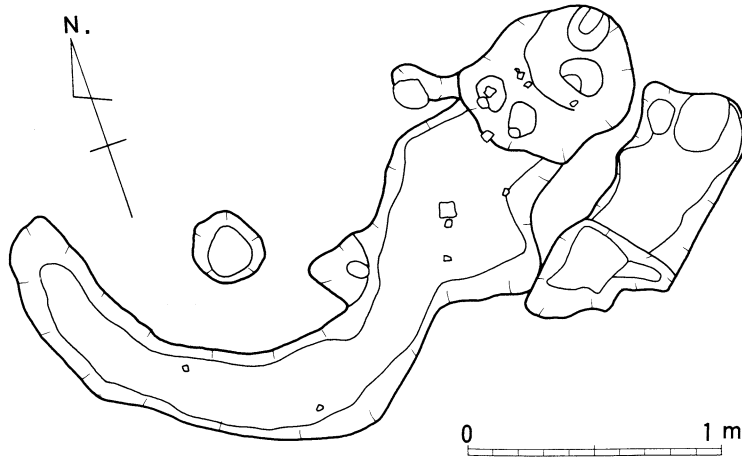
571は小皿である。底部はヘラ切りであるが、粘土の反りが残り雑な印象を受ける。法量は口径9.7cm、底径6.5cm、器高1.8cmである。大きなひびが入り、口縁部も大きく歪み、実用品として製作したものとは考え難い。金雲母を多く含む。572は坏の口縁部である。これも大きく歪んでいるが、復元口径は11.2cmである。573は椀の体部~口縁部で、わずかに内湾する体部である。復元口径は15.8cmである。

半円形溝状遺構 (第142図)

E-2区の周溝墓5号の北側に検出された。埋土が周溝墓2~5号と同様にシラスに見られる軽石を含んでいたため、周溝墓になるのではないかと思われたが、溝は回りきれずに半円形状を呈していた。また、溝の両端は深く、地山もしっかりしており周溝墓が削平を受け

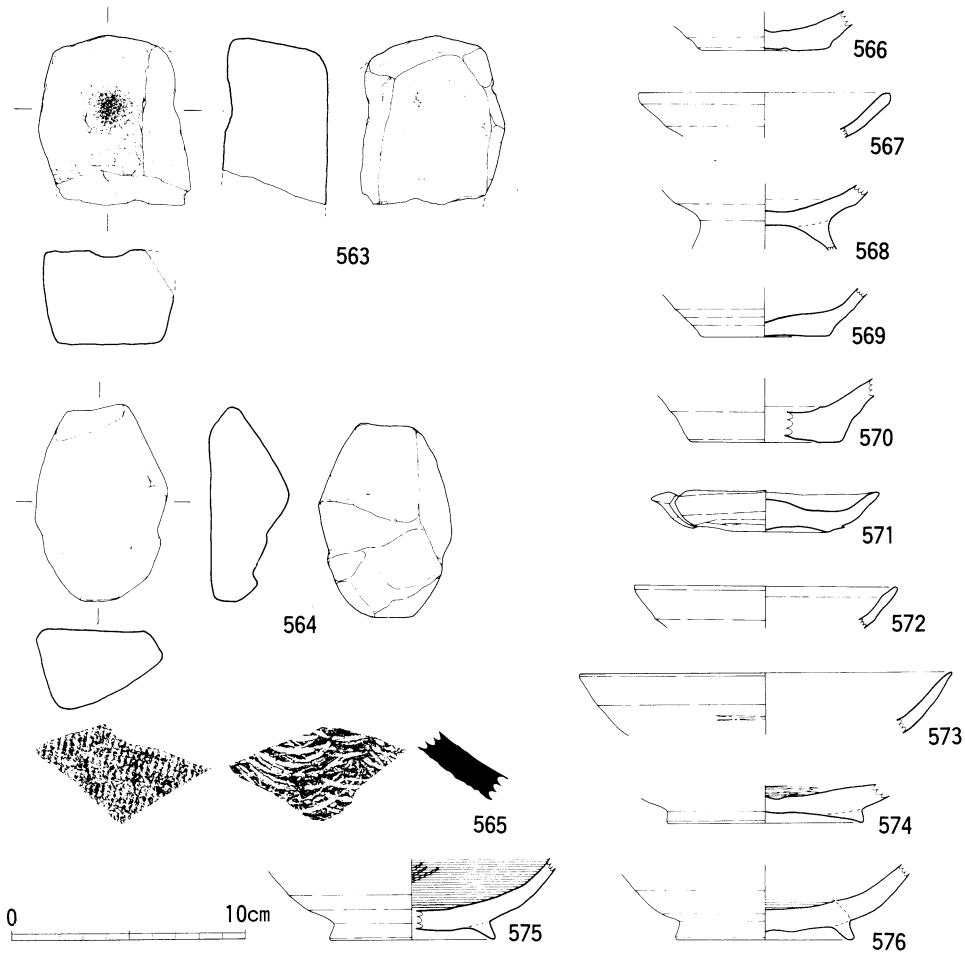
たものとは言えない。

半円形溝状遺構の平面形は幅が35~60cmで長さ約3mほどの弧を描いている。断面はU字状で深さ25cm程を残す。東側はピット状になっており、ここに

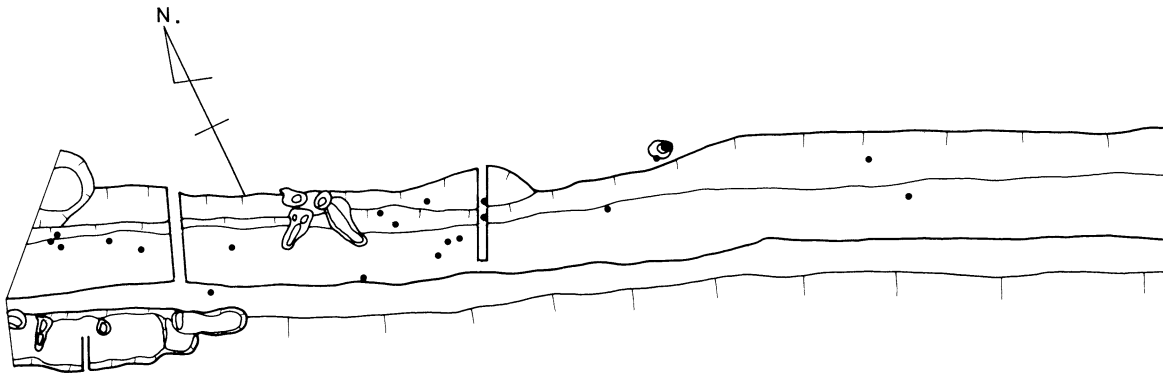


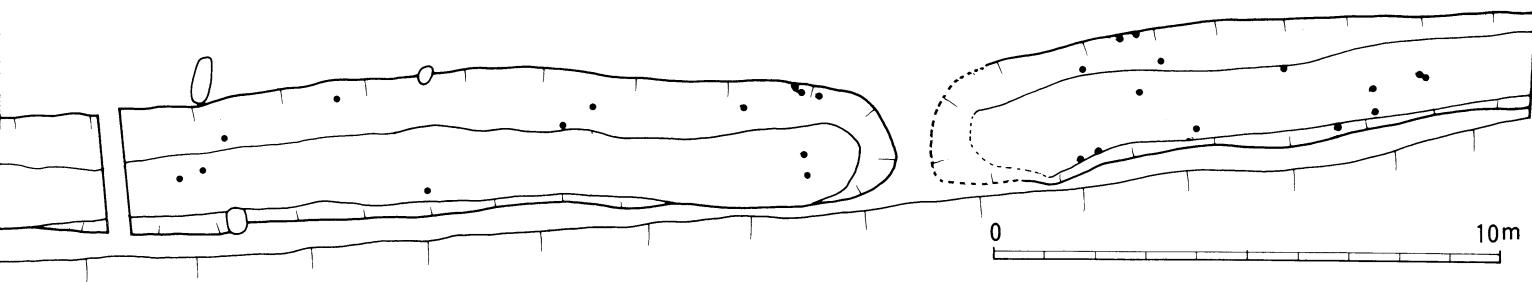
第142図 半円形溝状遺構実測図

集中するように遺物が出土した。遺物は破片であるが16点ほど出土した。



第144図 溝状遺構出土遺物実測図





143図 溝状遺構 3号実測図

これに沿うように長さ1.1m、幅40cmの短い溝が検出された。

出土遺物 (第144図 566)

566は土師器の底部である。回転ヘラ切りの後にナデ調整をなすが、ヘラの痕跡が残っている。復元底径は5.6cmである。

④ 楕円形状遺構

「楕円形状遺構」とは検出面での平面形が楕円形を呈するものであるが、いわゆる土壙墓のそれよりは規模が大きいもので、調査中37基ほど検出した。

しかしながら、検出面でつけられた名称であるため調査を進めていく内に明らかにイモ穴であるものもあった。この種のイモ穴は、昭和20年以前のものであるといわれており、実際、埋土の中に大正3年の桜島の爆発による火山灰が含まれていた。それも実測は取ってあるが、本書には掲載していない。

長楕円形状遺構 (第145図)

C・D-6・7区で検出され「長楕円遺構31」として調査したものである。

長軸方向が北東-南西で、長さ約7.6m、幅1.1~1.7mである。検出面からの深さが2.5~23cm、断面形は横長のU字状でI~II層を埋土とする。遺物は土師器が約100点出土した。

出土遺物 (第147図 577~579)

○土師器 (577~579)

577は椀で、内湾する体部をもつ。丁寧なヨコナデが施される復元口径は16.1cmである。

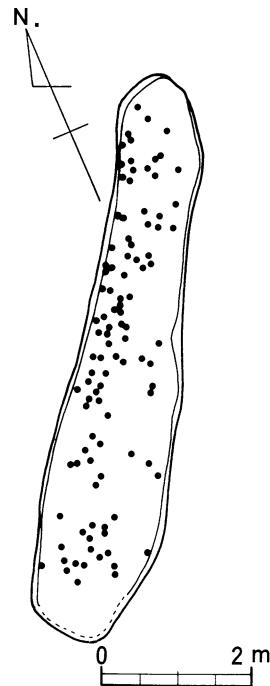
578は椀の底部であると思われる。ヘラ切りで、やや高さがある。復元底径は6.4cm。胎土には金雲母を含む。

597は高台付椀の高台部であると思われる。端部が摩滅を受けるが、つまみ出したような短い高台を張りつける。復元高台径は7.8cm。胎土には礫を含む。

楕円形遺構 (第146図)

B・C-5・6区で検出され、「長楕円遺構33」として調査したものである。

C区にかかる部分は削平を受けて床面しか残らずはっきりしないが、長軸方向がほぼ西北西-東南東で、長さ約13mを残す。幅は2m強はあったと思われる。西側が一段テラス状に



第145図
長楕円形遺構実測図

なっているが、断面形はおおむね横長のU字状である。Ⅲ a層を埋土とし、検出面からの深さ8～30cmを残す。遺物は土師器のほか石など約150点出土した。

出土遺物 (第147図 580～598)

○土師器 (580～592)

580～582は椀の口縁部である。580は内湾する体部をもち、復元口径が19.3cmという大きな椀である。内外面ともに横方向のヘラミガキが施される。581はまっすぐのびる体部で、口縁端部でわずかに外反する。復元口径は16.6cmである。582はやや内湾気味の体部で、口縁端部がわずかに外反する。復元口径は14.6cmである。

583は高台付椀の高台部である。高台はわずかに開き、高さがある。復元高台径は8.2cmである。

592は椀の底部で、ヘラ切りである。復元底径は6.2cmである。底部には、わずかに高さがある。

584～586は坏と小皿の中間的様相をもつものである。584は復元口径が9.1cm、復元底径6.5cm、器高2.2cmである。体部は坏のそれよりも開き気味で短い。585はさらに体部が開き器高が低くなる。底径も狭い。復元口径は8.6cm、復元底径は4.6cm、器高4.6cmである。

586は復元口径9.6cmである。

587、588は小皿である。587は歪みが大きく、法量の最大値がそれぞれ口径8.9cm、底径5.8cm、器高2.6cmである。ヘラ切りであるが素地土の反りをそのまま残している。また底部には板状圧痕も残っている。588もいびつである。復元口径は8.1cm、復元底径4.6cm、器高1.7cmである。器体が割り合い厚い。

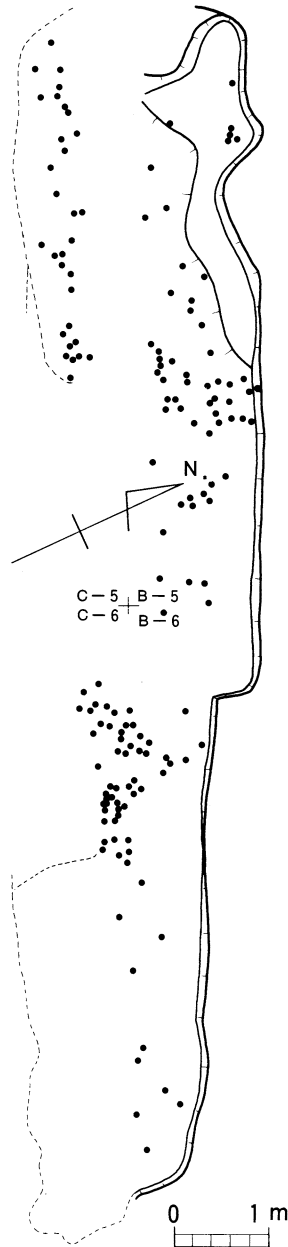
589～591は坏である。589はヘラ切りで、復元口径9.6cm、底径6.0cm、器高2.3cmである。体部下半に回転ヘラケズリを施す。590は復元口径9.2cmである。体部外面に2本の稜を残す。591は坏の底部で、ヘラ切り後に軽くナデている。底径5.1cmである。

○須恵器 (593)

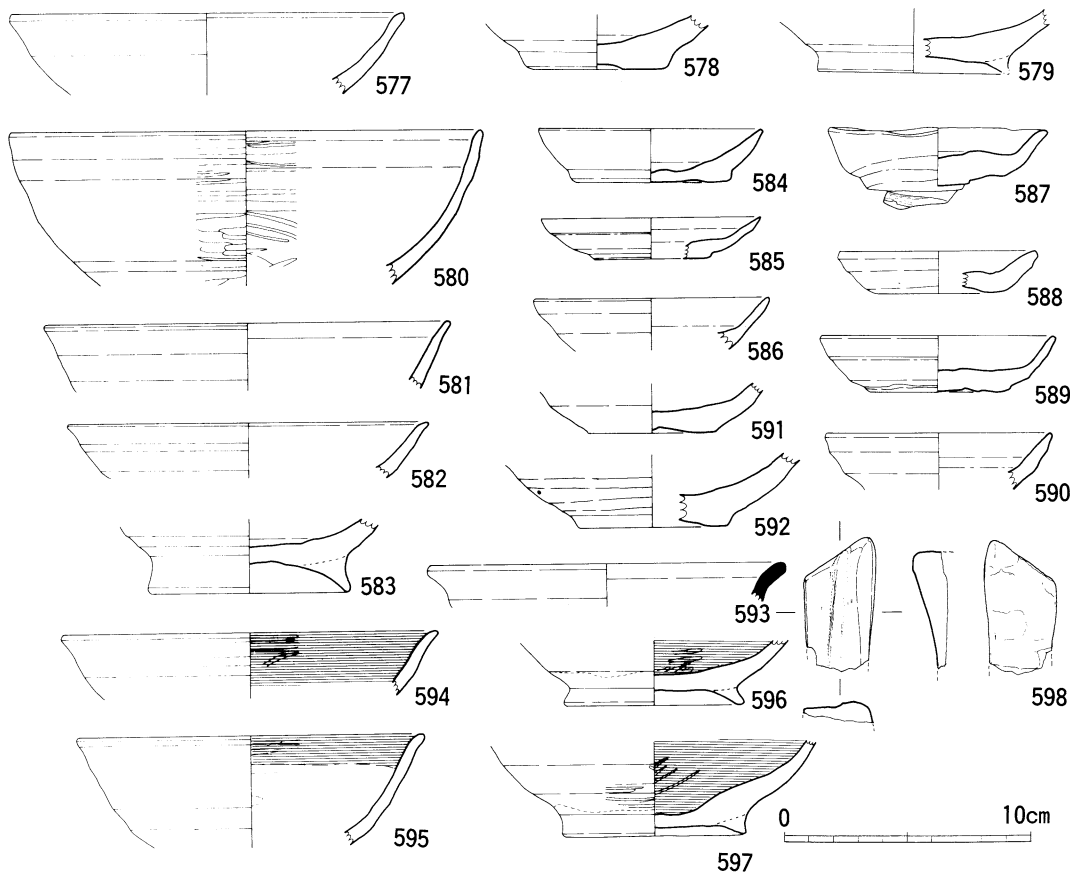
口縁部でくの字状に外反する。復元口径14.6cm。内外面ともにヨコナデを施す。胎土には長石、砂粒を含む。

○黒色土器A類 (594～597)

594、595は体部～口縁部で緩やかに内湾する体部をもち、口縁がわずかに外反する。594は内外面ともに、595は内面のみに横方



第146図
楕円形遺構実測図



第147図 楕円形遺構出土遺物実測図

向のヘラミガキを施す。復元口径はそれぞれ、15.3cm、14.2cmである。596、597は高台付碗の高台部である。596は高台がハの字状に開き、低い。復元高台径は7.4cmである。高台外面はヨコナデであるが、他はすべてヘラミガキである。一方597はつまみ出すような短い高台を張りつけている。高台径は7.6cmである。高台内面を除きヘラミガキを施す。体部内面はいぶしているがつやがなく灰茶褐色を呈している。

○砥石 (598)

598は砂岩製の砥石片である。片面は剝離している。残っている一面は中央がU字状にくぼんでいる。側面も磨きがかかっている。

⑤ 円形遺構

これも楕円形遺構と同様、検出面での平面形がほぼ円形を呈するもので、一般にピットと呼んでいるものよりは規模が大きく、その割に（平面形の径と深さとの比で）浅いもので、調査中、21基検出した。

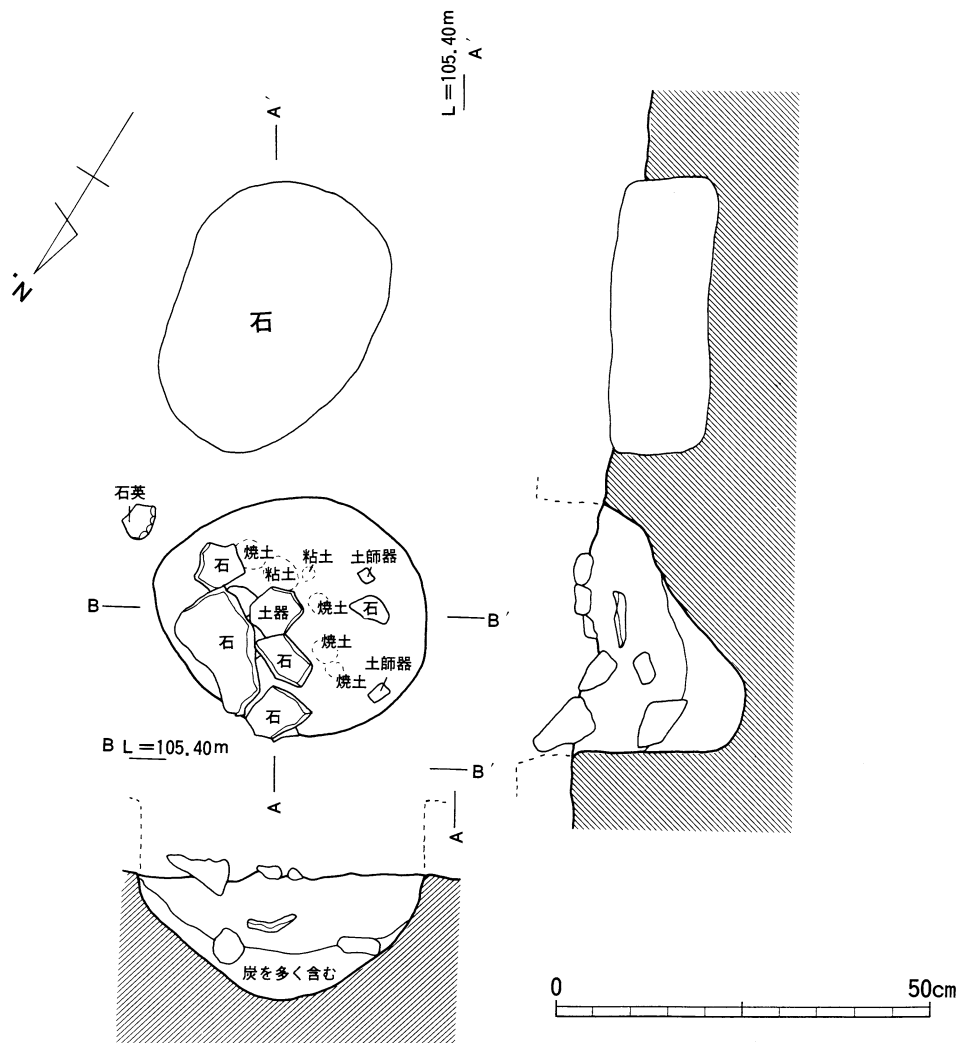
この中にも、戦後に作られたイモ穴と思われるものがあり、それは掲載していない。

焼土を伴う円形遺構 (第146図)

円形遺構としたもののうち焼土を伴うものが数基見られた。炉と考えられるが、これらを一概に炉として扱うには疑問である。第146図はそのうちのひとつでC-5区で検出された。

これは36×32cmのほぼ円形の平面形をもち、断面形はU字状である。検出面から約10cmほど削ってしまったが、深さ約15cm程を残す。埋土は2層に分層できる。上層では土師器、粘土、石などが含まれている。粘土の中には植物の繊維が含まれており漆喰とでもいうべきである。下層は炭を多く含んでいる。

この遺構の南東に、37×27×12cmの大きな石が配置し、この円形遺構に関連するものと思われる。

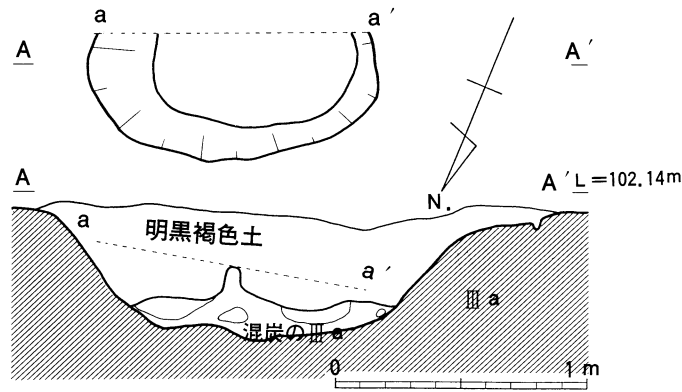


第148図 焼土を伴う円形遺構実測図

円形遺構21（第149図）

E-5区に検出されたが、調査範囲の境界にかかり部分的にしか調査できなかった。

Ⅲ a層を掘り込み、長軸が約11.5cm短軸方向は50cmの範囲でしか調査できなかったが、楕円形状の平面形で、深さ約50cmを残す。埋土は2層に分層でき、上層はⅡ層と比較してやや明るい黒色土であり、また、下



第149図 円形遺構21号実測図

層はⅢ a層に炭が混在している。炭がブロック状に入る部分もある。土師器など25点が出土した。

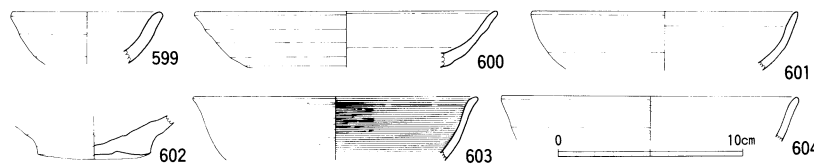
円形遺構出土遺物（第150図 599～604）

599～601はD-9区の円形遺構5出土土師器である。599は小振りの椀である。内湾気味の体部で、復元口径は8.2cmである。600は皿で復元口径16.4cmである。内湾気味の体部で内面には煤が付着している。灯明皿として使われたのであろうか。601は内湾する体部をもつ椀である。復元口径14.4cmである。内面が赤褐色に焼けている。

602はB-8区の円形遺構14出土土師器である。底部円盤に体部がわずかに残っている状態である。ヘラ切りで底径は6.1cmである。底部はやや高さがある。

603はC-8・9区の円形遺構7出土の黒色土器A類椀の口縁部である。内湾する体部で口縁端部に至り外反する。復元口径は15.4cmである。内外面ともにこまかい横方向のヘラミガキが施されている。内面は灰茶褐色を呈する。胎土には石英粒が含まれる。

604は円形遺構21出土の土師器である。まっすぐのびる体部で復元口径16.2cmである。内外面ともに横方向のヘラミガキが施され、黒色土器A類の未製品であると思われる。



第150図 円形遺構出土遺物実測図

⑥ ピット

ピットは調査地内全域にわたって百数基確認された（第119図参照）。建物の柱穴として認識できるものではなかった。

調査方法として埋土は確認しているが、埋土状況まで確認したものは10基程度に留まった。したがって、出土遺物がどういった状況（流れ込み、遺物の廃棄など）を示すのかま

では把握できない。

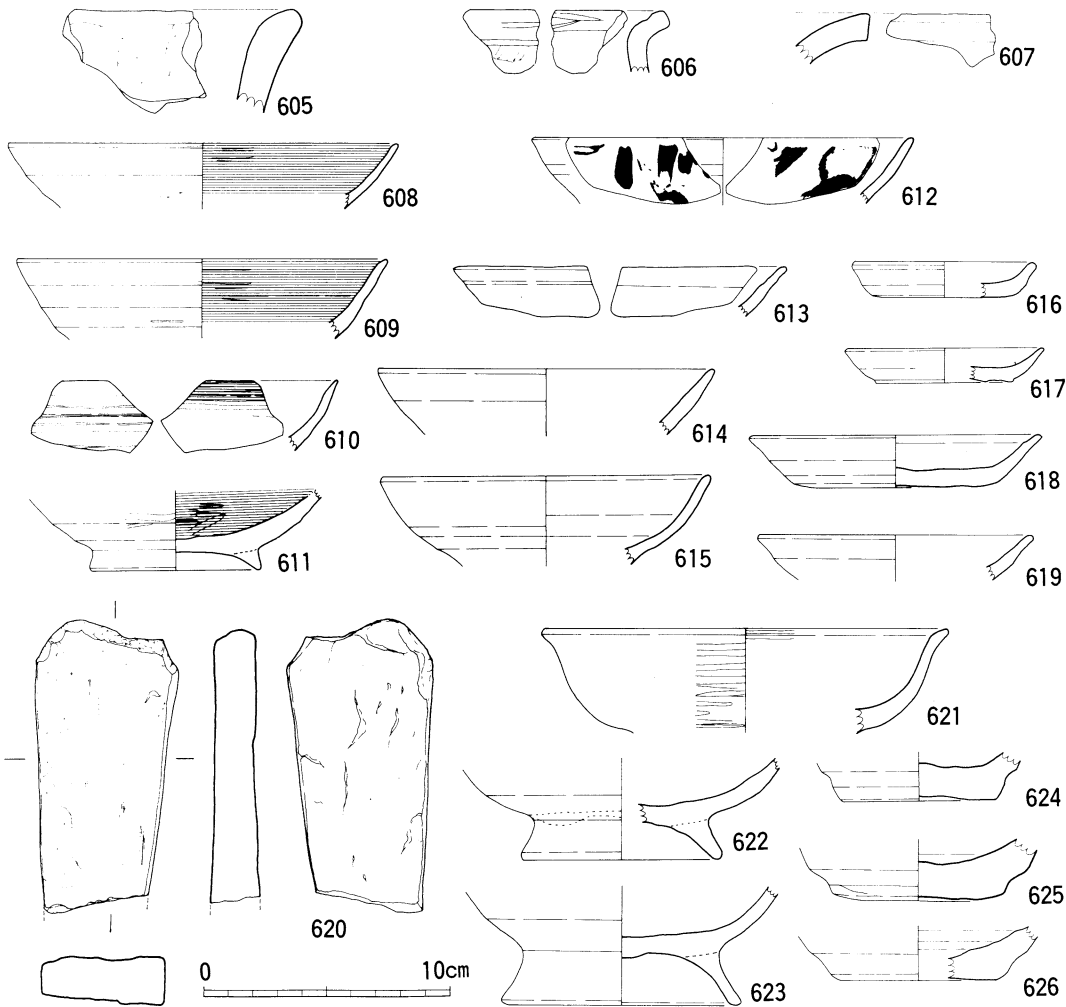
出土遺物 (第151図 605~626)

○黒色土器A類 (608~611)

608はピット17から出土した椀である。内湾気味の体部で内外面ともに丁寧な横方向のヘラミガキが施される。復元口径は15.8cmである。

609はピット26から出土した椀である。やや内湾気味の体部で、内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。端部が若干赤く焼けている。復元口径15cmである。

610はピット79から出土した椀で、内湾する体部をもつ。内面端部1cmの範囲に黒色のいぶしがかかる。内外面ともに丁寧な横方向のヘラミガキが施される。



第151図 ピット内出土遺物実測図

611は高台付碗の高台部である。高台はわずかにハの字状に開き、太い。体部は内湾するものと思われる。外面下から2cmと高台部内面がヨコナデである以外は横方向を主にしたヘラミガキを施す。高台径は6.9cmである。

○土師器 (605～607、612～619、621～626)

605～607は甕の口縁部である。

605はピット12出土のもので、わずかに外反する口縁である。調整は胴部内面が横方向のヘラケズリで、口縁端部が横方向のナデ、胴部外面は不定方向のナデを施す。外面は黒褐色、内面は赤茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石、金雲母、砂粒を含む。

606はピット56出土のもので、口縁部がくの字状に外反する。調整はナデで、内外面ともに黒褐色を呈する。

607はピット9出土のもので、外反する口縁の先端部分で、ヨコナデ調整を施す。外面は薄い黒褐色を、内面は淡黄茶褐色を呈し、胎土には長石、石英、砂粒を含む。

612～615、621は碗の口縁部～体部である。

612はピット89出土の墨書土器である。文字は一見「小」とも読めるがかすれてはっきりしない文字もあり判読できない。後日、赤外線写真撮影を行う予定である。器そのものは内湾する体部をもち、ヨコナデ調整を施す。復元口径は15.5cmである。

613はピット50出土のものである。口縁に大きな歪みがあり、体部の形態もはっきりしないがほぼまっすぐのびるものであると思われる。調整はヨコナデである。胎土には長石、石英、角閃石を含む。

614はピット63出土のもので、やや内湾気味の体部をもち、復元口径は13.6cmである。ヨコナデ調整である。

615はピット41出土のものである。内湾する体部で、端部が丸くなる。恐らく高台が付くものである。復元口径は13.4cm。ヨコナデ調整である。

621はピット35出土のもので、体部は内湾し、口縁は大きく外反する。復元口径16.4cm。これも高台が付くものであると思われる。内面は剝離が著しいが、内外面とも横方向のヘラミガキを施したものであると思われ、黒色土器の未製品であろう。胎土には礫や金雲母、石英を含む。

616～619は小皿である。

616はピット28出土のもので、復元口径7.5cm、復元底径4.9cm器高1.5cmである。底部はヘラ切りで、その他はヨコナデである。胎土に礫を含む。

617はピット27出土で、復元口径8.0cm、復元底径5.7cm、器高1.5cmである。ヘラ切り底であるが、わずかに高さがある。底部を除きヨコナデ調整である。

618はピット62出土のものでやや大きめで、しっかりした作りである。復元口径11.8cm、復元底径8.3cm、器高2.1cmである。ヘラ切り底であるが周辺部分はナデている。その他内底面もナデであるが、体部はヨコナデである。

619はピット71出土で、復元口径は11.1cmである。ヨコナデで胎土には長石や砂粒を含む。

622、623は高台付椀の高台部である。

622はピット21出土のものである。高台はハの字状に開き、高さがある。復元高台径は8.2cmで、調整はすべてヨコナデである。

623はさらに高さがある。復元高台径は9.8cm。胎土には長石、角閃石、石英ほか砂粒を含む。ピット8出土である。

624～626は椀の底部であると思われる。

624はピット29出土で、ヘラ切り底である。復元底径は6.4cm。内底面は赤く焼けている。

625はピット75出土でやはりヘラ切り底である。復元底径は7.2cmである。

626はピット10出土のものでヘラ切り底であるが、ナデ調整も更に施している。復元底径は7.1cmである。これも内底面は赤く焼けていた。これら3点共に、底部を除き調整はヨコナデである。

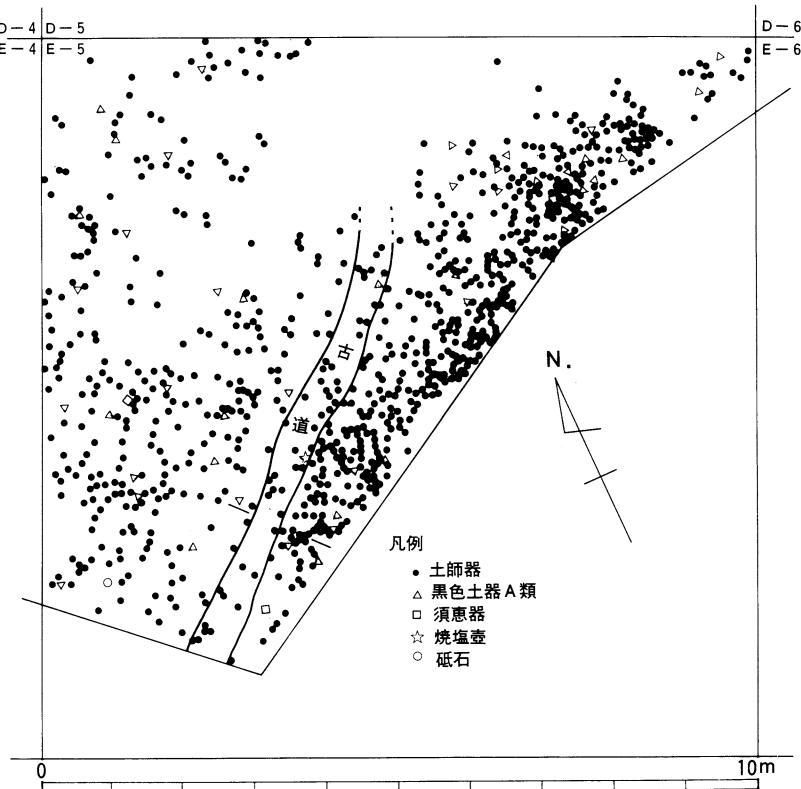
○砥石 (620)

砂岩製の砥石で、折れている。成形ははっきりしない。上面と両側面はほぼ全面にわたって使用している。下面は突出した部分だけが研磨されている。

⑦ 古道 (第152、153図)

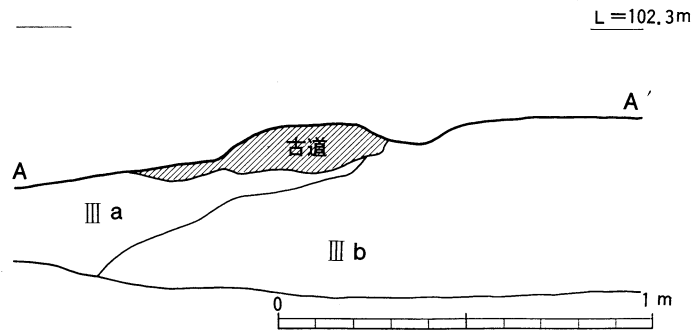
E-5区のほぼ中央に北東-南西方向に通るように検出された。幅が40~60cmで、距離にして6mほどが残り北側へのびる部分ははっきりしない。古道と認識できる硬く踏み締められた部分は断面図を見ればわかるようにⅢa層に乗っており、その成分もⅢa層と同様である。

遺物の集中もこの付近が特に多く古道に関連するも



第152図 古道付近遺物出土状況

のもあるかもしれない。しかし調査地内でⅡ・Ⅲ a層に関する範囲ではE-5区が最も標高が低く、北側からの斜面がこの付近で一旦平坦になり、さらに南側の谷に落ちるといった地形を形成している。また、遺物



第153図 古道断面図

も20m離れた地点での接合もある。したがって、これらの遺物は古道に関連するというよりは、流れ込みとしてとらえるべきものであるといえよう。

2 出土遺物

Ⅱ層及びⅢ a層の出土遺物はほとんどが土師器で、そのほか黒色土器、須恵器、焼塩壺、紡錘車、滑石製品、砥石などがわずかずつである。以下順を追って説明する。

① 土師器

遺構内のものと異なり包含層内の土師器はほとんどが破片であり、復元が可能なものはわずかである。復元できるものも小皿、坏といった小振りのものに偏っている。

したがって、破片は口縁部～体部や底部、高台といった特徴のある部分を取りあげた。破片の法量は復元したものであり、榎崎 A 遺跡出土土師器は特に歪が大きく、誤差は考慮していただきたい。また本書に取りあげたものはあくまで何とか資料化しうるものだけであるから、あくまでも当遺跡の確率的な事実である。

椀

(第156図 621～653)

体部には2種類の形態がある。ひとつは直線的にのびるものであり、もうひとつはやや内湾気味のものである。ともに深さがあり、器体は比較的薄く、胎土に肉眼で明確に確認できる石英、長石や角閃石等の鉱物や砂粒を含む。赤褐色や茶褐色を呈するものが多い。

627は復元口径13.6cm、復元高台径6.5cm、器高6.3cmの高台付椀である。やや内湾気味の体部をもち、口縁部で外反する。体部外面下半に横方向のケズリを施し、内面はわずかにヘラの痕跡を残す丁寧なミガキを施している。高台はハの字状に開き1cmほどの高さがある。

628、635はやや内湾する体部をもつ。628は内外面ともにヘラミガキを施し、淡褐色を呈する。635はヨコナデで赤茶褐色を呈する。

629～633、636～638、644は体部はまっすぐのびる口縁部がわずかに外反し、ヨコナデを施す。復元口径12.2～14.8cm。632はやや厚手で、淡褐色を呈する。

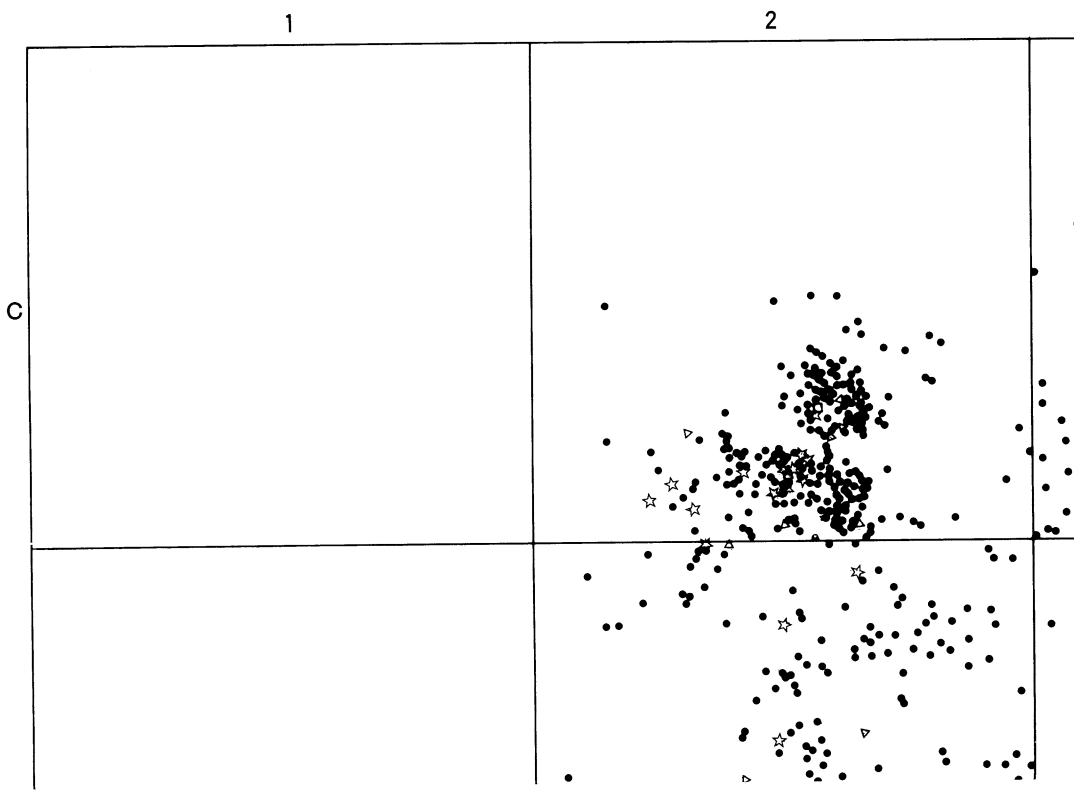
634は口縁部までまっすぐのびるもので、復元口径が15.6cmである。ヨコナデを施し、淡褐色を呈する。647も形態はほぼ同様である。赤茶褐色を呈する。

639～643も口縁部までまっすぐのびるもので、復元口径10.7～12.8cmと634よりやや小さい。

645、646は口径不明であるが体部がまっすぐのびるものである。淡茶褐色を呈している。やや厚手である。641もこれに類似する。

648～653は底部である。(復元)底径が4.9～7.0cmである。すべてヘラ切り底である。胎土に石英、長石他砂粒を多く含み、赤茶褐色、暗茶褐色、茶褐色である。

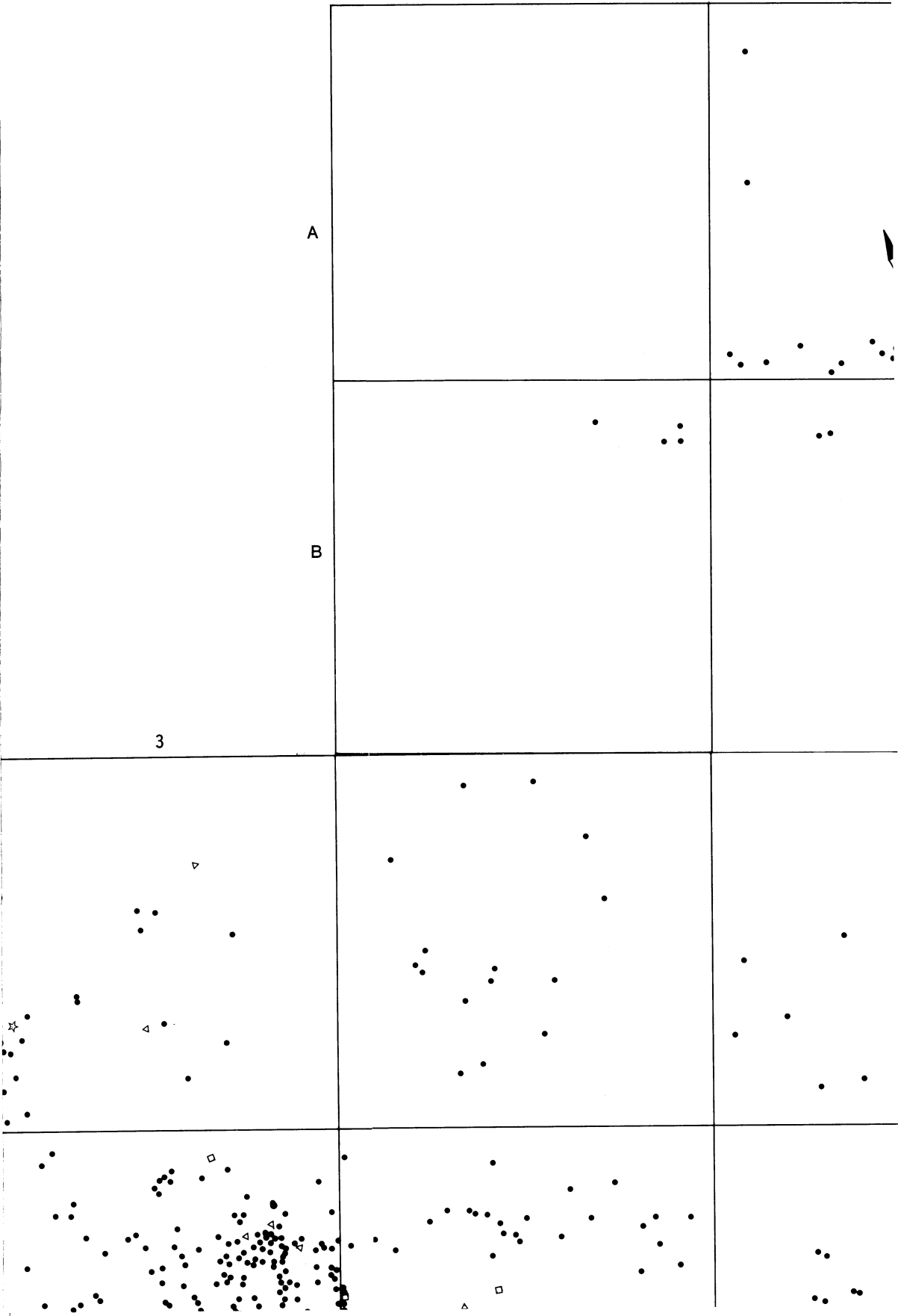
このタイプはほとんどⅢ a層出土であり、D-3～5区、E-2～5区に集中している。



A

B

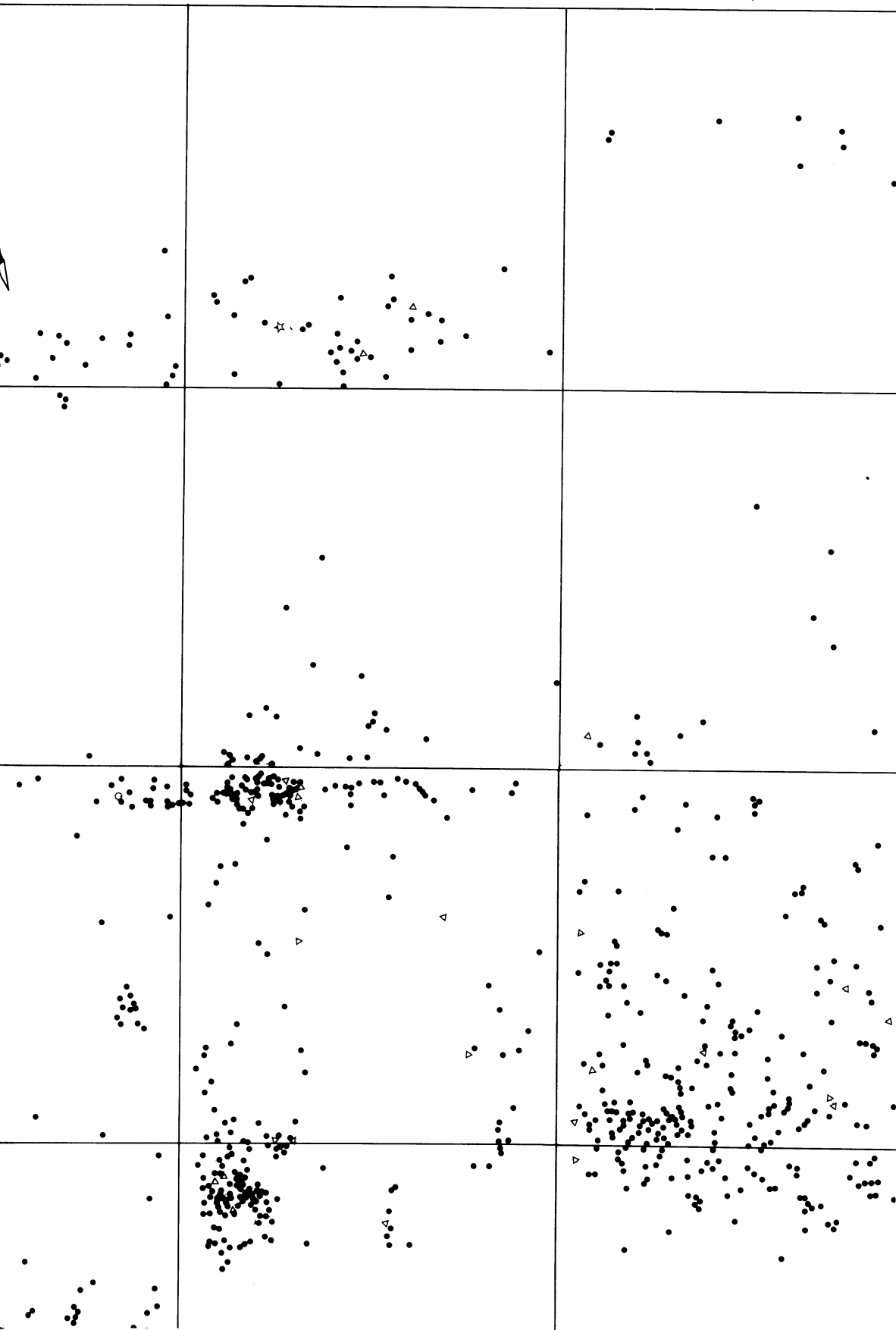
3

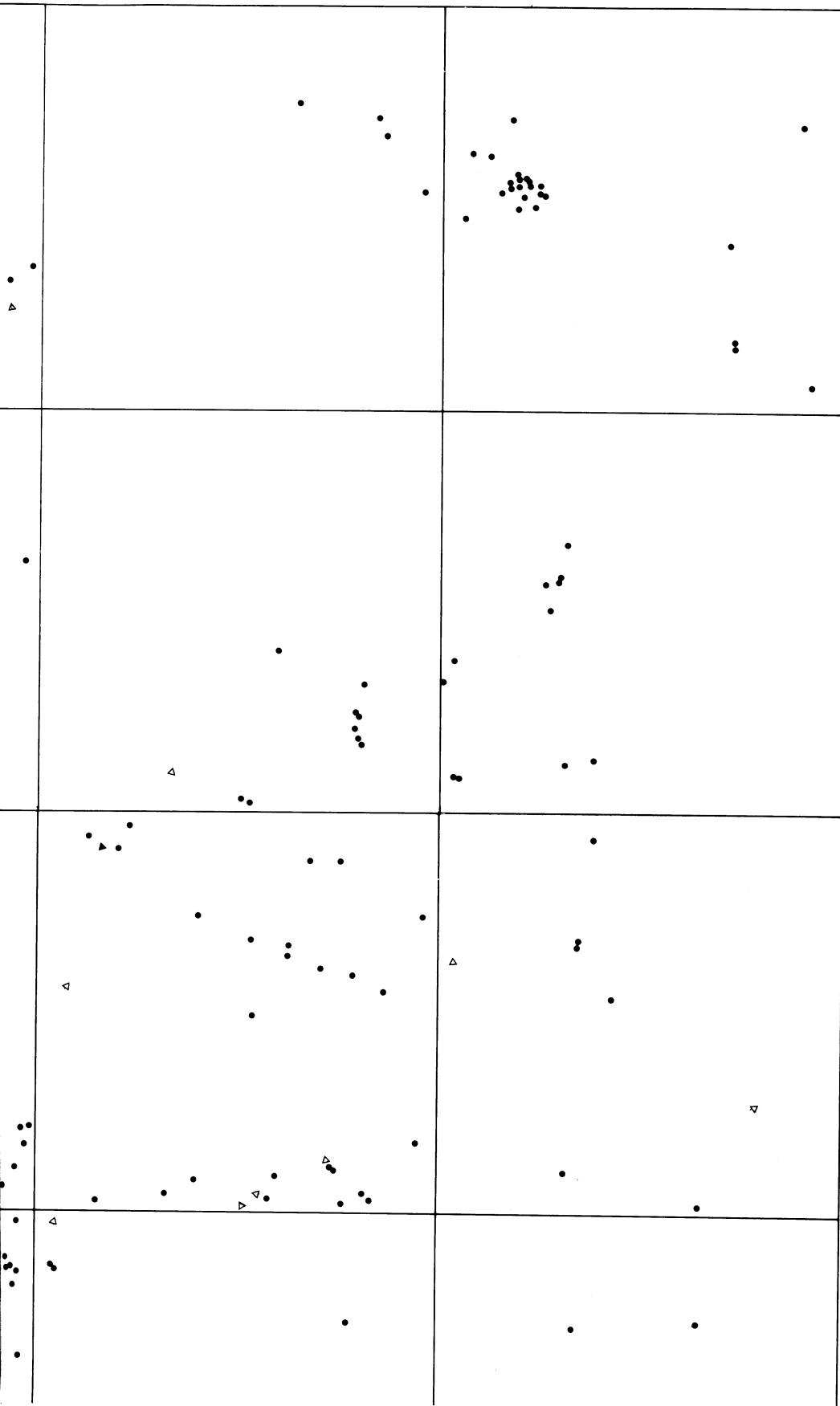


5

6

7

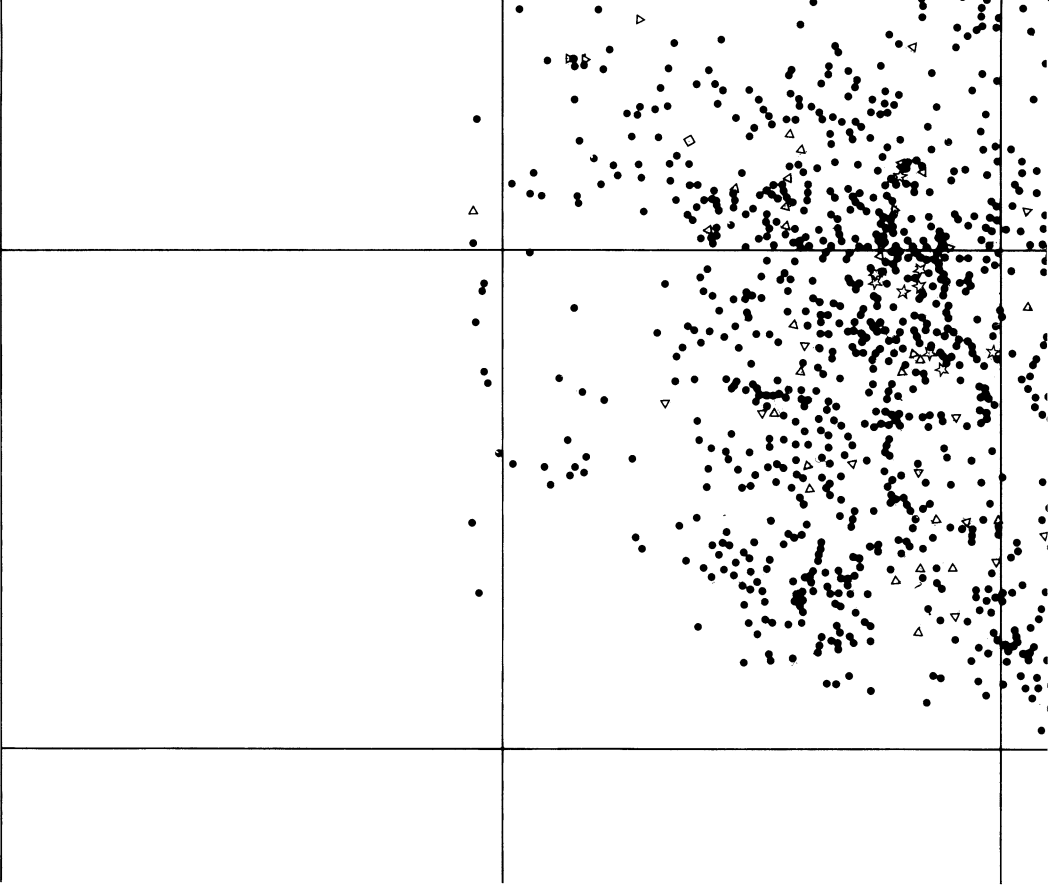


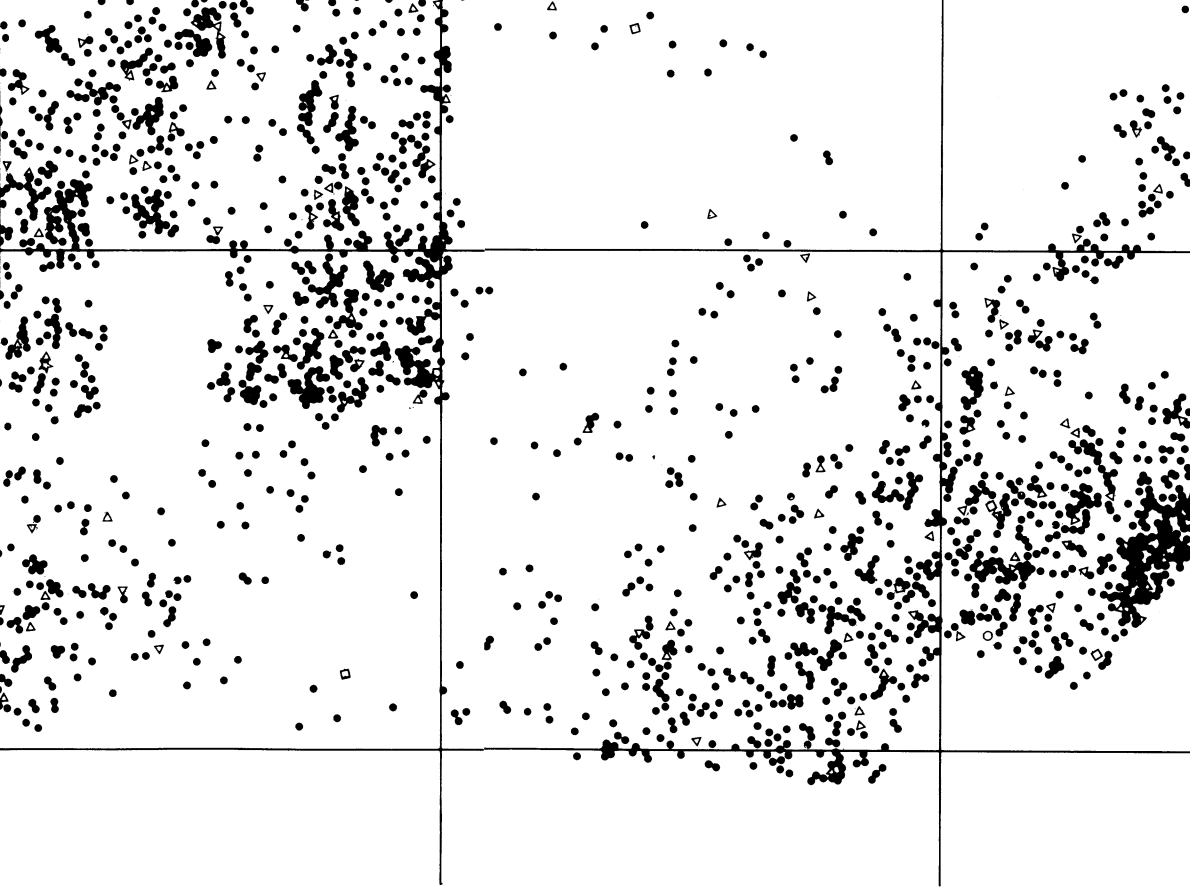


D

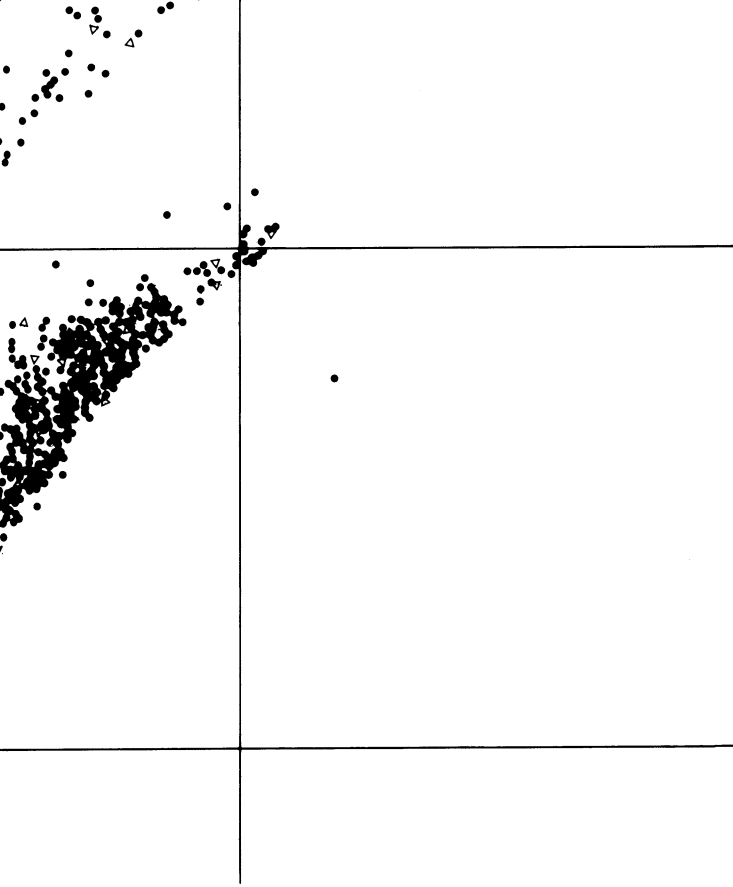
E

F





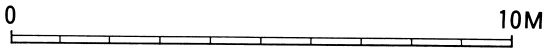
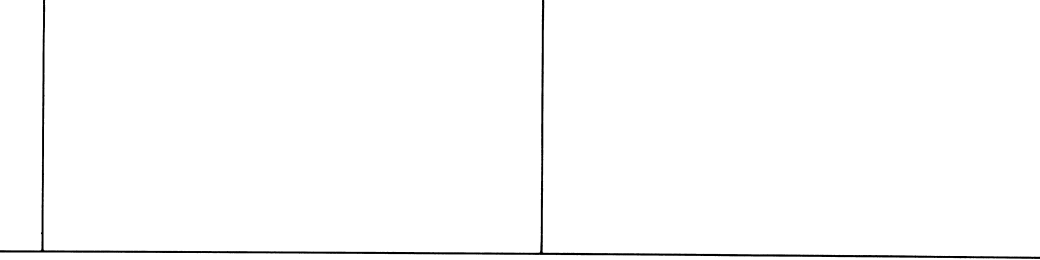
第154図 平安時代遺物



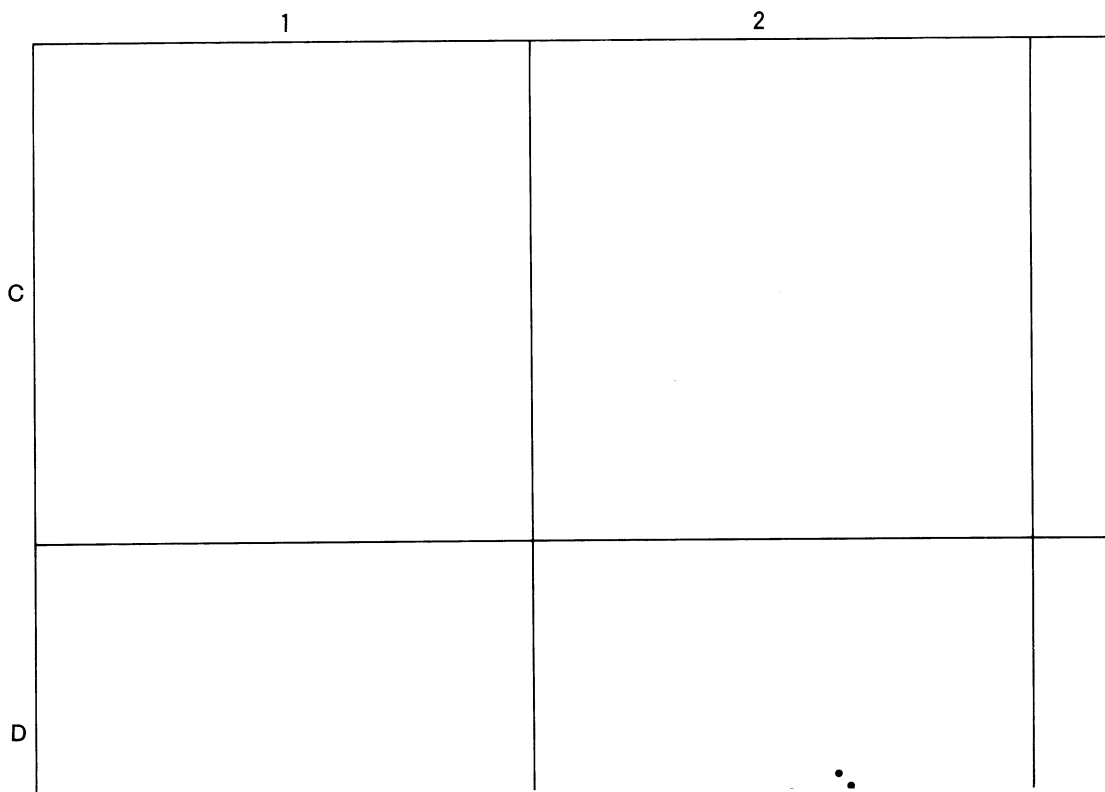
凡例

- △ 黑色土器
- 須惠器
- 砥石
- ☆ 烧塩壺
- 土師器

出土狀況 (Ⅲ a 層)



233 – 234



4

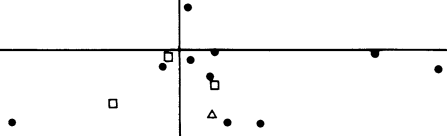
5

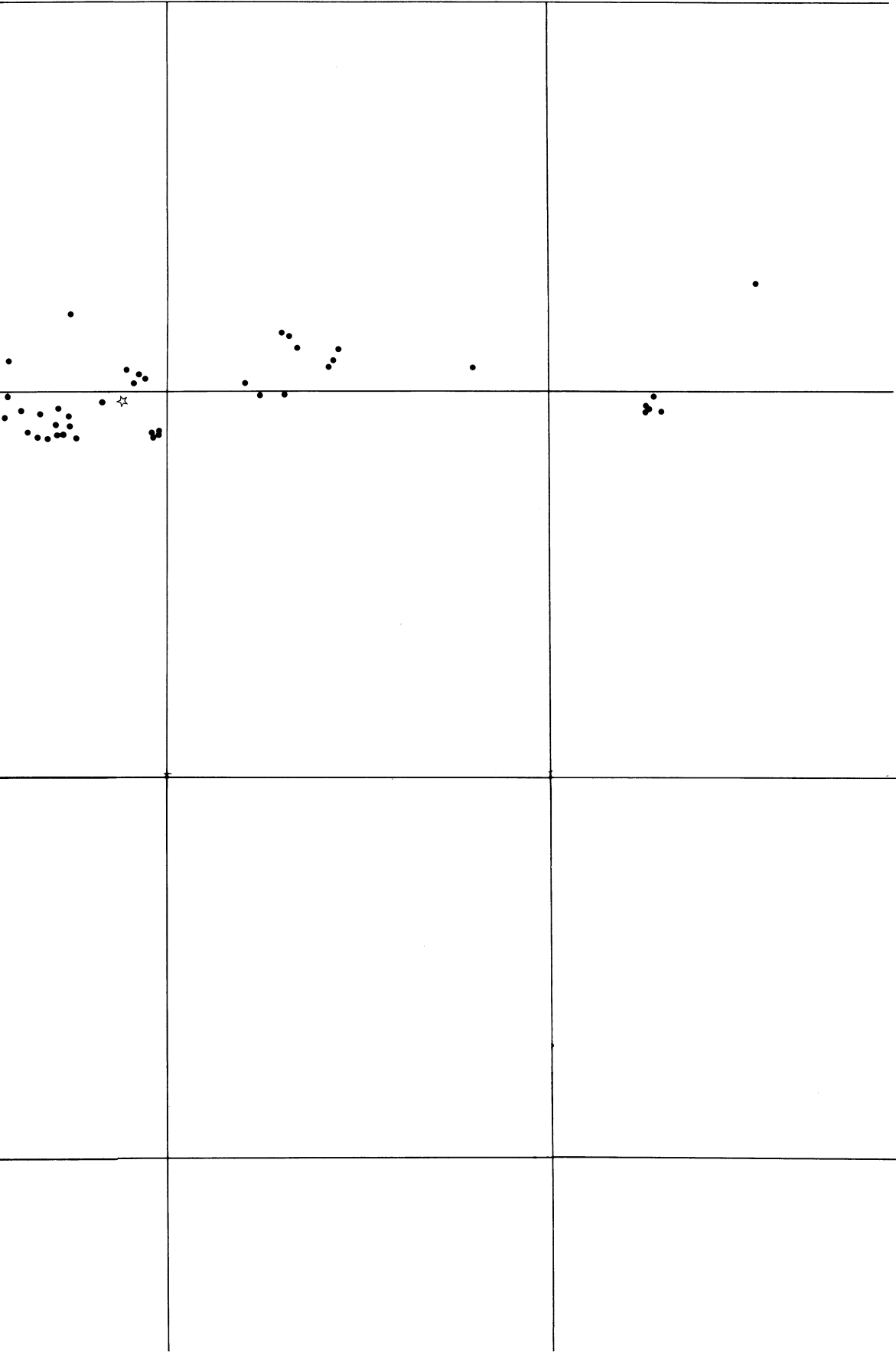
A



B

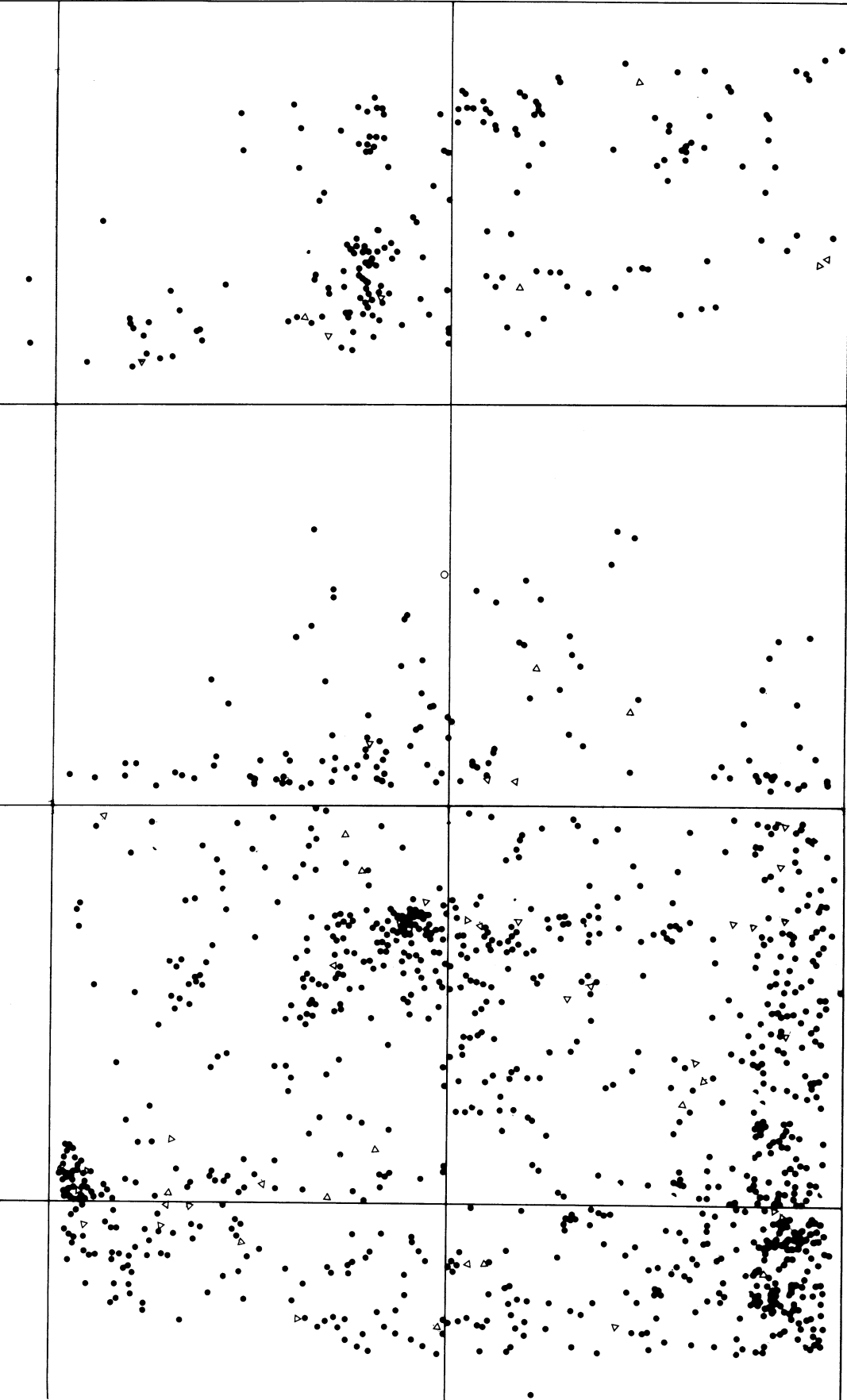
3





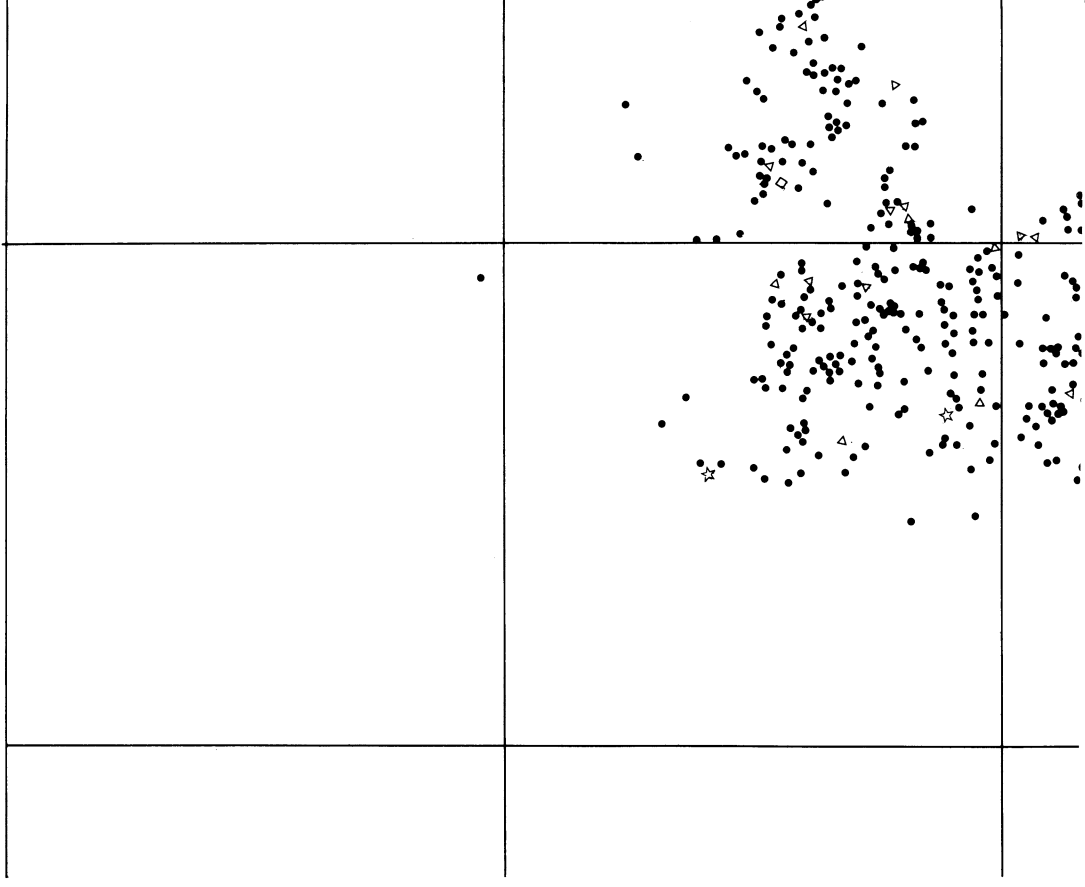
8

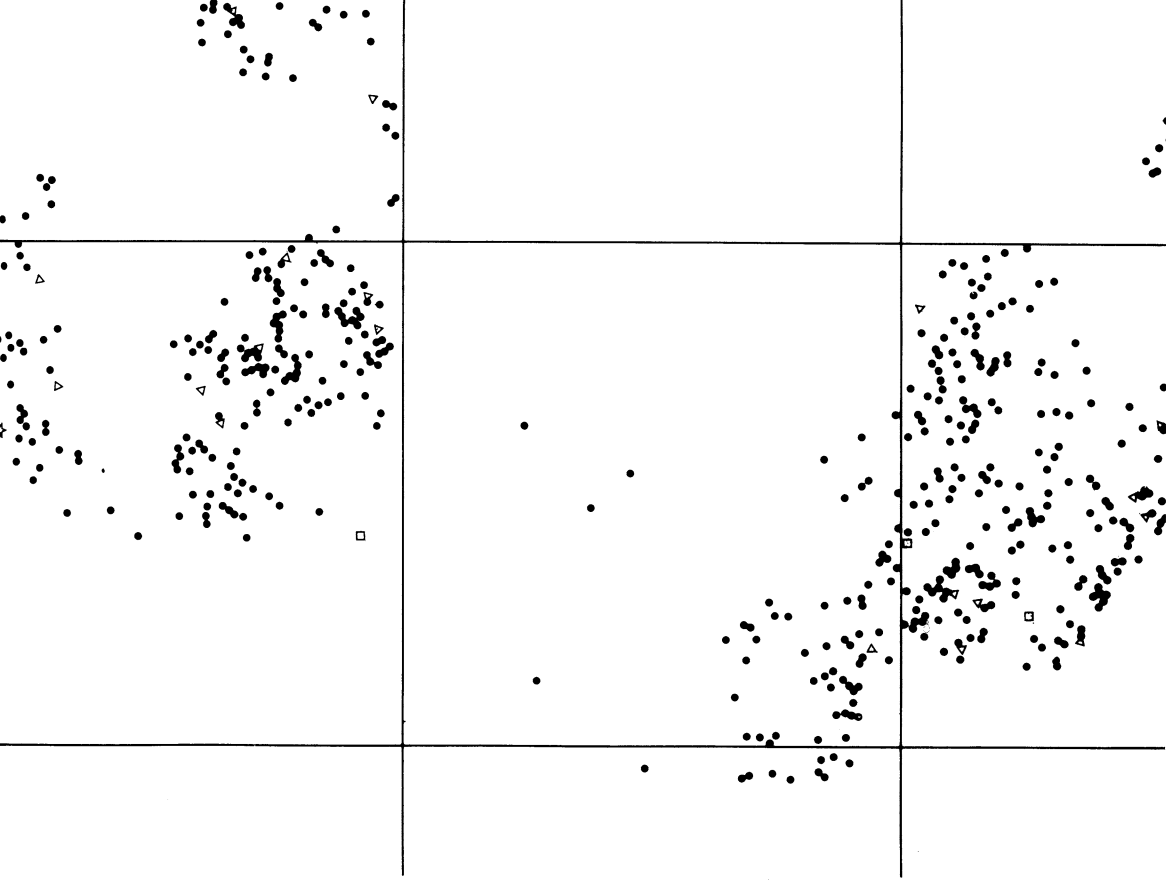
9



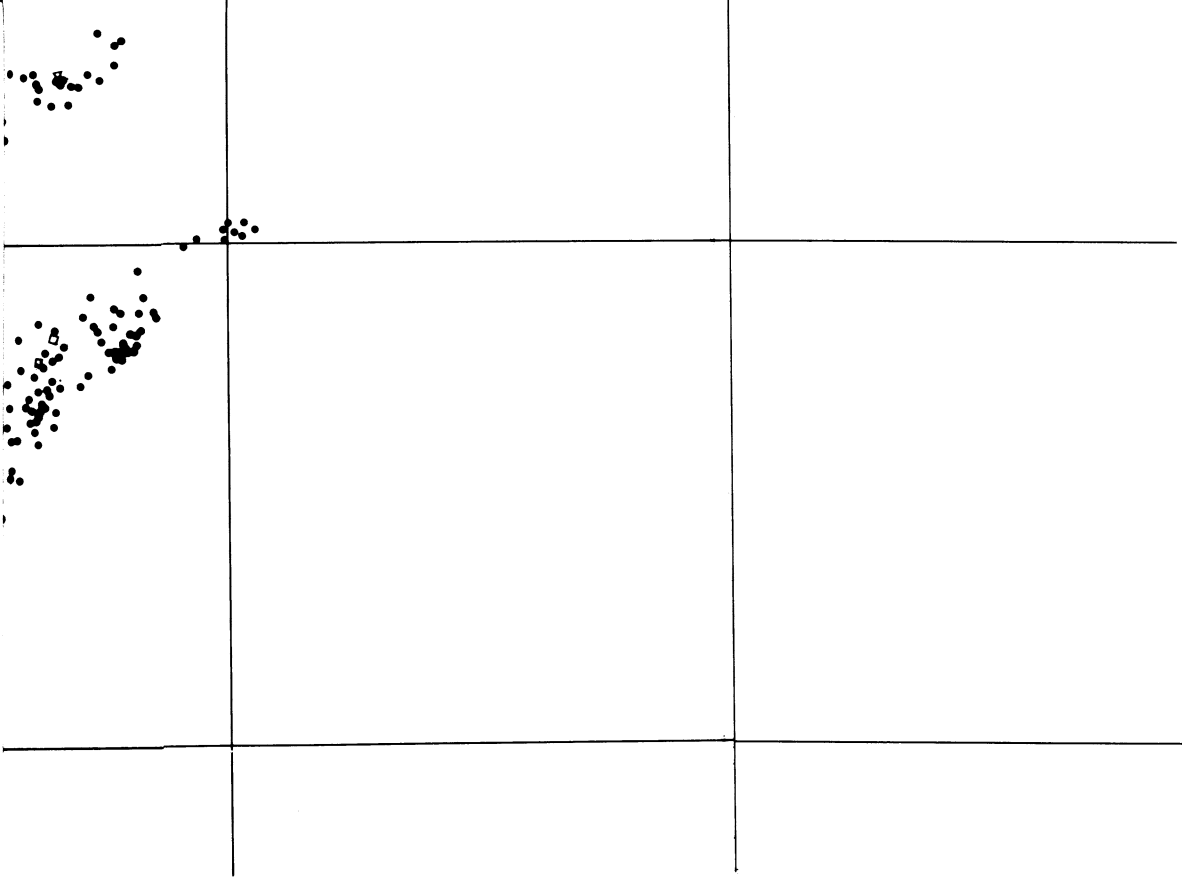
E

F

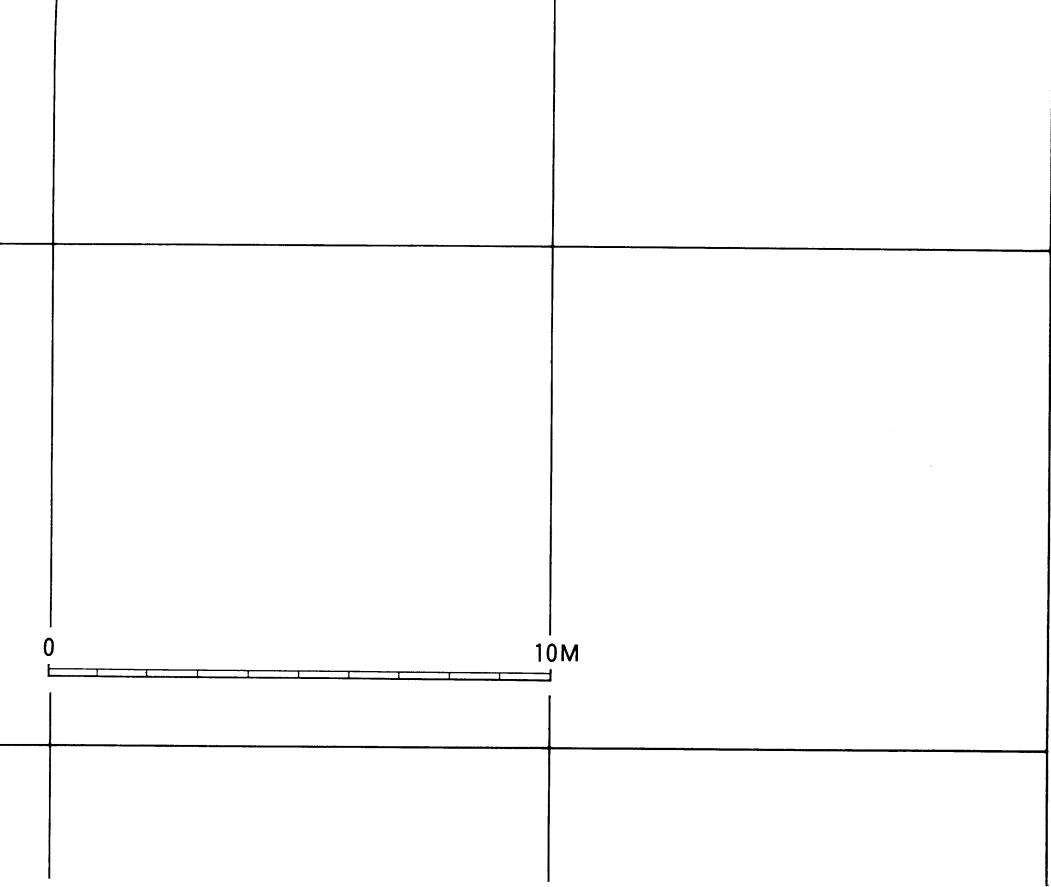




第155図 平安時代遺物



出土状況 (Ⅱ層)

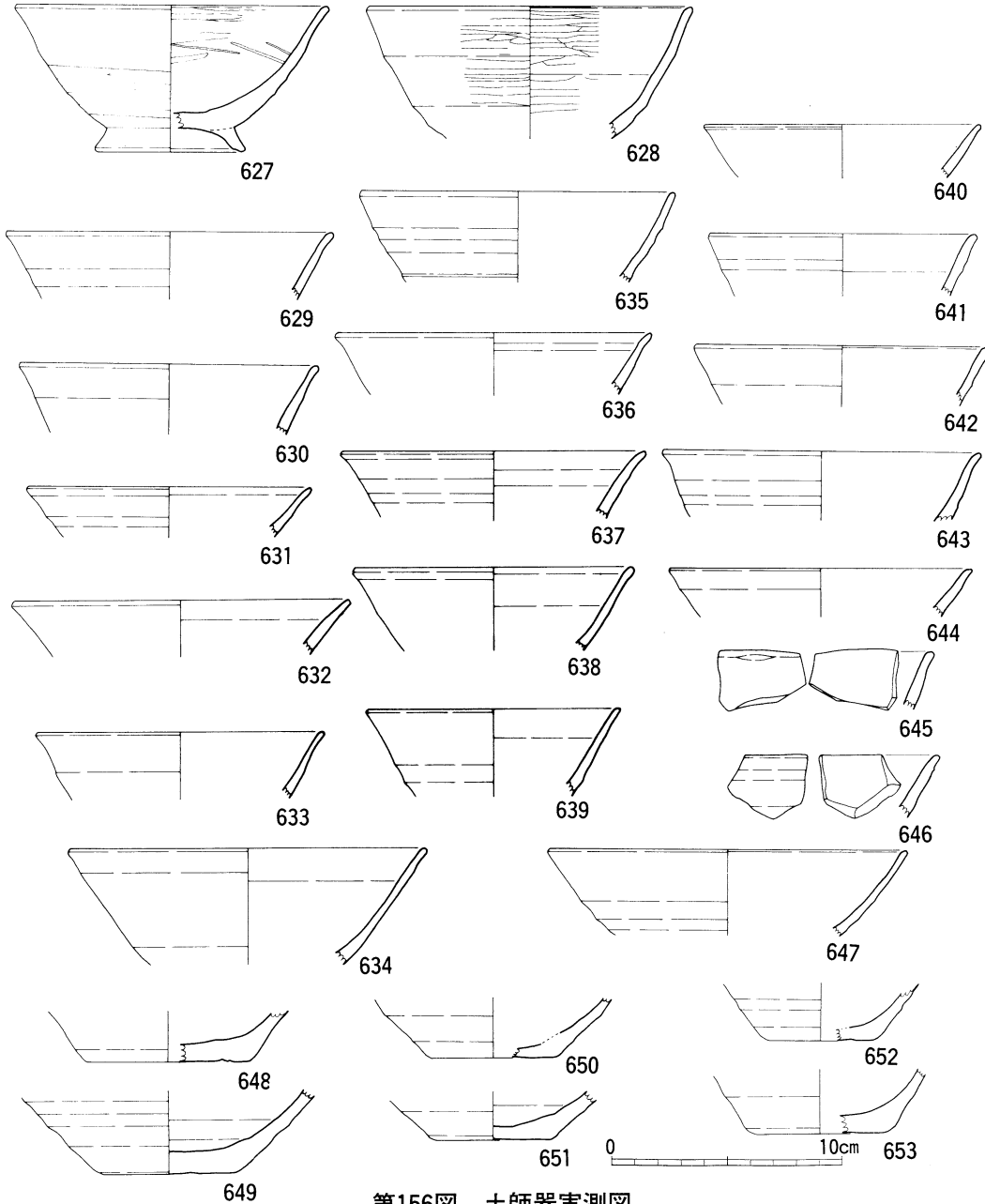


(第157図 654~669)

体部が内湾する椀である。この中には口径が大きいものと小さいものがある。ここでは仮に13.5cmを境界として分類してみた。椀1よりも精良土を使ったものが多く、粒子の大きな鉞物や砂粒を使ったものは少ない。

第157図が口径の大きいものである。

654は口縁部の成形の際、強めに押えたらしく、口縁の外面に凹みをもつ。内面は剥離し



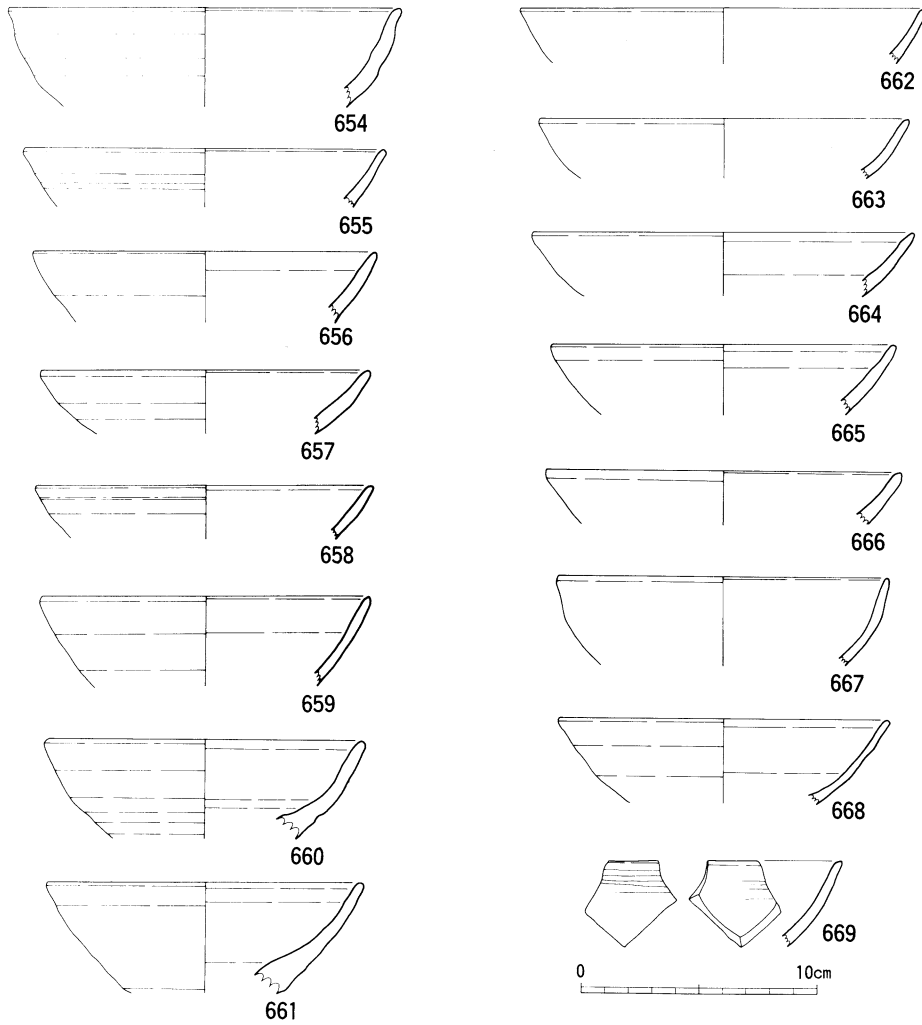
第156図 土師器実測図

て詳細な観察はできないが、ヘラミガキを施しているようである。外面はヨコナデであり赤く焼けている。復元口径16.8cm。669もほぼ同様の技法を有し、口径ははっきりしなかったが、内面と外面の口縁付近1cmの範囲にヘラミガキを施している。

655、657、662、666、667は654同様口縁外面に凹みをもつものである。調整はすべてヨコナデである。復元口径は14.2~17.4cmである。このうち662、667は内面が赤く焼けているのが特徴である。

656、658、659、663~665、668はほとんど表面の変化がなく体部が内湾するものである。復元口径は14.2cm~16.3cmである。665のみ内面に稜をもつ。これらすべてがヨコナデ調整のみである。

660、661は復元口径13.6cmで、器体がやや厚いものである。内外面ともに調整はヨコナデで、淡茶褐色を呈す。661は外面に煤が付着している。



第157図 土師器実測図

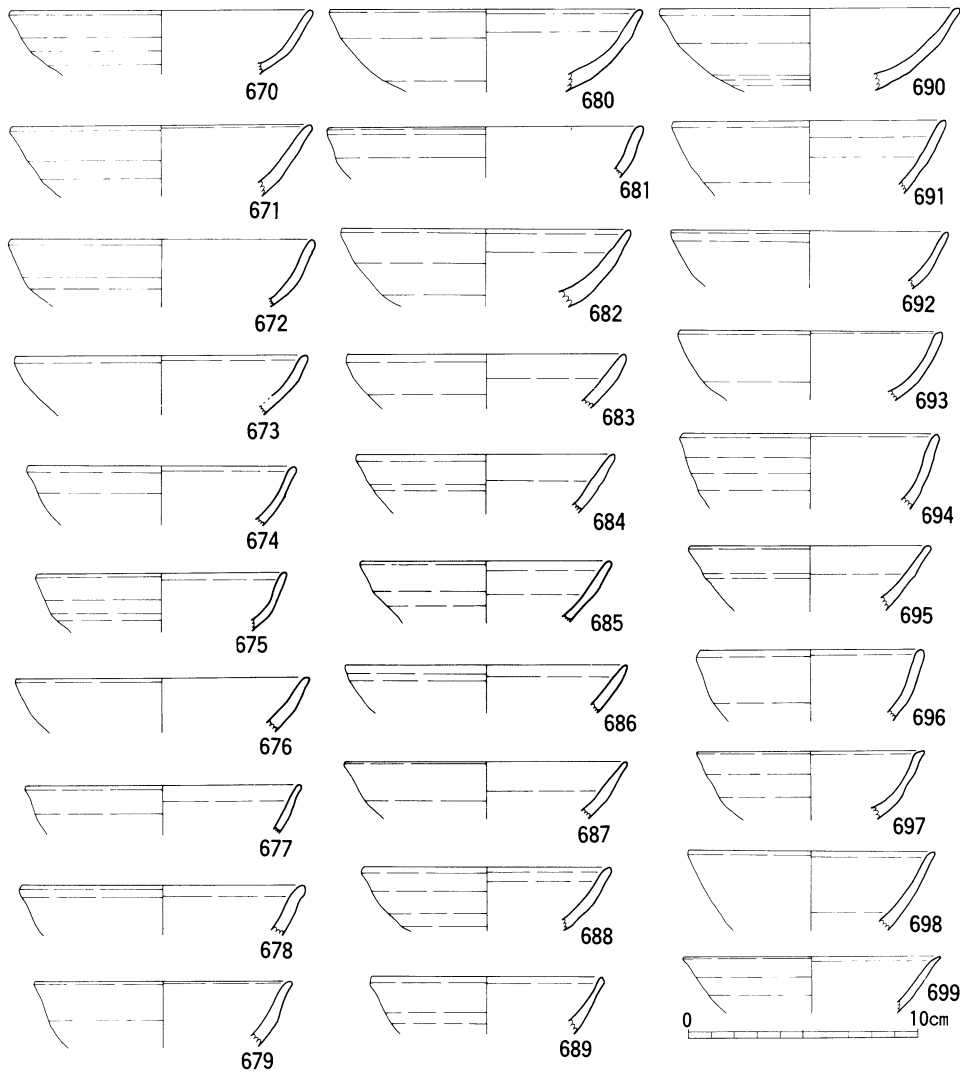
これらは遺跡内にばらついて出土しているが、C-2区~E-2区の一群と、D-6区の一群、C-8区の一群といった3か所の集中がある様である。これも相対的にはⅢa層出土のものの方が多い。

(第158図 670~699)

次に第158図は口径の小さいものである。

670は復元口径が13.6cmで口縁部がわずかに外反するものである。坏もしくは皿の可能性はある。内外面ともに調整はヨコナデである。砂粒を含むが、焼成は良好である。675もこれと同様であるが、内面に不明瞭な稜をもつ。復元口径11.0cm。

671、672、679、681、684、694は口縁部外面がヨコナデ調整により凹むものである。復元口径は11.3~13.5cmである。調整はすべてヨコナデであり、坏に近い形態である。



第158図 土師器実測図

678、688は口縁部外面に凹みをもち、かつ内面に稜をもつものである。復元口径12.6cmと11.0cmで、調整はすべてヨコナデである。680も同様であるが、内面の稜がやや低い位置にある。復元口径は13.8cmである。胎土には石英粒を含む。676、685、687は口縁部が薄くなるものである。復元口径は11.1～13.0cmである。これも調整はすべてヨコナデである。677も口縁が薄くなるがやや外反気味である。復元口径12.2cm。682、683、690はわずかながら器体が厚いものである。復元口径は12.4～13.2cm。ヨコナデ調整を施す。

673は口唇部に稜をもつものである。復元口径13.0cm。調整はすべてヨコナデである。

674、689は口縁端部が肥厚し、丸みを帯びるものである。復元口径は11.9cmと10.4cmである。調整はヨコナデで、砂粒を含む。これも坏に近い形態である。

686も口縁部が肥厚するが、端部がシャープである。復元口径12.4cm。

691、692は外面には余り変化がないが、内面に稜をもつものである。復元口径は12.0cmと12.2cmである。調整はヨコナデである。695も同様であるが、坏に近い形態である。復元口径10.7cm。

693、696～698は内外面とも余り変化がなく、口縁端部が丸くなるものである。復元口径10.0～11.6cm。ヨコナデ調整である。

699は口縁端部がシャープで内面に不明瞭な稜をもつものである。ヨコナデ調整である。復元口径は11.4cmである。

以上はⅢ a 層とⅡ層の出土の比が3：1になる。また分布はC-9区を中心にした一群と(Ⅱ層)、D-3区を中心とした一群とE-5区を中心にした一群(Ⅲ a 層)に区分できる。

(第159図 700～717)

体部が内湾し、口縁部が外反するもので、全体として断面が緩やかなS字を描く体部をもつものである。

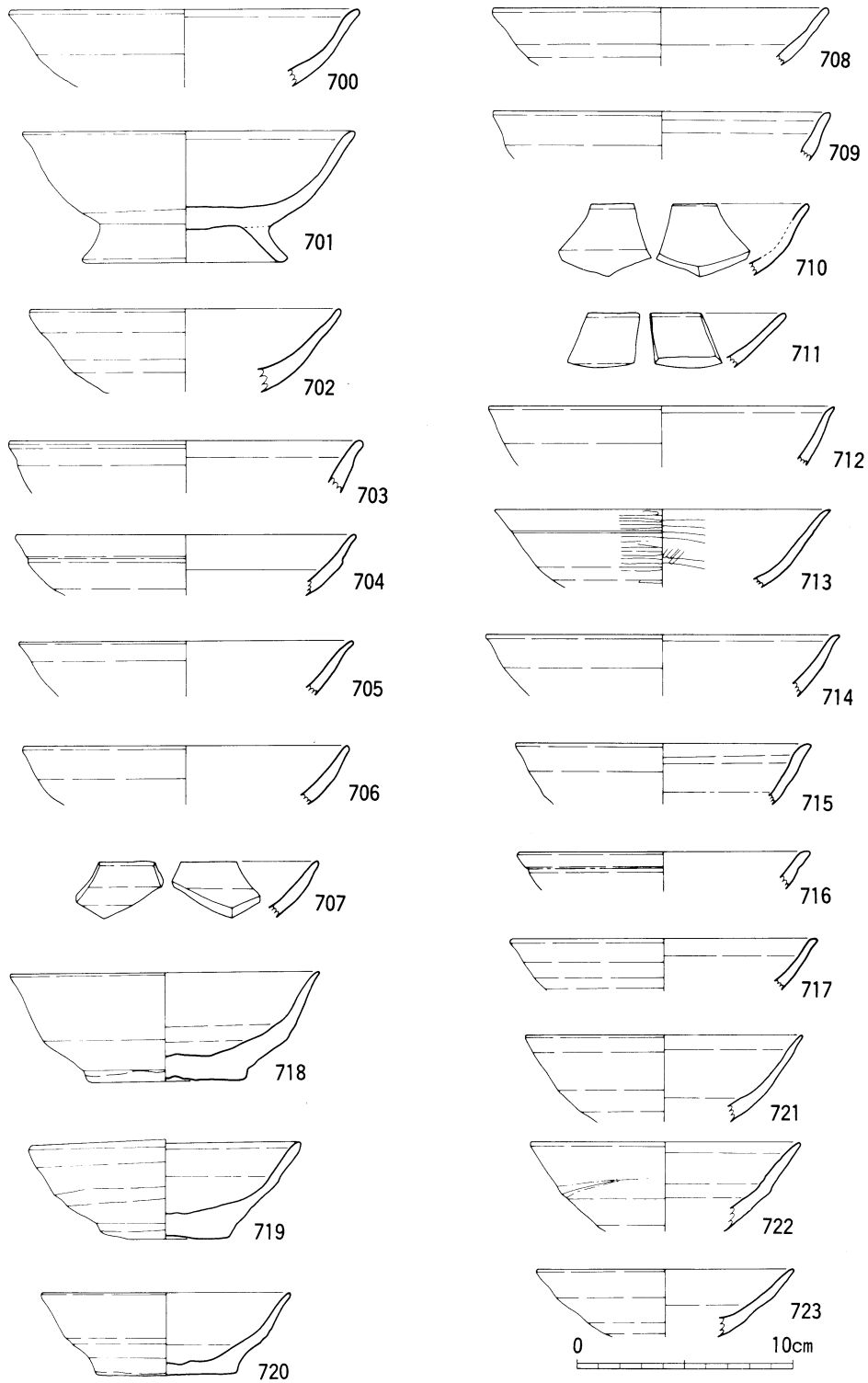
700は復元口径16.3cmで調整はすべてヨコナデで、胎土には石英粒を含むものである。701がこのタイプの基本的な形を有するものであると思われる。これは口径15.4cm、高台径9.5cm器高6.1cmである。高台はハの字状に開き、高さがある。胎土には長石や礫を含むが、焼成は良好で、しっかりしている。706～708、712、717もこのタイプであり、不明なものもあるが、復元口径は14.2～16.0cmである。

702は底部付近が肥厚している。復元口径は14.4cmである。内面にはヘラミガキを施し、外面はヨコナデである。

703は口縁外部がヨコナデによって強く凹んでいるもので器壁も比較的厚い。復元口径16.4cm。胎土には砂粒が少々含まれる。716は口縁外部が凹線状になっているものである。復元口径13.6cmである。暗茶褐色～赤茶褐色を呈している。

704は口縁部をヨコナデによって薄く仕上げている。復元口径15.8cm。705も同様で、復元口径は15.6cmである。709は復元口径15.6cmである。

710、711、713、714は内面にヘラミガキを施すものである。710は外面にもヘラミガキを



第159図 土師器実測図

施すものである。711は体部はほとんどまっすぐであるが、口縁部がわずかに外反気味である。713は口縁端部がシャープである。外面にもヘラミガキを施し、復元口径は15.6cm。714は口縁端部が小さく外反する。外面にもヘラミガキを施し、復元口径は16.4cmである。

715は復元口径13.8cmである。焼成は良好で赤茶褐色を呈し、胎土には石英粒を含む。余り深さがなく坏である可能性もある。

718は体部は内湾し、口縁部が緩やかに外反する椀である。底部はやや高さがあり、ヘラ切り底である。復元口径14.4cm、底径7.4cm、器高5.0cmである。調整は内外面ともヨコナデである。

719は体部が緩やかに内湾する小振りの椀である。口径12.6cm、底径6.0cm、器高5.6cmである。内外面ともにヨコナデで、底部はヘラ切り後にナデている。底部は円盤貼り付けであるが、取り付け部分はナデではっきりしない。高さはある。

720は体部の形態は前者と同じである。復元口径11.6cm、底径6.6cm、器高3.8cmである。ヘラ切りであると思われる。底部は平坦で成形後、何か板状の平坦なものの上に置いたものと思われるが痕跡は残らない。体部の調整はヨコナデである。胎土に石英粒を含む。

721~723は体部が内湾し、復元口径12.0~12.8cmの椀である。内外面ともにヨコナデ調整で、胎土には金雲母を含む。722は内面に棒状の工具を使用したナデが施される。

(第160図 724~731)

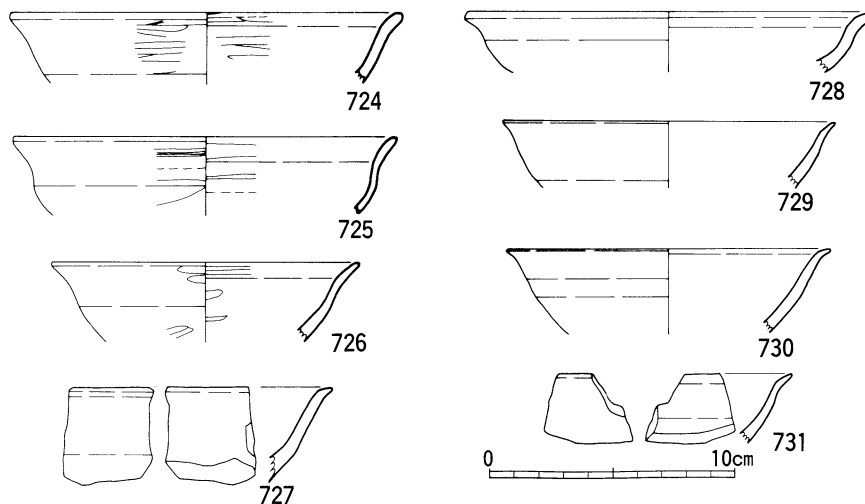
口縁部が外反するものである。

724は口縁部が大きく外反し、内面に不明瞭な稜を残すものである。内外面ともに、横方向のヘラミガキを施し、復元口径は16.0cmである。胎土には石英、金雲母を含む。725、726もほぼ同様であるが、器壁がやや薄い。

728は大きく外反し、口縁外部を強くヨコナデし、内面には稜が残る。調整はすべてヨコナデであり、復元口径は16.6cmである。

727の外反は小さめである。調整は内外面ともヨコナデである。

また729、730は口縁端部がシャープである。復元口径はそれぞれ



第160図 土師器実測図

れ13.4、13.2cm。調整はすべてヨコナデである。730は内面に稜をもつ。

731は口径は不明であるが、大きく外反するものである。金雲母を多く含み、茶褐色を呈する。調整はすべてヨコナデである。

これらはⅡ層とⅢa層との割合がほぼ五分五分である。また調査地内に散らばって出土している。D-2・3区に集中がわずかに見られる程度である。

Ⅲ (第161図 732~742)

口径と体部の開き方から皿として分類した。ただし、口縁部~体部のみのものは坏の部類に入るものもあるかもしれない。

732は復元口径16.0cm、復元底径8.4cm、器高3.7cmである。内湾する体部で、口縁部がわずかに外反する。内外面ともヨコナデ調整である。733は復元口径15.0cmである。735はやや器高が低いものであろう。内面に2本の稜を残す。復元口径は13.2cmである。

734、736は口縁外部を強くヨコナデするものである。復元口径はそれぞれ12.8、14.0cm。

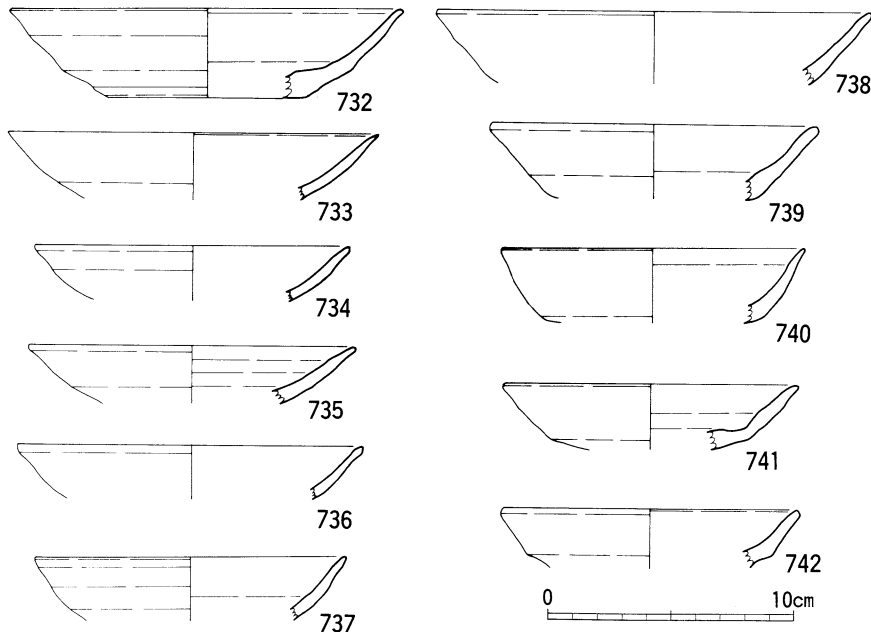
731はほぼストレートにのびる体部をもつ。復元口径は17.6cmであるが、誤差が大きいと思われる。内外面ともにヨコナデで、胎土には砂粒を少々含む。

739~741は坏の部類に入るかもしれない。

739は器体がやや厚めである。復元口径13.4cmで内外面ともにヨコナデを施す。740はやや薄めの口縁である。復元口径12.3cm。737は口縁外部を強くヨコナデするものである。復元口径12.6cmである。741は体部が大きく屈曲するものである。復元口径11.9cm。胎土には石英粒を含む。

742は以上のもとは異なり、体部外面が大きく屈曲するものである。復元口径は12.1cmである。坏かもしれない。

以上は、738と742以外は口縁端部が細いのが特徴的で



第161図 土師器実測図

ある。

ほとんどがⅢ a層出土であるが、分布はばらついている。

坏

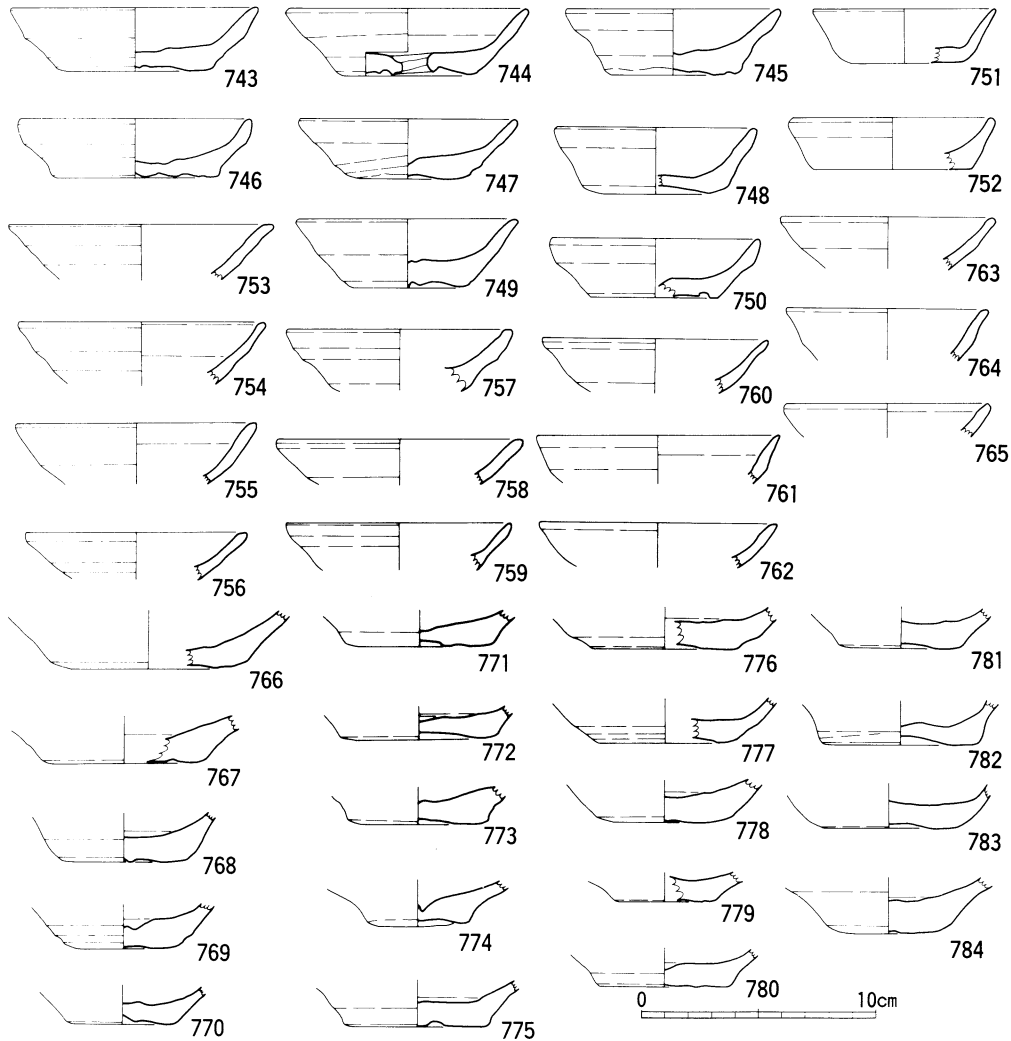
坏には底径の広いものと狭いものとの大きく2種類がある。

(第162図 743~784)

第162図で取りあげているものは底径の広いものである。完形に復元できないものは部位ごとの形態が完形のものに類似するものとして捉え、ここで取りあげることにした。

743は体部外面のほぼ中央に稜をもつ。復元口径10.6cm、底径6.8cm、器高2.7cmである。調整はヨコナデで、底部はヘラ切りである。

この場合、外面に稜を残すのは、体部外面下半の調整を底部を切り離した後、器をひっく



第162図 土師器実測図

りかえしてから施したためであると考えられる。こうした稜が明瞭に残るものは完形のものでは745～750に見られる。復元口径8.7～10.0cm、(復元)底径5.4～7.2cm、器高2.5～2.9cmである。これらすべて底部は回転ヘラ切り未調整である。747は歪みが大きい。胎土に長石や砂粒を含む。748はやや弱い稜になるが、丁寧なヨコナデを施す。墨書と思われる痕跡が残っていた。

744は底部のほぼ中央に径1.1cmの穴を通してある。口径10.4cm、底径6.1cm、器高2.9cmである。調整は内外面ともヨコナデで、体部外面中央に弱く稜が残る。底部はヘラ切りで軽くナデるがヘラの形状の痕跡が数カ所に残っている。底部の穴の周辺に煤が付着しており、灯明としての使用法が窺われる。

751、752は体部が急に立ち上がる形態である。751は復元口径7.8cm、復元底径4.9cm、器高2.3cmである。乳茶褐色を呈する。752は復元口径8.8cm、復元底径6.7cm、器高2.2cmである。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を少々含む。

753～765は口縁部～体部である。

753はほぼまっすぐのびる体部をもつもので、復元口径11.3cmである。調整はすべてヨコナデである。

754はわずかに内湾するもので復元口径は10.6cmである。胎土には砂粒を少々含む。

755は内湾するが内面に稜をもつものである。復元口径10.4cmである。

756は内湾するものである。復元口径9.4cm。

757は内湾するが、外面に稜をもつものである。復元口径9.8cmである。743～750の体部もこのタイプである。758は体部の上半しか残らないが、外面に稜が見られるので同様のタイプであると思われる。復元口径10.6cmである。759、761～765も同様に、復元口径は8.2～10.4cmである。

760は体部が薄くわずかにS字状をなす。復元口径9.7cmである。

766～784は底部で、すべてヘラ切りであると思われる。

766、767、770～773、775、780、781、784は復元底径5.1～8.4cmで、体部調整は内外面ともにヨコナデである。底部にはナデを施すがヘラの痕跡は残ったままである。781は棒状の痕跡が4本残っている。

768はやや直に立つタイプである。復元口径5.6cmである。782も同様にこれは底部も丁寧にナデである。復元底径5.6cmである。

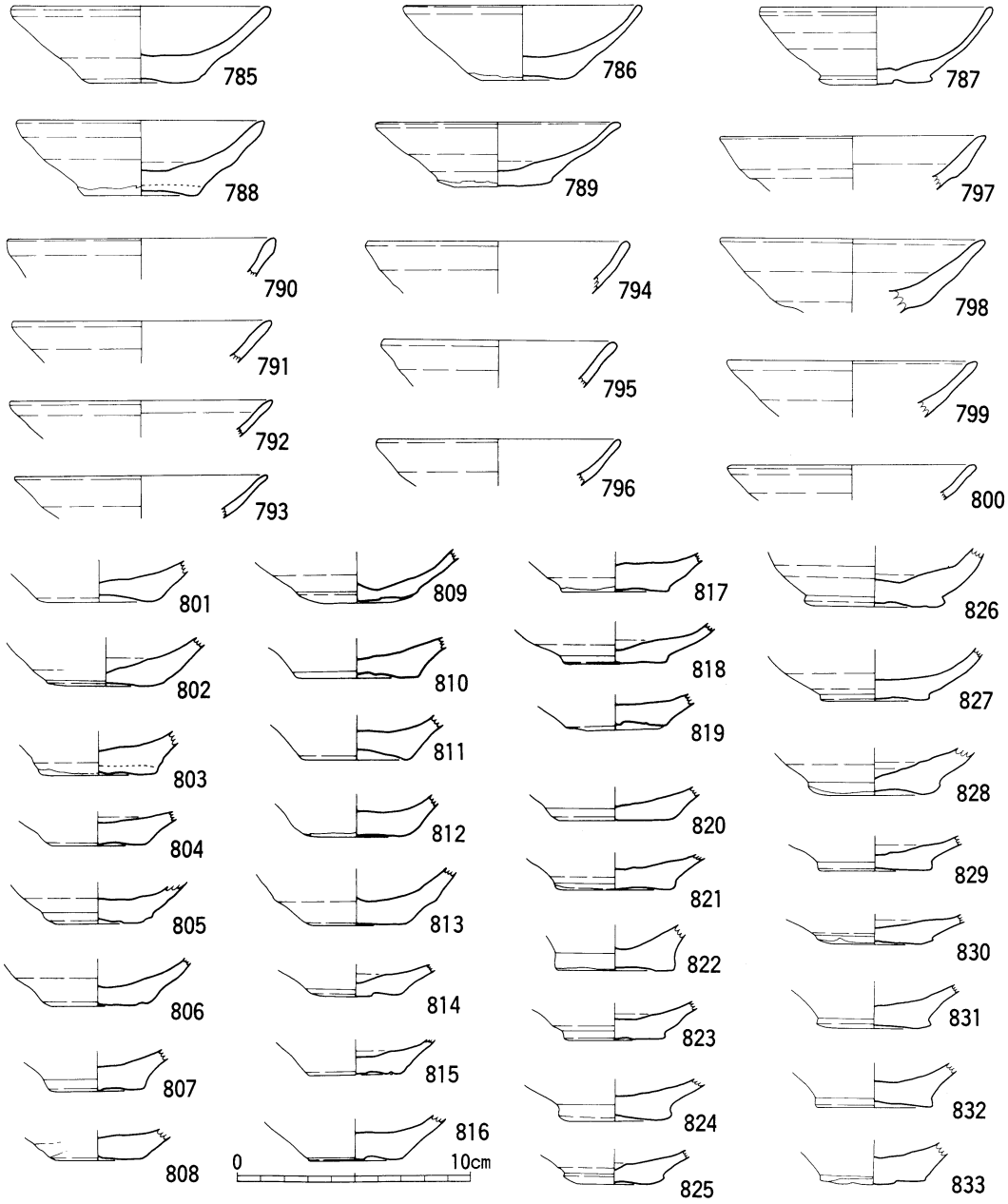
769には底部付近にヘラ切りの際にできたと思われる稜が残る。復元底径5.1cmである。

774は体部下半が外へ大きく開くものである。底部は歪み底径は4.5～5.3cmである。779も開くものである。復元底径5.2cmである。776も体部下半は外に開くが途中で立ち上がると思われる。復元底径6.4cmである。777も776と同様であるが底部付近に稜をもつ。内面には煤が付着し、灯明として使用されたと考えられる。復元口径は6.4cmと6.2cmである。

778は底部切り離しの際にできる稜を強くナデで消している。復元底径5.8cmである。

783は底部切り離しの際の反りが残っている。むしろ小皿に近い。これも内面に煤が付着しており、灯明皿の可能性はある。復元底径5.6cmである。

以上のうち約65%はⅢa層出土である。また、D・E-2・3区を中心とした一群とC・D-8区を中心にした一群があるようである。



第163図 土師器実測図

(第163図 785～833)

第163図でとりあげたのは底径の短いものである。

785～789は完形に復元できたものである。復元口径9.9～11.1cm、底径が4.6～5.4cm、器高2.8～3.3cmである。底部はヘラ切りで台状にやや高さがある。体部は逆ハの字状にほぼまっすぐ開く。口縁端部は丸くおさまる。調整は底部を除きヨコナデである。底部は軽くナデている。

790～800は口縁部～体部である。

790は上半しか残っていない。口縁部が肥厚し、外面に稜をもつ。復元口径11.4cmである。791～793、795も上半のみであるがほぼまっすぐのびる。復元口径10.1～11.1cmである。

794、796、799、800はやや内湾しながら立ち上がる体部である。復元口径10.4～11.3cmである。

797は体部中央より少し下に稜をもつ。復元口径は11.4cmである。

798は器壁少し厚めの体部である。復元口径11.2cmである。

801～833は底部である。すべてヘラ切りである。

801、804、806、809～817、820～822、824、829、831、832は(復元)底径4.1～5.4cmで内外面ともにヨコナデを施す。また、底部はヘラ切り後にナデ調整を行っている。しかし、ヘラ切りの痕跡が確認できる程度のものである。806、814、816、824は棒状の圧痕を残す。811ヘラ切りの際の粘土くずが付着したままである。

これに対して、802、803、805、807、808、819、823、825、828、833は回転ヘラ切り未調整である。(復元)底径は3.9～5.7cmである。このうち805は底面に棒状の圧痕が残る。808は内底面に煤が付着し、灯明皿である。833は底面に煤が付着している。

818は体部が横に開き、中ほどで立ち上がるという形態である。底径は4.5cmである。830も同様の形態を有し、底径は5.0cmである。

826は体部が内湾気味に立ち上がる。ヘラ切り未調整。復元底径6.0cm。827も同様に、底径は4.7cmである。

以上はおおよそ3分の2がⅢ a層出土である。そしてC-8区を中心とした一群と、E-3区を中心とした一群の2か所の集中が見られる。

小皿 (第164図 834～886)

小皿は完形に復元できるものが多かった。底部の切り離しはすべてヘラ切りである。

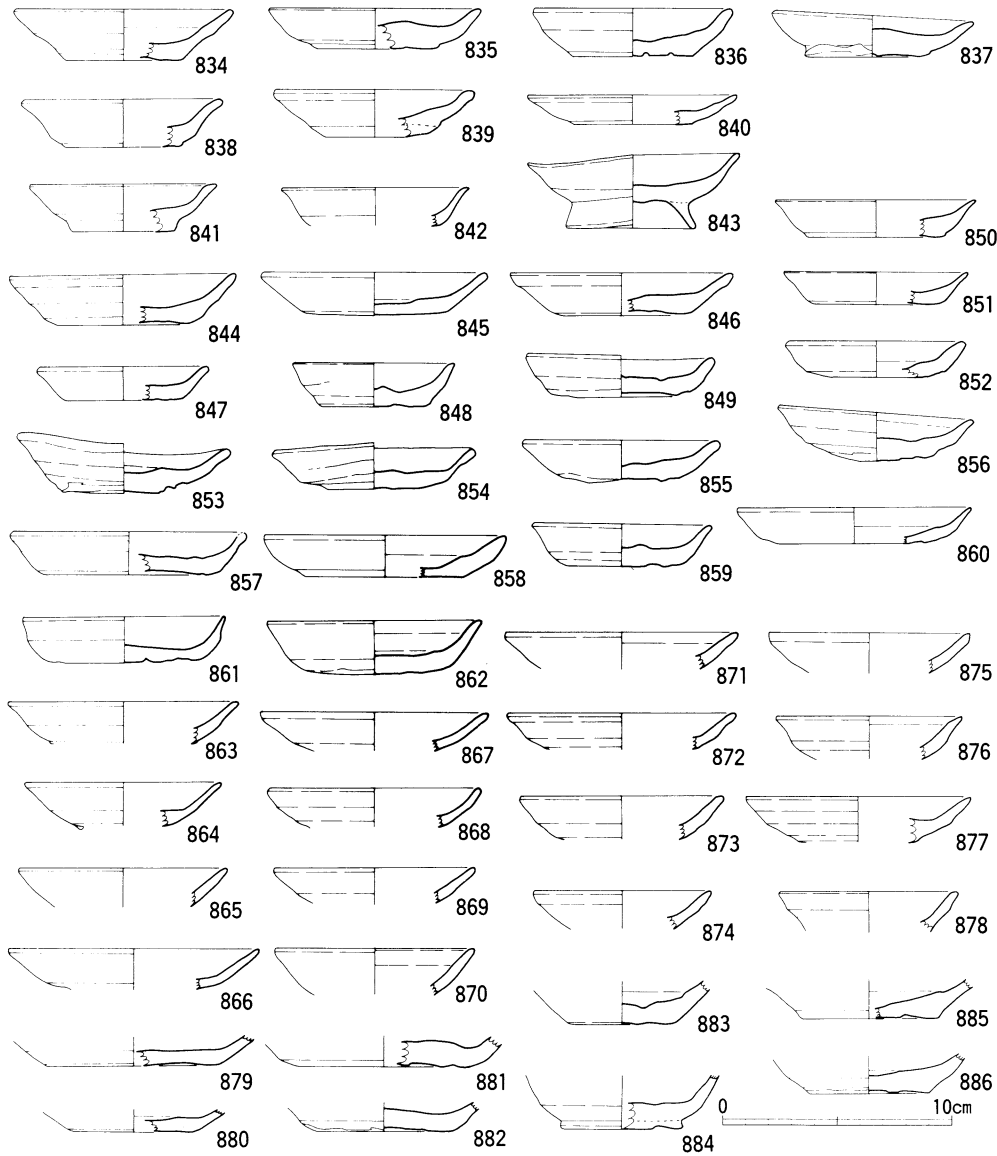
835は体部外面のほぼ中央に稜をもつもので、坏に類似した技法を有している。しかしながら、復元口径9.7cm、復元底径5.1cm、器高2.3cmと口径の割に器高が比較的に短いため小皿として取り上げている。坏と小皿の中間的形態かも知れない。

835～839、841、842、853、858は底部にやや高さがある。(復元)口径8.3～10.7cm(復元)底径4.5～7.0cm、器高1.7～2.7cmである。調整は内外面ともにヨコナデであり、底面は

未調整である。淡い赤茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。836は胎土に角閃石や金雲母を含む。837や853はヘラ切りの時の粘土の反りが大きい。839は口縁端部が肥厚し、丸くなる。842は口縁部～体部のみであるが体部の形態が841に類似しており、これもやや高さのある底部をもつものと考えられる。858は内面に1本の稜をもつ。

840は復元口径9.3cm、復元底径5.2cm、器高1.3cmと器高が極めて低い。また、胎土には石英、長石、砂粒を多く含み、淡い赤茶褐色を呈する。調整はヨコナデである。

843は高台付小皿である。口径9.4cm、高台径5.8cm、器高3.4cmである。高台はハの字状に開き高さがある。皿部は体部中央に稜が残り、口縁部は開きながらわずかに外反する。調整



第164図 土師器実測図

はヨコナデである。

844～846、854、855、860、861は底部に高さがなく、底部からなだらかに体部が付くものである。(復元)口径8.8～10.3cm、(復元)底径5.5～7.3cm、器高1.6～2.2cmである。体部は内外面ともヨコナデであり、外底面はヘラ切り後にナデを施したものである。845は淡茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石を含む。846は口縁外部に稜をもつ。これらと体部のつき方は類似するが847、852、859はやや小振りで、(復元)口径7.6～8.0cm、(復元)底径5.0～6.0cm器高1.5～1.9cmである。

848もやや小振りであるが、底部と体部の境に明瞭な稜が残る。復元口径7.2cm、復元底径5.0cm、器高2.0cmである。

849は口径8.3cm、底径6.1cm、器高1.9cmで、容積が小さい。体部内面は口縁部から緩やかに中心へ向かう。体部外面はやや直に立つ。胎土の中に0.9×0.7cmの礫を含む。851は同様の技法をもつが、やや大きめで復元口径10.4cm、復元底径8.1cm、器高1.9cmである。胎土には金雲母を含む。857もまた同様である。

850は849と同様の体部をもつが、底部に高さがある。復元口径8.8cm、復元底径6.3cm、器高1.7cmである。

856は体部の内外面ともに1本の稜をもつものである。また、外底面はヘラ切りの際に残った粘土が突起状に残っている。口径8.6cm、底径5.7cm、器高2.5cmである。調整は内外面ともにヨコナデである。口縁部～体部のみであるが878も同様で復元口径7.9cmである。

862は内面のみ1本の稜があるものである。復元口径9.5cm、復元底径6.6cm、器高2.4cmである。調整は内外面ともにヨコナデである。

863～878は口縁部～体部のみのものである。

863は復元口径10.1cmで、体部外面に1本の稜を残す。茶褐色を呈し、胎土には長石、石英角閃石を含む。864も同様の形態をもち、復元口径8.6cmである。

865は稜をもたず、まっすぐのびる体部である。復元口径は9.2cmである。869、871もこれと同様で復元口径はそれぞれ8.8cm、10.2cmである。

866～868、870、872、873、875は体部が内湾する。復元口径は8.8～11.0cmである。872、873は長石、石英、金雲母、角閃石を含む。

874は内湾し、体部外面に1本の稜をもつ。内外面ともにヨコナデで、復元口径7.8cmである。

876は外面に2本、内面に1本の稜をもち、口縁部が外反し、口縁端部は割合シャープである。復元口径8.2cmである。

877は内湾する体部で、体部外面に2本の稜をもつ。底部に高さがあるのではないかと思われる。復元口径9.9cmである。

879～886は底部である。これもすべてヘラ切り底であり、円盤状の底部に体部を付けている。

879は復元底径7.6cm。赤茶褐色を呈し、石英、長石、細砂粒を含む。外底面には刷毛目も残る。880は復元底径5.6cmで、胎土には石英を含む。881は復元底径7.5cmで、胎土には砂粒

を少々含む。882は底径6.5cmで、ヘラ切り後軽くナデている。外底面には棒状の圧痕が残る。また胎土には砂粒を含む。883は底径が4.7cmとやや狭い。胎土には石英の細粒が多く含まれる。884は体部がわずかに直に立ち上がるようである。底部そのものにも高さがある。復元底径5.4cmである。外底面には板状圧痕が見られる。これに対して、885は体部が横に開き気味である。これもわずかに高さがある。復元底径7.0cmである。胎土には砂粒を少し含む。886は横に開きつつ内湾し、立ち上がる体部をもつものと思われる。底部に高さがあり、復元底径5.3cm。胎土には石英、長石、金雲母が含まれる。

小皿も圧倒的にⅢ a層出土のものが多い。分布も調査地内全域に広がり、小皿の残りが良いのは一概に小振りで壊されにくいからだけではないと思われる。このことは榎崎A遺跡の性格を知る上で重要な事実であると考えられる。

底部

底部は、榎崎A遺跡で出土したものはすべてヘラ切りである。体部が不明で器種の限定はできないが、底径に大小があり、更に製作技法上においてもわずかながら差異が見出されたので取り上げることにした。

(第165図 887～919、第166図 920～942)

・ 底部に高さがあるものである。

887、893、894、899、903、905、908、909、911、912、914、917は(復元)底径6.0～7.5cmで底部切り離し後に体部の取り付けと底部の側面を丁寧にヨコナデ調整し底部はほぼ正円に仕上がっている。ただし外底面は未調整である。中には外底面に軽くナデを施したものも見られる。877はわずかに残った体部の状態から碗と思われる。

888は5mm程度の高さがある。復元底径7.1cmである。外底面はヘラ切り後にナデている。内面に煤が付着する。また、外底面には墨の様なものが付着する。897は底部側面にそれが見られる。底径6.7cmである。

889～892、895、896、898、900～902、906、907、910、913、915、916、920～924、926、928～930、933、934、936、938、940、942も5mm程度の高さがあるがあまりしっかりとした作りではない。石英を含む。ヘラ切り後に軽くナデている。(復元)底径5.6～9.2cmである。940は外面が黒褐色を呈する。

904、932、941は余り高さが無い。復元底径5.7～6.4cmである。

918分厚い底部である。あまりしっかりとした作りでなく、楕円形を呈する。長径6.7cm、短径6.4cmである。外底面は未調整である。919も底部が分厚い。作りも雑である。底径7.6cmで、胎土には石英粒を含む。935も分厚く、復元底径8.6cmである。

925、927、931、937、939は底部側面が斜めに立ち上がりそのまま体部につくものである。復元底径6.0～6.8cmである。

以上は圧倒的にⅢ a層の出土が多い。また、分布ではD・E-2・3区、D・E-5区に

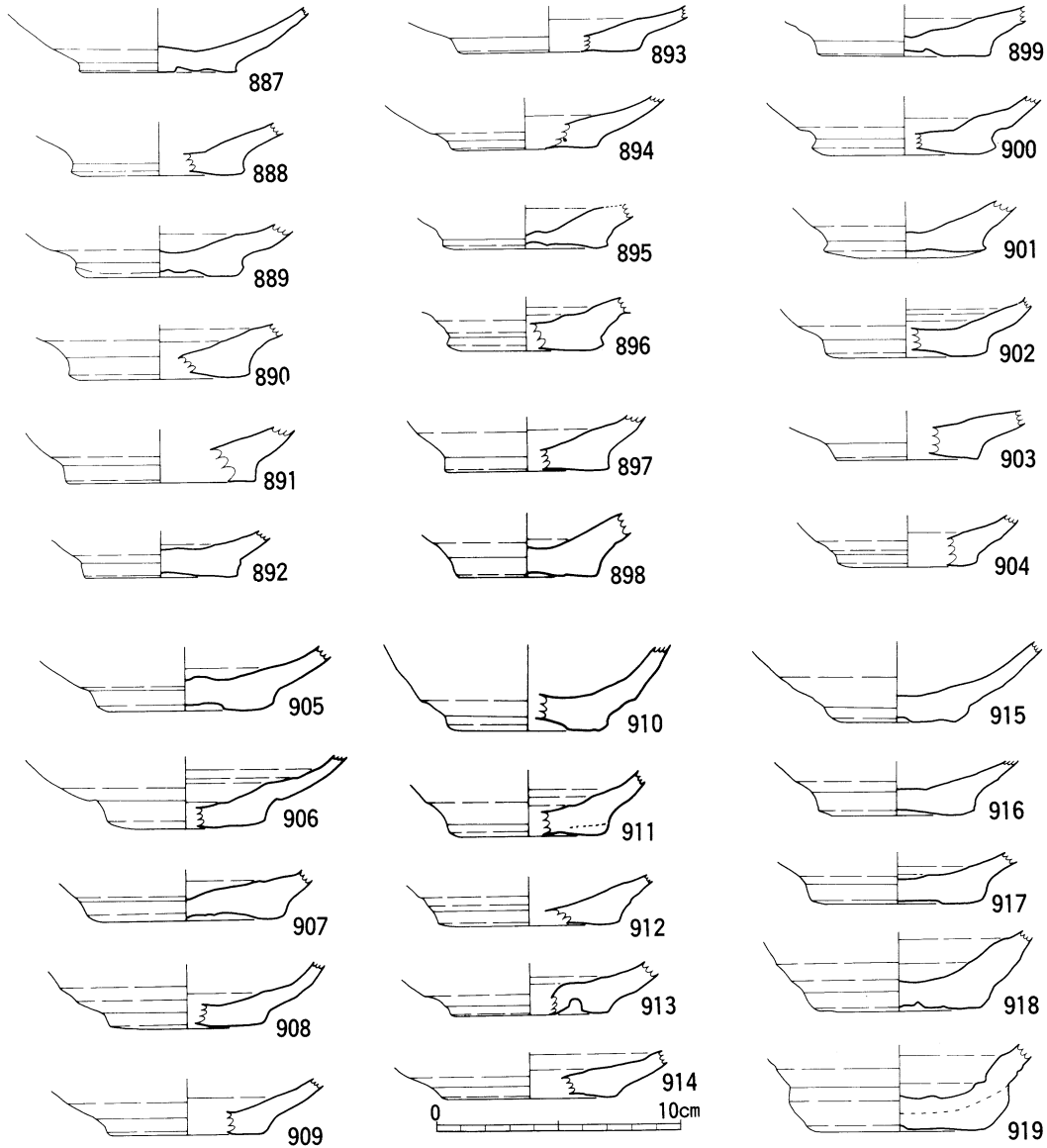
集中が認められる。

(第167図 943~973)

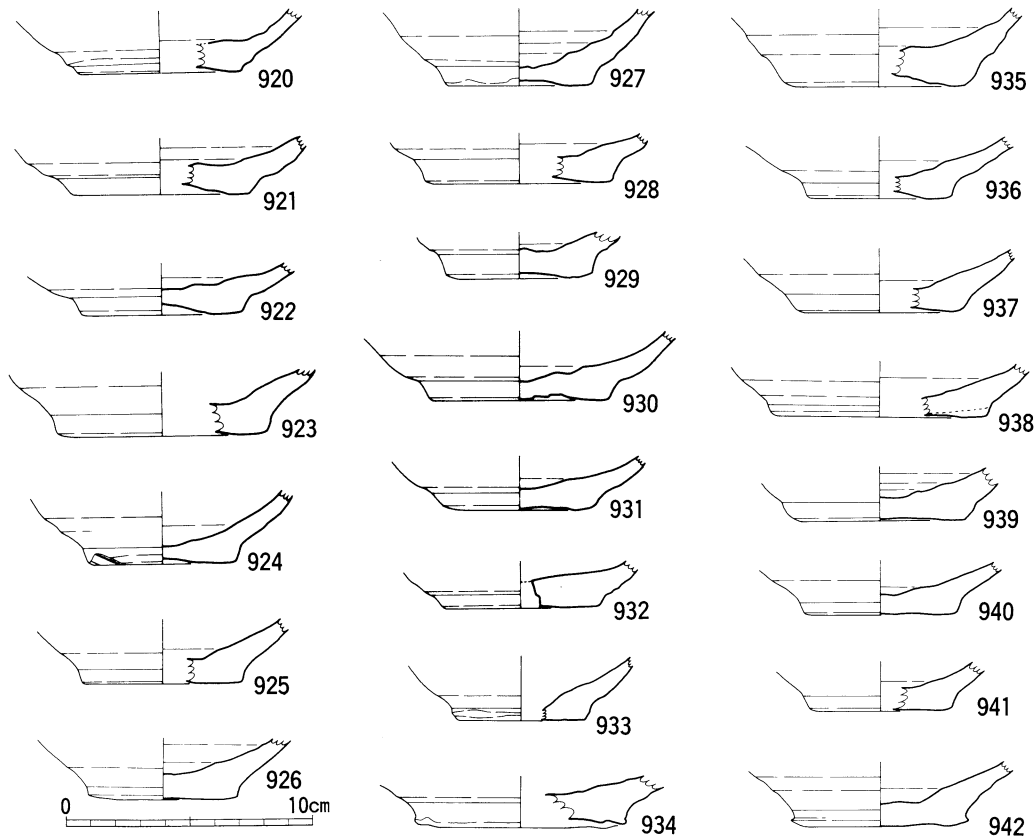
底部にほとんど高さのないものである。

943は内湾する体部をもつ椀であると思われる。外底面から稜をつくり、そのまま体部へとつくものである。復元底径6.9cmである。体部は内外面ともにヨコナデを施す。外底面の周縁付近にはケズリも見られる。

944は復元底径7.0cmである。ヘラ切り後にナデが施される。全体的に赤焼けしている。



第165図 土師器実測図



第166図 土師器実測図

945は復元底径6.4cmである。体部の付け方がいびつである。

946、948～952、954～960、963、965～970、972、973はやや高さがあるが、取り付けを丁寧にナデて緩やかに体部へとつながる。(復元)底径は5.2～8.8cmである。967は底面は未調整でがたがたである。969は底面に棒状の圧痕が見られる。

947は体部の下部に二条の凹線状のナデをつける。復元底径6.2cmである。962は一条である。復元底径6.7cmである。茶褐色を呈し、金雲母を多く含む。

953は高さがなく、そのまま体部へつながるものである。復元底径8.4cmである。971も同様に復元底径は5.5cmである。

961はやや高さがあるもので、わずかに残った体部は内湾する。体部内面には煤が付着しており、灯明皿として使用したものと考えられる。

964は底面に板状圧痕を残す。また、体部には4条の凹線状のナデが残る。復元底径8.1cmである。

ここでもⅢa層出土のものが7割近くを占める。分布ではA-7区、C-8区、D・E-3・4区に集中が見られる。

高台

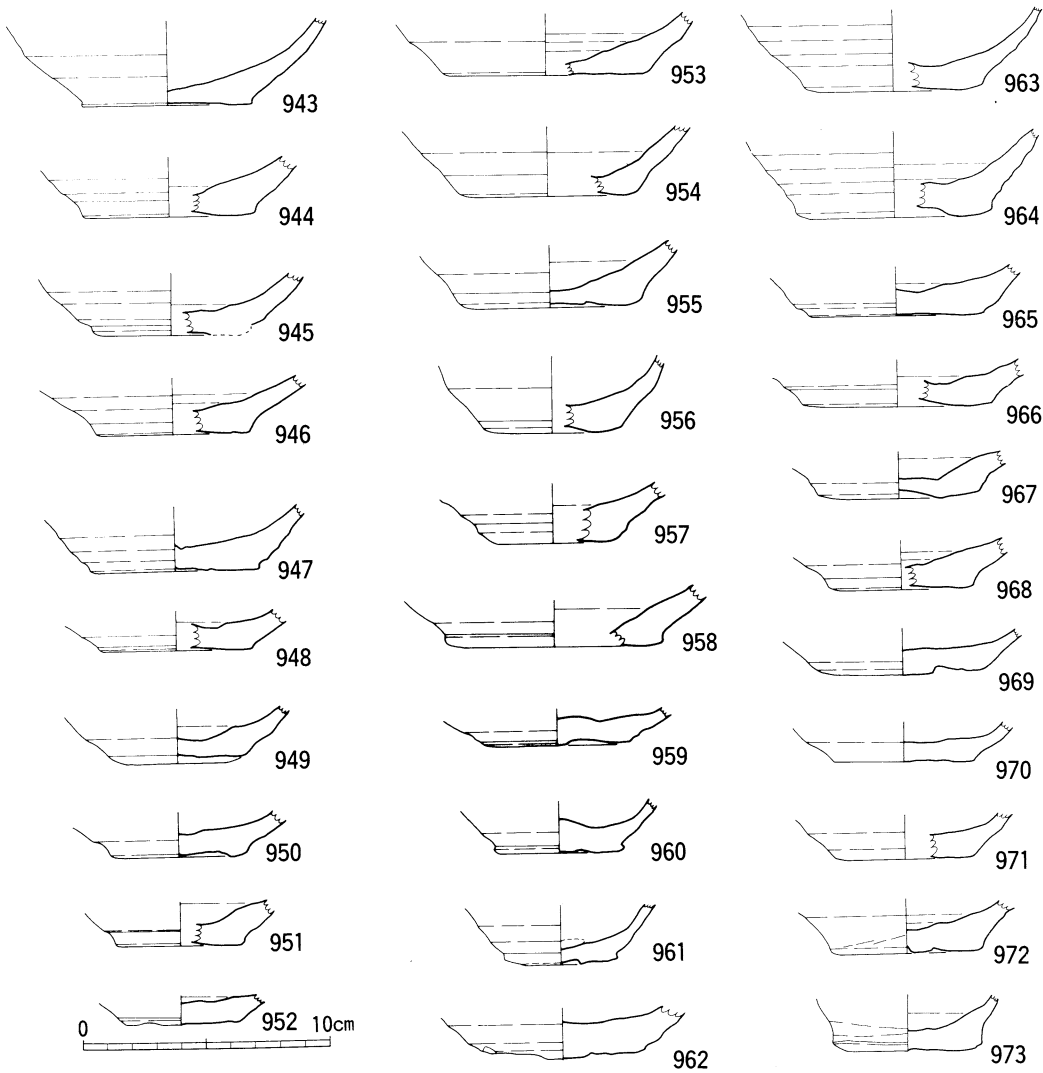
高台はその高さから大きく3種類に分類した。高いものから順に説明する。高い方が作りもしっかりしている。

(第168図 947~1001)

ここで大小はあるが割合、高さのある高台を取りあげる。

974は、ハの字状に開く高台付椀である。復元高台径は7.0cmである。茶褐色を呈し、胎土には石英粒を含む。

975、978、980~984は底部の端に付く高台で、これもハの字状に開く。(復元)高台径7.2~10.8cmである。975と983は高台が厚手である。980は内面に横方向のヘラミガキを施す。



第167図 土師器実測図

982と984はおよそ2.5cmの高さがある。

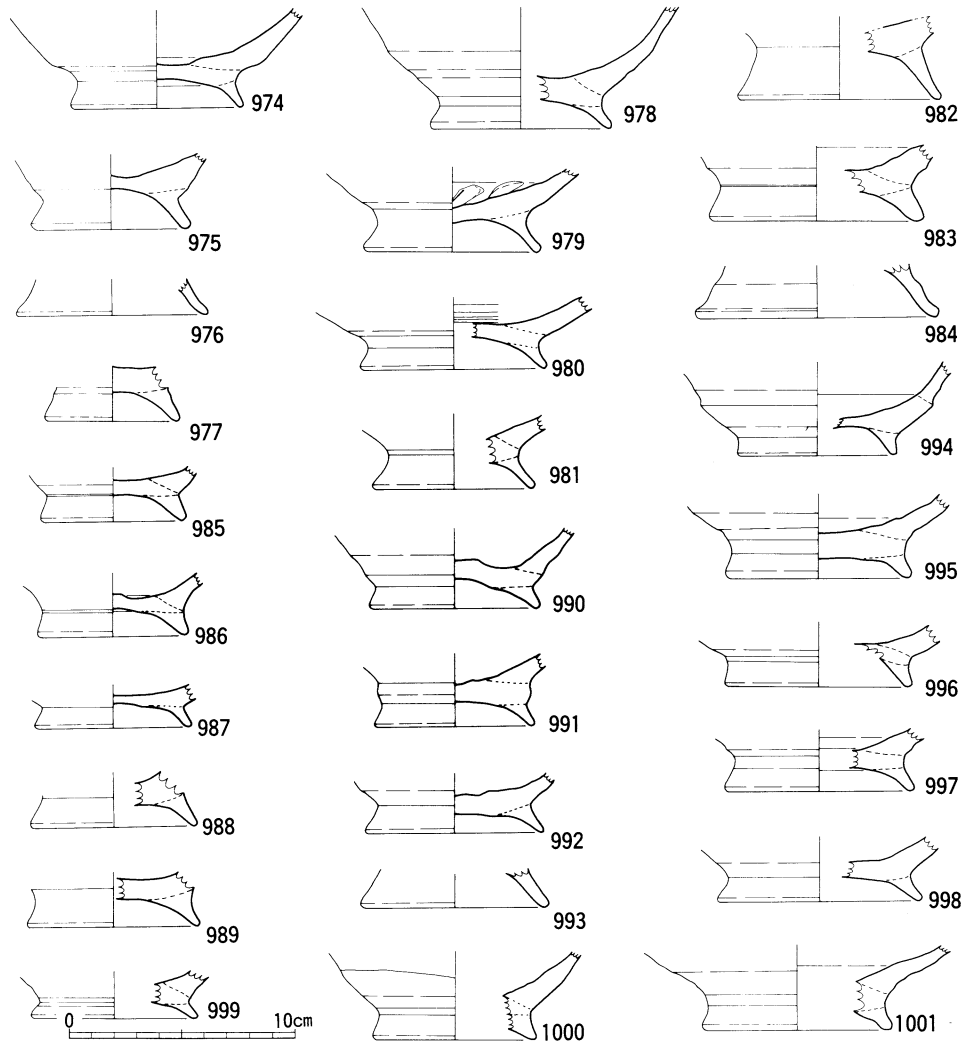
976は高台のみであるが外反気味に開く。復元高台径8.4cmである。979も外反気味に開き底部の端よりわずかに内側に高台を付けるものである。高台径7.9cmである。内底面は指先で粘土を搔きとっている。

977はハの字状に開くが、径の小さい高台である。高台径5.9cmである。

985～992、996～998はこれまでのものよりやや低くなる。底部の端に付き、ハの字状に開き、端部は丸くなる。(復元)高台径は6.4～9.0cmである。987は全体的に黒褐色を呈する。990は内底面中央部に突起を作る。991の体部外面は赤く焼ける。

993は端部がやや平坦である。高台径8.4cmである。

994、1000、1001は体部の下部が厚手で、そこに短めの高台を付けるものである。(復元)



第168図 土師器実測図

高台径7.0~8.4cmである。1001は赤く焼けている。

995は底部が厚手で、その底部の端に短い厚手の高台を付ける。端部は丸くなる。また端部には棒状の圧痕が残る。高台径8.3cmである。

999はさらに短くなり、高台外面に稜をもつ。高台径7.3cmである。

以上は約6割がⅢa層出土である。また、B-8・9区とD-2・3、E-2区に集中が見られる。

(第169図 1002~1017)

高台にあまり高さのないものである。

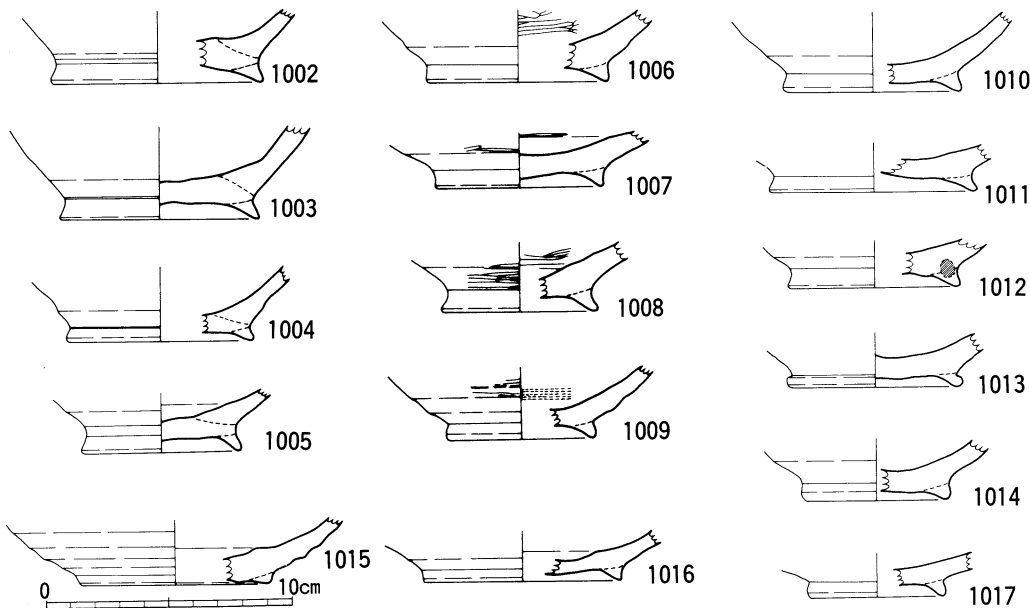
1002、1003、1005は底部が厚く、その端に短い高台が開きながらつく。端部は丸くなる。復元高台径6.5~8.6cmである。

1010~1012は体部とほぼ同じ厚さの底部で、短い開き気味の高台がつく。復元高台径7.0~8.4cmである。1011はしっかり焼けている。1012は体部と底部、高台の3者をつなぐところに7mm程度の礫を噛んでいる。

1004、1006、1007、1009はさらに短い高台が開きながら付く。復元高台径6.1~7.4cm。内面にはヘラミガキが施される。黒色土器の未製品であると思われる。

1008は太目のしっかりした開く高台をつける。体部内外面に横方向のヘラミガキを施し、赤茶褐色を呈する。復元高台径6.4cmである。1014も内面のみにヘラミガキを施すこと以外は同様の形態である。復元高台径6.0cmである。

1013も短く、外面に稜をもつ高台である。復元高台径7.1cmである。1017もこれと同様で復元高台径は7.8cmである。



第169図 土師器実測図

1015、1016はつまみ出した様な、隆起状の極めて短い高台を張りつける。復元高台径はそれぞれ7.8cm、8.1cmである。焼成は良好で、明黄褐色を呈する。

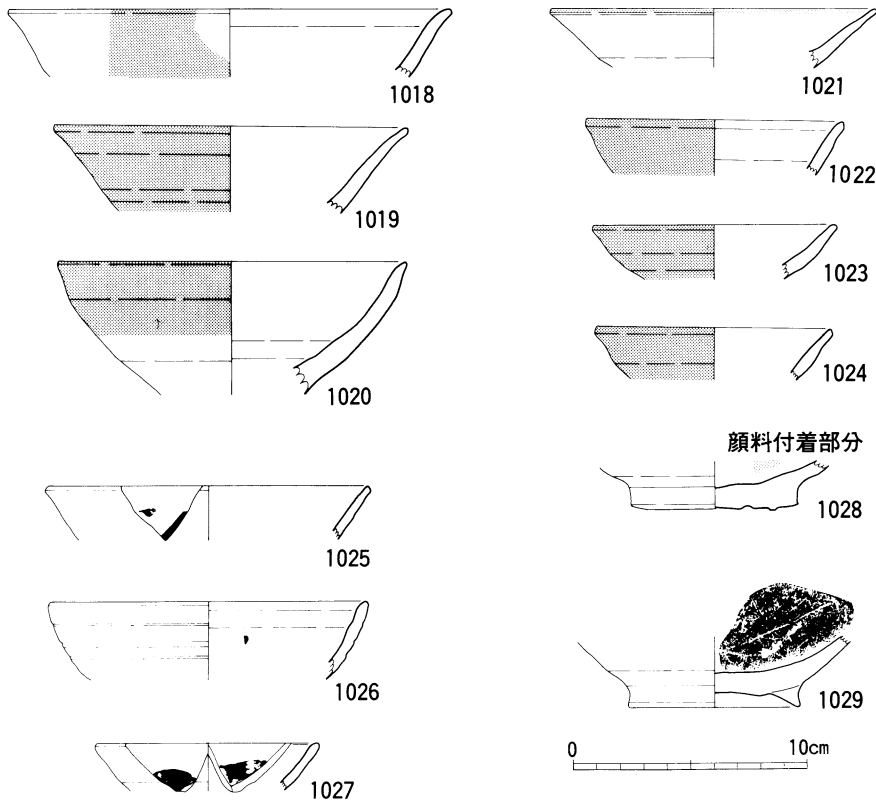
以上はほとんどがⅢ a層出土のものであった。集中も遺物量が少なくはっきりとしないが、C-2～6区からE-2～5区にかけて万遍なく出土しているといえよう。

特殊な土師器 (第170図 1018～1029)

ここでは墨の塗られた土師器、墨書 (部分) 土師器、顔料の付着した土師器、木葉痕野ある土師器を取りあげている。

1018～1024は、墨の塗られた土師器である。

1018は内湾気味の体部をもち、口縁部が外反する椀である。復元口径19.0cm。かなり剥離しているが、体部外面に部分的に墨が残っている。1019はまっすぐのびる体部で、口縁がわずかに外反する椀で、復元口径15.2cmを測る。丁寧なヨコナデ調整の後、外面一面に万遍なく墨が塗られている。1020は内湾する体部をもつ高台付椀で、復元口径15.0cmである。体部上半がくすんでいるが、口縁付近約1cmの範囲に墨が塗られているのが確認できる。1021はまっすぐのびる体部をもつ皿であると思われる。復元口径は14.0cmである。口唇部に墨が塗られている。1022はまっすぐのびる体部をもつ椀もしくは坏であると思われる。体部外面に



第170図 特殊な土師器実測図

ほぼ全面的に縦方向に墨が塗られている。また内面にも部分的に塗られている。1023は内湾気味の体部をもつもので、復元口径10.5cmである。体部外面に部分的にかすかに墨が確認できる。1924は口縁がわずかに外反する坏であると思われる。復元口径10.2cmである。体部外面に万遍なく墨が塗られている。

1025～1027は墨書土師器と思われるものであるが部分的にしか確認できず、文字の判読はできない。あるいは墨画の可能性も考えられる。かすかに残っているものもあり、これらは後日赤外線カメラによる調査を行う予定である。1025はほぼまっすぐのびる体部をもつもので、復元口径13.9cmである。墨は体部外面にかすかに残っている。1026は内湾する体部をもつ椀であると思われる。復元口径13.6cmである。体部内面に墨が点で残っている。1027はわずかに内湾する体部をもつ坏であると思われる。復元口径9.6cmである。体部外面には文字というよりは絵と見られるものが残る。薄い部分と、濃くはっきりした部分とがある。内面にも薄く残っている。

1028は内面に顔料の付着が見られるものである。底部のみであり、復元底径7.2cmである。底部はヘラ切りである。外面は赤く焼けている。わずかに残った体部の端の方に赤い顔料が確認できる。ベンガラではないかと思われる。

1029は木葉痕の見られるものである。高台径7.3cmの高台付椀の高台部分である。内面に木葉痕が残る。照葉樹の葉であると思われる。

甕

甕は完形に復元できるものは1点のみで、あとは破片のみである。破片は特徴のある口縁部のみを取り上げた。口径の復元も試みたが椀・坏以上に歪みが大きく、かなり誤差があるものと思われる。

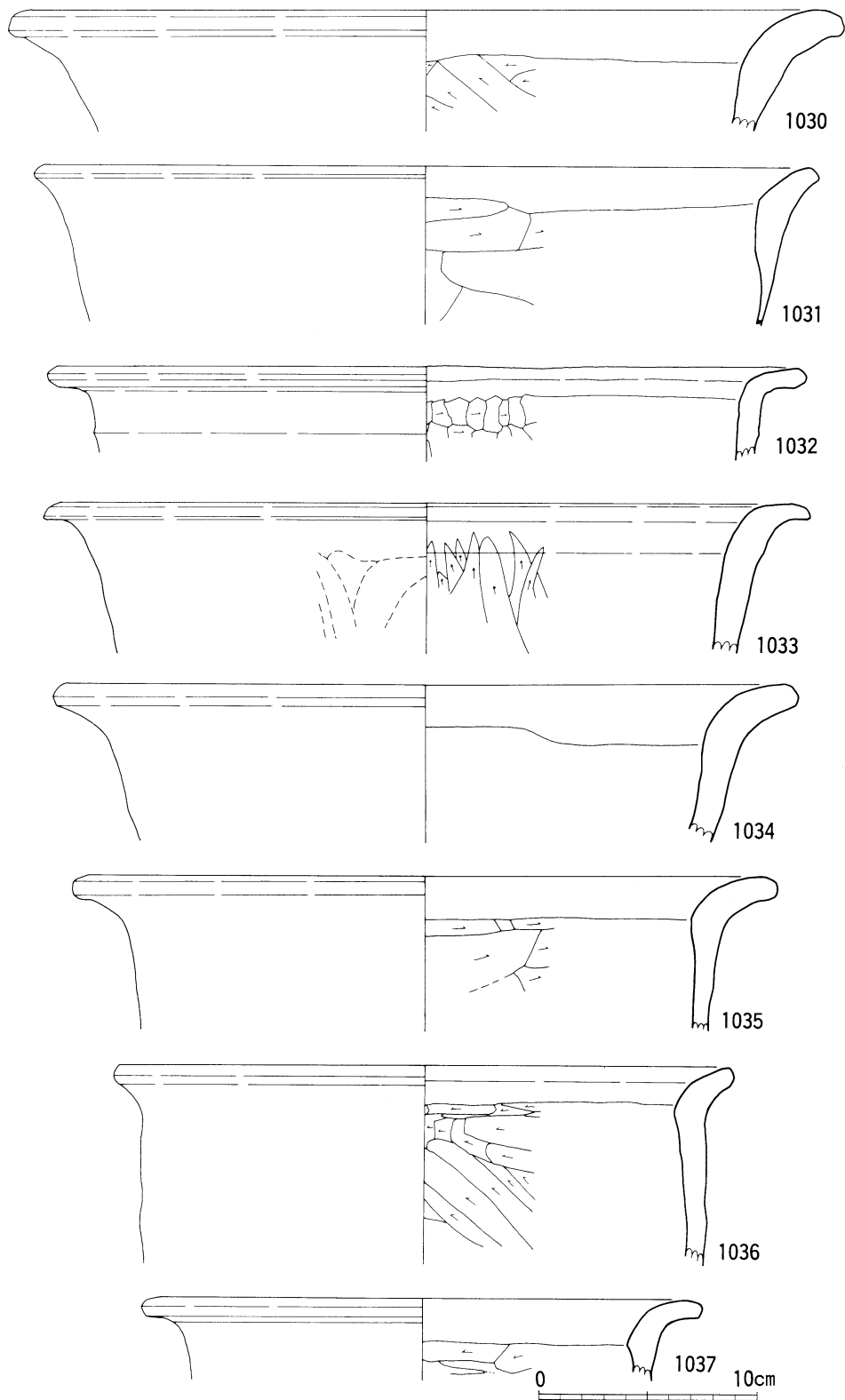
基本的には丸底で、口縁は外反し、胴部内面はヘラケズリが施される。胴部全体の形態を把握できないのが残念である。胎土には砂粒や石英粒、角閃石粒を多く含む。使い込んでもろくなったものが多い。

(第171図 1030～1037)

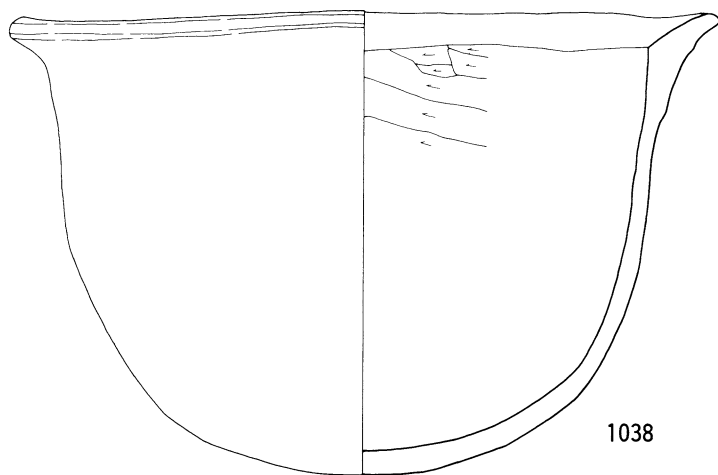
1030は口縁部が大きく外反するものである。胴部内面は左上りのヘラケズリを施す。他の調整は大旨ナデである。内外面ともに黒～茶褐色を施し、胎土には石英、角閃石他砂粒を多く含む。

1031、1036も口縁が外反するが1030よりは短い。1031は胴部内面は横方向のヘラケズリが施され下端の方は随分薄く仕上がっている。1036は胴部内面上端が横方向のヘラケズリで、下方に向かうほど徐々に左上りのヘラケズリとなる。共に口縁部内面はヨコナデであり、他の調整は大旨ナデである。外面は黒褐色、内面は茶褐色を呈し、石英、角閃石他砂粒を多く含む。

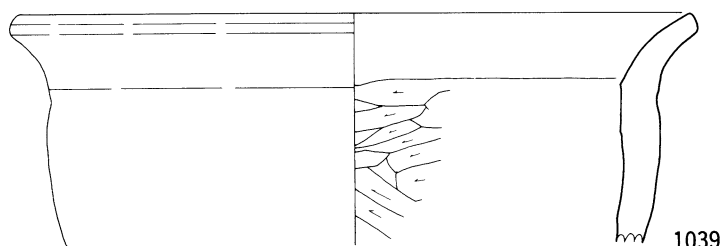
1032は口縁が逆L字状に外反する。胴部内面上端から1cmのところから下へ横方向の断続



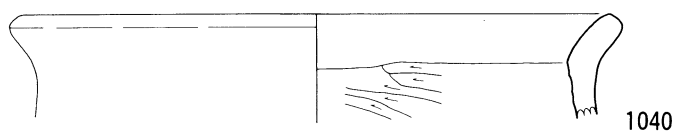
第171図 土師器実測図



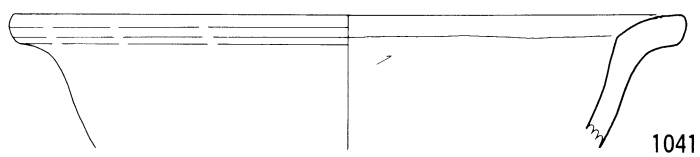
1038



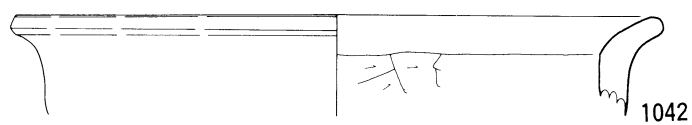
1039



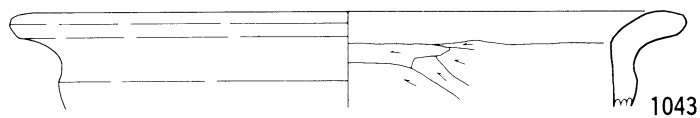
1040



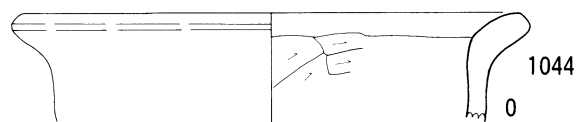
1041



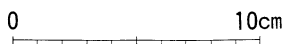
1042



1043



1044



第172図 土師器実測図

的なヘラケズリが施される。口縁部上面はヨコナデが、下面から胴部外面にかけてはヨコナデが施される。外面は淡茶褐色、内面は赤茶褐色を呈し、胎土には石英や砂粒を含む。

1033、1037は逆L字状であるが緩く、稜をもたない。1033は口縁端部は細くなる。胴部内面は縦方向のヘラケズリが施される。口縁部はヨコナデであり、端部は磨きがかかる。胴部外面はナデである。外面は暗茶褐色～茶褐色を呈し、内面は黒褐色を呈する。一方、1037は胴部内面は横方向のヘラケズリが施される。その他の調整はすべてヨコナデである。内外面とも淡茶褐色を呈し、石英、角閃石、金雲母、砂粒を含む。

1034、1035は大きく外反する口縁部で、やはり胴部内面は横方向のヘラケズリが施される。その他の調整はナデである。外面は暗茶褐色、内面は暗茶褐色～淡茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石、砂粒や礫を含む。1035は体部が薄めである。

(第172図 1038～1044)

1038は唯一復元が可能であったものである。口径28.7cm、器高18.5cmである。丸底で、わずかに開きながら、ほぼまっすぐに立ち上がる胴部で、口縁は外反する。胴部内面は上の方から横方向→左上りとヘラケズリを施している。ただし、下方は使用されたために剝離しており、ケズリの方向は不明である。他の調整は大旨ナデであり、半乾きの状態で成されたのか、磨きがかかっている。外面は黒～茶褐色、内面は黒褐色～赤茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石砂粒、小礫を含む。丸底は榎崎A遺跡出土の甕の基本的な形であると思われる。

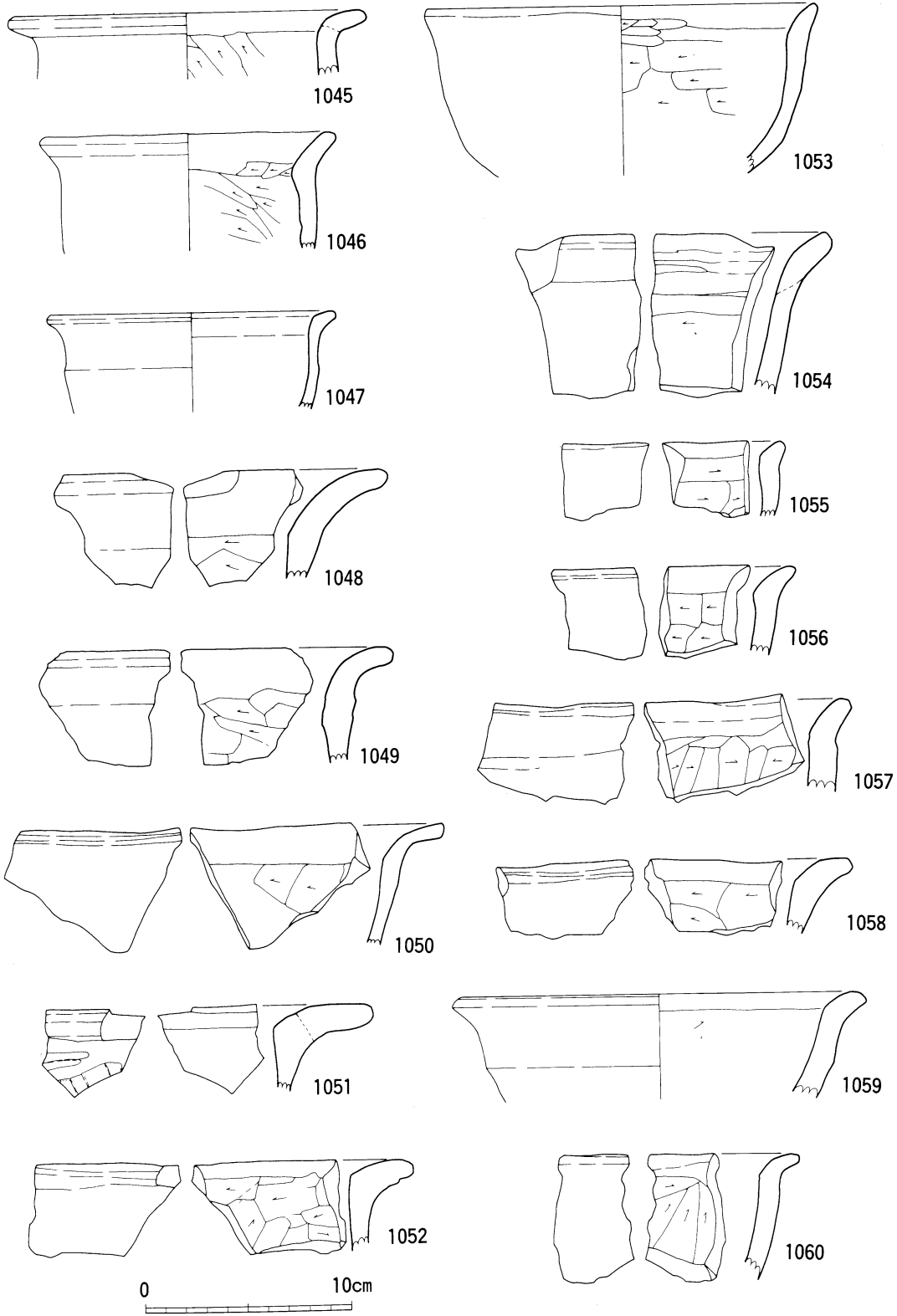
1039は胴部上端がやや膨らむ。また、胴部内面もヘラケズリされているが厚く仕上がっている。これも石英や角閃石、砂粒を含んでいる。1040は胴部内面のヘラケズリが割りあい細かい単位で丁寧になされている。外面は黒褐色で、内面は茶褐色～暗茶褐色を呈しており、口縁から体部外面は若干磨きがかかっている。1041は胴部が開き気味で、口縁が大きく外反する。使用により表面はもろくなっている。石英や砂粒を多く含んでいる。1042、1044も口縁が短く外反する。1043は胴部内面は半乾きの状態でヘラ磨きをかけたものと思われる。口縁は逆L字状に近い。胴部外面上端は口縁との境界を強くヨコナデしたために、稜線が形成されている。

(第173図 1045～1060)

1045～1047、1053、1059は小振りのものである。1045は口縁が逆L字状に外反するものである。胴部内面は左上りのヘラケズリを施す。また外面は丁寧にヨコナデが施される。胎土には石英、金雲母角閃石が含まれる。1046は短く外反する口縁をもつ甕であると思われる。胴部はやや膨らむ。1047は器壁が薄く、内外面ともにヨコナデが施される。胴部外面に段ができる。1053は口縁が外傾し、内湾する胴部をもつ。むしろ鉢といった方が良いかもしれない。胴部内面には横方向のヘラケズリが施される。1059は口縁部が短く外反する。胴部内面に右上りのヘラケズリを施す。また、胴部外面に段が残る。

1048～1052、1054～1058、1060は口径の復元か不可能であったものである。

1048は口縁部が大きく外反する。胎土には金雲母を多く含む。1049も大きく外反するが1048



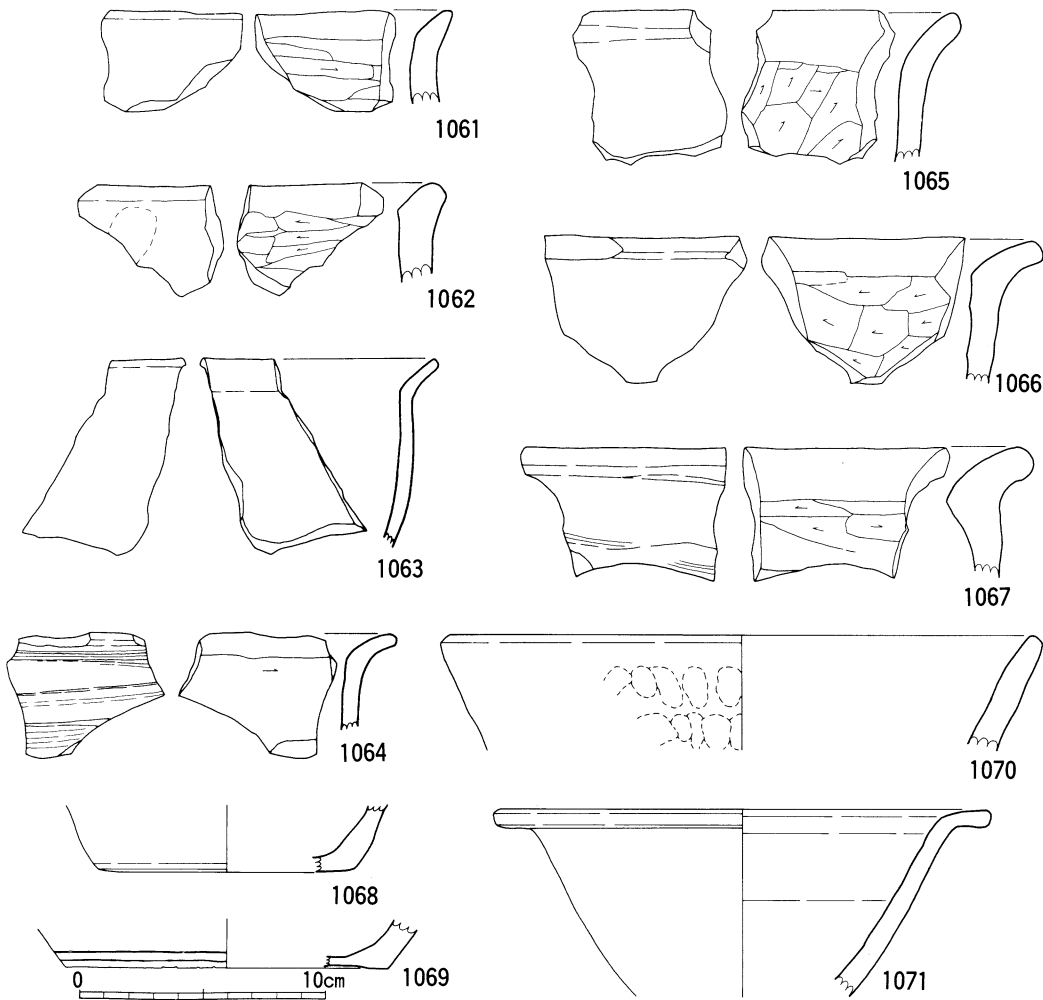
第173図 土師器実測図

よりは弱い。胴部外面にはつまみあげた様な稜線が残る。

1050は口縁が逆L字状に外反するが、内面には稜を残さない。割合薄い器壁である。1051、1052も同様の口縁である。1052は半乾きの状態でヘラケズリがなされている。

1054~1057は外傾する口縁をもつ。1054は内面はほとんどが横方向のヘラケズリが施されている。これに対し、外面はナデである。1055は胴部内面に半乾きの状態で横方向のヘラケズリが施される。1056は口縁と胴部との境（内面）に稜が残る。1057はこれも半乾きの状態でヘラケズリされ、胴部外面に稜が残る。

1058は口縁部がわずかに外反する。胴部内面に横方向のヘラケズリが施される。黒褐色を呈し、石英や砂粒を多く含む。1060も同様で、内面には主に縦方向のヘラケズリが施される。割合、器体が薄めである。



第174図 土師器実測図

(第174図 1061～1067)

1061、1062、1065は口縁部が外傾し、胴部内面に横方向のヘラミガキを施す。その他の調整は横方向のナデを施している。茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石他砂粒を含んでいる。

1063は口縁部が外反し、胴部上半がわずかに膨らんでいるものである。口縁端部は平坦である。器壁は全体的に薄く仕上がっている。調整は全体的に横方向のナデである。茶褐色を呈し石英、長石、角閃石他砂粒を含む。

1064も口縁が外反し、薄手であるが口縁端部は丸くなる。また、胴部内面は横方向のヘラケズリが成される。その他の調整は大旨ナデである。茶褐色～淡茶褐色を呈し、石英、長石他砂粒を多く含む。

1066、1067は口縁部が外反し、内面に明確な稜が残るものである。胴部内面は強くヘラケズリが成される。これも大旨横方向のナデが成され、胎土には石英や砂粒などを多く含む。

鉢・壺

(第174図 1068～1071)

1068、1069は壺の底部であると思われる。表面の調整法や焼成から土師器の範疇で捕らえるのは疑問であるが、断面に見られる胎土の状態は土師器甕のそれと共通点がある。1068は暗灰色を呈し、外面はヨコナデ、内面はナデが施される。1069は外面が灰褐色を、内面が淡茶褐色を呈している。底部は薄く、わずかにあげ底である。底部外縁には刻みが入る。外面はヨコナデであり、他はナデ調整である。

1070、1071は鉢であると思われる。1070は口縁部がわずかに外傾する。調整はヨコナデであるが、外面には指頭圧痕も見られる。淡茶褐色を呈し、胎土には石英、長石、角閃石、金雲母を含む。1071は胎土、焼成共にこれまで土師器としてきたものとは性質が異なる。これは口縁が逆L字状に外反し、開きながら、わずかに内湾する体部をもつ。調整はすべてヨコナデである。内外面器体内部まで黒褐色～灰褐色を呈し、胎土には石英細粒ほか砂粒を多く含む。

② 黒色土器

鹿児島県では従来から土師器のうち、器の内面のみを黒色にいぶしているものを「内黒土師器」、内外面ともに黒色にいぶしているものを「黒色土器」として分類してきた。

ここでは両者を共に「黒色土器」とし、内面のみ（一部外面にかかるものも含む。）のものを「黒色土器A類」、内外面ともに施されるものを「黒色土器B類」とする田中琢氏の分類に従うことにした。

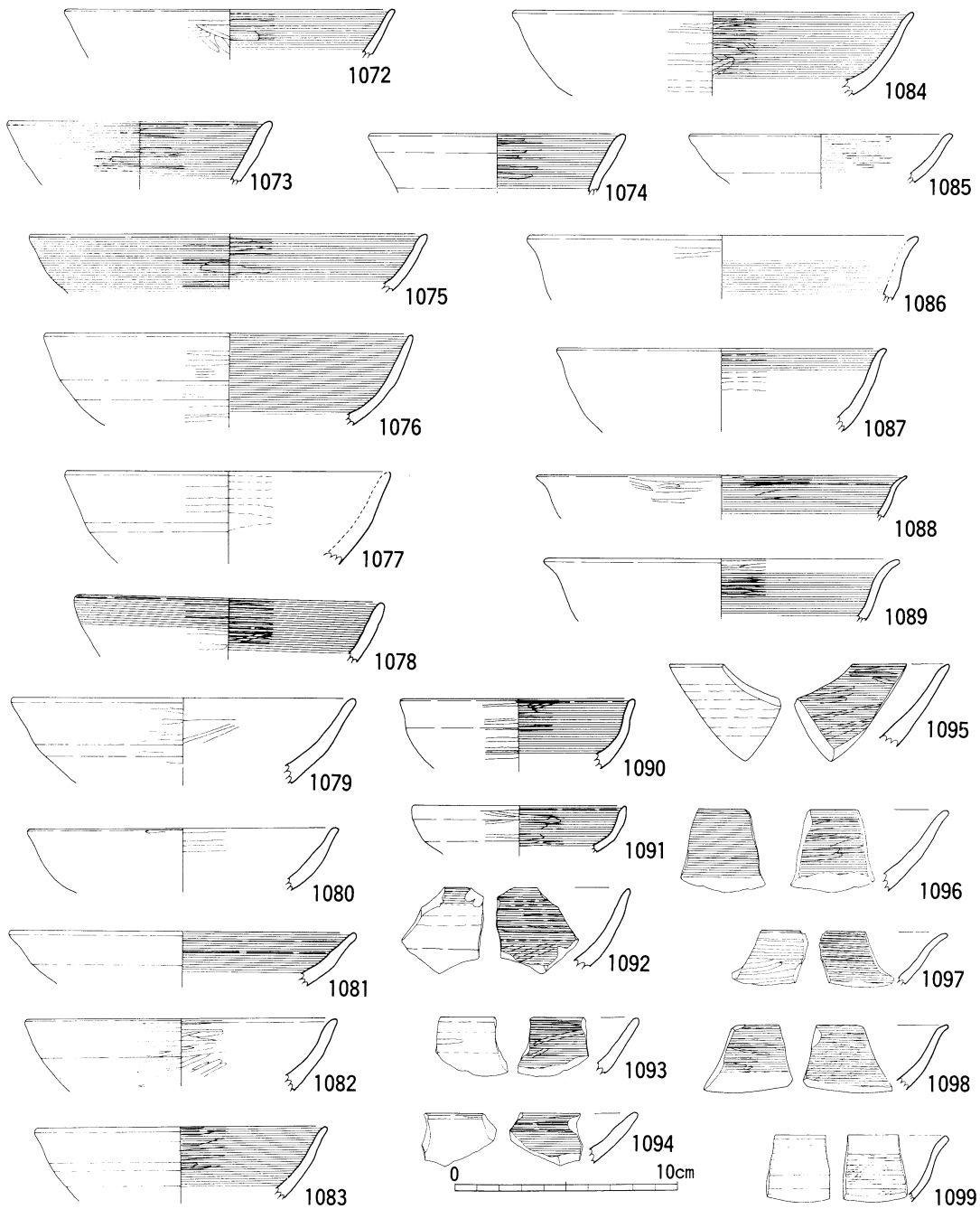
黒色土器A類 (第175図 1072～1099、第176図 1100～1129)

第175図では口縁部のみを取り上げた。

1072は開きながらまっすぐのびる体部をもつものである。内面には横方向、外面には端部

付近が横方向、その下が左上りのヘラミガキを施している。内面のみにいぶしがかる。

1073は口縁がわずかに肥厚する。内外面ともに横方向のヘラミガキが施される。外面の口縁から2.5cmの範囲までいぶしがかかっている。1074も同様の形態で内面のみ横方向のヘラミガキが施される。



第175図 黒色土器A類実測図

1075～1078はわずかに内湾する体部をもち、内外面ともに横方向のヘラミガキが施される。外面のいぶしは部分的である。1076は内面のいぶしもはっきりしない。1077は器体がやや厚めである。1078のいぶしは外面の口縁から1.5cmの範囲まで成される。

1079は体部は内湾するが、口縁はわずかに外反する。外面は横方向、内面は口縁付近が横方向で体部は右上りのヘラミガキを施す。いぶしははっきり残らない。

1080は内湾気味の体部で、口縁はわずかに薄くなる。内面には横方向のヘラミガキが施される。外面は摩滅しておりはっきりしない。

1081は体部は内湾し、口縁部が外反するものである。調整ははっきりしない。

1082は体部は内湾するが、口縁端部は細く締まる。内外面とも横方向のヘラミガキを施すが内面の下部はやや右上りである。黒色のいぶしは不十分である。

1083～1085、1087は内湾する体部で、口縁がわずかに外反する。内外面とも横方向のヘラミガキを施す。内面のみに黒色のいぶしがかかる。1084は外面の口縁から2cmの範囲まで黒色のいぶしがかかる。1085も外面までいぶしがかかる。1087は口縁付近しか黒色のいぶしが施されていない。

1086、1088、1089、1097はさらに外反する口縁部である。内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。口縁付近にはいぶしがかからず、それより以下である。1086は内面の風化が著しい。1090は復元口径10.6cmの小椀であると思われる。体部は内湾し、口縁部は外傾する。内外面ともに横方向のヘラケズリが施され、口唇の外部まで黒色のいぶしがかかる。1091も小椀で復元口径9.7cmである。体部は内湾し、内外ともに横方向のヘラミガキが施される。

1092、1096は体部が内湾し口縁部が外傾する。1092は内面上半は横方向、下半は右上りのヘラミガキを施す。外面は横方向のヘラミガキである。1096は内外面ともに横方向のヘラミガキが施される。

1093、1094はわずかに内湾する体部で口縁端部は丸くなる。内外面とも横方向のヘラミガキが施される。

1095も同様の体部で、口縁がやや外傾する点で違いがある。また、内面は口縁付近が横方向それより下方が右上りのヘラミガキを施す。外面は横方向のヘラミガキである。

1098は内湾する体部で、口縁部が外反するが短い。内面は口縁付近が横方向、それ以下が右上りのヘラミガキを、外面は横方向のヘラミガキを施す。外部は口縁以下2cmまで黒色のいぶしがかかる。1099も口縁が外反するが、やや長めである。端部はやや平坦である。内面の調整は横方向と右上りのヘラミガキが交差する。体部のみに黒色のいぶしがかかる。外面はすべて横方向のヘラミガキを施す。

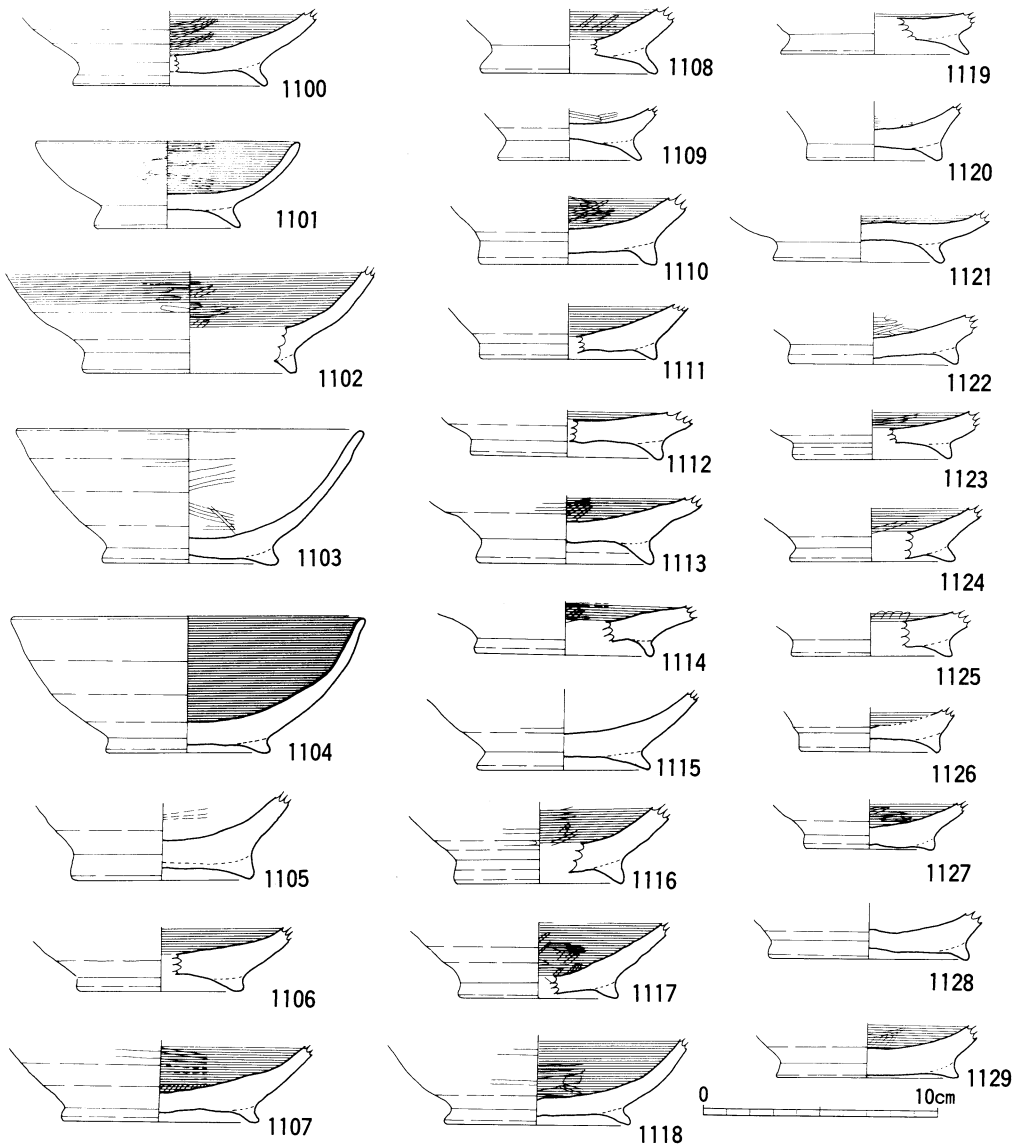
1100～1129は高台の残るものである。

1100はハの字状に開き、外面に稜のある高台をつけるもので、体部は内湾すると思われる。内面のヘラミガキは痕跡がはっきりしており、右上りが主であるが中には左上りのものもありやや雑な印象を受ける。外面は上端に横方向のヘラミガキを残すが、ほかはヨコナデである。

1101は高台付小椀で、復元口径11.3cm、高台径6.3cm、器高3.7cmを測る。体部は内湾し、ハの字状に開く高台を付ける。体部には内外面ともに横方向のヘラミガキが施され、内底面には円を描くように細かいヘラミガキが施される。その他の調整はヨコナデである。

1102もハの字状に開く高台をつけるものである。体部には内外面とも横方向のヘラミガキが施される。体部外面の底部に近いところまで、黒色のいぶしがかかる。

1103、1104は完形に復元ができたものである。高台付椀で内湾する体部で口縁がわずかに外傾する。高台は短く、ハの字状に開き、端部は丸くなる。法量はそれぞれ復元口径14.8、15.1cm、(復元)高台径7.5、7.1cm、器高5.7、5.8cmである。黒色のいぶしははっきり残っ



第176図 黒色土器A類実測図

ていない。内面のヘラミガキの観察は困難である。外面には横方向のヘラミガキが施される。高台付近の調整はヨコナデである。1105、1106、1115、1117は破片であるが、同様の形態の高台を付ける。1105はやや太めである。調整の観察は困難である。1117の内底面は無作為にヘラミガキを施している。

1107は復元高台径8.5cmとやや大きめで、体部もやや開き気味である。高台は短くハの字状に開く。内底面のヘラミガキは梘を描く様である。これも雑な印象を受ける。

1108、1109、1113、1122はハの字状に開き、やや高さのある高台を付ける。内面は右上りのヘラミガキが、外面はヨコナデが施される。1122は黒色のいぶしが残っていない。

1110、1111、1120、1124、1125はやや立ち気味で開き、太い高台を付ける。内面には細目のヘラミガキが施される。外面はヨコナデである。1123は高台の外面に稜が残る。1126は内面が剝離している。

1112、1121はハの字状に開き、やや反り気味の高台をつける。

1114、1116はハの字状ではあるがやや立ち気味で短く、端部は丸くなる高台をつけるものである。

1118は高台がハの字状に開くが、端部は欠損している。内面は剝離が著しいが、割り合い大きめのヘラを使用している。1119もハの字状に開く高台をもつが、細めでしっかりした焼きである。

1127は高台にほとんど高さがなく、端部は丸くなる。内面には細かいヘラミガキが右上り、左上がり交差する様に施される。

1128も高台はハの字状に開くが、高さがなく。高台径は8.6cmである。内面のいぶしは残っていない。1129も同様の形態である。これも内面の観察は不可能である。高台径は7.8cmである。

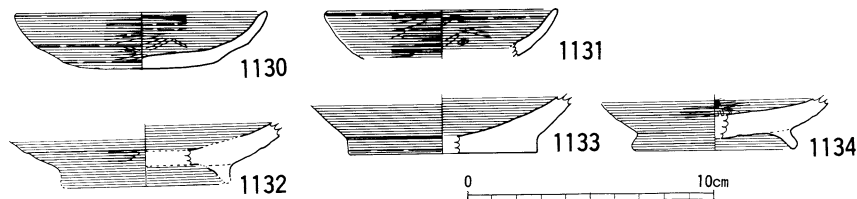
黒色土器B類 (第177図1130~1134)

内外面ともに黒色にいぶしをかける黒色土器B類もわずかながら出土している。

1130は口径10.2cm、器高2.3cmの坏である。底部も丸みを帯びており、丸底坏とした方が良いと思われる。体部は内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。底面はナデ調整である。

1131も1130とほぼ同様であると思われる。

1132、1134は高台部分であるが、高台がかなり欠損している。体部は内外面ともにヘラミ



第177図 黒色土器B類実測図

ガキがなされているのが確認できる。また、高台付近はヨコナデである。

1133は底部に高さのあるものである。内面にはヘラミガキが施されている。外面はヨコナデで、黒色のいぶしは不十分であるが、器体内部まで燻焼されている。

③ 須恵器

須恵器の出土は破片にして、遺構内出土のものを含めてもおよそ50点で、それも同一個体になるものが多かった。土師器の量から比較しても圧倒的に少ない。その中においてD-2・3・4・5区、E-3・4・5区、特にE-5区に多く出土した。

形態が復元できるものは1個体に過ぎなかった。

(第178図 1135~1144)

1135~1138は同一個体で壺である。復元頸部径は9.0cmで、頸部は内外面ともヨコナデ調整である。口縁部は欠損しているが、二重口縁の可能性もある。胴部は丸みを帯び、なで肩状を成す。胴部最大径部分のやや上に把手が付く。把手は輪になると思われる。胴部外面は格子状の叩きが成され、内面は同心円状のあて板痕跡が残り、さらに両面ともヨコナデが施される。外面には釉がかかる。外面には暗灰褐色、内面は赤紫色を呈し、胎土には長石や石英が含まれる。

1139~1144も同一個体である。器種ははっきりしない。赤く焼けたもので、外面は平行叩きが成され、内面は同心円状のあて板痕跡が残る。外面は赤茶褐色、内面は淡茶褐色を呈し、胎土には礫や、石英粒を含む。雑な作りである。

(第179図 1145~1152)

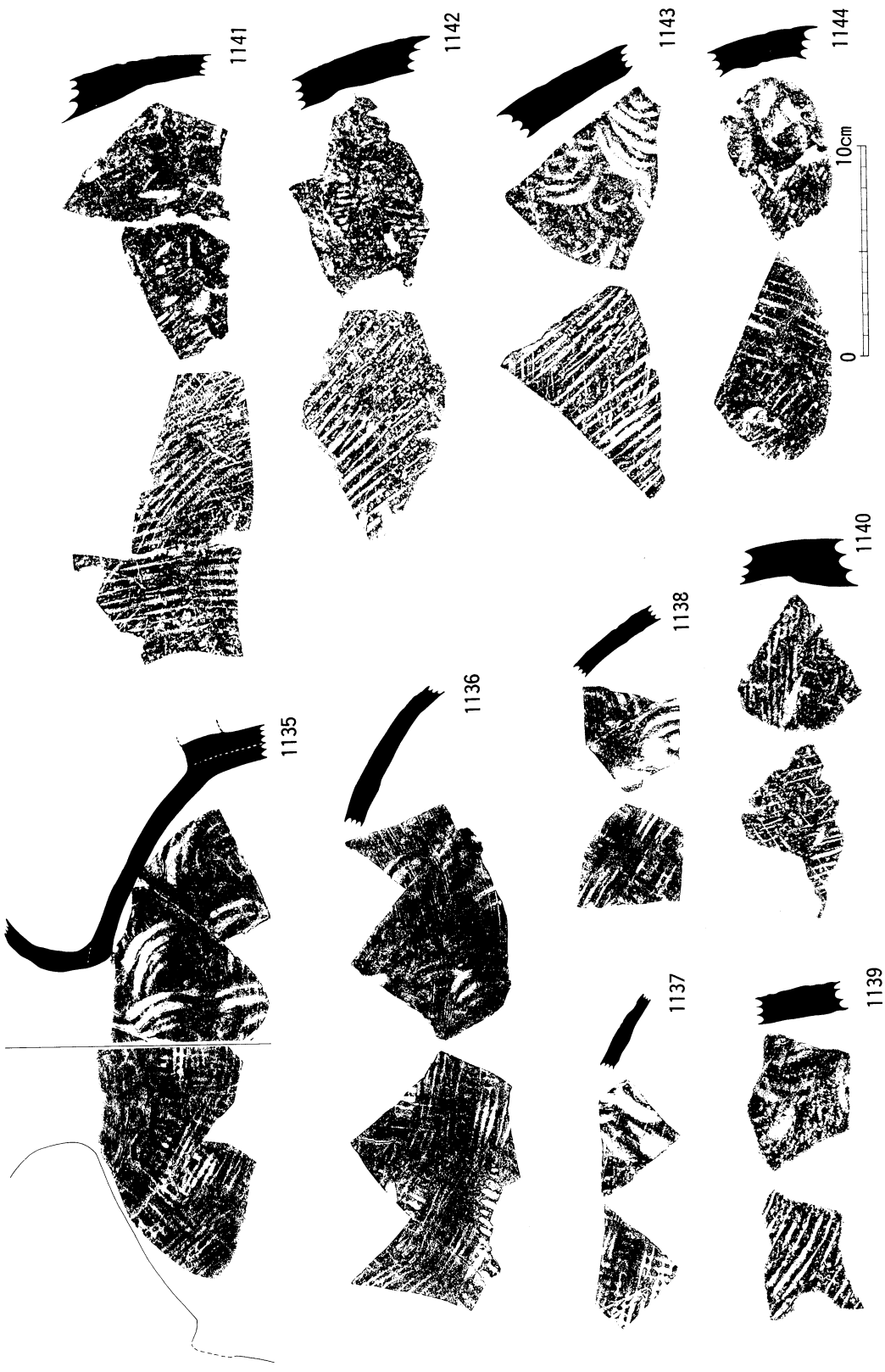
ここに取り上げたものはすべて同一個体である。破片で器種ははっきりしないがこれも壺ではないかと思われる。外面は平行叩き（左上り）を主にし、その上に点々と交差する様に平行叩き（右上り）を施している。内面は外面の叩きより幅の広い平行状と同心円状のあて板痕跡が残る。外面には黒褐色~緑茶褐色の釉がかかる。内面は暗灰褐色、灰褐色、茶褐色を呈し、胎土には長石や細砂粒を含んでいる。

(第180図 1153~1159)

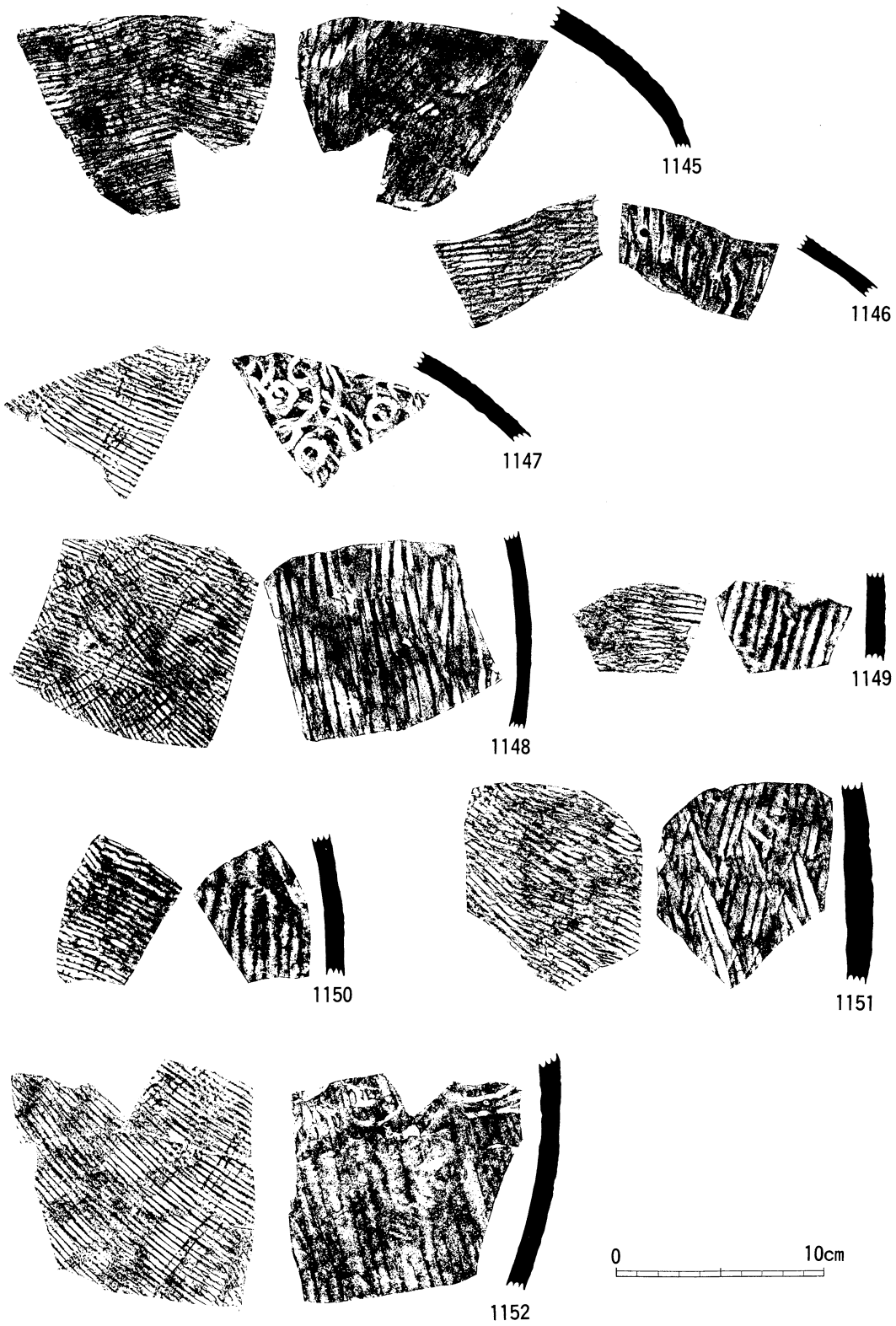
1153、1154は同一個体で、器種は不明である。外面には細い平行叩きが成され、内面には荒縄目と同心円状のあて板痕跡が残る。1154の内面には長径6mmの窪みがあり、顕微鏡で観察した結果靱痕であることが確認できた。荒縄についていた靱殻であろう。内外面ともに淡灰茶褐色を呈し、胎土には石英、長石、砂粒を含む。

1155は壺もしくは甕の胴部上半部分であると思われる。外面は格子状叩きが成され、内面には同心円状のあて板痕跡が残る。頸部に当たる部分はヨコナデ調整である。灰褐色を呈し、胎土には砂粒や礫を含む。

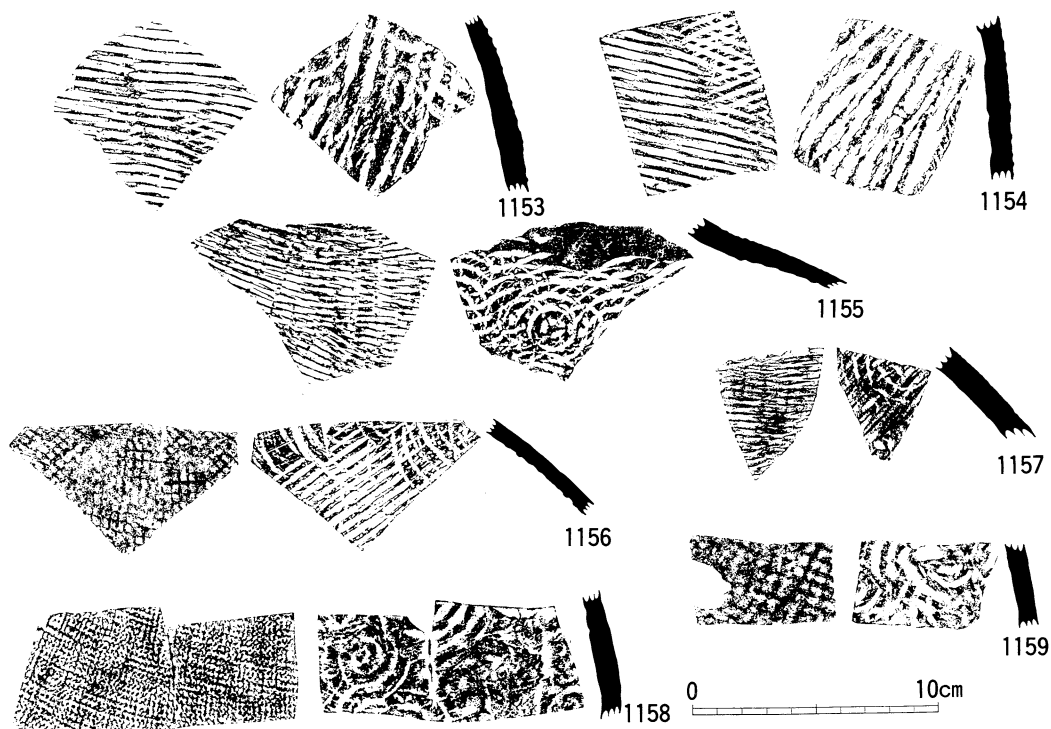
1156も胴部上半部分である。外面は格子状叩きが成され、内面は同心円状と平行状のあて



第178图 須惠器実測图



第179図 須恵器実測図



第180図 須恵器実測図

板痕跡が残る。外面には釉がかかる。暗灰色を呈する。

1157も同じ部位であると思われる。外面は平行叩きが成され、内面は同心円状のあて板の後平行状のあて板が使用されている。灰褐色を呈し、胎土には石英を含む。

1158、1159は胴部中央部分であると思われる。1158は外面に細かい格子状の叩きが成され、内面には同心円状のあて板が使用され、その後布で押えたようである。淡灰茶褐色を呈し、胎土には石英粒を含む。1159は外面には格子状の叩きが成され、更に釉がかかる。内面には同心円状のあて板が使用される。外面は暗青灰褐色、内面は赤茶褐色を呈し、胎土には礫が含まれる。

④ 焼塩壺 (第181図 1160~1163)

内面に布目痕があり、もろい焼成の焼塩壺は破片にして約60点が出土した。焼塩壺はその焼成の性質状、部位の分かるものは少なかった。その形態は胴部から口縁部に向かってまっすぐ開いていくものと思われる。

1160は口縁部である。端部は内面に丸め込んでいる。外面の調整はナデで明茶褐色を呈し、石英、長石他砂粒や礫を含む。1161は口縁部であるが上端が欠損している。縦に3本ほど棒状の痕跡が残る。石英を多く含む。1162も口縁付近である。角閃石を多く含む。上端部分で布を強く押え込んでいる。

1163は胴部である。金雲母や粒子の大きな砂粒を多く含んでいる。

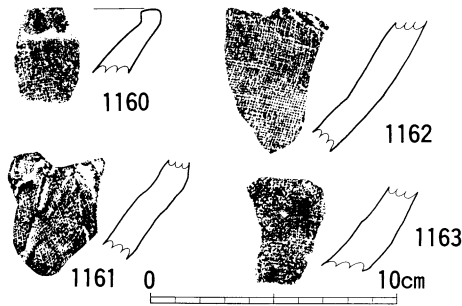
⑤ 紡錘車 (第182図 1164~1171)

紡錘車と思われる遺物が8点出土している。まばらであるが、おおよそC・D-8区、D・E-2・3区の出土である。すべて土師器底部の再利用品である。

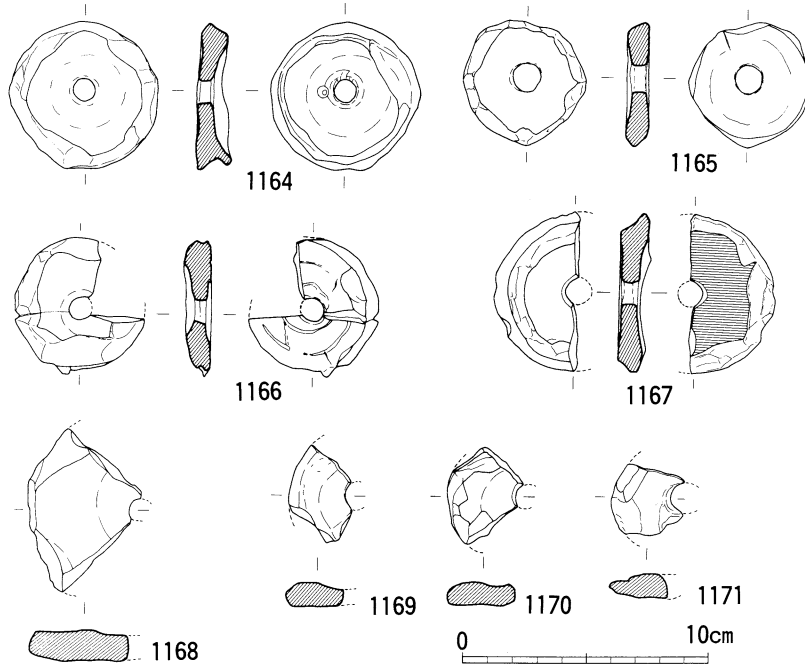
1164、1167、1169は高台付きの底部を再利用したものである。1164は高台をほとんど残しているが、側面を丸みをもつようにみがいている。孔はやや中心からずれた位置に通してあるが刻み状の痕跡が残っている。この孔の横に別に孔を施そうとした痕跡も残っている。1167は黒色土器A類の再利用品で、高台は全く残らないように取り付け部分をつぶしている。1169も土師器ではあるが、1167と同様の技法である。

他は底部のみのももの再利用で、当遺跡の土師器に見られた「円盤状の底部」そのものに孔を通したものであるといえる。体部の取り付け部をつぶしているがいびつである。

すべて孔の大きさが違い、中心からわずかにずれているのが特徴的であり、その用途について紡錘車以外の使用法も考える必要がある。



第181図 焼塩壺実測図

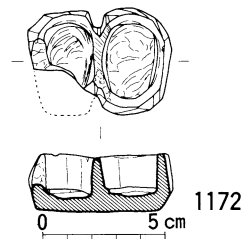


第182図 紡垂車実測図

⑥ 滑石製品 (第183図 1172)

滑石製品は7点ほど出土した。ほとんどが石鍋の破片であった。

1172はC-4区I b層で出土したものであり、一概に平安時代の遺物としては位置付けできないかもしれない。何らかの容器であったと思われるもので、石鍋の再利用品である。底部には石鍋製作時の面取りが施され、表面が黒色に焼けている。側面も工具によって



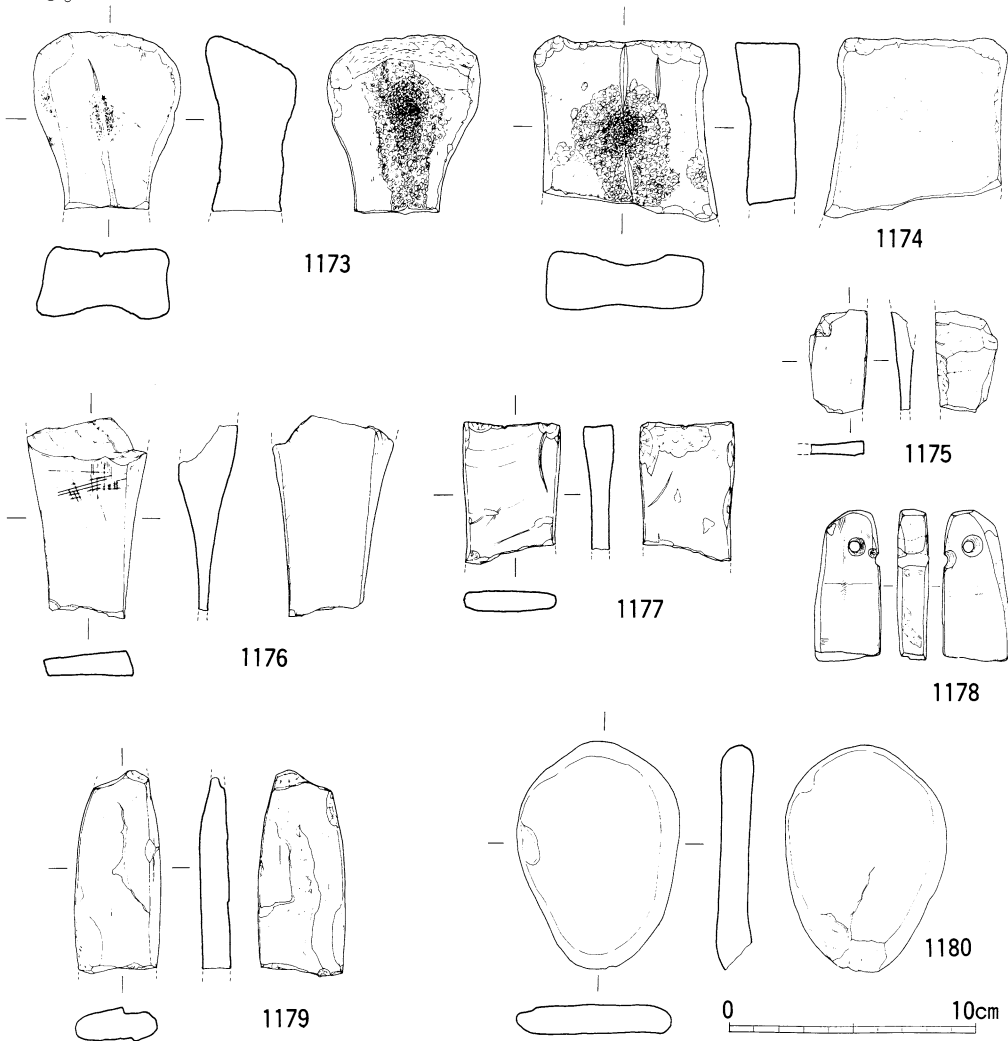
第183図 滑石製品実測図

面取りされ、右側半分は欠損するが外形の平面形が隅丸長方形を連結した形になると思われる。丸ノミ状の工具によって楕円形状の穴が2つうかてれている。

⑦ 砥石ほか (第184図 1173~1180)

砥石は7点ほど出土した。1173、1174がⅢ a層出土で、1176はⅡ層出土である。ほかは表採である。また、1175が頁岩であること以外は他はすべて砂岩で砥石に適した素材を利用していることが分かる。

1173は半分以上が欠損している。上面に磨痕が残ると共に、鋭利なものの先端部を研磨した線刻が残る。両側面にも磨痕が残る。下面にも磨痕が残り更に敲打痕も残っている。1174も欠損しているが、残りの4面すべてに磨痕が見られる。上面には線刻と敲打痕が残る。



第184図 砥石実測図

1175は小形でこれも欠損している。これは3面に磨痕が残り、表面には細かな擦痕が多く残っている。1176はやや大きめであるが形態的には1175に類似する。これも欠損しているが4面に磨痕が残り、上面には細い線刻が残る。1177も同様である。これは線刻が研磨されない上端の面に成される。1179も4面に磨痕が残るが剝離しており残りが良くない。

1178は携帯用の小形砥石であると思われる。下端欠損するが、他の面はすべて磨痕が見られる。孔が穿たれているが、もう1か所その痕跡があり元来はもう一回り大きな砥石であったと思われる。

1180は砥石ではないが、平坦な石で表面が磨かれているので取り上げた。硯として使用されたと思われる。Ⅲ a 層出土である。

第29表 遺構内出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土地点	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
121	487	小皿	検出面	9.5	5.8		2.1		ヨコナデ	ヨコナデ
	488	(口縁部)	検出面	13.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	489	(底部)	検出面		6.1				ヨコナデ	ヨコナデ
	490	(口縁部)	周溝	11.2				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	491	高台付椀	主体部	15.4		7.8	6.8	金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
125	492	高台付椀	検出面	15.8		8.6	6.0		ヨコナデ	ヨコナデ
	493	(口縁部)	周溝	16.2				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	494	(高台部)	周溝			8.8			ヨコナデ, ヘラミガキ	ヘラミガキ
	495	(口縁部)	周溝	12.2				砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	496	高台付椀	周溝	15.3		7.4	5.1	砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	497	(高台)	周溝			8.2		長石	ヨコナデ	ヨコナデ
	498	(底部)	周溝		5.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	499	(底部)	周溝		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	500	高台付皿	周溝	14.8		8.9	6.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	501	(口縁部)	周溝	13.2					雑なヨコナデ	ヨコナデ
	502	(口縁部)	周溝	12.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	503	(口縁部)	周溝	10.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	504	(底部)	周溝		7.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	505	(底部)	周溝		6.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	506	(底部)	周溝		6.8				ヨコナデ	ヨコナデ
	507	(底部)	周溝		5.8			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	508	(口縁部)	検出面	8.5					ケズリ, ヨコナデ	ヨコナデ
	509	(口縁部)	周溝	9.2					ヨコナデ, ケズリ	ヨコナデ
	510	坏	周溝	8.6	6.1		2.6		ヨコナデ	ヨコナデ
	511	坏	周溝	9.6	6.0		2.8		ヨコナデ	ヨコナデ
512	坏	周溝	10.8	5.7		3.1		ヨコナデ	ヨコナデ	
513	(底部)	周溝		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ	
514	坏	主体部	10.2	4.9		4.0		ヨコナデ	ヨコナデ	
515	坏(底部)	主体部		5.1				ヨコナデ	ヨコナデ	
128	519	小皿	周溝	8.7	4.7		1.9		ヨコナデ	ヨコナデ
	520	小皿	主体部	9.1	5.2		2.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	521	小皿	主体部	8.9	5.7		2.3		ヨコナデ	ヨコナデ
	522	高台付椀	検出面	14.5			6.0		ヘラミガキ, ヨコナデ	ヘラミガキ
131	523	(高台部)	周溝肩			6.6			ヨコナデ	ヘラミガキ
	524	(口縁部)	周溝	13.8				長石, 石英	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	525	(高台部)	周溝			6.7			ヨコナデ	ヘラミガキ
	526	(高台部)	周溝			7.9		石英	ヨコナデ	ヘラミガキ
	527	(底部)	周溝		7.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	528	(口縁部)	周溝	—					ヨコナデ	ヨコナデ
	529	(口縁部)	周溝	10.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	532	小皿	周溝	9.0	7.1		1.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	533	小皿	周溝	9.2	7.0		1.0		ヨコナデ	ヨコナデ
	534	小皿	周溝	9.3	6.0		1.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	535	小皿	周溝	9.8	7.3		1.4		ヨコナデ	ヨコナデ
	536	小皿	周溝	9.9	6.8		1.6		ヨコナデ	ヨコナデ

遺構内出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土地点	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
131	539	小皿	主体部	8.7	5.8		2.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	540	小皿	主体部	8.6	5.2		2.0		ヨコナデ	ヨコナデ
	541	小皿	主体部	8.1	5.8		1.6		ヨコナデ	ヨコナデ
135	551	(口縁部)	周溝	—				石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	552	(口縁部)	周溝	—					ヨコナデ	ヨコナデ
	553	(口縁部)	検出面	15.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	554	高台付椀	周溝	15.6		6.1	5.5	砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	557	坏	主体部	14.0	6.9		5.0	石英、金雲母、角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
	558	小皿	主体部	9.0	5.3		2.7	長石	ヨコナデ	ヨコナデ
	559	小皿	主体部	9.1	5.0		3.0	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	560	小皿	主体部	8.2	4.8		2.3		ヨコナデ	ヨコナデ
	561	小皿	主体部	10.0	6.3		2.1	角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
137	562	椀	P3内	14.8	9.3		4.0	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
144	566	(底部)	半円形溝		5.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	567	(口縁部)	溝 2	10.7					ヨコナデ	ヨコナデ
	569	(底部)	溝 2		5.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	570	(底部)	溝 3		6.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	571	小皿	溝 4	9.7	6.5		1.8	石英 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	572	(口縁部)	溝 4	11.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	573	(口縁部)	溝 4	15.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	574	(高台部)	溝 2				8.3		ヨコナデ	ヘラミガキ
	575	(高台部)	溝 4				7.1		ヘラミガキ、ヨコナデ	ヘラミガキ
576	(高台部)	溝 3				7.6		ヨコナデ	(ヘラミガキ)	
147	577	(口縁部)	長楕円形遺溝	16.1					ヨコナデ	ヨコナデ
	578	(底部)	長楕円形遺溝		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	579	(高台部)	長楕円形遺溝				7.8		ヨコナデ	ヨコナデ
	580	(口縁部)	楕円形遺溝	19.3					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	581	(口縁部)	楕円形遺溝	16.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	582	(口縁部)	楕円形遺溝	14.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	583	(高台部)	楕円形遺溝				8.2		ヨコナデ	ヨコナデ
	584	坏~小皿	楕円形遺溝	9.1	6.5		2.2	金雲母、長石	ヨコナデ	ヨコナデ
	585	坏~小皿	楕円形遺溝	8.9	4.6		1.6		ヨコナデ	ヨコナデ
	586	坏~小皿	楕円形遺溝	9.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	587	小皿	楕円形遺溝	8.9	5.8		2.6		ヨコナデ	ヨコナデ
	588	小皿	楕円形遺溝	8.1	4.6		1.7	石英	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ
	589	坏	楕円形遺溝	9.6	6.0		2.3	石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	590	坏	楕円形遺溝	9.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	591	坏	楕円形遺溝		5.1				ヨコナデ	ヨコナデ
	592	(底部)	楕円形遺溝		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	593	(須恵器)	楕円形遺溝	14.6				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	594	(口縁部)	楕円形遺溝	15.3					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	595	(口縁部)	楕円形遺溝	14.2					ヨコナデ	ヘラミガキ
596	(高台部)	楕円形遺溝				7.4		ヘラミガキ、ヨコナデ	ヘラミガキ	
597	(高台部)	楕円形遺溝				7.6		ヨコナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	

遺構内出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土地点	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整				
									(外面)	(内面)			
150	599	(口縁部)	円形5	8.2	6.1				ヨコナデ	ヨコナデ			
	600	(口縁部)	円形5	16.4					ヨコナデ	ヨコナデ			
	601	(口縁部)	円形5	14.4					ヨコナデ	ヨコナデ			
	602	(底部)	円形14						ヨコナデ	ヨコナデ			
	603	(口縁部)	円形7	15.4					ヘラミガキ	ヘラミガキ			
	604	(口縁部)	円形21	16.2					ヘラミガキ	ヘラミガキ			
151	608	(口縁部)	ビット17	15.8	6.9		長石, 石英, 角閃石		ヘラミガキ	ヘラミガキ			
	609	(口縁部)	ビット26	15.0					ヘラミガキ	ヘラミガキ			
	610	(口縁部)	ビット79	—					ヨコナデ, ヘラミガキ	ヘラミガキ			
	611	(高台部)	ビット57						ヨコナデ, ヘラミガキ	ヨコナデ			
	612	(口縁部)	ビット89	15.5					ヘラミガキ	ヘラミガキ			
	613	(口縁部)	ビット50	—					ヨコナデ	ヨコナデ			
	614	(口縁部)	ビット63	13.6					ヨコナデ	ヨコナデ			
	615	(口縁部)	ビット41	13.4					ヨコナデ	ヨコナデ			
	616	小皿	ビット28	7.5					4.9	1.5	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	617	小皿	ビット27	8.0					5.7	1.5	石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	618	皿	ビット62	11.8					8.3	2.1	長石, 角閃石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	619	小皿	ビット71	11.1							長石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	621	(口縁部)	ビット35	16.4							金雲母, 長石	ヨコナデ, ヘラミガキ	ヘラミガキ
	622	(高台部)	ビット21							8.2	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	623	(高台部)	ビット8							9.8	長石, 角閃石, 石英, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	624	(底部)	ビット29						6.4			ヨコナデ	ヨコナデ
	625	(底部)	ビット74						7.2			ヨコナデ	ヨコナデ
626	(底部)	ビット10		7.1			ヨコナデ	ヨコナデ					

(単位 cm)

第30表 包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整 (外面) (内面)	
156	627	D-5Ⅲ a	104.25	13.6		6.5	6.3	石英, 長石, 砂粒	ヨコナデ, ヘラミガキ	ヘラミガキ
	628	A-8Ⅲ a	108.98	14.2					ヘラミガキ, ヨコナデ	ヨコナデ
	629	E-4Ⅲ a	103.87	14.2				長石, 石英, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	630	E-4Ⅲ a	105.67	12.9				長石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	631	E-5Ⅲ a	101.78	12.3					ヨコナデ	ヨコナデ
	632	D-5Ⅲ a	103.52	14.8				石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	633	C-9Ⅱ	-	12.6				石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	634	E-5Ⅲ a	-					砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	635	E-3Ⅲ a	104.19	13.6				金雲母, 角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
	636	E-4Ⅲ a	103.46	13.7				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	637	E-3Ⅲ a	104.11	13.3				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	638	E-5Ⅲ a	101.63	12.2				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	639	E-4	-	11.0				石英, 角閃石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	640	D-5Ⅲ a	104.23					砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	641	E-5Ⅲ a	102.05	11.7				石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	642	D-3Ⅲ a	104.49	12.8				長石, 小石	ヨコナデ	ヨコナデ
	643	E-4Ⅲ a	103.85	13.8				石英, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	644	E-2	-	13.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	645	E-2Ⅲ a	104.83						ヨコナデ	ヨコナデ
	646	E-5Ⅲ a	102.22						ヨコナデ	ヨコナデ
	647	D-4	-	15.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	648	E-4Ⅲ a	103.35		7.0			礫	ヨコナデ	ヨコナデ
	649	E-2Ⅱ	102.74		6.0			石英, 長石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	650	E-4Ⅲ a	103.83		5.5			長石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	651	E-2	-		4.9			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
652	E-4Ⅲ a	104.05		5.0			長石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
653	D-4	-		5.5			石英, 長石, 角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ	
157	654	C-2	105.75	16.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	655	D-6	-	15.4				石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	656	C-8	106.02	-					ヨコナデ	ヨコナデ
	657	C-8	105.99	14.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	658	C-2	105.55	14.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	659	C-8	106.11	14.1					ヨコナデ	ヨコナデ
	660	E-3	104.53	13.6				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	661	B-7	-	13.6				石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	662	C-2	105.38	17.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	663	E-3	104.32	15.9					ヨコナデ	ヨコナデ
	664	E-5	102.07	16.3					ヨコナデ	ヨコナデ
	665	D-3	102.52	14.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	666	D-8	105.59	15.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	667	D-9	105.06	14.2				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	668	A-6	108.48	14.2					ヨコナデ	ヨコナデ
669	D-6	104.41	-				金雲母, 石英	ヘラミガキ, ヨコナデ	ヘラミガキ	
158	670	E-5Ⅲ a	-	13.4				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	671	C-6	-	13.3					ヨコナデ	ヨコナデ

包含層出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
158	672	D-3Ⅲ a	104.89	13.5					ヨコナデ	ヨコナデ
	673	E-3Ⅲ a	104.49	13.0				細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	674	E-2Ⅱ	—	11.9				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	675	E-3Ⅲ a	104.37	11.0				細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	676	D-3Ⅲ a	101.62	13.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	677	D-3Ⅲ a	105.23	12.2				砂粒, 石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	678	E-5Ⅲ a	102.78	12.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	679	C-9Ⅱ下	105.86	11.3					ヨコナデ	ヨコナデ
	680	C-9Ⅱ下	106.07	—					ヨコナデ	ヨコナデ
	681	D-3Ⅲ a	104.44	13.9					ヨコナデ	ヨコナデ
	682	D-7Ⅲ a	104.45	12.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	683	C-9Ⅱ下	106.82	12.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	684	D-9Ⅱ	—	11.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	685	E-5Ⅲ a	102.40	11.1					ヨコナデ	ヨコナデ
	686	E-3Ⅲ a	104.19	12.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	687	A-9Ⅱ下	108.18	12.5				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	688	B-9Ⅱ	106.70	11.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	689	E-3Ⅲ a	104.18	10.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	690	D-3Ⅲ a	102.32	13.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	691	E-3Ⅲ a	104.18	12.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	692	E-3Ⅲ a	104.12	12.2					ヨコナデ	ヨコナデ
693	E-5Ⅲ a	102.89	11.6					ヨコナデ	ヨコナデ	
694	E-5Ⅲ a	102.89	11.4					ヨコナデ	ヨコナデ	
695	D-5Ⅲ a	104.25	10.7					ヨコナデ	ヨコナデ	
696	D-3Ⅲ a	104.52	10.0					ヨコナデ	ヨコナデ	
697	D-2Ⅱ	105.27	10.0					ヨコナデ	ヨコナデ	
698	E-2Ⅲ a	104.71	10.8					ヨコナデ	ヨコナデ	
699	D-5Ⅲ a	—	11.4					ヨコナデ	ヨコナデ	
159	700	E-5Ⅲ a	101.84	16.3				石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	701	E-3Ⅲ a	104.15	—				長石	ヨコナデ	ヨコナデ
	702	B-9Ⅱ下	107.25	—					ヨコナデ	ヨコナデ
	703	D-3Ⅲ a	104.78	16.4				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	704	E-3Ⅲ a	104.46	15.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	705	C-6Ⅲ a	106.25	—				細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	706	E-5Ⅲ a	104.61	15.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	707	E-4Ⅲ a	102.96	—					ヨコナデ	ヨコナデ
	708	E-3Ⅲ a	104.55	15.6				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	709	E-2Ⅲ a	104.96	15.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	710	E-2Ⅱ	104.98	—				砂粒	ヘラミガキ	ヨコナデ
	711	E-5Ⅲ a	102.30	—					ヨコナデ	ヨコナデ
	712	D-2Ⅲ a	104.80	16.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	713	E-3Ⅲ a	104.45	—					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	714	C-2Ⅲ a	105.61	16.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	715	E-2Ⅱ	104.88	13.8				石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
716	D-2	—	—					ヨコナデ	ヨコナデ	

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
159	717	E-3 III a	104.28	14.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	718	A-8 III上	109.6	14.4	7.4		5.0		ヨコナデ	ヨコナデ
	719	E-4 III a	104.17	12.6	6.0		5.6		ヨコナデ	ヨコナデ
	720	E-5 III a	-	11.6	6.6		3.8	石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	721	E-3 II	104.56	-				金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	722	E-5 III a	-	12.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	723	B-9 III上	-					砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	160	724	E-5	-	16.0				石英, 金雲母	ヘラミガキ
725		D-3 III a	-	15.4					ヘラミガキ	ヘラミガキ
726		D-3 III a	104.66	12.5					ヘラミガキ	ヘラミガキ
727		C-9 II	105.86	-					ヨコナデ	ヨコナデ
728		A-7	109.06	16.5					ヨコナデ	ヨコナデ
729		D-3 II	105.08	13.4					ヨコナデ	ヨコナデ
730		C-6 III a	106.21	13.2					ヨコナデ	ヨコナデ
731		D-2	-					金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
161	732	A-9 II	108.54	16.0	8.4		3.7		ヨコナデ	ヨコナデ
	733	D-6 III a	104.69	15.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	734	D-7 III a	104.44	12.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	735	E-5	-	13.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	736	E-3 III a	104.57	14.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	737	C-8 II下	106.02	12.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	738	E-3 III a	104.58	17.6				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	739	E-4 III a	103.79	13.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	740	E-4	-	12.3					ヨコナデ	ヨコナデ
	741	E-3	-	11.9				石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	742	D-9 III上	105.44	12.1				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	162	743	E-3 III a	104.21	10.6	6.8		2.7		ヨコナデ
744		D-5 III a	-	10.4	6.1		2.9		ヨコナデ	ヨコナデ
745		D-8 II下	107.31	9.2	5.8		2.8		ヨコナデ	ヨコナデ
746		C-8 III上	-	10.0	7.2		2.5		ヨコナデ	ヨコナデ
747		E-5 III a	102.24	9.4	5.4		2.6		ヨコナデ	ヨコナデ
748		D-7 III a	105.00	8.7	6.2		2.8		ヨコナデ	ヨコナデ
749		B-4	-	9.6	7.2		2.9		ヨコナデ	ヨコナデ
750		B-9 II	107.43	9.0	5.5		2.5		ヨコナデ	ヨコナデ
751		E-2 III a	104.78	7.8	4.9		2.3		ヨコナデ	ヨコナデ
752		B-8 III上	106.93	8.8	6.7		2.2	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
753		D-3 III a	104.87	11.3					ヨコナデ	ヨコナデ
754		E-2 II	104.86	10.6				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
755		C-8 II下	105.92	10.4					ヨコナデ	ヨコナデ
756		B-9 II	106.71	9.4					ヨコナデ	ヨコナデ
757		B-5 III a	108.05	9.8					ヨコナデ	ヨコナデ
758		E-2 III a	104.75	10.6					ヨコナデ	ヨコナデ
759		C-9 II	106.29	8.2					ヨコナデ	ヨコナデ
760		D-3 III a	104.55	9.7					ヨコナデ	ヨコナデ
761		E-2 II	104.97	10.4					ヨコナデ	ヨコナデ

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整		
									(外面)	(内面)	
162	762	D-3Ⅲ a	104.70	10.2				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
	763	D-3Ⅲ a	104.89	9.2					ヨコナデ	ヨコナデ	
	764	D-2Ⅲ a	104.98	8.6					ヨコナデ	ヨコナデ	
	765	C-8Ⅱ下	106.05	8.8					ヨコナデ	ヨコナデ	
	766	E-3Ⅲ a	104.64		8.4			細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
	767	D-8Ⅱ	105.57		6.9				ヨコナデ	ヨコナデ	
	768	E-5Ⅱ	103.19		5.6			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
	769	C-8Ⅱ下	106.36		5.1				ヨコナデ	ヨコナデ	
	770	D-3Ⅲ a	104.66		5.1				ヨコナデ	ヨコナデ	
	771	D-2Ⅲ a	105.34		7.0				ヨコナデ	ヨコナデ	
	772	B-8Ⅱ	—		6.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
	773	F-4Ⅱ	103.10		6.0				ヨコナデ	ヨコナデ	
	774	E-4Ⅱ	103.20		5.3				ヨコナデ	ヨコナデ	
	775	E-2	—		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ	
	776	C-6Ⅲ a	106.27		6.4				金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	777	D-9Ⅱ	105.31		6.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	778	D-8Ⅱ	105.33		5.8			ヨコナデ		ヨコナデ	
	779	C-9Ⅱ	105.91		5.2			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
	780	B-4	—		5.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
	781	E-2Ⅲ a	104.83		5.2				ヨコナデ	ヨコナデ	
782	D-8Ⅱ	105.10		6.6			ヨコナデ		ヨコナデ		
783	C-8Ⅱ下	105.71		5.6			ヨコナデ		ヨコナデ		
784	D-9Ⅱ下	105.45		5.1			ヨコナデ		ヨコナデ		
163	785	E-4Ⅲ a	103.47	11.1	5.1		3.3	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
	786	C-8Ⅱ	—	10.2	4.7		3.2		砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	787	D-1Ⅲ a	104.83	9.9	4.6		3.3	小礫、石英、金雲母 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
	788	E-3Ⅲ a	106.65	10.6	5.4		3.2		ヨコナデ	ヨコナデ	
	789	C-8Ⅱ下	106.00	10.6	4.9		2.8		ヨコナデ	ヨコナデ	
	790	E-3Ⅲ a	104.59	11.4					ヨコナデ	ヨコナデ	
	791	E-4Ⅲ a	103.30	11.1					ヨコナデ	ヨコナデ	
	792	E-2Ⅲ a	104.74	11.2					ヨコナデ	ヨコナデ	
	793	D-2	—	10.8					ヨコナデ	ヨコナデ	
	794	E-4Ⅲ a	103.69	11.3					ヨコナデ	ヨコナデ	
	795	D-3Ⅲ a	104.42	10.1					ヨコナデ	ヨコナデ	
	796	D-3Ⅲ a	105.02	10.4					ヨコナデ	ヨコナデ	
	797	C-2Ⅲ a	105.57	11.4					ヨコナデ	ヨコナデ	
	798	E-5Ⅲ a	102.72	11.2					ヨコナデ	ヨコナデ	
	799	D-3Ⅲ a	104.23	10.7					ヨコナデ	ヨコナデ	
	800	C-8Ⅱ下	106.10	10.6					ヨコナデ	ヨコナデ	
	801	D-8Ⅱ	105.55		5.4				ヨコナデ	ヨコナデ	
	802	C-9Ⅱ下	105.64		4.9				ヨコナデ	ヨコナデ	
	803	D-3Ⅲ a	104.66		5.0				ヨコナデ	ヨコナデ	
	804	E-5Ⅲ a	102.15		4.1				ヨコナデ	ヨコナデ	
805	D-3Ⅲ a	104.37		5.5			ヨコナデ	ヨコナデ			
806	D-3Ⅲ a	104.52		5.1			ヨコナデ	ヨコナデ			

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
163	807	E-2Ⅲ a	—		4.8				ヨコナデ	ヨコナデ
	808	D-8Ⅱ	100.33		3.9				ヨコナデ	ヨコナデ
	809	E-2Ⅲ a	104.72		5.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	810	E-4Ⅱ	103.09		5.3				ヨコナデ	ヨコナデ
	811	B-8Ⅱ下	105.50		4.8				ヨコナデ	ヨコナデ
	812	E-4Ⅱ	103.40		4.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	813	E-5Ⅱ	103.40		4.5			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	814	E-3Ⅲ a	104.57		4.5			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	815	E-3Ⅲ a	104.18		4.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	816	C-8Ⅱ下	105.81		4.1				ヨコナデ	ヨコナデ
	817	E-4Ⅲ a	103.06		4.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	818	E-4Ⅲ a	—		4.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	819	E-3Ⅲ a	104.59		4.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	820	D-8Ⅱ	105.40		5.3				ヨコナデ	ヨコナデ
	821	E-3Ⅲ a	104.64		5.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	822	E-3Ⅲ a	101.33		5.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	823	D-9Ⅱ下	105.56		4.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	824	E-3Ⅲ a	104.40		5.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	825	D-3	—		4.3				ヨコナデ	ヨコナデ
	826	E-3Ⅲ a	102.30		6.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	827	E-3Ⅲ a	104.44		4.7				ヨコナデ	ヨコナデ
	828	E-3Ⅲ a	104.22		5.7				ヨコナデ	ヨコナデ
	829	C-8Ⅱ下	106.07		4.9				ヨコナデ	ヨコナデ
	830	D-3Ⅲ a	104.31		5.0			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	831	D-3Ⅲ a	104.85		4.9				ヨコナデ	ヨコナデ
	832	E-2Ⅲ a	104.66		5.0				ヨコナデ	ヨコナデ
833	E-4Ⅲ a	103.28		4.5				ヨコナデ	ヨコナデ	
164	834	B-9	—	9.7	5.1		2.3	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	835	D-3Ⅲ a	105.08	9.4	5.2		1.8	長石粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	836	D-2	—	8.8	5.2		2.2	角閃石, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	837	E-2	—	8.9	6.2		2.1	長石	ヨコナデ	ヨコナデ
	838	E-5Ⅲ a	102.31	8.9	5.3		2.1	石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	839	E-2Ⅱ	104.92	8.8	5.7		2.1		ヨコナデ	ヨコナデ
	840	E-4Ⅲ a	103.23	9.3	5.2		1.3	石英, 長石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	841	E-3	—	8.3	4.5		2.1		ヨコナデ	ヨコナデ
	842	D-3Ⅲ a	104.72	8.3	5.8		1.7		ヨコナデ	ヨコナデ
	843	A-7	109.17	9.4		5.8	3.4		ヨコナデ	ヨコナデ
	844	B-4	106.56	10.0	6.2		2.2		ヨコナデ	ヨコナデ
	845	E-4Ⅲ a	104.97	9.5	5.5		1.8	石英, 角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
	846	E-5	—	9.8	6.0		1.9		ヨコナデ	ヨコナデ
	847	C-7	105.34	7.6	5.0		1.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	848	E-3Ⅲ a	104.39	7.2	5.0		2.0	石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	849	A-9Ⅲ a	108.18	8.3	6.1		1.9	礫	ヨコナデ	ヨコナデ
	850	A-5Ⅲ a	108.36	8.8	6.3		1.7		ヨコナデ	ヨコナデ
	851	A-5Ⅱ	108.46	8.2	5.8		1.5		ヨコナデ	ヨコナデ

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
164	852	D-7Ⅲ a	104.37	8.0	6.0		1.6		ヨコナデ	ヨコナデ
	853	D-4	—	9.4	5.7		2.7		ヨコナデ	ヨコナデ
	854	C-6	—	9.0	6.4		2.1	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	855	C-7Ⅲ a	104.90	8.8	5.8		1.9	金雲母, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	856	B-4Ⅲ a	—	8.6	5.7		2.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	857	E-2	—	10.4	8.1		1.9	金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	858	C-9Ⅲ上	105.25	10.7	7.0		1.9		ヨコナデ	ヨコナデ
	859	D-2	—	8.0	5.5		1.9	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	860	B-6Ⅱ下	107.24	10.3	7.3		1.6		ヨコナデ	ヨコナデ
	861	A-6Ⅲ a	—	8.9	6.6		2.0		ヨコナデ	ヨコナデ
	862		106.41	9.5	6.6		2.4	石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	863	E-4Ⅲ a	—	10.1				長石, 石英, 角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
	864	E-5Ⅲ a	104.16	8.6			1.9	金雲母, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	865	D-5Ⅱ	103.70	9.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	866	E-2	—	11.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	867	C-8Ⅱ下	106.11	10.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	868	A-7	—	9.4					ヨコナデ	ヨコナデ
	869	F-4Ⅱ	103.02	8.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	870	E-2Ⅲ a	104.85	8.8					ヨコナデ	ヨコナデ, ヘラミガキ
	871	E-5Ⅲ a	101.81	10.2				金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	872	E-4Ⅲ a	103.18	10.1				石英, 長石, 角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
	873	E-4Ⅲ a	—	9.0				石英, 長石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	874	C-5Ⅲ a	106.22	7.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	875	E-5	—	8.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	876	C-9Ⅱ	—	8.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	877	E-5Ⅱ	102.91	9.9					ヨコナデ	ヨコナデ
	878	E-5Ⅲ a	102.58	7.9					ヨコナデ	ヨコナデ
	879	E-3Ⅲ a	104.301		7.6			石英, 長石, 細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	880	E-5Ⅲ a	02.93		5.6			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	881	D-7Ⅲ a	104.60		7.5			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	882	C-3Ⅲ a	105.36		6.5			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	883	E-2	—		4.7			石英, 細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	884	A-6Ⅲ a	108.34		5.4				ヨコナデ	ヨコナデ
885	D-2	—		7.0			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
886	E-3Ⅱ	104.43		5.3			石英, 長石	ヨコナデ	ヨコナデ	
165	887	B-5	—		6.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	888	E-5Ⅲ a	103.16		7.1			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	889	C-7Ⅲ a	105.29		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	890	E-5Ⅲ a	102.00		7.3				ヨコナデ	ヨコナデ
	891	C-2Ⅲ a	105.65		8.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	892	A-5Ⅲ a	108.45		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	893	E-2	—		7.5			石英, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	894	D-5Ⅱ	—		6.0			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	895	E-3Ⅲ a	102.37		6.8			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	896	E-5Ⅲ a	102.57		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
165	897	D-6 III a	104.65		6.8				ヨコナデ	ヨコナデ
	898	E-3 III a	104.64		6.4			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	899	D-9	-		7.0			石英, 細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	900	C-7	105.19		7.5			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	901	D-2 III a	104.99		6.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	902	E-3	-		6.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	903	E-3 III a	104.65		6.7				ヨコナデ	ヨコナデ
	904	D-8 II	105.56		5.7			金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	905	D-5 III a	104.10		7.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	906	E-5 III a	101.84		6.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	907	A-6 III	-		8.1			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	908	D-2 III a	104.51		6.3				ヨコナデ	ヨコナデ
	909	C-2	-		6.5			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	910	E-5 III a	-		6.6			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	911	A-6 III a	108.98		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	912	D-4 III a	104.01		7.5			石英, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	913	D-9 II 下	105.46		6.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	914	D-7	104.73		7.2			石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	915	C-2 III a	105.72		5.7			長石, 石英	ヨコナデ	ヨコナデ
916	E-3 III a	104.39		6.1			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
917	D-2	-		7.0				ヨコナデ	ヨコナデ	
918	D-3 II	105.05		6.7				ヨコナデ	ヨコナデ	
919	E-5	-		7.6			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
166	920	E-5 II	102.28		6.6			金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	921	D-2	107.18		7.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	922	D-2	107.18		6.6			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	923	E-3 III a	104.29		9.2			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	924	D-3 III a	104.78		6.0			金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	925	E-3	-		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	926	B-5 III a	108.22		6.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	927	D-3 II	104.72		6.0			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	928	D-5 III a	103.80		7.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	929	C-8 II 下	105.93		5.9				ヨコナデ	ヨコナデ
	930	D-6 III a	104.68		7.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	931	C-9	105.51		6.2			礫	ヨコナデ	ヨコナデ
	932	C-9 II	106.10		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	933	E-3 III a	104.31		5.6			石英, 細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	934	C-3 III a	105.99		8.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	935	D-3 III a	104.98		7.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	936	A-9 II	108.85		5.9				ヨコナデ	ヨコナデ
	937	C-6	105.19		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	938	E-2 III a	104.68		9.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	939	D-5 III a	103.33		6.8				ヨコナデ	ヨコナデ
	940	D-6	-		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	941	C-5 III a	106.31		5.8				ヨコナデ	ヨコナデ

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
166	942	E-3	-	-				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
167	943	C-6 III a	-		6.9			石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	944	A-6 III a	-		7.0			石英, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	945	A-7	109.22		6.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	946	E-4	-		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	947	D-3 II	104.65		6.8				ヨコナデ	ヨコナデ
	948	D-7 III a	-		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	949	E-2 III a	104.86		5.7				ヨコナデ	ヨコナデ
	950	E-2	-		5.6			石英, 細砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	951	C-8 II 下	106.28		5.2				ヨコナデ	ヘラミガキ
	952	C-4 III a	105.51		5.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	953	E-5 II	-		8.4				ヨコナデ	ヨコナデ
	954	E-5 II	102.28		7.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	955	E-3 III a	104.37		7.4			金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	956	A-5 III a	108.46		5.6				ヨコナデ	ヨコナデ
	957	D-6 III a	104.96		6.0				ヨコナデ	ヨコナデ
	958	E-2 III 上	104.84		8.8			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	959	C-6 III a	105.67		5.9			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	960	D-8 II 下	105.12		5.5				ヨコナデ	ヨコナデ
	961	E-5 III a	106.46		4.7				ヨコナデ	ヨコナデ
	962	E-4 III a	-		6.7			長石, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	963	C-8 II 下	-		7.2				ヨコナデ	ヨコナデ
	964	E-3 III a	104.59		8.1				ヨコナデ	ヨコナデ
	965	E-2	-		7.0			金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
966	D-6 III a	104.84		7.6				ヨコナデ	ヨコナデ	
967	D-6 III a	104.43		6.5				ヨコナデ	ヨコナデ	
968	E-5 III a	102.17		5.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
969	E-3 II	-		6.7			砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
970	C-9 II 下	105.90		5.5				ヨコナデ	ヨコナデ	
971	F-4	102.85		5.5				ヨコナデ	ヨコナデ	
972	A-7	109.18		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ	
973	D-3 III a	104.79		6.2				ヨコナデ	ヨコナデ	
168	974	D-1	-			7.0		石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	975	D-3 III a	104.79			7.1			ヨコナデ	ヨコナデ
	976	E-2 III a	104.63			8.4		金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	977	D-6	-			5.9			ヨコナデ	ヨコナデ
	978	B-8 II	106.73			8.0			ヨコナデ	ヨコナデ
	979	B-9 III	107.06			7.9			ヨコナデ	ヨコナデ
	980	E-3 III a	104.65			8.2			ヨコナデ	ヘラミガキ
	981	B-8 II	106.89			7.2			ヨコナデ	ヨコナデ
	982	A-7	109.04			9.0			ヨコナデ	ヨコナデ
	983	B-4	106.52			9.5		石英, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	984	E-5 II	102.90			10.8			ヨコナデ	ヨコナデ
	985	A-4	-			6.4			ヨコナデ	ヨコナデ
	986	D-2	105.82			6.7		石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
168	987	A-5Ⅲa	108.38				6.9	角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
	988	D-2	-				7.4	石英, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	989	D-2	-				7.6	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	990	C-6Ⅲa	106.36				7.6	石英, 長石, 金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ
	991	D-6Ⅲa	104.55				7.1		ヨコナデ	ヨコナデ
	992	D-3Ⅲa	104.55				8.0	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	993	D-2Ⅲa	105.09				8.4	角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ
	994	C-3	-				7.0	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	995	A-5Ⅱ	108.70				8.3		ヨコナデ	ヨコナデ
	996	B-9Ⅱ下	107.15				8.3		ヨコナデ	ヨコナデ
	997	C-9Ⅱ	105.85				8.4		ヨコナデ	ヨコナデ
	998	E-2Ⅲa	104.83				9.0		ヨコナデ	ヨコナデ
	999	D-2Ⅱ	105.20				7.3		ヨコナデ	ヨコナデ
1000	E-3Ⅲa	104.39				7.3	石英, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
1001	C-7	-				8.4	長石	ヨコナデ	ヨコナデ	
169	1002	D-2Ⅲa	105.42				8.6	石英, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	1003	C-9	-				8.1	石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	1004	E-2	-				7.2		ヨコナデ	ヘラミガキ
	1005	D-5Ⅲa	103.80				6.5		ヨコナデ	ヨコナデ
	1006	C-6Ⅲa	105.99				7.4	石英	ヨコナデ	ヨコナデ
	1007	C-6	105.38		6.8			石英, 金雲母	ヨコナデ, ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1008	D-7	-				6.4		ヘラミガキ, ヨコナデ	ヘラミガキ
	1009	A-5Ⅲa	-				6.1		ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1010	E-2	-				7.2	石英粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	1011	E-3Ⅲa	104.34				8.4	砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	1012	B-8Ⅱ下	-					石英粒, 礫	ヨコナデ	ヨコナデ
	1013	D-3Ⅱ	106.90		7.1				ヨコナデ	ヨコナデ
	1014	E-5Ⅲa	101.88				6.0		ヨコナデ	ヘラミガキ
	1015	C-6Ⅲa	106.37				7.8		ヨコナデ	ヨコナデ
	1016	D-4	107.06		11.8				ヘラミガキ	ヘラミガキ
1017	E-3Ⅱ	104.75				5.6		ヨコナデ	ヨコナデ	
170	1018	D-9Ⅱ	-	19.0				長石	ヨコナデ	ヨコナデ
	1019	E-5Ⅲa	-	15.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	1020	A-9Ⅱ	-	15.0					ヨコナデ	ヨコナデ
	1021	B-8Ⅱ	-	14.0				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	1022	C-8Ⅱ下	-	11.0				砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	1023	C-8Ⅱ下	-	10.5					ヨコナデ	ヨコナデ
	1024	C-8Ⅱ下	-	10.2					ヨコナデ	ヨコナデ
	1025	E-4Ⅲa	103.22						ヨコナデ	ヨコナデ
	1026	D-3Ⅲa	-					砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ
	1027	E-3Ⅲa	104.67	9.6					ヨコナデ	ヨコナデ
1028	B-7Ⅱ	-		7.2			石英, 角閃石, 砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
1029	B-7Ⅲa	106.71				7.3		ヨコナデ	ヨコナデ	
175	1072	C-6Ⅲa	106.18	14.8					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1073	D-5Ⅲa	103.48	-					ヘラミガキ	ヘラミガキ

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
175	1074	E-2	-	11.6				長石粒	ヨコナデ	ヘラミガキ
	1075	E-3 III a	-	-					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1076	C-2 III a	105.76	16.6					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1077	D-3 III a	-	14.6					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1078	E-2 III a	104.56	14					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1079	D-5 II	104.89	15.6					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1080	D-2	107.18	14.0					ヨコナデ	ヘラミガキ
	1081	C-9 II 下	105.85	15.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	1082	D-2 III a	-	14.0					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1083	C-6	-	13.2					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1084	E-5 III a	101.94	18.0					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1085	C-6	-	11.8					ヨコナデ	ヨコナデ
	1086	D-2 III a	104.89	17.6					ヨコナデ	ヨコナデ
	1087	D-6	-	14.8					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1088	E-3	107.24	16.6					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1089	E-5 III a	103.12	-					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1090	E-3 III a	104.24	10.6					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1091	D-9 II	105.42	9.7					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1092	D-2 II	-	-					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1093	C-6 III a	105.81	-					ヘラミガキ	ヘラミガキ
1094	D-6 III a	106.65	-				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
1095	E-3	104.62	-				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
1096	E-4	105.69	-				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
1097	D-2 III a	-	-				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
1098	D-3	105.38	-				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
1099		-	-				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
176	1100	C-3 III a	105.47			8.4		砂粒	ヨコナデ	ヘラミガキ
	1101	E-3 III a	101.58			6.3			ヨコナデ	ヨコナデ
	1102	E-5 III a	101.90			9.2			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1103	B-8 II	106.79	14.7		7.5	5.7		ヨコナデ	ヘラミガキ
	1104	C-7 III a	105.02	15.1		7.1	5.8		ヨコナデ	ヘラミガキ
	1105	D-3 II	104.77			7.8			ヨコナデ	ヨコナデ
	1106	D-2	-			7.2			ヨコナデ	ヨコナデ
	1107	D-6	-			8.5			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1108	D-6	-			7.6			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1109	C-6 III a	106.28			6.2			ヨコナデ	ヨコナデ
	1110	D-5	-			7.1			ヨコナデ	ヨコナデ
	1111	A-9 II	-			-			ヨコナデ, ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1112	E-4	-			8.2			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1113	E-2 III a	104.86			7.7			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1114	D-3	-			7.7			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1115	D-7	104.47			7.4			ヨコナデ	ヨコナデ
	1117	D-2	-			6.9			ヨコナデ	ヨコナデ
	1118	D-2 III a	-			8.0			ヨコナデ	ヘラミガキ

包含層出土土師器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区・層	絶対高	口径	底径	高台径	器高	胎 土	調 整	
									(外面)	(内面)
176	1119	E-4	—			7.2		長石, 砂粒 角閃石	ヨコナデ	ヘラミガキ
	1120	D-2Ⅱ	106.73			5.8			ヨコナデ	ヨコナデ
	1121	D-2Ⅲ a	104.96			7.3			ヨコナデ	ヨコナデ
	1122	B-6Ⅲ a	108.53			7.3			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1123	D-4	—			6.8			ヨコナデ	ヨコナデ
	1124	E-4	—			6.5			ヨコナデ	ヘラミガキ
	1125	D-4	—			6.8			ヨコナデ	ヨコナデ
	1126	E-2	—			6.1			ヨコナデ	ヨコナデ
	1127	E-3Ⅲ a	102.36		5.6				ヨコナデ	ヘラミガキ
	1128	B-6Ⅲ a	106.47			8.6			ヨコナデ	ヨコナデ
	1129	E-3Ⅲ a	—			7.8			ヨコナデ	ヘラミガキ
177	1130	C-6Ⅲ a	—	10.2	6.3		2.3		ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1131	C-5	—	9.4					ヘラミガキ	ヘラミガキ
	1132	E-2	—	—					ヨコナデ	ヘラミガキ
	1133	C-9Ⅱ	—		7.6				ヨコナデ	ヘラミガキ
	1134	A-8	109.33			6.9			ヨコナデ	ヘラミガキ

(単位 絶対高：m, 口径・底径・高台径・器高：cm)

第2節 Ⅱ・Ⅲ a 層のまとめ

◎弥生時代

甕形土器が一個体分出土し、持込み品の可能性が高い。不明な点が多いが下城式土器系統のものである。県内では、同じ鹿屋市にある榎木原遺跡に類例がある。この時期の東九州と大隅半島の関係を考える上での資料が追加された。

◎古墳時代

いわゆる成川式土器とその伴う溝状遺構1本が検出された。溝状遺構は後世に破壊を受けており、全容は不明である。これからは甕形土器が出土した。

包含層からは壺形土器、高坏形土器などが出土した。これらは精製なもので、特に壺形土器は余り類例のないものであった。

溝状遺構はあるものの、遺構内の遺物と、包含層内のものとは様相がかなり異なっており、古墳時代の遺跡の中心からずれているもの、もしくは包含層のものは持込み品の二つの線が考えられる。

◎平安時代

榎崎A遺跡ではⅡ層及びⅢ a 層から多数の土師器が出土し、これのともなう遺構も検出された。遺構の中でも特筆すべきものは周溝墓である。

<周溝墓について>

周溝墓は5基検出されたが、いずれからも人骨などの出土がなく、主体部と思われる土壌内の土壌化学分析（リン分析）も実施したが、遺体の埋葬を示唆する高濃度のリン集積は見られず、埋葬施設としての積極的な結果は得られなかった。これによれば「墓」としての位置付けはできず、むしろ「円形周溝状遺構」として扱うべきであるが、検出状況や他県の類例などから判断して「周溝墓」としている。化学分析は脂肪酸分析なども併せて実施すべきであった。

県内におけるこの時期の墓制は土壙墓、蔵骨器が知られているが、周溝墓は初めての例である。この時代の周溝墓の例を他県に求めると、剣塚遺跡、干潟遺跡、薬師堂東遺跡（以上、福岡県）、上の原遺跡（熊本県）などがある。

榎崎A遺跡の周溝墓についてまとめると次のとおりである。

1. 周溝の平面形は円形、楕円形、略方形の3種類である。また、断面形はU字状である。
周溝は主体の土壌に沿うように巡っている。
2. 主体部は土壙である。（木棺墓の可能性もあるものもある。）その平面形は不定形、楕円形、長楕円形、略方形の4種類である。
3. 4号と5号の周溝内にはピットが検出され、地上施設の存在が窺われる。
4. 主体部からは土師器が出土している。

周溝の形態を他県の例や中世の周溝墓などと比較・検討してみると円形→楕円形→略方

形（→方形）の組列が可能である。本遺跡の例で具体的にすると、1・2号→3・5号→4号となる。

次にこの組列に沿って主体部出土の遺物を検討すると次のようである。

1号—高台付椀1点

2号—小坏2点

↓

3号—小皿2点

5号—甕の破片1点、鉢1点、坏1点、小皿（3タイプ）4点（合計7点）

↓

4号—小皿（2タイプ）3点

これによれば、1・2号までは小皿は副葬されず、3・5号以降に小皿副葬が行われたことになる。更に3・4・5号の小皿を比較してみると4号には2タイプ、5号には3タイプの小皿が含まれている。また、2点ずつ同一タイプが含まれているのでこれの法量を比較すると、口径と器高に関してはわずかではあるが5号→3号→4号と小さくなる傾向がみられる。しかしながら、各主体部ごとの土師器の器種構成が違いすぎるので、現時点では傾向がみられるという程度で留めたい。

地上施設については、周溝との位置関係や周辺から角釘が出土していることなどから上屋を支える柱を立てるもの、あるいは、「餓鬼草子」や「親鸞伝絵」などの絵画史料から周溝内の墓域を囲む柵などが考えられる。これら絵画資料のものは方形の柵であるが、円形のものも先行し、次第に方形に変容したものと考えれば理解できうる。どちらにしても未だ推論の域を出ない。

先述したとおり、本県においては他に土壙墓や蔵骨器などの墓制があるが、ここでは周溝墓のみが採用されたことは注目に値する。例えば福岡県の干潟遺跡では土壙墓が多数ある中で1基の周溝墓が確認されている。他でも平安時代のもと思われる周溝墓がまとまって検出される例はない。榎崎A遺跡は周溝墓だけが5基であり、墓所としてのあり方にも特色があるといえる。

なお、2～5号の周溝埋土はほぼ同一であり、同時期に埋まったものと思われる。

<掘立柱建物について>

榎崎A遺跡で検出された掘立柱建物2軒あるとしたが、正確には1号のみが建物として認識できうる。周溝墓と関連する建物であると考えた方が自然であろう。柱穴はいびつにならび、その上屋は先述した絵画史料に見えるようなものであばら屋に近いのではないかと考える。

<その他の遺構>

その他の遺構としては溝状遺構、円形・楕円形の遺構やピットなど多数が検出された。溝状遺構3号が遺跡の北側を横断しているのか顕著である。その他は今一つ性格が不明であった。

<土師器について>

土師器は遺構内及び包含層（Ⅱ、Ⅲ a 層）から多数出土した。このうち完形もしくは完形に復元できるものは約90点であった。それ以外は破片である。破片も可能な限り、部位ごとの復元実測を行った。

◎器種の分類について

土師器の器種は椀、坏、皿、小皿、甕、鉢に分類できた。そのうち特徴的なものを上げる。椀と考えられるものは、形態によって次の様に分類が可能である。

- ①（体部）開きながらまっすぐのびるもの
- ②（体部）内湾気味に開くもの
 - a（口縁部）そのまま開くもの
 - b（口縁部）外傾するもの
 - c（口縁部）大きく外反するもの

これらは福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告における故前川威洋氏の分類と対応できるものがある。すなわち①が前川氏のⅠ-1 B（9世紀中葉から9世紀後半）、② a がⅠ-2 A（9世紀終末から10世紀初頭）、② b がⅠ-2 B・C（10世紀初頭から10世紀終末）、② c がⅠ-3 A（10世紀終末から11世紀初頭）である。これを直接援用することは早急すぎるが、椀に関しては汎九州的に使用されていたものがあつたのではなかろうか。

①は赤茶褐色、茶褐色を呈しており、胎土に粗い砂粒が含まれているのが一般的である。

② c は黒色土器に多い形態である。その調整技法も黒色土器に見られる内外面にヘラミガキを施すものである。黒色土器の未製品も存在するのではないかと思われる。

法量についても検討すべきであるが、ほとんどが復元であり、その数値は誤差が大きいと思われる。

椀のうち627は川内市薩摩国分寺跡北築地地区、麦之浦遺跡でも類似形態の高台付椀が出土しているが、627は体部外面の中ほどにヘラケズリを施すという県内ではまだ類例を見ないのである。ヘラケズリは古い土師器に見られる技法である。内面のヘラミガキも丁寧なものであり、比較的古い印象を受ける。

つぎに、坏はその大きさで分類でき、そのうち小さいものは更に底部の①底部の広いもの②底部の狭いものの2つに分類できる。②は底部に割合高さがあり、いわゆる「充実高台」の形態を有している。

坏の中には内面に煤が付着しており、灯明用として使用されたものも数点あつた。

小皿は調査地内ほぼ全域で見られた。小皿は大まかに分けても、形態・法量などによって7タイプほどに分類されうる。この中には、牧園町中福良遺跡発掘調査拡張区2出土の土師器に類似するものがある。中福良遺跡のものは包含層内出土のものであり時間的な限定は困難な点はあるが、ヘラ切り底と糸切り底の小皿の共伴が認められる。また、小坏と小皿の中間的形態のものもあり、これは小皿成立の前段階のものと思えたい。とすれば、小皿成立からヘラ切り

の最終段階までのものが継続的に追える可能性がある。しかし、その組列や時期設定などは他の遺跡の例なども加えもっと検討が必要である。

甕も調査地内ほぼ全域で確認できたが、完形に復元できたものがあまりにも少なくその全容を知ることは困難であった。甕は内面ヘラケズリを施している点において特徴を示しているといえる。

その他、皿や鉢はその点数が極めて少なかった。これら器種全体の構成も特徴がある様であるが、同一時期内のセット関係も現時点では不明であるので後日に期したい。

◎製作技法について

榎崎 A 遺跡出土の土師器はすべて回転ヘラ切り底である。高台をもち外底面をヨコナデ調整しているものも同様の切り離し技法をもっていたと思われる。

成形技法についてであるが、底部付近の断面を観察すると、円盤状の底部に体部を張りつけているのが分かる。榎崎 A 遺跡出土の土師器は観察した限りでは甕、鉢を除くすべての器種でこの技法を取り入れているものと考えられる。

このことから、ロクロ上の粘土塊を水挽きによって体部をおこしていくのではなく、底部に体部を輪積みし、その後ロクロの回転を利用してヨコナデ調整を施すのであろう。この際、底部を成形する過程で「充実高台」の形態も成立したのではなかろうか。

薩摩郡東郷町五社遺跡でも土師器の輪積み法は確認されており、新たに大隅半島側でもその例が認められた。

しかしながら、この技法においてヘラ切り離しの必要性を見出さなければならない。

◎黒色土器について

黒色土器は田中琢氏の分類による A 類（内面黒色）が多く、B 類（内外面黒色）がわずかに出土している。A 類は森隆氏の分類による九州系Ⅳ類に相当するものである。森氏によればこの九州系Ⅳ類は九州全域に分布し、この形態は同時期の土師器からきているという。先述したとおり榎崎 A 遺跡の黒色土器と土師器碗の②c とは同一の形態をもつものである。つまり逆に土師器碗については九州全域に分布する形態が存在するのではないかと思われる。

森氏の編年によればこれらは10世紀代から11世紀前半に相当するものと思われる。

◎須恵器について

須恵器の出土数は土師器と比べるまでもなくわずかであった。産地は不明である。須恵器の中には叩きの際の内面の当てを藁を使っているものがあり、靱痕が残っていたことから稲藁を使っていたことが分かった。自然釉がかかっているものが比較的多いことも特徴的である。

須恵器の使用が減少していく時期ではないかと思われる。

◎焼塩壺について

焼塩壺は最近県内でも出土例が増えており、10数件の出土遺跡が知られている。鹿屋市内においても、榎崎 A 遺跡の北西約 4 k m に位置する宮の脇遺跡からも出土している。焼塩壺につ

いて故森田勉氏は街道筋との関係を指摘している。

榎崎 A 遺跡では墓所を構成する構築物と思われる掘立柱建物の付近に集中して出土しているのが特徴である。

◎その他の遺物

紡錘車は土師器の底部を再利用したものが約10点ほど出土した。熊本県上の原遺跡の円形周溝墓では主体部の副葬品として紡錘車が出土しているが、当遺跡の周溝墓ではこういった例は見られなかった。

次に滑石の容器と思われる製品が1点出土しているが、県内では他に、西ノ平遺跡、麦之浦遺跡（川内市）、小田松木園遺跡（隼人町）などの例が知られている

有孔小形砥石は川内市西ノ平遺跡に類例が知られている。

榎崎 A 遺跡は平安時代においては墓所であったと考えられるが、周溝墓や遺物の構成などからしてもその色彩が強い。しかしながら、それにしても遺物の量と周溝墓の数とは比例しないように思われるのである。遺跡内で多く見られた他の遺構が何らかの関係があると考えられるがそれを示すものがみられなかった。先述した「親鸞伝絵」にみえる墓所において墓域以外の施設はみられないことから加味すれば、ある時期には単純に墓所としての働き以外の機能が働いたことも同時に考えなければならないだろう。

または、周溝墓は調査されたもの以外にも存在し、それは、調査区域外又は削平を受けた部分に存在したものであろうとも考え得るだろう。

榎崎 A 遺跡の時期はこれまで平安時代としてきたが土師器碗の形態変化、小皿の成立から糸切り底の開始以前の時期（それを仮に12世紀中頃とする。）までの変化、周溝墓の形態や出土品などからして、9世紀末から12世紀中頃までの250年間の年代幅を与えておきたい。しかしながら南九州の土師器編年は不明であり、特にヘラ切りの消長、糸切りの出現など正確には不明であり、今後の土師器研究の成果に負う点は大きい。

榎崎 A 遺跡の調査は排土の関係から20mごとに切って行わざるをえなかった。このことが調査中遺構の検出を困難なものにした。整理の段階でも図面上の復元がまた困難であった。改めて、できるだけ広い範囲で調査ができるように条件を整えることが必要ではないかと考える機会を得たと思う。

<参 考 文 献>

- 鹿児島県教育委員会編『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』1983
- 鹿屋市教育委員会編『早山・宮の脇遺跡』1986
- 熊本県教育委員会編『上の原遺跡Ⅱ』1984
- 川内市教育委員会編『薩摩国分寺跡』1985
- 川内市土地開発公社編『麦之浦貝塚』1987
- 太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡Ⅱ』1983

東郷町教育委員会編『五社遺跡』1986
福岡県教育委員会編『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集(下)』1978
福岡県教育委員会編『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告—X X IV—』1978
福岡県教育委員会編『干潟遺跡I』1980
福岡県教育委員会編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—13—中巻』1988
牧園町教育委員会編『中福良遺跡』1992
朝日新聞社編『週刊朝日百科 日本の歴史別冊 歴史の読み方1 絵画資料の読み方』1988池畑耕一「英祿駅考」
1991
坂詰秀一・森郁夫編『日本歴史考古学を学ぶ(中)』1986
田中琢「古代・中世における手工業の発達(4)畿内」1967
森隆「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書」1989
森田勉「焼塩壺考」1983
森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」1976
山本信夫「統計上の土器」1990

※ 隼人町小田松木園遺跡は現在整理中である。

版 图



(1)
榎崎 A 遺跡全景

図版
1



(2)
調査前伐採作業風景



(3)
土層



(1)
調査風景



(2)
礫群

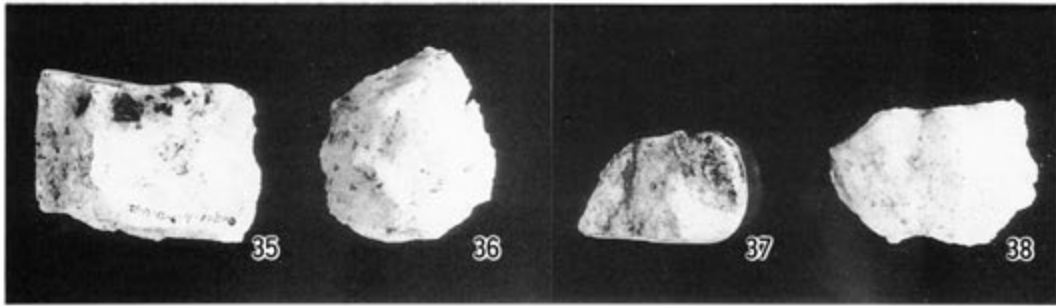
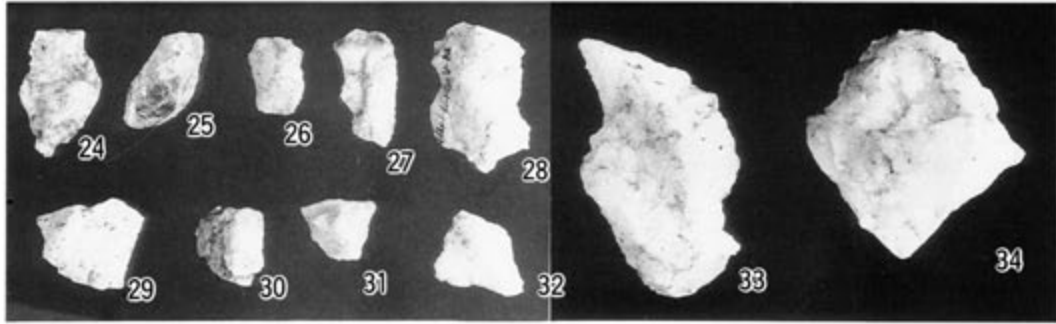
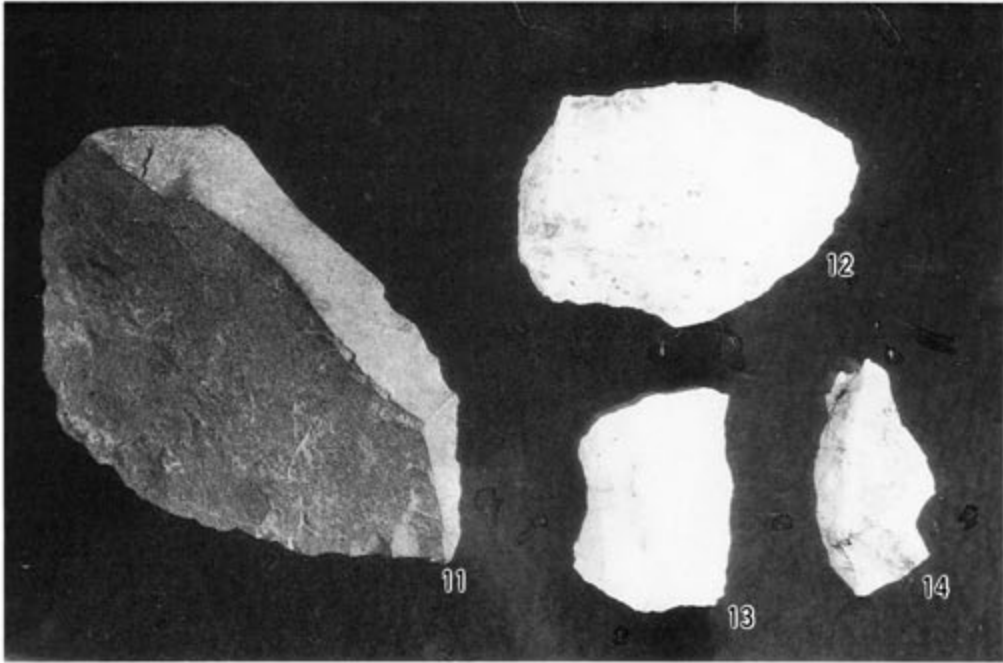
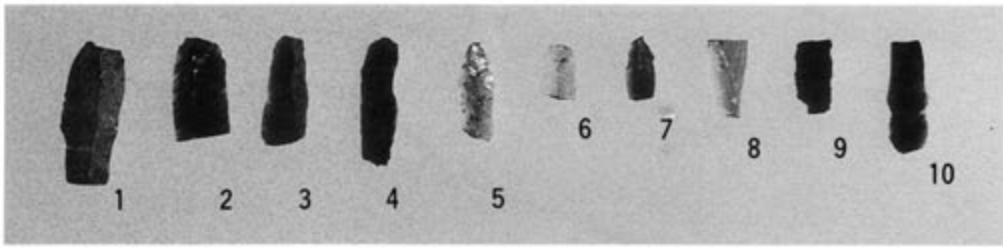


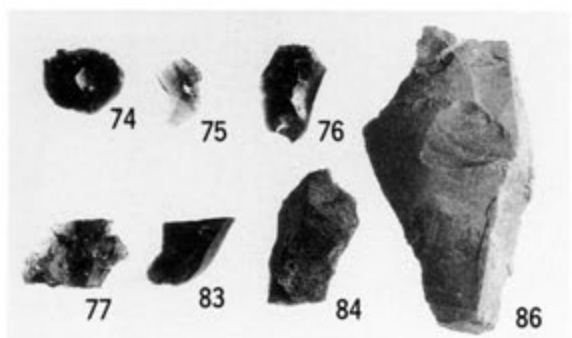
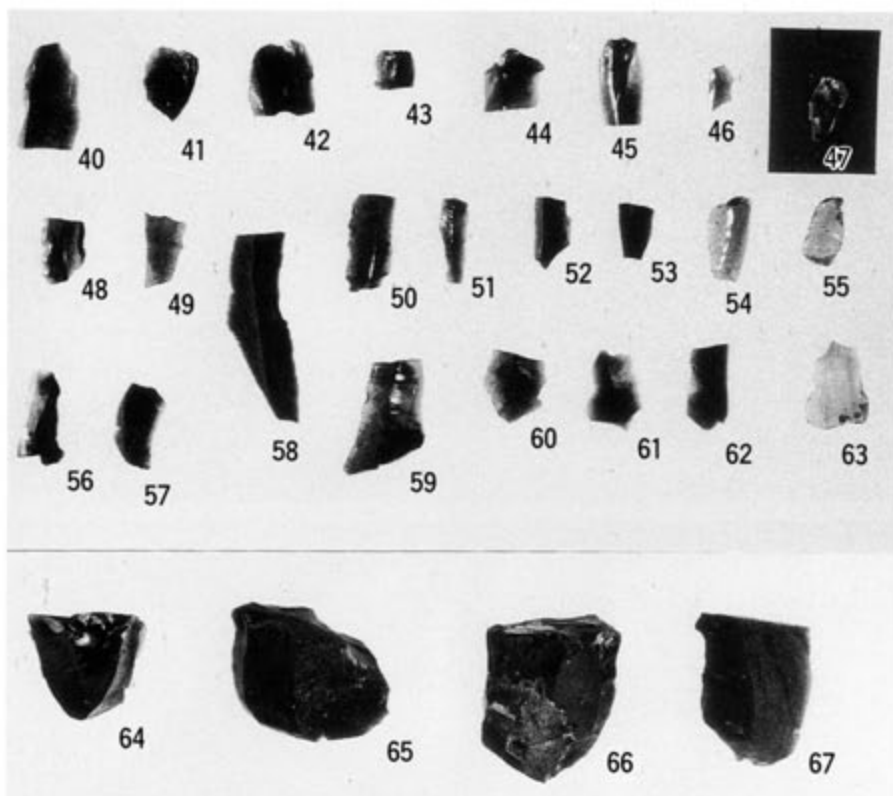
(3)
マイクロ・コア
出土状況



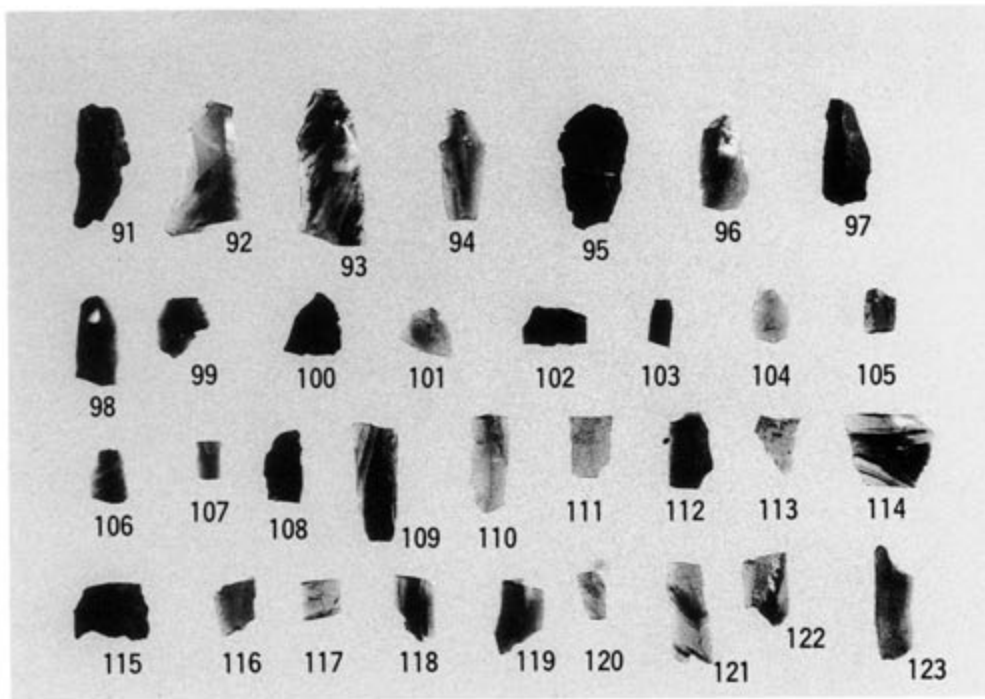
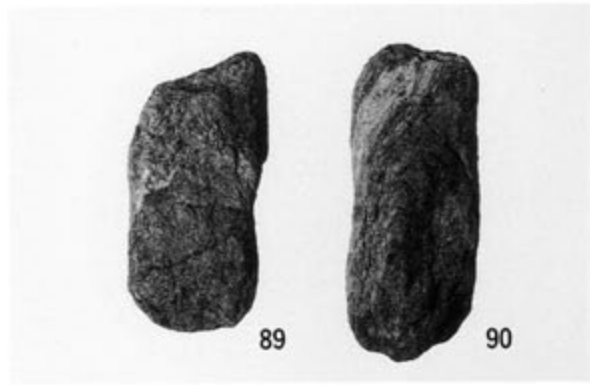
(4)
水晶出土状況

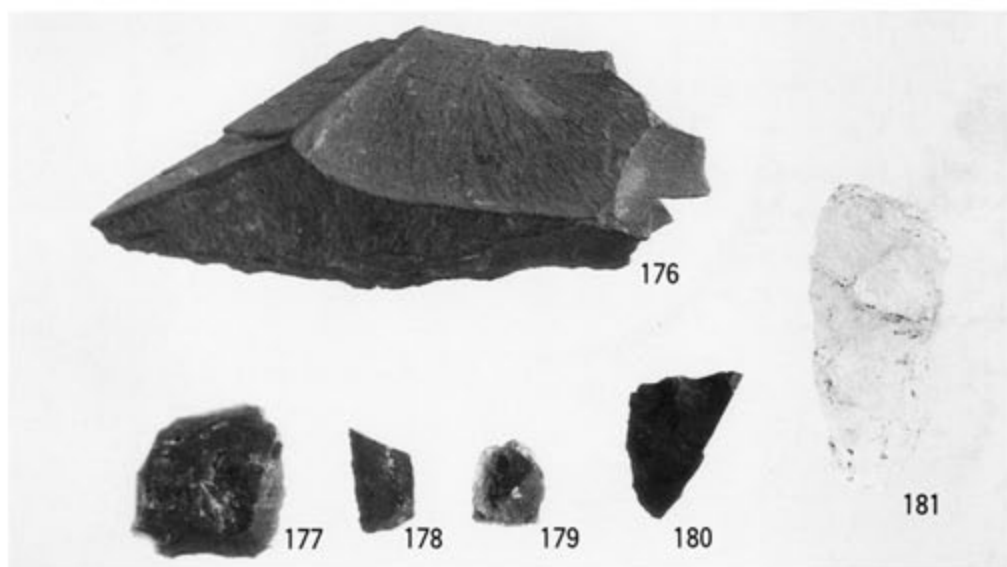
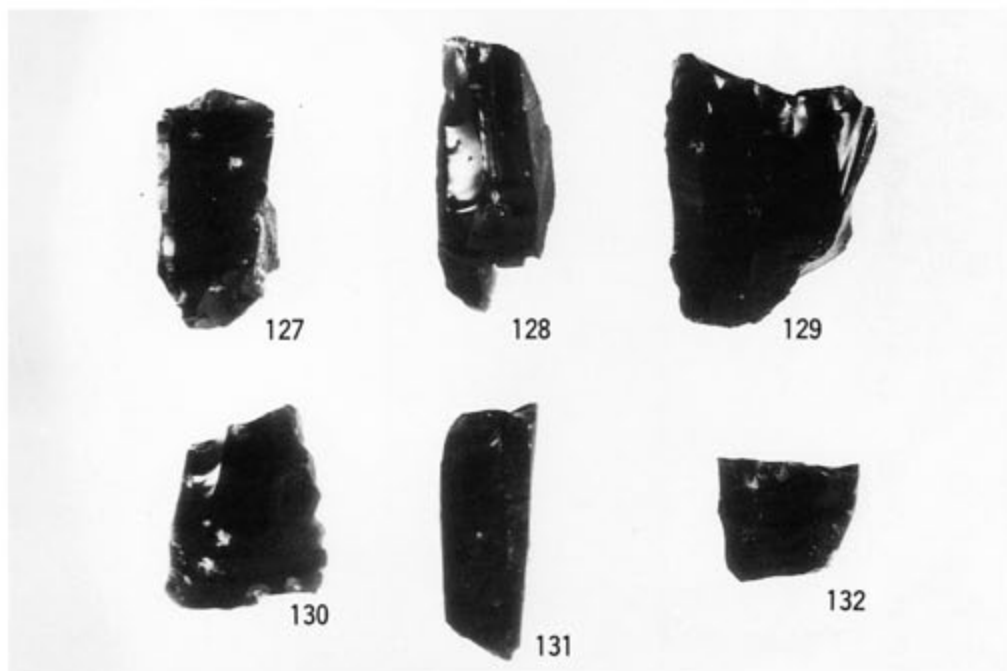
图版 3 出土石器 1



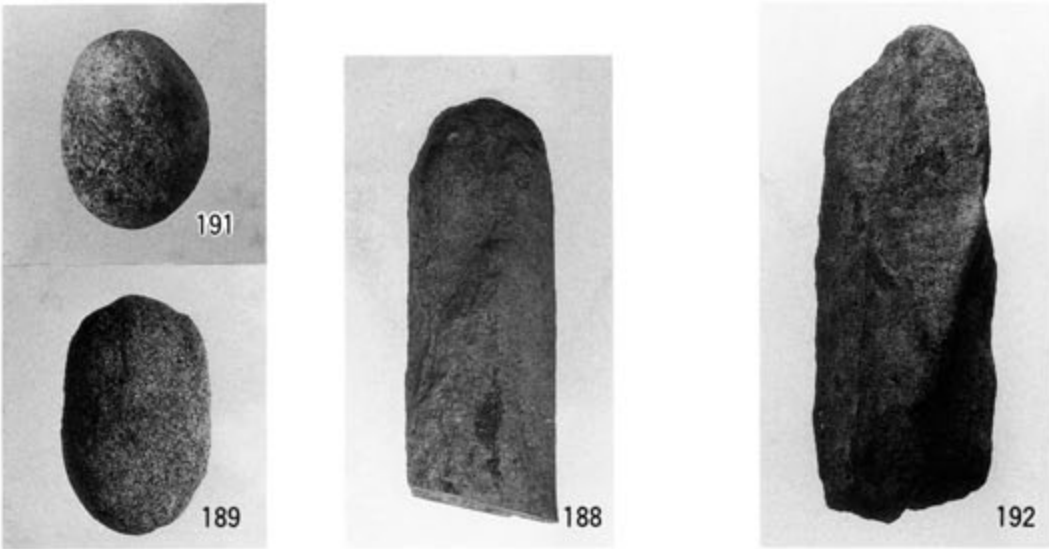
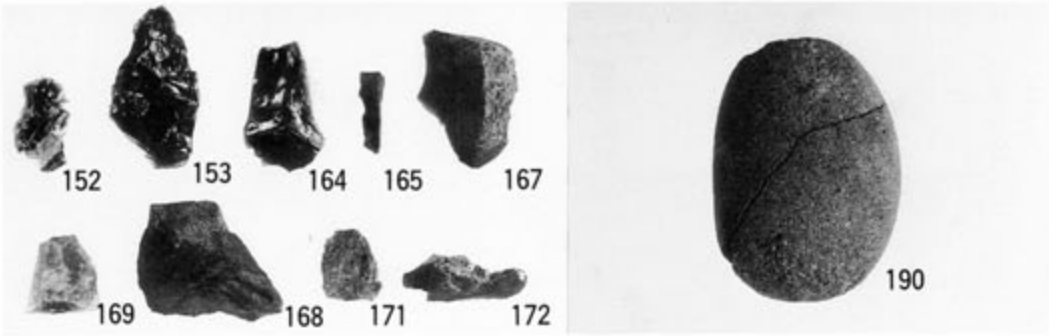
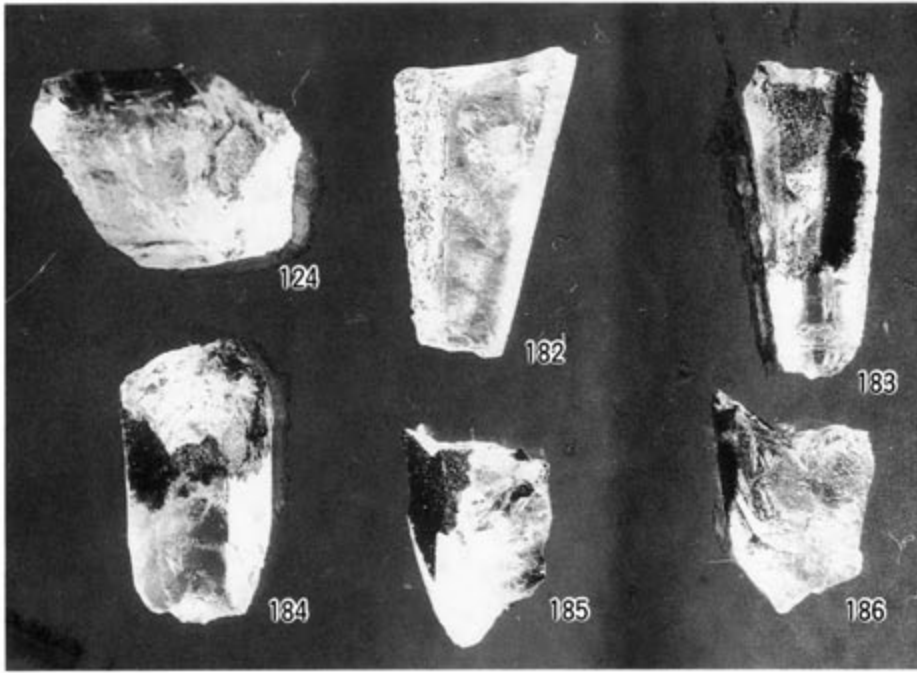


图版 5 出土石器 3





图版 7 出土石器 5





(1) 集石遺構 1
↓

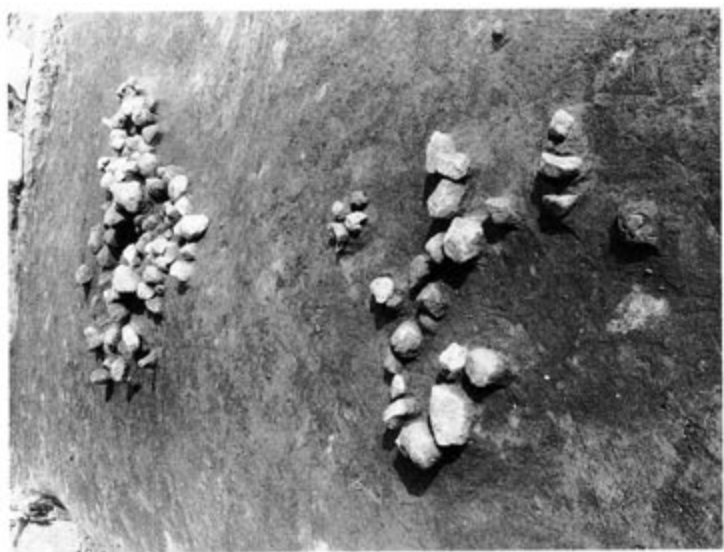


(2) 集石遺構 2
↓



(3) 集石遺構 3
↓

(4) 集石遺構 4
↓



(2) 集石遺構 6(上) 集石遺構 10(下)

(1) 集石遺構 5



(1) 集石遺構 7





(1) 集石遺構 8



(2) 集石遺構 9



(3) 集石遺構 10



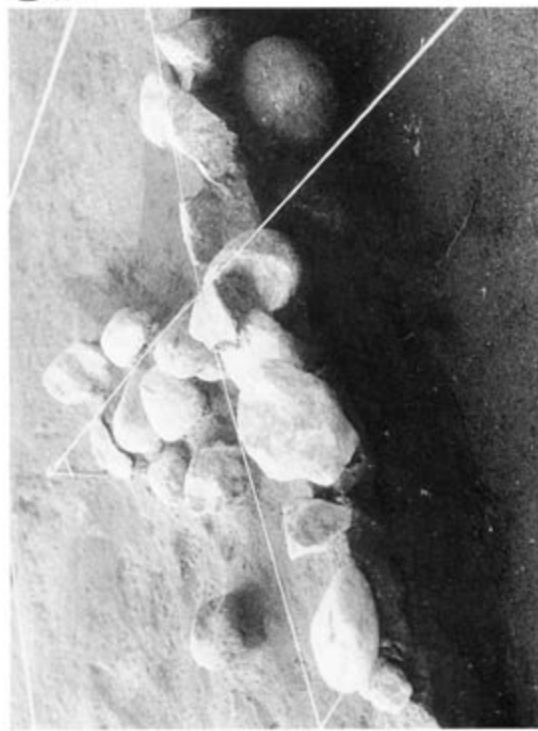
(4) 集石遺構 11



(1) 集石遺構12
←



(2) 集石遺構13
←



(3) 集石遺構14
←



(4) 集石遺構15
←



(1) 集石遺構16
↓



(2) 集石遺構17
↓



(3) 集石遺構18
↓

(4) 集石遺構19
↓



(1)
集石遺構20
←



(2)
集石遺構21
←



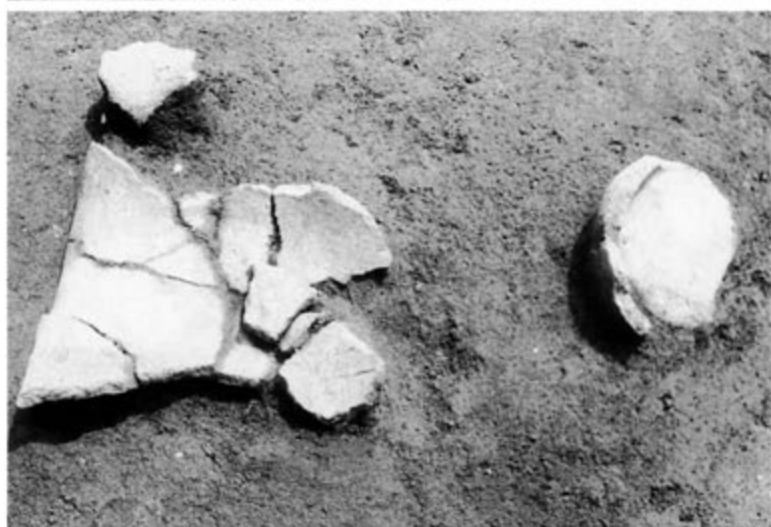
(3)
Ⅲ b 層
集石遺構 1
←



(2)
Ⅲ b 層
集石遺構 2
←



(1)
石皿・磨石集中遺構

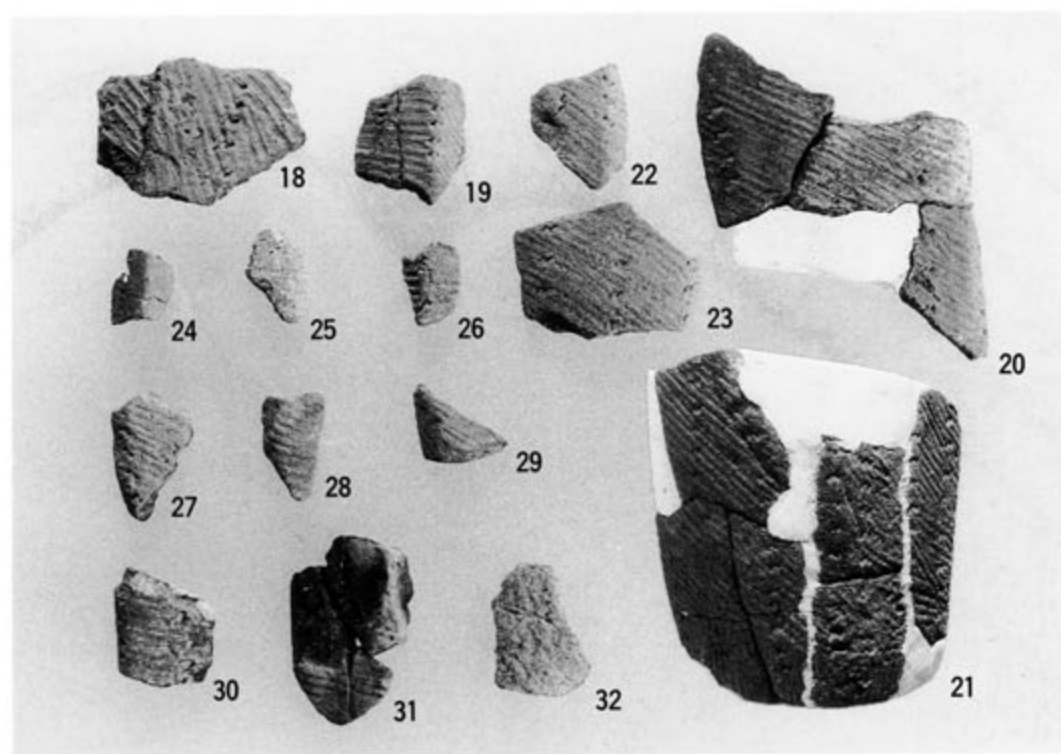
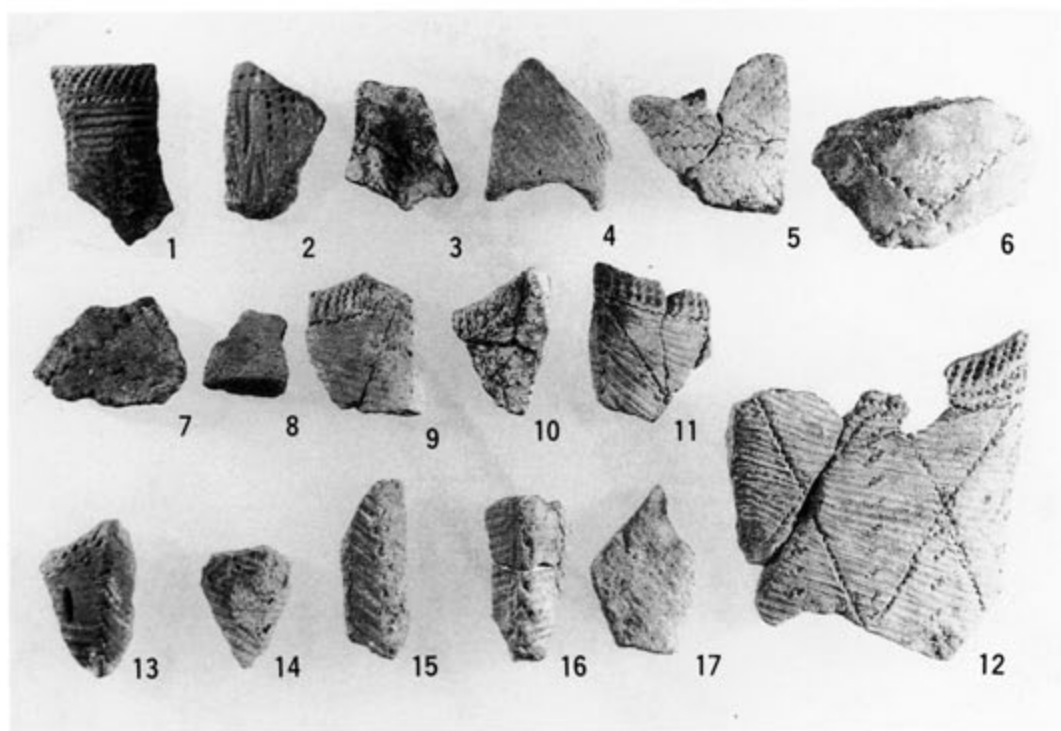


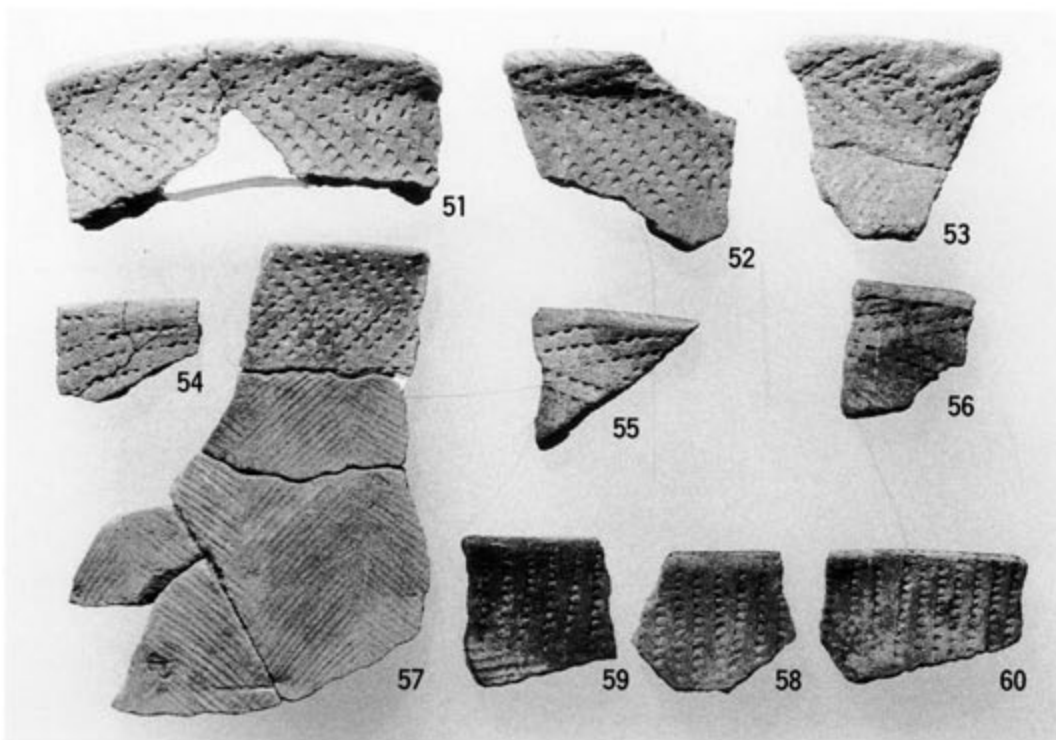
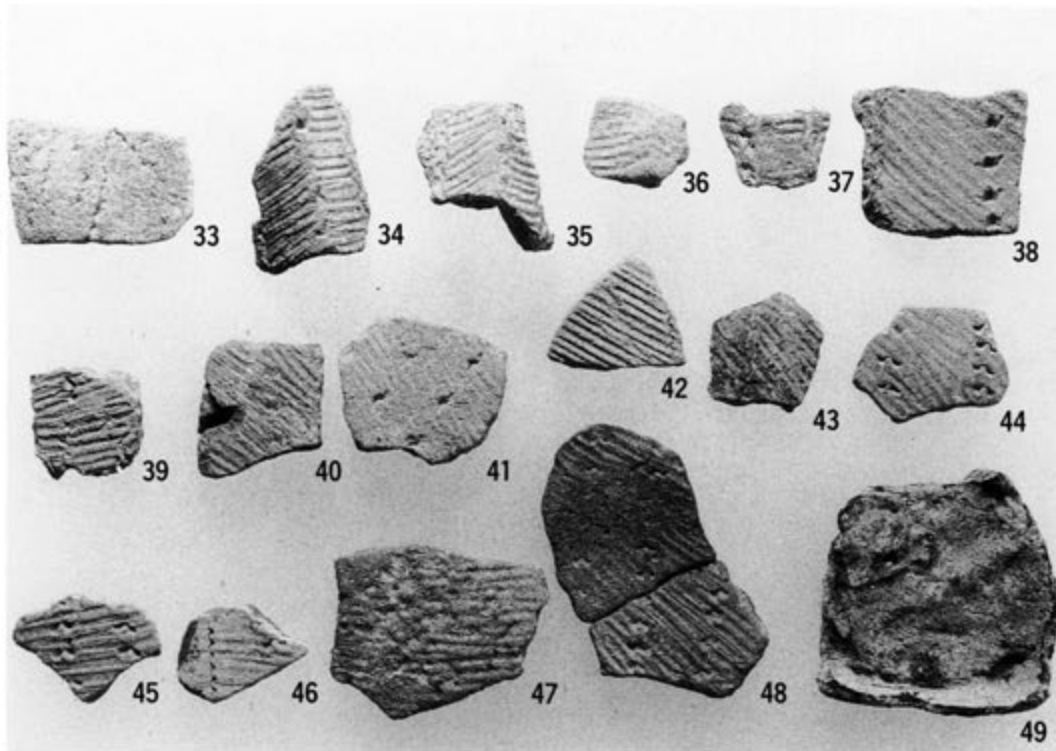
(2)
土器出土状況



(3)
土器出土状況

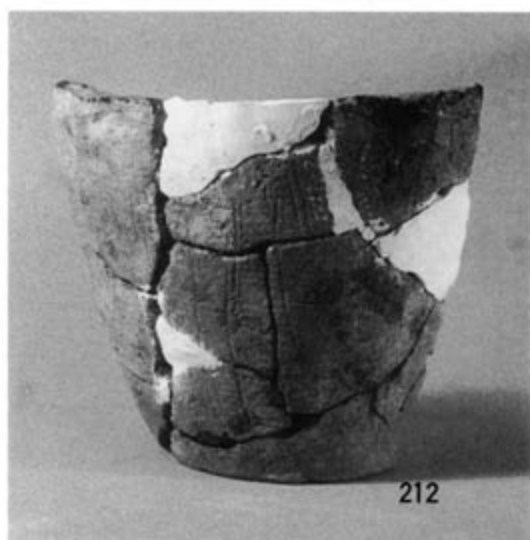
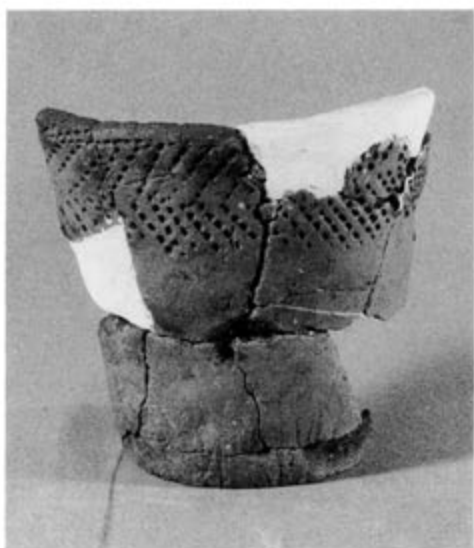
图版 15
出土土器 1



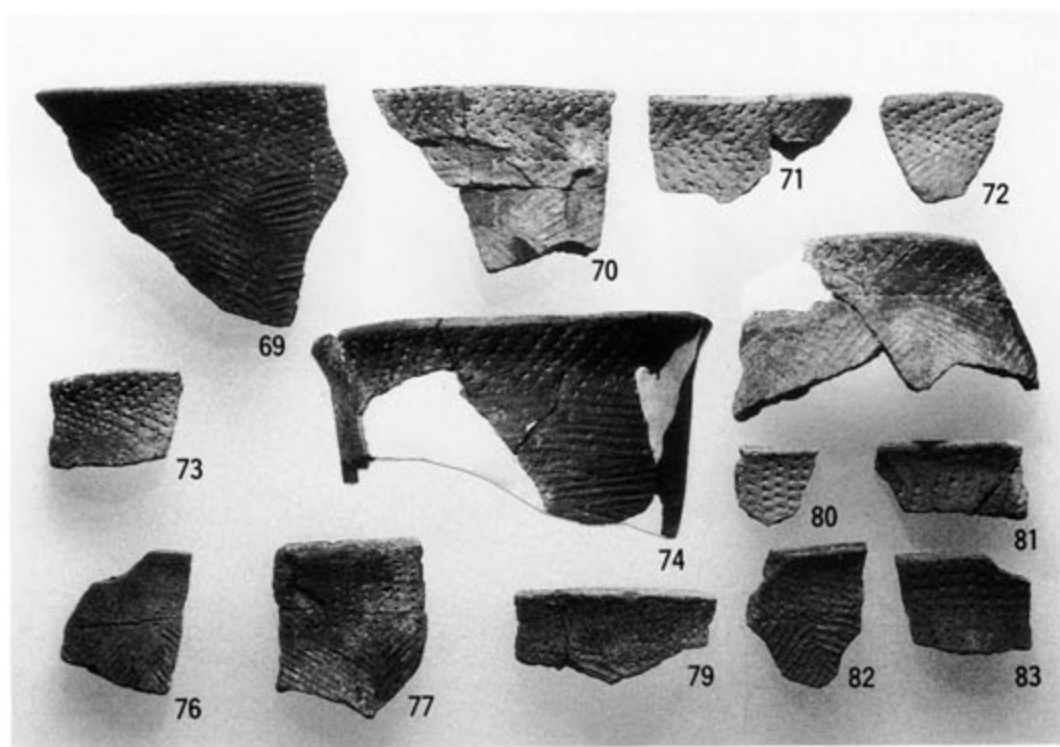
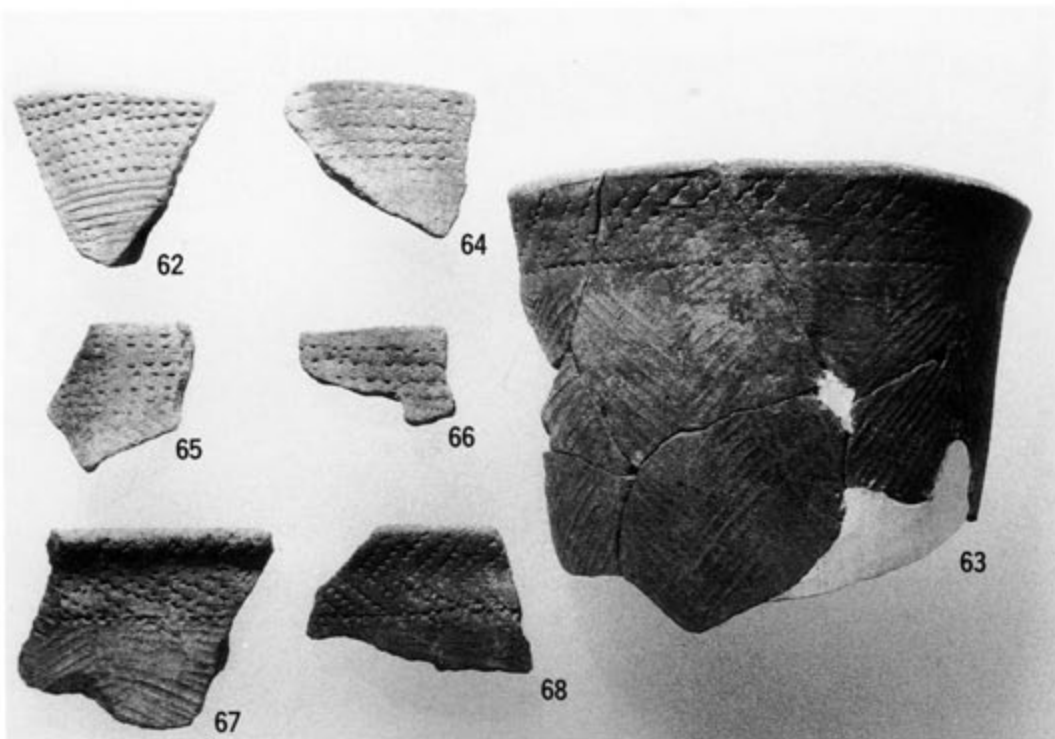


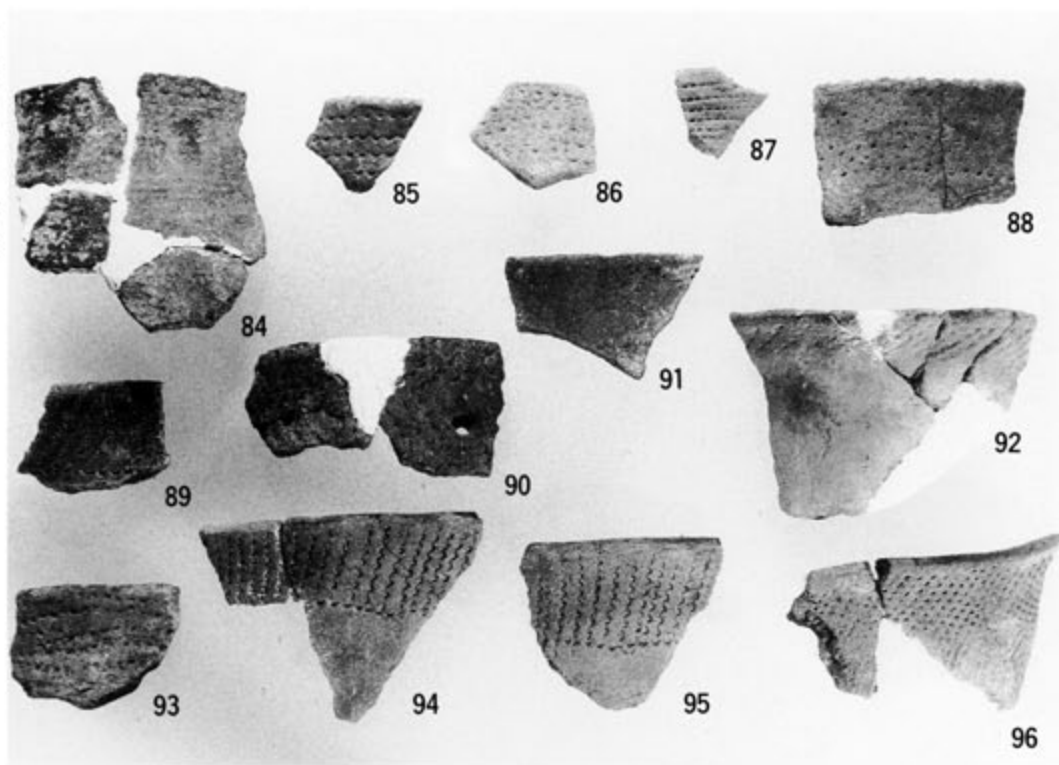
図版 17
出土土器 3

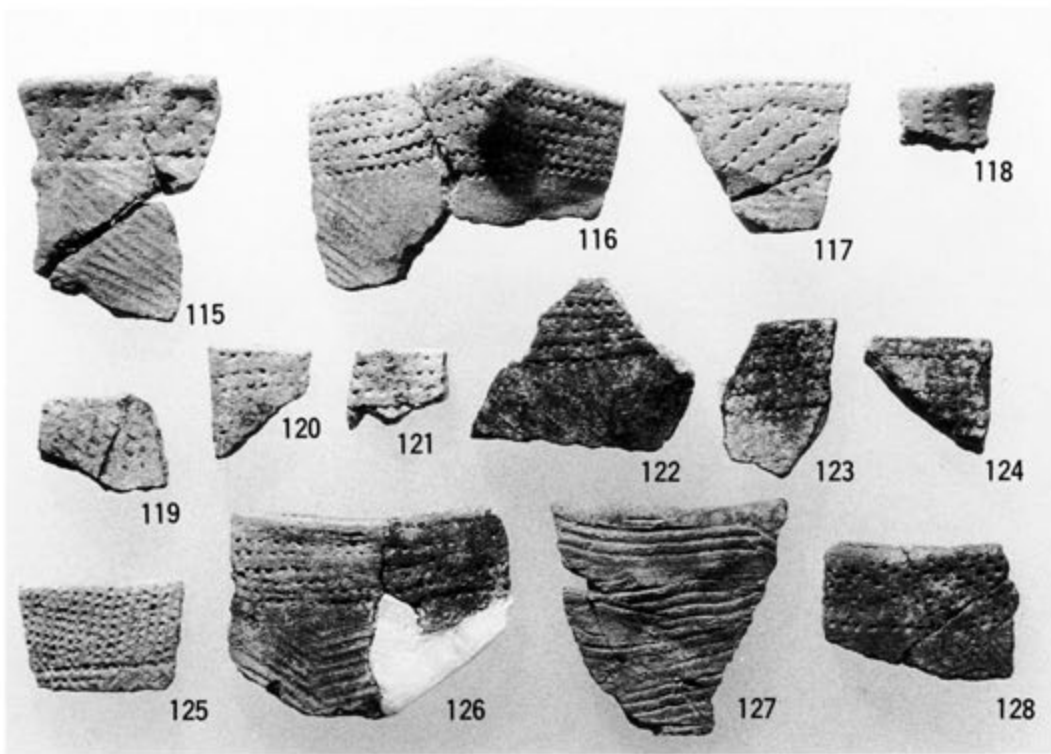
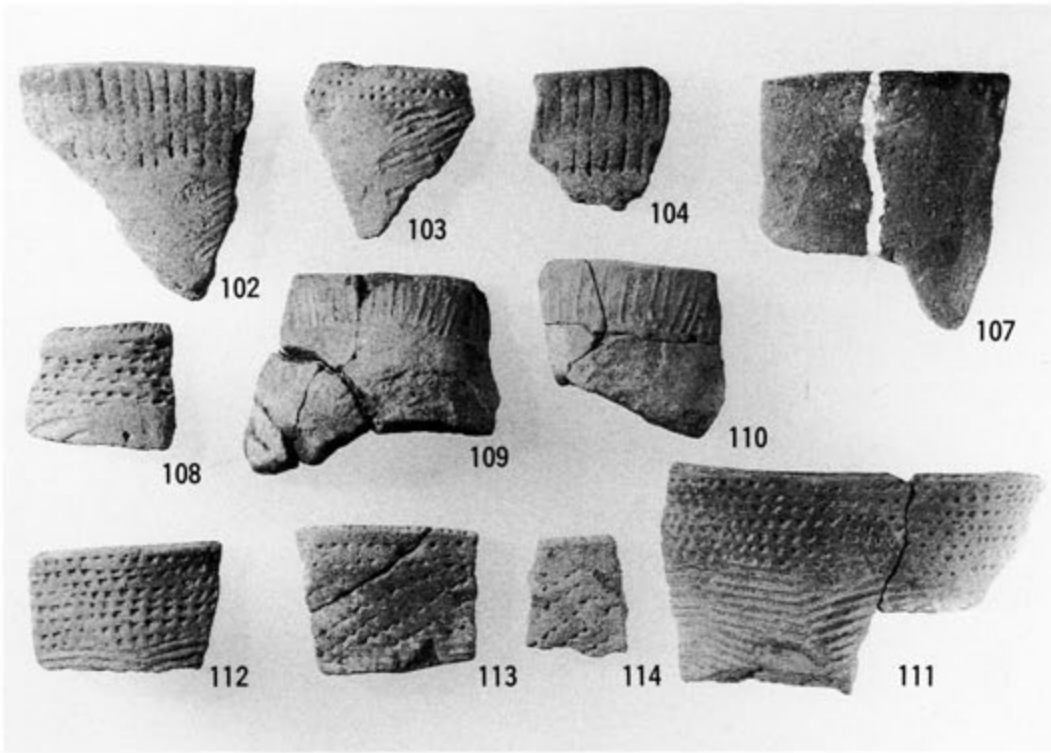


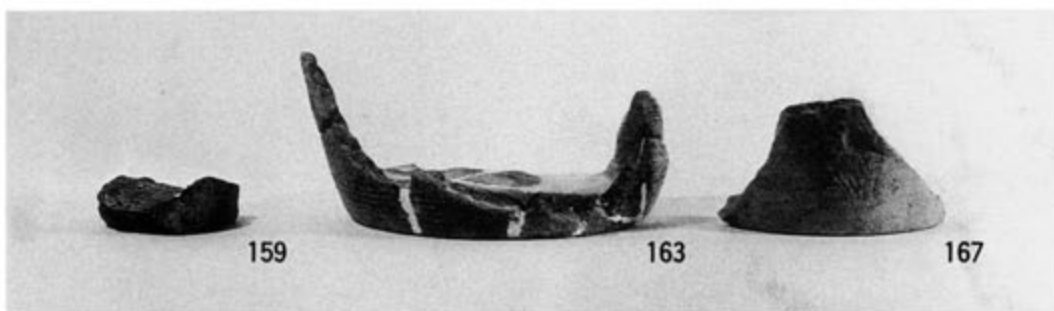
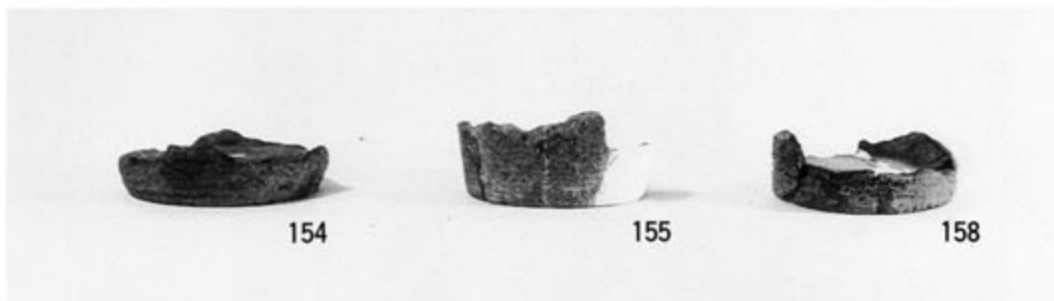
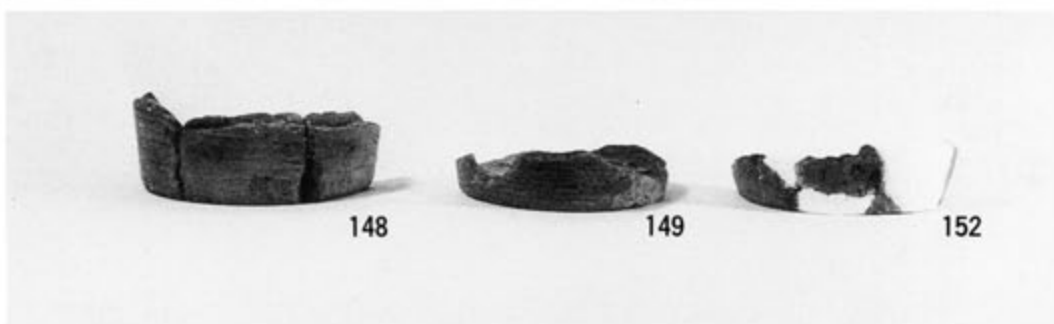
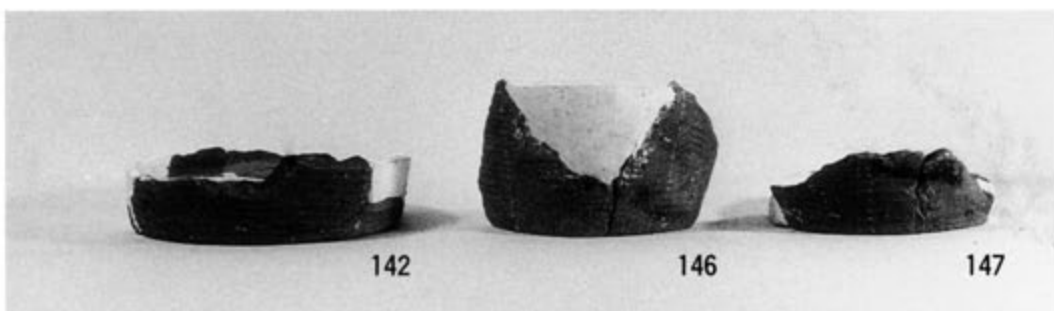
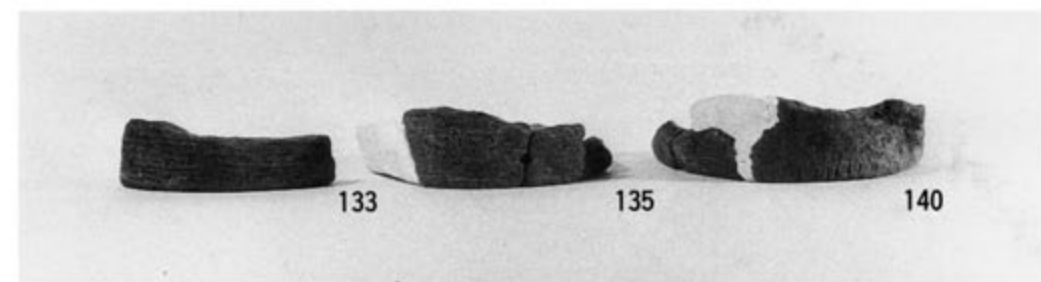


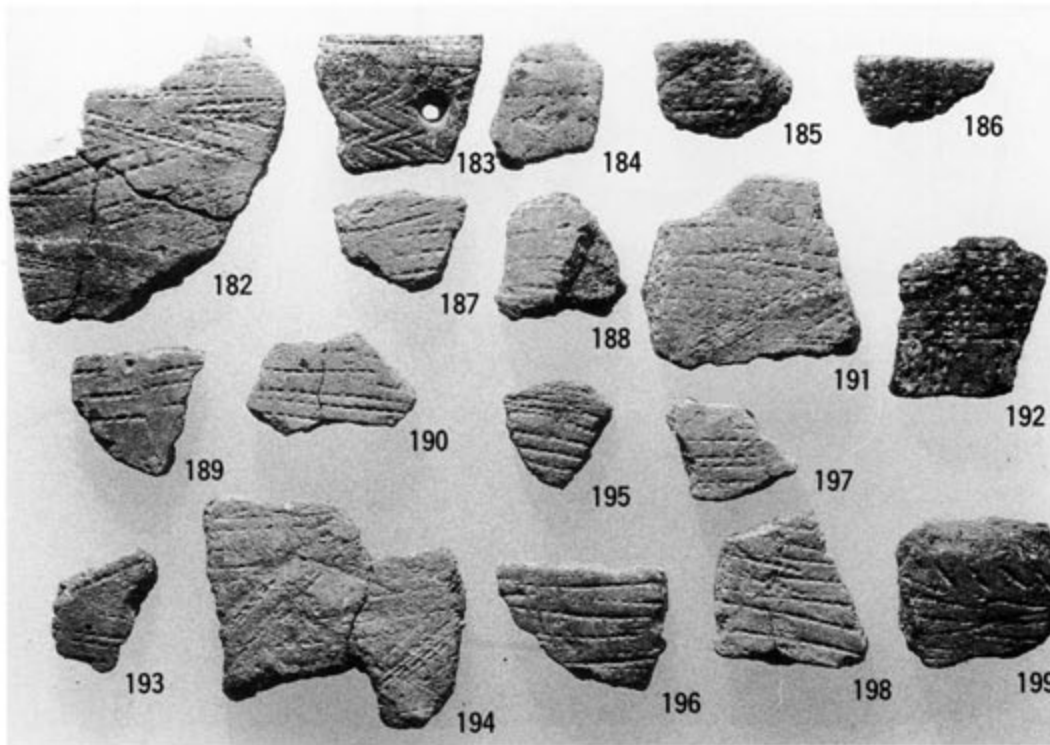
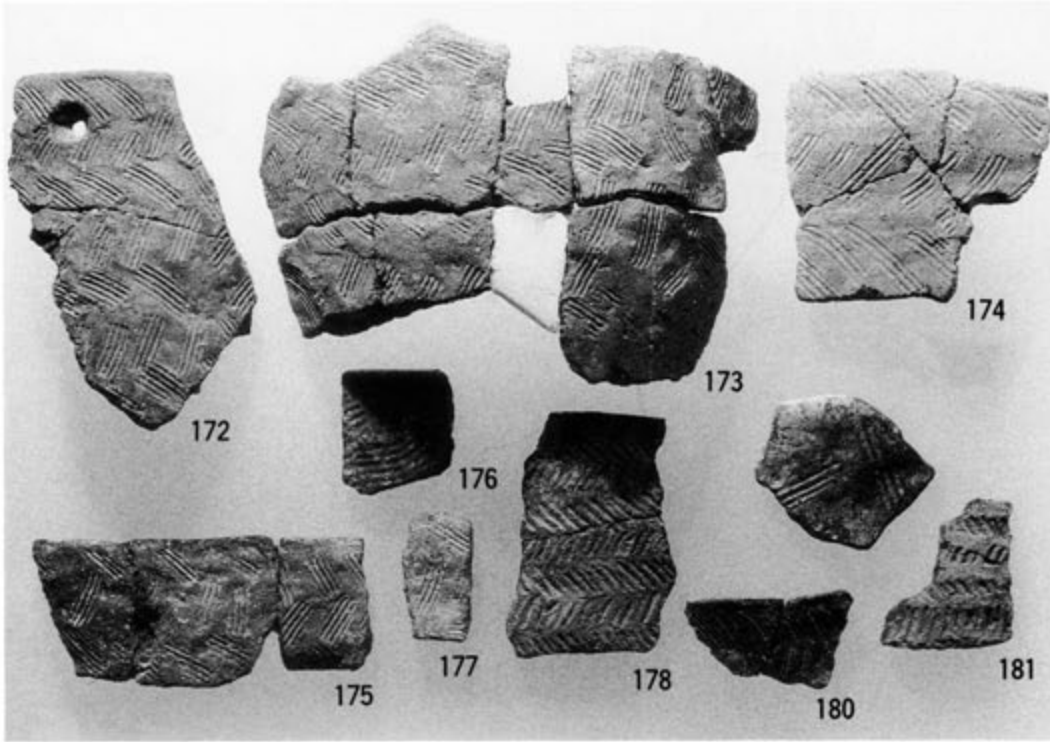
图版 19 出土石器 5

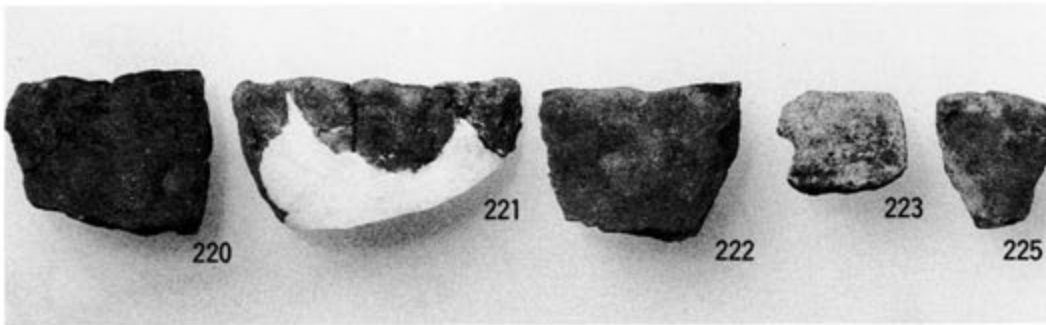
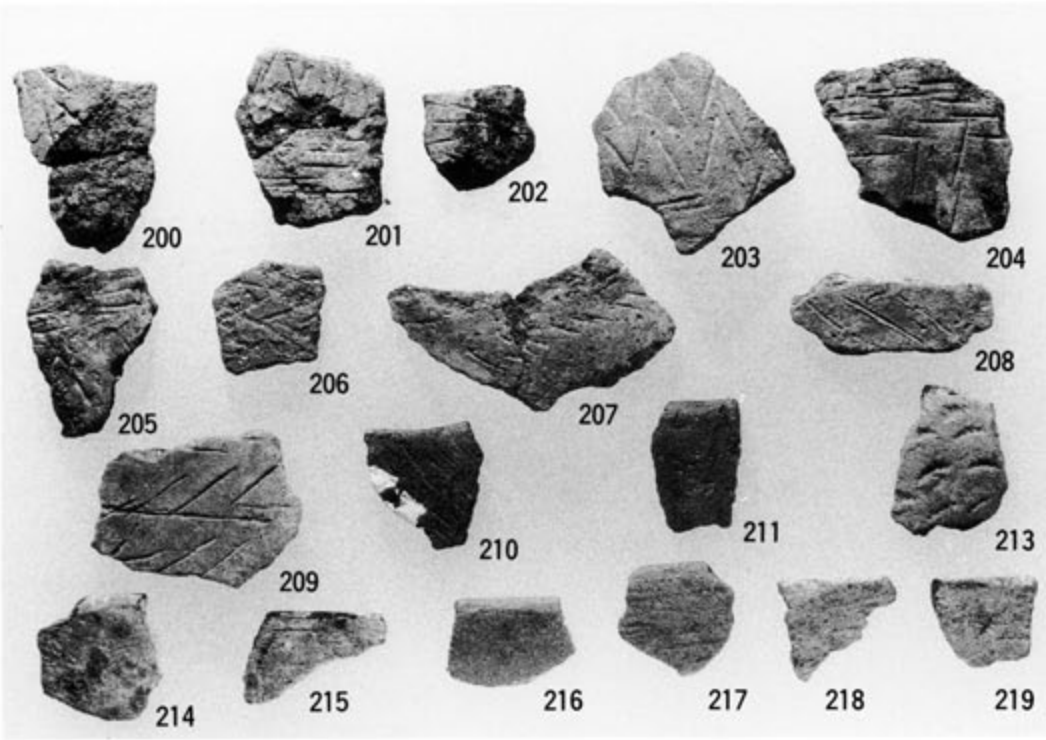


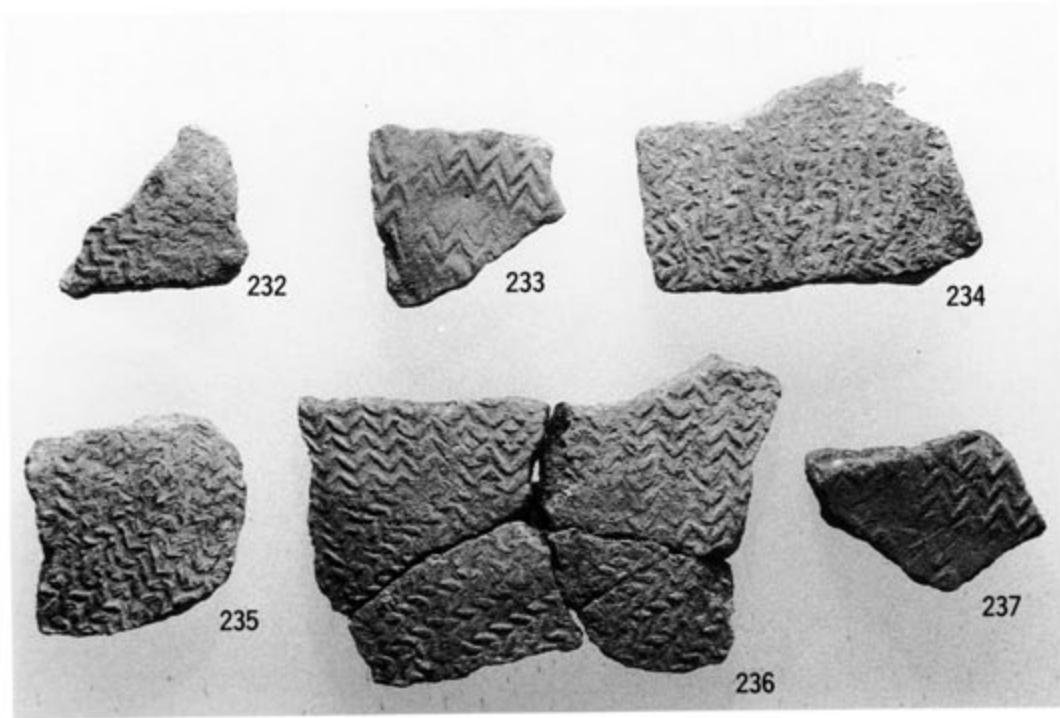
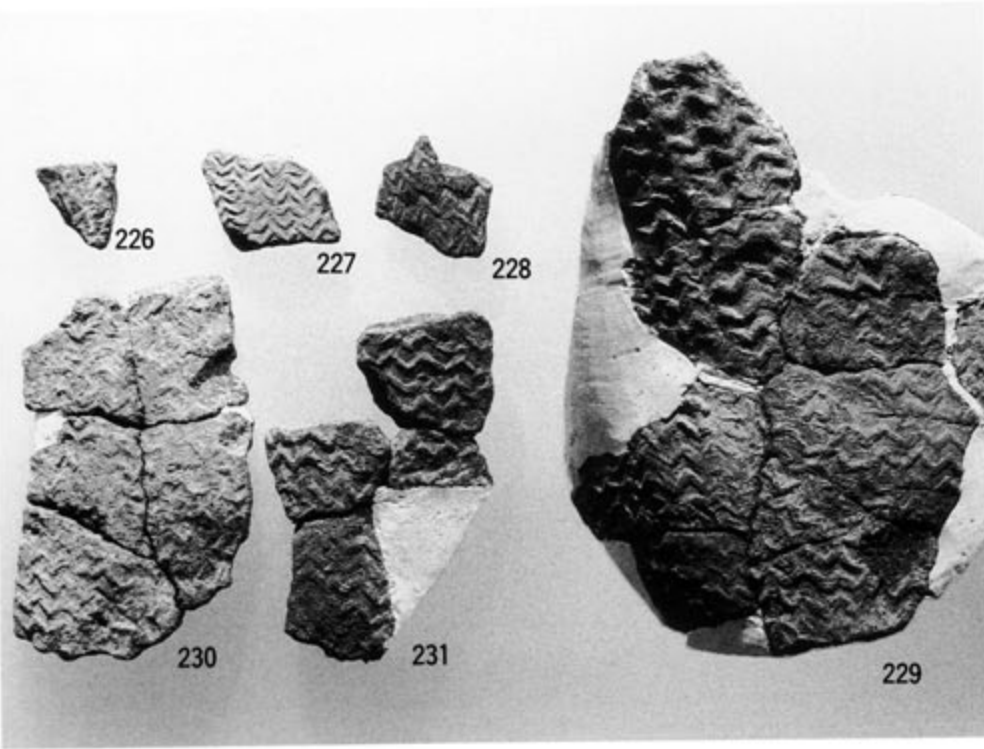














238



239



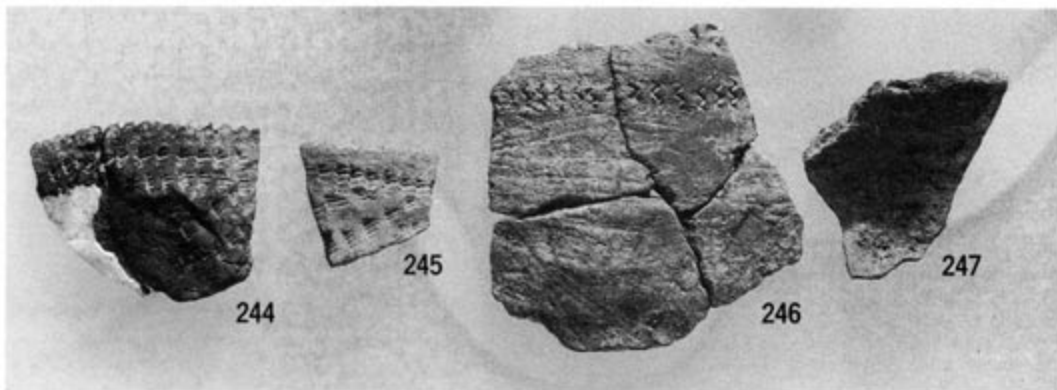
240



242



241

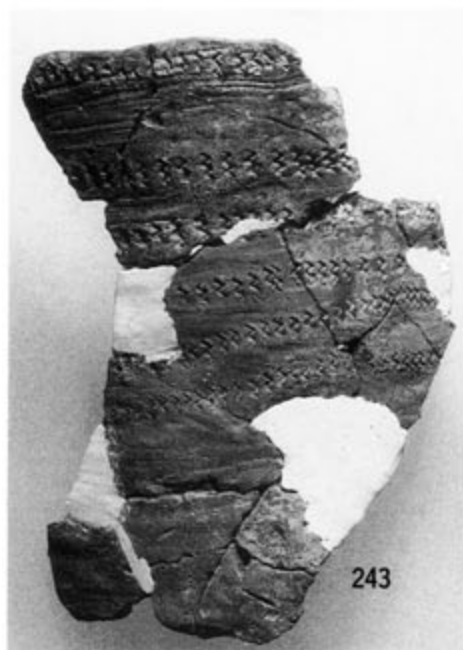


244

245

246

247



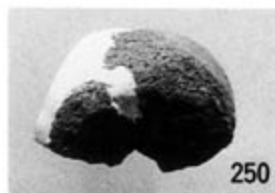
243



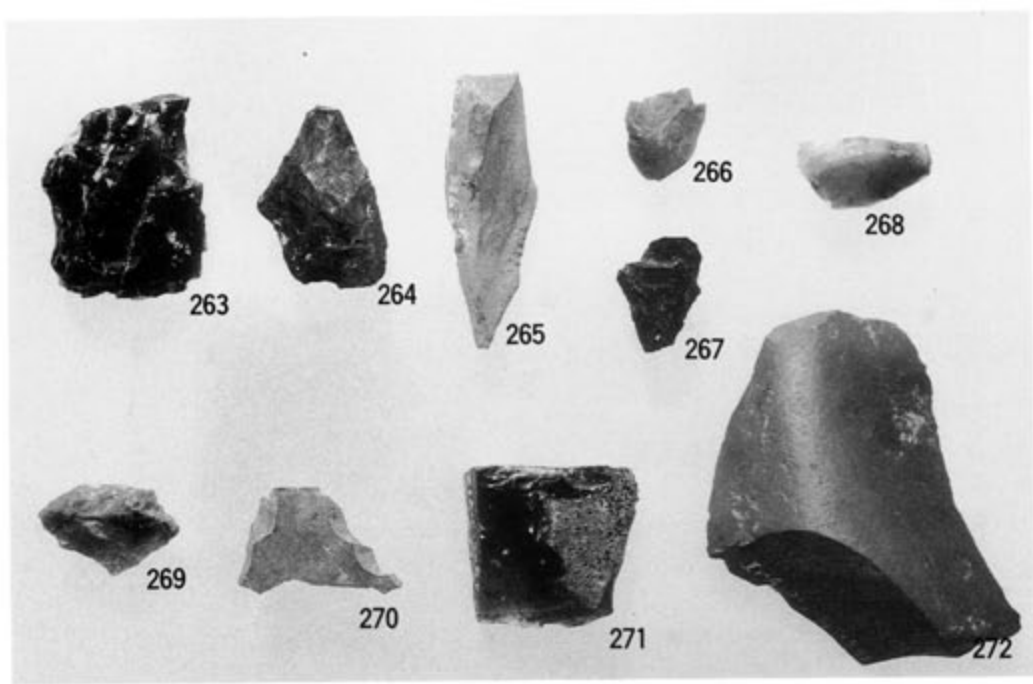
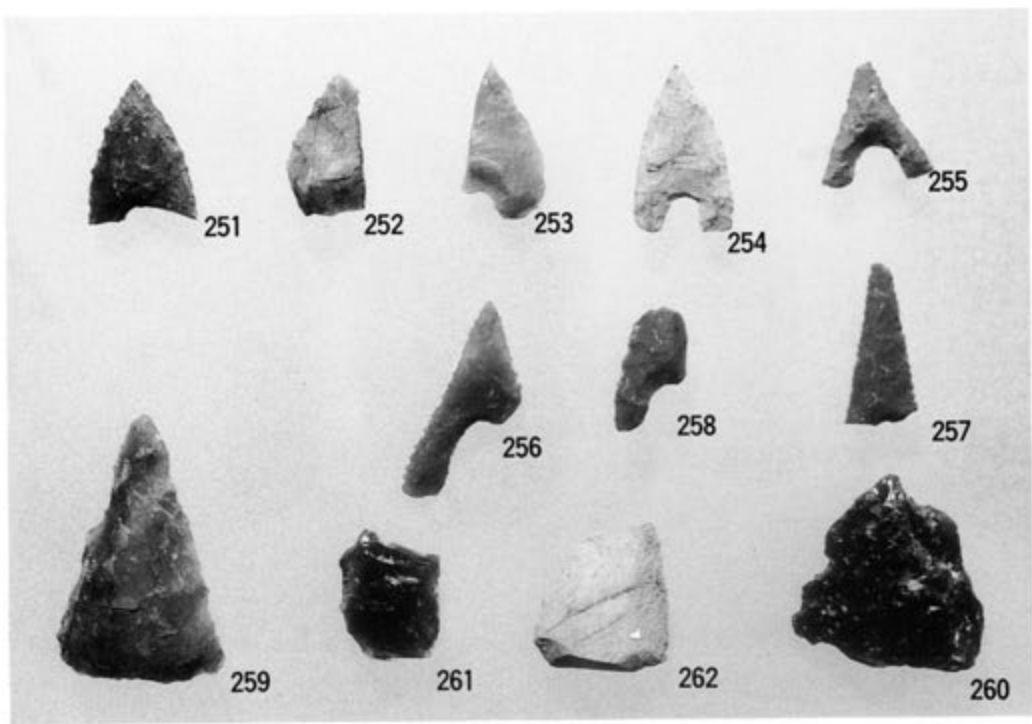
248

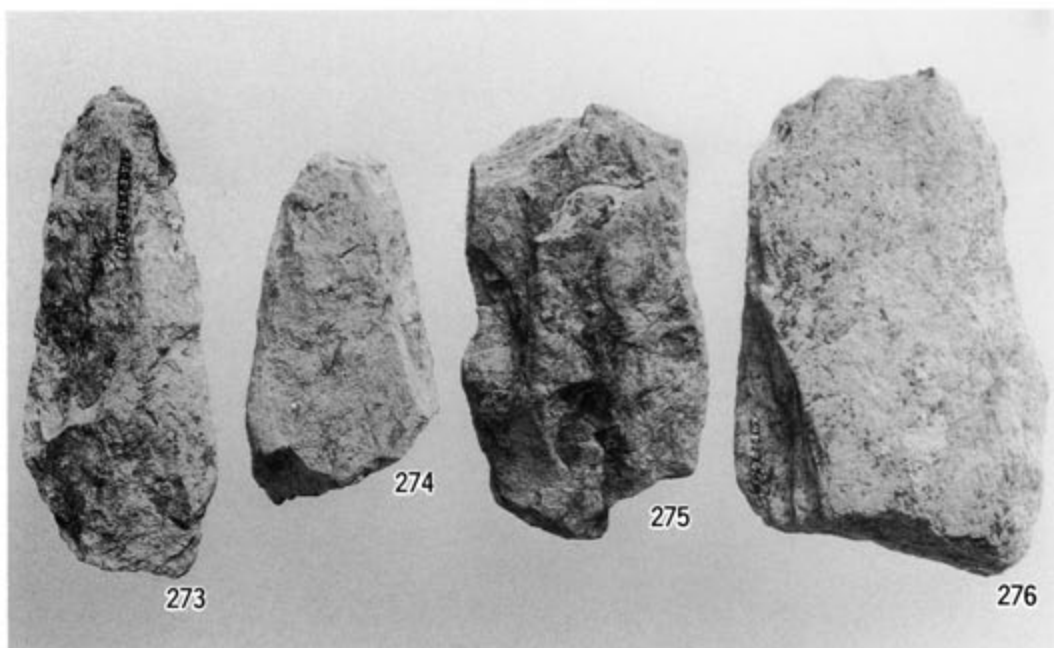


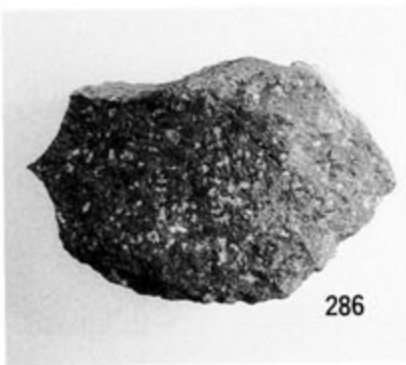
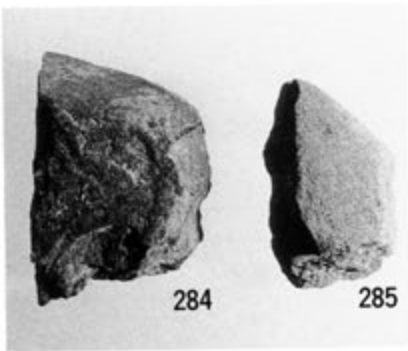
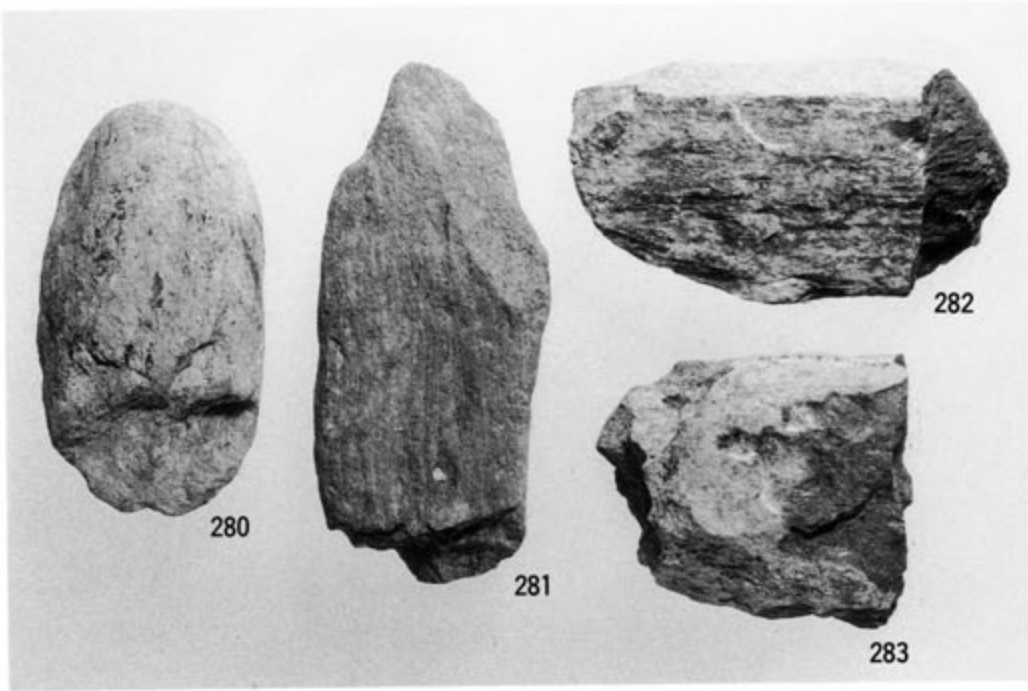
249

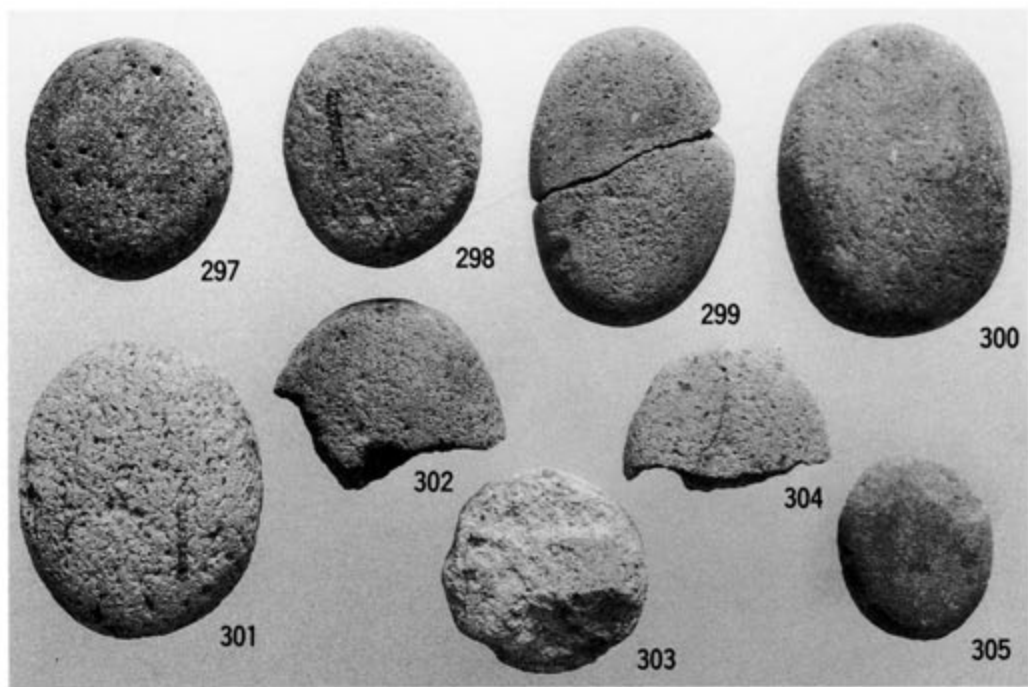
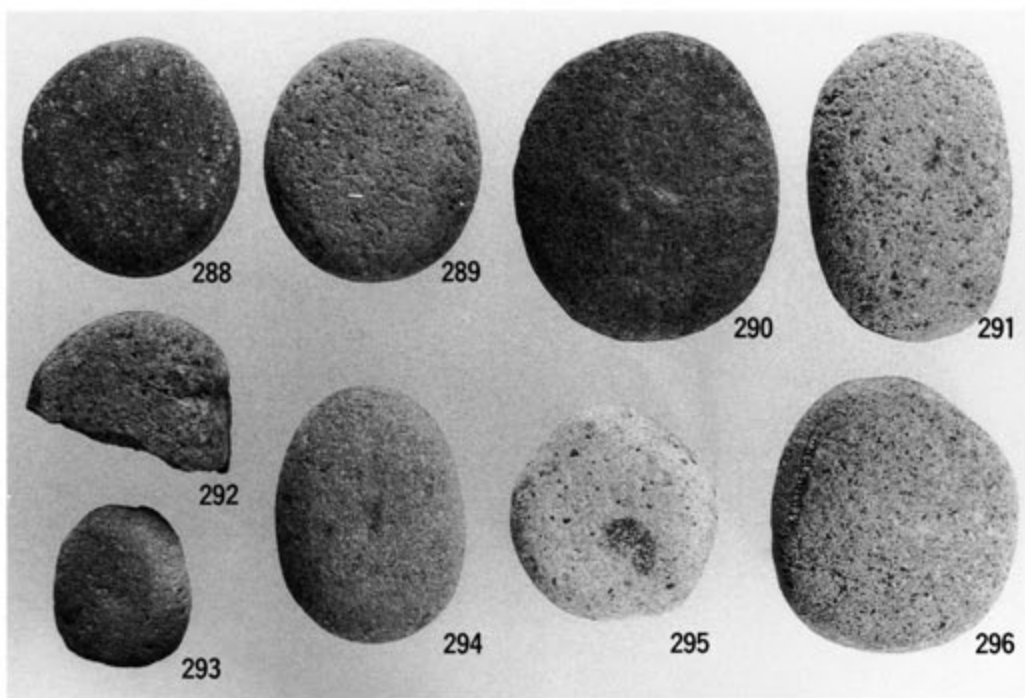


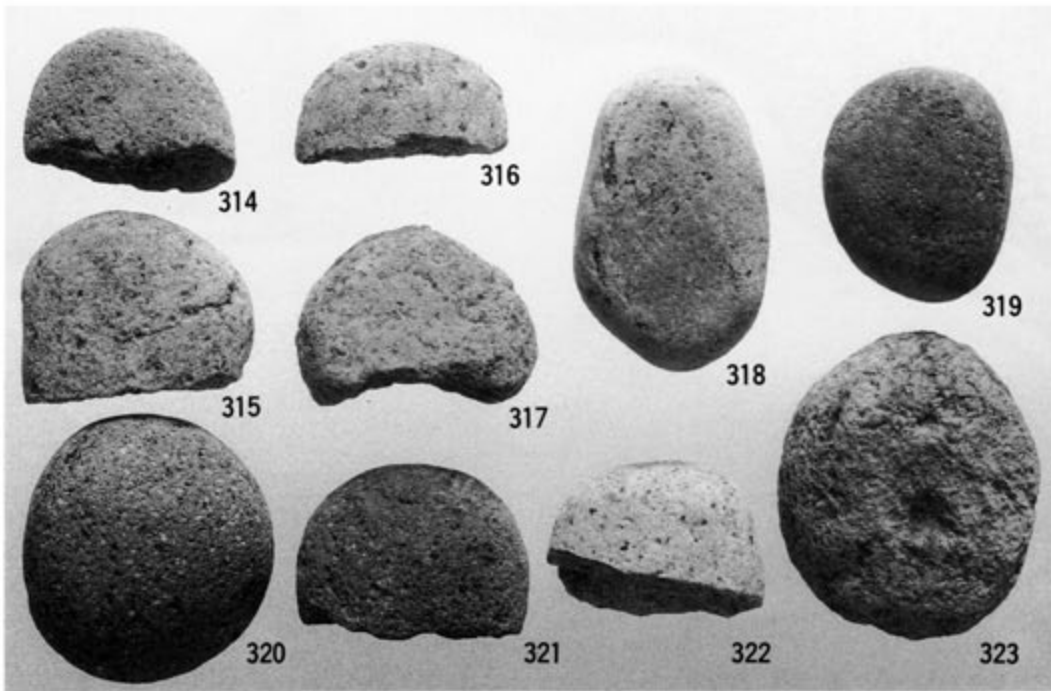
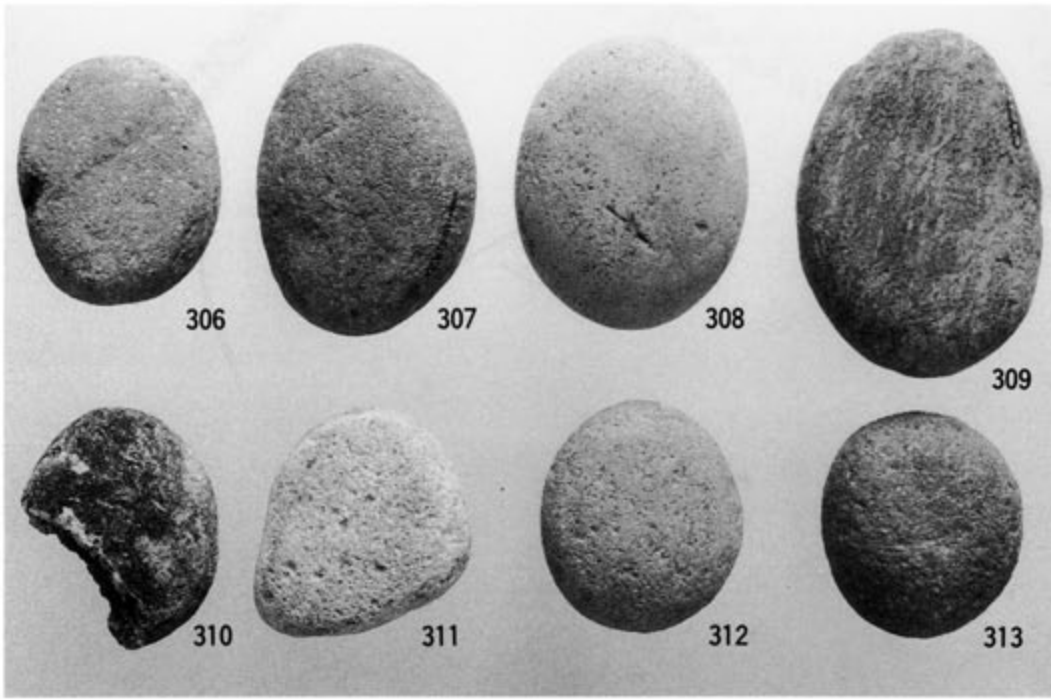
250

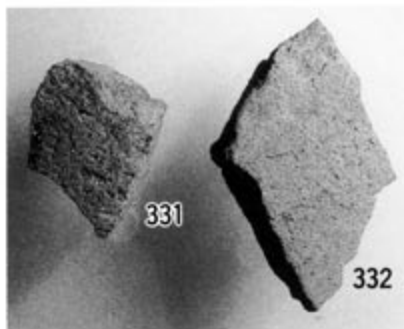
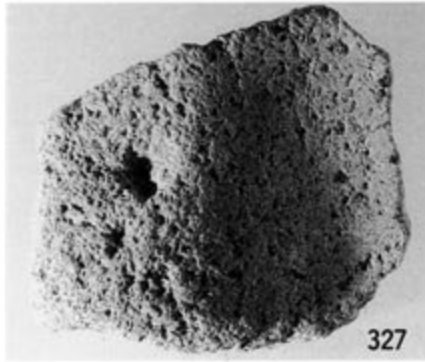


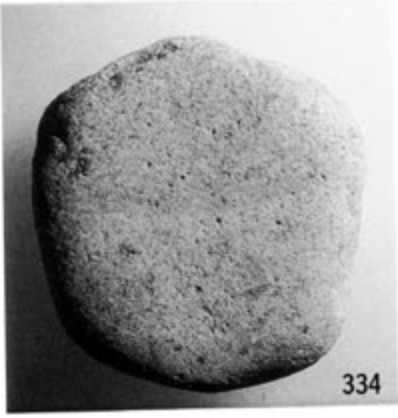


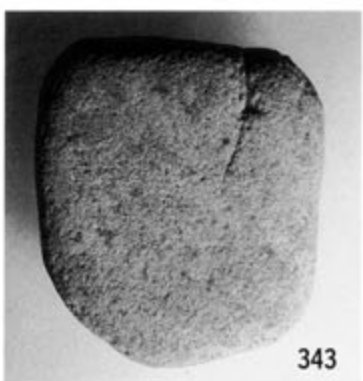


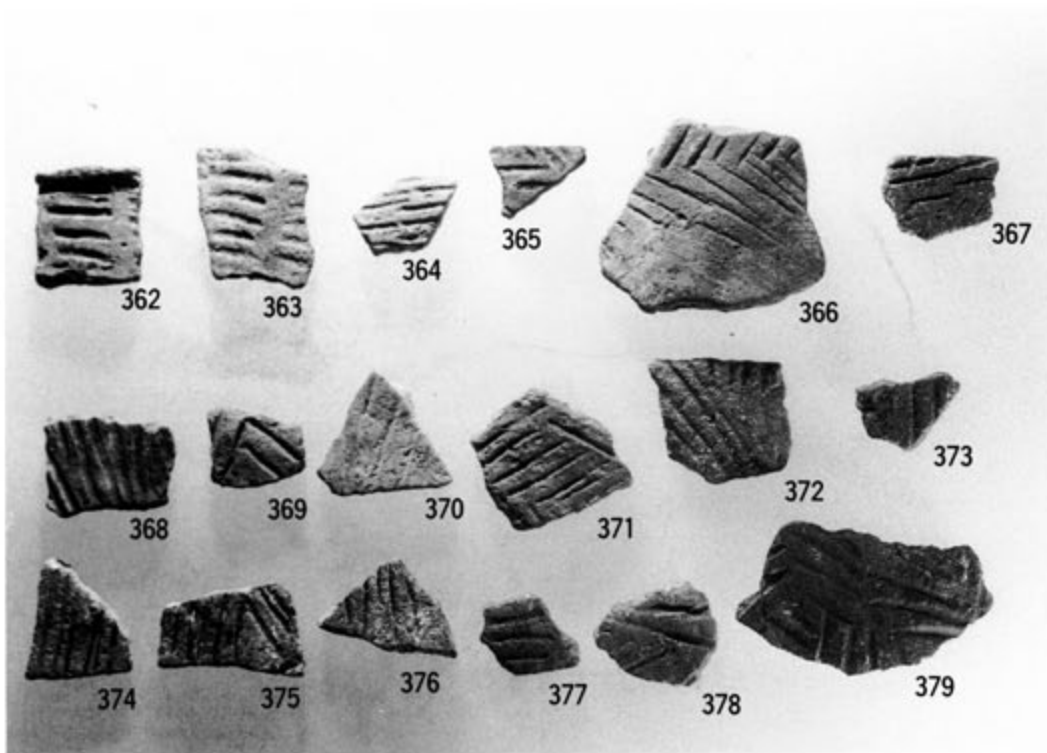
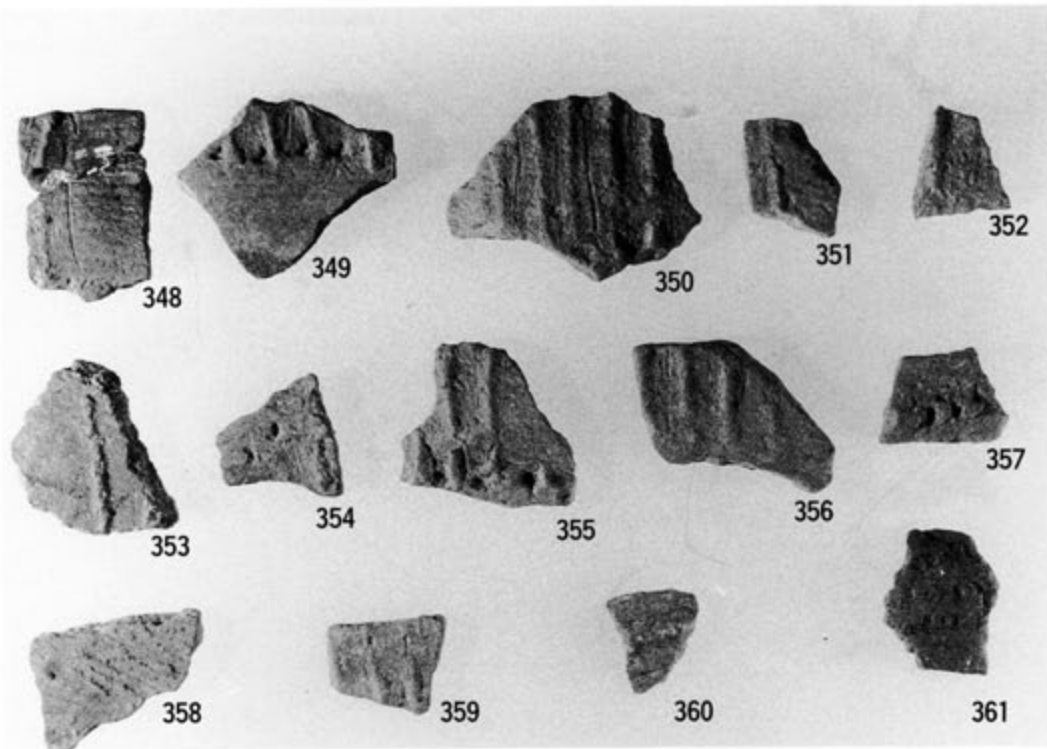


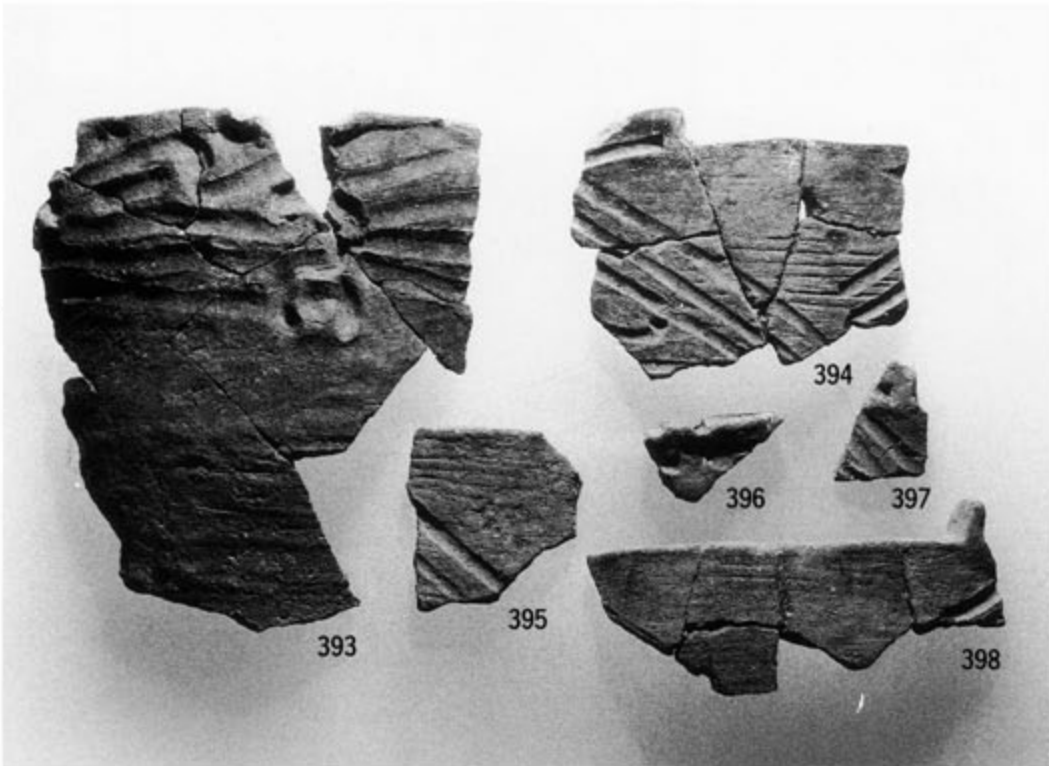
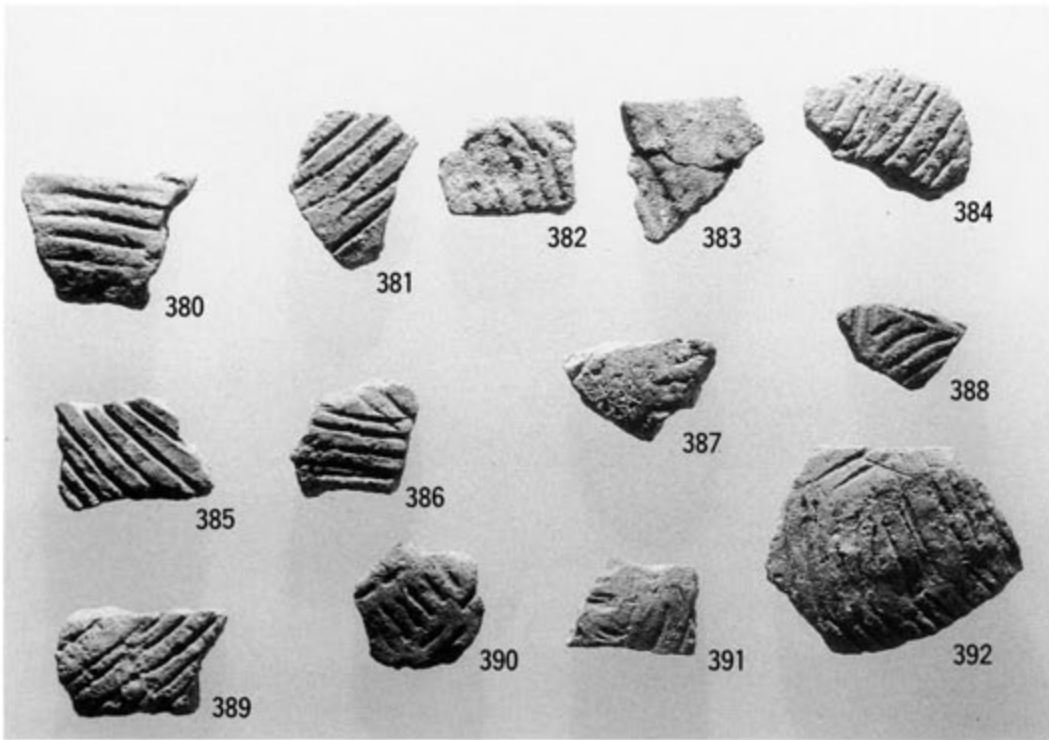


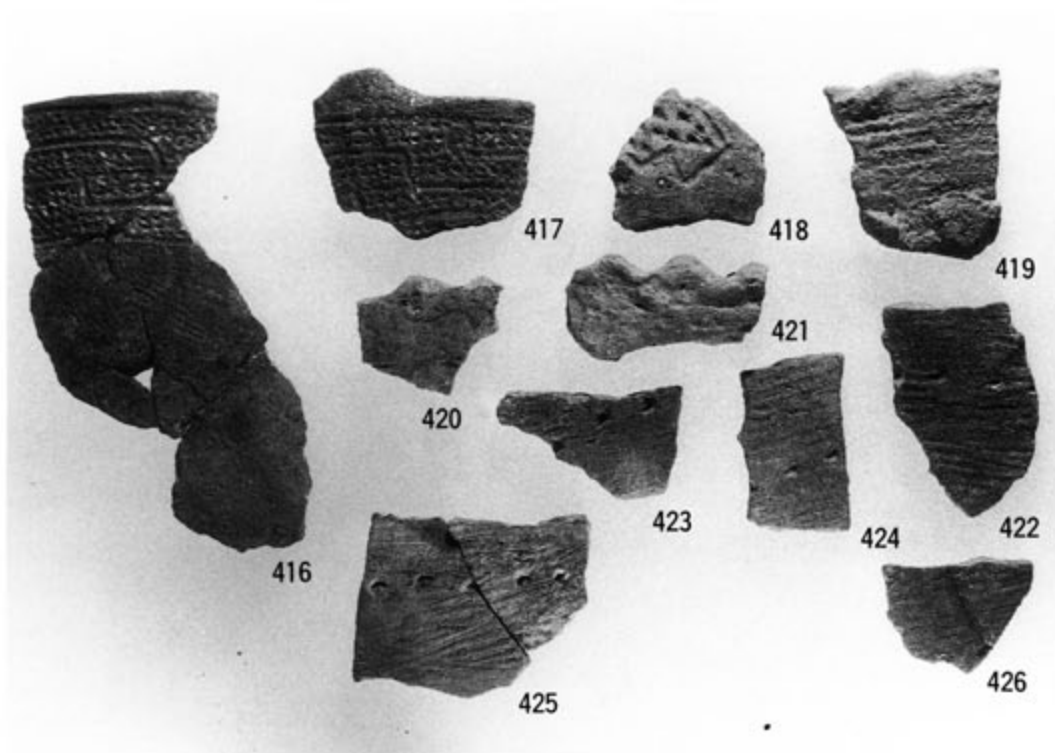
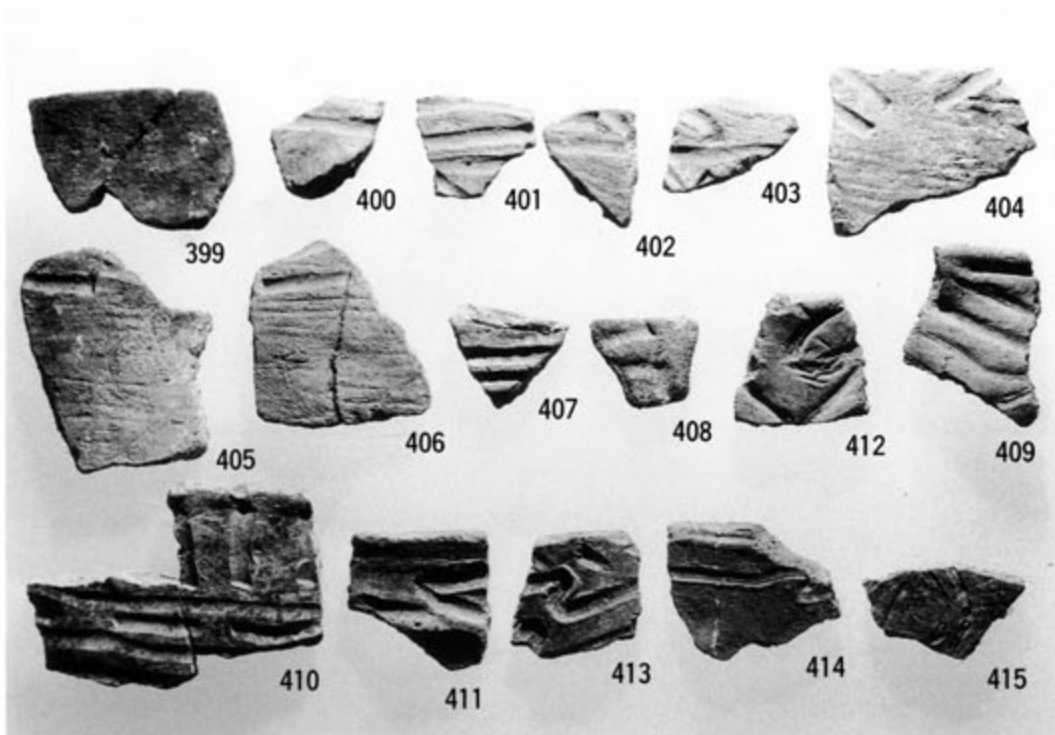


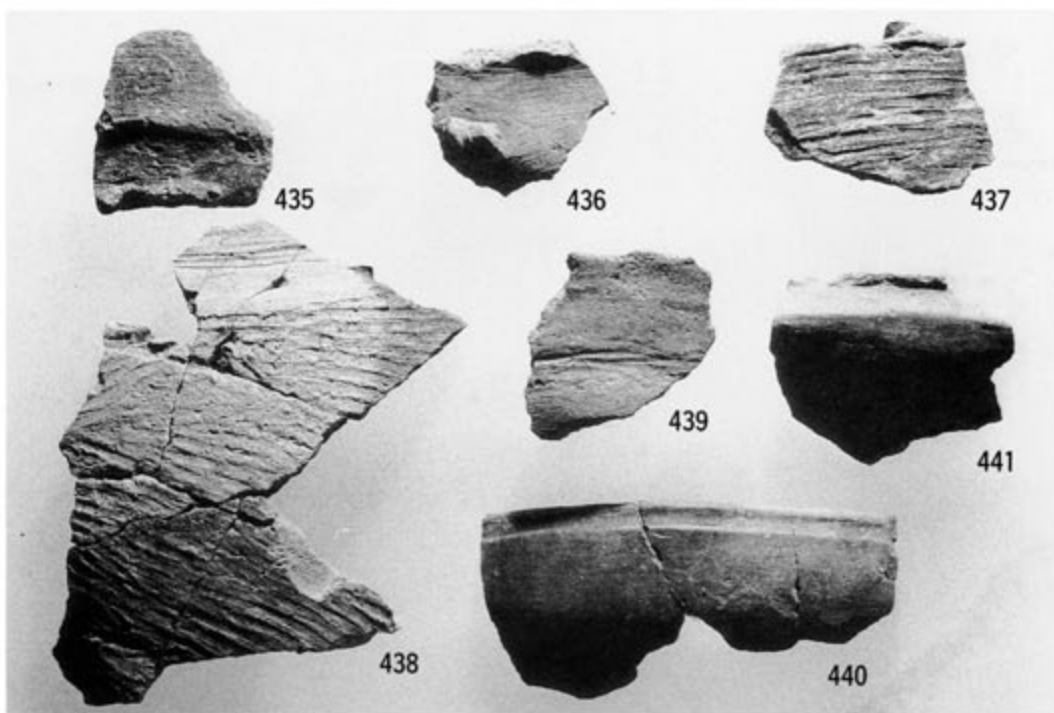
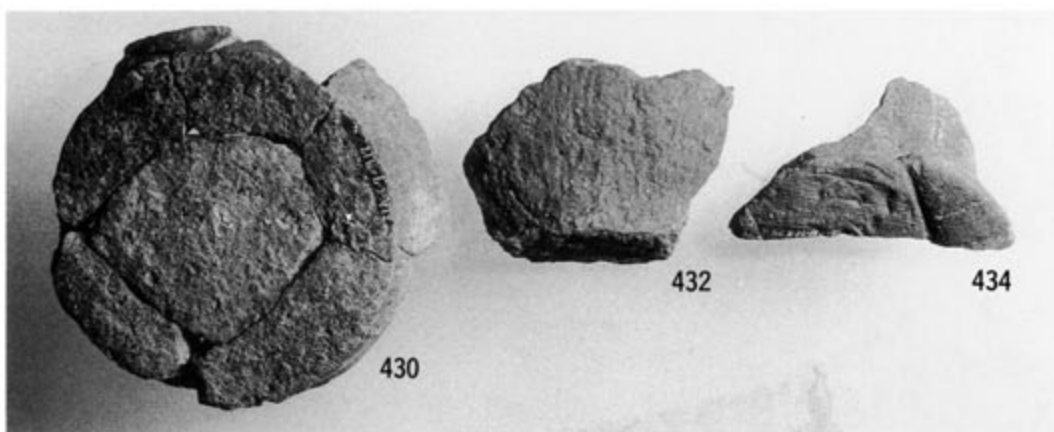


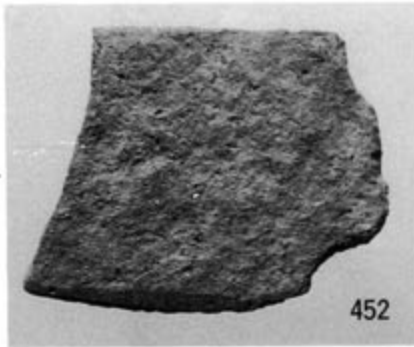
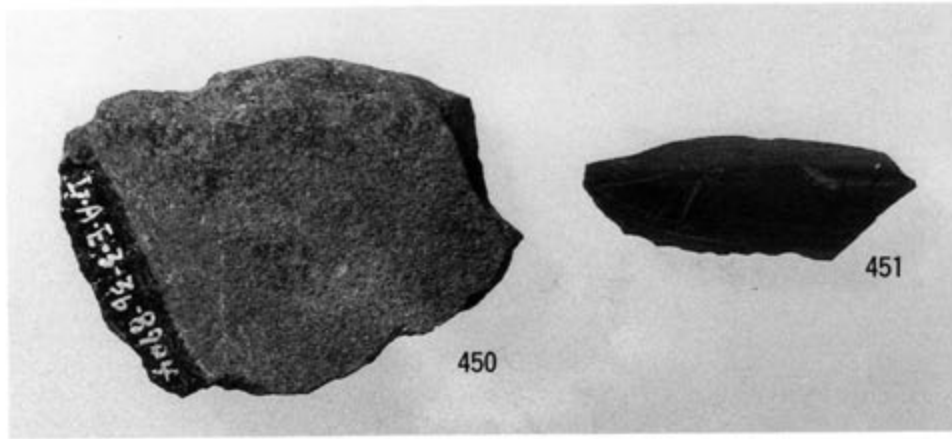
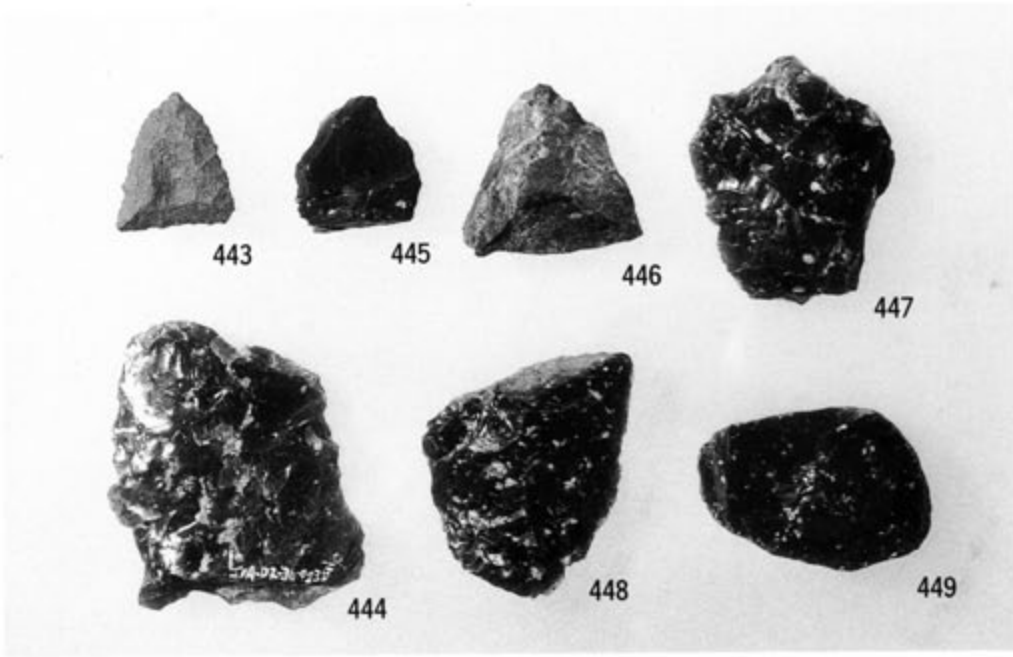














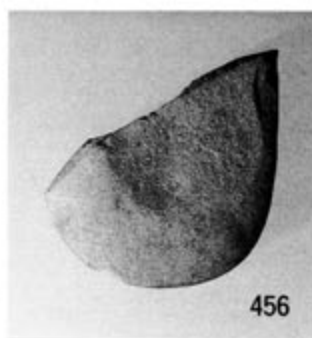
453



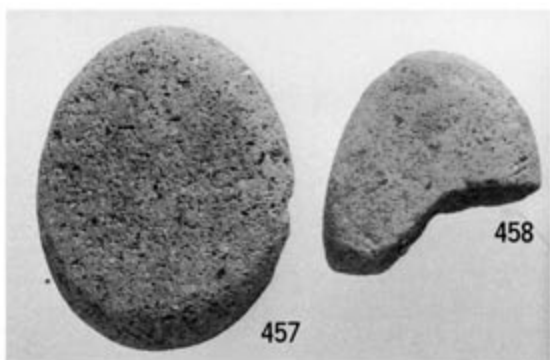
454



455

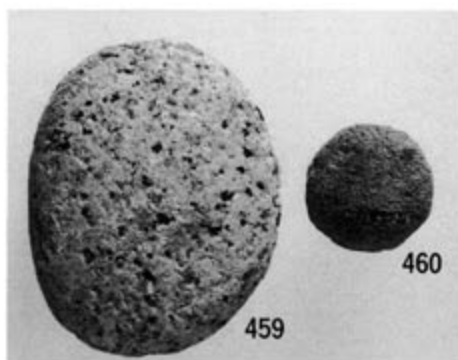


456



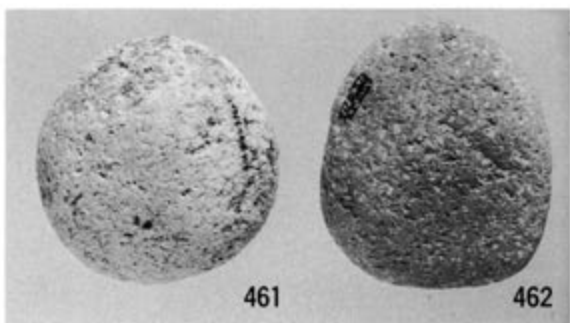
457

458



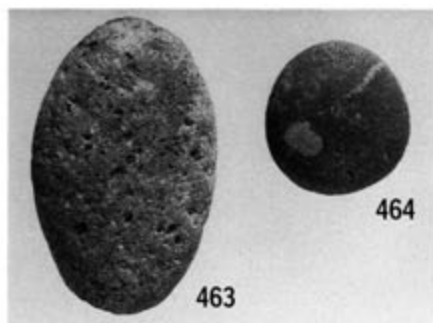
459

460



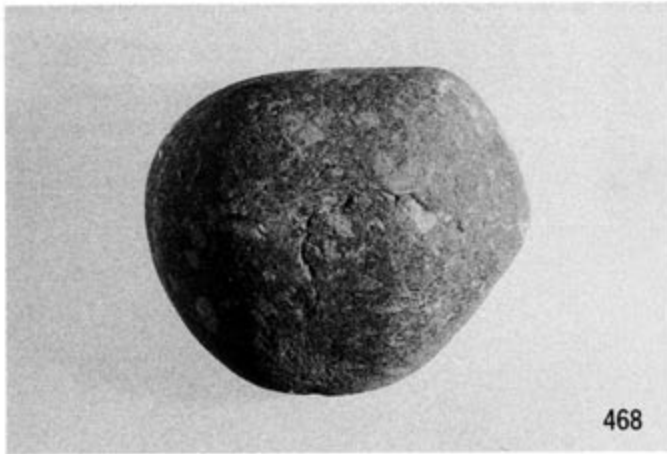
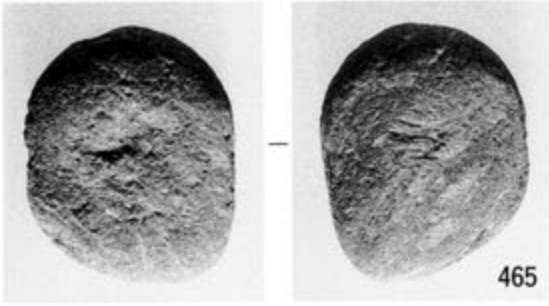
461

462



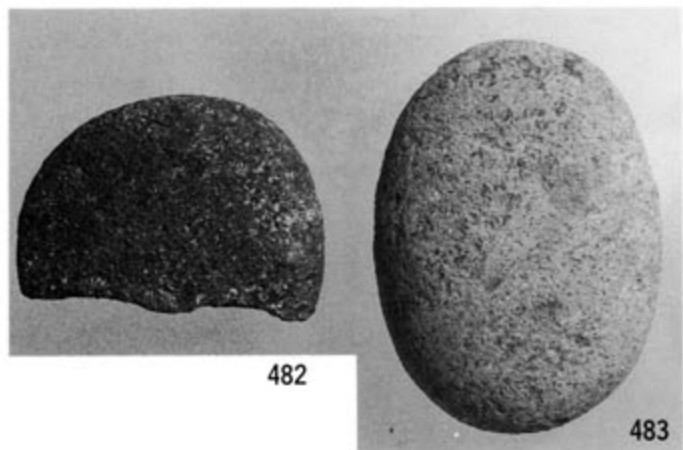
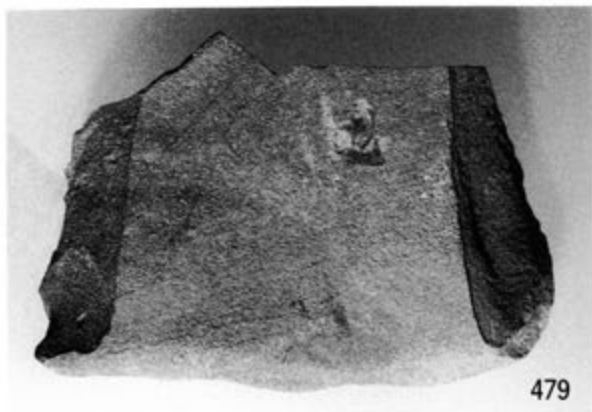
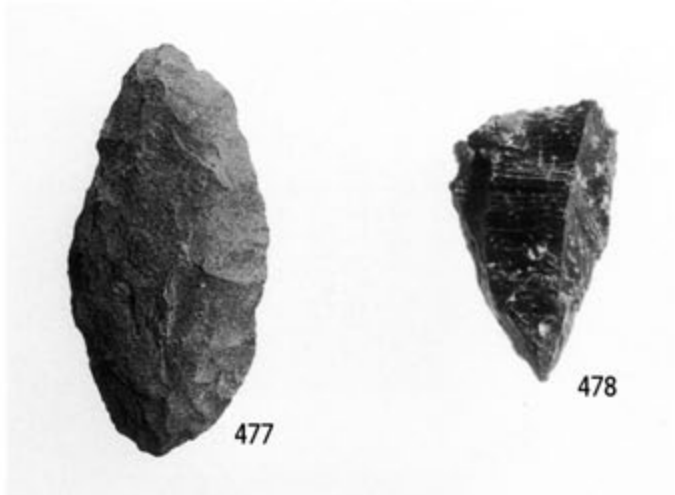
463

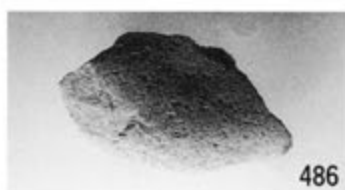
464





图版 43
出土石器 13







(1)
溝状遺構 1 (東から)

図
版
45



(2)
周溝墓 1号
遺物出土状況



(3)
周溝墓 1号 (北から)



(1)
周溝墓1号 主体部
遺物出土状況



(1)
周溝墓2号 (北から)



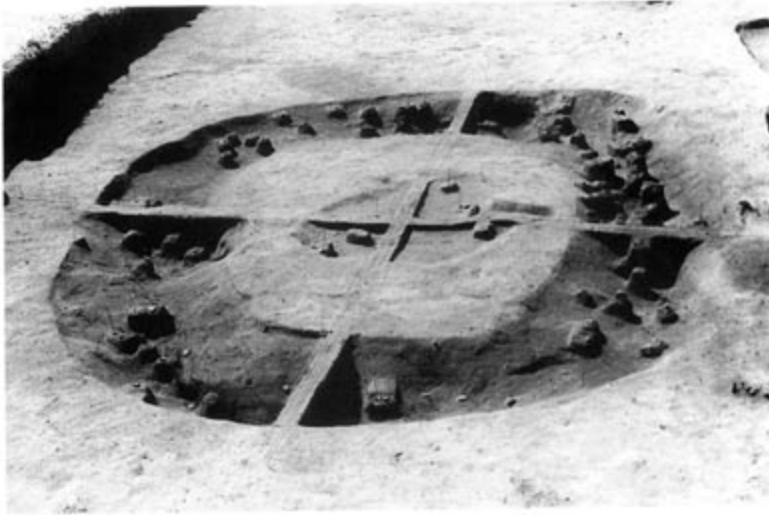
(1)
周溝墓3号 検出状況



(1)
周溝墓3号 (南から) 図版
47



(2)
周溝墓4号 検出面



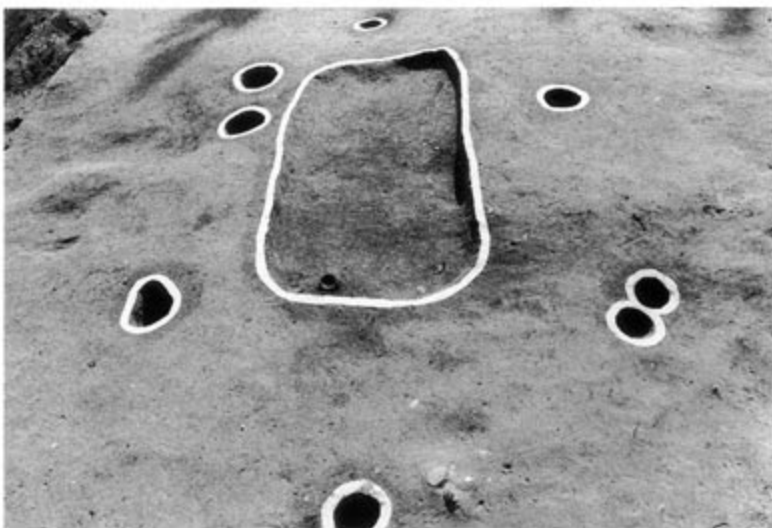
(3)
周溝墓4号
遺物出土状況



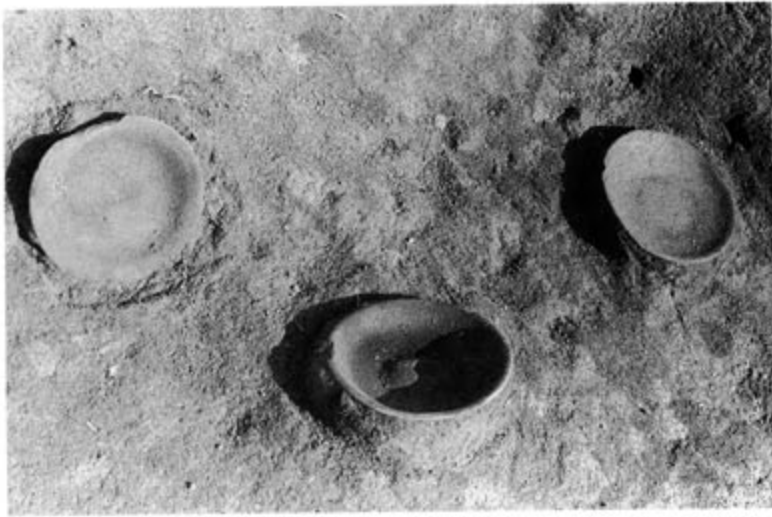
(1)
周溝墓 4号 作業風景



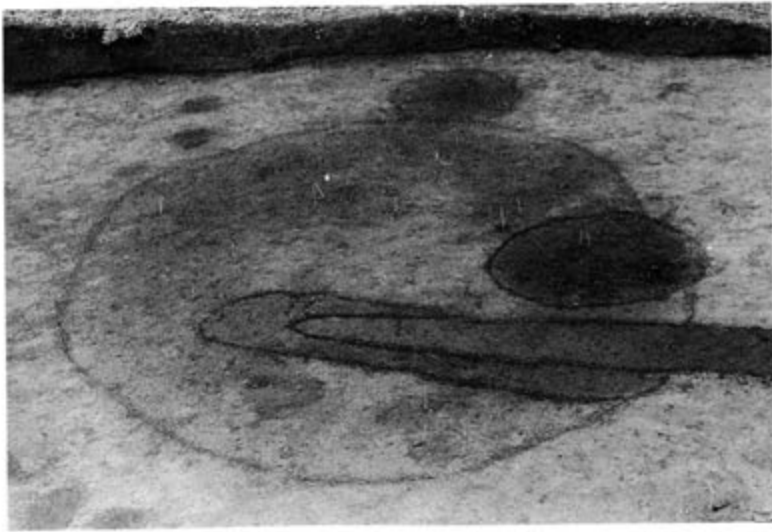
(2)
周溝墓 4号 (北から)



(3)
周溝墓 4号
主体部とピット
(北から)



(1)
周溝墓4号 主体部
遺物出土状況 図版
49



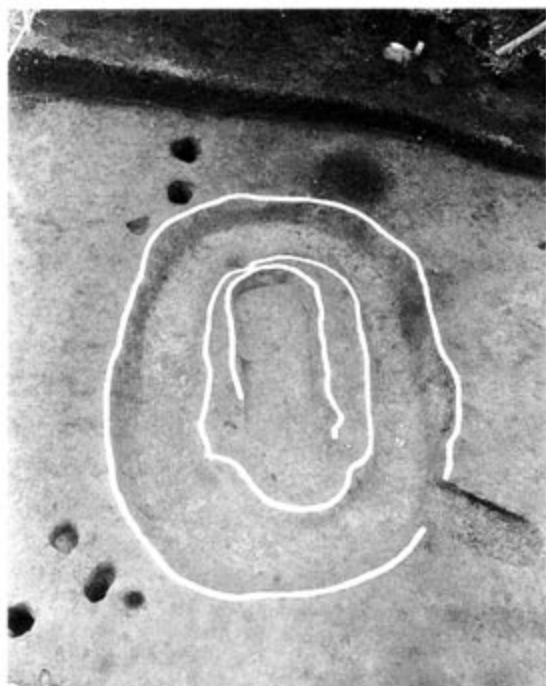
(2)
周溝墓5号 検出面



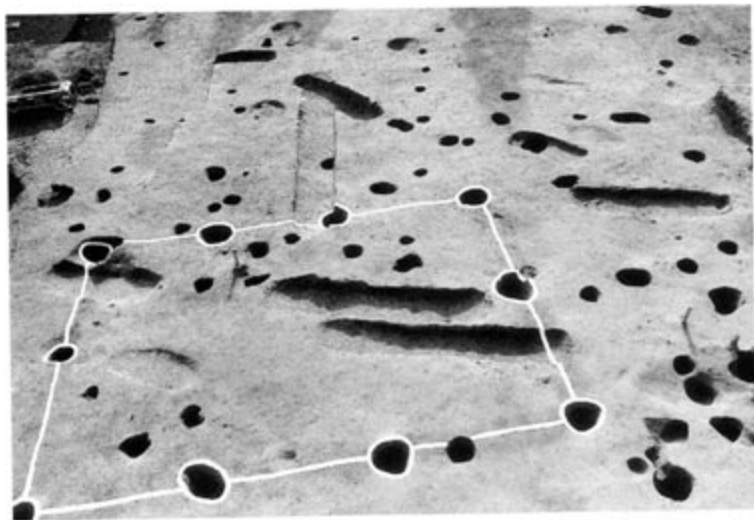
(3)
周溝墓5号
周溝埋土状況



(1)周溝墓5号 主体部
遺物出土状況



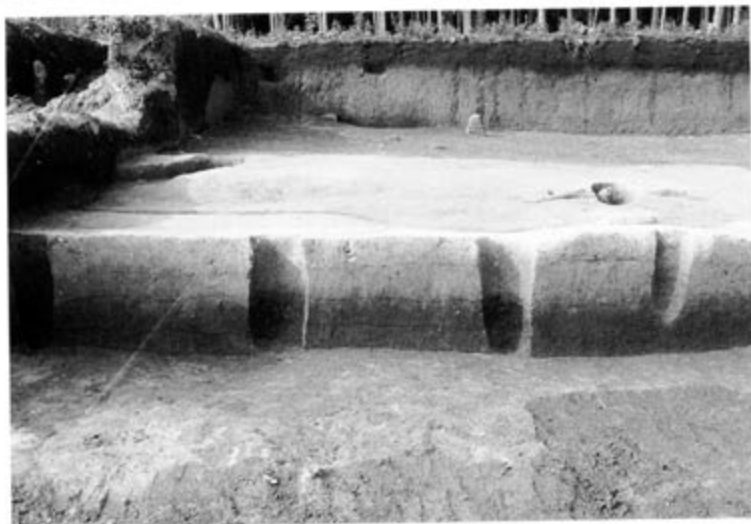
(1)周溝墓5号 (北から)



(1) 掘立柱建物1号付近のピット群
(北から) 図版 51



(2) 掘立柱建物1号(西から)



(3) 掘立柱建物2号柱穴断面



(1)
溝状遺構 3



(2)
半円形溝状遺構



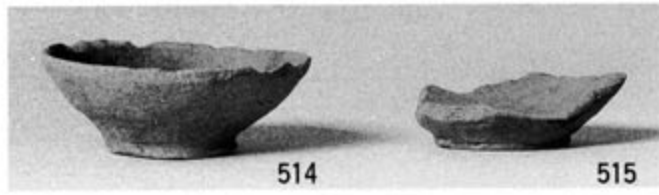
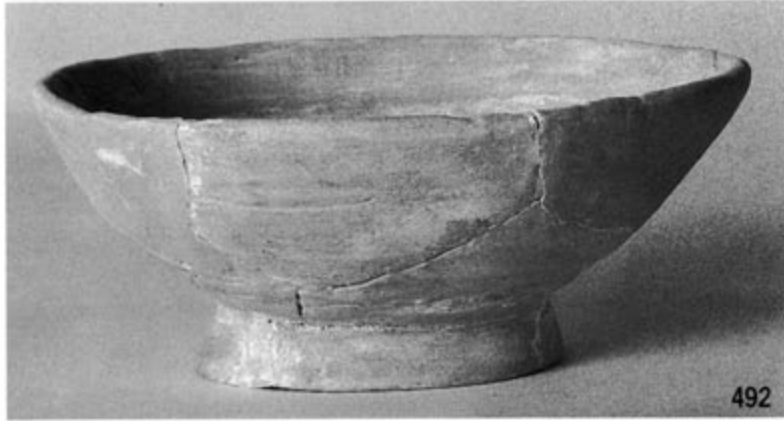
(1)
長楕円形遺構（北から）

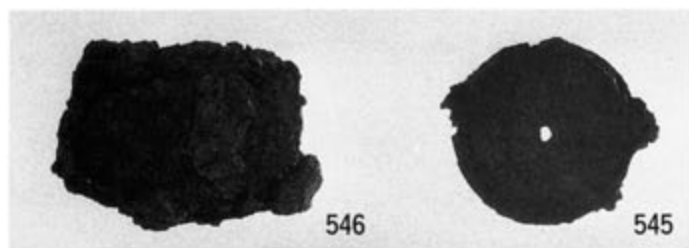
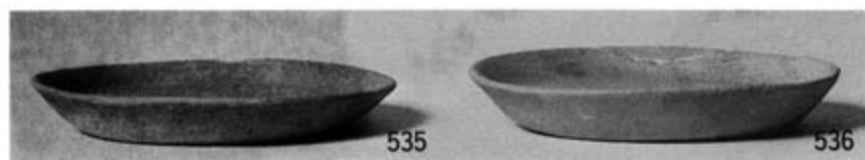
図
版
53

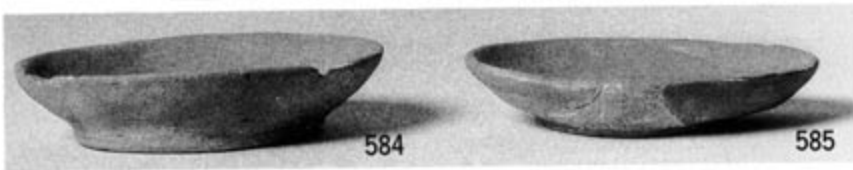
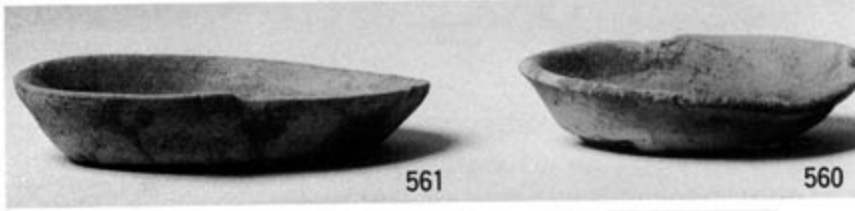
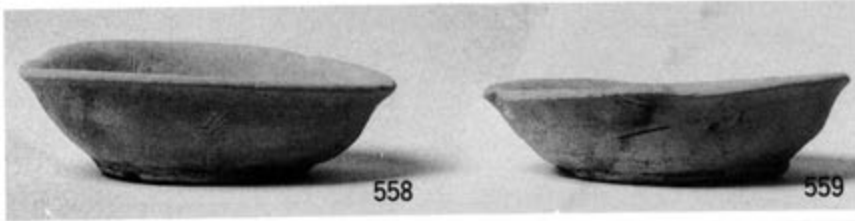


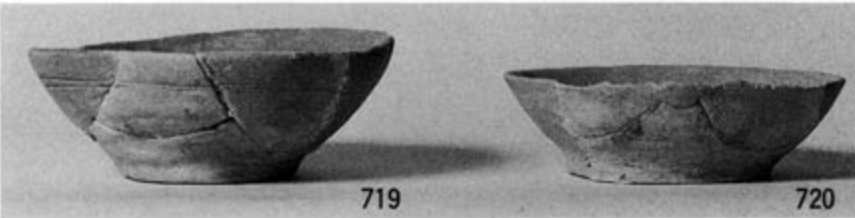
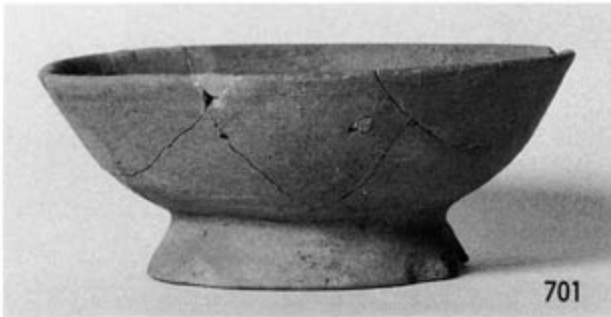
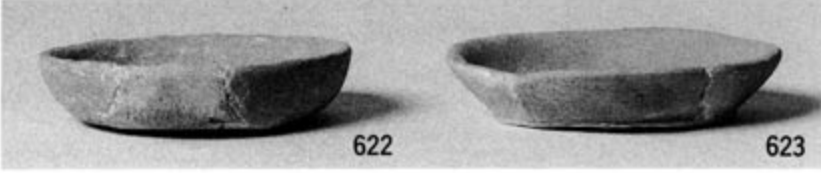
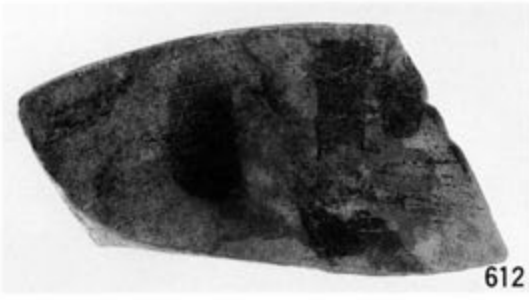
(1)
楕円形遺構（一部 西から）

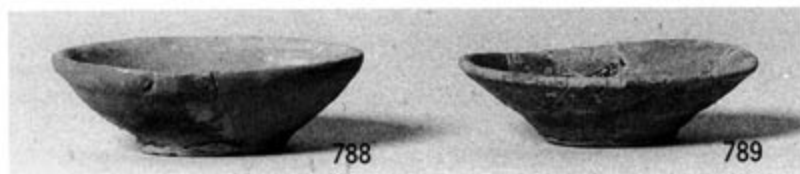
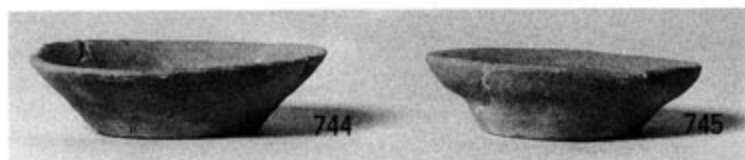
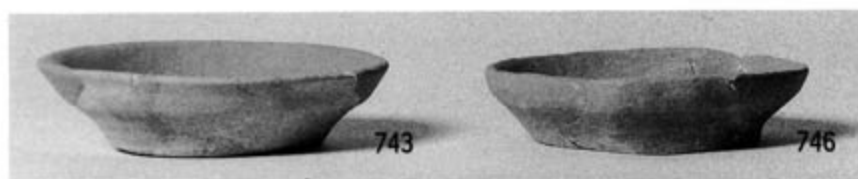




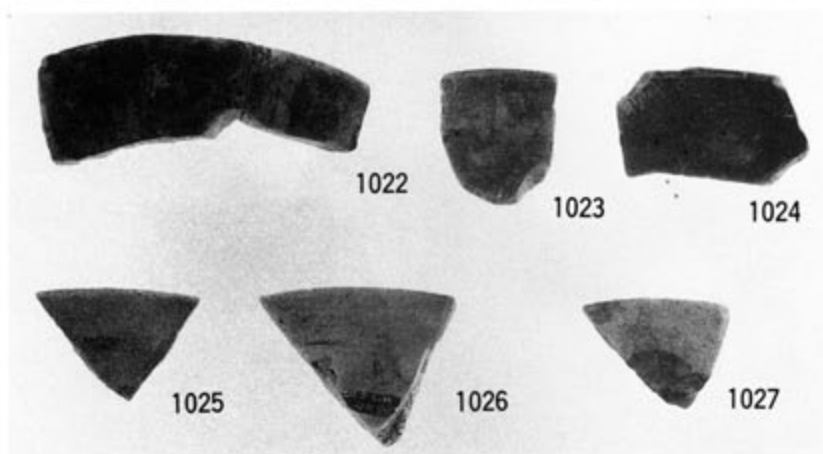
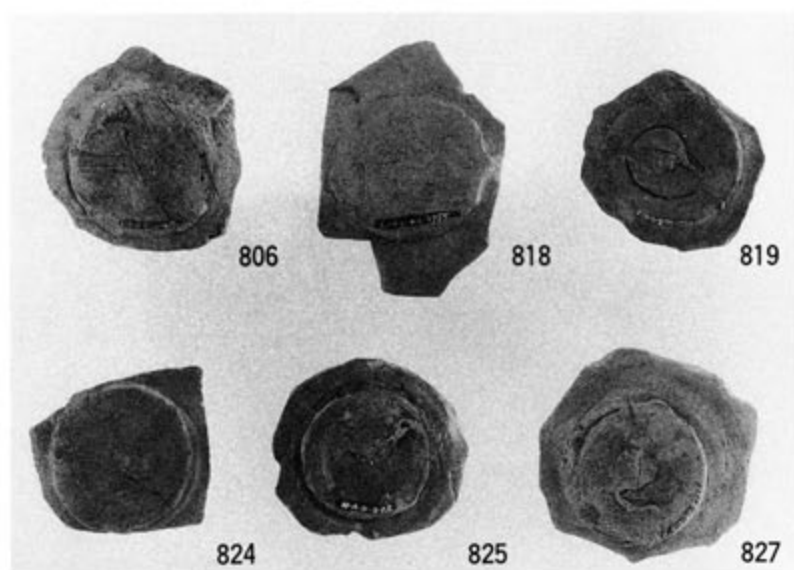
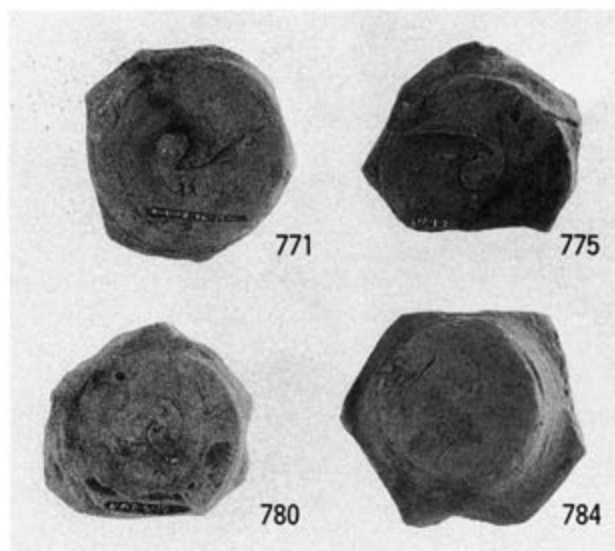


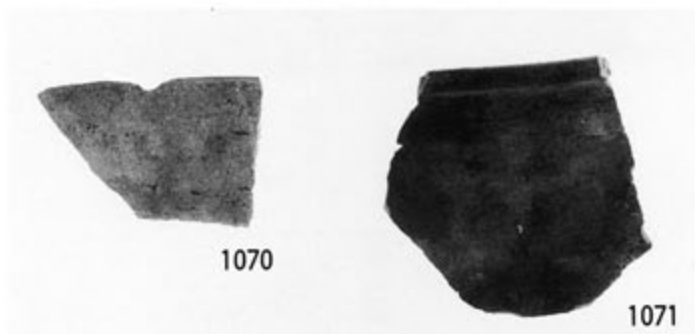
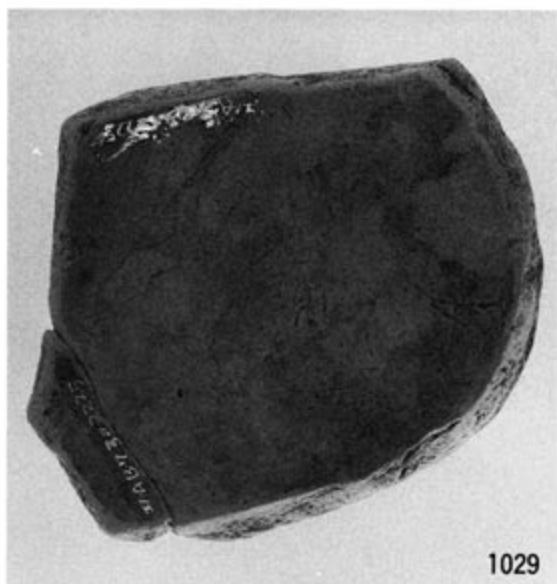


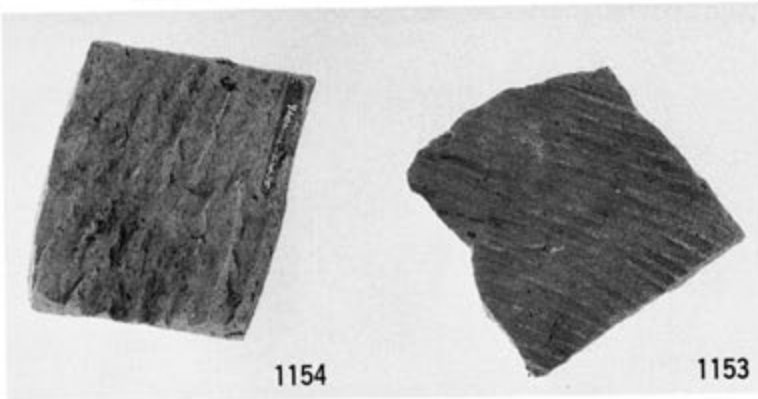
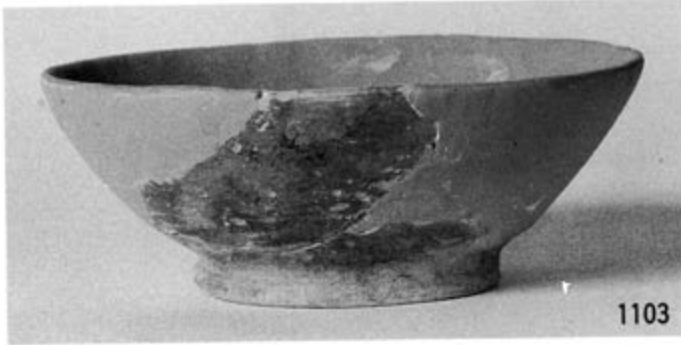
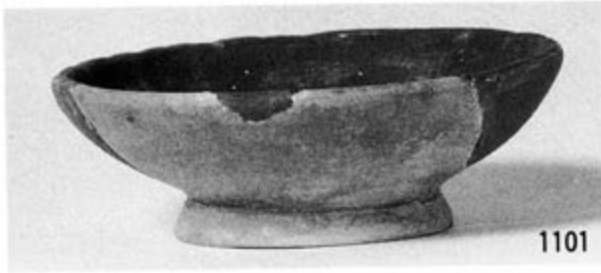


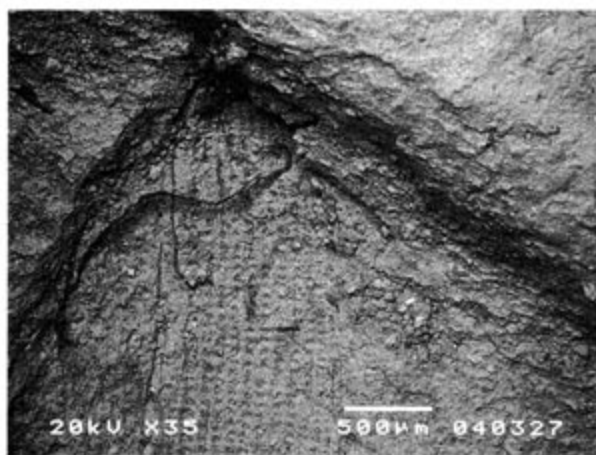








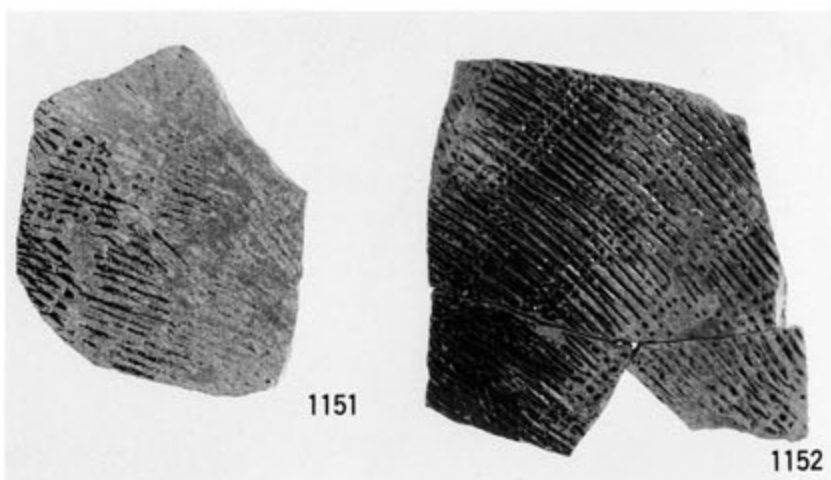




1154
粒痕顕微鏡写真

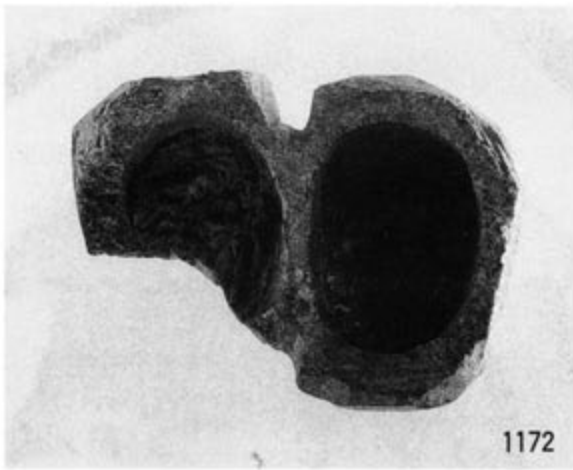
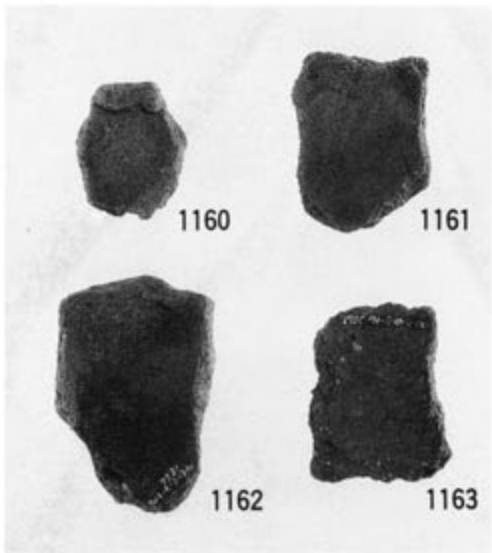


1135



1151

1152





榎崎A遺跡発掘現場にて 故 旭慶夫氏と河口貞徳先生



発掘調査に従事された作業員の方々

榎崎 A 遺跡 土壌化学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

周溝遺構における土壌化学分析

はじめに

榎崎 A 遺跡は、鹿屋市郷之原町榎崎に所在し、台地上に位置している。遺跡内には平安時代に属す周溝遺構が6基検出されている。この種の遺構は当地域では確認例が少ないが、他県では平安・鎌倉時代の周溝墓とされている。本遺構も形状から、それと同様な遺構として検討されている。しかし、遺構中央にみられる土坑（主体部？）に人骨や副葬品など埋葬を示す遺物は検出されておらず、周溝墓を示唆する情報が得られていない。ところで、人を含む動物の遺体やその排泄物が土中に埋められると、その構成物は急速に分解されるが、リン酸については物理的な分解作用はずっと穏やかに働き、動物遺体が消失した後も長期にわたって土中に濃集して残る（ジナ・バーンズほか、1986）。また、ジョン・G・エバンスは、著書「環境考古学入門」（加藤晋平訳、1982）で、リン分析は集落位置やその広がり、土層断面での生活面の検出、墓壇の確認などに利用できると述べている。つまり、今回のように遺体の痕跡が残っていない場合においても、その覆土中には遺体の痕跡をリン成分の高濃度な集積として捉えることができる。今回の分析調査ではこの周溝および中央の土坑について、覆土中のリン含量を分析し、遺体埋葬による痕跡が認められるか否かを検討する。なお、周溝墓を対象としたリン分析の例では、古墳時代であるが東京の神谷原遺跡で周溝墓主体部における遺体の安置を確認した事例があり、そこではリンの濃集状態から遺体の身長をも推定している（竹迫ほか、1980）。

1. 試料

試料は、2基の周溝遺構（周溝4号・周溝5号）から採取した。周溝4号では土坑（主体部？）の東西・南北の両覆土断面の底面付近の土壌を一断面につき2点、計4点を（図1）、周溝5号では東西・南北の両覆土断面の周溝部分の土壌10点と土坑（主体部？）の土壌7点の計17点を採取した（図2）。分析は、この採取された試料全点について行った。したがって、分析点数は21点である。

2. 分析方法

風乾、粉碎、篩別した試料について、硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法により測定した。以下に具体的な操作工程を示す。

- ①試料を風乾後、軽く粉碎して2mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。
- ②風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。
- ③風乾細土試料2gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（ HNO_3 ）5mlを加えて加熱分解し、放冷後、過塩素酸（ HClO_4 ）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。

④ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色 a 液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定し、土壌中のリン酸含量を P_2O_5 mg/g として求める。

3. 結果・考察

分析の結果は、表 1 と図 1・2 に示した。

表 1 周溝 4 号・5 号のリン分析結果

遺構・遺物	試料番号	土色・土性	リン酸含量 P_2O_5 mg/g
周溝 4 号	1	黄褐色 (10Y R 5 / 8) L	0.93
	2	鈍い黄色 (2.5Y 6 / 4) L	1.69
	3	鈍い黄色 (2.5Y 6 / 4) L	1.49
	4	褐色 (10Y R 4 / 6) L	1.47
周溝 5 号	1	暗褐色 (10Y R 3 / 3) L	1.39
	2	暗褐色 (10Y R 3 / 4) L	1.37
	3	オリーブ褐色 (2.5Y 4 / 4) L	0.91
	4	暗褐色 (10Y R 3 / 3) L	1.13
	5	オリーブ褐色 (2.5Y 3 / 3) L	0.91
	6	オリーブ褐色 (2.5Y 3 / 3) L	0.89
	7	黄褐色 (10Y R 5 / 6) L	0.78
	8	黒褐色 (10Y R 3 / 2) L	1.31
	9	褐色 (10Y R 4 / 4) L	0.99
	10	黄褐色 (2.5Y 5 / 6) L	0.91
	11	暗褐色 (10Y R 3 / 3) L	1.45
	12	暗褐色 (10Y R 3 / 4) L	1.12
	13	褐色 (10Y R 4 / 6) L	1.37
	14	褐色 (10Y R 4 / 6) L	0.79
	15	暗褐色 (10Y R 3 / 4) L	1.00
	16	褐色 (10Y R 4 / 4) L	0.92
	17	褐色 (10Y R 4 / 4) L	1.17

- 注. (1) リン酸、カルシウムの単位は、ともに乾土 1 g あたりの mg で表示。
 (2) 土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
 (3) 土性の判定は、土壤調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談改編、1984）による。
 L…壤土（ある程度を砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土を同じくらいに感じられる。）

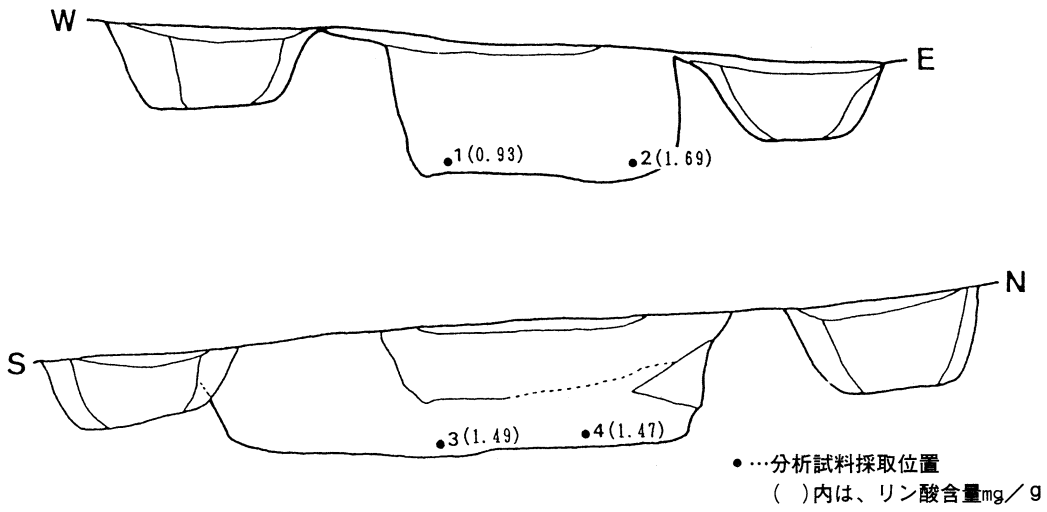
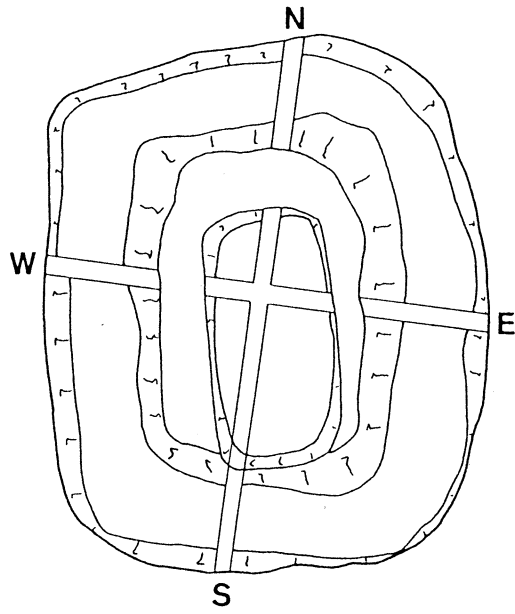
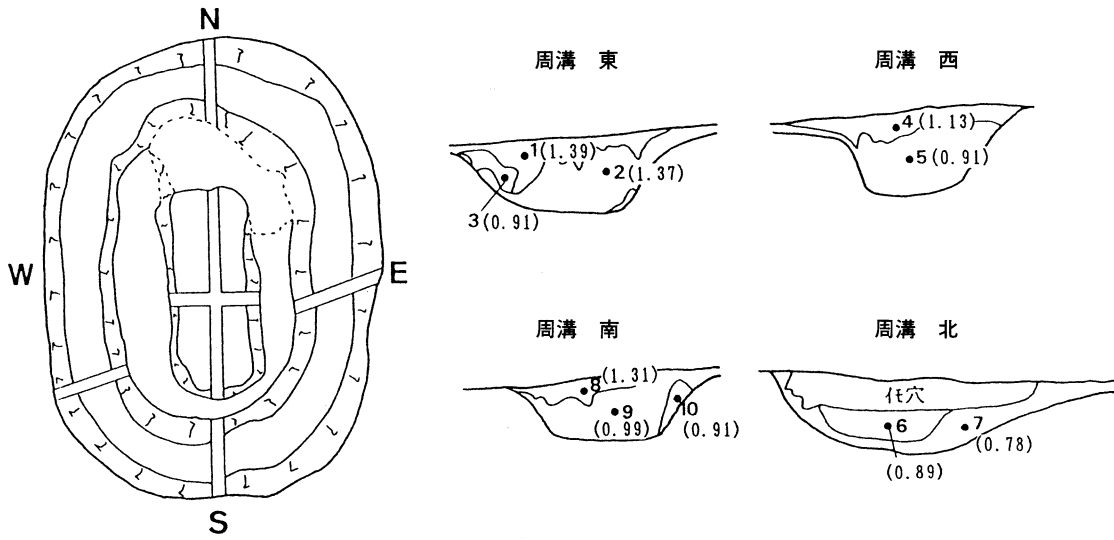


図1 周溝4号のリン分析試料採取位置とリン含有量



〈周溝断面図〉

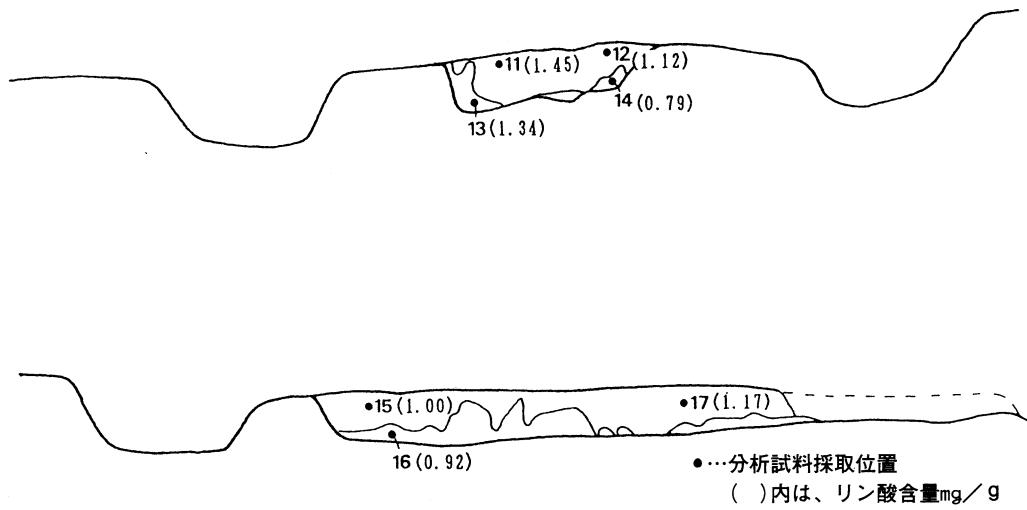


図2 周溝5号のリン分析試料採取位置とリン含有量

周溝 4 号

試料全体の含量幅は、0.93~1.69mg/g の範囲にある。土壌は普通1.0~2.5mg/g P₂O₅ (G. H. Bolt ほか、1980) を含んでいるが、各試料はこれに比較して同等またはそれ以下の低い値を示す。また、各試料間の差を相対的にみても、試料番号 1 でやや低い値を示す他は、いずれもその値が近似している。

したがって、主体部の底部付近に特徴あるリンの濃集はなく、遺体の痕跡を確認することはできない。

周溝 5 号

試料全体の含量幅は、0.79~1.45mg/g の範囲で、ここでも普通土壌が含有する量を越える試料は認められない。また、主体部のリン含有量を周溝と比較してみると、主体部の試料 7 点 (試料番号11~17) の平均含有量 (1.12mg/g) と周溝の試料10点 (試料番号 1~10) の平均含有量 (1.12mg/g) には統計的な有為な差は認められない (有為水準 5 % 以内)。さらに土坑 (主体部?) の中の試料採取箇所の違う東西・南北の両断面の比較においても、東西断面試料 (試料番号11~14) の平均含有量 (1.18mg/g) と南北断面試料 (試料番号15~17) の平均含有量 (1.03mg/g) には有為な差はない (有為水準 5 % 以内)。

したがって、主体部と考えられる土坑および周溝ともに特徴あるリンの濃集はなく、周溝 4 号同様に遺体の痕跡を確認することはできない。

4. まとめ

今回、分析調査対象とした周溝 4 号・周溝 5 号の 2 基には遺体の埋葬を示唆する高濃度なリン集積は認められなかった。この原因については、①周溝墓に遺体が埋葬されなかった、②埋葬された遺体が持ち出された、③遺体が消失した後に残ったリン成分が土壌に取り込まれることなく系外へ流出したの三点が想定される。今回分析調査対象とした周溝墓は、埋積した覆土の土質をみると砂が多く、活性アルミニウム・鉄によるリンを固定する能力が弱いと考えられる。これより、③の系外流出の可能性が高いと推測される。しかし、土壌中のリン成分の移動について詳細に調査研究した事例はなく、今後の研究成果に期待するところが大きい。また、本目的に対しては、脂質分析などの他の自然科学的な情報を付加しながら検討していく必要がある。

〈文献〉

土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法。354 P、博友社。

土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法。440 P、養賢堂。

藤森利美 (1986) 分析技術者のための統計的方法。392 P、社団法人日本環境測定分析協会。

G. H. Bolt, M. G. M. Bruggenwert (1980) 土壌の化学、岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽

捷行訳：235-236、学会出版センター [G. H. Bolt, M. G. M. Brugg enwert (1976)

SOIL CHEMISTRY]。

ジナ・バーンズ、ルール・ブラント、サイモン・ケーナ、ディビット・ロリガー、西田史朗

(1986) 日本の土壌中での磷酸塩の挙動。考古学と自然科学、19：57-67。

久馬一剛・永塚鎮男編 (1987) 土壌学と考古学。214 P、博友社。

ジョン・G・エバンス (1982) 環境考古学入門。加藤晋平訳、雄山閣。

京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 (第1巻)。411 P、産業図書。

竹迫 紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆 (1980) 神谷原遺跡への土壌学的アプローチ。神谷原 I：412-416、八王子市柵田遺跡調査会。

あ と が き

本来ならば、発掘調査に従事した旭慶男さんが報告書の「しめ」として“あとがき”で最後のペンを置くところであるが、不幸にして36歳の生涯を終え故人となった今、はからずも我々が故旭さんを代弁・代筆して報告書を執筆することとなった。ここに無事、仲間の努力により本報告書が刊行出来ました。

黄泉の国で“この程度の報告書を…”と嘆いているのか“ご苦労さんでした”と慰めているのか解るすべもないが、本書を故旭慶男さんへの「餞」にしたいと思います。

鹿児島県埋蔵文化財報告書 (63)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅳ)

榎崎 A 遺跡

発行日 平成4年3月31日

発行 鹿児島県教育委員会

〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷 (有)朝日印刷

〒890 鹿児島市上荒田町854-1